

袋井市春岡土地区画整理事業
に伴う発掘調査報告書

春岡遺跡群

— 遺 構 編 —

2003年

静岡県袋井市教育委員会

春岡遺跡群

－ 遺 構 編 －

2003年

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、「文化財保護法第98条の第1項の規定により地方公共団体が行う発掘調査に関する通知の受理について（通知）」の中の、『静岡県教委発信番号 教文第2—49号』（平成8年5月28日）に伴う発掘調査の正式報告書である。
2. 本書は、静岡県袋井市春岡字奥谷田22番地ほか387筆に所在する、春岡遺跡群（本庄山砦・春岡横穴群・春岡Ⅰ遺跡）に関する発掘調査報告書である。
ふくろい はるおか おくや だ はるおか
3. 本書は、「袋井市春岡土地区画整理事業」に関する発掘調査として、平成8年度から平成11年度にかけて実施した作業の、遺構を中心とした記録である。
現地作業は、袋井市教育委員会の松井一明と白澤 崇が担当した。資料整理は平成12年度から実施し、白澤が担当した。
4. 平成9年度に実施した、F地区の調査に際しては、関西大学名誉教授網干善教先生・文学部助教授米田文孝先生の指導のもと、関西大学大学院生の海邊博史が主担し、関西大学文学部考古学研究室学生が補佐した。
酷暑の中、多大な協力をいただき、調査を迅速に進めることができた。
5. 本書は、以下の刊行計画に基づく、平成14年度刊行の『遺構編』である。
 - ・平成13年度刊行『遺構写真図版編』
 - ・平成14年度刊行『遺構編』（本書）
 - ・平成15年度刊行『遺物・総括編』
6. 本書の編集にあたっては、松井と白澤が確認・合意のうえ、両名の指示のもと、鈴木美恵子・近藤秋子・鈴木浩子が作図にあたった。
7. 図面及び原稿に関わる全体の編集・統括は、松井の助言を得ながら、白澤が行なった。
なお、目次に個人名を文責として記した項目以外は、白澤が担当した。

8. 測量図面は、測量業務を委託した株式会社フジヤマ(浜松市肴町314-13)による成果を基本とし、測地系は「日本測地系(改正前)」を使用した。

「日本測地系(改正前)」によって得た調査範囲内における座標値X座標: -134.200m、Y座標: -53.600m(第3図 調査区・試掘トレンチ配置図)を「Web版TKY2JGD Ver.1.3.79パラメータVer.2.1.1」によって「世界測地系」に変換すると、X座標:217.3697m、Y座標: -335.4750mとなる。

緯度は $36^{\circ} 00' 07.05293''$ 、経度は $138^{\circ} 29' 46.60369''$ 、真北方向角0007.875である。

9. 本書製作に関してご協力いただいた方々のご芳名は、次年度刊行の『遺物・総括編』にまとめて記載する。
10. 本書に関係する図面は、袋井市教育委員会で保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査経過	1
1 調査に至る経過	1
2 調査体制	1
3 保存処理経過	3
4 調査経過	3
5 研究発表・普及活動	6
第Ⅱ章 地理的・考古学的環境	7
第Ⅲ章 地区別調査状況	9
1 地区の設定と調査経過	9
2 A地区	9
A 第1面（中世）	9
a 水田遺構	9
b 井戸	10
c 掘立柱建物	11
d その他の遺構	11
B 第2面（奈良）	11
a 掘立柱建物	11
b その他の遺構	12
C 第3面（弥生）	12
a 水田遺構	12
b 掘立柱建物	12
c 土坑	13
d 溝	13
e その他の遺構	14
3 B地区	14
a 春日山1号墳〔B地区1号墳〕	14
b 竪穴住居	15
4 C地区	15
a 竪穴住居	15

	b	その他の遺構	16
5	D地区		16
	a	井戸	16
	b	掘立柱建物	16
	c	その他の遺構	17
	d	試掘トレンチ	17
6	E地区		17
	A	近世墓	17
	B	本庄山砦	19
	a	堀切	20
	b	虎口1〔SD1〕	20
	c	虎口2〔SH3〕	20
	d	SH2	20
	e	橋状遺構	21
	f	横堀	21
	g	SB5-A・SB5-B	21
	h	SX1・SX2	21
	C	横穴群	22
	a	春岡横穴群A群	22
	b	春岡横穴群B群	26
	c	春岡横穴群C群	27
	D	横穴式石室	27
	a	春岡古墳群B1号墳〔E地区B1号墳〕	27
	b	春岡古墳群B2号墳〔E地区B2号墳〕	28
	E	竪穴住居	28
	F	掘柱建物	29
	G	井戸	29
	H	溝	30
	I	その他の遺構	30
7	F地区		31
	A	調査の経緯と経過	31
	B	調査の方法	海邊 31
	C	調査日誌抄	海邊 32

D	春岡古墳群A 1号墳〔F地区1号墳〕	36
a	位置	海邊 36
b	墳丘	海邊 36
c	墳丘に伴う遺物（礫槨上層出土遺物）	海邊 37
d	周溝	海邊 37
e	礫槨検出状況	海邊 37
f	礫槨構造	赤塚・正岡 37
g	礫槨床面	赤塚・正岡 38
h	礫槨出土遺物	赤塚・正岡 38
i	墓壙	正岡 38
E	春岡古墳群A 2号墳〔F地区2号墳〕	39
a	位置	海邊 39
b	墳丘	海邊 39
c	周溝	海邊 40
d	墓道	海邊 40
e	石室検出状況	海邊 40
f	石室閉塞石〔第1次・第2次〕	海邊 41
g	石室羨道	海邊 41
h	石室玄門	海邊 42
i	石室玄室	海邊 42
j	石室奥壁	海邊 44
k	石室天井石	海邊 44
l	石室平面プラン	正岡 44
m	石室床面	正岡 45
n	石室床面出土遺物	正岡 47
o	石室壁体間出土遺物	海邊 48
p	基底石	正岡 48
q	墓壙	海邊 48
r	基盤層上の遺構	海邊 49
F	春岡古墳群A 3号墳〔F地区3号墳〕	49
a	位置	赤塚 49
b	墳丘	赤塚 49
c	周溝	赤塚 49
d	主体部	赤塚 50
e	出土遺物	赤塚 50
G	春岡古墳群A 4号墳〔F地区4号墳〕	50

	a	位置	海邊	50
	b	周溝	海邊	50
	c	周溝出土遺物	海邊	50
H		方形周溝墓		50
	a	1号方形周溝墓	阿部	51
	b	2号方形周溝墓	阿部	51
	c	3号墳下層遺構	阿部	51
I		豎穴住居		52
	a	1号豎穴住居	阿部	52
	b	2号豎穴住居	阿部	52
	c	3号豎穴住居	阿部	53
	d	4号豎穴住居	阿部	53
J		土坑		53
	a	土坑1	阿部	53
	b	土坑2	阿部	53
	c	土坑3	海邊・阿部	53
	d	土坑4		53
	e	土坑5		54
	f	土坑6		54
	g	土坑7		54
	h	土坑8		54
	i	土坑9・10		54
	j	土坑12		54
	k	土坑13		54
K		焼土坑		54
	a	焼土坑1	阿部	54
	b	焼土坑2	阿部	54
	c	焼土坑3	阿部	55
L		溝		55
	a	溝1	阿部	55
	b	溝2	阿部	55
8		G地区		56
A		G-1・2地区		56
	a	掘立柱建物		56
	b	溝		56

	c	井戸	56
	d	その他の遺構	56
B	G-3・4地区	57	
	a	竪穴住居	57
	b	掘立柱建物	57
	c	井戸	58
	d	溝	59
	e	水田遺構（奈良・条里型水田）	60
	f	水田遺構（弥生）	61
9	村松家墓塔群	62	
A	石塔群	62	
	a	基壇	62
	b	灯籠	62
	c	石塔	62
	d	戒名	65
	e	石材と墓石の関係	65
B	基壇下層および周辺部の遺構	66	

挿 図 目 次

挿図第 i 図	本庄山砦跡構造図	19
挿図第 ii 図	春岡古墳群 A 2 号墳・石室壁面構築過程模式図	43
挿図第 iii 図	春岡古墳群 A 2 号墳・石室内棺体推定範囲図	46
挿図第 iv 図	墓石形態分類図	63
挿図第 v 図	村松家墓塔群全体図	67

挿 図 目 次

挿表 1	石塔と地下遺構との対応表	68
------	--------------	----

実測図版目次

第 1 図	位置図
第 2 図	周辺遺跡分布図
第 3 図	調査区・試掘トレンチ配置図
第 4 図	A 地区第 1 面（中世）全体図
第 5 図	A 地区第 2 面（奈良）全体図
第 6 図	A 地区第 3 面（弥生）全体図
第 7 図	A 地区北壁・西壁土層断面実測図
第 8 図	A 地区第 1 面（中世）S E 1・3・S X 11 遺構実測図
第 9 図	A 地区第 1 面（中世）S E 2 遺構実測図
第 10 図	A 地区第 1 面（中世）S H 1・2・S A 1 遺構実測図
第 11 図	A 地区第 1 面（中世）S H 3・S X 3・10 遺構実測図
第 12 図	A 地区第 2 面（奈良）S H 1・S A 1 遺構実測図
第 13 図	A 地区第 3 面（弥生）S H 1・2・S K 1～3 遺構実測図
第 14 図	A 地区第 3 面（弥生）S D 1 遺構実測図
第 15 図	A 地区第 3 面（弥生）S D 1・S X 1 遺物出土状況実測図 1
第 16 図	A 地区第 3 面（弥生）S D 1 遺物出土状況実測図 2
第 17 図	A 地区第 3 面（弥生）S D 1 遺物出土状況実測図 3
第 18 図	A 地区第 3 面（弥生）S D 2・3 遺物出土状況実測図 1
第 19 図	A 地区第 3 面（弥生）S D 2・3 遺物出土状況実測図 2
第 20 図	A 地区第 3 面（弥生）S D 2・3 遺物出土状況実測図 3

- 第21図 A地区第3面(弥生)SD2・3遺物出土状況実測図4
- 第22図 A地区第3面(弥生)水田遺構実測図
- 第23図 A地区第3面(弥生)水田遺構断面図
- 第24図 B地区全体図
- 第25図 B地区1号墳遺構実測図
- 第26図 B地区SB1・2・1号墳主体部遺構実測図
- 第27図 C地区全体図
- 第28図 C地区SB1・2遺構実測図
- 第29図 C地区SB3・4遺構実測図
- 第30図 C地区SB1・SX5遺構実測図
- 第31図 C地区SB5遺構実測図
- 第32図 D地区全体図
- 第33図 D地区SE1・SX2・4遺構実測図
- 第34図 D地区SE2遺構実測図
- 第35図 D地区SH1・2遺構実測図
- 第36図 D地区SH3～6・SA1遺構実測図
- 第37図 E地区全体図
- 第38図 E地区北部全体図
- 第39図 E地区南部全体図
- 第40図 E地区近世墓位置図
- 第41図 E地区1～3・6・8・24号墓実測図
- 第42図 E地区4・5・7・11・15・17・20・81号墓実測図
- 第43図 E地区9・10・12～14・16号墓実測図
- 第44図 E地区18・19・21-a, b・22・23号墓実測図
- 第45図 E地区25～27・28-a, b・29・30号墓実測図
- 第46図 E地区31・32-a, b, c・33～36・38号墓実測図
- 第47図 E地区37・39・40・41-a, b・42～46号墓実測図
- 第48図 E地区47～49・51～53・56号墓実測図
- 第49図 E地区50・54・55-a, b・58・60・64-a, b・65号墓実測図
- 第50図 E地区59・61～63・66号墓実測図
- 第51図 E地区67-a, b・68・73～76号墓実測図
- 第52図 E地区69-a, b・70・71-a, b・72・77号墓実測図
- 第53図 E地区78・79・80-a, b・84～86号墓実測図
- 第54図 E地区82-a, b・83・87・91・111号墓実測図
- 第55図 E地区88・89・90-a, b, c・92・93・五輪塔号墓実測図
- 第56図 E地区94～99号墓実測図

- 第57図 E地区100～105号墓実測図
- 第58図 E地区106～110-a, b, c号墓実測図
- 第59図 E地区堀切遺構実測図
- 第60図 E地区虎口1遺構実測図
- 第61図 E地区SH2遺構実測図
- 第62図 E地区橋遺構実測図
- 第63図 E地区SH3・SB5・-A, B遺構実測図
- 第64図 E地区SD1・SX1・2遺構実測図
- 第65図 E地区堀切・横堀遺構実測図1
- 第66図 E地区堀切・横堀遺構実測図2
- 第67図 E地区A群横穴位置図
- 第68図 E地区A・B・C群横穴位置図
- 第69図 E地区A2～5・A6～8号横穴墓前域遺構・遺物出土状況実測図
- 第70図 E地区A9～14号横穴墓前域遺構・遺物出土状況実測図
- 第71図 E地区A15・16号横穴墓前域土層断面実測図
- 第72図 E地区A15・16号・C1・2号横穴墓前域遺構・遺物出土状況実測図
- 第73図 E地区B1・2号横穴墓前域遺構・遺物出土状況実測図
- 第74図 E地区A1・5号横穴実測図
- 第75図 E地区A2号横穴実測図
- 第76図 E地区A3号横穴実測図
- 第77図 E地区A4号横穴実測図
- 第78図 E地区A6・7号横穴実測図
- 第79図 E地区A8号横穴実測図
- 第80図 E地区A9号横穴実測図
- 第81図 E地区A10号横穴実測図
- 第82図 E地区A11号横穴実測図
- 第83図 E地区A12・14号横穴実測図
- 第84図 E地区A13号横穴実測図
- 第85図 E地区A15号横穴実測図
- 第86図 E地区A16号横穴実測図
- 第87図 E地区A17号横穴実測図
- 第88図 E地区A18・21・22号横穴実測図
- 第89図 E地区A19・20号横穴実測図
- 第90図 E地区B1号横穴実測図
- 第91図 E地区B2号横穴実測図
- 第92図 E地区C1号横穴実測図

- 第93図 E地区C 2号横穴実測図
- 第94図 E地区B 1号墳主体部実測図
- 第95図 E地区B 1・2号墳墳丘図・B 2号墳主体部実測図
- 第96図 E地区SB 1・2-a, b・3-a, b遺構実測図
- 第97図 E地区SB 4-a, b遺構実測図
- 第98図 E地区SH 1～3・SE 1・SK 1・2遺構実測図
- 第99図 E地区A群横穴付近SK 4・5・6遺構実測図
- 第100図 E地区SK 3・焼土坑・SA 1遺構実測図
- 第101図 E地区SD 2・3・5遺構実測図
- 第102図 F地区全体図
- 第103図 F地区地形図 1
- 第104図 F地区SK 1～3・焼土坑 1～3遺構実測図
- 第105図 F地区SK 4～8遺構実測図
- 第106図 F地区SK 9～14遺構実測図
- 第107図 F地区1号墳墳丘遺構実測図
- 第108図 F地区1号墳墳丘土層断面図
- 第109図 F地区1号墳主体部上層遺物出土状・墓壙実測図
- 第110図 F地区1号墳主体部（検出時）遺構実測図
- 第111図 F地区1号墳主体部遺構実測図
- 第112図 F地区1号墳主体部床石遺構実測図
- 第113図 F地区2号墳墳丘実測図
- 第114図 F地区2号墳墳丘土層断面図
- 第115図 F地区2号墳墳丘土層断面概念図
- 第116図 F地区2号墳周溝土層断面図
- 第117図 F地区2号墳主体部遺構実測図 1
- 第118図 F地区2号墳主体部遺構実測図 2
- 第119図 F地区2号墳主体部遺構実測図 3
- 第120図 F地区2号墳閉塞石・墓道内石材出土状況実測図
- 第121図 F地区2号墳天井石（検出時・復元）実測図
- 第122図 F地区2号墳主体部根石・掘り方実測図
- 第123図 F地区2号墳下層遺構全体図
- 第124図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図 1
- 第125図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図 2
- 第126図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図 3
- 第127図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図 4
- 第128図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図 5

- 第129図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図6
- 第130図 F地区3号墳墳丘実測図
- 第131図 F地区3号墳墳丘土層断面図
- 第132図 F地区3号墳主体部遺構実測図
- 第133図 F地区4号墳周溝実測図
- 第134図 F地区1号方形周溝墓遺構実測図
- 第135図 F地区1号方形周溝墓主体部遺構実測図
- 第136図 F地区2号方形周溝墓遺構実測図
- 第137図 F地区S B 1 遺構実測図
- 第138図 F地区S B 2・3 遺構実測図
- 第139図 F地区S B 4・3号墳下層遺構実測図
- 第140図 F地区S D 1・2 遺構実測図
- 第141図 G地区(中世～古墳)全体図1
- 第142図 G地区(弥生)全体図
- 第143図 G-3・4区基本土層断面図
- 第144図 G地区S H 1～4・S B 1・S E 1～8位置図
- 第145図 G地区S E 1 遺構実測図
- 第146図 G地区S E 2 遺構実測図
- 第147図 G地区S E 2～4・8 遺構実測図
- 第148図 G地区S E 5 遺構実測図
- 第149図 G地区S E 6 遺構実測図
- 第150図 G地区S E 7 遺構実測図
- 第151図 G地区S B 1 遺構実測図
- 第152図 G地区S H 1・2 遺構実測図
- 第153図 G地区S H 3・4 遺構実測図
- 第154図 G地区S D 1 遺構実測図
- 第155図 G地区S D 1 杭列1 出土状況実測図
- 第156図 G地区S D 1 杭列2 出土状況実測図
- 第157図 G地区S D 2 遺構実測図
- 第158図 G地区(奈良～古墳)低地遺物出土状況実測図1
- 第159図 G地区(奈良～古墳)低地遺物出土状況実測図2
- 第160図 G地区(奈良～古墳)低地遺物出土状況実測図3
- 第161図 G地区(奈良)水田遺構実測図
- 第162図 G地区水田遺構断面実測図1
- 第163図 G地区水田遺構断面実測図2
- 第164図 G地区水口遺構実測図1

- 第165図 G地区水口遺構実測図 2
- 第166図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図 1
- 第167図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図 2
- 第168図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図 3
- 第169図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図 4
- 第170図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図 5
- 第171図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図 6
- 第172図 G-1・2区SE9・SH1・5・SI1・SD5遺構実測図
- 第173図 村松家墓塔群・墓塔全体図 1
- 第174図 村松家墓塔群・墓塔全体図 2
- 第175図 村松家墓塔群全体図
- 第176図 村松家墓塔群土層断面実測図
- 第177図 村松家墓塔群・墓石実測図 1
- 第178図 村松家墓塔群・墓石実測図 2
- 第179図 村松家墓塔群・墓石実測図 3
- 第180図 村松家墓塔群・墓石実測図 4
- 第181図 村松家墓塔群・墓石実測図 5
- 第182図 村松家墓塔群・墓石実測図 6
- 第183図 村松家墓塔群・墓石実測図 7
- 第184図 村松家墓塔群・墓石実測図 8
- 第185図 村松家墓塔群・墓石実測図 9
- 第186図 村松家墓塔群2・4・5・7・14・15・20号墓遺構実測図
- 第187図 村松家墓塔群6・8・11・16～19号墓遺構実測図
- 第188図 村松家墓塔群13・21・25・29・33・34・36号墓遺構実測図
- 第189図 村松家墓塔群22・37～43号墓遺構実測図
- 第190図 時代別（中世）遺構分布図 1
- 第191図 時代別（奈良）遺構分布図 2
- 第192図 時代別（古墳）遺構分布図 3
- 第193図 時代別（弥生）遺構分布図 4



第Ⅰ章 調査経過

1 調査に至る経緯

昭和52年ごろ区画整理事業の話が地元より持ち上がり、地元説明会を実施しながら計画を推進し、平成元年9月28日に組合設立準備委員会が結成される。

平成2年11月からは、計画地内の現況測量調査や関連調査を実施した。平成6年10月18日付で「基本計画書」（建設省）を提出、平成6年12月27日付で都市計画決定（区画整理区域）がなされる。平成7年2月28日付で「事業計画事協議書」（県）を提出、平成7年3月13日付で「公共用地編入申請書」（国・県・市）を提出するなど、手続きの準備を行った。

平成7年4月11日付で施行区域の公告及び縦覧を実施、平成7年6月12日付にて「組合設立認可申請書」（県）を提出した。平成7年7月7日から事業計画の縦覧を開始し、期間は2週間実施した。

平成7年8月14日には、組合設立許可が認められ、平成7年8月22日には組合設立許可の公告を行った。長年の申請準備段階を経て、平成7年8月27日には、「袋井市春岡土地区画整理組合設立総会」が実施され、以後、本格的に区画整理事業に関する庶務を実施していくことになった。

一方、区画整理事業の本体計画と併行して、平成元年9月5日付にて、都市計画課より、袋井市春岡828番地ほかの土地区画整理事業予定地について「埋蔵文化財等所在の依頼」が提出された。この結果は、平成元年9月27日付にて回答され、計画地内に埋蔵文化財が存在することが示された。

平成3年11月25日から平成4年2月11日には、平成元年時点での回答の中で、水田域を中心に試掘調査の必要な箇所が認められたため、国・県補助金を得て調査を実施し、遺跡の所在の確認に努めるとともに、報告書を作成した〔袋井市教委1992〕。

所在調査・試掘調査の結果を受けて、区画整理事業計画と照合を行いながら、区画整理課及び区画整理組合と協議を進めた結果、遺跡保護の困難な範囲を明示するとともに、該当範囲について、平成8年度から平成11年度にかけて現地発掘調査、平成12年度から13年度に資料整理を実施する計画を提出した（当初計画）。当該調査は、文化財担当の市職員を専従で2名配置することとし、調査に関わる費用の全額を原因者に負担願うこととなった。

調査に至るまで、及び調査経過の中では、区画整理組合の理事をはじめ事務員並びに、地元春岡地区の方々には、費用面を含め多大なご理解・ご協力を受け、発掘調査を円滑に実施することができた。

2 調査体制

袋井市教育委員会・事務局（＊：現地調査担当者 ・ ◎：資料整理担当者）

教 育 長 浅井通男 （平成8年度～平成12年度）
戸塚雅之 （平成13年度～平成14年度）

教 育 次 長 前田富美雄 （平成8年度～平成10年度）
藤田代行 （平成11年度～平成13年度）
村田繁樹 （平成14年度）

生涯学習課長 鈴木雅実 (平成8年度)
 小粥保夫 (平成9年度～平成12年度)
 鈴木健治 (平成13年度～平成14年度)

課長補佐 高木雅之 (平成11年度～平成14年度／文化財係長兼務)

文化財係長 吉岡伸夫 (平成8年度～平成10年度)

主査 永井義博 (平成8年度～平成14年度)
 松井一明 (平成14年度)

主任学芸員 松井一明 (平成8年度～平成13年度) *
 水野雅彦 (平成8年度～平成14年度)

学芸員 白澤 崇 (平成8年度～平成14年度) * ◎

経理事務 鈴木寿美子 (平成8年度～平成14年度)

現地作業及び資料整理参加者

大庭嘉平 山本善久 高橋邦夫 川島良一 鈴木定雄 高橋昭雄 三浦とく江 高橋巳代子
 高橋四郎 佐藤好孝 鈴木 武 増田治平 武市正一 高橋秋義 木村かずえ 戸倉みつ子
 三浦久雄 山崎莊一 山本 修 早川専一 加藤友平 萩田権治 太田清子 鈴木敏子
 山崎好江 寺田矩江 早川里美 梅川元美 近藤秋子 鈴木浩子 東原真喜子 鈴木美恵子
 山下悦子 大庭京子 高木啓子

関西大学文学部考古学研究室

関西大学名誉教授 網干善教
 助教授 米田文孝

海邊博史 赤塚 亨 阿部泰之 荒木幸治 渋谷綾子 谷村卓哉 川口奈穂子 藤井美沙子
 赤井清明 上田 恵 五十嵐進 田邊直美 日置 智 吉村麻衣 山本かおり 正岡大実
 布谷依子 中里伸明 網本裕子 内野 花 深谷 淳 松井宣篤 水口雅晴 鬼頭 彰
 廣瀧 亘 北山峰生 横田明日香

なお、上記関西大学考古学研究室学生の内、原稿及び図面編集等における主担は、本文第三章7・F地区の巻頭に個別に表記した。

3 保存処理経過

平成8年6月19日～平成9年3月25日

試掘調査時に採取した土壌サンプルを基に、株式会社古環境研究所に自然科学分析の業務委託を行なう。

平成9年6月5日～平成10年3月25日

調査において出土した木製品の樹種鑑定を財団法人元興寺文化財研究所へ委託するとともに、木製品の保存処理を実施する。

平成10年1月16日～平成10年3月25日

F地区の古墳群より出土した鉄製品を中心に、保存処理業務を京都造形芸術大学へ委託する。

平成11年8月20日～平成12年3月20日

F地区2号墳出土鉄製品について保存処理業務を京都造形芸術大学へ委託する。

平成11年12月1日～平成12年3月20日

試掘調査とG地区調査で採取したサンプルを中心に、プラント・オパール分析、花粉分析、放射性炭素年代測定を株式会社古環境研究所に業務委託する。

平成11年12月10日～平成12年3月25日

G地区出土の木製品について、保存処理業務を財団法人元興寺文化財研究所へ委託する。

平成12年1月7日～平成12年3月20日

E地区の近世墓出土の人骨について、鑑定業務を株式会社パリオ・サーヴェイ株式会社へ委託する。

平成13年9月5日～平成14年3月22日

G地区出土の木製品保存処理業務を財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託する。

平成13年10月1日～平成14年3月22日

F地区出土の鉄製品保存処理業務を古美術修理すぎもとへ委託する。

平成13年10月24日～平成14年3月22日

F地区2号墳出土馬具の漆膜断面分析・金属の元素分析について、財団法人元興寺文化財研究所へ委託する。

平成14年10月21日～平成15年3月20日

E・F地区出土の鉄製品保存処理業務を財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託する。

平成14年8月20日～平成15年3月24日

G地区出土の木製品保存処理業務を財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所へ委託する。

平成14年10月30日～平成15年2月25日

F地区の古墳出土鉄製品について、財団法人岩手県文化振興事業団に金属考古学的調査を委託する。

4 調査経過

平成8年5月8日

平成8年度に関する発掘調査の作業工程について、区画整理課と会議を行い、現地プレハブや資料整理用プレハブ等の設置場所や、航空測量委託業務等について協議を行なう。

平成8年5月10日

市役所にて、区画整理課と会議を行い、発掘調査に伴い発生する排水の位置や重機の進入路等に

について協議を行なう。また、用地東側の工事計画について不確定な現状であるが、周知の埋蔵文化財の字刈横穴群の所在する地域であるので、保存を前提に工事計画をしてもらえるよう申し入れを行なう。

平成8年5月13日

組合事務所にて理事会に出席し、今後の発掘調査の工程について説明を行なうとともに、伐採をお願いする範囲の提示や、現地プレハブなどの建設位置について提示を行なう。

平成8年6月6日

組合理事会で、現地プレハブと整理作業用プレハブの最終決定地について協議を行なう。

平成8年7月15日

組合理事会にて、A地区の試掘調査の結果について説明を行なう。

平成8年7月18日

A地区調査開始後、畑地などの作土搬出問題で関係者と協議。

平成8年8月19日

B地区の表土除去後の結果報告、C地区西斜面での遺構確認状況についての報告を理事会にて行なう。
出席された理事さんに、現場を視察いただく。

平成8年11月13日

A地区の「第1面・中世層」の遺構検出に伴い、遺構略図作成。

平成8年12月2日

E地区堀切推定地を試掘調査。断面図作成。

平成9年1月14日

A地区の「第2面・奈良層」の遺構検出に伴い、遺構略図作成。

平成9年3月6日

現地事務所にて、報道関係者を呼び、A地区の調査成果を公表する。

平成9年3月9日

A地区の調査成果を基に、現地説明会を開催する。

平成9年4月2日

現地事務所にて区画整理課と会議を行い、平成9年度の作業開始にあたっての当面の問題点（神社参道の付け替え工事・水道管移設・フェンス設置位置ほか）の提示を行い協議する。

平成9年7月1日

D地区遺構検出開始。遺構略図作成。

平成9年7月28日

平成9年度の進捗状況を理事会にて報告。D地区調査終了。F地区は表土除去後、関西大学文学部考古学研究室に協力を依頼し、調査を進めることを説明。C・E地区についても今後計画に基づき調査していくことを報告。また、E地区北側に所在する周知の埋蔵文化財春岡横穴群D～G群について、工事計画によっては一部事前調査する必要があるので、担当者間で情報を密にすることを申し合わせ。

平成9年7月28日～11月

F地区の平面調査実施。古墳群を中心に多くの遺構を検出。

平成9年9月5日

現地事務所北側の斜面地について、設計変更が一部発生し、これに伴って春日山1号墳西半分程度が調査対象となることで、関係者と協議。

平成9年10月20日～26日

B地区春日山1号墳の調査実施。主体部及び、住居跡2棟を検出。

平成9年10月27日

B地区1号・2号住居跡の土層断面図を作成。

平成9年10月31日

旧トレンチ（平成3年度）の土層を再確認のため精査し、土層図作成。

平成9年11月13日

F地区2号墳の調査成果を中心に、現地にて、春岡地区の住民向けの説明会を実施する。合わせて、山名小学校6年生による現地見学会を行なう。

平成9年11月23日

E地区堀切部分の土層断面図作成。

平成10年3月3日～4日

滋賀県米原町教育委員会の中井 均氏・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の加藤理文氏に本庄山砦関係の現地指導をいただく。

平成10年3月25日

平成8～9年度の調査成果をまとめた『はるおか遺跡群』と題する概報を刊行し、関係機関に配布。

平成10年4月～7月

E地区の春岡横穴群A～C群の調査実施。

平成10年4月10日

現地事務所にて区画整理課と会議を行い、平成10年度の発掘調査の計画と、区画整理事業計画の確認を行なう。E地区北側に所在する春岡横穴群D～G群付近については、所在確認のために、丘陵裾を中心に試掘を実施することとした。また、区画整理用地東端の計画は未定であるとの報告を受ける。

平成10年4月15日

組合理事会にて、平成10年度における発掘調査の計画を説明する。

平成11年1月13日

G-2地区の平面調査を実施。北壁の土層図作成。

平成11年1月27日

現地事務所において、区画整理課と会議を行い、G-2地区の調査結果を報告するとともに、山名小学校北側斜面についての所在調査、村松家墓塔群についての対応について協議を行なう。合わせて、区画整理用地東端について、工事計画によって仮に発掘調査を実施する必要がある場合の、調査費用について積算を提示した。

平成11年4月19日

平成11年度の作業工程について、組合理事会にて説明。G-2・3地区の調査を1年かけて実施することなどを報告。また、4月12日より実施している村松家墓塔群についての進捗状況を説明するとともに、会議終了後、現地にて説明を行なう。

平成11年6月21日

G-3地区の調査について9月末を目処に終了させ、引き続き、G-4地区を調査していくなどの作業工程について、組合理事会にて説明。

平成11年6月～9月

G-3地区の平面調査を実施。奈良時代の条里型水田などを検出。

平成11年9月14日

G-3地区における調査成果を、組合理事会にて報告。条里型水田の検出や、斎串・人形・木簡など注目される遺物が出土したことを説明。

平成11年10月～12月

G-4地区において、奈良時代の条里型水田を中心に平面調査を実施。

平成11年11月12日

G-4地区の今後の調査方法について、区画整理組合事務所にて、区画整理課および、理事と協議を行なう。工事計画との照合の結果、更なる調査面積の縮小や期間の短縮ができないかという事項が論点となる。

平成11年11月18日

G-4地区上層での調査において、条里型水田に伴う「大畦畔」を検出。また、下層に所在すると予想される、弥生時代の水田調査の範囲と調査終了時期について、組合理事会にて説明を行なう。

平成11年12月28日

京都造形大学にて、F地区2号墳より出土した鉄刀について、成分分析用のサンプル採取のため、切断作業を実施。

平成12年1月21日

国立歴史民族博物館の平川南先生を訪問し、G地区出土木簡やA地区出土墨書土器などの解説を依頼する。

平成12年2月21日

再度、国立歴史民族博物館の平川南先生を訪問し、G地区出土木簡を重点的に解説いただき、人名等が記されていることが明らかとなる。

平成14年3月25日

本報告3分冊の内、『春岡遺跡群-遺構写真図版編-』を刊行する。

5 研究発表・普及活動

平成9年3月9日

A地区の調査成果を基に、現地説明会を開催する。

平成9年11月13日

F地区2号墳の調査成果を中心に、現地にて、春岡地区の住民向けの説明会を実施する。合わせて、山名小学校6年生による現地見学会を行なう。

平成10年3月25日

平成8～9年度の調査成果をまとめた『はるおか遺跡群』と題する概報を刊行する。

平成10年10月31日

東日本の水田跡を考える会刊行の『第8回東日本の水田跡を考える会-資料集-』において、「袋井市春岡遺跡の水田跡」と題する資料紹介を行い、A地区の水田跡の調査成果を発表。

平成10年11月29日

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所主催による『静岡の原像をさぐる』発掘調査報告会にてF地区の1・2号墳の調査成果を中心に発表を行う。

平成11年6月26日

三河古墳研究会刊行の『第3回 三河考古合同研究会 三河の後期古墳を考えるⅡ』に「春岡2号墳」と題してF地区の関係資料を掲載。

平成11年9月12日

織豊期城郭研究会刊行の『織豊城郭』第6号において、「袋井市本庄山砦の虎口について」と題する資料紹介を行なう。

平成12年3月

袋井市文化財ビデオ第13集として、『春岡遺跡群』を編集。

平成13年2月10日

静岡県考古学会2000年度シンポジウム「東海の横穴墓」にて、E地区の横穴群の調査成果を発表するとともに、資料集『東海の横穴墓』に掲載する。

平成13年11月25日

木簡学会刊行の『木簡研究』第23号において、「静岡・春岡遺跡群」と題する資料紹介の中で、G-3地区出土の木簡について釈文を掲載する。

平成14年2月16日

静岡県考古学会2001年度シンポジウム「静岡県における弥生時代集落の変遷」にて、A・G地区を中心に検出した弥生時代の遺構の調査成果を、資料集『静岡県における弥生時代集落の変遷』に掲載する。

平成14年11月10日

第10回東日本の水田跡を考える会-資料集-『登呂遺跡の再発掘成果と水田跡・畑跡研究の現状』の中において、「袋井市春岡遺跡の水田跡」と題する報告を行い、G地区の調査成果を発表。

平成15年3月31日

静岡県教育委員会による『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』において、奈良時代の遺構・遺物を中心に関係資料を掲載。

第Ⅱ章 地理的・考古学的環境

春岡遺跡群は袋井市内でも北部に位置し、北から西側にかけて太田川が流れている。太田川は、袋井市の北側に位置する森町から派生しており、大日山・春埜山を源流とする三倉川と吉川が合流したものである。太田川は途中、敷地川や原野谷川を集め、南に位置する遠州灘に注ぐ。春岡遺跡群との直線距離は14kmである。

地層的には、森町から上流の大半は中生代白亜紀の四万十層群（三倉層）の砂岩、頁岩からなる山間部である。一方、下流においては新第三紀中新世の倉真層群（礫岩・砂岩・泥岩）、鮮新世の掛川層群（礫・砂・泥）、更新世の小笠原層（礫・泥）からなる丘陵が立地している。この内春岡遺跡群は、おもに曾我層群からなる丘陵に立地している。

考古学的な所見で見ると、先に触れた太田川水系を中心に、弥生時代に集落の発展を見ることができ、鶴松遺跡（第2図12）は、弥生時代中期ごろより始まる拠点的な集落で、引き続き後期へと展開す

る。後期になると、鶴松遺跡周辺では、徳光遺跡（第2図13）や堀越ジョウヤマ遺跡（第2図16）、土橋遺跡（第2図31）など、微高地上に集落が形成される。徳光遺跡では、近年浄化槽の埋設工事に際してコウヤマキ製の木棺を検出しており、低地部における方形周溝墓の存在が予想される。また、堀越ジョウヤマ遺跡の発掘調査においては、集落を横断する溝（環濠か？）を検出するとともに、低地部では木製鋤や高床倉庫の部材などが出土した。更には、遺構的には確認できなかったものの、プラント・オパール分析によって水田の可能性が高いことが確認されている。

一方、丘陵部においては、高尾向山遺跡（第2図35）で弥生時代後期の方形周溝墓58基が検出され、小谷をはさんで西側の台地上に展開する団子塚遺跡とともに、集落と墓域を確認できる貴重な資料となっている。また、近年駅前区画整理事業にともなう発掘調査において序々に様子が明らかになってきている掛之上遺跡（第2図32）では、弥生時代中期の方形周溝墓が30基近く検出されており、今後の調査において、その数の増加が予想され、遠江地域においては大規模な墓地群として捉えることができる。また、9次調査においては、銅鐸の破片を検出するなど、遺跡の内容を知る貴重な資料も増加している。更に、愛野向山遺跡（第2図37）においては、91棟にも上る竪穴住居が検出されるなど、市内各地において集落の発展を見ることができる。

古墳時代に入ると、静岡県西部においては、磐田原台地に大規模な古墳が築造されることが知られているが、袋井市の東側を流れる原野谷川の右岸の丘陵上では、古墳時代中期になると瓢塚古墳（第2図27）・各和金塚古墳（第2図25）・吉岡大塚古墳（第2図30）・行人塚古墳（第2図28）などの築造が相次ぐ。中期末になると、石ノ形古墳（第2図20）は直径27mの造り出し付きの円墳として築造される。木棺直葬の東西両主体部からは、横矧板鋌留短甲・f字形鏡板付轡・鉄製楕円形鏡板付轡・蛇行剣・画像鏡・鈴釧などの豊富な副葬品を納めている。

古墳時代後期に入ると、横穴式石室を内蔵する大門大塚古墳（第2図33）、木棺直葬の主体部に挂甲・振じり環頭大刀を納めた団子塚9号墳（第2図34）などの主要古墳の築造とともに、横穴群の築造が始まる。市内北部では、太田川水系で春岡横穴群を含む、宇刈横穴群（第2図4）が総数10基を越える横穴群として形成される。一方、市内東部に位置する菅ヶ谷横穴群（第2図24）は、原野谷川水系に位置し、総数10基を越えるが築造される。

袋井市域は、古墳時代後期の埋葬形態として前述来の横穴式石室と横穴墓が混在する。加えて、高尾向山遺跡（第2図35）で検出されたように、横穴式木室という特異な埋葬施設が小地域内に混在することが特徴である。

続く奈良時代には、東海道の整備がなされるが、市内の中心部を東西に横断したと推定される。実際の遺構として道路遺構を検出するには至っていないが、坂尻遺跡（第2図19）や掛之上遺跡（第2図32）において、地方官衙に関連する遺構・遺物を検出している。掛之上遺跡における近年の調査において、大型の堀り方を持つ双倉の存在が明らかとなっている。

一方、東海道からは離れるものの、春岡遺跡群の北西方向に近接して立地する稲荷領家遺跡（第2図2）においては、墨書土器が採取されており、春岡遺跡群を含めた広域の遺跡群として、官衙的な色彩の強い遺跡と見ることができる。

以上、坂尻遺跡・掛之上遺跡・稲荷領家遺跡何れもが、遺跡に近接してそれぞれ、太田川・原野谷側を有しており、東海道とともに、交通・水運との関係からも、良好な位置に選地していることがわかる。

第Ⅲ章 地区別調査状況

1 地区の設定と調査経過

平成3年11月25日から平成4年2月11日まで実施した所在確認のための試掘調査成果と〔袋井市教委1992〕、平成8年度に調査範囲確定のために実施した試掘調査の成果を合わせて（第3図・試掘トレンチ配置図）、区画整理事業関連の工事工程と照合した結果、AからGまでの7地区に加え、村松家墓塔群を調査対象に設定した。

A地区は、区画整理事業地内の北西地域にあたり、春岡神社から南方に派生する丘陵の西側裾部と、水田地420㎡を調査対象とし、平成8年度に作業を実施した。

B地区は、先のA地区の北側に位置する丘陵上である。当初、丘陵の南斜面に横穴が所在する可能性があったが、表土を除去して確認した結果、横穴は所在せず、丘陵上のみ調査を実施した。対象面積は、50㎡で、同じく平成8年度に作業を実施した。但し、春日山1号墳については、工事計画の変更に伴って、平成9年度に作業を実施した。

C・D地区は、春岡神社から極楽寺の南にかけての、丘陵の縁辺部分に所在する遺構の調査が中心となった地区である。調査対象面積は250㎡で、平成9年度に作業を実施した。

E地区は、春日山から南西方向に派生する全長約250m、幅約50mの舌状丘陵が対象地であり、丘陵の基部にあたる範囲での掘切の調査、丘陵先端部における近世墓の調査、南側斜面における横穴群の調査に分かれ、平成9年度から平成10年度にかけて650㎡を対象地として、作業を実施した。

F地区は林光寺の東側に所在する丘陵上の地区である。今回の発掘調査対象地の中で最高所にあたる。350㎡を対象地とし、平成9年度に作業を実施した。古墳調査を中心に、関西大学文学部考古学研究室の協力を得た。

G地区は、区画整理事業地内の南西地域にあたる水田地である。区画整理事業の工事工程に合わせるためG-1から4地区に分けてそれぞれ作業を実施した。平成11年度に、670㎡を対象地として作業を実施した。

村松家墓塔群は、林光寺の西側に所在する小丘陵上に位置し、区画整理事業に伴って整理・移転計画が浮上したため、150㎡を対象地とし、平成11年度に作業を実施した。調査後、主要な墓碑は、東側に位置する林光寺の墓地内へ移転した。

2 A地区

A 第1面（中世）

a 水田遺構（第4図）

A地区においては、総数三層の遺構面を検出した。この内、最も上面にて最初に検出した遺構面を、便宜上第1面(中世)とする。以下、第2面は奈良時代の遺構面、そして最下層において弥生時代の遺構面を確認した（第3面）。

第1面の水田の構成は、座標系X軸（「日本測地系（改正前）」による。以下特記しない限り同じ。）に対して6° 東偏する擬似畦畔1と2、座標系X軸に対して41° 東偏する畦畔1、更にこの畦畔1にほぼ平行するSD10より形成される。

調査区の西側で検出した擬似畦畔1と2は、所謂「擬似畦畔B」〔仙台市教委1991〕であるが、何れも遺構の残存状況は良好ではない。区画を明確に捉えた部分がないため、小単位ごとの面積は不明である。また、正確な総面積も不明瞭であるが、A地区の東側には丘陵が南北に伸び、北側にも丘陵が横たわるため、広範囲には広がらない。西側と南側への展開については不明である。検出できた畦畔の範囲で計測すると総面積160m²程度となる。

耕作土は基本土層の3層下部にあたり、灰色粘質土である(第7図A地区北壁土層断面実測図)。耕作土の厚さは0.17～0.7mで、西側に比べ、東側に厚く堆積している。3層の更に下の層は4層灰褐色粘質土が堆積しており、両者は比較的平坦に接している。

僅かに起伏の確認できた畦畔1は、盛土畦畔で、緩やかに弧を描く平面形で、総延長20.10mを確認した。断面は台形を呈し、畦畔の高さは0.05mである。

畦畔1の東側10mで、ほぼ平行して掘削しているSD10は、幅0.6m、深さ0.1mを呈し、全長17.3mを検出した。直接的な機能は不明であるが、SD10のほかSD7～9、14などの溝状遺構も、畦畔1とほぼ同様の方向に掘削されていることから、関連があるものと判断した。

畦畔1を中心とした水田面の標高は、22.40mである。南側に位置する擬似畦畔2付近においては22.70mで、0.3m程度南側に起伏している。

b 井戸

A地区の東側に位置する丘陵の西斜面を中心に、三基の井戸を検出した。

SE1（第8図）

最も北側で検出したSE1は、直径0.63m、深さ0.56mの円形の掘り方の内部に、直径53.0cm、高さ52.0cmの曲げ物を内蔵している。底面は平坦で、曲げ物内部の底面には、10cm前後の礫を一層敷き詰めている。また、掘り方と曲げ物との間に、7.0cm前後の礫を周囲に配し、安定を図っている。

SE2（第9図）

検出上面で直径1.95mの円形の掘り方で、深さ1.93mの内部に、底部に直径59.0cm、高さ68.0cmの円形の木桶を配置し、更にその上部に一辺93.0cmの方形の木製枠を載せている。木桶は底が無く、幅9.0cm、厚さ2.0cmの板材を21枚合わせて円形と成している。上下二箇所、竹製の撚った箍をはめ固定している。底面は平坦である。

木製枠は、底部に骨格となる4.0×7.0cmの角材を四辺に組み、四方から上位へ主柱を立てている。主柱間は、幅20～28.0cm、厚さ2.0cmの板材を3枚程度合わせて土留めとしている。主柱同士の接合は、方形の臍穴によって接合し、板材には釘等、接合のための痕跡はない。

SE3（第8図）

検出上面で直径1.25mの円形の二段掘りの掘り方内部に、下層に直径46.0cm、高さ53.0cmの円形の木製桶を配し、上面に20cm前後の礫を円形に85.0cmの高さに配して、土留めとしている。

木製桶は底面が無く、幅8.0cm、厚さ0.8cmの板材を18枚合わせて円形と成している。上下三箇所に、竹製の撚った箍をはめ固定している。底面は平坦である。桶の外側には、直径12.0cm、長さ78.0cmの丸太材を「井」の字状に組み固定している。固定に際しては、15.0cm前後の礫を使用している(『遺構写真図版編』図版6)。

c 掘立柱建物

掘立柱建物は三箇所で見出している。調査区の東側の丘陵西斜面に立地するSH1～2と、調査区北西に位置する、自然堤防上を基盤とするSH3に大別できる。

SH1 (第10図)

長辺・短辺の別は不明であるが、直径30～50cm、深さ30～70cm前後の柱穴が、1.0m間隔（柱心間）で配されている。建物の方位は、座標系Xに対して、43° 東偏する。

SH2 (第10図)

長辺・短辺の別は不明であるが、直径40～50cm、深さ40～50cm前後の柱穴が、2.1m間隔で配されている。建物の方位は、座標系Xに対して、43° 東偏する。

SH3 (第11図)

5.2×5.4mの規模を有し、直径20～30cm、深さ8.0～20cm前後の柱穴を見出した。柱間は1.4m・2.2m・3.2mと不規則である。建物の方位は、座標系Xに対して、10° 東偏する。建物の北東隅にあたる柱穴P7から、柱痕を見出している(W418)。

d その他の遺構

SA1 (第10図)

直径0.4m、深さ0.2～0.4mの規模の柱穴列を見出した。不規則な間隔ではあるが、南北方向に直線的に一列配されている。

SX10 (第11図)

4.1～4.7mの不正円形の土坑である。深さ0.22mであるが、中央部が更に1.5×3.5mの規模で長円形に掘り込まれている。

SX11 (第8図)

一辺1.2mの正方形の土坑で、深さは0.84mである。底部は平坦で、底面から0.04～0.1mの間に炭化物を多く含む層が前面に堆積していた。更に上部に15.0cm前後の礫が多重に敷き詰められており、礫の最上部の南東隅付近では、18.0×18.0cm、高さ13.0cmの方形の墓石を見出した。

B 第2面（奈良）

第2面は、先の第1面から更に0.4m下層にあたる。標高では22.0m付近である。調査区全体を平均に精査し、掘り下げる作業を繰り返したが、大半は腐植土層が混在するのみで、低湿地化していたと判断できる。僅かに、調査区の西側7.0mの範囲に、粘土質の安定的な基盤上に、遺構を確認することができた（第5図）。

a 掘立柱建物

SH1 (第12図)

調査区の南西端で、掘立柱建物の一部を見出した。一辺は全長6.5mで、4間の配置を呈する。柱間は1.4mと1.8mである。平面形の全容は把握できない。直径0.5m、深さ0.6mの円形掘り方に、直径0.13m前後の柱を配している。礎板や根固め石等は確認していない。建物配置は座標系X軸に対して、10° 西偏している。

なお、本建物の南辺と平行して幅0.6m、深さ0.13mの規模の直線的に掘削した溝を一条見出した(S

D 1)。建物とは0.8m南側に離れているが、平行の位置関係を有しており、建物と関連性があるものと判断した。溝東側においては底面に接して、坏底面に墨書のある土器1点を検出した。検出時には、坏底面が上面を向いていた。

b その他の遺構

S A 1 (第12図)

S H 1 の北側5.0mの位置で、直線的に配された柱穴列を確認した。直径0.3m、深さ0.13～0.23mの円形の掘り方に直径0.1m前後の柱を配置している。第12図に示したように、P4やP5において掘り方底面において、18.0×28.0cm、厚さ1.5cm前後の礎板を検出している。柱間の配列は不規則であるが、座標系X軸に対して、6° 東偏しており、東側に広がる低湿地に対面する。

C 第3面 (弥生)

第3面(弥生)は、A地区の中では最深部に属する遺構面である。先の第2面から更に1.0m下層で、標高は210m前後である。

a 水田遺構 (第6図)

後述する調査区の南北を縦断するS D 1 の東側において、畦畔および溝から成る水田遺構を検出した。検出した範囲内における水田の総面積は408㎡で、方形を意識した区画配置を示すものの、北西方向に存在する自然堤防による高まりと、東側に存在する丘陵の裾部によって水田域は制限を受けており、北方においては、急激に幅を狭め、地形に合わせた配置を取る。調査区北側から細長い扇状に南西方向へ開口する小谷を利用した水田で、水田面の高さは、北側で高く、南側で低い。

小区画の全容が把握できる水田1は平面積110㎡、水田2は224㎡、水田3は26㎡であるが、区画内において、水田面の比高差が0.1m前後存在することから、検出した畦畔のみでは水が平均的に区画内にいきわたらないため、旧来は更に細かな区画畦畔が存在した可能性が高い。

水田域の東寄りを南北にS D 2 が流れ、途中大きく直角方向へ折れ曲がる。このS D 2 は更に南下し、S D 3 として西側に位置するS D 1 と接続する。S D 2 とS D 3 の左右には、高さ0.5m、幅1.5m前後の盛土畦畔が存在する。後述するが、S D 2 は北方山裾からの湧水を集める役割を、S D 3 はS D 2 からの水とともに、S D 1 からの水の供給を調節していたことが、溝底の高さから判断できる。

第7図の10層、灰色粘質土が水田基盤層にあたり、東西方向に緩やかな円弧を描く、厚さ0.5mの堆積層である。10層を覆う7～9層は、厚さ0.3m堆積しており泥炭土を基本としており、10層との識別は比較的容易である。

明瞭な耕作痕や、手跡・足跡などの痕跡及び、稲株などの痕跡も確認できなかった。

b 掘立柱建物

A地区は、S D 1 を境にその東西に大きく検出遺構の種類が異なる。S D 1 より東側については、前述したように水田遺構が広がる。これに対して、西側においては自然堤防上の安定的な基盤層上に、建物跡を検出している。但し試掘調査の結果、調査区の西側においては砂利層を検出しており、江戸時代前後に南北を流れた太田川の支流の浸食による影響を強く受けているようで、詳細は不明であった。

S H 1 (第13図)

調査区の北西隅でその一部を検出した。確認できた一辺は全長2.0mで、3間の配置である。柱間は

0.67mで等間隔である。直径0.2m、深さ0.18mの円形掘り方で、大半の掘り方底部に8.0cm前後の礫を確認しており、沈下防止と根固めの礫と判断できる。建物軸は座標系X軸に対して11° 東偏している。

S H 2 (第13図)

調査区の西側ほぼ中央でその一部を検出した。確認できた一辺は全長1.08mで、1間の配置である。西側に建物の長軸側が伸びるものの、その全容は把握できない。確認できる範囲内では、柱間の距離は0.5mである。直径0.18m、深さ0.12mの円形の掘り方で、建物軸は座標系X軸に対して15° 東偏している。

なお、S H 2の北側には、0.3m離れて平行な位置にS D 7が掘削されている。位置関係から、区画ないし排水の機能を有していたものと判断できる。

c 土坑 (第13図)

先述したS H 1とS H 2の間において、1.3×2.1mの長楕円形で、深さ0.1mの土坑S K 1～3を検出した。何れも底面はほぼ平坦である。堆積土中には、炭化物が多く含まれていた。

d 溝

S D 1 (第14図)

S D 1はA地区の中で大きな役割を果たしている。つまり、南北を縦断するS D 1を境として、その東西において、検出した遺構が異なることである。西側では、S H 1～2を中心とする建物群が存在し、東側においては水田遺構が展開し、両者を区画する機能を有している。

また、後述するように水が流れていたS D 1は、北から南にかけて流れ、S D 2やS D 3と関係を有しながら、給水・排水先としての機能を有していたことが、溝の位置関係や溝底の標高から判断できる。

S D 1の幅は3.5mで、検出した範囲での全長は40m、深さは0.5～0.7m、溝の断面は円弧状を呈する。溝底部の標高は北端で21.04m、中位で20.22m、南端で20.25mを測り0.79mの比高差を有して南流していた。

第15～17図に示したように、堆積土の中・上層(第14図2層)を中心に、木製農具や建築材の一部を検出している。小範囲でのまとまりはない。第15図の1に示したように、木製農具の未製品が含まれるが、大半が完形品である。

なお、S D 1の南半は、東側に位置する水田と接している。水田1と水田2との間には、幅1.7m、高さ0.07mの盛土畦畔が存在しており、第17図の8および9に示したように、畦畔内部より土器を検出している。両者は、その検出位置において、上下の層に時代の異なる遺構は検出しておらず、混入の可能性はない中で、畦畔内部より土器を出土していることから、畦畔の盛土に際して、同時に埋めていると判断できる。土器を埋めるための掘り方も存在しない。

S D 2 (第18～21図)

水田1と2の東側を南北及び東西へ「L」の字状に掘削した溝である。幅は1.4～1.7m、深さ0.45mで、断面は逆台形に近い。溝底部の標高は北端で20.84m、S D 3と接し、東西方向へ向きを変える付近で20.71m、西端で20.22mを測り、南流した後に直角方向にあたる西へ向きを変え西流する。北端と西端との比高差は0.62mである。本溝においても、先のS D 1同様に、溝の堆積土上層(第20図1層)を中心に、木製農具や建築材の一部を検出した。

溝底面の標高から明らかなように、本溝は北方の丘陵裾から発生する湧水を水田域へ供給するための機能を主に果たしている。

S D 3 (第18～21図)

水田1の東側に位置し、S D 2と接しながら、南端においてS D 1と合流する。幅は1.3～2.0m、深さ0.5mで、断面は逆台形に近い。第19図に示したように、溝の中・上位で木製農具や建築材の一部を検出した。溝の底部の標高は、S D 2と合流する北端で20.71m、中位で20.99m、S D 1と合流する付近の南端で21.14mを測り、北流する。このことから、S D 1からの給水を受けるための機能を果たしていたと判断できる。またS D 2と接続していることから両者は有機的に連動し、水の調節を行っていたと判断できる。

今回の調査範囲においては、S D 2・S D 3共に水田への水口が確認できないことから、直接水田域へ導水していたのではなく、ある程度滞水した後に、二次的に汲み上げなどの方法によって導水していた可能性が高い。

e その他の遺構

S X 1 (第15図)

S D 1のほぼ中位にあたる位置において、溝の両端に直径0.3m、深さ0.3mの楕円形の掘り方を4箇所検出した。これらは位置関係から、対を成しており、掘り方間は幅0.6mで平行を成している。S D 1に対してやや斜め方向に配置されているものの、西側にはS H 2、東側にはS D 2の南側にある畦畔が存在する位置関係から判断すると、S D 1を横断するための橋状施設の痕跡と判断できる。なお、当該地のS D 1底面には、杭や橋脚などの痕跡を示すものは確認できていないことから、S D 1の両端を一度に横断できるだけの木材による施設である。

なお、S D 1の記述に際して触れたとおり、S X 1と水田2との間の畦畔中において、第17図の8に示したように完形に近い土器2点を検出していることから、実用の通路としての機能以外に、S X 1付近に「集落への入り口、水田と集落との境、水田の根幹となる大畦畔」などといった特別な意味があった可能性もある。

3 B地区

a 春日山1号墳〔B地区1号墳〕(第24・25図)

春岡神社の西側に位置し、ほぼ真西に伸びる狭小な丘陵の基部に位置し、標高39.90mの最高所を中心に主体部が配置される直径約10mの円墳である。現況では、主体部を境に西側半分が畑地などの耕作等によって削平され全容を把握できないが、墳丘には盛土は確認できず、基本的には丘陵の最高所を巧みに利用しながら、地山を削り円形を成している。外表面には、埴輪及び葺石は一切確認できなかった。また、墳裾等に明瞭な周溝も存在していない。

主体部は、地山を直接掘り込み、墓壇としている。長方形を呈する墓壇の長辺は2.4m、短辺は1.0m、深さは確認面から0.2mを測り、長辺を真北に配している。表土を除去した後、すぐに墓壇が検出できたことから、上面がかなり削平されている。築造当初には、主体部を中心に多少の盛土があったと推定できるが、後世の改変により、旧状を留めていない。現況での墳丘の高さは、約1.8mである。

確認面が浅いことから、木棺そのものの痕跡や、釘・粘土・石材等は全く確認できなかった。墓壇の底面はほぼ水平に近いが、若干南側の小口部に向かって緩やかに傾斜している。主体部内を含め時期を特定できる遺物は全く出土していない。

b 竪穴住居

S B 1・S B 2 (第26図)

春日山1号墳の東側墳丘裾部にあたる位置より、二棟の竪穴住居を検出した。床面の標高は380mで、周辺の平坦地との比高差は、14mである。両者とも平面形の約半分を検出したのみで、東半は調査区外である。楕円もしくは、隅丸方形の平面形態を有し、南側にあたるS B 2を設置した後、北側の一部を重複するかたちでS B 1が形成される。S B 1の一部に幅0.40m、深さ0.19mの壁溝が確認できたが、S B 2については、調査範囲内において壁溝は存在しない。直径0.3～0.4mの円形の掘り方を持ち、深さは0.16～0.2mを測る柱穴を、双方の住居跡で二基ずつ確認しており、四本柱によって屋根を支える構造である可能性が高い。貼床や炉跡などの痕跡は確認することができなかった。

4 C地区

a 竪穴住居

S B 1 (第28・30図)

C地区の西側は、調査前には平坦な畑地となっていたが、以前には、B地区の所在する丘陵とほぼ同じ高さの丘陵が広がっていたという。C地区は、この削平された丘陵部の東側山裾にあたる部分である。

S B 1は、7.0m×4.8mを測り、当該地区では最大の平面規模を有する。長軸を北に向けて配置している。長方形の平面形態の東側の一边を除く各辺で幅0.4m、深さ0.48～0.64mの壁溝が巡っている。地形の傾斜によって、特に西側において深く掘削されている。

柱穴の配置は明確には捉えることができなかったが、西側の壁溝と平行に検出した柱穴は直径0.4～0.5mで、0.16～0.36mの深さを有している。貼床や炉跡等は確認できていないが、中央やや北東寄りの位置で、床面より0.2m上面で土器がまとまって出土した。人為的な破碎や、土坑内への投棄などの痕跡は認められない。

S B 2 (第28図)

S B 2は、土層の観察によって切り合い関係が明らかで、S B 1がほぼ埋まった段階で、一部を重複させて形成している。確認面が浅く、旧状の把握が困難であるが、5.0×2.4m以上の規模で、方形もしくは、長方形の平面形態である。西側と南側で僅かに壁溝を確認しており、幅0.3m、深さ0.1～0.17mの規模を有し、S B 1の長辺に平行するかたちで配置されている。

貼床は、土層の断面の観察で僅かに南東方向の一部で確認しており、黄褐色土を用いている。炉跡は確認することができなかった。

S B 3・S B 4 (第29図)

S B 3・S B 4共に壁溝の一部を確認したのみであるが、両者とも隅丸方形もしくは、楕円形の平面形態を有する。壁溝は0.4m、深さ0.16～0.45mの規模を有する。S B 3は壁溝が一部重複しているため、複数の建て替えが存在する。壁溝の重複関係からすれば、S B 3が配置された後、S B 4が形成されている。貼床や炉跡は確認できなかった。

S B 5 (第31図)

今回の調査区の中では最も南で検出した。幅0.2m、深さ0.1～0.17mの壁溝が四条確認できており、複数回の建て替えの可能性が高い。隅丸方形もしくは、楕円形の平面形態を有している。壁溝の一部を検出したのみであるため、建物の規模の全容は把握できないが、最低でも一辺4.0m以上の規模を有する。炉跡は三箇所で見出した。炉跡の規模は0.4mを測り、楕円形を呈する。各炉跡は、0.2～0.4mの

範囲で近接している。

第31図の断面図に示したように、焼土検出レベルはそれぞれ異なる。炉跡C→A→Bへの変遷が確認でき、壁溝との関係を考慮すれば、炉跡A・B段階では、S B 5の最も外周の壁溝は機能していない。

b その他の遺構

S X 5 (第30図)

2.4×2.6mの隅丸方形の平面形を呈し、深さは0.2mの土坑である。北西隅を中心に堆積土中より須恵器をまとめて検出した。南西隅から、南側へ伸びるS X 2との切り合い関係は不明で、本来一連のものか、別遺構かは確認できなかった。

5 D地区

当該地区は、極楽寺の西側に位置し、南面する丘陵裾に遺構が展開する。

a 井戸

S E 1 (第33図)

調査区のほぼ中心に位置し、地山面を直径0.85m、深さ1.05mに掘削している井戸である。底部は平坦で、土坑上面と下面の幅は極端ではなく、円筒形に近い掘り方である。底部および壁面に土留めの造作は行なっておらず、素掘りである。調査中にも湧水していた。

S E 2 (第34図)

先のS E 1から南西側7.0mに位置する。直径1.8m、深さ1.35mのすり鉢状に掘り方を掘削している。底部は丸底である。この掘り方の内部の、底面以外に0.2m前後の礫を積み上げている。掘り方と、石積みとの間隔は密接で、裏込め土や石材の使用はほとんど存在しない。

b 掘立柱建物

S H 1 (第35図)

調査区の最も東側で検出した3×4間の掘立柱建物で、長辺は座標系X軸に対して、51°東偏している。長辺は5.8m、短辺は4.4mで、直径0.4m、深さ0.4mの円形の掘り方に柱を設置している。柱間は、1.2m・1.7mの二種類を基本としている。第35図に示したとように比較的多くの柱を検出しており、直径0.1mの円形を呈する。P8の掘り方底部では14×30cm、厚さ1.5cmの板材を検出しており、礎板の役割をしていたものと判断できる。建物内部における床面の硬化している箇所は確認できなかった。

S H 2 (第35図)

S H 1の南東隅と接するS H 2は、切り合い関係からS H 2が先行する。建物の規模は、2.9×3.2mで、2×2間の柱間である。長辺は座標系X軸に対して、42°東偏している。柱間の距離は、1.6mである。直径0.5m、深さ0.3mの円形の掘り方を掘削している。建物内において、床面の硬化している部分などは確認できなかった。

S H 3 (第36図)

S H 2の南西隅と接するS H 3は、切り合い関係からS H 2が先行する。建物の規模は、3.3×4.1mで、柱間は不明瞭である。短辺は座標系X軸に対して、50°東偏している。直径0.2～0.4m、深さ0.5mの円形の掘り方である。建物内において、床面の硬化している部分などは確認できなかった。

S H 4 ～ 6 (第36図)

丘陵側に掘削された柱穴の一行を確認したのみで、平面形態は不明である。一直線に配置された柱穴は座標系 X 軸に対して、50° 東偏しており、直径0.3～0.5m、深さ0.4～0.6mの円形の掘り方である。

c その他の遺構

S X 2 ・ 4 (第33図)

S X 2 は直径1.2mの円形の土坑で、深さは0.24m、底面は平坦である。S X 4 は直径0.6mの円形の土坑で、深さは0.23m、底面は平坦である。両者共に、土坑の側面部が厚さ0.05m前後熱を受けた状態で、赤褐色を呈し硬化している。

d 試掘トレンチ (第32図)

D地区の平面調査に先立ち、遺構の状況を把握するために調査区東端部を重機によって幅1.4m、全長7.0mの規模で南北方向に掘削した。試掘トレンチより東側では、北側より派生する丘陵斜面地に、黒色粘質土が厚く堆積しており、土器片や木製品を含んでいた。また、試掘トレンチより西側においては、遺構を検出しているが、この南側にも黒色粘質土は堆積しており、土器片を含んでいた。

6 E地区

A 近世墓

E地区の丘陵先端部付近を中心に、127基に及ぶ土壌群を検出した。個々についての記述は煩雑になるため、共通項として認識できる部分について以下で記述する。

なお、1号墓(第41図)をはじめ、副葬品から判断すると戦国期に遡るものも若干存在するが、近世墓と出土位置が重なることから、一括して取り扱った。

・平面形態 (第40～58図)

方形…土壌における平面形態において、縦・横の長さがほぼ同規模で、正方形に近いもの。1・2・8・29号墓が典型例で、縦横の長さが1.0m前後、深さが0.4m前後の土壌である。1号墓においては、23本の鉄釘を検出しており、各々の土壌の底面は平坦で、箱状の木棺を納めていた可能性が高い。

円形…土壌の直径が0.6～0.7m前後で、ほぼ正円形である。27・47・52号墓が典型例で、いずれの土壌も底面は平坦である。

小型円形…土壌の直径が0.3～0.4m前後で、正方形を呈する。37・44・45・46号墓が典型例である。当該墓は、検出した人骨から明らかなように、火葬した人骨が碎片となって土壌内に充填されている。

長方形…土壌の長辺が1.1～1.2m、短辺が0.7m前後の長方形を呈するもので、14・80号墓が典型例である。

不正円形…1.1～1.5m前後の土壌であるが、平面形態は不規則な円形を呈する。底面は比較的平坦である。82・84号墓が典型例である。

・ 銭副葬墓

銅銭を確認した墓は127基に対して、約4分の1にあたる31基である。このうち、所謂「六文銭」として、6枚の銅銭を副葬している墓が14基あり、銭副葬墓の中では中心をなす。但し、51・82-a・100/101号墓の18点を最多とし、1ないし2点の副葬も若干含まれる。

出土状態の観察では、27号墓の銅銭孔部に組紐状の繊維の残欠が確認できた。また、14号墓の銅銭表面には、布状の痕跡が僅かに観察でき、布もしくは袋状のものに納めていた可能性がある。

更に、29号墓の事例では、一連に連なった銅銭の底面に、厚さ3mm前後の木質が確認でき、棺材の一部とするには薄いことから、樹皮もしくは、木箱などに納めていた可能性がある。

大半の銭は、土壌内で一箇所にまとまっており、共伴する人骨などの出土レベルと同じ高さで確認できることから、人体上もしくは、人体の脇に沿うかたちで納めていたと見ることができる。

但し、108号墓では土壌の中で、人骨の頭部側と足部側に別れて銭を検出した。頭部側で検出した銭は、人骨から0.15m上面で確認しており、足部側で検出したものは、ほぼ人骨と同じ高さである。つまり、頭部側で検出した銭は、その検出レベルからすれば木棺の上面に置いており、足部で確認した銭は、人体の上面もしくは、側部に副葬していたと見ることができる。しかし、その他の墓における銅銭の副葬状を観察する中では、木棺上面に副葬した可能性を指摘できるものはなく、むしろ、頭部側で検出した銭については、埋土の中に銅銭が何らかのかたちで紛れていた可能性が高いと判断する。

・ 釘

鉄釘を確認した墓は、全体のなかでは少数で、1号墓・71-a号墓・84号墓・108号墓に僅かに確認できる程度である。この内、1号墓では23本の鉄釘が確認でき、各板面に入念に釘が使用されていることが出土状態からも明らかである。その他の墓については、保存状態にもよるが検出例が少なく、数本程度であり、板材を接合するにも最低限の使用に止まっている。

・ 副葬品

銅銭を含め、土壌内に何らかの副葬品を検出した墓は45基で、土壌全体の約3分の1程度である。この内、銅銭のみを副葬する土壌が16基、かわらけなどの土器類のみを副葬する土壌が19基、両者が共存して副葬される土壌が10基である。

出土状態を観察すると、1号墓では、釘の配置から想定できる木棺の外側から土器が出土している一方、棺内にも土器が副葬されている。

大半の遺物は、人骨の検出面と同じ高さであることから、棺がある場合には、棺内の副葬が想定できるが、51号墓の中央付近で検出したかわらけは、人骨を確認した高さより約0.13m高い位置であり、棺上もしくは、土壌上面での副葬が想定できる。

・ 人骨

人骨の詳細な観察については、次年度刊行予定の『遺物・総括編』の中において、パリノ・サーヴェイ株式会社による鑑定報告に譲る。現地の観察所見から判断すると、頭骨として確認できた土壌は22基あり、この内北向きの配置を取る土壌が16基、東と西向きがそれぞれ2基、南が1基、北東が1基である。この数字からも、北向きを意識した土壌が圧倒的に多いことがわかり、土壌の平面形態は、長方形もしくは、方形のものが基本である。

・ 立地の特徴

F地区は、春日山から南西方向に細長く伸びる丘陵である。しかし、土壌群の位置は、その西側先端部の丘陵上と斜面地に集中しており、方位として「西」を強く意識した立地を示している。

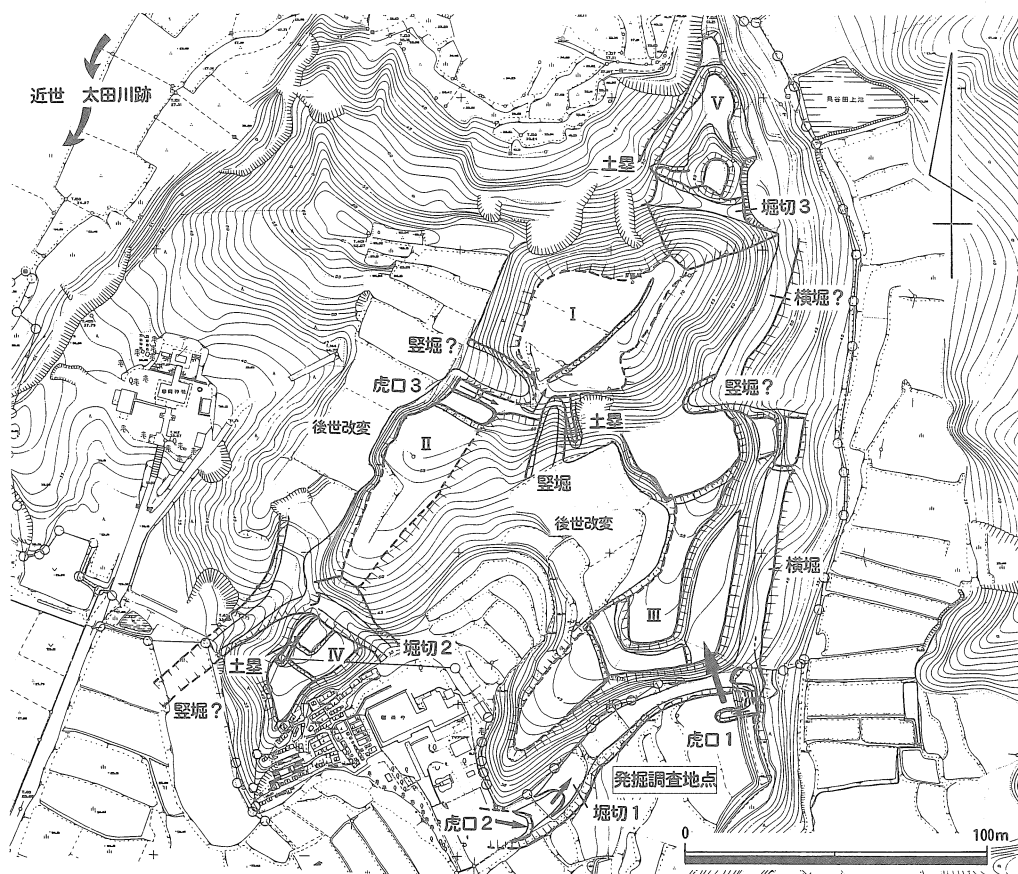
・切合いを持つ土壌

今回確認した土壌群は、基本的には相互に切り合い関係を有しないことが大半であることから、地上に盛り土や木材・石材等による指標があったものと想定できる。但し、28・82号墓においては、土壌相互に切り合い関係を有している。このことが、地表面に指標となる目標物がなかったことによる偶然なのか、特定の場所への意識の現われであるのかは不明である。

B 本庄山砦

本庄山砦の存在は江戸時代末頃に編纂された『村松氏本系帳草案』の中に「本城山寨」、「本庄山」として記載されているのが唯一で、この他戦国期に遡るような資料は現段階では発見されていない。

本庄山砦の本体は、区画整理事業地の北側に位置する春日山（最高所標高72.04m）に存在する。当該地は、区画整理事業の初期における協議の中では、事業対象地に含まれていたが、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いなどの理由によって、その大半は対象地から除外された。以下では、発掘調査の対象地となった堀切部分の構造などを中心に記述する。



第 i 図 本庄山砦跡構造図〔中井 均・加藤理文氏の踏査成果による。〕

a 堀切（第59図）

当該地は、北側に位置する春日山（最高所標高72.04m）から南西方向に派生する全長約250m、幅約50mの舌状丘陵の基部を、東西方向に全長約75m、幅9.0～10mの規模で深さ5.0～6.0m掘削している。

堀切の断面は、検出した範囲のほぼ中央にあたるSH2を境に、東側は断面「V」の字を呈しているが、西側は箱形を呈している。掘底の幅についても同様に、西側では5.0mであるが、東側では0.4mと急速に幅を狭めている。

また、堀切の側面の構造もSH2を境に異なり、東側では堀底から2.0mの高さに、幅0.8～1.9mの犬走が左右に存在するものの、西側には存在しない。

堀切の底面の標高は、西端のSH3付近で28.60m、東端の橋遺構付近で390mを測り、高低差10.4mである。SH3からSH2に至る間には、1.2m前後の落差が存在する箇所もあるが、総じて堀底は緩やかに西側へ傾斜しており、通行が可能である。

b 虎口1〔SD1〕（第60・64図）

SD1は、堀切と平行する東西方向に掘削する、全長7.8m、幅2.1mの溝状で、底部は丸みを持ちながら、緩やかに東側へ傾斜している。

付近の掘切底部が標高390mであるのに対して、SD1の底部標高は420mで、高低差3.0mである。東側の一部が削平を受けているため、詳細な形状は不明であるが、本来は、堀切とSD1は「U」の字状に連結し、堀切からSD1に至る一連の通路を成していると想定できる。

SD1の西端は、堀切底部で検出した橋状遺構のP1に対応しており、位置関係から判断すると、両者に関連性があることがわかる。

c 虎口2〔SH3〕（第63図）

堀切の西端で確認した。大半が調査範囲外にあたるため、詳細は不明であるが、SH3のP1は正方形の掘り方を有し、一辺1.6mを測る。深さは、上面部において削平を受けているので本来の深度を保っていないが、現況で1.0mである。

SH1での遺構の状況から判断すると、P1に対となる土坑が西側に存在し、遮蔽施設となる可能性が高い。柱の痕跡や礎板、根固めの石材等は確認できなかった。

d SH2（第61図）

堀切のほぼ中央で確認した5つの土坑からなる。P1からP4の掘り方の平面形はほぼ正方形を呈し、一辺0.8～1.2mで、深さは0.3～0.4mである。土層の観察から判断すると、0.4×0.8mの規模の方形の柱の痕跡が確認できる。土坑底部や、根固めに20cm前後の石材を使用している。

位置関係から、P1とP2、P3とP4は対になり、おのおのの辺は平行にはならず、若干向きが異なる。土坑の底面は、P1とP2、P3とP4がそれぞれ同一であるが、東側で対となるP1とP2、西側で対となるP3とP4において0.21m底面の高さが異なることから、必ずしも一連の施設となるかの判断ができない。P5は、単独でP2とP3の中間で検出したが、前述の四つの土坑に比べると不正形で、0.4×0.5mと規模も小さい。しかし、位置関係からすれば、SH2に付帯する土坑である。

SH2を境に、西側で幅広の堀底を有していたものが、東側では断面形態とともに、堀幅が狭まるなど、堀切と有機的な関係を有する。

e 橋状遺構（第62図）

堀切の底部東端で、一辺の長さ0.9～1.2m、深さ0.4～0.5mの規模を有する、方形の掘り方の土坑を2基検出した。2基の土坑中心間で計測すると、4.5mの間隔を有し、堀切の掘削方向に平行に配置されている。また、堀切の底面最深部を避け、南側の堀切側面に掘削しており、堀底を通過する際の妨げにならないよう考慮されている。

当該地は、堀切の中でも底面の標高が最高所にあたる場所であり、標高390mを測る。前述した、虎口1(S D 1)は、当該遺構の南側に位置し、両者は関係を有する。

虎口1(S D 1)の掘削された丘陵上の標高は、43.40mであることから、橋状遺構(P1・P2)の掘削面である堀底標高390mとの間に、4.40mの落差が存在する。

堀切西側より、堀底を通過し、虎口1(S D 1)を経て、堀切を南北方向に横断するための遺構と考えることができ、P1・P2に柱を設置し、橋状の施設によって、堀切を横断したと見ることができる。この場合、堀切の上端幅は最低でも10mである。

P1・P2の底面は平坦で、根固めの石材や、土層の観察から柱の規模を想定することはできなかった。

f 横堀（第65・66図）

堀切の東端は、ほぼ直角に北側に屈曲する横堀と接続している。大半が調査区外にあたるため、全貌は把握できないが、幅6.2m、高さ2.6mで断面「U」の字状に掘削している。

城内側にあたる西側斜面には、堀底から30mの高さに犬走が存在する。現状では、土砂の堆積によって完全に埋まっているため、調査区外の北側においてどの程度横堀が連続するのかは不明であるが、砦東側の丘陵裾に広範囲に掘削されている可能性が高い。

城外側において、横堀に付帯した土塁等の盛土は確認できなかった。

g S B 5-A・S B 5-B（第63図）

堀切と横堀が接する付近の更に東側、丘陵裾に竪穴住居2棟を検出した。E地区の丘陵上の標高430mに比べて、S B 5の床面レベルは標高29.80mと13.20mの比高差を有している。西側に丘陵斜面を背負うようなかたちで斜面を掘削しており、詳細な確認を行なったが、地山を掘削している範囲を除き、三分の二程度の床面は、状況を確認することができなかった。

S B 5は複数の住居が切り合っており、北側に位置するS B 5-Bを設置後、南側にS B 5-Bの一部を重複するかたちで、S B 5-Aが形成される。床面レベルは0.4mの落差があり、S B 5-Aが低い。部分的な確認であるため、平面形態は全容を把握できないが、隅丸方形もしくは、楕円形に近いものと判断できる。

壁溝は、幅0.4m、深さ0.1mを測る。柱穴と見られる土坑2基は、0.5～0.6mの楕円形で、深さは0.4mである。礎板や根固めの石材は検出していない。また、貼床及び炉跡なども確認できなかった。

h S X 1・S X 2（第64図）

F地区の丘陵北側の基部より南へ24.0mの付近より検出した円弧状の平面形態を有する溝状の遺構である。上面を削平されているため、S X 1とS X 2という二者に分断しているが、本来は同一のものと理解できる。幅は2.0～2.6mで、深さは0.3～0.6m、断面は円弧状を呈する。堆積土の1ないし2層の上面より土器が出土した。

C 横穴群

調査開始以前よりE地区の南側斜面には、草木に紛れて横穴が数基確認できていた。調査による検出状態から判断すると、未開口の横穴はA群ではA9号・A15号・A17号・A18号・A21号の5基である。また、C群は調査以前には完全に土砂に埋没しており、未開口の横穴である。

a 春岡横穴群A群（第67図）

E地区の南斜面前面には、F地区との間に、幅50mの谷が広がっており、以下で述べるA～Cの3群の横穴は、谷の開口部に近い位置より順次A群・B群・C群と呼称する。

A群は調査前に、その一部が露出していたが、斜面の表土を除去すると、総数22基の横穴が確認できた。これらは、幅60mの規模で円弧状を呈した丘陵斜面を、数基が墓前域を共有しながら立地している。羨道から閉塞部付近を中心に、後世の削平を受けている横穴が多いため、詳細な全容は把握できないが、検出状態から観察できる点を以下で述べる。

墓前域〔A1～A5号横穴〕（第69図）

まず、A1～A5号横穴は、幅12.0m、深さ0.2～0.48mの規模（全長は、後世の削平を受けているため不明）の方形を呈する墓前域を共有している。A1号横穴は、奥壁の一部を僅かに残す程度で、その大半を破壊されている。西側に連続して掘削されるA9～A14号横穴とは、玄室の掘削面が明らかに異なるため、立地を含め、A2～A5号横穴の群に含めた。

先にも述べたように、羨道部付近を削平されているため、詳細は把握できないが、検出時において、玄室床面高と墓前域底面との間には、1.0mの高低差が存在しており、削平を受けていないA15号やA17号、C1号横穴などの閉塞部と墓前域との関係からすると、築造時より高低差が存在している。

A5号横穴の開口部付近の墓前域には、15cm前後の礫と土器を検出した。いずれも不規則な状態で散乱し、墓前域底面からも0.1m程度遊離していることから、二次的な移動をしていると判断できる。

平面形態および構造（第74～77図）

A1号横穴は奥壁が僅かに残る程度で、その全体構造は不明である。奥壁の形態は「尖塔形」（以下形態の分類の基本は『東海の横穴墓』静岡県考古学会シンポジウム実行委員会2001による）である。奥壁は床面からほぼ直角に立ち上がる。開口方向は、座標系X軸に対して53°50′西偏している。

A2号横穴は、玄室の平面形態は「台形」で、断面の形態は「尖塔形」である。玄室の全長は1.6m、最大幅は2.0m、最大高は1.9mで、床面積は3.1㎡である。開口方向は、座標系X軸に対して45°00′西偏している。玄室と羨道は、両袖を形成することによって区画しているが、床面は玄室から羨道にかけて緩やかに傾斜するのみで、明瞭な段差は存在しない。但し、天井部については玄室と羨道間に0.25mの段差が存在し、両者を区画している。奥壁は床面から円弧状を呈して立ち上がる。羨道の最大幅は1.4mで、長さは1.0mであるが、開口部側を削平されているため、旧来の規模は不明である。

A3号横穴は、玄室の平面形態は「台形」で、断面の形態は「尖塔形」である。玄室の全長は1.7m、最大幅は1.9m、最大高は1.6mで、床面積は2.7㎡である。開口方向は、座標系X軸に対して49°50′西偏している。玄室と羨道は、両袖を形成することによって区画しているが、左袖部は形骸化しており、基部に僅かに袖の段を形づくっている。床面は玄室から羨道にかけて緩やかに傾斜するのみで、明瞭な段差は存在しない。天井部については、玄室内の天井が、奥壁側から羨道部に向けて傾斜しており、羨道部の天井との間に明瞭な段差は存在しない。奥壁は羨道部側に5度程度傾斜して立ち上がる。玄室の奥壁側半分程度に、10～15cm程度の礫が散在することから、埋葬過程において礫床が使用されていた可

A10号横穴は、玄室の平面形態は「台形」である。奥壁は床面から直角に立ち上がる。玄室の全長は1.5m、最大幅は1.8mで、床面積は2.8㎡である。開口方向は、座標系X軸に対して39° 00′ 西偏している。平面形態としては、玄室と羨道間に両袖を形成することによって区画しており、床面の高さも玄室と羨道間で0.08mの高低差が存在する。左側壁を中心に10～15cm前後の礫がまとまって検出できたことから、礫床を使用していた可能性がある。また、右側壁の奥壁隅において、0.45×0.60mの長楕円形の土壌に、成人の人骨2個体部を検出した（詳しい鑑定結果は、『遺物・総括編』のバリノ・サーヴェイ株式会社による鑑定報告に譲る。）。更に、この土壌上面には、12cm前後の礫を円錐状に積み重ねている。直接、当該埋葬施設に伴う遺物を検出していなが、形状などから、横穴に伴う施設ではなく、中世以降の墓であると判断する。

A11号横穴は、玄室の平面形態は「方形」（縦長）で、奥壁は床面から直角に立ち上がる。玄室の全長は2.5m、最大幅は1.8mで、床面積は4.6㎡である。開口方向は、座標系X軸に対して63° 50′ 西偏している。平面形態としては、玄室と羨道間に両袖を形成することによって区画しており、床面の高さも玄室と羨道間で0.05mの高低差が存在する。左袖部には、0.16×0.20m、高さ0.20mの方形の削り出しが存在するが、その用途は不明である。玄室奥半には15cm前後の円礫が多数検出しており、礫床を使用していた可能性がある。羨道の最大幅は1.0mで、全長は現況で1.3mであるが、開口部を削平されているため、旧来の規模は不明である。

A12号横穴は、奥壁の一部が僅かに残る程度で、その全容は不明である。唯一規模のわかる玄室の最大幅は1.2mである。開口方向は、座標系X軸に対して59° 00′ 西偏している。

A13号横穴は、玄室の平面形態は「台形」である。奥壁は床面から直角に立ち上がる。玄室の最大幅は2.1mである。開口方向は、座標系X軸に対して61° 00′ 西偏している。その他の部位については、削平を受けているため、詳細は不明である。玄室奥側を中心に8.0cm前後の礫が散乱ることから、礫床の使用されていた可能性がある。

A14号横穴は、奥壁の一部が僅かに残る程度で、その全容は不明である。奥壁は、床面から直角に立ち上がる。玄室の最大幅は0.9mである。開口方向は、座標系X軸に対して47° 00′ 西偏している。

墓前域〔A15号～A16号横穴〕（第71・72図）

A15号とA16号横穴については、一見同一の墓前域を共有しているかに見えるが、比較的浅いA16号横穴の墓前域の東側を、A15号横穴の墓前域が深く掘削しており、両者は共に単独の墓前域を有する。

つまり、遺構の重複関係からすれば、A16号横穴が先行して所在し、この墓前域の大半を後にA15号横穴が掘削するという前後関係が観察できる。

A15号横穴に伴う墓前域は全長7.3m、幅3.3m、高さは0.85mである。この墓前域には、更に南に真直ぐに伸びる幅1.0m、深さ0.15mの断面「U」の字状の墓道が取り付く。墓前域底面の標高差は、A15号とA16号横穴において0.53m存在し、A16号横穴に伴う墓前域が高い。

A15号横穴に伴う墓前域の北西隅には、三角錐状に積み重ねた円礫が確認できた。礫の数や大きさから判断して、閉塞石として使用していたものを、横に片付けた可能性が高い。墓前域の底面付近では2点の須恵器を確認した。

墓前域内に堆積した土層の観察からすると、ほぼ中位にあたる標高27.20m付近の土層の堆積を境に、上・下で堆積状況が変化することから（第70図4および21層上面）、追葬時の堆積土上面と判断できる。こうした所見は、A15号横穴の閉塞石の確認上面と、先に述べた墓前域に堆積した土層の観察の中で、変化を指摘した層の上面が対応することからも裏付けることができる。

能性がある。羨道の最大幅は1.1mで、長さは1.2mであるが、開口部側を削平されているため、旧来の規模は不明である。

A 4号横穴は、玄室の平面形態は「台形」で、断面の形態は「尖塔形」である。玄室の全長は2.6m、最大幅は2.4m、最大高は2.0mで、床面積は5.6㎡である。開口方向は、座標系X軸に対して35° 00′西偏している。玄室と羨道は、両袖を形成することによって区画しているが、床面は玄室から羨道にかけて緩やかに傾斜するのみで、明瞭な段差は存在しない。

天井部は、削平を受けているため、詳細は不明である。奥壁は床面から円弧状を呈して立ち上がる。当該横穴の特徴は、玄室奥半部に、0.2mの段差を設け、「棺座」を形作っていることである。羨道の最大幅は1.2mで、長さは0.7mであるが、開口部側を削平されているため、旧来の規模は不明である。

A 5号横穴は、大半の部分に削平を受けているため平面および構造の詳細は不明である。奥壁の形態は「尖塔形」である。床面から円弧状を呈して立ち上がる。玄室の最大幅は1.0mである。開口方向は、座標系X軸に対して26° 00′西偏している。

墓前域〔A 6～A 8号横穴〕（第69図）

A 6～A 8号横穴も幅9.0m、深さ0.3～0.73mの規模の方形状の墓前域を共有している。A 1～A 5号墓前域とは2.0mの間隔を有しており、0.37mほど底面の標高が低い。

平面形態および構造（第78・79図）

A 6号横穴は、奥壁の基底部付近を僅かに残すのみである。構造の詳細は全く不明である。奥壁は床面から直角に立ち上がる。玄室の最大幅は1.8mである。開口方向は、座標系X軸に対して38° 00′西偏している。床面に直径10～15cm前後の礫が散乱することから、礫床を使用した可能性がある。

A 7号横穴も、奥壁部分が僅かに残る程度である。奥壁の形態は「尖塔形」である。奥壁は羨道部側に5度程度傾斜して立ち上がる。玄室の最大幅は1.7mである。開口方向は、座標系X軸に対して23° 00′西偏している。奥壁の左側前面の床面に、直径0.35m・深さ1.0mの穴を検出した。その用途については不明である。

A 8号横穴の奥壁の形態は「尖塔形」である。床面から円弧状を呈して立ち上がる玄室の最大幅は1.6mである。開口方向は、座標系X軸に対して38° 00′西偏している。

墓前域〔A 9～A 14号横穴〕（第70図）

A 9～A 14号横穴も全体では、ひとつの墓前域を共有しているように見えるが、横穴の掘削方向や墓前域の平面形態の凹凸などから判断すると、A 9とA 10号、A 11～A 13号、A 14号単独という3群に分かれ、細かな墓前域が合い接して競合している。

平面形態および構造（第80～84図）

A 9号横穴は、玄室の平面形態は「台形」で、断面の形態は「尖塔形」である。奥壁は羨道部側に5度程度傾斜して立ち上がる。玄室の全長は2.0m、最大幅は2.0m、最大高は1.5mで、床面積は3.8㎡である。開口方向は、座標系X軸に対して37° 00′西偏している。平面形態としては、玄室と羨道間に両袖を形成することによって区画しており、床面の高さも玄室と羨道間で0.05mの高低差が存在する。玄室天井も、奥壁側から羨道にかけて傾斜するものの、僅かな段差を形成して、羨道部天井との区画を行なっている。右側壁奥側に直径10～15cm前後の礫がまとまって存在することから、礫床を使用した可能性がある。また、羨道の開口部を中心に直径15～20cm前後の礫を大量に確認しているが、羨道床面からは0.6m遊離しており、追葬時の閉塞石として使用した可能性が高い。

平面形態および構造（第85・86図）

A15号横穴は、玄室の平面形態は「台形」である。奥壁は床面から直角に立ち上がる。玄室の全長は2.9m、最大幅は1.5m、床面積は4.0m²である。開口方向は、座標系X軸に対して24° 50′ 西偏している。玄室と羨道の区別は、平面形態においては明瞭でなく、袖部は形成しない。但し、玄室床面と墓前域との間には、比高差0.25mの段がある。

今回の横穴調査のなかでは、数少ない旧来の副葬品の状態を観察できる玄室内には、左側壁に沿うように平行して安置した鉄刀が、鋒を奥壁側に向けて二振確認できた。特に注意される点は、西側に配置された鉄刀の、柄部分に10cm間隔で3点の両頭金具を検出したことである。出土状態からすると何れも鉄刀に伴う金具と判断でき、鉄刀の構造を復元する好資料である。

左側壁の南半では、鉄鏃がまとまって出土した。当該地付近には、15cm前後の礫が0.4×0.1mの範囲に散在しており、礫床もしくは、棺台として使用していた可能性がある。

右側壁側では、奥壁寄りでは2点の耳環を検出した。両者の出土位置はほぼ平行で、30cmの間隔を有している。更に右側壁の閉塞石寄りの部分では須恵器5点、土師器1点を検出している。この耳環出土位置から土器出土位置にかけては、0.7×1.4mの無遺物の空間が存在することから、当該地をもって、人体埋葬の範囲の可能性が高い。

閉塞石は、玄室側壁が最も狭くなる範囲に、直径15cm前後の礫を使用して閉塞している。現況では、4～5段前後で0.3mの高さに礫が積み上げられている。礫の積み上げには、目立った規則性は確認できない。

この礫の下面には、全長0.82m、幅0.18m、深さ0.04mの溝が確認できた。検出位置が、閉塞石を確認した位置と合致することから、板などによる閉塞の痕跡である可能性が高い。

A16号横穴は、大半を削平されているため、詳細は不明である。玄室の最大幅は0.9mで、開口方向は、座標系X軸に対して28° 00′ 西偏している。

直径15cm前後の礫が直線的に1列確認できており、礫床を使用していた可能性がある。玄室と墓前域の床面は、0.65mの高低差が存在し、段を形成している。

平面形態および構造（第87図）

A17号横穴は、玄室の平面形態は「方形」（縦長）で、断面の形態は「尖塔形」である。奥壁は床面から円弧状に立ち上がる。玄室の全長は1.3m、最大幅は0.6m、最大高は0.6mである。

開口方向は、座標系X軸に対して39° 00′ 西偏している。平面的には玄室と羨道の区別は明瞭ではなく、やや側壁間の幅が狭まる位置に15～20cm前後の礫を使用して閉塞を行なっている。

A17号横穴に伴う墓前域は全長2.1m、幅1.8m、高さは0.8mである。長方形の平面形態を呈し、玄室床面と墓前域床面との高低差は0.28mあり、段を有している。

墓前域〔A18号・A21号横穴〕（第88図）

A18号とA21号横穴は、幅5.2mの規模の「コ」の字状の墓前域を共有している。西側に大きく空間をあけ、東側の隅に2基を配しているのみで、偏った配置をとる。

平面形態および構造（第88図）

A18号横穴は、玄室の平面形態は「方形」（縦長）で、断面の形態は「尖塔形」である。奥壁は床面から円弧状に立ち上がる。玄室の全長は1.95m、最大幅は0.6m、最大高は0.6mである。

開口方向は、座標系X軸に対して55° 00′ 西偏している。平面形態において、玄室と羨道部の区別は不明瞭である。

A21号横穴は、玄室の平面形態は「方形」（縦長）で、断面の形態は「台形」である。奥壁は床面から円弧状に立ち上がる。玄室の全長は1.1m、最大幅0.2m、最大高0.4m、床面積0.3㎡である。開口方向は、座標系X軸に対して42° 00′ 西偏している。平面形態において、玄室と羨道部の区別は不明瞭である。開口部に15cm前後の礫を充填し、閉塞している。

平面形態および構造（第88・89図）

A19号横穴は、玄室の平面形態は「台形」で、断面の形態は「尖塔形」である。奥壁は床面から円弧状に立ち上がる。玄室の全長は1.1m、最大幅は0.6m、最大高は0.7m、床面積は0.7㎡である。

開口方向は、座標系X軸に対して50° 00′ 西偏している。開口部を削平されているため、詳細は不明であるが、須恵器の出土と、地形の状況から幅2.5m規模の「コ」の字状の単独の墓前域が想定できる。

A20号横穴は、玄室の平面形態は「台形」で、断面の形態は「横長円弧形」である。奥壁は床面から直角に立ち上がる。玄室の最大幅は1.5m、最大高は1.0mである。開口方向は、座標系X軸に対して28° 00′ 西偏している。

玄室奥半に35cm前後の板状の礫を使用して、礫床を形成している。礫床は、奥壁から0.6mの範囲である。当該範囲は、その他の床面よりも0.1m高く、所謂「棺座」と見ることができる。

右側壁寄りの礫床の切れる部分には、須恵器が床面に配置されている。

A22号横穴は、玄室そのものは削平を受けているため、規模・構造は不明である。須恵器が出土している点と、幅2.2mの規模の「コ」の字状を呈する掘り込みを墓前域と判断した。

b 春岡横穴群B群（第68図）

墓前域〔B1・B2号横穴〕（第68図）

B群の横穴は、先のA群横穴から20mの間隔を隔てた位置に掘削している。B1・2号横穴は、幅7.0mの方形の墓前域をそれぞれ共有している。

平面形態および構造（第90・91図）

B1号横穴は、玄室の平面形態は「方形」で、断面の形態は「縦長円弧形」である。奥壁は床面から円弧状に立ち上がる。玄室の全長は1.3m、最大幅は1.6m、最大高は1.6mで、床面積は2.2㎡である。

開口方向は、座標系X軸に対して88° 00′ 東偏している。玄室と羨道は、両袖を形成することによって形づくっているが、玄室床面は奥壁側から開口部へ向かって緩やかに傾斜するのみで、玄室と羨道の堺に段を有すことはない。

羨道は、開口部側を削平によって失っているが、現況で全長0.7m、最大幅1.1mである。玄室と墓前域の床面では、0.07mの高低差があり、段を有していた。

B2号横穴は、玄室の平面形態は「方形」で、断面の形態は「尖塔形」である。奥壁は床面から羨道部に向かって5度傾斜して立ち上がる。玄室の全長は2.4m、最大幅は1.7m、最大高は1.9mで、床面積は4.4㎡である。

開口方向は、座標系X軸に対して80° 00′ 西偏している。玄室と羨道は、両袖を形成することによって区画している。玄室並びに羨道の床面は後世に掘り下げられているため、旧来の形状を把握できない。

玄室天井は、羨道部に向かって緩やかに傾斜するものの、羨道との堺に0.2mの段を有している。羨道は、開口部側を削平によって失っているが、現況で全長0.7m、最大幅0.8mである。

玄室と墓前域の床面では、1.36mの高低差があり、段を有していた。

c 春岡横穴群C群（第68図）

墓前域〔C1・C2号横穴〕（第68図）

C群横穴は、今回の調査した三群の横穴のなかでは最も谷の奥側に位置する。分布調査においては、本横穴群より更に奥にD～F群が所在することが明らかとなっているが、調査前までは、谷部に堆積した土砂によって完全に埋まっており、新発見の横穴群となった。

B群横穴とは50mの間隔を有して掘削している。C1・2号横穴は、幅3.5m、全長7.4mの長方形を呈する墓前域を共有している。

平面形態および構造（第92・93図）

C1号横穴は、玄室の平面形態は「方形」で、断面の形態は「尖塔形」である。奥壁は床面から羨道部に向かって5度傾斜して立ち上がる。玄室の全長は2.0m、最大幅は1.9m、最大高は1.9mで、床面積は4.0m²である。

開口方向は、座標系X軸に対して56°00′西偏している。玄室と羨道は、両袖を形成することによって区画している。玄室の床面は、奥壁側より羨道部にかけて緩やかに傾斜し、羨道との間に6cmの高低差をもって段を形成している。

玄室天井は、奥壁側から羨道部にかけて緩やかに傾斜し、明瞭な段差を持たず、羨道部天井へと移行する。羨道の右側壁に沿って、幅0.13m、深さ0.03mの溝が、開口部へ向かって直線に掘削されている。開口部へ向かって傾斜していることから、排水の施設と考えることができる。羨道の全長は3.7m、最大幅は1.0mである。

当該横穴は、今回の調査横穴のなかでも最も残りの良い横穴であり、壁面には掘削した際の工具の痕跡が明瞭に観察できた。個別の掘削単位は、幅8cmの規模を有しており、床面から90cmまでの高さにおいては、横位への整形を基本としているが、90cmの高さから上位では、縦位への整形へと変化している。

C2号横穴は、玄室の平面形態は「方形」で、断面の形態は「台形」である。奥壁は床面から円弧上を呈して立ち上がる。開口方向は、座標系X軸に対して86°00′西偏している。玄室と羨道の区別はなく、床面・天井ともに平坦なまま開口部へと至る。

玄室内より須恵器を検出しているが、何れの土器も床面から10cm前後遊離しており、追葬時の所産である可能性が高い。玄室と墓前域床面との間には、1.2cmの高低差が存在し、段を形成している。

C2号横穴の前面にあたる墓前域より、直径25cm前後の円礫とともに須恵器を検出している。何れも二次的移動を伴っているが、円礫などは本来、閉塞石としての機能を果たしていた可能性が高い。

D 横穴式石室

横穴群の内、最も西側に位置するA15・16号横穴の所在する丘陵斜面の北側で、丘陵上の南縁辺において、二基の横穴式石室を検出した。調査以前から、地表面に盛土や周溝の痕跡は確認できず、表土を除去した際に新たに発見した。

a 春岡古墳群B1号墳〔E地区B1号墳〕（第94・95図）

当該墳は、地山を全長5.1m、幅2.0m、深さ1.1mの規模に掘削し、掘り方としている。開口方向は、座標系X軸に対して17°00′西偏している。掘り方内部には、40×50cm前後の方形の石材を使用し、横穴式石室を構築している。但し、奥壁を含め玄室部分の石材は全て後世の攪乱によって、破壊・除去されているため、旧状を観察することはできない。

僅かに羨道部の左右側壁に旧状をとどめており、幅0.75m、現状での検出高0.6m、二段の石材の構築が確認できる。羨道部左側壁付近の床面には、10cm前後の礫が0.5×1.5mの範囲でまとまりをもっており、礫床の使用された可能性がある。

また、羨道部のほぼ全面には、玉類や鉄製品が散乱している。各々を検出した高さは、不規則で、埋葬状態を反映したものではない。

墳丘の痕跡は一切確認できず、盛土や削り出しは認められない。また、周溝についても確認できなかった。但し、東側に所在するB 2号墳との位置関係から直径4.0～5.0m前後の墳丘規模が想定できる。両者の構築における前後関係は不明である。

b 春岡古墳群B 2号墳〔E地区B 2号墳〕（第95図）

前述のB 1号墳の2.0m東側の隣接した位置に立地する。主体部の大半に削平を受けているため、全容は把握できないが、地山を全長2.7m（開口部が破壊されているため、残存長）、幅2.0m、深さ0.5mの規模に掘削し、掘り方としている。

開口方向は、座標系X軸に対して6° 00′西偏している。開口部側の攪乱坑内より石材が確認できることから、当該墳もB 1号墳同様に、横穴式石室を内蔵していたものと判断できる。墳丘および、周溝の痕跡は確認できていない。

E 竪穴住居

E地区の丘陵上の西端において、4棟の竪穴住居を検出した。個々の住居において、建替えに伴う重複関係がある。S B 1を除き、丘陵の北側斜面に立地している。

S B 1（第96図）

丘陵上より検出したS B 1は、東側の壁溝を一部確認した。短辺は4.2mの規模を有し、隅丸方形の平面形態を呈する。壁溝の幅は20cmで、深さは30cmである。四本支えと想定できる支柱穴のうち、3穴を確認した。柱穴の直径は30～40cmで、深さは20cmである。

床面の標高は35.40mで、周辺の平坦地との比高差は11.4mである。床面は、貼床の痕跡は確認できなかった。

S B 2-a（第96図）

北側斜面に位置するS B 2-aの、長辺は3.7m、短辺は現存で2.4m、長楕円形の平面形態である。北側の床面の一部は、斜面地に接続しており、明瞭に平面形を確認できなかった。四本支えと想定できる支柱穴のうち、南側の2穴を確認した。柱穴の直径は30cmで、深さは30cmである。

床面の標高は34.20mで、周辺の平坦地との比高差は10.2mである。貼床・壁溝の痕跡は確認できなかった。

第96図の土層断面図から判断すると、後述するS B 2-bの0.22m上部にS B 2-aの床面が配置されており、S B 2-aが後出することが確認できた。

S B 2-b（第96図）

S B 2-bは、S B 2-aの外周に一回り大きな平面形で配置されている。長辺は5.0m、深さは0.4mである。平面形態は、北側が明瞭に確認できなかったため不明である。

床面の標高は、34.40mである。床面高は、S B 2-aの床面から0.22m高く、明瞭な貼床は確認できなかった。屋内の南側の位置で炉を、南西角の支柱穴脇からは、土器2点を検出した。

S B 3-a・b (第96図)

S B 3-a と b については、重複関係から b が先行して配置され、この平面形の大半を掘削して、a が配置される。斜面地での検出であり、平面形の全容は不明である。

a・b 共に東側に斜面を背負い、幅30cm、深さ20～30cmの壁溝が巡る。四本支えと想定できる支柱穴の内、東側に配列される2穴を S B 3-a 側で検出した。直径は30cmで、深さは30cmである。

炉・貼床は確認できなかった。床面の標高は、34.20mである。

S B 4-a・b (第97図)

S B 4-a と b は、平面において相互に重複しており、位置関係や土器の出土状況を考慮すると、S B 4-b が先行して配置され、この平面形の一部を掘削して S B 4-a が形成されている。

重複しているため、各々の正確な平面形態と規模は不明であるが、S B 4-a は隅丸方形の平面形で、長辺が5.2mである。両者共に壁溝・貼床は確認できなかった。

四本支えの柱は、S B 4-a が2.3×2.8m、S B 4-b が2.0×2.6mである。直径は60～80cm、深さは40～50cmの規模である。柱の配置から判断すると、支柱穴の組み合わせが S B 4-a と S B 4-b の間に更に一箇所確認できることから、別に住居が存在した可能性がある。床面の標高は、34.20mである。

S B 4-a の屋内、南東隅付近の床面上から、土器4点がまとまって出土した。正位に近い状態で検出した台付甕の内部から、明瞭な内容物を確認することはできなかった。

S B 4-a に伴う支柱穴と想定できる範囲内より、炉を検出した。

F 掘立柱建物

S H 1 (第98図)

S H 1 は、先述の近世墓である69～72号墓付近に近接して立地している。1.5×2.0mの規模で、1×1間の配置である。長辺は座標系X軸に対して25°東偏している。

S H 1 の設置に際しては、西面する丘陵斜面を「L」の字状に2.5×6.5m掘削し、平坦面を造った後に、地山を掘削して直径40cm、深さ50cmの円形の掘り方を掘削している。柱間内部には、10cm前後の礫が0.5×0.8mの範囲で集中しているが、その機能は不明である。

なお、S H 1 の北側にも、斜面部を「L」の字状に4.3×9.0m掘削し、平坦面を造っている箇所が存在し、両者との間には、幅1.2mの傾斜道が形づくられている。

近世墓との切り合い関係では、69～72号墓何れも、S H 1 付近の斜面地への堆積が進行した後に掘削を行っており、少なくとも、近世墓以前に S H 1 が先行して形成される。

S H 2・3 (第98図)

S H 2 は、後述する S H 3 と共に、F 地区丘陵の最西端に位置し、丘陵北側斜面下部に位置する。柱穴の直径は40cm、深さ30cmの円形の掘り方である。両者共に平面形は不明である。

S H 2 の一辺は座標系X軸に対して60°東偏している。また、S H 3 の一辺は座標系X軸に対して60°東偏している。

G 井戸 (第98図)

S H 3 の南側に近接する S E 1 は、1.5×1.8mの長楕円形の掘り方で、すり鉢状を呈しており、底部は丸底である。深さは0.65mである。底部および側面には土留めはなく、素掘りである。

H 溝

SD 2 (第101図)

以下に述べるSD 2～3・5は、F地区の丘陵上のほぼ中位に位置する。丘陵を東西方向に掘削する溝群である。SD 2は、溝幅が北西側では2.0mであるが、南東方向に向かうにしたがって幅5.0mと急激に幅を広げ終結している。深さは0.80mで、丸底を呈する。

堆積土中には、1cm前後の小礫を多量に含む緻密な層が存在し、土器片も混在していた。

SD 3 (第101図)

SD 2の西側に位置し、ほぼ平行して掘削されている。幅は2mで、深さは0.65m、丸底を呈する。全長は9.0mで、丘陵をほぼ横断している。

SD 4 (第40図)

先に述べたSA 1の西隣において、ほぼ平行するかたちで検出した溝状遺構である。全長は19.40mで、丘陵の横幅全てを掘削している。

溝の幅は不規則であるが、1.3m前後の幅を有し、深さは、0.15～0.3mである。但し、先のSA 1同様、当該地域の確認面は、当初の地表面よりも後世の削平を受けている可能性が高く、遺構の深さは当初の規模を有していない可能性が高い。

当該遺構も、直接時期を決定できる遺物がないが、溝の南側において、8号墓がSD 4の一部を掘削していることから、少なくとも8号墓形成以前の遺構であることは明らかである。

SD 5 (第101図)

SD 2・3とほぼ同方向に掘削されている。幅は0.7m、全長は6.2m、深さは0.2mである。南西端で終結しており、丘陵を完全には横断して掘削されていない。丸底を呈する。

I その他の遺構

SA 1 (第40・100図)

E地区丘陵先端部の尾根上において、丘陵方向に対して直角に並ぶ直径約40cm、深さ7.0～29.0cmの規模を有する柱穴を10箇所検出した。

総延長は14.7mで、二箇所において、「L」の字状に屈曲する配置を有する。各々は規則的に配されており、狭い間隔で1.3m、広い間隔で1.8mを測る。

本遺構に伴う遺物が存在しないため判然としないが、当該遺構から西側に戦国期から近世を中心とした土壌墓群が広がるが、東側には一切存在しないことなどから判断すると、土壌墓群との関連が認められる。

遺物包含層 (第40図)

B 1号墳とSD 4の間の約10mの丘陵南側斜面において黒色土を検出した(第40図網線部)。本土層からは縄文土器片を検出した。

先述の黒色土を除去した後、当該域基盤層面において、直径30～50cm、深さ20cm前後の小型円形土坑を9基検出した。配置に規則性を見いだすことは難しく、遺構に伴う遺物も検出できなかったことから、時期および機能を特定できなかった。

7 F 地区 (第102図)

A 調査の経緯と経過

平成8年度から現地調査を実施してきた春岡遺跡群の発掘調査も二年を経過し、区画整理事業の工事工程との整合性と、調査の迅速化が日々求められるようになってきた。こうした中、前年度の試掘調査によって、F地区に古墳3基が所在することが判明した。当該地区について、袋井市を含め県西部での調査経験を有する関西大学文学部考古学研究室に調査協力を依頼した。

現地調査においては、袋井市教育委員会の担当者と協議しながら作業を実施するとともに、関西大学名誉教授網干善教先生および、文学部助教授米田文孝先生の指導・助言のもと、関西大学大学院生（当時）海邊博史を中心に、考古学研究室学生が協力した（個別名は巻頭に記した）。

なお、以下に記す現地調査記録は、調査参加者の内、海邊博史を中心に赤塚 亨・阿部泰之・正岡大実が意見を交換し、袋井市教育委員会の担当者（白澤・松井）と検討した結果を掲載した。また、当該地における遺構図版の編集についても四氏の協力があった。

調査期間中は、天竜市金光明山光明護国禅寺に宿泊し、猛暑の中、時には深夜にわたる作業など、多大な協力を得た。調査終了後には、各方面へ進まれ、多忙極める中、資料整理に尽力いただいた（白澤）。

B 調査の方法

発掘調査は重機により調査区全体の表土を概ね除去した7月30日から人力によって開始した。各遺構によって調査方法が若干異なるので遺構ごとに記述する。

1号墳は独立して隆起していたため、人力掘削開始時には表土がかなり堆積していた。墳丘盛土と基盤層の境界を確認するために、東西南北の4方向に幅50cmの畦を設定し土層断面図作成と写真撮影を行いながら表土掘削を行った。また補助的な確認のため、北西・北東・南西・南東方向にも幅30cmの畦を設定し墳丘の把握に努めた。墳丘北側および南側では、残存していた表土を再度重機にて除去したが、墳丘西側には3号墳が立地しており墳丘裾部を損壊する恐れがあったため、残存している表土の大部分を人力にて除去した。1-3号墳間の周溝は堆積状況を確認するため2箇所畦を設定した後、流出土を除去した。また墳丘東側は、崖状地形になっており重機が進入できなかったため人力で掘削を行った。なお、墳丘上面の土層断面図は縮尺10分の1で記録した。礫検出後は主体部の主軸・中軸線を設定し四分法にしたがって上層より除去した。礫内には幅20cmの畦を設定し流入度堆積状況を観察し縮尺5分の1で記録した。主体部の検出・上面・床面検出・床面完掘の各段階において記録写真の撮影および平面図・立面断面図を作成し、構造の把握に努めた。完掘後、墳丘を重機にて半載し縮尺10分の1で図化し、墳丘の構築状況を確認した。その後、墳丘盛土を完全に除去し、下層遺構の確認を行った。

2号墳は表土の大部分を重機によって掘削した。主体部の開口方向が早い段階で確認できたため、第1号墳のように磁北で畦を設定せず、主体部の主軸と中軸を設定し四分法によって掘削を行った。当初、開口部より玄室に向かって石室内流入土を除去していく予定であったが、左側壁が倒壊していることが判明したため、墳丘上面から下層へと掘削していくことになった。墳頂部より図化しつつ掘削していくと、天井石を計12石検出した。奥壁側の天井石1石と羨門部分の天井石3石は原位置を保っていたが、いずれも床面までの流入土を除去した段階では崩落の危険性が予想された。そのため写真撮影および天井石検出状況の実測を行なった後、他の原位置を保っていない天井石とともにチェンブロックで天井石を全て除去した。石室内流入土は石材の崩落が多く、畦を設定した状況での掘削が困難であるため、床面上層の遊離遺物が確認される標高までは畦を設定せずに掘削した。閉塞石は検出した状況のまま床

面まで掘削した。そして写真撮影および図化した後、閉塞の段階順に除去した。床面では石室主軸線とそれに直交する玄室中軸線を設定し、50cmメッシュを設定した。主軸・中軸線には幅15cmの畦を設定した。石室床面の図化は縮尺10分の1で行ったが、微細遺物の検出状況図は縮尺5分の1で作成した。

3・4号墳は表土の大部分を機械掘削した後、残存表土および墳丘を人力で掘削した。図化は全て縮尺10分の1で行った。

その他の遺構は表土の大部分が重機にて除去されていた。埋土はすべて人力で掘削した。図化は全て縮尺10分の1で行った（海邊）。

C 調査日誌抄【平成9年】

- 7月30日（水） 曇のち晴 1号墳墳丘北西側から南側を掘削。
- 7月31日（木） 晴一時雨 2・3号墳の杭打ち、1・3号墳の杭に標高を落す。3号墳は北西区と南東区を掘削するためL字状に幅50cmの畦を設定。
- 8月1日（金） 晴 1号墳墳頂部の精査。墳丘は北・東側で流出土を除去。3号墳は墳頂部精査及び周辺部を掘削する。
- 8月4日（月） 晴時々曇 1号墳北側流出土を除去。3号墳は墳頂部精査および南側流出土を除去。
- 8月5日（火） 雨時々曇 1号墳流出土を除去。3号墳西側流出土を除去。午後、激しい雷雨のため現地作業中止。
- 8月6日（水） 曇 1号墳墳頂部落ち込みの精査を行い、写真撮影を行う。墳丘東側流出土を除去。墳頂部南側の土器周辺の精査を行い、写真撮影を行う。3号墳西側流出土を除去。墳頂の精査を開始。
- 8月7日（木） 曇一時雨 1号墳東側～北側流出土を除去。3号墳は北東区と南西区の精査。
- 8月8日（金） 曇のち晴 1号墳東側～北側流出土を除去。墳頂部平面図を作成し畦を除去。3号墳は墳丘裾まで範囲を拡大して精査。
- 8月11日（月） 晴 1号墳墳頂部の掘削を開始。墳丘裾の流出土を除去。3号墳墳頂部を掘削。周溝埋土を掘削。
- 8月12日（火） 晴 1号墳墳頂部の精査。墳丘南側は流出土をほぼ除去。3号墳の墳丘精査が終了。
- 8月13日（水） 曇のち晴 1号墳墳頂部の精査。畦を再設定し深掘りトレンチを掘削。北西側トレンチでは盛土直上から弥生土器を検出。3号墳は精査後、墳頂部の深掘りを開始。
- 8月14日（木） 曇のち晴 1号墳墳頂部深掘りトレンチの土層断面図を作成。墳丘西側から北側流出土を除去。3号墳墳頂部深掘りを開始。3号墳南西側から南東流出土を除去。3号墳周溝を掘削。
- 8月15日（金） 曇のち晴 1号墳墳頂部を掘削。3号墳墳頂部を掘削。墳丘東側～南側流出土を除去。
- 8月18日（月） 晴 1号墳墳頂部を掘削。墳丘西側・東側流出土を除去。3号墳墳頂部を掘削。
- 8月19日（火） 晴のち曇 1号墳墳頂部を掘削。重機により周溝表土を除去。3号墳墳頂部を掘削。
- 8月20日（水） 晴 1号墳墳丘東北側流出土を除去。3号墳は北畦および西畦土層の精査。
- 8月21日（木） 晴 1号墳墳頂部を掘削。墳丘は西側～北側の流出土をほぼ除去し、全周の約2/3を終了。2号墳墳頂部を掘削。墳頂部の落ち込みは埋土の状況から後世の攪乱である可能性が高い。
- 8月22日（金） 曇のち晴 1号墳墳頂部畦土層断面図を作成。精査後、写真撮影。墳丘北畦・東畦の土層断面図を作成。1号墳東側～北側墳丘流出土を除去。3号墳墳頂部東側土層断面図を作成。周溝を掘削。周溝土器検出状況の写真撮影。
- 8月25日（月） 晴のち曇 1号墳墳頂部は南北・東西畦を除去。墳丘西側から北西側流出土を除去。2号墳は墳頂部落ち込みの土層断面図を作成。3号墳西側土層の墳頂部分層を行った後、写真撮影。
- 8月26日（火） 晴時々曇 1号墳墳頂部畦を除去。墳丘流出土を除去。1号墳墳丘南東土層断面図を作成。1号墳墳丘内北西区から鉄刀出土。3号墳墳頂部落ち込みの精査。
- 8月27日（水） 晴 1号墳墳丘は黒褐色土層面まで掘削。墳丘は北東・北西畦を除去。3号墳墳頂部は畦を除去し精査。

- 8月28日(木) 晴 1号墳墳丘の精査。墳丘東西畦・南北畦を除去。墳丘南斜面の精査。2号墳開口部の土層断面図を作成。3号墳墳頂部深掘りトレンチを掘削。墳丘南側畦を除去。周溝を掘削。
- 8月29日(金) 晴 1号墳丘は鉄刀検出面まで全体を掘削。北西区・南西区で握り拳大の礫を検出、主体部は礫櫛の可能性が高い。墳丘は流出土を完全に除去。2号墳は開口部土層断面図を作成。1次墳丘と2次墳丘の境界を確認。2号墳墳丘西側の土層断面図を作成。土坑1は実測・写真撮影を行う。3号墳墳丘は旧地表面と思われる黒褐色土を検出。
- 9月2日(火) 晴 1号墳墳頂部を掘削。2号墳墓道を精査と周溝南畦の写真撮影。土坑1を完掘。1号周溝墓の精査。
- 9月1日(月) 晴 1号墳墳頂では鉄刀検出状況図を作成後、取り上げ。礫櫛検出面まで北西および南東区を掘削。2号墳は開口部・周溝の土層断面図を作成。3号墳は黒褐色土層まで北西・南西区を掘削。本日から1号周溝墓の範囲確認。南側で幅約1mの周溝、中心付近で主体部らしい黒褐色土の遺構を2箇所検出。
- 9月3日(水) 晴 1号墳墳頂部を掘削。礫を多数検出。2号墳は閉塞石および転落石の輪郭を出し、夕方写真撮影。1号周溝墓全体を精査。
- 9月4日(木) 晴 1号墳墳丘を掘削。検出した礫の周囲を幅50cm前後の青灰色粘質土層が取り囲む。おそらく礫床下層の粘土と思われる。2号墳は開口部から前庭部の割り付け。閉塞石の図面を作成。閉塞石は途中2箇所土の堆積確認。周溝墓は主体部を掘削。黒褐色土埋土中から弥生土器が出土。
- 9月5日(金) 晴 1号墳墳丘を精査。2号墳は開口部から前庭部の平・立面図を作成。1号周溝墓は主体部をほぼ完掘し、北側周溝を掘削。
- 9月8日(月) 雨のち晴 降雨のため現地での作業を中止。
- 9月9日(火) 晴時々曇 1号墳墳丘を精査。2号墳は開口部から墓道の立面断面図を作成。土坑1は完掘状況の写真撮影。1号周溝墓は主体部の精査。周溝部を掘削。
- 9月10日(水) 曇一時雨 1号墳墳丘畦の土層断面図を作成。2号墳は墓道の土層断面図を作成。1号周溝墓は主体部の精査後、写真撮影。南側周溝を掘削。2号墳西側で長さ6.4m、幅1.75mの直線的な掘り割りを検出。
- 9月11日(木) 晴のち曇 1号墳墳頂部は南北・東西畦の土層断面図を作成し、畦を除去。2号墳は見透断面図を作成。併行して各埋葬時の閉塞石の選別。周溝墓は南主体部の掘削、精査。西側周溝を掘削。
- 9月12日(金) 晴時々曇 1号墳墳頂部の礫を検出。2号墳は墓道から開口部の平面図、東西縦断面図、南北横断面図を作成し、墓道内の礫を除去。1号周溝墓は南・北主体部の土層断面図を作成。西側周溝を掘削。
- 9月16日(火) 雨のち晴 降雨のため現地での作業を中止。
- 9月17日(水) 雨のち曇 降雨のため現地での作業を中止。
- 9月18日(木) 晴時々曇 1号墳礫櫛を検出。午後には東側がほぼ完全に検出し、平面図を作成。2号墳は写真撮影終了後、閉塞石の縦断面図を作成しながら除去。
- 9月19日(金) 晴 1号墳礫櫛を検出。平面図を作成。2号墳は天井石の平面図を作成。閉塞石を除去しながら断面図を作成。追葬時の閉塞石前面から炭化物を検出。
- 9月22日(月) 晴のち曇 1号墳礫櫛平面図を作成。主体部上面より細根系鉄鏝が出土。2号墳は2次埋葬時の閉塞石を除去し断面図を作成。開口部付近の石室側壁の見透断面図を作成。
- 9月24日(水) 晴のち曇 1号墳礫櫛平面図を作成。主軸沿いを掘削、礫が直線的に並び棺との境界を確認。2号墳は開口部の図面が全て終了。閉塞石・側壁を解体し内部を掘削。周溝墓は両主体部の平面図を作成。
- 9月25日(木) 曇 1号墳礫櫛平面図を作成。2号墳は開口部付近の左側壁の転落石を除去。周溝墓は主体部および周溝西側畦の写真撮影。
- 9月26日(金) 曇 1・2号墳の雨よけを作成。午後より1・2号墳の各図面を作成。
- 9月29日(月) 晴 1号墳礫櫛平面図を作成。併行して木棺推定部を掘削。2号墳の墳丘土層断面図を作成。天井石は

3石目以降も東側に落ち込んでおり左側壁が倒壊している。

- 9月30日（火） 晴 1号墳礫床平面図を作成。床面より鉄鏝が10個体以上集中して出土。2号墳は西壁見透断面図が完成。3号墳の主体部土層断面図の補足。
- 10月1日（水） 晴時々曇 1号墳は礫床平面図の作成と検出状況の写真撮影。2号墳天井石上層盛土の分層と割り付け。
- 10月2日（木） 曇のち雨 1号墳は礫床平面図の補足。夕方よりⅠ・Ⅲ区を一部掘削。下層からも礫を検出。2号墳は天井石を検出。開口部から7石目まで露出。墳丘西側より中世墳墓（SK03）を検出。小刀・山茶碗・小皿などを伴う。3号墳は主体部横断面の土層断面図を作成。
- 10月3日（金） 曇のち晴 1号墳礫床は埋土を除去し床面まで掘削。鉄刀・鉄鏝・土器片を検出。2号墳は天井石を検出。墓道から周溝部の平面図を作成。3号墳は主体部平面図と見透断面図を作成。土坑3の図面を作成。
- 10月6日（月） 晴 1号墳礫床は埋土断面図作成後、畦を除去。底部全面より礫床を検出。2号墳は墳丘土層断面図を作成。土坑3（中世墳墓）は図面作成後、完掘。本日より2号周溝墓の掘削を開始。
- 10月7日（火） 曇一時雨 1号墳の礫床を検出。2号墳天井石を検出。2号周溝墓を掘削。
- 10月8日（水） 晴 1号墳礫床の木棺推定部完掘後、平面図および見透断面図を作成。2号周溝墓を掘削。周溝・主体部を検出。調査区南東隅から弧状に巡る溝を検出（後日4号墳と判明）。
- 10月9日（木） 曇 1号墳礫床の見透断面図を作成。外側の礫は平面的に並ぶが、南西側小口では規則性を見出せない。
- 10月13日（月） 晴 1号墳礫床は見透断面図を作成。2号墳墳丘土層断面図を作成。
- 10月14日（火） 晴 調査区遠景や竪穴住居跡などの写真撮影。2号墳土層断面図を作成。
- 10月15日（水） 快晴 村松家墓塔群の実測。
- 10月16日（木） 晴のち曇 F地区の空撮。村松家墓塔群の実測。
- 10月17日（金） 晴 午前中、村松家墓塔群の実測。午後より2号墳天井石を検出。併行して墳丘土層断面図の注記。
- 10月20日（月） 晴 1号墳礫床を一部除去。2号墳天井石上部墳丘の分層。村松家墓塔群石灯籠と宝篋印塔笠部の実測。
- 10月21日（火） 晴 1号墳礫床の両小口見通し断面図を作成。墓域外の状況を把握するため中軸上にトレンチを設定し掘削。2号墳天井石上部墳丘の土層断面図を作成。
- 10月22日（水） 晴時々曇 1号墳礫床の図面を作成し礫を除去。2号墳は盛土土層断面図の注記。1号竪穴住居跡は下層部土層断面図の注記。
- 10月23日（木） 晴 1号墳礫床は見透断面図の作成し礫を除去。2号墳は右側壁を検出。
- 10月24日（金） 晴 1号墳礫床は見透断面図を作成。礫床平面図を作成。礫床以外の礫を除去。
- 10月27日（月） 曇時々晴 1号墳礫床は礫床の平面図を作成。併行して礫床以外の礫を除去。
- 10月28日（火） 晴 1号墳礫床を清掃し写真撮影。2号墳は天井石がほぼ完全に露出し、検出状況平面図を作成。
- 10月29日（水） 晴 1号墳礫床は礫が規則的に並んでいる部分の確認。2号墳は重機により天井石を奥壁側から除去。天井石は別の場所に仮置きし、平面図・横断面図・縦断面図を作成。これを元に天井石復元図を作成。
- 10月30日（木） 晴 1号墳礫床平面図の補足。2号墳は西側壁展開図作成用割り付け。併行して石室内埋土を除去。3号墳は墳丘下層遺構を検出するため東西畦を残して掘削し、土層断面図を作成。下層から溝2を確認。
- 10月31日（金） 晴 1号墳礫床の補足実測。2号墳は側壁の実測および石室内埋土の土層断面図を作成。併行して石室内埋土を除去。2号墳南側の谷状地形を掘削。
- 11月4日（火） 晴 1号墳礫床の写真撮影。礫床を除去。2号墳は右側壁の見通し断面図を作成。石室内埋土を除去。
- 11月5日（水） 曇のち晴 1号墳礫床を除去。2号墳天井石縦・横断面図を作成。石室内埋土を除去。
- 11月6日（木） 晴 1号墳は主軸・中軸にかかる部分の礫床断面図を作成。併行して礫床を除去。2号墳は石室内埋土を除去し床石を検出。床面から多数の遺物が出土。
- 11月7日（金） 晴 1号墳は重機により北東側墳丘を掘削。下層より古墳築造時の整地層を検出。2号墳は奥壁際や東

寄りから環頭大刀が、玉類は奥壁付近で散在して出土。立柱石付近西側からは多数の須恵器が出土。

- 11月8日(土) 晴 1号墳墳丘土層断面図を作成。
- 11月9日(日) 晴 1号墳墳丘土層断面図を作成。
- 11月10日(月) 晴 1号墳は重機により北西区を掘削し墳丘を半裁。2号墳は立柱石付近東側より玉類が出土。
- 11月11日(火) 晴 1号墳は重機により基盤層まで掘削。基盤層では柱穴状の遺構を検出し、断面で焼土層を確認。2号墳は奥壁側と東側立柱石付近の遺物出土状況平面図を作成した後、取り上げ。奥壁約南側50cmから鈴が出土。玉類が奥壁側および立柱石東側から出土。
- 11月12日(水) 晴 1号墳南北土層断面図の作成および写真撮影。その後重機により墳丘南西側を掘削。2号墳は閉塞石で確認できなかった羨道部の補足実測と遺物出土状況平面図を作成。
- 11月13日(木) 曇 1号墳南北土層断面図を作成。併行して重機により墳丘を掘削。下層遺構が弥生時代の竪穴住居跡であることが判明。午後より2号墳を対象に現地説明会。地元の人々を中心に約200人参加。
- 11月14日(金) 曇のち雨 1号墳は墳丘断面図(下層)を作成。2号墳は奥壁際から出土した6本の刀を取り上げ。
- 11月15日(土) 曇時々雨 1号墳墳丘断面図(下層)を作成。2号墳玄門付近西側の遺物検出状況平面図を作成。奥壁付近の遺物検出状況見透断面図を作成。遺物検出状況部分写真の撮影。
- 11月16日(日) 曇一時雨 2号墳玄門部周辺の遺物検出状況見透断面図を作成。
- 11月17日(月) 雨のち晴 2号墳奥壁周辺の遺物を取り上げ。立柱石付近北側の見透断面図を作成。石室東側の遺物検出状況図を作成後、取り上げ。併行して石室壁体の割り付けと平面プランを作成。
- 11月18日(火) 晴 2号墳石室展開図を作成。玄室出土遺物を取り上げ。立柱石付近北側の甕の破片間から有機物片を検出。何らかの皮製品の可能性が高い。坏蓋の内側にも一部付着。
- 11月19日(水) 晴 2号墳石室展開図を作成。立柱石付近出土遺物取り上げ。床面下層より馬具・鉄鏃出土。
- 11月20日(木) 雨時々曇 2号墳石室展開図を作成。床石平面図を作成。部分的に床石を除去し下層の状況を確認。
- 11月21日(金) 曇一時雨 2号墳石室展開図の作成がほぼ終了し、石室断面図・見透断面図を作成。閉塞石の見透断面図を作成。立柱石付近出土の馬具類取り上げ。2号竪穴住居跡では土層断面図を作成。
- 11月22日(土) 雨のち曇 2号墳床面平面図を作成。
- 11月23日(日) 晴 2号墳床面の清掃。奥壁より順に個別写真を撮影。床面の全景写真を撮影。
- 11月25日(火) 曇 2号墳は床石の除去を始める。遺物が床石直下より均一に出土していることから全面に渡って敷き直している可能性が高い。閉塞石は羨道部側崩落石材を面的に除去。
- 11月26日(水) 雨 2号墳床石を除去。一部の床石裏面に錆が付着しているが遺物が存在しないという石材を確認。この様な床石が複数見られることから、敷き直しの可能性が高い。床石直下からは鉄鏃・玉類などを検出。
- 11月27日(木) 晴 2号墳閉塞石の図面作成を行いながら初葬時の閉塞石まで除去。床石を全て除去。
- 11月28日(金) 曇 2号墳閉塞石を除去後に検出した壁体の補足実測。玄室および立柱石付近から玉類・鉄鏃などが床石直下から出土、図化後取り上げ。基盤層まで掘削・清掃し、石室内完掘写真の撮影。盛土下層の補足実測。
- 12月1日(月) 曇一時雨 2号墳墳丘東南部土層断面の補足実測。墓壇の輪郭を確認。羨道部壁体を基底石まで除去。
- 12月2日(火) 曇 2号墳墓壇埋土を掘削。立柱石と奥壁の据え付け穴検出。墓壇と石室の写真撮影。
- 12月3日(水) 晴 2号墳は墓壇および石室の平・断面図を作成。墳丘東西断面の土層図面を作成。
- 12月4日(木) 晴 2号墳西側壁基底石を解体。重機によって北半分の墳丘を除去。墓壇の一回り外側の羨門付近から3対、奥壁北側から2対のピットを検出。
- 12月5日(金) 晴 2号墳東側壁基底石を解体。石室基底石平・断面図を作成。奥壁裏込め土層断面図を作成。
- 12月6日(土) 快晴 2号墳石室基底石平面図を作成。石室基底石を除去。墓壇完掘状況写真撮影。墓壇完掘状況平面図を作成。本日にて現地での調査を終了する(海邊)。

D 春岡古墳群 A 1 号墳〔F 地区 1 号墳〕 (第107図)

a 位置

1 号墳は F 地区のほぼ中央に立地する。F 地区で検出した 4 基の古墳中では最も高所に位置し、標高 50.00m～55.00m の尾根上鞍部に築造されている。墳丘の南西から北西方向に立つと、眼下に平野が広がり、南北へ流れる太田川や、磐田原台地を望むことができる。立地地点は、微地形的に見ると周辺より基盤層が隆起している上、明らかに人工的な隆起が確認できた。周辺地形をみると立地する尾根自体は東側から派生し、当古墳付近を分岐点とし、さらに東方および北方に派生する。西方に延びる尾根上には 3 号墳が、北方に派生した尾根上には 1 号方形周溝墓が立地している（海邊）。

b 墳丘 (第107・108図)

調査前、墳頂部には祠があり不整な円形に削平されていたが、測量図（第107図）では、標高 49.50 m～50.25m にかけて等高線が円周状に巡ることが読み取れる。また、墳丘裾部は北側が流入土によって埋没し、また東側および南側は削平されており、僅かに墳丘南西側に立地する 3 号墳との間から北西側の標高 50.25m 付近で等高線が弧状に巡るのを確認できるのみであった。

墳丘盛土の残存高は墳頂部西側で約 2.0m、墳頂部東側で約 1.6m を測る。墳丘盛土が残存している範囲は、主軸上で約 6.4m、中軸上で約 6.9m を測り、平面楕円形を呈する。裾部は、第 3 号墳と接する南西側には深さ 2.2m の明瞭な周溝が穿たれている。北側も深さ 1.0m と浅いながらも周溝が確認できた。東側および南側では削平を受けていたため、裾部はかなり内側に入り込んでいる。墳丘裾部の基盤層はいずれも墳丘の傾斜に沿うように整形しており、墳丘を区画するために若干の掘り割りが行われていた。

墳丘規模は直径 24.0m を測るが、後述するように、盛土を行う範囲は直径 18.0m の範囲に限定され、自然地形を利用することでより大型の墳丘に見えるように意識している。

また調査前には、墳丘北側の標高 51.50m 付近に幅 0.5m のテラス状平坦面が認められた。この平坦面は墳頂部にあった祠への登り道の一部となっており、また他方向には明瞭な平坦面が確認出来なかったため、当初は後世の改変と理解していた。しかし、腐植土および墳丘流出土を除去した段階で全方向幅 0.3m 前後平坦面が確認でき、またこの標高が墓壙底部標高とほぼ一致し、盛土の単位の境界に該当することから、2 段築成の墳丘であることが確認できた。

土層の観察によると、墳丘の構築手順は以下の通りとなる。①まず旧表土面を平らに整形する（第 108 図 36 および 50 上面）。②次に、墳丘中心部に直径 3.8m、高さ 0.2m のレンズ状の盛土を行い（第 108 図 41～44 および 35・69～71・96）、当該盛土を基点として、墳丘中央へ向かって盛土を行い、旧地表面から約 0.70m の高さまで盛ってその上面を平坦にする。③次に墳丘中心部に直径 6.0m、高さ 0.65～0.8m の台形状の盛土（所謂「小丘」）〔白澤 2002〕を行う（第 108 図 60～66・72・78～79 および、9・10～11・13・15～16・18 および、14～16・18～28 および、141～145）。この際、台形の下底は、後に構築される主体部墓壙底面の高さにはほぼ対応する。一方、台形の上底は、墓壙掘削開始面の高さに対応している。④先の台形状の盛土を中心に、墳丘中央部に向かって盛土を行い、台形上底の高さに揃えた平坦面をつくる。当該面は、墳丘の項目で記述したように、二段築成の一段目に対応する。⑤墓壙を穿ち礫層を構築する。⑥礫層を黄橙色土（第 108 図 109・113・135）で被覆した後、鉄刀を墓壙上面に埋納する。⑦その後上部へ更に 0.65m 盛土を行い、墳丘を完成させる。

以上、旧表土面から墓壙底面付近までの盛土までを第 1 工程、墓壙掘削開始面上までの盛土を第 2 工程、墓壙上端から墳頂部までの盛土を第 3 工程として大きく捉えることができ、各工程間の盛土高は 0.7m 前後と一定している。（海邊）。

c 墳丘に伴う遺物（礫礮上層出土遺物）（第109図）

墳頂部の墳丘盛土中より鉄刀が1振出土した（第109図）。平面的な位置関係では、墓壙上層のやや北側に該当する。鉄刀は墓壙主軸に沿って埋納されておらず、鋒はほぼ真西に向けており、真東西を意識して埋納している。垂直的な位置関係では、残存墳丘上面から約0.4m下部、墓壙の肩より上部へ0.3mの墳丘盛土中からの出土である。垂直的な位置は、墓壙上面を被覆している黄橙色土（第108図109・113・135）上に該当する。鉄刀に対応する掘り方が確認できないことから、鉄刀は主体部が塞がれた後直接墳丘上に据えられ、更に上層の墳丘が盛られたと推定する。他に共伴遺物は認められない。その他、墳丘上面より掘削された土壌中より須恵器提瓶の破片が出土している。また、墳丘盛土中から弥生土器片が出土した。後述するように下層からは弥生時代の遺構が確認されており、これらの遺物は墳丘築造時の混入と考える（海邊）。

d 周溝（第103図）

墳丘北側から南西側にかけて平面が歪な弧状に巡る周溝を検出した。周溝は南西側では断面が幅広い「V」の字形を呈しているが、北西側に進むにつれ断面が「U」の字形になり、北側では断面レンズ状となり消滅する。北側から南西側までしか周溝の存在が確認できず、築造当初も谷側部分には明確な周溝が掘削されなかった可能性が高い。平野から見えない箇所については全く無かったか、もしくはあったとしても墳丘裾を明示する程度の浅いものであったと推測する。

深さは南西側で基盤層から2.0m、最大幅3.2mを測る。南西側では3号墳と周溝を共有するが、埋土の状況などからは先後関係は把握できなかった。但し周溝が3号墳を中心に弧を描いていることから、3号墳築造時に当初存在していた1号墳の周溝を改修して共有したと考える。このことから3号墳が後出すると推測する。埋土はその大部分が1号墳墳丘流出土であるが、一部は3号墳側からの流出土である。土層断面を検討すると、埋土は何層にも細分が可能であり、何段階にも渡って徐々に埋没したと推測する。なお断面観察から2号墳のように再掘削などをした痕跡は確認できなかった（海邊）。

e 礫礮検出状況（第110図）

礫礮上面を覆う黄橙色土を除去すると、平面が隅円方形を呈する長軸約4.7m、短軸約2.2mを測る礫礮を検出した（第110図）。垂直的な位置関係では、墳丘上面から約0.7m下層、平面的には墳頂部平坦面ほぼ中央部に該当する。礫礮の主軸は磁北に対して約60°東偏する。礫は墓壙壁面より高さ約0.6～0.7mまで積み上げているが、中心部に向って内湾しながら崩落していた（『遺構写真図版編』図版87）。

墓壙中央部には長辺3.0m、短辺0.9mを測る礫が充填されてない箇所が検出された。この部分は木棺の痕跡と推測できる。木棺腐食後の土圧により平面撥状に歪んでいるが、本来は木棺の形態に沿うように平面長方形であったと推測できる。

礫礮上面および南側木棺長側板直上付近から鉄鏃及び種別不明の鉄製品が出土した（第110図111～112）。攪乱を受けていないため礫礮上部に埋置されていた可能性が高い。また、南西小口付近の棺内埋土上面より土器片を1点検出したが（第110図）、細片であり副葬品として埋置されたものではなく、土中に他時期の遺物が偶然混入した可能性が高い（海邊）。

f 礫礮構造（第111図）

主体部は棺を囲壳するというその構造から、礫礮と認識できる。ほぼ垂直に立ち上がる急角度の墓壙法面と木棺との間に生ずる幅0.5～0.6mの空間には、直径10～30cmの河原石を棺の上面までほぼ隙間

無く詰め込んでいる。その礫の推定総重量はおよそ8tを量る。礫は肉眼観察による風化度から、古墳の立地する丘陵地の礫層からのものではなく、多くは周辺域の河床より採取した可能性が高い。

礫槨の規模は前述のように全長約4.7m、幅約2.2m、深さ0.7mを測る。墓壙中央部には礫は認められず、全長約3.0m、幅約0.9m、推定高0.5mを測る木棺の存在が想定できる。

主体部の主軸は磁北より60°東偏しており、槨構築石材が西側よりも高く積み上げた状況を確認できた。このことは後述するように、墓壙の基底面の縦断面が西端を最も深く、東端にむけて緩やかな傾斜をつけて次第に浅く掘り込むことに起因するものと考えられる。

槨構築段階の内、礫床を敷く段階において、内法に接する箇所第1・2段目に、楕円形を呈する比較的大きな長方形の礫の長辺を、直線的に配置する状況が認められた。また内法プランの四隅には、礫の長軸部分を斜めにして配置していることが確認できた(第111・112図)。さらに、これらの礫と床石を含む上下の礫との間隙には埋土とは異なる粘質土が充填されていた。

以上のことをふまえて、礫槨の構築方法を復元する。まず礫床を敷設した後に木棺の底板の据付けを行う。その後木棺の側板を立てるために、四方に添う形で比較的大きな礫の長辺を直線的に配し、これに加えて粘質土で木棺の側板を固定する。更に、墓壙法面と木棺との間隙に直径10~20cm大の礫を充填する。以上のように木棺は、槨構造の構築に伴って暫時組み立てられたものであると言える。

なお、槨を構成する側壁部分には明確な目地の存在を確認できなかったことから、木棺を据えた後は先述のように計画的には礫を充填していない可能性が高い。但し各々の礫の重複関係では、東側の礫が西側の礫の下に位置することが多いことから、構築の際に東側から充填していた可能性が高い。

また、棺が腐朽した後に落ち込んだ礫はほぼ側辺のものに限定されることや、礫床も一定の厚さで敷設されることなどから、棺の上面には礫は充填せず、土もしくは板材など他の有機質によって覆われた後、墳丘盛土が行われたと推測する(赤塚・正岡)。

g 礫槨床面(第112図)

床面は墓壙底面上に礫を敷設する、所謂「礫床」である。床を構成する石材は槨と同様、10~20cm大の川原石を墓壙底面全体に用いている(『遺構写真図版編』図版90)。礫床敷設の際にはある一定の区画を設けて、その間に礫を充填した可能性が指摘できる。その敷設順序は主軸ラインよりやや南東側に1~3列、短軸ライン上に1列、小口面にやや楕円状に礫を配置している。墓壙底面から礫床の上面までの高さは約0.2mを測り、礫を1ないしは2段積み上げた高さである。また礫の重複関係から、上記の単位をもとに北側から南側に向けて敷かれていく様相が確認できた。なおこの段階でもすでに床面は墓壙の傾斜に沿った形で西側に緩やかな傾斜をつけた状態で敷設されている(赤塚・正岡)。

h 礫槨出土遺物(第111図)

床面からは、鉄鏃・鉄刀・鉄剣・袋状鉄斧などの鉄製品が出土した(第111図)。礫槨に伴う副葬品は比較的小さく、種類も武器類と、工具類に限られる。鉄製品は出土位置にまとまりがあり、鉄刀や鉄剣、鉄斧が集中する東側と、中央部に散在する鉄鏃の2箇所に大別できる。

鉄刀は鋒を西方向に向け、袋状鉄斧、鉄剣は刃部および鋒を南西に向けている。鉄剣・鉄刀は共に主体部の主軸に平行し、北側よりの位置から出土した。主体部中央部に位置するものは鉄鏃のみである。

遺物の出土高を観察すると、礫槨床面に接した遺物(第111図114・128~129・131)と、床面から5cm以上の間層が入り、遊離しているものがある(第111図124~127・130)。こうした状況から副葬品は、木棺棺底付近と、遺体上部もしくは棺蓋上に埋置されたものの二者に大別できる(赤塚・正岡)。

i 墓墳（第112図）

墓墳の平面形はやや不整な長方形を呈している。規模は主軸上で全長4.7m、最大幅2.2m、深さは最も深い箇所0.7m、最も浅い箇所0.6mを測る。墓墳の底面は前述のように西側へ向かって緩やかに傾斜している。墓墳内の埋土は棺が腐朽した際に落ち込んだ墳丘構築盛土であり、4層に大別できる（第110図）（正岡）。

E 春岡古墳群A 2号墳〔F地区2号墳〕（第113図）

a 位置

2号墳は調査区の北西側に位置し、標高42.0m～44.0mの尾根上鞍部に立地している。この尾根は1号墳や1号方形周溝墓が立地する尾根から西側へ派生した小尾根である。2号墳は丘尾を切断し墳丘を区画してその上部に盛土をして構築している。この尾根状地形はそのまま西側へ続いており、後述する掘り割りから急傾斜になり平野部へ下る。墳丘の南側は1・3号墳が立地する尾根との間が谷地形となっており、この谷へ2号墳の墓道は伸びている。墳丘北側も急斜面になっており、平野部から見た2号墳は尾根が見える北側から南西側にかけての広範囲から望むことができる（海邊）。

b 墳丘（第113図）

測量図（第103図）では、標高44.0m～45.0mにかけて等高線が円周状に巡ることが読み取れる。但し調査前の段階での墳丘裾部は東側および南側が流入土によって埋没し、また西側が削平され崖状に改変されていた。墳丘は平面が不整な円形を呈し、盛土の残存高は墳丘北側で2.2m、東側で2.0m、西側で2.4mを測る。墳丘盛土が残存している範囲は、主軸上で13.2m、中軸上で11.4m（周溝再掘削後は13.1m）を測る。裾部は東側において尾根の丘尾を円弧状に切断し、幅2.4m以上、深さ1.0mの周溝を穿っている。この周溝は北側まで弧状に続いており、そのまま斜面の途中で消滅する。南側は前述の谷状地形に合流している。墳丘裾の基盤層は墳丘の傾斜に沿うように整形されており、墳丘を区画するために若干の削り出しが行われていた。以上のことから、築造当初の墳丘規模は直径13.2m、残存高2.4mの円墳と推定できる。但し墳丘裾部東側では、当初構築された周溝内に土の堆積が進行した段階で、1.0m外側の位置を再掘削している状況が確認できており（第116図）、当該期には墳丘の東側裾は、1.0m拡張されている。

また墳丘盛土西側、墳丘中心部より約22m付近の尾根上を精査したところ、丘陵派生方向に直角に伸びる全長3.4m、幅1.8m、深さ0.5mの直線的な溝を確認した。更に尾根鞍部の基盤層を削り出した傾斜変換点を丘陵北側の一部で確認した。

一方、前方部と仮定した部分は全面に基盤層が露出し、現況では盛土は全く確認できない。唯一、第113図に示したようにSK3を墳丘西側より検出している。この遺構は後述するように中世墳墓であるが、検出時の遺構の深さは0.15mと浅く、上部を削平されている可能性が高い。こうした状況を踏まえると、少なくともSK3が築造された時期には、現況より数十cm高く土が存在したことになる（但し、当該土が盛土か、堆積土かの断定はできない）。以上を総合すると、前方後円墳という墳形も予想できるものの、積極的な根拠に欠ける。

土器集中箇所（第113図）

墳丘南西裾部より須恵器・土師器を交えた土器を1.3×2.0mの範囲で検出した。完形品を多く含むとともに、墳丘盛土内より出土していることから、2号墳築造時に関わる資料であることは明らかである。裾部であることから、明確な層序は提示できないが、出土レベルからすると、以下で述べる墳丘

構築順序の内の「③段階」にあたり、墳丘の基礎部構築段階に土器を墳丘内へ埋めている。

墳丘は石室主軸線および中軸線において土層断面観察を行った（第114図）。その結果、墳丘盛土土層は構築順に大きく分けて5段階に大別できる。以下、墳丘横断面の土層観察を元に構築過程を明示する。

①まず、旧表土面を平らに整地する（第114図141層）。②次に、整地した旧表土面から墓壇を穿つ。③墳丘西側から北側にかけて墓壇脇に高さ0.65m、幅3.3m以上の「土手状盛土」を行う（第114図123～124・129・132～133・137～139・140および56・58～59・65～66・69・72）④次に、「土手状盛土」の内側へ石室壁体の構築にあわせて盛土を行う。⑤壁面の構築が最上部に達した段階で、天井石を高架させるために平坦面を形成する。⑥天井石を被覆後、高さ0.6～0.7mの盛土（各工程の上面は平坦）を2工程行い、墳丘を完成させる（海邊）。

c 周溝（第113・116図）

周溝は後円部墳丘北側から南西側の開口部にかけて円弧上に巡る。但し、南東側から南側にかけては墳丘盛土よりも外側で基盤層を掘削しており、南西側で墓道と合流し谷状地形へと続く。墳丘盛土端から周溝が直接穿たれている墳丘東側では、前述の通り再掘削が行なわれている。当初の周溝は内側の傾斜は直線的で、底面は平坦であることから、断面形は逆台形をなしていたと推測できる。なお、外側の立ち上がりは周溝の再掘削時に削平されたため、本来の形状は不明である。

再掘削した周溝は本来の周溝の外側約1.0mに穿たれている。再掘削された周溝は幅2.4m、深さ0.9mを測り、断面が幅広い「V」の字状を呈する。墳丘南東側においては更に3.5mと広がる。墳丘南側の墓道合流地点では同様であるが、合流後の谷状地形では断面が半円形になる。

また、北側周溝より鉄斧が1点出土しているが（第113図）、堆積土上層より検出しており、周溝内での遺構の痕跡は確認できなかったことから、原位置は保っていないと判断する（海邊）。

d 墓道（第120図）

前庭部は、石室羨門部から基盤層を断面「U」の字状に掘削している（第120図）。平面的には中央付近でやや広がるものの、ほぼ同一幅で南西側に若干弧を描きながら周溝と合流している。主軸部分で羨門部から周溝合流地点まで長さ6.9m、幅は羨門部付近で1.45m、合流部付近で幅1.4mを測る。

羨門部から約0.6m～3.8m付近に直径5cm～40cmの石材が散乱していた。前庭部底部から約0.20～0.40m上層であることや、この石材が流入土中にあることから、初葬時に伴うものではない。但し、石材は閉塞石や石室石材と同質であり、形状も閉塞石で用いられている石材と類似していることから、後世の攪乱というよりはむしろ追葬時に伴う閉塞石の掻き出しと考える。

第114図示した閉塞石外側の115・116層上面と、14・112・114層上面に土質・色調の異なる土層の変化が観察でき、各々の面に石材が散乱することから、最低でも二時期の追葬面が確認できる（海邊）。

e 石室検出状況

墳頂部には調査前から若干の窪みがあり、当初は竪穴状の遺構を想定して調査を行った。腐植土を除去したところ土坑状の窪みを検出し完掘したが、埋土の状況などから主体部とは判断できなかった。その後、降雨時に墳丘南側から湧水を確認し掘削したところ羨門部を検出し、この箇所が主体部の墓道であることがわかった。よって主体部は南西方向に主軸をもつ横穴式石室と判明した。

当初は墓道側からの調査を試みたが、左側壁が大きく孕んでおり天井石も不安定な状況であったこと

から羨門部については図化した後に解体することになり、石室全体の調査については上層から調査を行うこととなった。石室上層の墳丘盛土は、石室主軸線に沿って半裁し層位を観察しながら掘削を行った。

石室中軸線に沿った墳丘横断面の検討で左側壁直上の層位が斜めに落ち込んでおり、石材の採取を主目的とした行為によって壁面が崩壊したと推測できた。実際、天井石検出時には羨門部側の2石と奥壁側の2石のみが原位置を保っており、残りの天井石8石はすべて左側壁側に落ち込んで検出された（『遺構写真図版編』図版93）（海邊）。

f 石室閉塞石〔第1次・第2次〕（第118・119図）

閉塞石は石室羨門部付近で検出された（第118・119図）。大きさは直径10cm前後の円礫と直径30cm前後の扁平なものに大別することができる。閉塞石はほぼ原位置を保っており、状況の復元が可能である。

それによると閉塞石は大振りな扁平石材を用いて3段にわたって階段状に構築した第1次閉塞石と、小振りの石材を使用し第1次閉塞石を利用しつつ、乱雑に石材を投入した第2次閉塞石に大別できる。第1次と第2次閉塞石の間には若干の間層が確認でき、一定の時期差が看取できる。いずれも高さは床面より0.8mを測り、天井石とは1.0mの隙間がある（海邊）。

g 石室羨道（第117図）

羨道部は左側壁の立柱石から開口部側1.0mまでは、壁体が崩壊していたため基底石しか残存していなかったものの、左側壁の大部分と右側壁は天井石付近まで遺存していた（第117図）。

右側羨道は基底石が計4石で構成されている。立柱石からの長さは2.8mを測る。前述のとおり床面から天井石まで完存しており、高さは1.5mを測る。基底石のうち3石は最大面を設置面として横位に据えられていた。1石のみが縦位に据えられていたが、この石材は最も小振りなもので基底石間を充填するように据えられていた。基底石間の隙間には小石材が充填されていた。

基底石上面の高さは、標高43.9mにほぼ揃えられている。壁体の目地は他に標高44.3mの高さと、奥壁基底石上面に対応する標高44.9mの3箇所を確認できる（第ii図）。

壁体はほぼ全てが最大面を設置面とする横位に用いられている。石材は基底石が最も大振りな長辺0.7～1.0m前後のものを用いており、立柱石上面までは比較的大振りな石材を使用している。しかし、更に上部では立柱石より南側0.5m付近までは同等の石材を使用しているが、それより羨門側では小振りな長辺0.3m前後の石材を用いており、意図的な石材の選択がなされている。

壁体の重複関係を検討すると、基底石から上段までいずれも玄門側から羨門側に積まれており、玄門立柱石を基準にして開口部に向かって壁体を構築したことは明らかである。

また、最も墓道側の基底石から上二段目の石材を基点として、奥壁側へ斜め45度の角度で目地が通る箇所がみられる（第ii図）。この箇所の平面的な位置関係で第2次閉塞石の最も高い部分と対応することから、追葬時の部分的な補修の可能性が高い。

左側羨道は基底石が計7石で構成される。立柱石からの長さは2.8mを測り、右側壁とほぼ同様である。床面から天井石までは大部分が遺存しているものの、壁体が崩落した部分や内側に膨らんでいる箇所もあり、右側壁と比較して残存状況は不良である。遺存している部分においては、床面から天井石までの高さは1.5mを測る。基底石のうち5石は最大面を設置面として横位に据えられていた。1石のみが縦位に据えられていたが、この石材は基底石間を充填するような状況で据えられていた。基底石間の隙間には右側羨道同様、小石材が充填されていた。

基底石上面の高さは、右側羨道と同様に標高43.8mにほぼ揃えられている。しかし、基底石以外の石

材の残存状況が悪いため、壁体の構築の詳細は不明である。

石材は基底石が最も大振りな長辺0.5m前後のものをを用いており、立柱石半ばまでは大振りな石材を使用している。しかしその上側では、大振りな石材と小振りな長辺0.3～0.4m前後の石材が混在する。

壁体の重複関係を検討すると、基底石から上段までいずれも玄門側から羨門側に積まれており、玄門立柱石を基準にして開口部に向かって壁体を構築したことは明らかである。

また右側壁と同様に、最も墓道側の基底石上部から、奥壁側へ斜め45度の角度で目地が通る箇所があり、追葬時の部分的な補修の可能性が高い（海邊）。

h 石室玄門

奥壁より約5.2m南側に左右の立柱石が遺存していた。羨門部からは約3.0m北側に位置している。いずれも他の側壁石材とは大きさも形状も異なっており、意図的な選択がなされている。左右の立柱石の形状は大きく異なっている。平面的には左右とも立柱石を境にして羨道部が狭まっており、このことから所謂「擬似両袖式」の横穴式石室と考える。

右側立柱石は高さ0.68m、幅0.6mを測る。石材の平滑な部分を選択し、壁面として使用していた。平面的には若干突出している。立柱石上部の石材は他の壁体と形状、大きさともに差異は認められず、特に袖部を意識していたとは考えにくい。

左側立柱石は検出当初、周辺の壁体崩壊に伴い内側に倒れていた。原位置を留めているのが確実であったため、垂直方向に復元した。それによると高さ1.28m、幅0.4mを測り、右側立柱石よりもかなり高さがある。石材の平滑な部分を選択し、壁面として使用していた。（海邊）。

i 石室玄室（第117図）

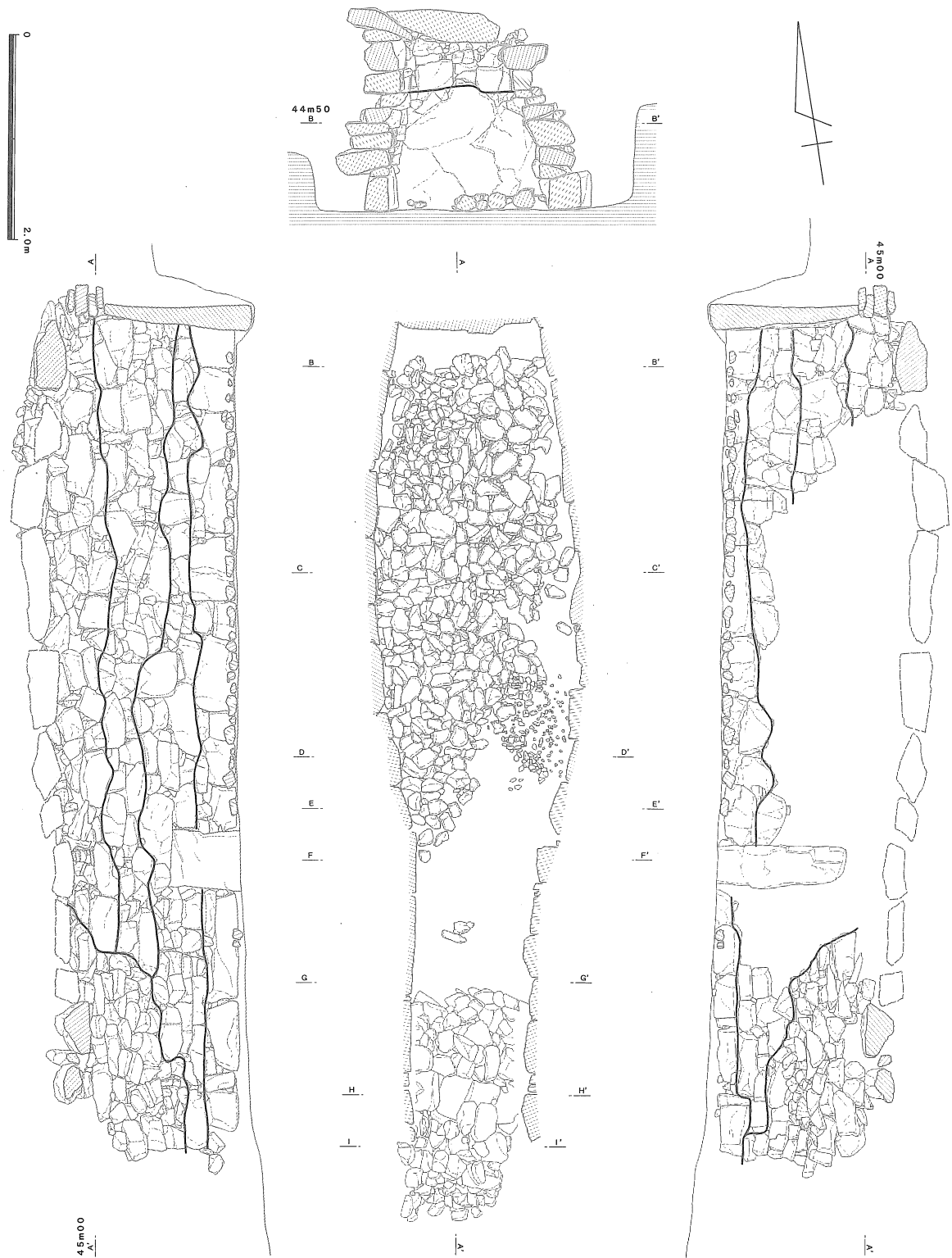
玄室壁体は右側壁が完存していたが、左側壁は奥壁側の一部を除いて、その大部分が崩落していた。右側壁は立柱石から北側3.5mまでの6石分は基底石のみが2段目まで残存していた。

石材は肉眼観察によると、砂岩が中心で、材質による用途分けなどの意図は確認できない。なお砂岩は、北西方向約800mの位置（現況）を南北方向へ流れる太田川の上流で採取できる。

右側壁は基底石が計10石で構成されている。奥壁から立柱石までの長さは4.95mを測る。床面から天井まで完存しており、高さは最も高い石室中軸付近で1.75m、奥壁側で1.6mを測る。壁体はおおむね8段積みである。基底石はその全てが最大面を設置面として横位に据えられていた。また基底石間の隙間には、小石材が充填されていた。基底石上面の高さは、標高44.1mにほぼ揃えられている。この高さが確保できている石材以外はさらに上部に石材を積んで最初の目地を通して。壁体の目地は他に標高44.3mの高さと、奥壁基底石上面に対応する標高44.9mの3箇所を確認でき、立柱石上面よりも上側の壁体は羨道と同時に構築されたと推測できる。壁体はほぼすべてが最大面を設置面とする横位に使用されている。

石材は基底石が最も大振りな長辺0.5～0.7m前後のものをを用いており、立柱石上面までは比較的大振りな石材を使用している。0.3～0.4m前後の小振りな石材は傾向として壁体上部に使用しており、意図的な石材の選択がなされている。壁体の重複関係を検討すると、基底石から上段までいずれも奥壁側から羨門側に積まれており、奥壁を基準にして立柱石に向かって壁体を構築したことは明らかである。

左側壁は基底石が計10石で構成されている。奥壁から立柱石までの長さは5.08mを測る。床面から天井まで完存しているのは奥壁側約0.8mのみである。立柱石から6石目までは基底石もしくは2段



第 ii 図 春岡古墳群 A 2 号墳・石室壁面構築過程模式図

分しか残存していなかった。高さは奥壁側で1.64mを測る。壁体はおおむね8段積みである。基底石はその全てが最大面を設置面として横位に据えられていた。また基底石間の隙間には、小石材が充填されていた。基底石上面の高さは標高43.9mにほぼ揃えられている。この高さが確保できている石材以外はさらに上部に石材を積んで最初の目地を通していている。壁体の目地は他にも標高44.3mの高さと、奥壁基底石上面に対応する標高44.9mの2箇所を確認できる。壁体はほぼすべてが最大面を設置面とする横位に用いられている。

石材は基底石が最も大振りな0.5～0.6m前後のものを用いており、立柱石上面までは比較的大振りな石材を使用している。小振りな0.3m前後の石材は壁体上部に使用する傾向が強く、意図的な石材の選択がなされている。残存部を観察する限り、基底石から上段までいずれも奥壁側から羨門側に積まれており、奥壁を基準に立柱石に向かって壁体を構築したと推測できる。なお、この地域に類例のある壁面に赤彩などの痕跡は確認できなかった（海邊）。

j 石室奥壁（第117図）

奥壁は縦置きにした板状の石材1石を据え基底石に使用していた。基底石は高さ1.3m、幅1.55m、厚さ0.25mを測る。石材の平滑な部分を選択し壁面として使用していた。基底石上面は尖頭状になっているため小振りな石材を横位に据え付けて安定を図っており、一部の石材は小口側を壁面に使用している。天井石まではおおむね4段積みで天井石に至っている。基底石から上段までいずれの壁体もほぼ垂直に積まれていた（海邊）。

k 石室天井石（第121図・『遺構写真図版編』図版93）

天井部は前述のとおり、左側壁の大部分が石室内に落ち込んでおり、原位置を保っていたのは羨門部の2石と奥壁側の1石のみである。しかし、左側壁の崩落以外には墳頂部の攪乱坑が天井石に達していただだけで、攪乱をほとんど受けておらず、築造時の状況を復元することができた（第121図）。

これによると、天井石は計12石で構成されている。石材間の隙間を埋めるように全ての天井石の間に小石材を充填している。羨道部上の天井石は長さ0.95m～1.25m、幅0.4m～0.65mを測り、玄室部上の天井石は長さ1.2m～1.9m、幅0.5m～1.3mを測る。羨道幅と玄室幅の差がそのまま天井石の大きさを反映したと言える。

天井石は平滑な面を石室内部に見せるように据えられていた。側壁との垂直的な関係は、大部分が斜めに落ち込んでいたため明確にはしえないが、天井部付近まではほぼ完存していた右側壁を検討する限り、玄室中央部が最も高くなる「円弧状」を呈する。

なお石室天井石上面には、明黄褐色土（第114図34・39～41・63層）を中心とした土が天井石を覆うように厚さ20cmの盛土を行っている。この黄褐色土は、2号墳の立地する基盤層に由来するもので、ち密な土質から防水性を意識した可能性がある（海邊）。

l 石室平面プラン（第117図）

石室は単室構造である（第117図）。玄室主軸は真北より約17°東偏し、南西方向に開口する。石室の平面プランは、奥壁幅と玄門部幅に比して玄室の中央部が広く、玄門付近および奥壁付近になるにつれ玄室幅が縮小し、所謂「胴張り型」の石室プランを示している。玄室最大幅（C-C）は1.9mを測る。石室全体、すなわち奥壁から羨道部入り口までの全長は主軸上で8.2mを測り、この内、玄室長は5.2m、羨道長は3.0mを測る。玄室長と幅の比率は約2.6：1である。

玄門付近には右側壁に高さ0.68m、幅0.6mの石材、左側壁には高さ1.28m、幅0.44mの石材を縦位に据えることで立柱構造を形成する。立柱石間の幅（F-F'）は1.2mを測る。これらの立柱石は玄室奥壁幅が1.3m、羨道部幅が1.2mとほぼ変わらないことに示されるように、玄室および羨道幅と一体化しており、所謂「擬似両袖式石室」の形状を示す。

羨道長は3.0mと、同時期の横穴式石室の例と比較してやや長めの傾向を示しており、その途中において軸が若干西側にずれていく特徴がある（正岡）。

m 石室床面（第Ⅲ図）

1次埋葬（初葬）の床面と、2～4次埋葬（追葬）の床面に大別できる（第117図）。追葬時の床面（第2～4次床面）は、玄室内に長辺0.1～0.3m前後の礫を敷設することで床面を構成している。

一方初葬時の床面（1次床面）は、この床石を調査に際して除去し、墓壇底面上に厚さ1～3cmの置土を確認するとともに、玉類を中心とした遺物を検出したことから、これを第1次床面として認識した。

床石は部分的に粗密があるものの、奥壁周辺と左側壁よりの一部の箇所を除き玄室内のほぼ全域を覆っている。いずれも川原石を用いており、石材はチャート・砂岩などであった。但し各々の石材は混在して敷かれており、石材ごとの規則性は見出すことができなかった。床石の礫の規模を細かく観察すると、奥壁に近い右側壁の箇所と玄門付近の西側壁周辺では、直径5cm大の小礫が極めて密な状態で敷かれている状況が認められた（第117図）。こうした差異は石室内空間利用の違い、すなわち追葬時の空間利用を反映している可能性が高い。

加えて、第2次床面を構成している床石を除去した際に、一部の石材の裏面より鉄錆が付着する礫を計16個確認した（第Ⅲ図）。これらの礫は鉄錆が付着しているものの、その接する箇所もしくは周辺に鉄製品が認められなかった。鉄錆の付着する礫の周辺に鉄製品が認められないということは、埋葬の行われる以前のある段階に鉄製品が副葬されていたことを示唆しており、同時に追葬時に床石の敷き直しが行われていたことを示している。また玄室中央右側壁側から須恵器平瓶が出土したが（第124図217）、この底部には床石は存在しておらず、追葬に際して前段階における副葬品を避けて床石を敷設している。

以上の状況より、初葬に加え、3回以上にわたる追葬行為が想定でき、さらには棺体配置の推定復元が可能である。以下、埋葬段階ごとに詳述する。

1次埋葬（初葬） 初葬時の段階では、基底面を削平した墓壇底面上に厚さ1～3cmの置土を敷いた後に木棺を据える。玉類が集中する（第128図－7図）位置を考慮すれば、奥壁側のやや左側壁寄りに埋葬している。鉄釘を検出していないことから、組み合わせの木棺ないし、板に直接遺体を安置した可能性が高い。棺台の有無は明らかではない。

また、置土上面をそのまま埋葬面として使用していたか、床石を用いていたかは不明である。しかし、先述した鉄錆が礫裏面に付着しているものの分布範囲を見れば、2次埋葬の棺体推定床面範囲内には重複しておらず、意図的に鉄錆の付着した礫の使用を、当該範囲に限って避けていることは明らかである。この点を重視すれば、2次埋葬以前に礫を伴う床面が構築されており、床石上面に鉄製の遺物が副葬されていた可能性が高い。

2次埋葬（追葬） 1次埋葬の棺体推定範囲をほぼ覆うように、全長2.3m、幅0.9mの長方形の範囲に、0.3cm前後の礫を敷設する。前述のように、すでに前段階において床石が敷設されていた可能性があることから、2次埋葬に伴い、その大半を一旦除去し、新たに敷設し直している。敷設に際して、前段階の床石を一部使用するとともに（鉄錆が礫裏面に付着しているもの）、新たに石材を搬入し、床面を構築している。



第Ⅲ図 春岡古墳群A 2号墳・石室内棺体推定範囲図

3次埋葬（追葬） 2次埋葬の棺体推定範囲に平行した右側壁沿いに、全長1.4m、幅0.6mの長方形の範囲に、0.15cm前後の礫を敷設する。先の2次埋葬時に使用した礫に比べ、小規模なものを使用する。

第124図217の平瓶の底面には床石が存在せず、3次埋葬に伴う床石敷設に際して、意図的に避けており、当該須恵器は1次ないし2次埋葬に伴って副葬したと見ることができる。

4次埋葬（追葬） 当段階の追葬は、第128図－9図の玉類の出土状態を重視すると、玄門付近の東半分を利用して埋葬を行った可能性が推定できる。棺台となるべき礫は認められず、直径5～10cm前後の各埋葬段階の中では最も小さな礫を配して埋葬面としており、先の玉類は、この礫の直上より出土した。

なお奥壁から南に0.2m前後の範囲までは床石が敷かれていない。こうした空間は床石の敷設に際して、意図的に敷かなかった可能性が高いが、副葬品を置くための空間として確保したものか、前段階の副葬品がすでに存在したために、避けて配置されたものかについて即断できない（正岡）。

n 石室床面出土遺物（第124～129図）

石室内からは須恵器・馬具・大刀・玉類など多数の遺物が出土した（第124～129図）。各々の遺物は追葬時の二次的移動を除いては、原位置を保っていると考えられる。遺物個々の詳細な説明については来年度刊行予定の『遺物・総括編』に稿を譲り、遺物の出土状況についてのみ記すことにする。但し厳密な意味では上下二層に大別できる床面のうち、1次埋葬床面に伴う一部の遺物を除いて、2～4次埋葬床面との弁別が困難であり、いずれの床面に帰属するか判然としない出土状況のものが多いことから、記述上は1次埋葬床面とそれ以外のものに分けて記述を行う。

1次埋葬床面からは鉄鏃・玉類が出土した（第124図）。これらは調査に際して2次～3次埋葬床面を除去した後に、床石直下ないしは上面に位置する遺物の直下より出土したものである。

鉄鏃は奥壁中央に立てかけていた大刀を取り上げた後に、まとまった形で出土した（第125図－3図）。出土状況より、束のまま副葬されたと考えられる。鋒は束をなす一群が西方向を向けて置かれていることを除いては、大半の鉄製品が東方向に向いている。

玉類は琥珀製勾玉・ガラス製丸玉・小玉・棗玉が多量に出土した。平面的には、奥壁より40～80cmの位置にまとまりがある一方（第127・128－6図）、玄室と羨道の境付近を中心とする範囲に集中する（第128－9図）。また立面的には、床石の上面で確認した一群（2～4次埋葬）と、下面で確認した一群（1次埋葬）に大別できる。こうした、平・立面での位置関係が、埋葬過程を反映していることは、先述したとおりである。

・1次埋葬床面に伴う可能性の高い玉類

第124図281・288・289・290・291 第127図279・280・298・303・304・306・308・309・317・318・321 第128図－6図292・299 第128図－7図307

・2次埋葬床面に伴う可能性の高い玉類

第127図－5図25・27

・3次埋葬床面に伴う可能性の高い玉類

第127図－5図23・24・26・33・72 第128図－6図19・20・21・22・31・32・35

・4次埋葬床面に伴う可能性の高い玉類

第128図－9図1～3・5～13・39～41・97～103

1次埋葬床面以外からは須恵器の他、馬具・鉄刀・鉄鏃などの鉄製品が豊富に出土した（第125・126・127・129図）。これらの遺物は墓壙基底面より約7cm高い位置で出土している。出土した須恵器は坏身、坏蓋、高坏、壺、横瓶などである。大半は玄門部の右側壁付近や、羨道部右側壁付近に集中している。

馬具類は轡・雲珠・杏葉・辻金具などが出土した。轡は奥壁に立て掛けられた鉄刀類の下部より検出した（第126図227）。雲珠・杏葉・辻金具は、羨道部右側壁付近に集中して出土した須恵器（第125図－4図）の下部より検出した（第127図－10図）。この内、雲珠（第127図241）や杏葉（第127図247）を中心に1.1×0.6mの範囲に有機質の残欠が散乱している状況が確認できた。また、第125図236の坏蓋は、正位の状態で検出したが、内面外縁部付近に有機質が付着していたことから、坏蓋設置以前に既に有機質が存在したことになる。

当該地付近は、二足鋌（第125図82・84・238および第127図248・312）を集中して検出しており、鋌の脚部には木質が付着するなど、先の有機質の分布と合わせて、木製鞍や障泥更には木箱や木棺などの存在した可能性がある。

その他には、銀装単鳳環頭大刀が挙げられる（第126図）。これは奥壁に平行して斜位に立てかけられており、計7振の大刀と共に出土した。奥壁に立てかけられていた大刀の内、一振は床面に倒れこんだ状況で検出した。大刀はいずれも鋒を上方に向けている。なおこれらの大刀は前節において記述した奥壁周辺部の床石が途切れる空間に配されていたものである。

これら1次埋葬面以外に属する遺物は、いずれの出土状況も玄室中央部の左側壁寄りの箇所（2次埋葬推定範囲）を避けるようにして埋置される状況から、この位置に追葬時の棺が据えられており、当該期を含む追葬に際して「かたづけ」行為と副葬が行われた可能性が高い（正岡）。

o 石室壁体間出土遺物（第122図）

奥壁基底石の上面から小刀1点が出土した（第122図）。小刀は鋒を奥壁側に向けて、基底石とその上部の石材との間の目地に差し込まれていた。また最も奥壁側の天井石と奥壁の間、やや左側壁側から刀子1点と鉄鏃1点が出土した（第121図）。天井石除去時の出土のため詳細な出土状況は不明である。いずれの遺物も石室構築後に差し込まれた可能性が高い（海邊）。

p 基底石（第122図）

基底石には上部の石材よりも長大な石材を用い、全て横位に据える。奥壁には一石の鏡石を用いる。側壁の基底石は、左側壁に基底石の規模が長辺50～85cmの石材で基底石上面の標高をほぼ揃える形で整然と据える。右側壁は長辺40～70cmの石材を用い、基底石上面の標高はほぼ揃っている（正岡）。

q 墓壇（第122図）

墓壇は墳丘下層の旧表土上面より掘削されている。当墳は東方より伸びる尾根上を利用して墳丘を構築しているため、もともと旧表土上面の標高は、墳丘西側に比べて東側が約0.2m高い。墓壇の掘込みに際しては、傾斜面に合わせて、平坦面を造成している。

墓壇の形状は玄室中央部分に最大幅を有し、羨道部端に至るにつれ幅が縮小していく長大な隅丸長方形を呈している。但し、立柱石より羨道部にかけての部位は玄室部分の幅よりも若干規模が縮小していく程度であり、石室形態に沿う形で掘削されたとはいえない。

墓壇の規模は全長8.8m、玄室部全長5.5m、玄室中央部最大幅3.5m、羨道部全長3.3m、羨道部最大幅3.2mを測る。墓壇はほぼ垂直に掘込まれ、基底面からの深度は西側で0.8m、東側で0.96mを測る。墓壇の底面はほぼ水平であるが、石室開口方向にむけてわずかな傾斜がついている。また墓壇底面には、立柱石と奥壁基底石を据える際に掘込んだ据え付け穴を計3基確認した。この内、西側立柱石の据え付け穴からは、安定を図るために直径20～30cmの円礫が差し込まれている状況を確認した（海邊）。

r 基盤層上の遺構（第123図）

墳丘盛土を完全に除去した段階の旧表土上面を含む基盤層上面において、石室墓壙の他にピットを計9基検出した（第123図）。いずれも墓壙の外側の肩上に位置する。平面的な位置では、墓壙奥壁側の北側、基盤層を削り出している斜面に4基、玄門部分の両肩で2基、前庭部の両肩に3基が穿たれている。前庭部の1基以外は全て石室の主軸方向に直交する形で左右対称になっている。

ピットは平面円形で底部はほぼ平底である。直径は0.5m～0.7mと不揃いである。また、対になる2基の規模にも規則性は認められない。

その機能や性格について詳細は不明であるが、石室の主軸を境に対照に展開することから、本墳に伴う柱穴である可能性が高く、石室を含め古墳築造に際し、何らかの役割を果たしたものとする（海邊）。

F 春岡古墳群A 3号墳〔F地区3号墳〕（第130図）

a 位置

3号墳は1号墳から西へ派生する尾根上に立地しており、1号墳とは周溝を挟んで並列するように位置している（第103図）。墳丘西側と南側は急勾配の斜面地となっているため尾根の先端に立地するようにみえるが、1号墳と比べると、標高は51.0mで比高差は約4.0mと低い位置にあり、1号墳よりも際立つ存在ではない。平野部から見ると小規模な高まりとして1号墳と同様に眺望があるが、北側に至っては1号墳北側尾根と標高が重なるため全く視認できない（赤塚）。

b 墳丘（第130・131図）

墳丘盛土の残存高は、南北軸では約0.6mであるが東西軸は東側が約0.3m、西側が0.8mと異なる。これは下層に弥生時代の遺構が基盤層上に存在しており、その上層に堆積した古墳築造時の旧地表面が尾根に沿って西側へ下降していたため、東西の盛土の残存高が異なる。墳丘盛土の残存範囲は南北で約6.7m、東西7.3mを測る。墳丘規模は西側が延び、南側が若干削平を受けて不整形を呈するが、直径9.3mの円墳に復元できる（第130図）。

基盤層と盛土の関係については、削平した基盤層の平面上より盛土は一回り小さく構築されている（第131図）。すなわち基盤層の平坦面外縁部を利用して幅の狭いテラスを構築していたと考える。特に1号墳の西側では基盤層と盛土裾部との間に幅0.15mの平坦面が断面図で確認できる。

周溝は墳丘北側から南東部にかけて3号墳を巡るように掘削されており、盛土はこの周溝掘削土であった可能性が高い。これは3号墳の墳丘内より弥生土器が出土することで裏付けられる。

つまり3号墳の構築順序は、①旧地表面上を平らに整地する（第131図21および12・27層）。但し、平坦面を確保している東・北・南側に対して、地形的に傾斜している西側では、傾きに沿って成形している。②1号墳との境に周溝を掘削し、その土を盛土して標高約50.6mで水平面をつくる。盛土の最小単位は高さ0.1～0.2mで、ほぼ水平に構築している。③墓壙を穿つ。④木棺を直葬した後、上部に0.4mの高さの盛土を行い、墳丘を完成させる。この段階においても、墳丘西側への盛土がやや多い（赤塚）。

c 周溝（第130図）

周溝は墳丘北側から南東側にかけて検出した。南側は全体が削平されているため不明である。北側では幅が2.1mと狭まり、レンズ状となる。正確に円弧を描いて墳丘の周りを巡らず、そのまま西へ下っていくことから、墓道としての機能を合わせ持っていた可能性がある（1号墳周溝の項参照）（赤塚）。

d 主体部 (第132図)

墳頂部中央付近には落ち込みが認められ木棺直葬が予想されたが、上層遺物の検出がなく墓壙以外の可能性も含め、北西区と南東区で検出作業を進めた。先述した墳丘構築過程の第2段階にあたる水平な盛土上面(第131図14・19および8・27層)で明確な墓壙の肩を確認した。さらに、内部の埋土を精査しながら掘り進めた結果、南西区の底部付近において鉄製刀子を1点検出した(第132図)。

墓壙主軸は磁北に対して約60°東偏する。主軸上で全長3.1m、最大幅2.1mの長方形を呈し、壁面はなだらかに立ち上がる。深さは南西区で0.55m、反対側の北東区で0.45mと基底面全体がやや南西側に傾斜している。

木棺の痕跡は遺構面からは確認できなかったが、墓壙上面部の土層が中央付近へ下落しており、これは木棺腐朽時に伴う落ち込みと考えられる(赤塚)。

e 出土遺物 (第132図)

3号墳および周溝より出土した遺物は、墓壙からの鉄製刀子1点と墳丘内に混入した弥生土器片のみであった(第132図)。

刀子は墓壙底面の中央部からやや南東付近の位置より出土した。鋒は墓壙主軸と同じく北東へ向けて副葬している。墓壙基底面より0.07m上部で検出したが、棺内副葬と考える(赤塚)。

G 春岡古墳群A4号墳〔F地区4号墳〕 (第133図)

a 位置

F地区南東端、標高52.3mの尾根鞍部から若干南側に下った標高50.0mから49.75mの南向き緩斜面上に立地する(第102図)。主体部など遺構の大部分は調査区外におよぶが、調査区外は急傾斜面となっており、残存している可能性は低い。周辺地形をみると古墳の北側約15mは尾根の頂部となっており、土坑4が立地している。この尾根と1・3号墳との間は東西方向の浅い谷状地形になっており、調査時には未舗装の道路が設置されていた(海邊)。

b 周溝 (第133図)

調査前に古墳の痕跡は確認できなかったが、直径8.5mの弧状を描く溝を検出し、内部から遺物が出土したことから古墳に伴う周溝であることが判明した(第133図)。周溝は幅1.65m、残存高0.25mを測り、底部は平底である。周溝北側から「Y」の字状に分岐するが、北側に分岐した周溝は分岐点から約3.2mの箇所で消滅する。もう一方の周溝はそのまま弧状に巡り調査区外に至る(海邊)。

c 周溝出土遺物 (第133図)

周溝内北西側底部に接して2個体の土師器が約0.2mの間隔で並んで出土した(第133図)。共に上部は削平のため欠損しているが、正置で据えられており、原位置を保っていると判断した(海邊)。

H 方形周溝墓

調査区内で2基を検出した(第134・136図)。各周溝墓の規模は2号墓が周溝外縁で約12m、1号墓は遺存状況が不良で規模が明確ではないが、2号墓と同規模と推測する。なおいずれの周溝墓も墳丘は削平されており、遺存していなかった。1号墓において木棺を埋葬主体と思われる埋葬施設を確認した。

なお、3号墳墳丘下層遺構についても（第139図）、形態的特徴などから方形周溝墓の可能性があるので、本項に付記した（阿部）。

a 1号方形周溝墓（第134・135図）

F地区北東部にて検出した（第134図）。周溝は西側および南側の一部でのみ検出した。北側および東側の周溝は、削平のため全く検出できなかった。主体部が一部残存していることから、周溝内側に高い盛土がなされていた可能性は低く、あったとしてもごく低墳丘であったと考える。

周溝の形状は、場所ごとに大きく異なり全体に均一でない。南側周溝は幅1.35m、底部幅0.55～0.8mを測る。西半部は一段落ちてやや北に蛇行し、クランク状を呈し、断面は逆台形を呈する。北側主体部付近に1箇所テラス状の段を有する。南西方向の隅角には、ピットなど方形周溝墓に伴う遺構は検出できなかった。西側の周溝は、南側の周溝と丸みをもってつながり東半部のみ残存する。深さは0.42mを測る。周溝埋土は、基本的に自然堆積であり、一方向からの流入は認められない。また土層を観察する限り、人為的な埋め立てや再掘削は確認できなかった。

埋葬主体は、周溝に囲まれた範囲のやや南側に2箇所並列して検出した。共に主軸を東西方向にとる。

第1主体は、平面隅丸長方形を呈し南北1.36m、東西1.92m、深さ0.21mを測る（第135図）。主軸は磁北に対して約96°西偏する。棺材は遺存していなかったが、土層断面から推定すると、長さ1.47m、幅1.0mを測る。棺は小口板を地中に差し込んでいない箱形の木棺と推定でき、棺内埋土は2層に分層できる。墓壇の埋土は、第135図4層である。

第2主体は第1主体同様、平面隅丸長方形を呈し南北1.79m、東西2.82m、深さ0.32mを測る。西側に高さ0.1m程度のテラスを有する。棺材は遺存していなかったが土層断面から推定すると、長さ1.73m、幅1.36mの規模となる。棺は小口板を地中に差し込んでいない箱形の木棺と推定でき、棺内の埋土は大きく2層に分けられる。墓壇の埋土は、第135図4・10・13層である（阿部）。

b 2号方形周溝墓（第136図）

F区南側で検出された（第136図）。古墳が分布する尾根から、浅い谷状地形を挟んで南側の尾根上に位置する。南西部は調査区外となるため検出できなかったが、規模は周溝外縁で東西12.3m、南北12.0m以上、周溝内縁で東西8.3m、南北9.8mを測る。周溝は四辺とも検出された。北西隅と南東隅の2箇所で周溝がとぎれている。北側と東側の二辺については、全体を検出した。断面はそれぞれ不正な逆台形を呈し、北周溝で幅0.8m、深さ0.4m、東周溝で幅2.25m、深さ0.6mを測る。北周溝と東周溝は、外側は歪なプランを呈するが、内側はほぼ直線的に延び、丸くつながる。東周溝は北側にテラスを有し、東側壁に2基のピットを有する。これらピットの機能は不明である。

いずれの周溝も埋土はレンズ状に堆積している。西側の周溝に周溝内側からの流入が観察できる以外は、一方向からの流入を観察できなかった。北周溝に再掘削と推定できる土層（第136図9層）が観察された以外は、人為的な埋め立てや再掘削の痕跡は確認できなかった。

なお、埋葬主体は検出できなかった。後世に大きく削平を受け消滅したと判断する（阿部）。

c 3号墳下層遺構（第139図）

溝状の遺構を1条、土坑状の遺構1基を検出した（第139図）。各遺構とも3号墳築造時の削平により大部分を欠失している。溝状遺構（SD2）は、長軸を南北方向にとり、南端は基盤層の落ちる部分につながる（第140図）。幅0.9m、全長5.2m以上、深さ0.2mを測る。土坑状遺構は3号墳築造時の削

平を受けているが、現存で全長1.4m、幅0.5m、深さ0.05mを測る。先述の溝と合わせて、方形周溝墓の溝の可能性がある（阿部）。

I 竪穴住居

F地区内で検出した竪穴住居は、計4棟である。各住居は40～50m離れて、調査区外にも散在的に分布すると推定される。遺存状況は削平のため総じて不良で、周壁を僅かに残すものが大半である（阿部）。

a 1号竪穴住居（第137図）

F地区の南側斜面にて検出した（第137図）。遺構は上・下に重複しており、上層の平面プランは楕円形を呈し、復元直径約3.3mを測る。西側の壁面の上層は、SK9・10と重複している。他の部分の壁面は、残存高0.2m、壁溝は幅0.4m、残存高0.1mを測る。

溝は総数三条を検出し、各々は0.3～0.4mの間隔を有している。平面での溝の配置を考慮すると、最も内側の溝が所謂住居の「壁溝」で、その他外周の二条の溝には、柱穴となるような遺構が確認できず、建て替えの痕跡と考えるより、斜面地における排水などの機能を持った「周溝」である可能性が高い。

床面からは炉跡を検出した。床面中央やや西よりに設けられ、南半は調査区外に延びる。主柱穴としては、P1・P2などが想定できる。平面は円形を呈し、直径0.1～0.5m、深さ0.25mを測る。なお貼床は、堀り方底面から厚さ0.15mで施される。床面の硬化は認められなかった。

下層の遺構は、上層遺構の直下0.2～0.4mで検出した。大半が調査区外となるため、その詳細は不明であるが、直径3.0mの楕円形の平面形態を呈する土坑が三基重複している。各遺構の深さは0.2～0.3mを測る。炉跡や柱穴の痕跡は確認できていないが、住居址の可能性が高い（阿部）。

b 2号竪穴住居（第138図）

F地区中央、1号墳の墳丘下層から検出された竪穴住居である（第138図）。1号墳築造時に削平を受けており、壁面は約0.1m遺存するのみで、北西部は壁面自体欠失する。

平面プランは、長径5.6m以上、短径5.45mを測る楕円形を呈し、西側は3号竪穴住居と重複関係にある。また、北東部分の壁面に幅0.2mを測る壁溝が検出した。ベッド状遺構は検出されなかった。主柱穴は4本柱と想定できる。柱穴は、円形を呈し、直径0.25～0.45mを測る。床面には厚さ0.2mの貼床が施される。後述する炉跡断面の間層の状況から、少なくとも2時期の床面が確認できる。床面の硬化は、認められなかった。

また、床面において炉跡を4基検出した。主柱穴に囲まれた範囲の北西半に集中し、炉内には焼土が堆積している。一部焼土が被熱部分を伴わずに散布する部分がある。

炉1は平面が不正な円形を呈し、長径0.65m、深さ0.1mを測る。被熱部分に間層を挟んで焼土が堆積する。炉2は平面が楕円形を呈し、長径0.55m、短径0.45m、深さ0.1mを測る。被熱部分の上に間層を挟んで焼土が堆積する。炉3は平面が楕円形を呈し、長径0.75m、短径0.6m、深さ0.13mを測る。被熱部分の直上に焼土が堆積する。炉4は平面が不正な楕円形を呈し、長径0.6m、短径0.5m、深さは0.1mを測る。中央に窪みを有し、その内部に焼土が堆積する。周囲は被熱している。

重複関係から3時期に分かれる。先後関係は、新しいものから炉1－炉3－炉2・炉4となるが、炉2および炉4については、炉3より古いものの互いの先後関係は把握できなかった。

なお、東側の壁溝外周において半月形の深さ0.1mの堀り込みを検出した。焼土坑と重複する部分が多く、詳細は不明であるが、住居跡の拡張・建て替えの痕跡の可能性はある（阿部）。

c 3号竪穴住居（第138図）

1号墳の墳丘下層で検出した（第138図）。2号竪穴住居と重複する。壁面と壁溝の一部を除いて削平されており、壁溝は幅0.4mを測る。床面の標高は2号竪穴住居に比べ0.08m低い（阿部）。

d 4号竪穴住居（第139図）

2号墳の墳丘下層で検出した（第139図）。北西部は、2号墳築造時削平のため欠失するが、推定では長径6.7m、短径5.35mを測る平面楕円形のプランを有する。

壁面は、残りのよい箇所では深さ0.6m残存する。周囲には幅0.2～0.5m、深さ0.15mを測る壁溝が巡る。南部ではテラス状の高まりを間に残し2条に分岐する。北西部については、壁面とともに消損している。ベッド状遺構は検出されなかった。主柱は6本柱と想定される。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、直径0.5～0.6m、深さ0.35mを測る。炉跡1カ所を、床面直上で検出した。住居内の北寄りに設けられ、長径0.66m、短径0.45mを測る平面楕円形のプランを有する。長軸方向両端に被熱部分が略円形に認められ、それ以外にも部分的に焼土が散布する。床面の硬化は認められなかった（阿部）。

J 土坑

F地区の2号墳周辺域で検出した土坑と、4号墳を中心とした調査区南側の範囲で検出した土坑に大別することができる。

出土遺物や堆積土の色調、平面形態などを考慮すると、中世墓の可能性が高い遺構（土坑1～3）と、近世墓の可能性が高い遺構（土坑6～8、12～13）の二者が存在する。

a 土坑1（第104図）

平面はやや不正な楕円形の土坑である（第104図）。長径1.0m、短径0.55m、深さは最も良く残る部分で0.38mを測り、断面は逆台形を呈する。底面は、ほぼ平坦である。

埋土は灰色土を主体とし、東側からの流入土で埋没している。中世墓の可能性が高い（阿部）。

b 土坑2（第104図）

平面はやや不正な楕円形の土坑である（第104図）。東半の壁面を欠失するが、長径1.05m、短径0.5m、深さは、最もよく残る部分で0.27mを測り、断面は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

埋土は灰色土を主体とする。中世墓の可能性が高い（阿部）。

c 土坑3（第104図）

2号墳墳丘西側に立地する中世墳墓である（第104図）。平面は不正な隅丸方形で、長辺2.1m、短辺0.88m、深さ0.15mを測る。埋土の観察から木棺墓と推測される。底面は、凹凸を有し西半部がやや低くなる。

内部では北側に小皿2点（第104図2は土師器）、西側に短刀（鋒は南）1点、南側に山茶碗1点を底面直上から出土した。また全長0.15～0.25cmの自然石を、墓壇南側を中心として約30点検出した。これらの石は墓壇底部に接しており、棺台などの機能を有していた可能性がある。

埋土は、灰色土を主体としており、棺の痕跡は、大きく削平を受けていることもあり検出できなかった（海邊・阿部）。

d 土坑4 (第105図)

平面形は隅丸長方形を呈する(第105図)。長辺2.5m、短辺0.95m、深さは0.01mを測る。断面はレンズ状を呈する。

e 土坑5 (第105図)

平面形は隅丸長方形を呈する(第105図)。長辺1.5m、短辺0.65m、深さは0.5mを測る。断面は方形形状を呈する。

f 土坑6 (第105図)

平面形は正方形を呈する(第105図)。長辺1.33m、短辺1.2m、深さは0.43mを測る。断面は方形形状を呈する。堆積土中の4層には土器片が混じる。人骨は検出できなかったが、近世墓の可能性が高い。

g 土坑7 (第105図)

平面形は不正円形を呈する(第105図)。長辺1.5m、短辺1.05m、深さは0.32mを測る。断面は北半のみ方形形状を呈する。堆積土中の8層を中心に、土器片と焼けた壁土を多く検出した。近世期の遺構の可能性が高い。

h 土坑8 (第105図)

平面形は不正円形を呈する(第105図)。長辺1.1m、短辺0.95m、深さは0.45mを測る。断面は方形形状を呈する。堆積土中の12層を中心に、瓦と1.0cm前後の礫を多く検出した。近世期の遺構の可能性が高い。

i 土坑9・10 (第106図)

土坑9と土坑10は重複しており、北側に位置する土坑10は、土坑9に対して底面の標高が0.08～0.09m高い(第106図)。土坑9の幅は1.07m、深さは0.18mを測り、底面は平坦である。土坑10は幅0.66m、深さは0.17mを測り、底面はほぼ平坦であるが、南側へ向かって若干傾斜している。

j 土坑12 (第106図)

平面形は隅丸長方形を呈する(第106図)。長辺1.28m、短辺0.72m、深さは0.10mを測る。断面はレンズ状を呈する。人骨は検出できなかったが、近世墓の可能性が高い。

k 土坑13 (第106図)

平面形は隅丸長方形を呈する(第106図)。長辺1.19m、短辺0.9m、深さは0.10mを測る。断面はレンズ状を呈する。人骨は検出できなかったが、近世墓の可能性が高い(土坑4～13/白澤)。

K 焼土坑

焼土1・2・3は近接しており、1号墳墳丘下層の基盤層に直接穿たれている(第102・104図)。何れも、2号竪穴住居と重複関係にあるものの、土層観察によって焼土坑が竪穴住居よりも後出することが明らかとなっている(阿部)。

a 焼土坑 1 (第104図)

不正な隅丸長方形の土坑である(第104図)。2号竪穴住居と重複関係にある。長径1.12m、短径0.61m、深さ0.25mを測り、断面は南側の壁面を大きく欠失するが、浅い逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

焼土は被熱部分直上中央付近に堆積する。被熱部分自体は間層を挟んで2層に分離していることから、使用された時期は2時期に分かれる(阿部)。

b 焼土坑 2 (第104図)

不正な円形の土坑である(第104図)。2号竪穴住居と重複関係にある。長径0.60m、短径0.50m、深さは、最も良好に遺存する部分で0.20mを測る。断面は西側の壁面を大きく欠失するが、逆台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、被熱部分が0.15m窪み、東側に向かって漸移的に浅くなる。

被熱部分は、中央やや西より底面直上で検出された。焼土は検出できなかった(阿部)。

c 焼土坑 3 (第104図)

不正円形の土坑である(第104図)。2号竪穴住居と重複する。長径0.30m、短径0.20m、深さは、最も良好に遺存する部分で0.1mを測る。断面は西側の壁面を大きく欠失するが、逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

被熱部分は、底面直上の全体に検出された。焼土は検出できなかった(阿部)。

L 溝

2条検出した。SD1は、2号方形周溝墓(SX2)の周溝と方位を一にするため、これとの関係が窺われる。

SD2については、他の遺構との関連が明確でなく、性格は不明である。但し、2号方形周溝墓に近接しているなどの位置関係を重視すると、方形周溝墓の溝の一部である可能性がある(阿部)。

a 溝 1 (第102・140図)

2号方形周溝墓(SX2)の南側周溝に隣接するように掘削されている(第102・140図)。西半は調査区外となるため、調査できなかった。幅0.8m~1.0m、全長2.8m以上、深さ0.3mを測り、断面は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、西に向かって漸移的に深くなる(阿部)。

b 溝 2 (第102・140図)

3号墳の墳丘下層から検出した(第102・140図)。幅0.90m~1.2m、全長3.7m、深さは、最も良好に遺存する地点で0.5mを測り、断面は隅丸逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。

埋土は褐色土を主体とする。自然堆積で、北側からの流入が認められる(阿部)。

8 G地区

A G-1・2地区 (第141図)

G-1・2地区は、水田を検出したG-3・4地区の北方に位置しており、本来は一連の遺構面を成していた。調査の都合上、4地区に分割して作業を実施した。

a 掘立柱建物

G-1地区SH1・G-2地区SH5 (第172図)

北方に位置するA地区東側より派生し、南方向へ伸びる丘陵の西側縁辺部において、柱穴を確認した。直径40～50cm、深さ20～30cmの円形掘り方を有する。SH1およびSH5ともに、一部を検出したのみであるため、明確な柱間や向きについては不明である。

b 溝

SD1～4 (第142図)

幅0.4～0.5m、全長は大半が調査区外まで伸びているため不明であるが、7.5m以上の直線的な溝を4条検出した。深さは、7.0cmから18.0cmで、溝の底部は丸い。

各溝はほぼ東西方向に伸び、1.7～2.0mの等間隔をもって配置されている。平面の形状や配置より判断すると畑状遺構の可能性もある。

SD5 (第142・172図)

G-1区のほぼ中心部を南北方向に伸びる幅8.0m、深さ0.3mの規模の溝を検出した。断面形態は、逆台形状を呈している。調査範囲の北側において、溝の底部付近にて、石斧と土器片を検出した (第172図)。

c 井戸

SE9 (第172図)

G-1地区の南東隅において、井戸を一基検出した。検出面が浅いため、遺構の上位の状況は不明であるが、直径4.5mの円形掘り方内に、木製の曲げ物を配置し、土留めとしている。

掘り方と曲げ物との間隔は密接で、ほとんど隙間はない。曲げ物は一段のみ検出でき、高さは15cmである。内部より、小皿1点を検出した (第172図)。

d その他の遺構

S11 (第172図)

G-1地区の北西隅で検出した遺構である。一部のみの検出であるため、全容は把握できないが、隅丸方形を呈する。東側では、先述したSD5を一部掘削しており、切り合い関係が存在する。遺構中心部の南辺底面付近より、土器1点を検出した。平面形態の特徴から、竪穴住居の可能性もある。

B G-3・4区 (第141図)

先のG-1・2地区の南側に存在しており、調査の進行上、北半を先行して実施したため、当該地を便宜的にG-3地区、南半をG-4地区と呼称した。丘陵上で検出した遺構と、低地部で検出した水田遺構に大別することができる。

G-3地区の北東から南西方向にかけては、丘陵の端部が横たわっているが、当該丘陵の基部は北側に位置するA地区とC地区の間に所在する丘陵に由来する。本来、B地区とほぼ同程度の高さを有し、平地との比高差20.0m前後の丘陵が以前には存在していたと伝えられている。

G-3地区の大半が井戸を中心とした遺構であることからすると、丘陵削平の影響を大きく受けた結果、掘り込みの浅い遺構は残らなかった可能性が高い。

a 竪穴住居

SB1 (第151図)

調査区の北西隅で検出した。建物の東半分をSD1によって破壊されているため、全容を把握できないが、一辺4.5mの隅丸方形の平面形態を有する竪穴住居である。確認面が浅いため、上部は削平されているが、深さは0.1mである。

建物南西側にカマドを有している。但し、焼土粒や炭化物のまとまりが1.0×1.0mの範囲に確認される程度で、カマドの立体的な構造を確認することはできない。このカマド付近では、先行するP3が存在し、この一部を破壊する形で、SB1が配置される。

建物の支柱穴は、明確ではないが、四本柱の構造を取るものと判断でき、P1やP2が該当する可能性が高い。直径40～50cm、深さ10～30cmの円形の掘り方である。建物内の床面の観察からは、硬化面や貼床などを特定できる範囲は存在しない。また、壁溝なども確認していない。

b 掘立柱建物

SH1 (第152図)

調査区の北西隅付近に掘立柱建物は集中している。SH1とSH2もそれぞれ、平面の一部が重複している。SH1は、南北方向に建物の長軸方向を配する、4間×1間の掘立柱建物である。長軸方向は、座標系X軸に対して3°西偏しているものの、ほぼ真北を向く。建物全体の規模は、4.3m×7.5mで、柱間の距離は、1.9mを基本としている。平面の配置において、P5とP9の間隔は他に比して狭く、庇などの付帯的な施設に伴う柱穴の可能性もある。

直径60cm、深さ30～60cmの円形掘り方内部に柱を建てるが、礎板や根固めの石材は検出していない。P7内部南東隅より土器を三個体検出した。明瞭な掘り方は存在しないことから、柱穴の埋土充填に際して、同時に配置している。

SH2 (第152図)

SH1の北側に、SH2が存在する。4間×2間以上の方形の建物が想定できる。全体の規模は不明であるが、確認できる一辺の全長は6.5mである。座標系X軸に対して8°西偏している。SH1とほぼ同方向を向く配置を取る。柱間の距離は、1.7m及び2.2mを基本としている。

直径40cm、深さ30cmの円形掘り方内部に柱を建てており、P5やP9内部に柱の基部を僅かに確認した。直径は、30cm前後の丸柱である。また、P1の底部では、3.0×30cm、厚さ1.0cm前後の板材を検出しており、礎板の可能性が高い。

c 井戸

G-3地区の北側には、丘陵裾である地山が斜め方向に横たわっており、7基検出した井戸全ては、この地山面を掘削して井戸と成している。

SE1 (第145図)

当該遺構は、2.0×2.0m、深さ1.05mの規模の方形の掘り方内部に、0.7×0.8m、深さ0.95mの方形の井戸枠を配している。掘り方に対して、井戸枠の配置は、大きく東側に偏った配置を取る。掘り方と井戸枠との間は、砂質系の土を用いて充填している。

井戸枠は、直径60cm前後の自然木の丸太を四方の支柱とし、方形に配した後に、小枝を縦方向に多数並べて内側材とし、更に外側には、厚さ1.0cm前後の一枚板を四方に配して土留めとしている。四方に配した支柱間を繋ぐ横木には、明瞭な木組みの痕跡を認めることができないことから、本来は、弦や縄などによって固定していた可能性が高い。

SE2 (第146図)

上段の直径2.1m、下段の直径0.55mの二段掘りの円形掘り方内部に、円形石組みを配し、更にその内部に円筒形の木桶を設置している。円形石組みの基底部には、直径80cmの丸太材を井桁に組み合わせ基礎とし、その上部に石組みを配している。確認できた石組みの高さは30cmである。

木桶は、直径50cm、高さ55.0cmで、18枚の板を円形に束ね、竹製の箍を三段取り付け固定している。桶の底はなく、底面には、8.0～15.0cm前後の礫を平らに敷き詰めている。

SE3・4 (第147図)

両者は近接しており、直径2.6mのすり鉢状の掘り方のSE3は深さ0.75mである。木製・石製の土留め類は検出していない。

SE4は直径1.4mの円形の掘り方で、深さは0.95mである。第147図の土層断面で明らかなように、先行するSE3の一部に重複するようにSE4が配置されている。

SE5 (第148図)

直径2.3mの円形の掘り方内部に、1.05m四方の方形の木枠を配し、井戸と成している。掘り方に対して、木枠はほぼ中央に配している。

木枠は、四方に直径5.0×9.0cmの角材を配し支柱とし、柱間を同じく角材の横木によって枠組みを成している。柱相互の接合には、ほぞ穴を用いた接合を行っている。

更に、木枠の外側には、厚さ2.0cm前後、幅30cm前後の板材を立て、土留めとしている。板材は一枚板ではなく、一辺に対して3～4枚程度を配置している。骨格となる木枠と、板との接合に特別な加工は行なわれておらず、立てかけた状態である。

SE6 (第149図)

直径2.0m、深さ0.85mの円形の掘り方の中央付近に、円形の木桶を配していた。但し、検出できたのは、木製の箍の残欠のみで、桶の規模や形状は不明である。底部には、5.0cm前後の礫が0.6×0.6mの範囲に確認でき、円形を呈することから、この礫の範囲が本来的な桶の直径に近いと判断できる。

SE7 (第150図)

1.7×1.9mの方形の掘り方を掘削した後、内部に方形石組みを造り、最終的にこの石組み内部の底面に、木製曲げ物を納めている。石組みの基礎には、先述のSE2同様に直径15.0cm前後の丸太材を井桁状に組み合わせており、その上部に全長30cm前後の石材を使用して方形の空間を形づくっている。

更に、石組みと曲げ物との間には、第150図で示したように、東側において、1.0cm前後の厚みを持

った板材が確認できており、本来的には、石組みと曲げ物との間の四方に板材を巡らす複雑な構造を呈していた可能性が高い。

曲げ物の規模は、直径35.0cm、高さ20cmの規模の上段と、直径20cm、高さ12.0cmの規模の下段の二重構造で、底はなく、礫等が敷き詰められていることもなかった。

SE8 (第147図)

直径1.5m、深さ0.80mのすり鉢状の掘り方を呈する。木製・石製の土留めは存在せず、素掘りの井戸である。底面にも、礫等は確認できなかった。

d 溝

SD1 (第154・155図)

G-3地区の北西端で検出した溝である。南西から北方向へ全長46.0m検出した。SD1は大別すると2時期に分かれ掘削されており、下層の溝幅は2.6m、上層の溝幅は2.6mである。溝の深さは、下層時には、0.6mであったのに対し、上層では半分程度の0.4mと浅くなっている。溝底面の標高は、北端で21.79m、南端で22.08mを測り、比高差は0.29mとなり、北から南へ流れる。

第155図に示したように、SD1の溝西側を中心に直径5.0cm前後の木製杭を不均等に打ち込んでいる状況が確認できた。打ち込み方は、溝の底面に対してほぼ垂直である。また、杭列の中で南寄りの位置で、直径8.0cmの比較的大い杭一対を検出しており、当該地における溝の最大幅2.7mを横断する橋状の施設が存在した可能性もある。ただし、積極的根拠となるような横木や木組みの痕跡は、周辺部を含めて検出できていない。

SD1とSD2が合流する付近(第154・156図)では、溝の南北方向の流れに対して、直角方向にほぼ直線的に配された杭列を二箇所において検出した。堰としての機能を有していた可能性が高いが、上流側の堰1と下流側の堰2との間隔は1.2mである。横木や板材の使用は確認できなかった。

SD2 (第157図)

G-3地区を南北に直線的に横断する溝である。溝の方向は、座標系X軸に対して29°西偏している。第157図に示したように、溝の土層断面の観察から、方位は同じであるが、大別すると2時期に分かれ掘削されていることが観察できる。

最初に掘削された下層の溝は、幅2.5m、深さ0.8mである。断面は、二段掘りを呈する形状である。溝底面の標高は北端で21.60m、南端で20.32mを測り、比高差1.28mで北から南へ傾斜している。(第141図の朱線部分がSD2の下層溝)。下層溝の底面付近に堆積する第157図の5・6層の砂質粘土層を中心に、土器片を検出している。

下層溝の上端部まで土砂の堆積が進行した段階で幅2.2m、深さ0.5mの規模の溝が新たに形成される。溝の断面は浅いレンズ状を呈し、両側には、幅1.5~2.0m、高さ0.2mの堤状の盛土があり、半ばこの両側にある堤状の盛土によって、上層の溝が成り立っている。断面の土層観察によれば、下層溝の堆積土上面を掘削し、この掘削土を基に左右に盛土を行っている。

前述のSD2上層溝における左右の堤状盛土について、溝東側の盛土を便宜的に「大畦畔1」と呼称し、対峙する西側の盛土を「大畦畔2」とする(第161図)。この大畦畔1の基底面(盛土をはじめる最初の面)から、土器片を二箇所を確認している(『遺構写真図版編』図版123)。当該土器片の周辺部の平面精査及び断面の土層観察からしても、上層や下層からの遺構による混入の可能性はなく、土器片を意図的に配置した後に、大畦畔を形づくるための盛土を行っている。同様の所見は、水田25と水田26の間の南北方向に所在する畦畔基底面においても土器片を確認している(第161図)。また、遺構の時期

は異なるものの、先述したA地区第3面（弥生）における畦畔内から出土した土器とも、出土状況は近似する（第17図）。何れも土器を配置した後に盛土を行い、畦畔を形づくること、水路脇に配置された比較的大きな畦畔内に土器が配置されることなど、共通点がある。

e 水田遺構（奈良・条里型水田）

基本土層（第143図）

G-3地区の南半からG-4地区にかけて2740m²の面積の水田を検出した。当該域の基本土層は第143に示したように、現地表面から0.7m掘り下げると基本土層の「VI-A'・B'・C'層」を耕作土とする灰色粘土層が均一に存在する。本層は、G地区の地形特性上G-3地区では丘陵端部が立地することから北側に向かうにしたがい、耕作土の標高は高くなるとともに、堆積土も希薄となる。一方、G4地区の南端においても、第143図15地点の「V-D層」に見るように、南方へ向かうにしたがい標高が高くなり、堆積土の断面の形状は緩やかな弓形を呈する。

東西方向における耕作土の状況はG-3地区の東側に向かって極端に傾斜している（水田15・水田19～22付近）。仮に、確認できていない更に細かな畦畔を配置したとしても、検出した水田の区域内に均等に水を満たすことは困難である。

こうした原因の一端は、今回のG地区東側の調査区対象外の地域において、先行して地盤改良工事が実施されており、工事による周辺地盤の変形が影響している可能性があり、検出した水田面の標高そのものが、旧来の形状を現しているか疑問な点が存在する。

水田の形状（第161図）

先述したように、G地区を南北方向に縦断するかたちでSD2が存在しており、その東西両側に配置されている大畦畔1と大畦畔2を中心に、ほぼ直角方向に接続する東西方向の大畦畔4を基本とし、区割りがなされており、所謂「条里型水田」の範疇に属する水田である（第161図）。

水田11・水田17・水田22・水田54に見るように、南北方向に伸びる「長地型」と、水田13・水田15・水田16・水田35・水田40に見るように、東西方向に伸びる「長地型」が混在している。

畦畔の方向については、大畦畔1・2と直角方向に接する大畦畔4付近では、直角方向に配置された水田を検出しているが、SD2の東側においては大畦畔4を境に、南側と北側においては、大畦畔1と直角には接しない畦畔が存在している。具体的には、南北方向の畦畔は、座標系X軸と同方向を示している。こうした場合、東西方向の畦畔は、座標系X軸に対して29°西偏している大畦畔1に対して直角には接続せず、両者は110°前後の角度で接続する。また、大畦畔3は、大畦畔2に対して50°の角度をもって接している。遺構そのものからこうした異なる方向の畦存在を、時期差と判断できる明確な根拠は確認できなかった。

SD2の西側の水田においては、畦畔の構造が所謂「擬似畦畔B」〔仙台市1987〕を呈している。その他、SD2の東側の水田49および水田53付近において、「擬似畦畔B」を確認した。

水口（第164・165図）

G地区において、総計22箇所の水口を確認した。水口は大別すると二種に分けることができる。第一にSD2の両側に配置される大畦畔1・2の一部を切除して水口としているものである。当該遺構は基本的には、SD2を流れる水を東西に配置された水田面を導き入れるための機能を果たしている。

もう一種の水口は、水田間の小畦畔を切除している形状のものである。基本的には、東西方向に配置された小畦畔を切除しているが、水口8や水口22（第161図）のように、南北方向の畦畔を切除したものも観察できる。

水田に伴う施設

検出した水田域においては、水田に伴う杭や板列、更には堰などの施設は確認していない。また、水田を区画する畦畔も全て平面調査を伴う精査を実施したが、畦畔の芯材などは確認できなかった。

耕作痕ほか

水田面を確認した中では、耕作のための鋤痕・手形・足形・動物の足跡などは確認できなかった。また、稲株も残存していなかった。

f 水田遺構（弥生）

基本土層（第143図）

G-3地区の南半からG-4地区にかけて約765㎡の面積の水田を検出した。当該域の基本土層は第143図に示したように、現地表面から1.2m掘り下げると基本土層の「Ⅷ」層を耕作土とする黒色粘土層が均一に存在する。本層は、上層の条里型水田において先述したようにG地区の地形の特性上G-3地区の北側に向かうにしたがい、耕作土の標高は高くなるとともに、堆積土も希薄となる。一方、G-4地区では、南方へ向かって標高が高くなり、上層水田同様に堆積土の断面形状は緩やかな弓形を呈する。

東西方向における耕作土の状況は、調査範囲が限定されているため詳細は不明である。但し、上層水田での所見と同様に、水田2・3の東側において、水田面が極端に傾斜している。確認できた畦畔のみでは、区画内に均等な水を満たすことは困難な状況である。

水田の形状（第142・166～171図）

検出した畦畔の構造はG-3地区とG-4地区で大きく異なる。まず、北側に位置するG-3地区では、東西方向へ伸びるほぼ直線な、幅1.0m、高さ0.13m前後の畦畔を三条確認している（第142図）。畦畔1～3は、何れも盛土による畦である。

一方、G-4地区では高床倉庫の柱材をはじめとする建築部材、自然木等を帯状に検出した（第166～171図・『遺構写真図版編』図版124～126）。部分的な調査であるため全容を把握できないが、検出した木材の範囲は、幅4.2m前後で、東西および南北方向に配置されている。また、第171図の土層断面によって明らかなように、木材を包み込むように高さ0.4mの盛土が確認できており、畦畔の芯材としての機能を果たしている。また、部分的に長さ1.0m前後の杭が打ち込まれている状況が数ヶ所において観察でき、木材の横位への崩れを防止している（第168図～第171図凡例参照）。幅4.2m、高さ0.4mの畦畔の規模から判断して、区画の基本となる大畦畔である可能性が高いが、当該遺構に伴う、更に細かな規模を有する小畦畔は確認できなかった。

一区画全体の形状を把握できた水田は皆無であるが、G-3とG-4地区のそれぞれにおいて検出した畦畔を見ると、東西および南北方向に伸びる比較的直線的な大畦畔を基本とする水田である。東西方向に配置された畦畔2～3・5～7の位置関係を観察すると、19.0～25.0m前後と比較的等間隔である。

G-3・4地区の北側に位置するG-1・2地区では、水田遺構を確認していない。地形的にはG-3地区が南から東方向へ傾斜するのに対して、G-2地区では西側へ傾斜しており、G-2とG-3地区の間を北東から南西方向に横たわる丘陵端が大きく影響を与えている。

水口

明瞭な水口は確認できていない。

耕作痕ほか

水田面を確認した中では、耕作のための鋤痕・手形・足形・動物などの足跡は確認できなかった。また、稲株も残存していなかった。

9 村松家墓塔群

村松家墓塔群は、今回の調査範囲の中では最も南側に位置する。林光寺の西側で、F地区から派生する丘陵の西端に立地している。標高27.50m前後で、舌状に西へ伸びる丘陵である。周辺部の平坦地との比高差は3.5mである。調査前には、昭和19年の東南海地震の影響を受けて、石塔群の配置が大きく乱れていた。区画整理事業の対象範囲に存在することから、移転に伴い記録調査を実施した。

なお、総計36基の墓石の内、墓石12の明治2年の紀年銘を境とし、墓石30～32・34～36までの墓石については、現代の構造物としての取り扱いとし実測図を掲載していない。確認した最も新しいものは墓石35で、昭和11年の銘が確認できる。

当該地の遺構は、地表面に現れた石塔群と、基壇下層および周辺部の地下より検出した土壌および蔵骨器に大別できる。

A 石塔群 (第173～185図)

a 基壇 (第173・174図)

今回調査を実施した石塔群全ては、基壇内に立地する。基壇の構造は、第176図に示したように砂礫層の地山を平坦に削り、縦70～130cm×横18～24cm×厚さ18～22cmの長方体の石材を上下に三段積み上げ正面となし、この内部に高さ0.7mの盛土を行なって石塔を配置している。

基壇は長辺を南北方向に配しており、全長は13.7mである。但し、西側の正面のみに石材を使用している以外、その他の面には明瞭な区画と成形は行っていない。

b 灯籠 (第185図)

基壇と平行して、西側0.4mの位置に一对の灯籠が配されている。両者の間隔は3.4mである。左右同形の灯籠は、全長1.82mで、直径0.31mの円柱部には、「寛文八年(1668年)…(中略)…施主村松源右衛門尉 秀茂」の名が刻まれている。

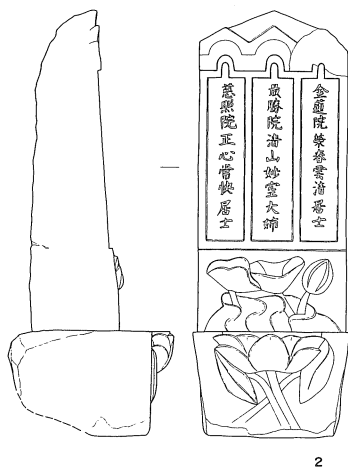
c 石塔 (第177～184図)

前述した基壇上に、南北方向に四列を成して、36基が建っている。基本的に正面にあたる西を向いている。最前列の中央には1.28×1.30m、高さ0.45mの方形台座上に、高さ0.41mの蓮華台座を乗せ、全長0.94mの仏像を安置している。基壇全体の位置関係からも、本仏を最初に配置して石塔群が配されたと見ることができる。

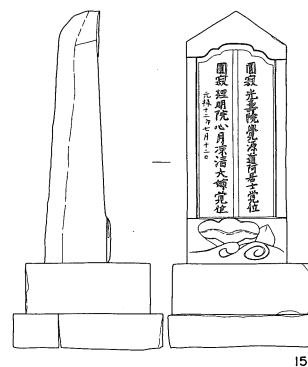
個々の記述は行なわないが、石塔の形態的特長から、以下の7類に分類することが可能である。形態的特長と、石塔間の位置関係は有機的な繋がりが存在し、基壇中心に鎮座する石仏を左右から取り囲むように、後述する「大型三角頭 船形断面」と「三角頭 船形断面」の特徴を有した群が、第一列に配置する。

次には、「隅丸方頭 方柱断面」の特徴を有した群を、先の群の外側の位置で、石仏の向かって右側第一列に配する。また、一部は、石仏の向かって左側、第二列に配する。

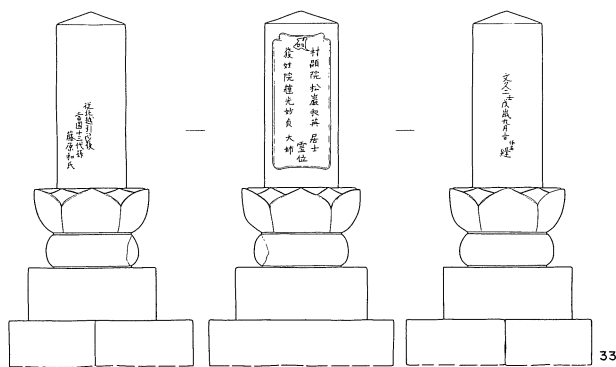
続いて、石仏の向かって左側、第一列の最も外側を中心に「四角錐頭 方柱形断面」と「四角頭 方柱形断面」を配する。また、第三列にも一部存在する。



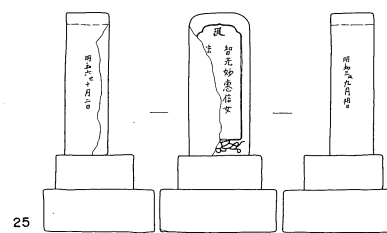
大型三角頭 舟形断面



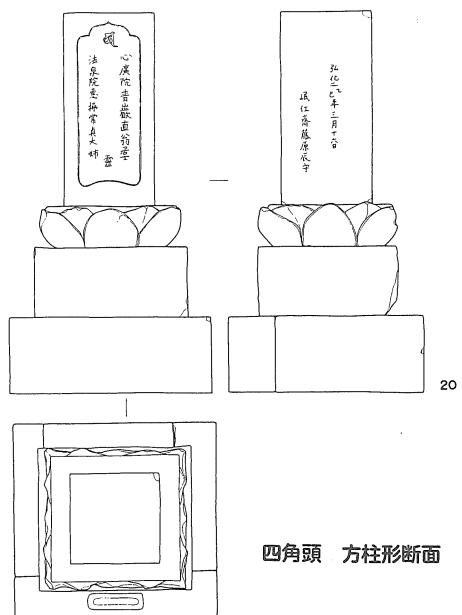
三角頭 舟形断面



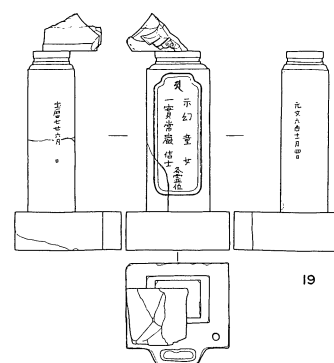
四角錐頭 方柱形断面



隅丸方頭 方柱形断面



四角頭 方柱形断面



笠付頭 方柱形断面

0 50cm

第iv図 墓石形態分類図

・「大型三角頭 船形断面」

中央石仏に対して向かって右側に位置する墓石2～4と、向かって左側に位置する墓石14が該当する。谷川分類の「B-1類」に属する〔谷川1998〕。頭部を三角に削り出し、正面上半には、長方形の枠を彫り込み、その内部に戒名を刻む。戒名は2～3列である。それぞれの銘の上部には、独立した三角と半円形の装飾が付く。台座を含め正面下半には蓮華文を浮き掘りしている。背面は傾斜しており、所謂「船形」を呈する。台座を含めた全長は1.64～1.71m、幅は51.5～58.0mである。

・「三角頭 船形断面」

墓石10と15～17が該当する。方形の台座の上部に本体を載せる。墓石17以外は二段別作りの台座である。谷川分類の「B-1類」に属する。本体正面には、長方形の枠を彫り込み、その内部に戒名及び没年を記す。長方形の枠上部の装飾は、個々において多少異なる。

本体下部には、蓮華文を浮き彫りしている。墓石17は更に台座にも蓮華文の装飾を持つ。何れも本体の背面は傾斜しており、「船形断面」である。台座を含めた全長は1.28～1.41m、幅は0.31～0.39mである。

年号の判読できるものは、以下のものである。

墓石10…天文十九年(1550年)

墓石15…元禄十二年(1699年)

墓石16…宝永元年 (1704年)・宝永二年 (1705年)

・「隅丸方頭 方柱断面」

頭部が所謂「かまぼこ状」を呈した隅丸方形を成しているものである。谷川分類の「D類」に属する。1～2段の方形台座の上に塔身を載せている。塔身の断面は、「方柱形」である。

規模は大別すると三種に分かれ、台座を含めた全長が0.61～0.77mの最も大型の部類のものが墓石7～9である。墓石5・6・11・25は、全長0.52～0.58mで中型である。全長0.41～0.46mを測る墓石12・22は最も小型である。

塔身正面には、1～3名の戒名が、両側面には没年を彫り込むことを基本としている。年号の判読できるものは、以下のものである。

墓石5…享和三年(1803年)・嘉永四年(1851年)

墓石7…嘉永六年(1853年)・文久二年(1862年)

墓石9…寛政三年(1791年)

墓石12…文政三年(1820年)・天保十四年(1843年)

墓石22…天明四年(1784年)

墓石25…明和三年(1766年)・明和六年(1769年)

・「四角錐頭 方柱形断面」

墓石18・29・33が該当する。谷川分類の「E-1類」に属する。方形の台座二段の上部に、蓮華座の台座を載せ、方柱形の塔身が建つ。墓石29のみ、二段の方形台座の上に、更に方形の台座を載せ、塔身を建てている。塔身の断面は、「方柱形」である。塔身頭部は、四角錐を成し、正面には長方形の彫り込み内に、二～三名の戒名を彫り込んでいる。また、両側面には没年を彫り込んでいる。年号の判読できるものは、以下のものである。

墓石18…寛政九年(1797年)

墓石29…慶應三年(1867年)

墓石33…文久二年(1862年)

・「四角頭 方柱形断面」

墓石20のみが該当する。塔身の頭部を含めて全て四角の平坦面を成している。谷川分類の「E-3類」に属する。方形二段の台座の上に、蓮華座の台座を載せ、塔身を建てる。塔身の断面は、「方柱形」である。塔身正面には2名の戒名を彫り込み、正面向かって右側面には没年を彫り込んでいる。台座を含めた全長は1.50mである。

墓石20…弘化二年(1845年)

・「笠付頭 方柱形断面」

墓石19と23が該当する。方形一段の台座上部に、細身の長方形塔身を載せ、その上部に更に三角錐の頂上部を平坦にした笠を取り付けている。塔身の断面は、「方柱形」である。台座を含めた全長は0.93（欠損）～1.23mである。

墓石19…宝暦七年(1757年)

・「不明」

永年の風化や破損によって、形態が認識できない墓石が、21・24・26である。何れも塔身の断面は、「方柱形」の断面を有している。特に、墓石24は残存した部分の特徴などから「隅丸方頭 方柱断面」の群に属する可能性が高い。正面には2名の戒名を、塔身の左右には没年を彫り込んでいる。

墓石24…元禄十四年(1701年)

d 戒名

今回対象とした墓石26基の内、風化・剥落などによって判読できない4基を除く22基において戒名を確認できた。内容は「大居士・居士・大姉・信士・信女・童子・童女」の7種類である。この内、「居士」と「大姉」を同一墓石に彫り込むものが最も多く12基にのぼる。「居士」と「大姉」をそれぞれ1名ずつ配するものが多いが、墓石2・3・29に見るように、3名を配するものも存在する。

同様に、3列の戒名を配するものは、この他墓石5において確認でき、「信士・信女・童子」を彫り込んでいる。

ひとつの墓石に対して2名の戒名を刻むことが多い中、墓石21と墓石22では「童女」を、墓石9では「大居士」をそれぞれ単独で配している。また、墓石12では2列の戒名を配するものの、何れも「童女」である特異な例である。

刻まれた文字数を観察すると、9文字が最も多く（墓石15）、以下7文字・6文字・4文字・2文字の順である。この内、7文字を採用する墓石が最も多い。また、7文字を採用する墓石の戒名には「大居士」・「居士」・「大姉」を用いることが基本である。一方、「童子」・「童女」では2文字が基本である。

「信士」・「信女」では4文字が基本であるが、墓石23では唯一6文字が彫り込まれている。

e 石材と墓石の関係

村松家墓塔群に使用している石材は肉眼観察によると①東伊豆産安山岩、②森産砂岩、③凝灰岩、④産地不明砂岩・砂礫岩の四種類に大別できる。

以下、石材の種類別に、構造物を述べる。

① 東伊豆産安山岩

中央の石仏、墓石2・3・8・14～16・20が台座を含め全て当該石材である。なお、墓石17は台座のみ、墓石18は塔身のみを使用し、灯籠A・Bについては、両者とも全て当該石材である。

使用の傾向としては、中央の石仏や灯籠など、村松家墓所の原形となる主要な構造物に使用している。また、大型の墓石を中心に使用しており、墓塔群全体の配置の中でも中央部および、基壇の最前列を占める墓石に使用の頻度が高い。

② 森産安山岩

まず、村松家墓塔群の立地する丘陵上へ登るために、西側に配置された石階段は全て当該石材である。また、三段に積み上げられた基壇の内、最上部全てが当該石材である。墓石4・7・9・10・19・22・23・25・29・33が台座を含め全てが当該石材である。墓石17は塔身のみ、また、台座のみ確認した墓石26は、台座のみ当該石材である。

使用の傾向としては、四列に配された墓塔群の内、最前列では基壇の両縁辺付近の墓石に使用している頻度が高く、二列目・三列目に多く使用している。

③ 凝灰岩

最も頻度が少ない石材である。墓石5・6・24の台座を含めた全体に使用している。墓石21では台座部分にのみ当該石材を使用している。

④ 産地不明砂岩・砂礫岩

基壇部分の最下段と二段目に砂礫岩が使用されている。墓石11・13・30～32の台座を含め全体に使用している。墓石18では、蓮華座を除く方形台座に砂礫岩を、また、墓石21では塔身の上に白色硬質砂岩を使用している。

使用の傾向としては、墓塔群の二列目・三列目に多く使用している傾向がある。

B 基壇下層および周辺部の遺構 (第186～189図)

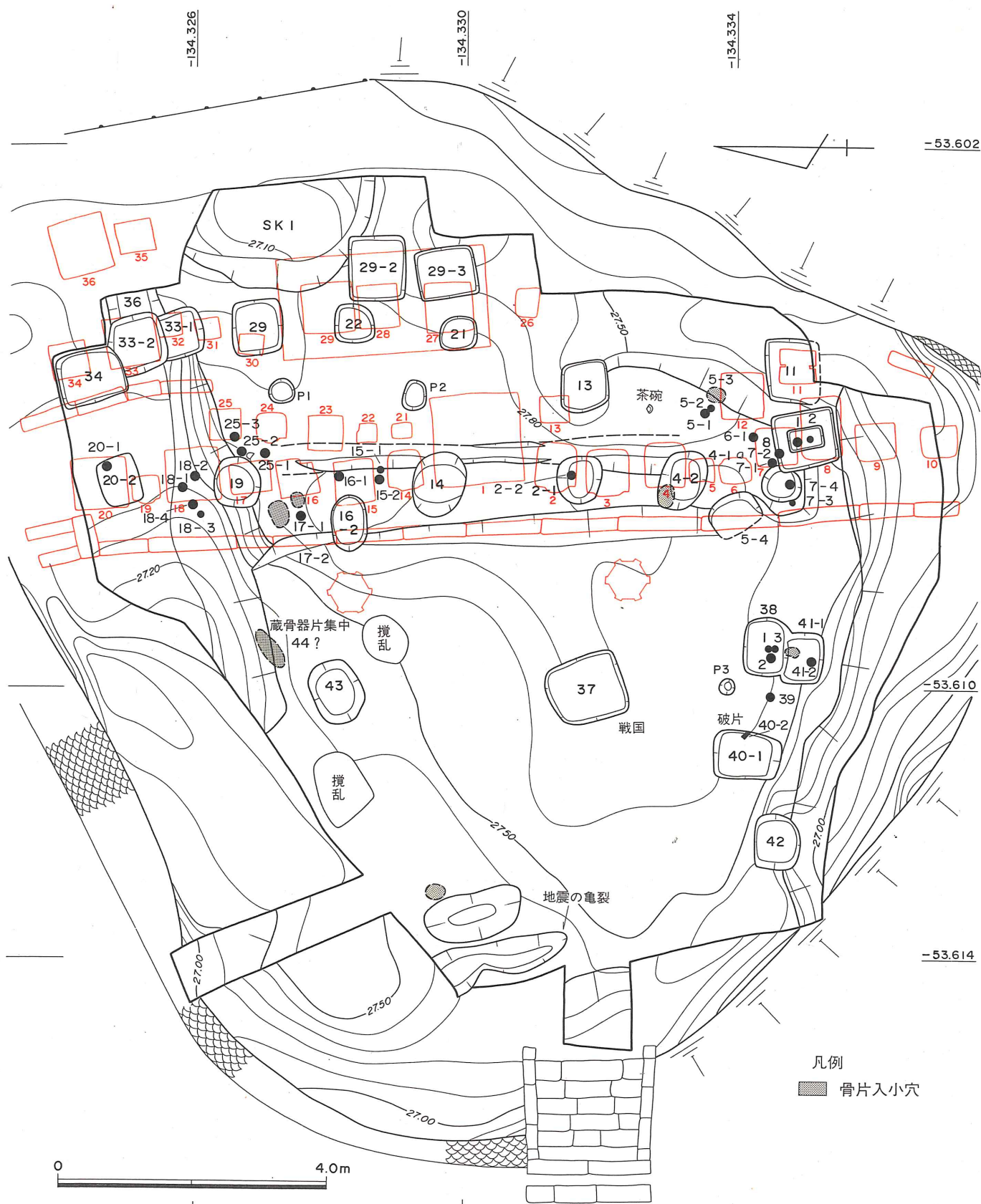
第V・175図に示したように、先述の石塔群の下層の調査に際して、蔵骨器と土壇墓を43箇所で見出している。以下では、これらを出土状態の特徴から7類に分け、類ごとに詳述する。

・蔵骨器に火葬骨を納める

5-1・2号墓、6号墓、7-1・2号墓、7-3・4号墓、15-1・2号墓、16-1号墓、17-1号墓、18-1～4号墓、25-1～3号墓、39号墓が該当する。直径15.0cm、高さ20cm前後の蔵骨器を用い、内部に火葬骨を納め埋葬している。また、7-3・4号墓、16-1号墓、17-1号墓で見出したように、直径0.2～0.3m前後の円形の掘り方と、蔵骨器との間に火葬骨が確認できる事例が存在する。17-1号墓では、蔵骨器の蓋上部にも人骨が置かれていた。

蔵骨器は1点から4点でまとまりを持っており、5号墓や17号墓で見出したように、直径0.2～0.3m前後の円形土壇内に火葬骨を直接納めたものと併置する事例も存在する。併置された場合のそれぞれの高さはほぼ同一である。

なお、先述した石塔群の基壇下層から検出した蔵骨器について、石塔との位置関係を観察すると、必ずしも明確に石塔の直下に蔵骨器や土壇墓が納められている訳ではないことが、第V・175図などから明らかである。この様な中で、石塔との位置関係から、両者に関連がある可能性が高いものは以下のものである。



第V図 村松家墓塔群全体図

表1 石塔と地下遺構との対応表

地上遺構（石塔）	地下遺構
墓石3	2-1・2号墓
墓石4	4-1・2号墓
墓石8	8号墓
墓石11	11号墓
墓石14	14号墓
墓石15	16-1号墓
墓石18	18-1・2号墓
墓石20	20-1・2号墓
墓石25	25-3号墓
墓石30	29号墓
墓石32	33-1号墓
墓石33	33-2号墓
墓石34	34号墓

・蔵骨器と方形土壙

0.6×0.8m、深さ0.5m前後の方形土壙を掘削し、内部に人骨を納めている。人骨を明瞭に検出した20-2号墓では、頭位は東、40-1号墓では頭位は北である。骨の出土状態から「仰臥屈葬」が想定でき、20-2号墓では鉄釘を検出したことから、方形の木棺を用い、鉄釘によって板材を接合している。但し、その他の土壙では、平面形態が方形を呈し、底面も平坦であるなど共通点はあるが、棺の明確な痕跡は確認できておらず、特に2号墓については、土壙の平面形態も楕円形を呈することから、方形の木棺を納めることは構造上困難である。

方形土壙の深さは平均0.5mであるが、その埋め土上面に蔵骨器を納めている。設置する方法は、大きく分けると二者が確認でき、2号・41-2号墓に見るように、円形の掘り方を掘削して蔵骨器を納める方法と、7-4号墓や38-2号墓のように土壙埋土の平坦面上に蔵骨器を置き、その後周囲に土を盛る方法が存在し、後者には掘り方は存在しない。前者の事例の内、2号墓では、円形の掘り方と蔵骨器の間にも人骨が納められている。

蔵骨器と方形土壙の関係は、方形土壙1基に対して蔵骨器1個体が基本である。但し、38号墓の事例においては3個体の蔵骨器が隣接して出土している。また、4号墓と41号墓では、直径0.2～0.3m前後の楕円形を呈する土壙内に火葬骨が直接納められている。

・小型円形土壙内に火葬骨を納める

4-2号墓・5-3号墓・17-2号墓・17-3号墓・41-1号墓が該当する。検出状態としては、二者に大別できる。前述したように、方形土壙と対をなし、その上面より検出した事例と、蔵骨器に近接して検出した事例である。土壙の規模は、直径0.2m、深さ0.1～0.15m前後で、底面は比較的平坦な5-3号墓・17-3号墓と、丸底を呈する4-2号墓・41-1号墓に別けることができる。木製容器や布に包むなどの方法によって埋葬している可能性がある。

・ 方形土壌内に人骨を納める

0.7×0.9m、深さ0.2～0.5mの規模の方形の土壌内に人骨を納める事例で、13号墓・11号墓・29号墓・33号墓・34号墓・42号墓が該当する。この内、人骨の出土状態から33-1号墓・34号墓が北頭位、13号墓が西頭位、29号墓・33-2号墓が東頭位、11号墓が北東頭位である。

また、手足の骨の状態を観察すると、「仰臥屈葬」の可能性が高い。加えて、33-2号墓では鉄釘が検出されていることや、土壌と人骨の間には一定の隙間が存在することから、方形の木棺に納めていた可能性が高い。副葬品は、硯・亀形土製品・髪飾り・眼鏡・銅銭など村松家墓塔群中の埋葬形態の中では、最も豊富である。

・ 方形土壌

0.7×0.7～0.9m、深さ0.2～0.4mの規模の方形土壌である。21号墓・22号墓・29号墓・37号墓が該当する。基本的には、先述した「方形土壌内に人骨を納める」形態と同一であることから、人骨の残存状況に左右された結果の差であると考ええる。遺構及び遺物から、木棺の痕跡を確認できるものはない。

唯一、37号墓の底面付近より中国渡来銅銭を検出しており、戦国期に遡る土壌である。

・ 二段掘の方形土壌内に蔵骨器を納める

8号墓に唯一確認できる特殊な埋葬形態である。まず、上層は0.85×0.9m、深さ0.5mの方形の土壌を掘削し、その内部に、平瓦を立て、0.6×0.7m四方を囲んでいる。瓦による蓋及び、底部は存在しない。

但し、上層の土壌底面には更に0.35×0.55m、深さ0.3mのひとまわり小規模の長方形土壌を掘削し、内部に2点の蔵骨器を納め下層埋葬施設としている。この下層土壌の上面には、平瓦2枚を用いて蓋と成しており、全体として複雑な構造を呈する。

上層土壌内部の、平瓦で囲われた範囲内には、鉄釘と人骨が確認できることから、本来は方形の木棺に人骨を納めていた可能性が高い。

その他、副葬品としては、鞘に納めた小刀が確認でき、鋒を東に向け、ほぼ東西方向に配置している。

・ 楕円形土壌

0.7×0.9m、深さ0.2～0.4m前後の規模を呈する不正円形の土壌墓である。5号墓・14号墓・19号墓・43号墓が該当する。

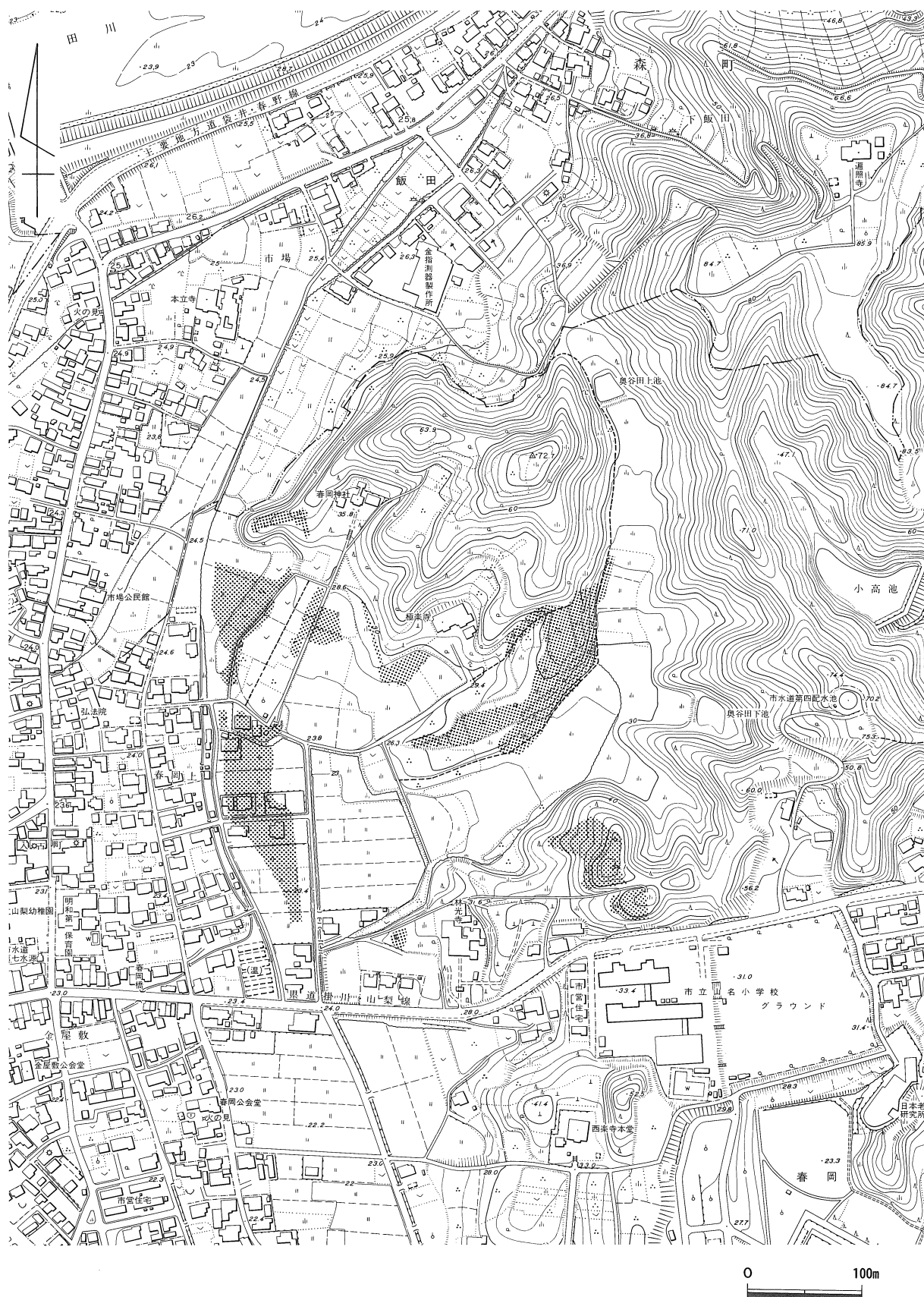
唯一、頭部の人骨を確認した14号墓の事例では、北頭位である。人骨を検出していない43号墓は不明であるが、火を受けていない人骨が土壌内から出土していることから、土葬の形態を取る埋葬施設である。

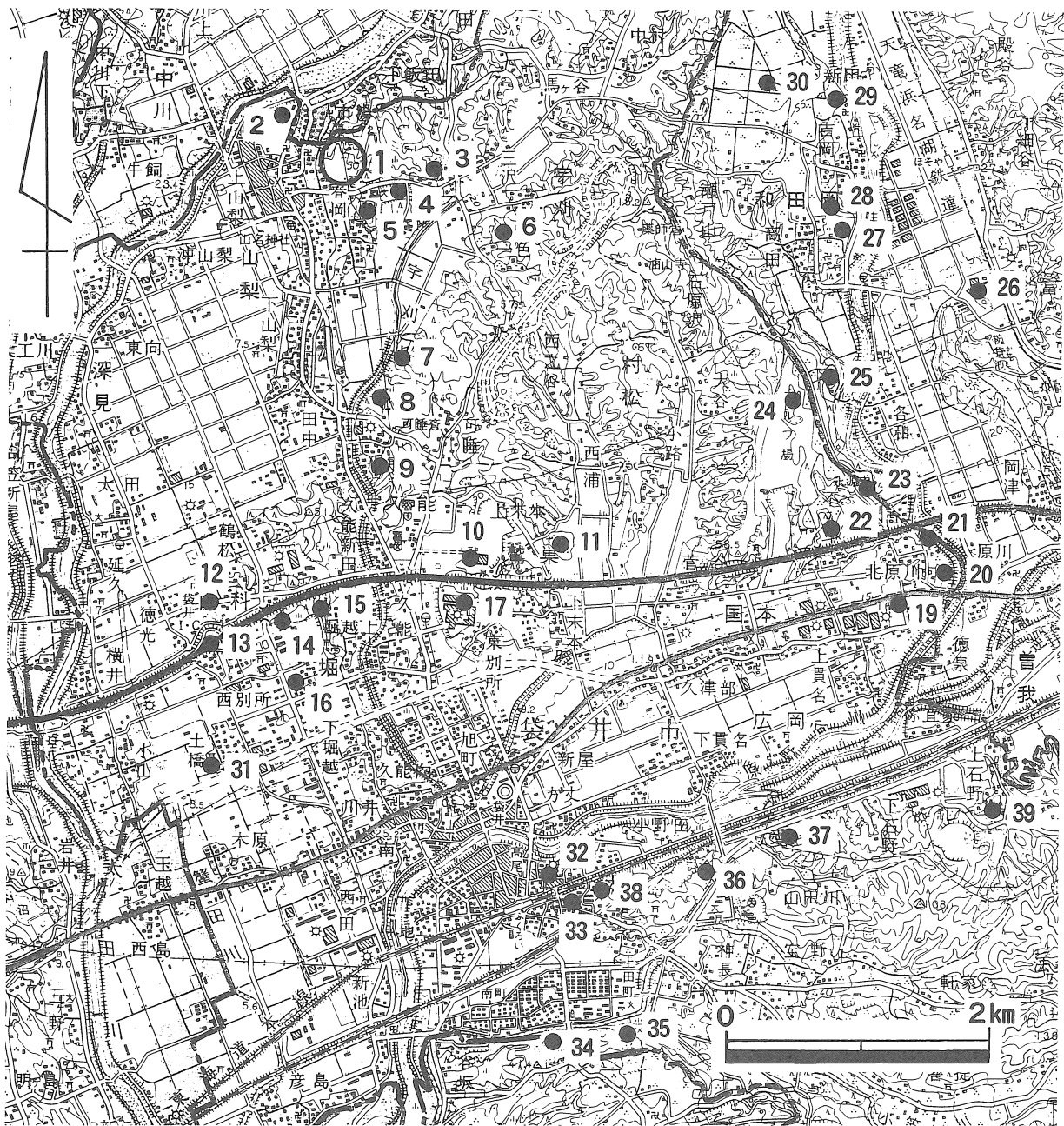
但し、14号墓では、土壌内の埋土から火葬骨片を検出している。検出状態の観察からすれば、本来何らかの形状の火葬骨を伴う埋葬施設の位置に、副次的に土葬を伴う土壌墓が配置され、攪乱した状況を呈していた。

【参考文献】

静岡県考古学会シンポジウム実行委員会	2001	『東海の横穴墓』	静岡県考古学会
静岡県考古学会	2003	『静岡県の横穴式石室』	静岡県考古学会
白澤 崇	2002	「古墳構築から見た静岡県の古墳」『静岡県考古学研究』No.34	静岡県考古学会
白澤・松井一明	1999	「袋井市本庄山砦の虎口について」『織豊城郭』第6号	織豊期城郭研究会
松井一明	1998	「袋井市春岡遺跡の水田跡」『第8回東日本の水田跡を考える会－資料集－』	東日本の水田跡を考える会・群馬大会実行委員会
白澤・松井一明	2002	「袋井市春岡遺跡の水田跡」『第10回東日本の水田跡を考える会－資料集－』	東日本の水田跡を考える会
松井一明ほか	1987	「静岡県愛野向山遺跡」『日本考古学年報』38	日本考古学協会
谷川章雄	1988	「近世墓標の類型」『考古学ジャーナル』NO.288・3月号	ニュー・サイエンス社
仙台市教育委員会	1987	「富沢－富沢遺跡第15次発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第98集	仙台市教育委員会
仙台市教育委員会	1991	「富沢遺跡－第30次調査報告書第Ⅰ分冊－縄文～近世編」『仙台市文化財調査報告書』第149集	仙台市教育委員会
静岡県袋井市教育委員会	1999	『石ノ形古墳』	静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井市教育委員会	1991	『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』	静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井市教育委員会	1996	『高尾向山遺跡Ⅱ』	静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井市教育委員会	1987	『大門大塚古墳－昭和61年度基礎資料収集調査報告書－』	静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井市教育委員会	1995	『坂尻遺跡－大和ハウス工業(株)中部工場内埋蔵文化財発掘調査報告書－』	静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井市教育委員会	1992	『袋井市春岡遺跡－区画整理事業に伴う春岡遺跡及び周辺遺跡所在確認調査報告書－』	静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井市教育委員会	1998	『はるおか遺跡群－見えてきた昔の春岡－』袋井市春岡地区区画整理事業に伴う春岡遺跡群発掘調査概要報告書	静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井市教育委員会 ・袋井市役所建設経済部 区画整理課	2002	『平成13年度 掛之上遺跡』	静岡県袋井市教育委員会
静岡県袋井市教育委員会 ・財団法人元興寺文化財 研究所	1994	『団子塚九号墳 出土遺物保存処理報告書』	静岡県袋井市教育委員会
建設省中部地方建設局・ 静岡県教育委員会・袋井 市教育委員会	1985	『土橋遺跡－基礎資料編－』一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書	静岡県袋井市教育委員会

実測図版





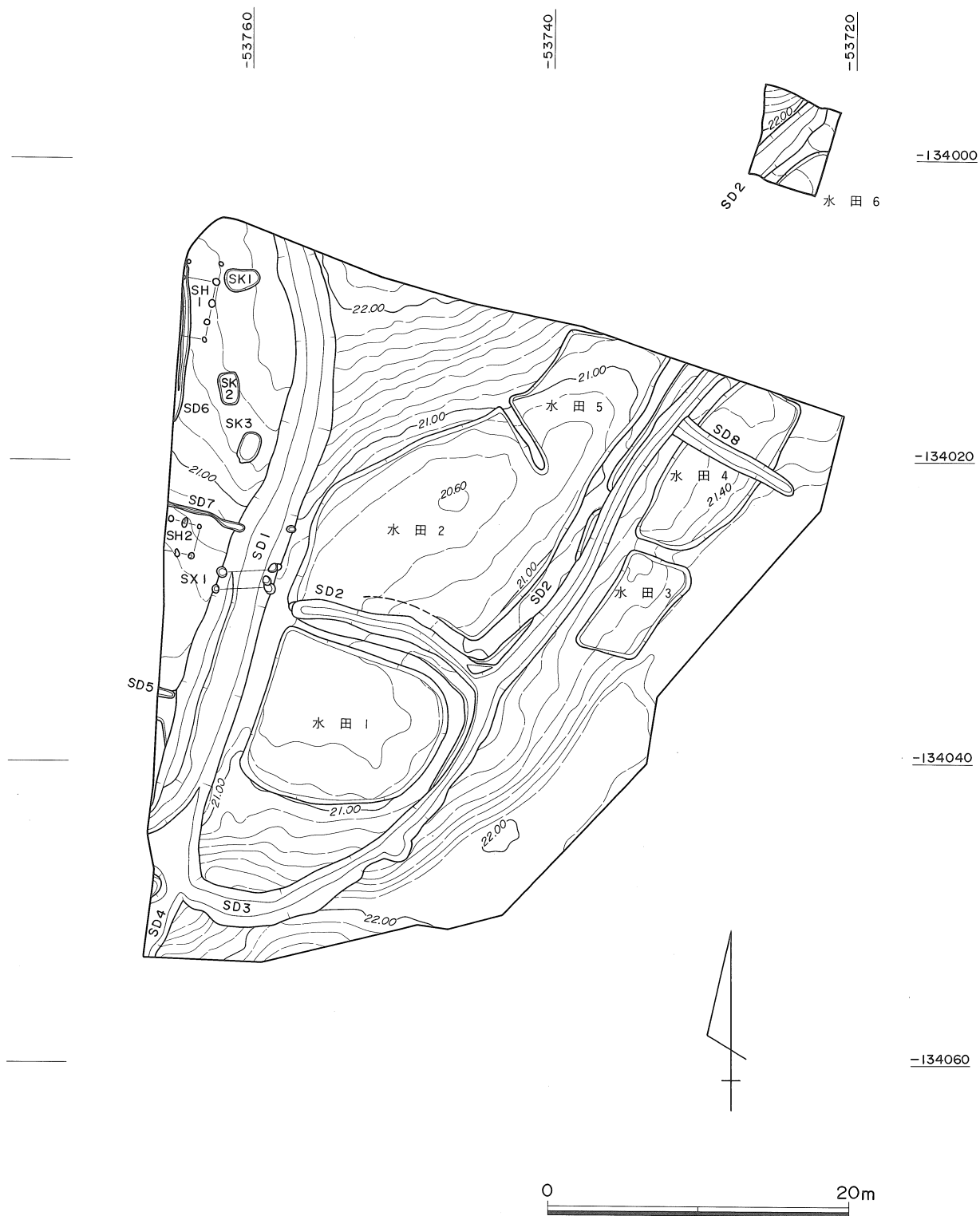
- | | | | |
|------------|--------------|-----------|------------|
| 1 春岡遺跡群 | 11 久野城 | 22 権現山古墳 | 32 掛之上遺跡 |
| 2 稻荷領家遺跡 | 12 鶴松遺跡 | 23 山下遺跡 | 33 大門大塚古墳 |
| 3 三沢古墳群 | 13 徳光遺跡 | 24 菅ヶ谷横穴群 | 34 団子塚古墳群 |
| 4 宇刈横穴群 | 14 ズン坂横穴群 | 25 各和金塚古墳 | 35 高尾向山遺跡 |
| 5 西樂寺 | 15 八幡山横穴群 | 26 高代山4号墳 | 36 金山横穴群 |
| 6 一色前田遺跡 | 16 堀越シヨウマ遺跡 | 27 瓢塚古墳 | 37 愛野向山遺跡 |
| 7 川田・藤蔵淵遺跡 | 17 東別所1号墳 | 28 行人塚古墳 | 38 地藏ヶ谷横穴群 |
| 8 春岡1号墓 | 19 坂尻遺跡 | 29 春林院古墳 | 39 若作古墳群 |
| 9 道ヶ谷横穴群 | 20 石ノ形古墳 | 30 吉岡大塚古墳 | |
| 10 東山6号墳 | 21 宇佐八幡境内1号墳 | 31 土橋遺跡 | |

第2図 周辺遺跡分布図

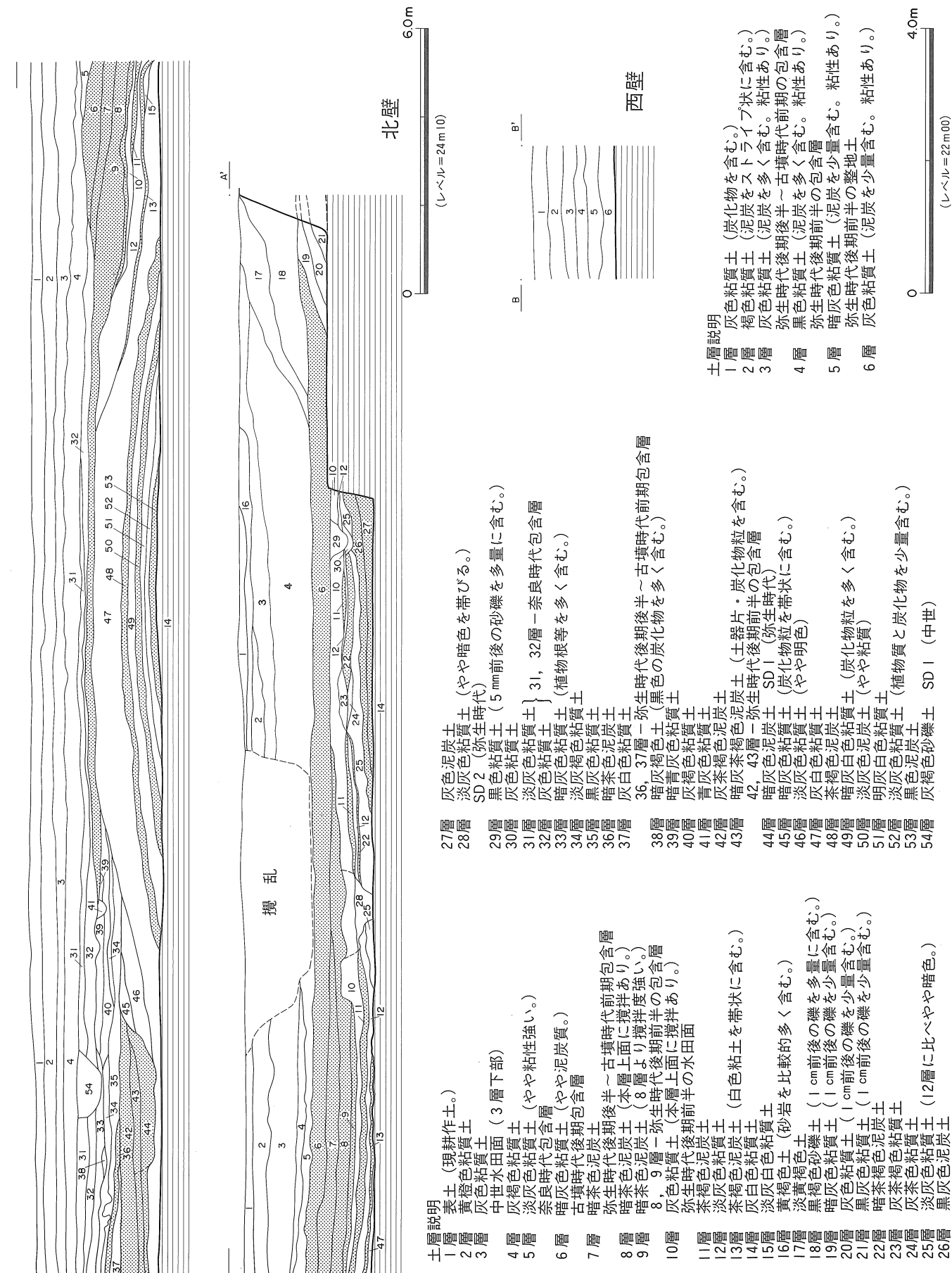




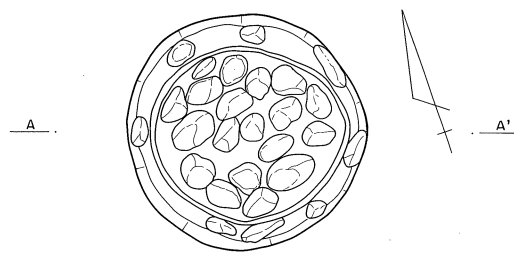
第5図 A地区第2面（奈良）全体図



第6図 A地区第3面（弥生）全体図

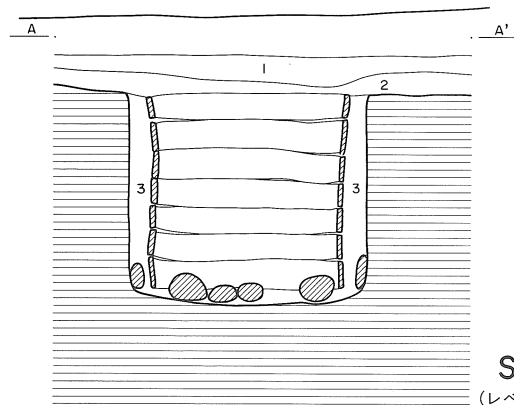


第7図 A地区北壁・西壁土層断面実測図

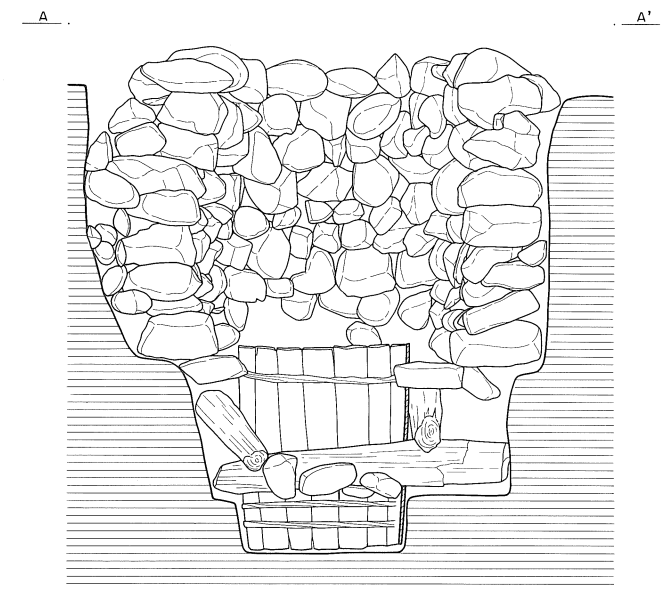
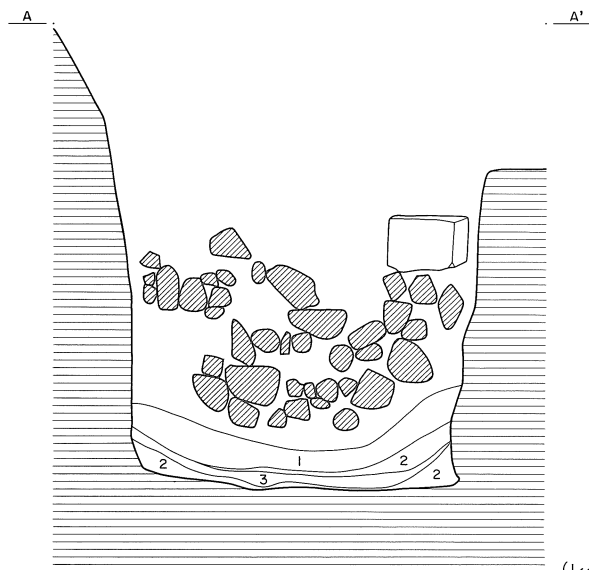
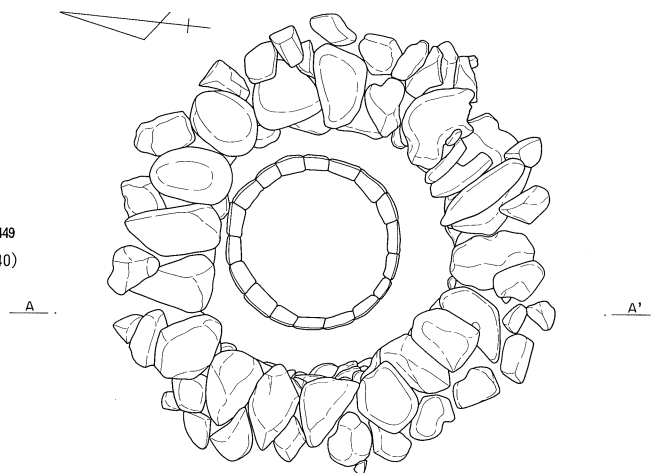
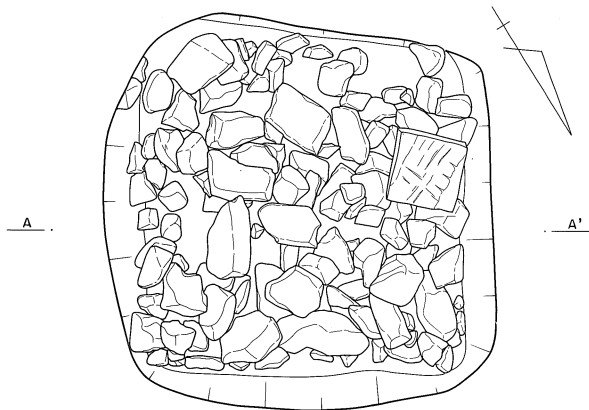


土層説明

- 1層 黒色粘質土(砂礫を含む。)
- 2層 黒色粘質土(攪拌の認められる泥炭を含む。)
- 3層 暗灰色粘質土(砂利を含む。)



SE1 W449
(レベル=22m40)



SE3
(レベル=23m90)

土層説明

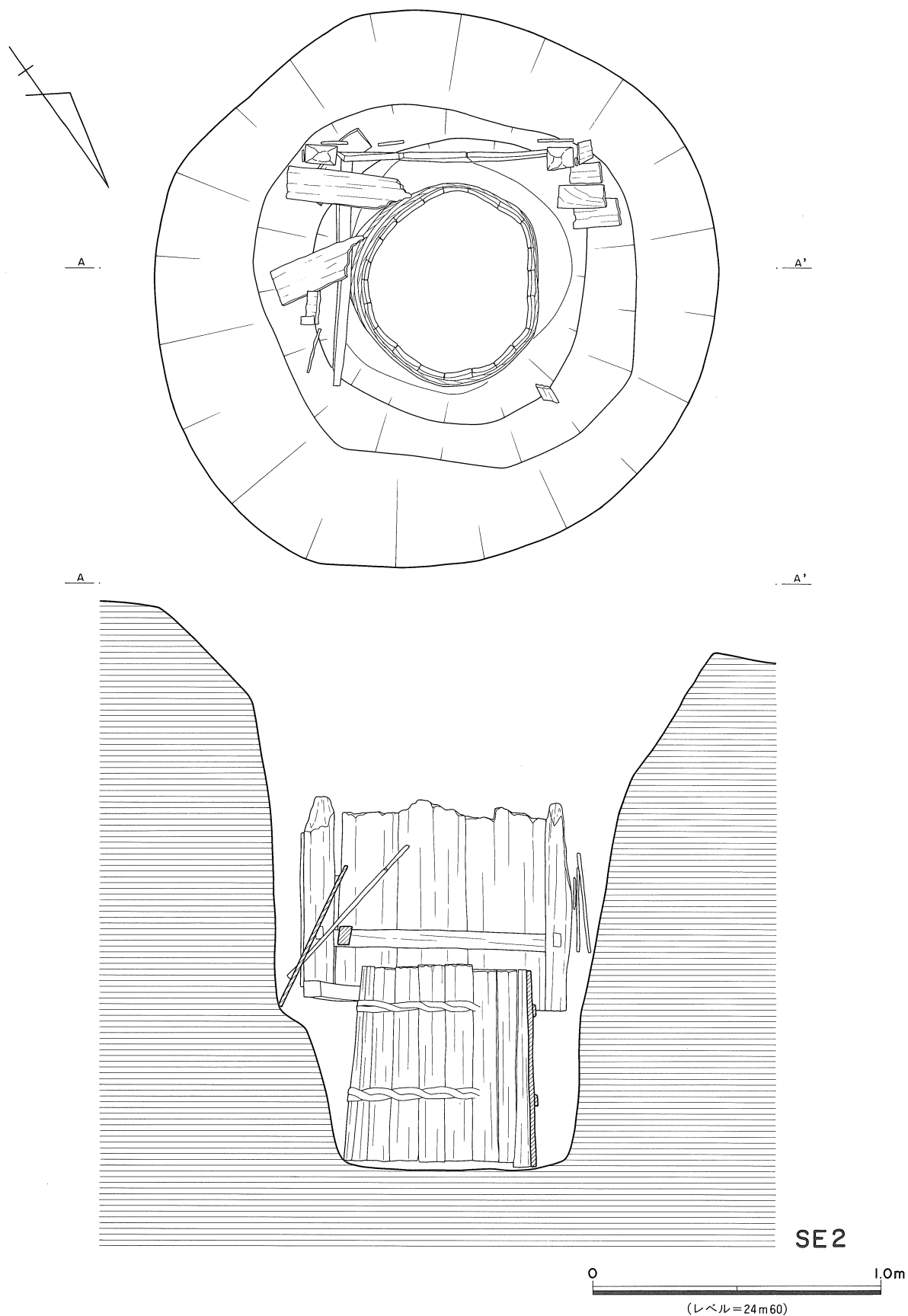
- 1層 黒色灰層(炭化物を含む。)
- 2層 黄色土層
- 3層 黒色灰層(黄色土ブロックを含む。)

SX11

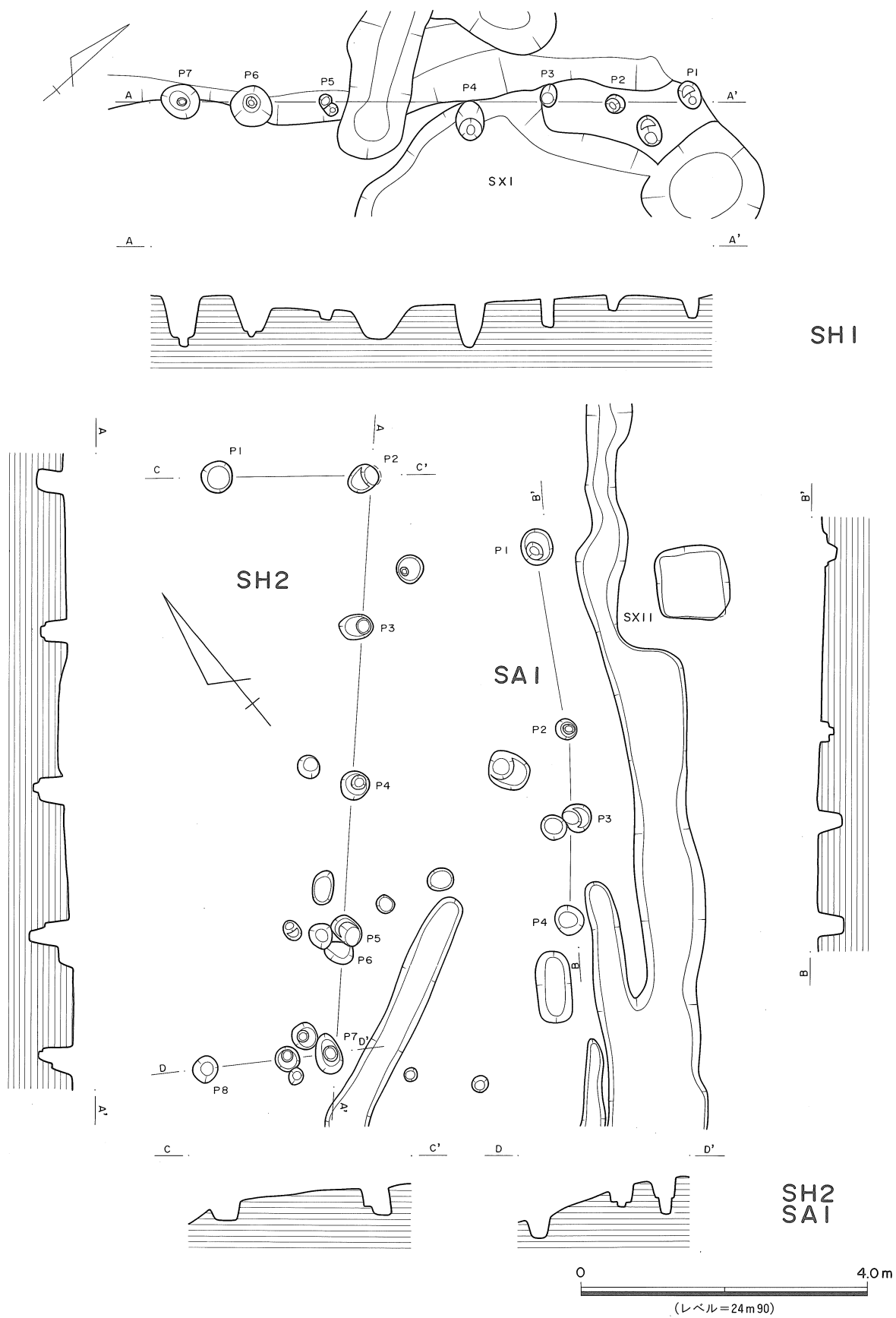
(レベル=25m10)



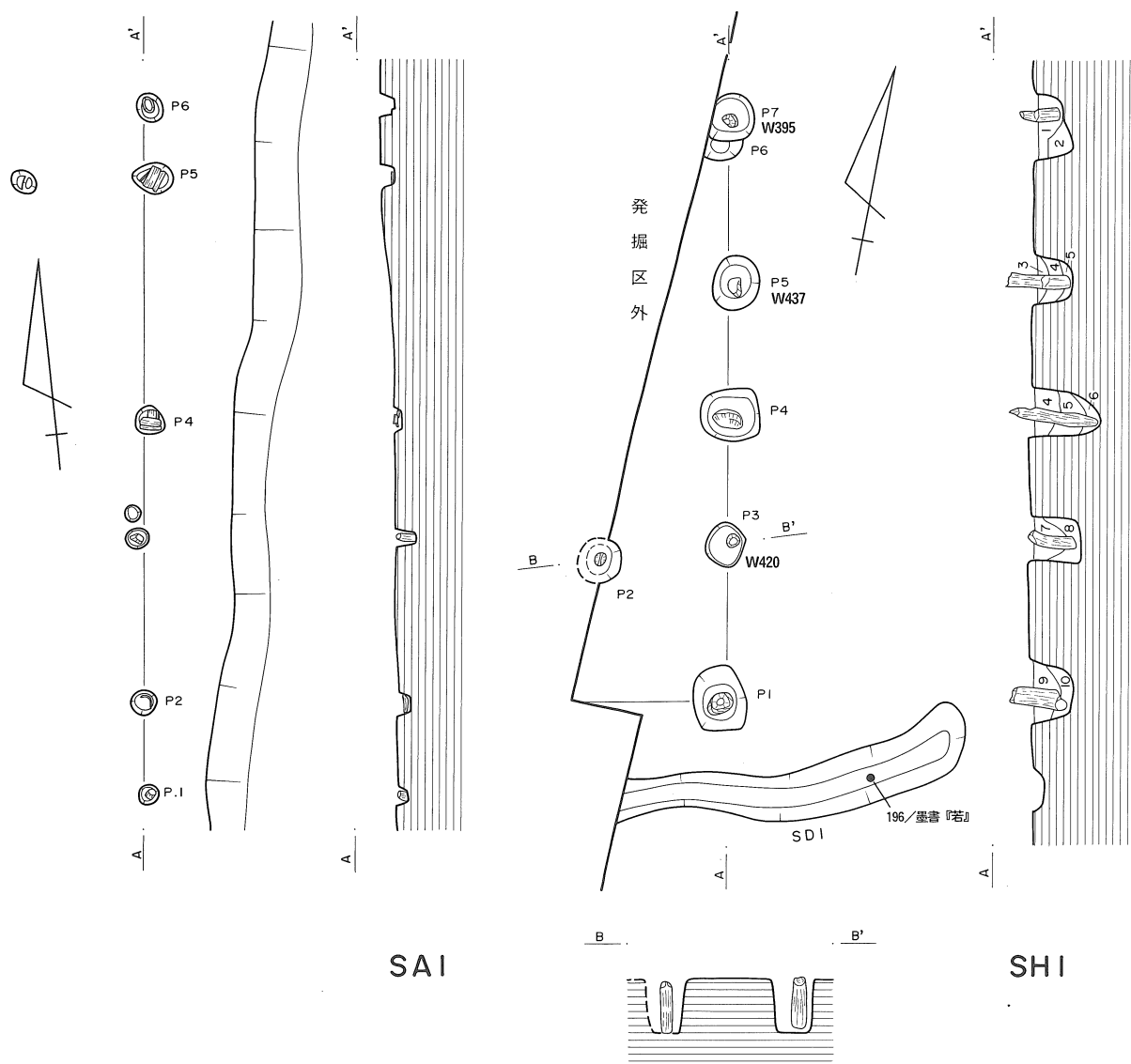
第8図 A地区第1面(中世)SE1・3・SX11遺構実測図



第9図 A地区第1面（中世）S E 2遺構実測図



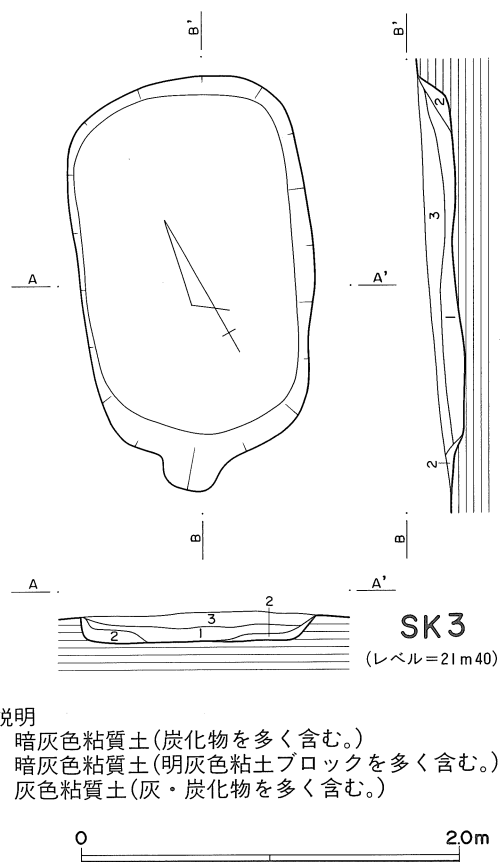
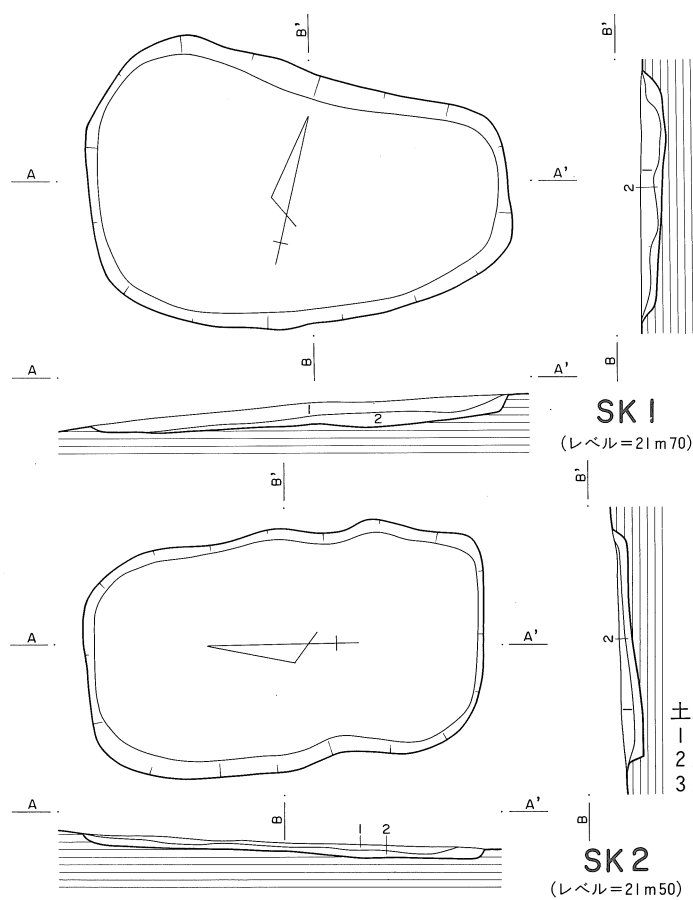
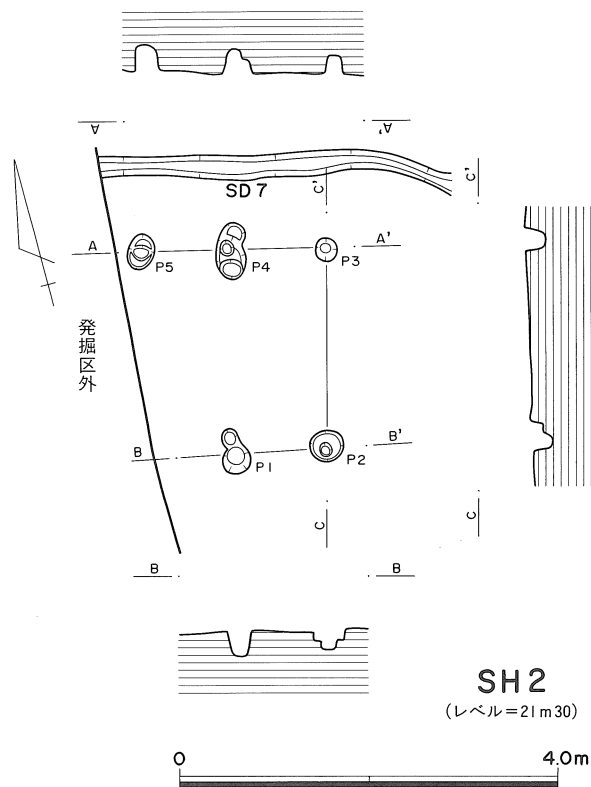
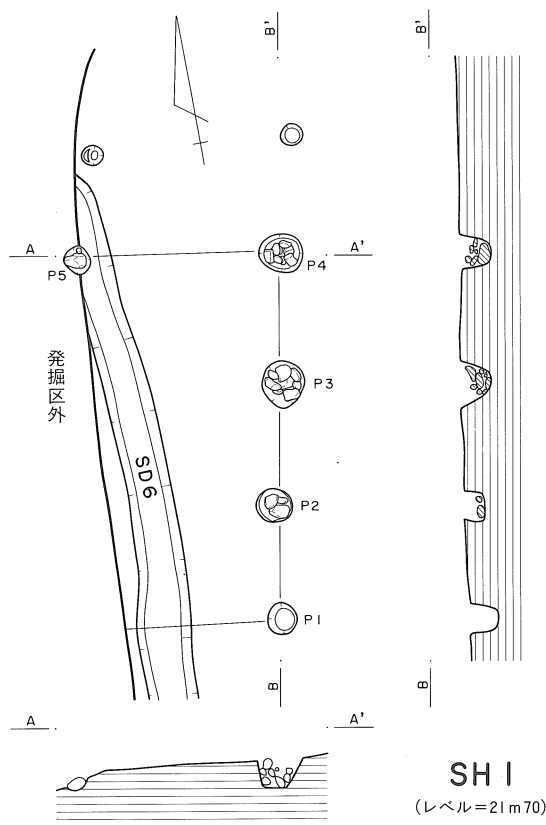
第10図 A地区第1面（中世）SH1・2・SAI遺構実測図



土層説明

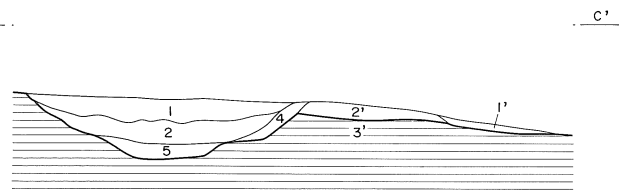
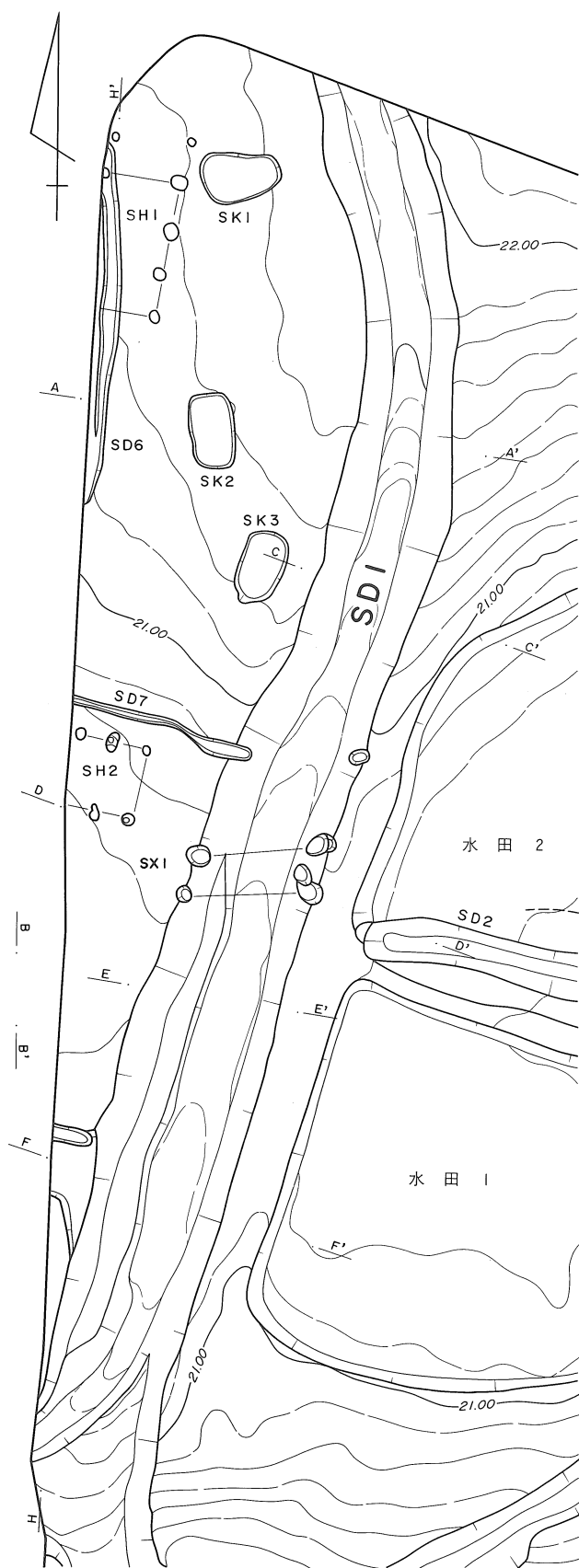
- 1層 暗青灰色粘質土（炭化物を多く含む。）
- 2層 暗灰色粘質土（炭化物と黄褐色土ブロックを含む。）
- 3層 明灰色粘質土
- 4層 暗灰色粘質土（炭化物を多く含む。）
- 5層 淡灰色粘質土
- 6層 淡灰褐色粘質土（炭化物を多く含む。）
- 7層 灰色粘質土（炭化物を少量含む。）
- 8層 暗灰色粘質土
- 9層 明灰褐色粘質土（炭化物を多量に含む。）
- 10層 暗灰褐色粘質土

第12図 A地区第2面（奈良）SH1・SA1遺構実測図

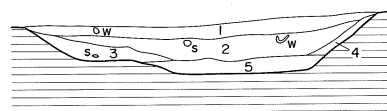


土層説明
 1層 暗灰色粘質土(炭化物を多く含む。)
 2層 暗灰色粘質土(明灰色粘土ブロックを多く含む。)
 3層 灰色粘質土(灰・炭化物を多く含む。)

第13図 A地区第3面(弥生) SH1・2・SK1~3遺構実測図

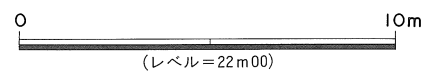
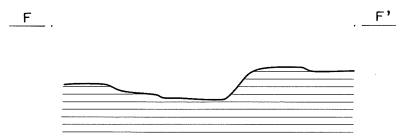
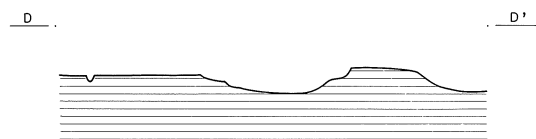
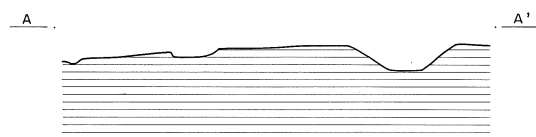
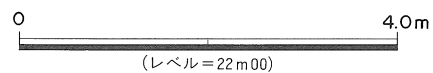


E E'

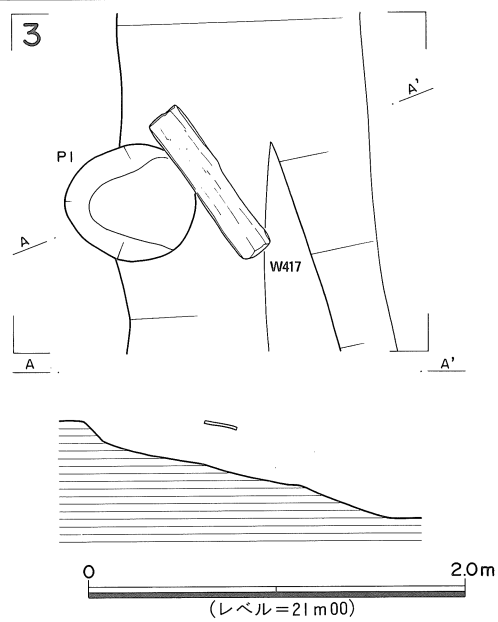
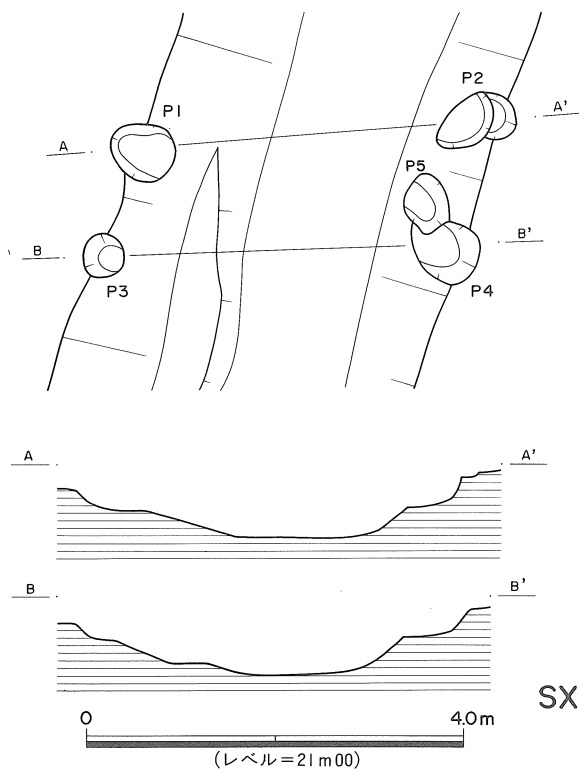
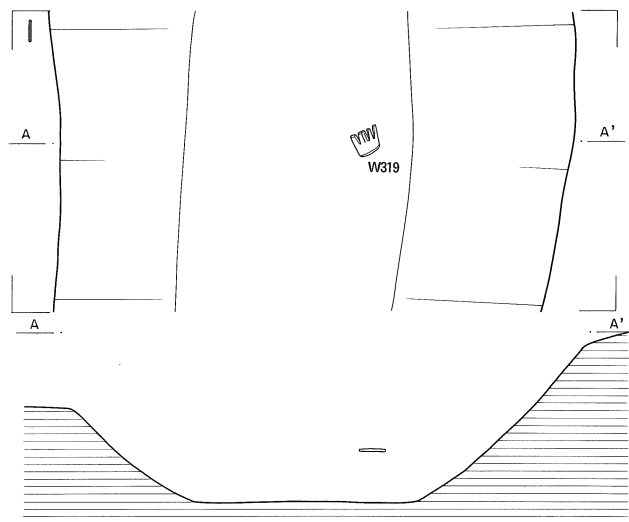
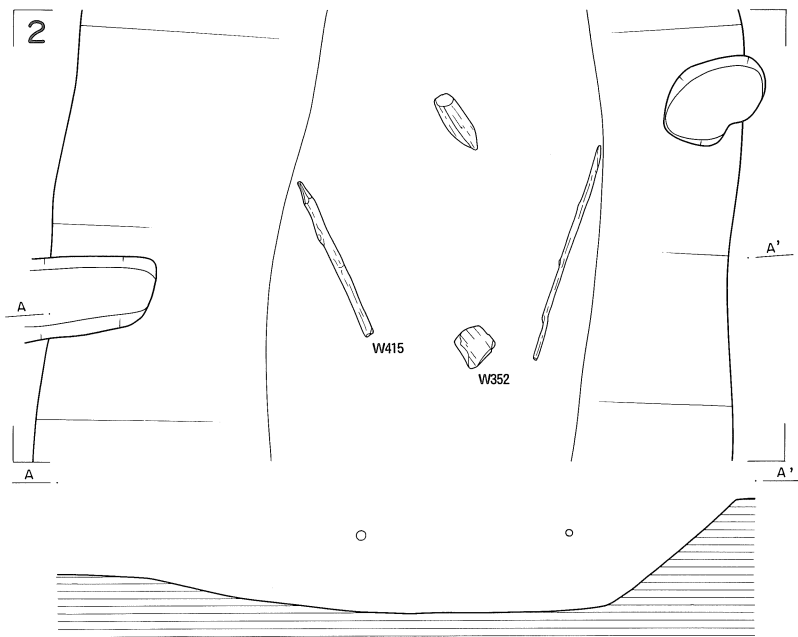
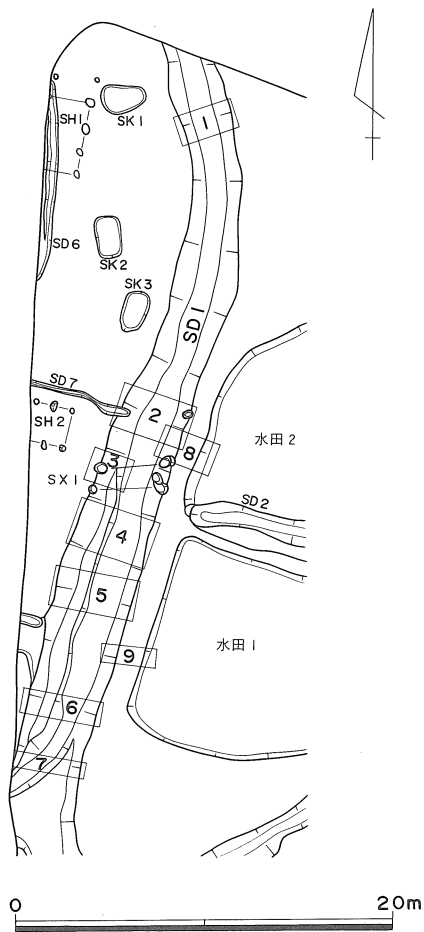


土層説明

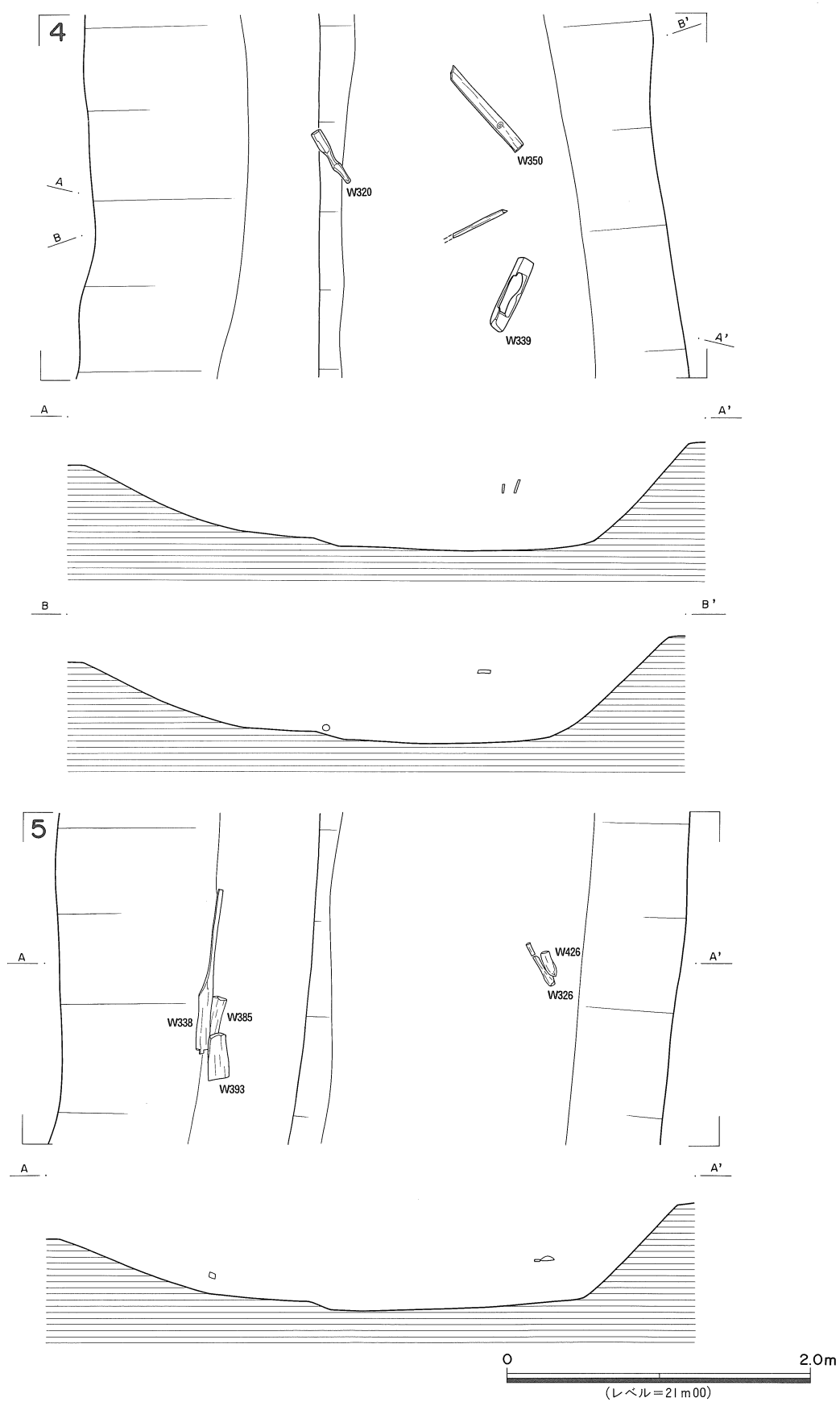
- 1 層 暗茶褐色泥炭土
- 2 層 暗灰色粘質土(土器・木製品を多く含む。)
- 3 層 灰色粘質土
- 4 層 灰褐色粘質土(炭化物・植物質を多く含む。)
- 5 層 淡灰色粘質土(底面に近づくときやや砂質性を増す。)
- 1' 層 暗灰色粘質土
- 2' 層 褐色粘質土
- 3' 層 暗灰色粘質土



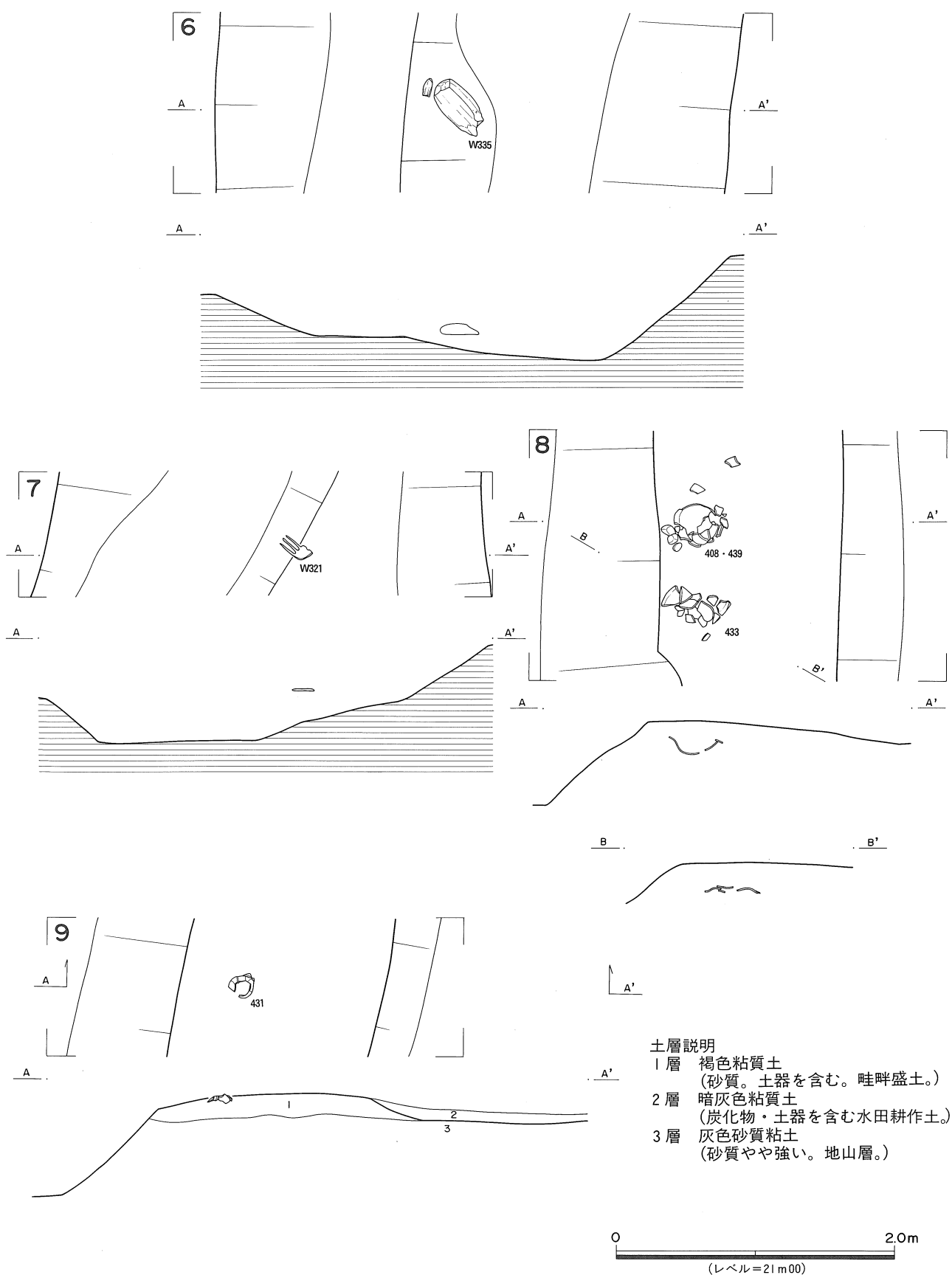
第14図 A地区第3面(弥生)SD1遺構実測図



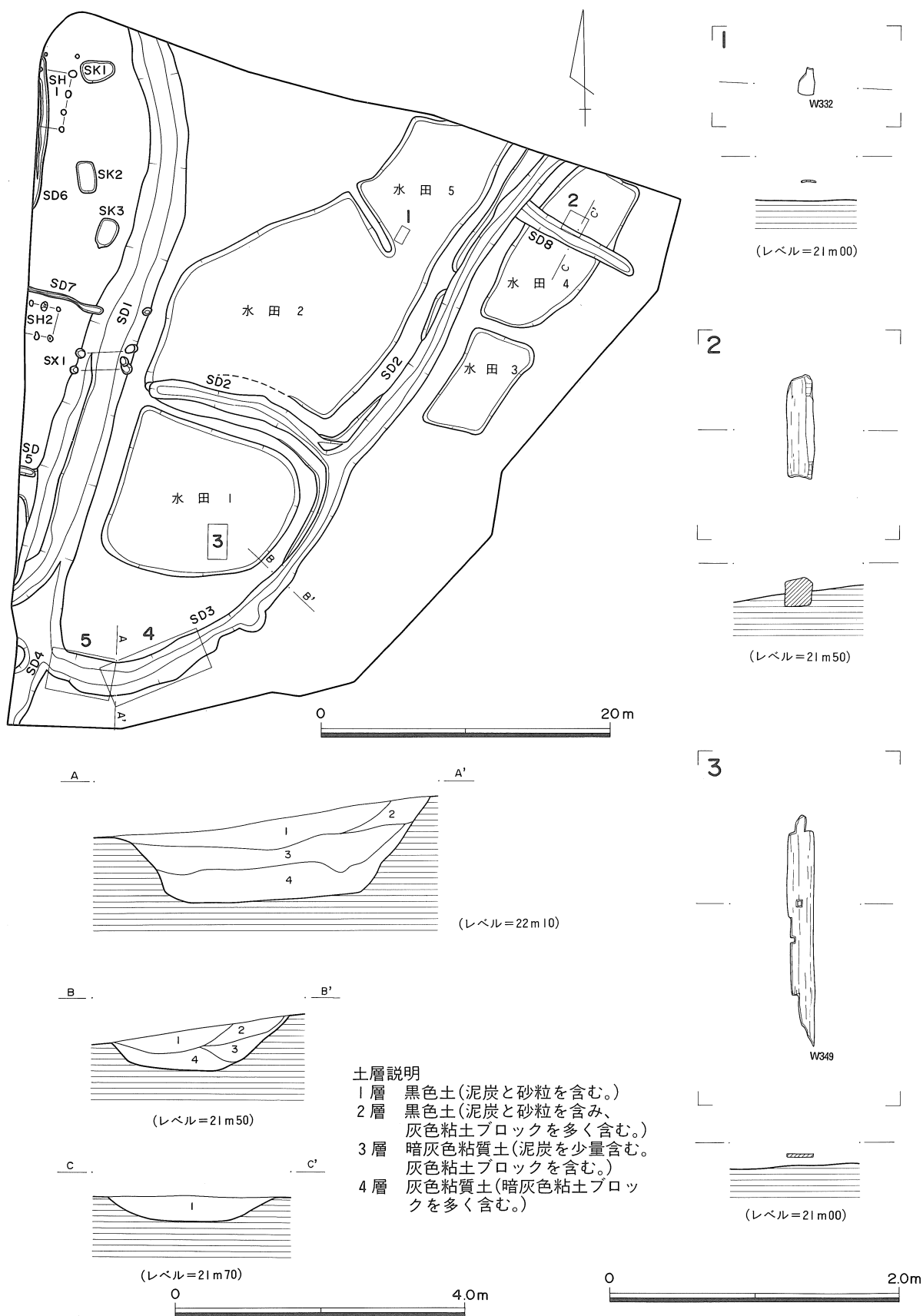
第15図 A地区第3面(弥生)SD1・SX1遺物出土状況実測図1



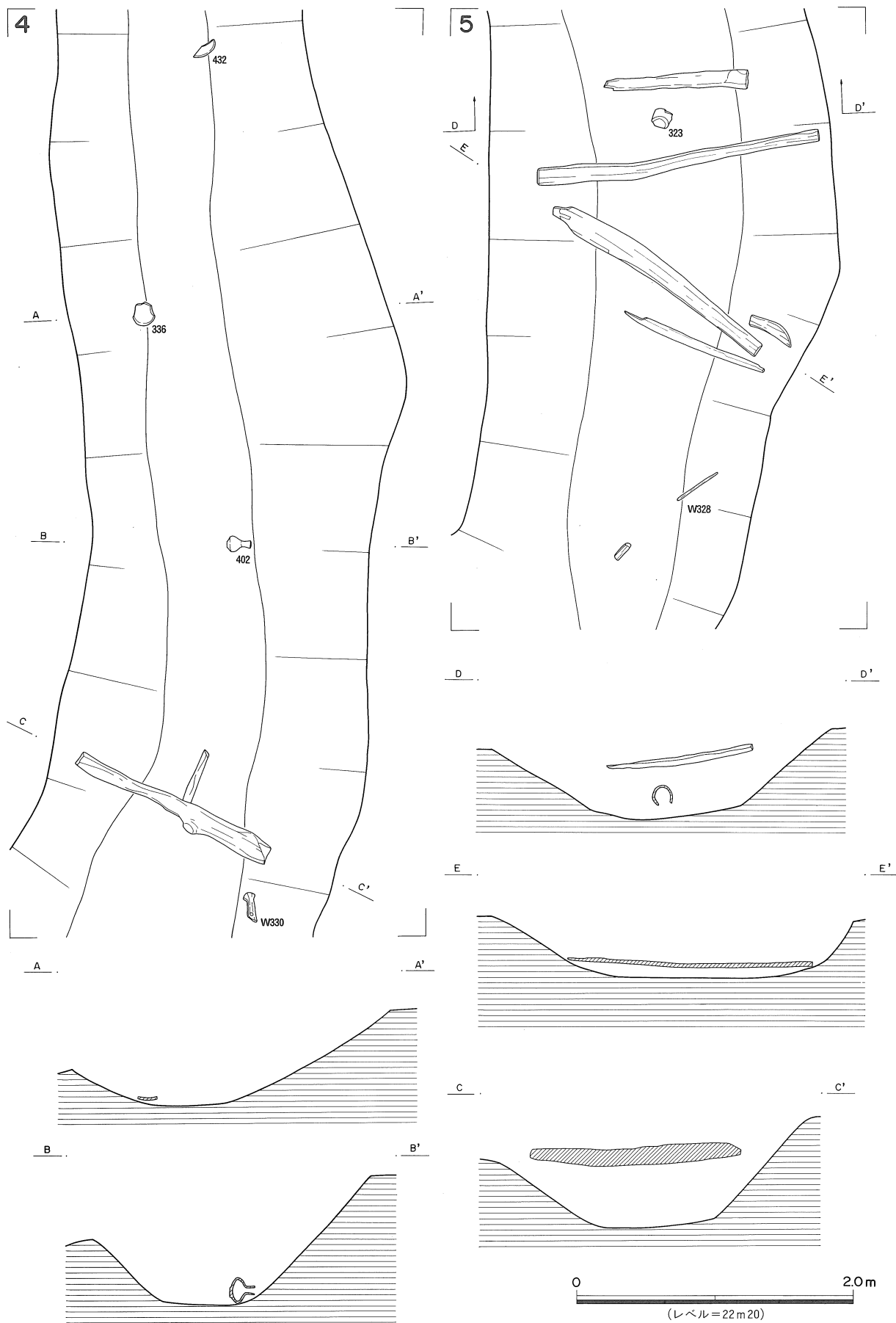
第16図 A地区第3面（弥生）S D1遺物出土状況実測図2



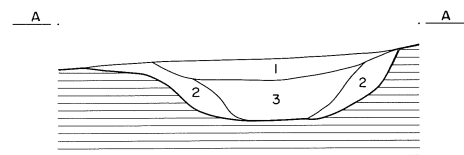
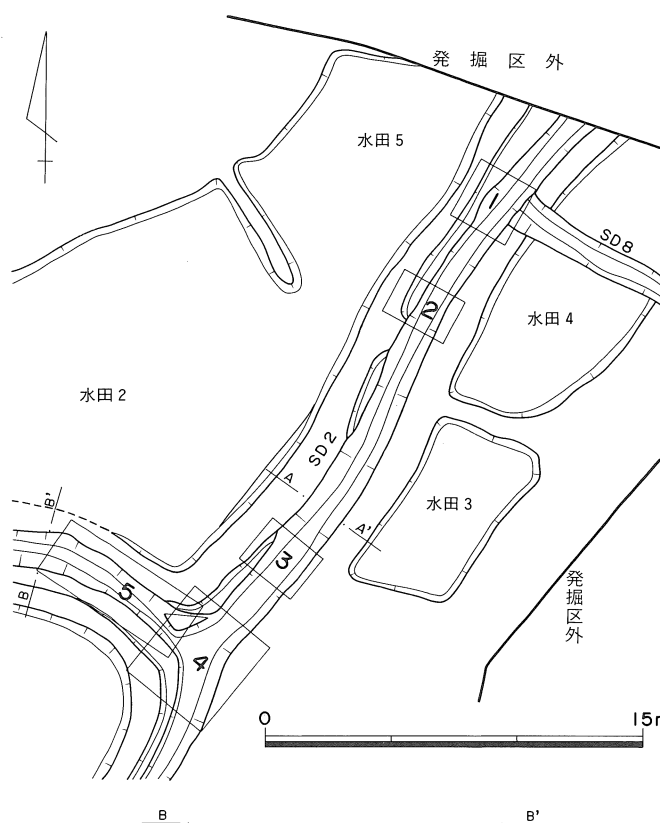
第17図 A地区第3面(弥生) S D1遺物出土状況実測図3



第18図 A地区第3面(弥生)SD2・3遺物出土状況実測図1

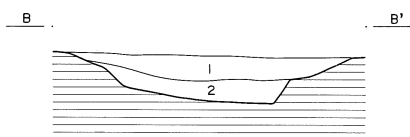
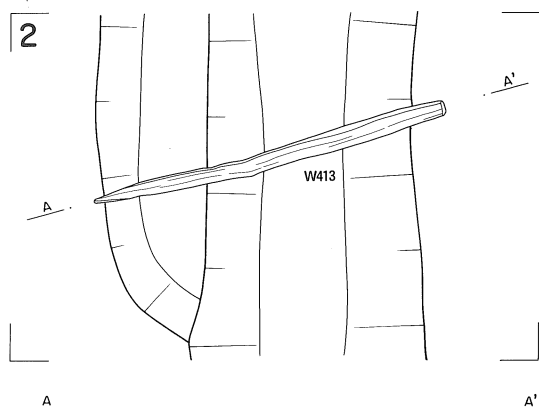


第19図 A地区第3面（弥生）S D2・3遺物出土状況実測図2



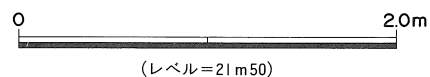
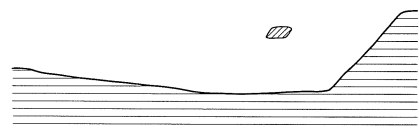
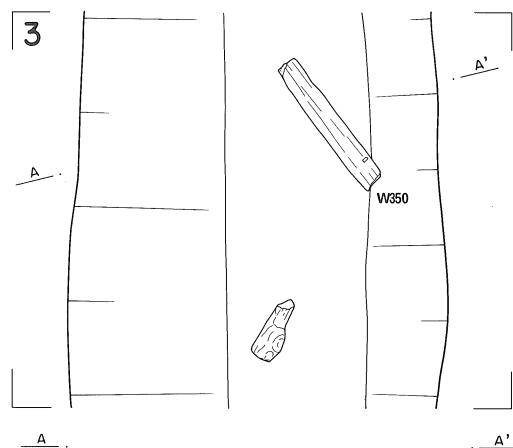
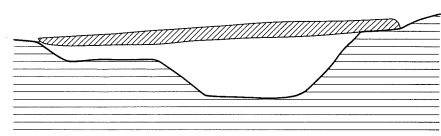
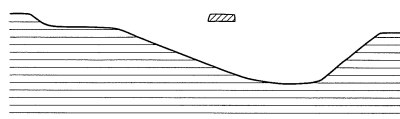
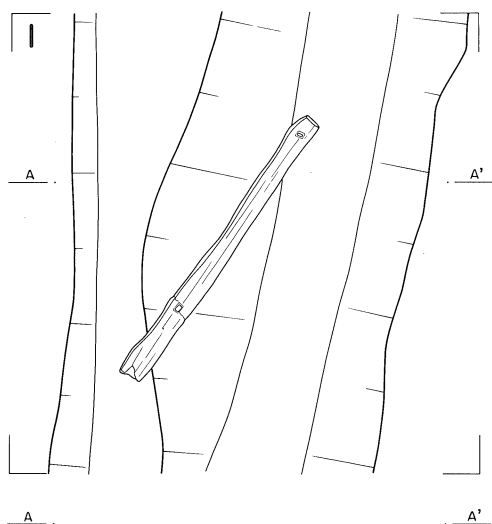
土層説明

- 1層 黒色土(灰色粘土ブロックを含む。
泥炭を含むやわらかい層。)
- 2層 灰色粘質土(黒色粘土ブロックを少量含む。
粘性あり。)
- 3層 暗灰色粘質土(灰色粘土ブロックを含む。)

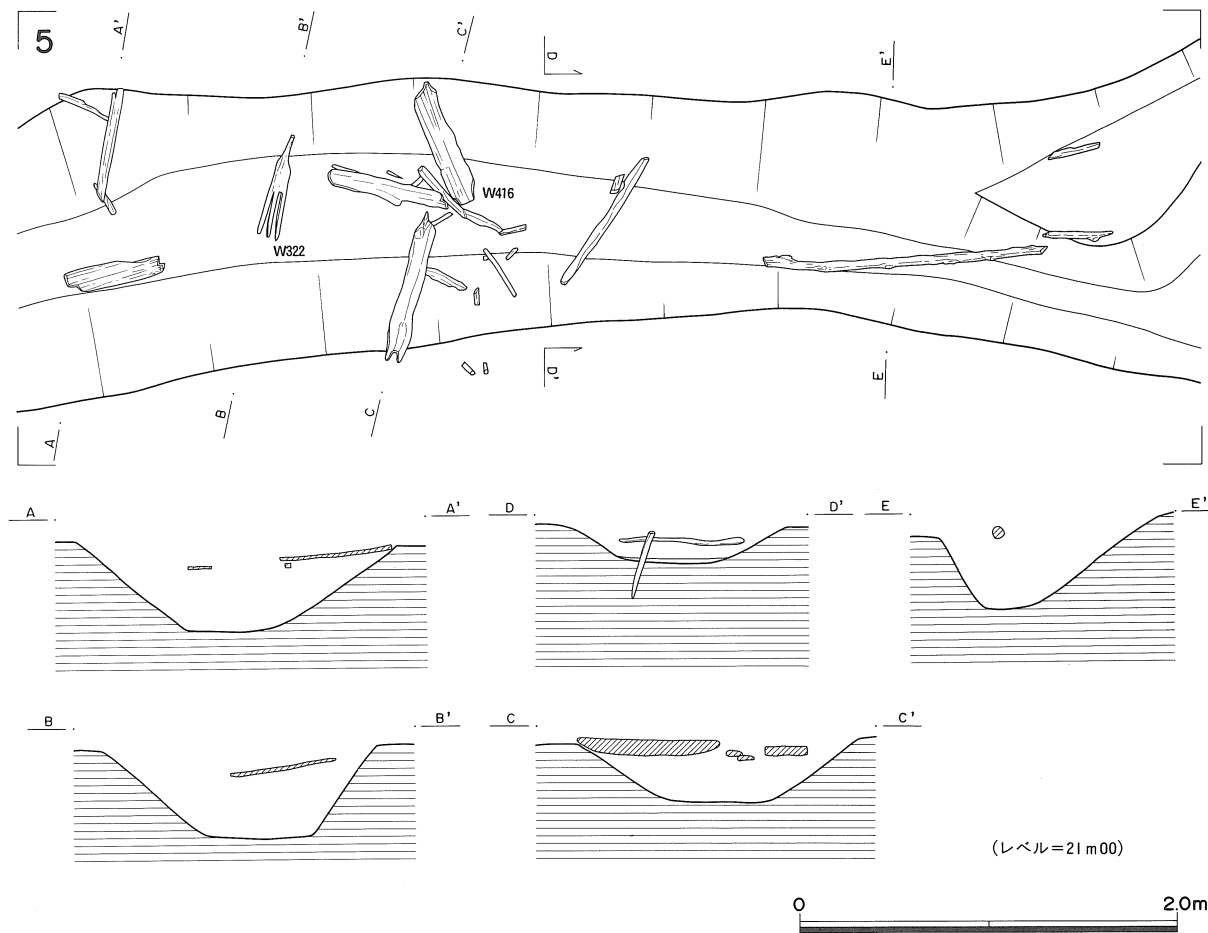
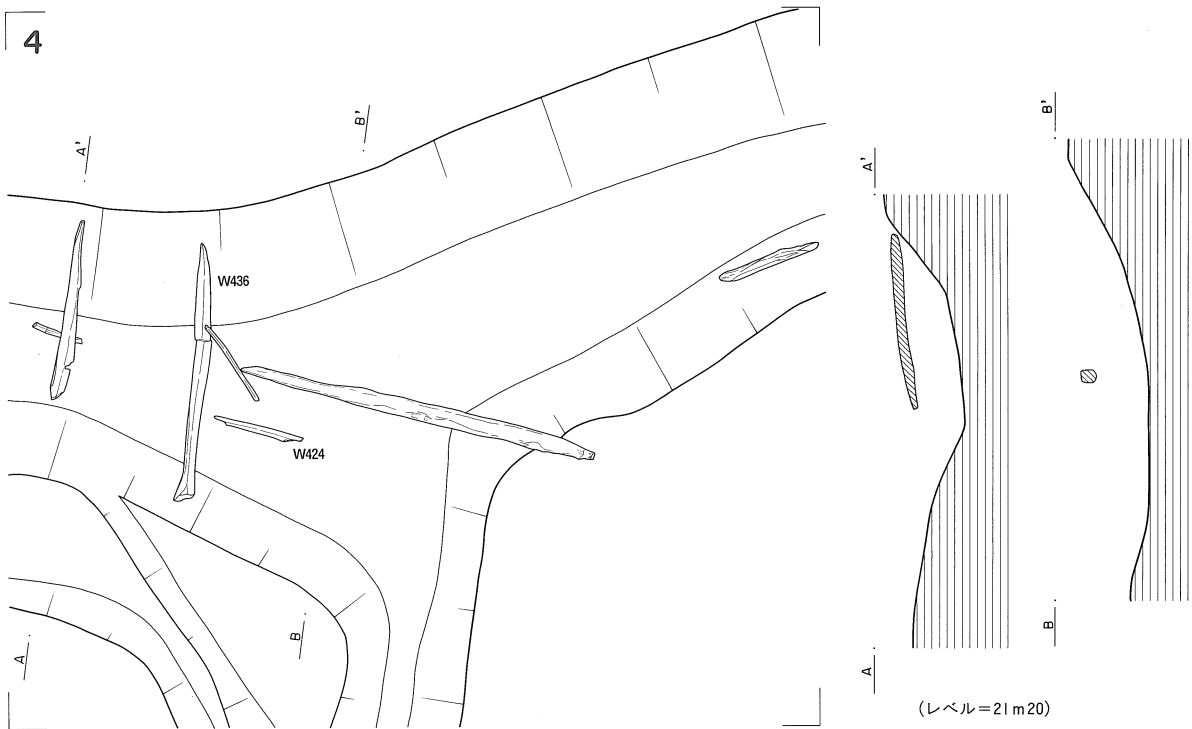


土層説明

- 1層 黒茶色泥炭土(木製品・土器を多く検出。)
- 2層 暗灰色粘質土(炭化物粒を多く含む。)



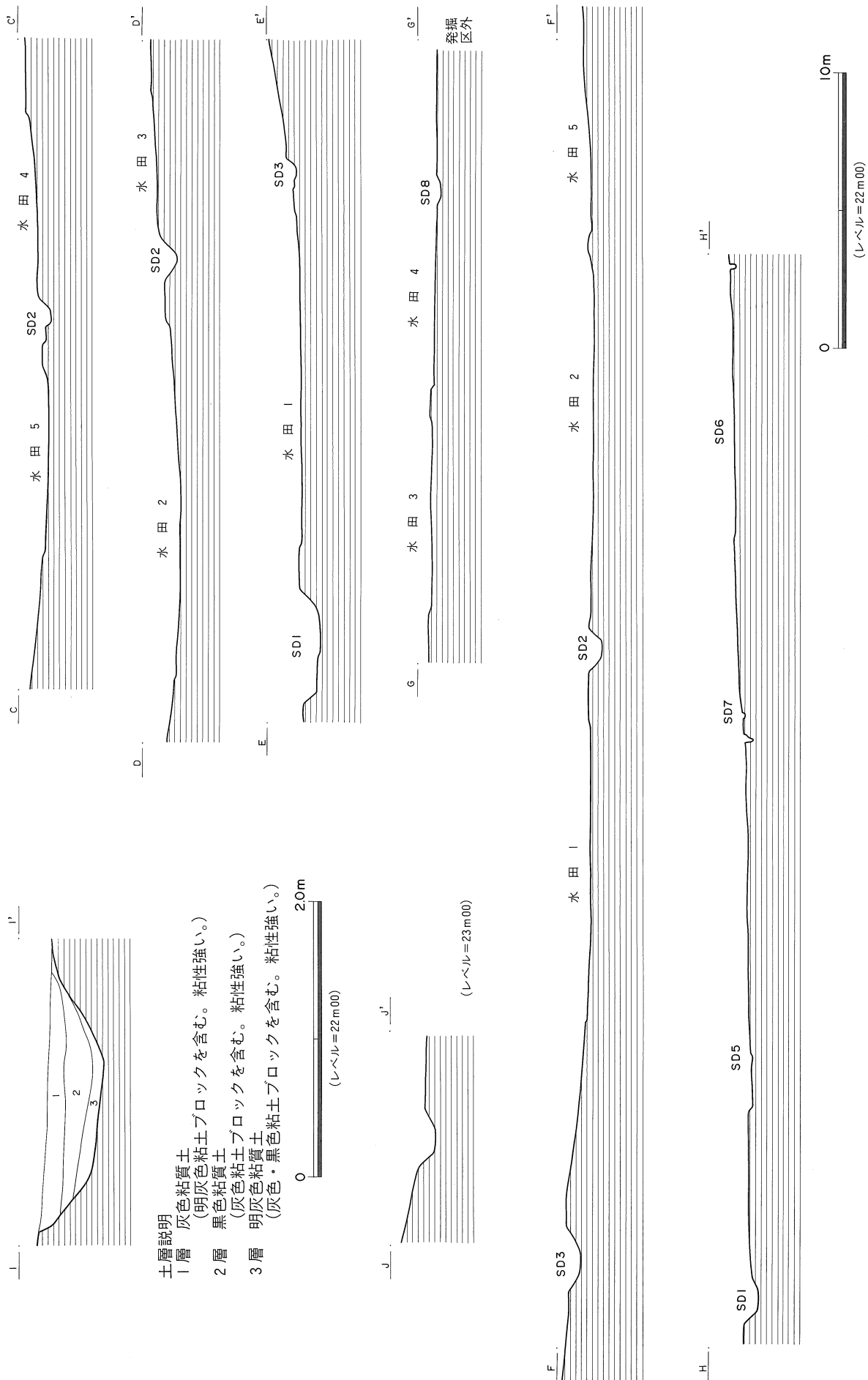
第20図 A地区第3面(弥生) S D 2・3遺物出土状況実測図3

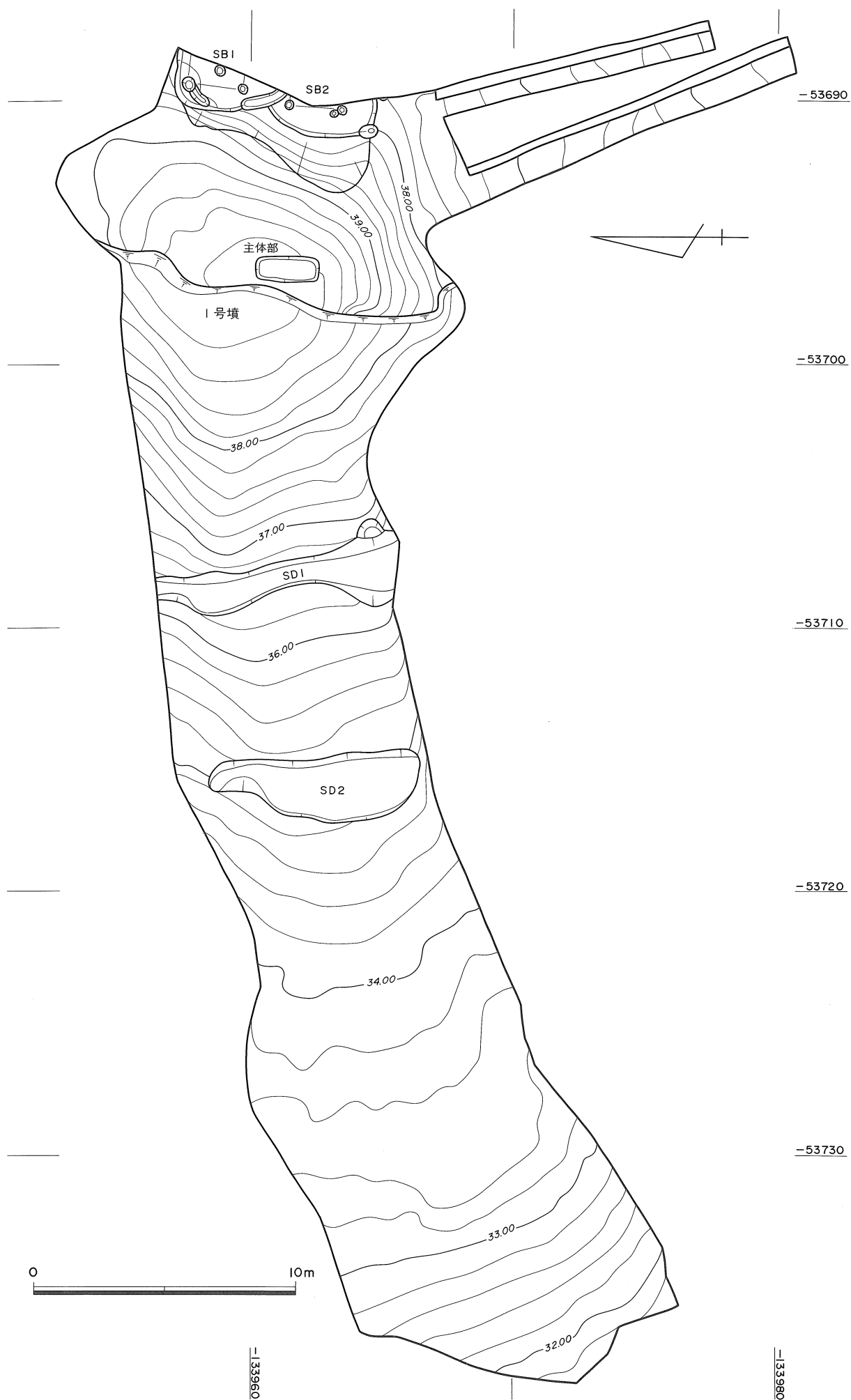


第21図 A地区第3面（弥生）S D2・3遺物出土状況実測図4

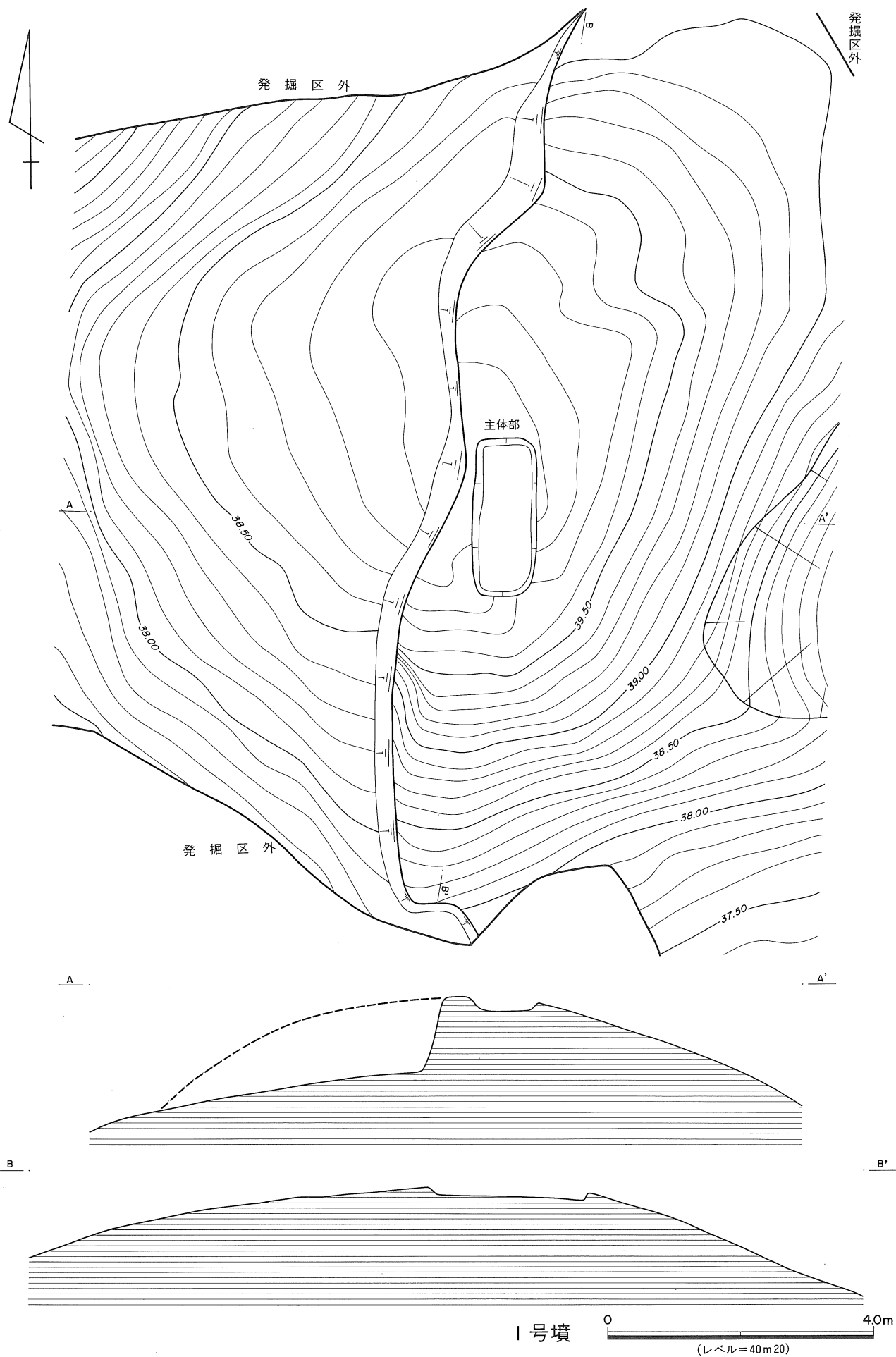


第22図 A地区第3面（弥生）水田遺構実測図

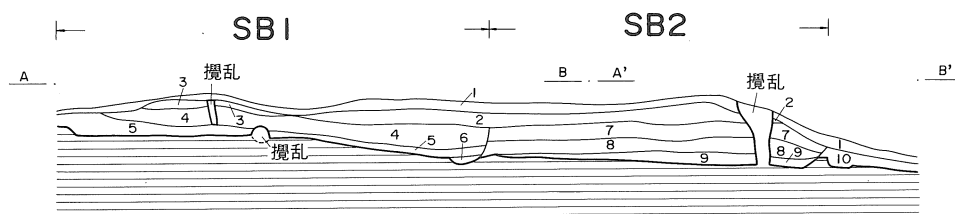




第24図 B地区全体図



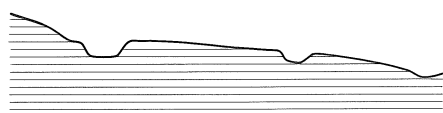
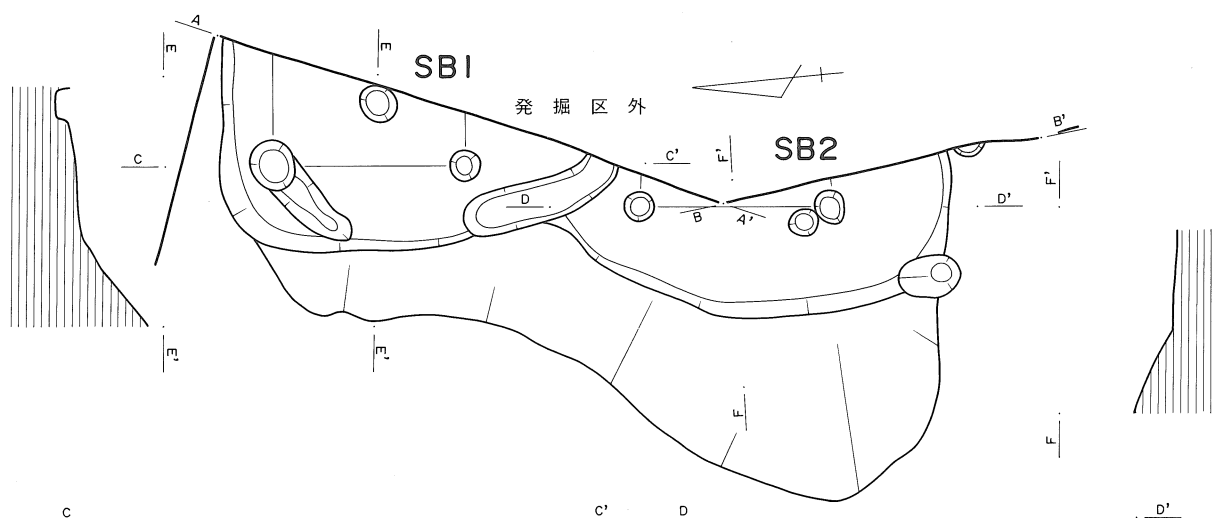
第25図 B地区1号墳遺構実測図



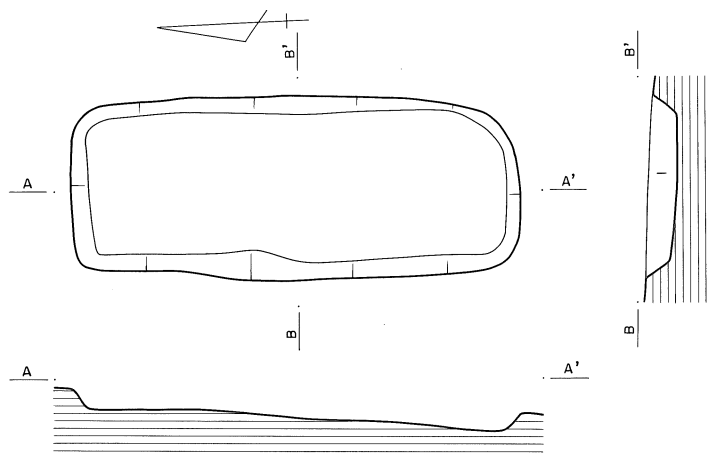
土層説明

- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1層 表土 | 6層 黒褐色土（やや粘性。礫を若干含む。） |
| 2層 灰褐色土（砂質。やわらかい層。礫を含む。） | 7層 灰黄褐色土（砂質。礫を少量含む。） |
| 3層 灰褐色土（2とほぼ同質。若干礫を多く含む。） | 8層 黒褐色土（やや粘性。かたい層。礫を含む。） |
| 4層 黄橙色土（砂質。礫を多く含む。） | 9層 暗褐色土（やや粘性。かたい層。礫を若干含む。） |
| 5層 暗灰黄色土（やや粘性。礫を含む。） | 10層 灰黄褐色土（砂質。腐色土層。礫を少量含む。） |

0 4.0m
(レベル=33m70)



0 4.0m
(レベル=39m10)



土層説明
I層 褐色土
(砂質。砂礫を多量に含む。)

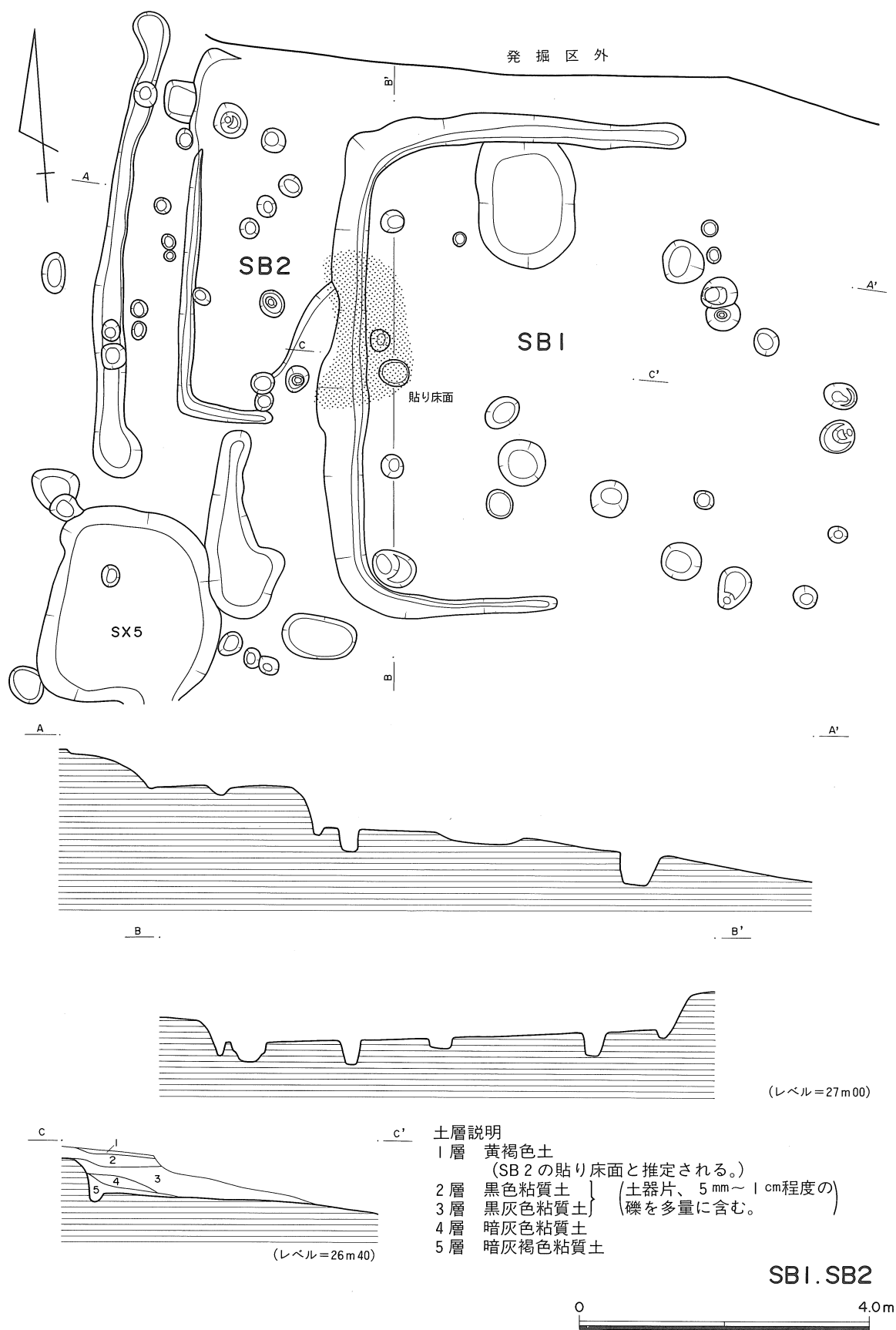
I号墳主体部

0 2.0m
(レベル=40m00)

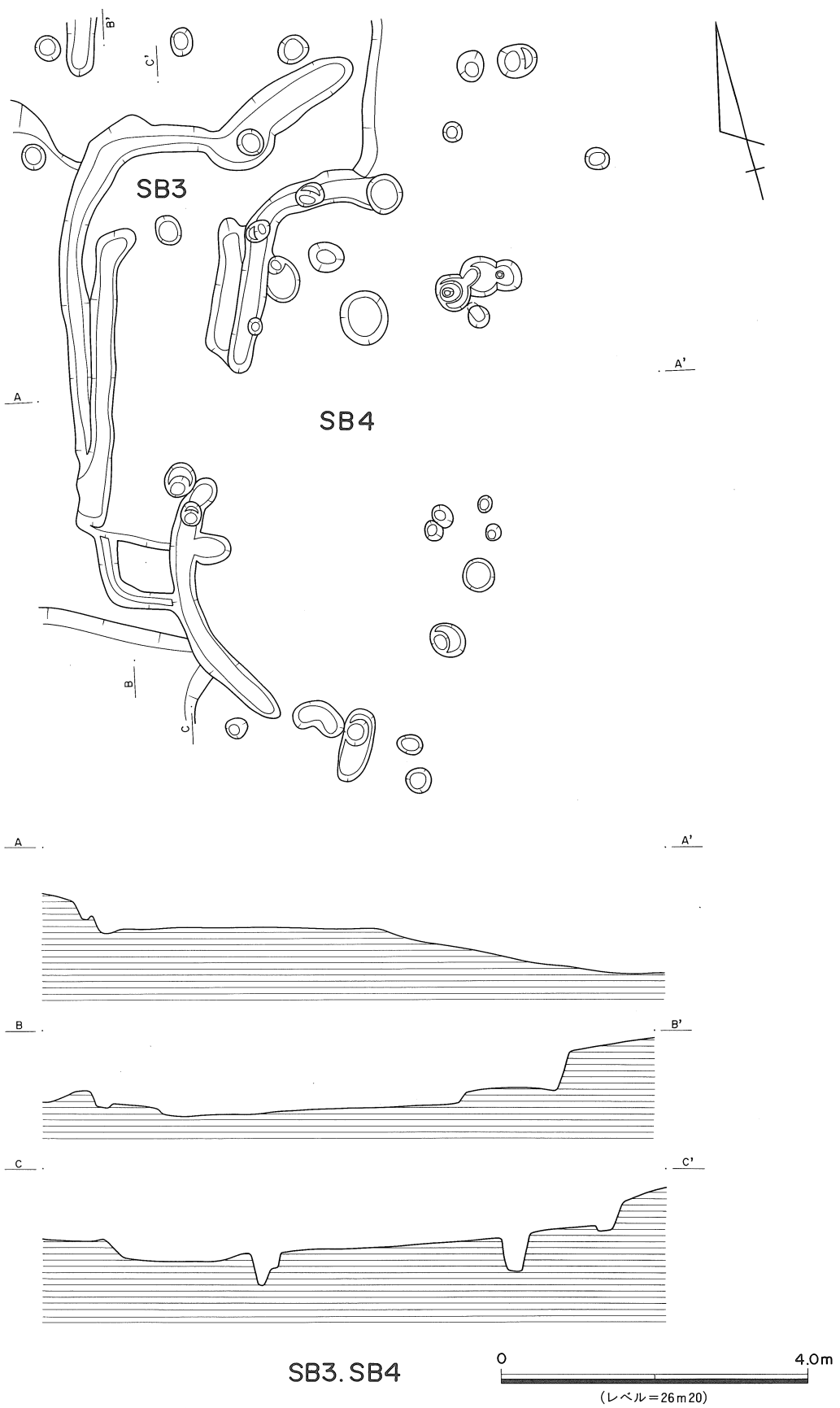
第26図 B地区SB1・2・1号墳主体部遺構実測図



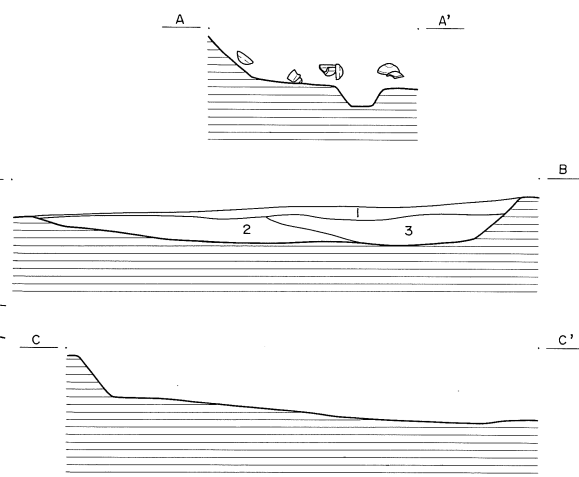
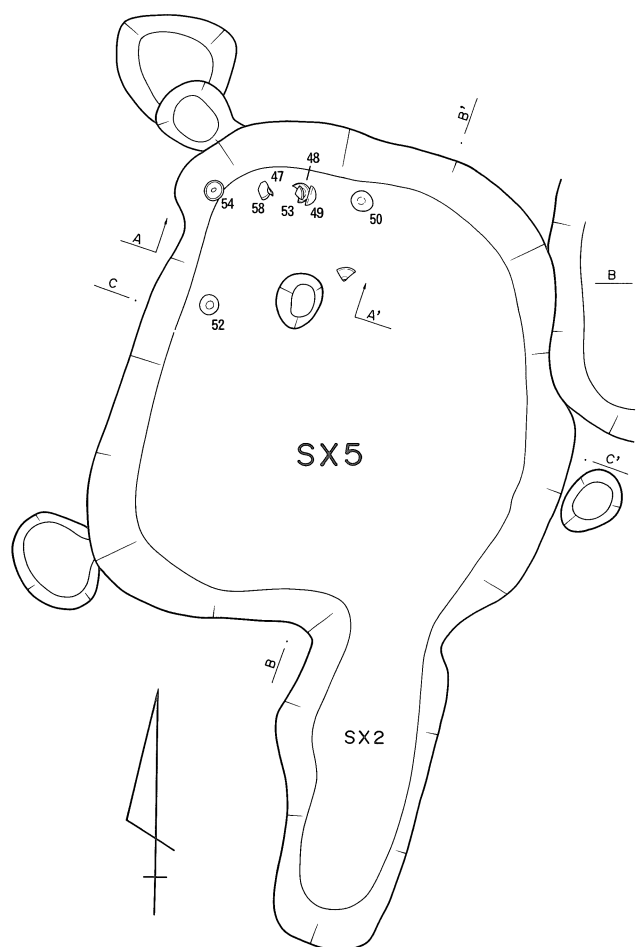
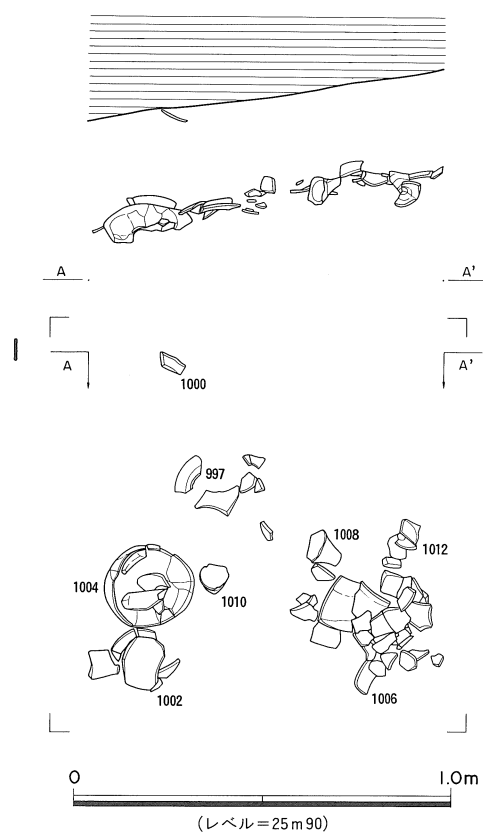
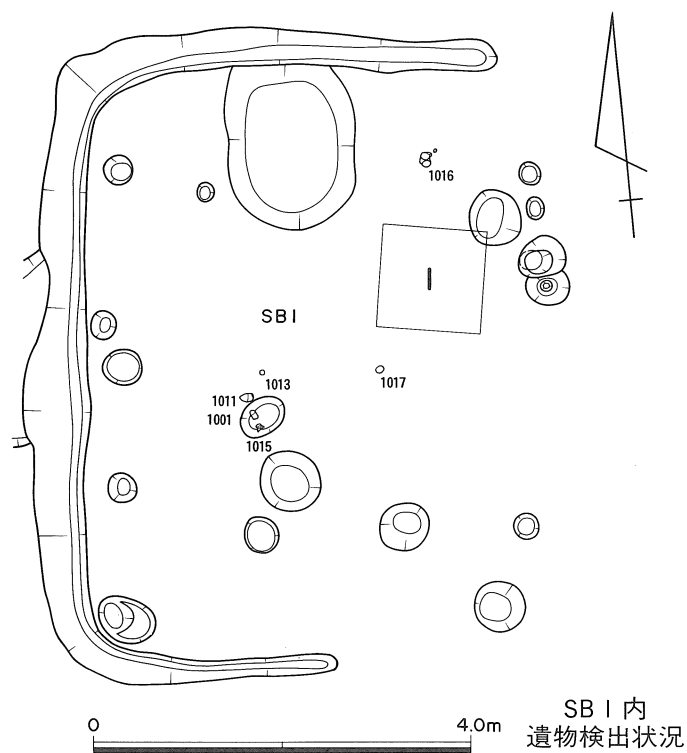
第27図 C地区全体図



第28図 C地区SB1・2遺構実測図



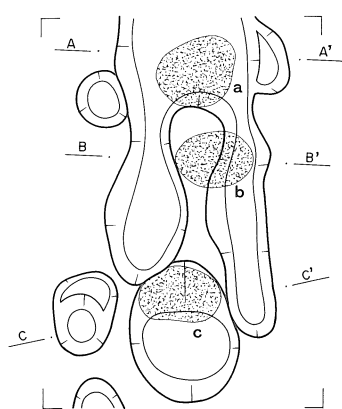
第29図 C地区S B3・4遺構実測図



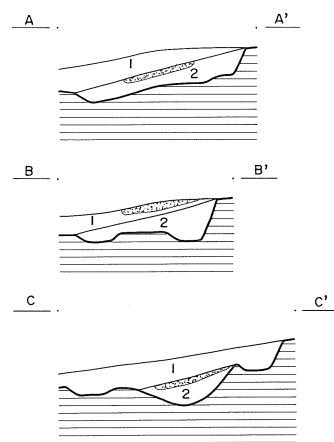
- 土層説明
- 1層 黒褐色土
 - 2層 灰褐色土
(1cm前後の礫を多く含む。土器を含む。)
 - 3層 暗灰褐色土
(1cm前後の礫と炭化物を比較的多く含む。土器を含む。)

SX5

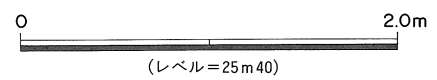
第30図 C地区SB1・SX5遺構実測図



土層説明
 1層 暗灰褐色土
 2層 暗灰色土
 (炭化物と灰を多く含む。)



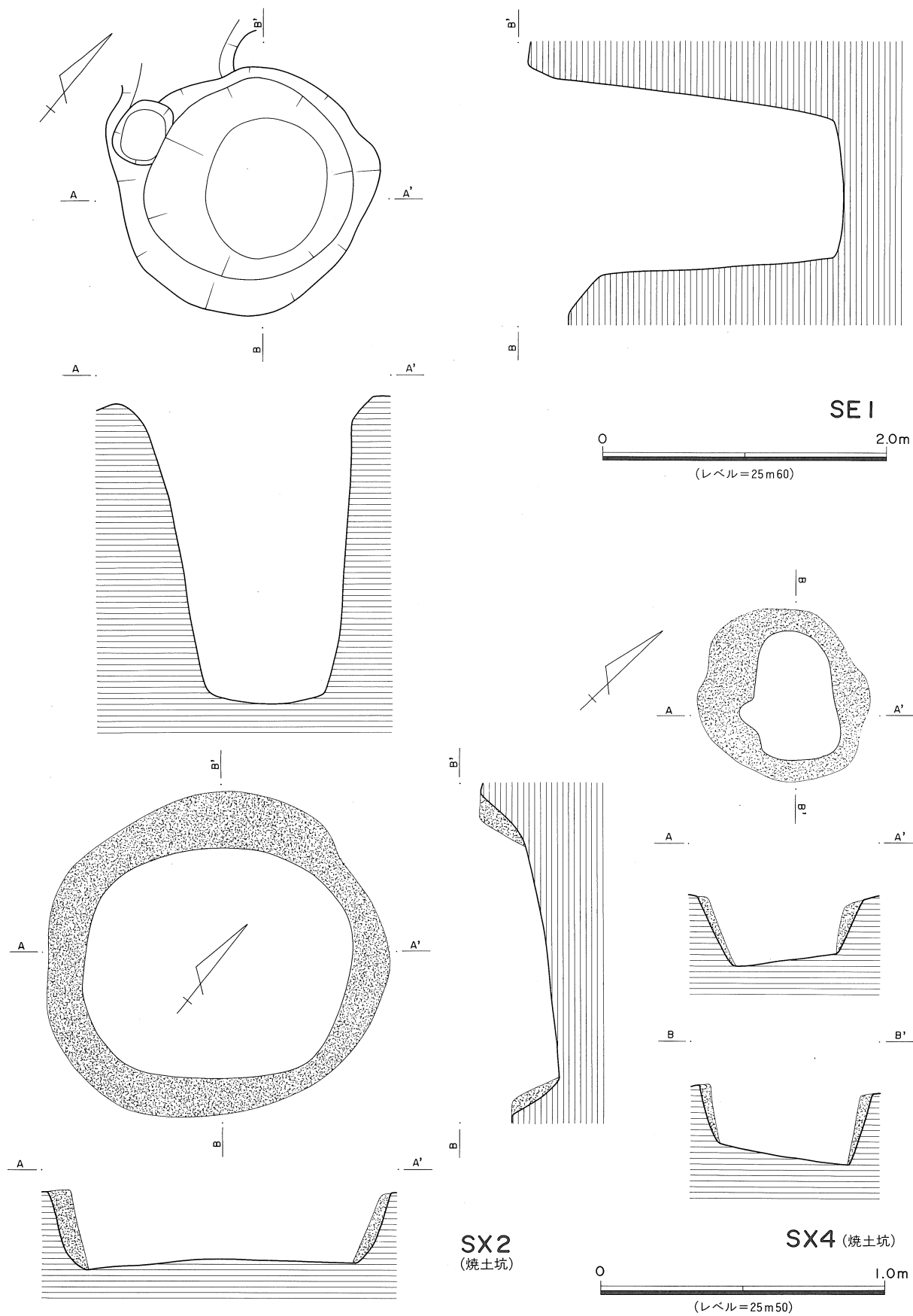
SB 5 内炉検出状況



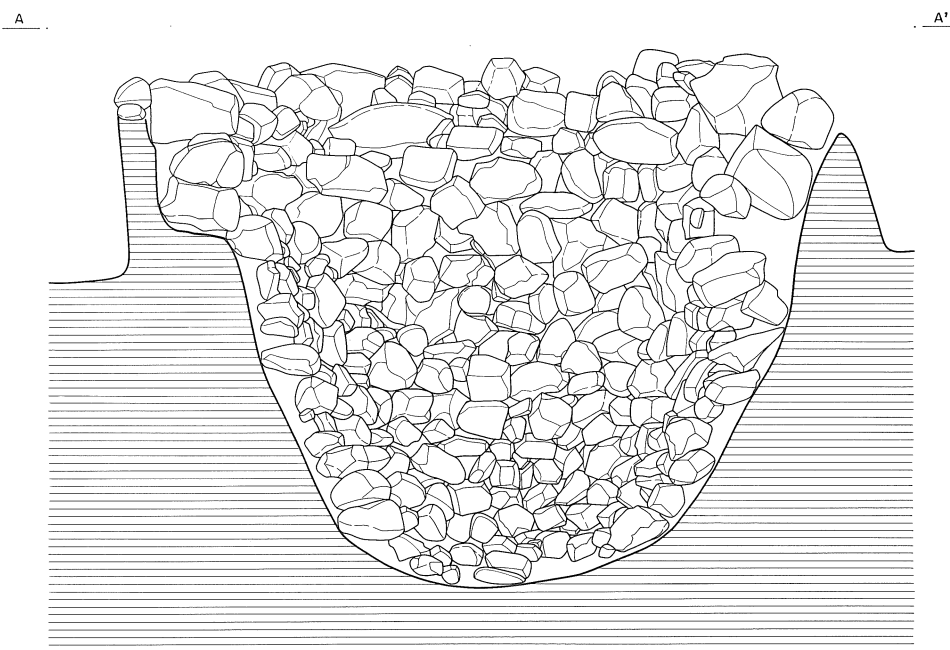
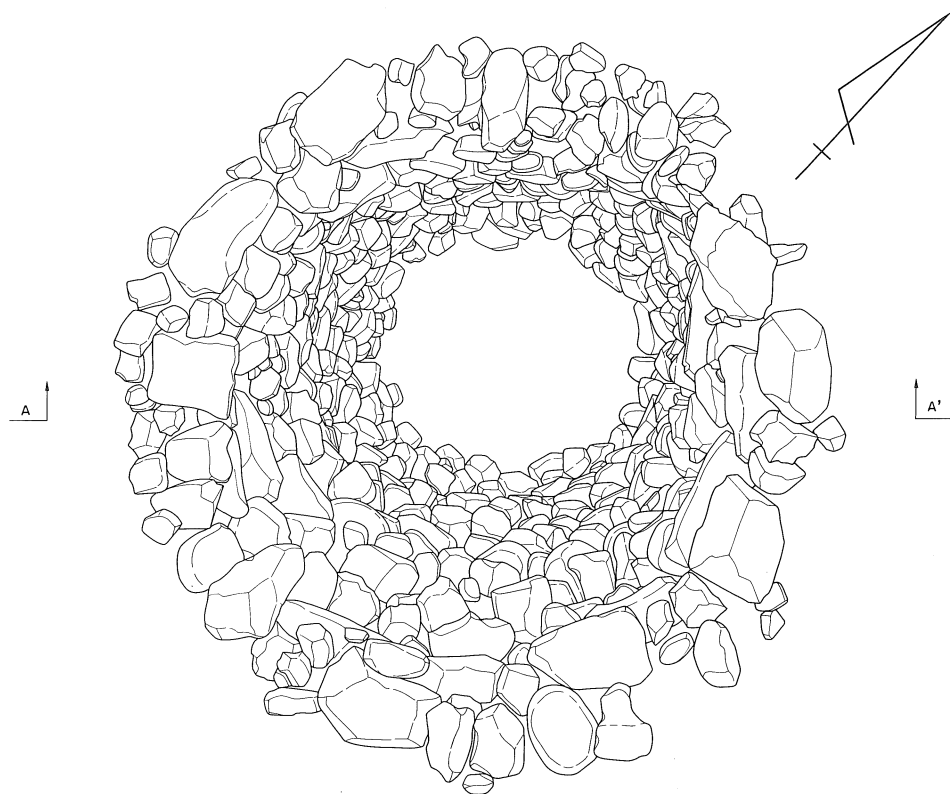
第31図 C地区SB5遺構実測図



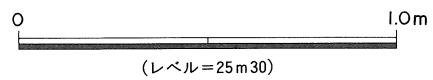
第32図 D地区全体図



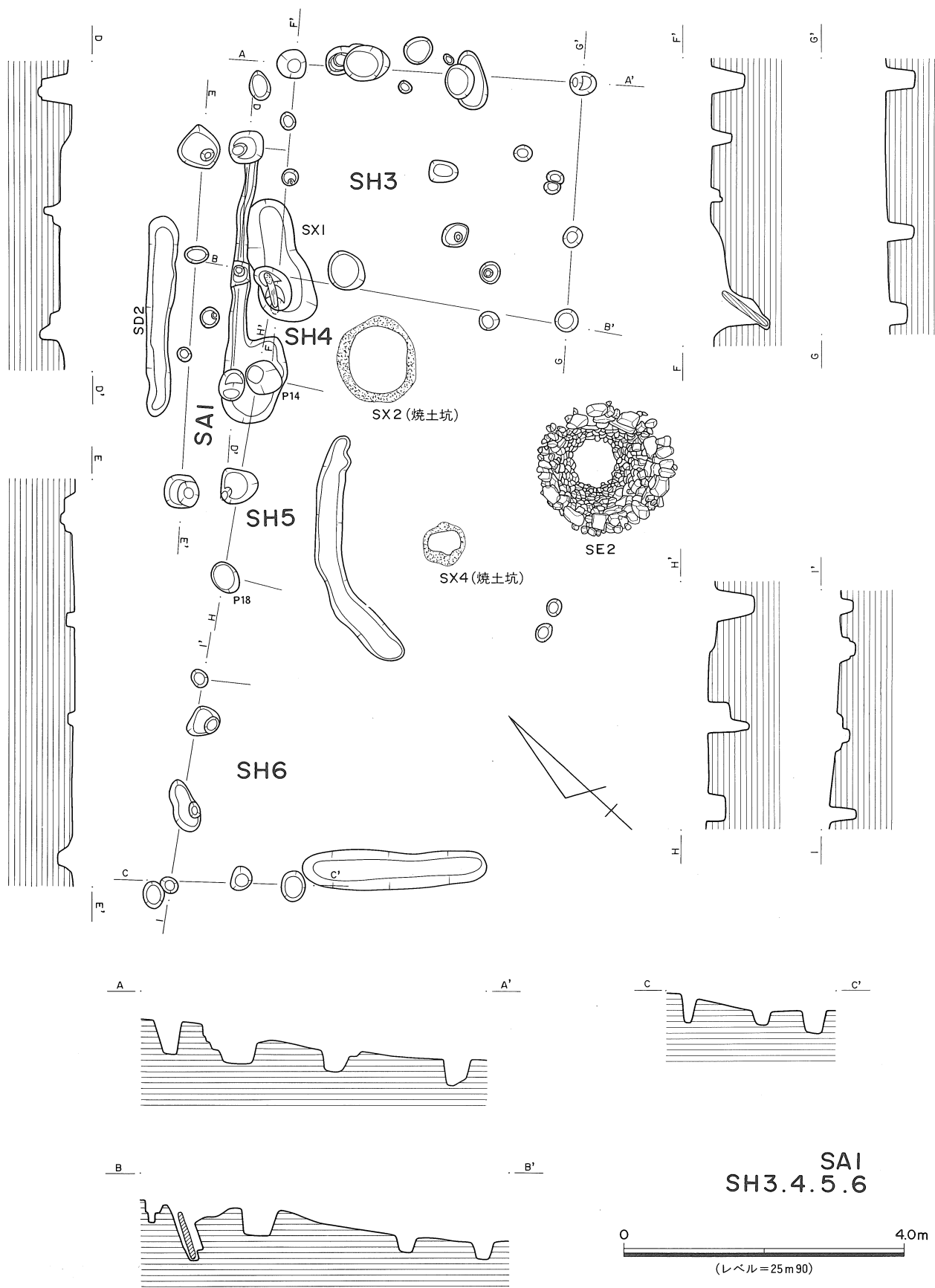
第33図 D地区SE1・SX2・4遺構実測図



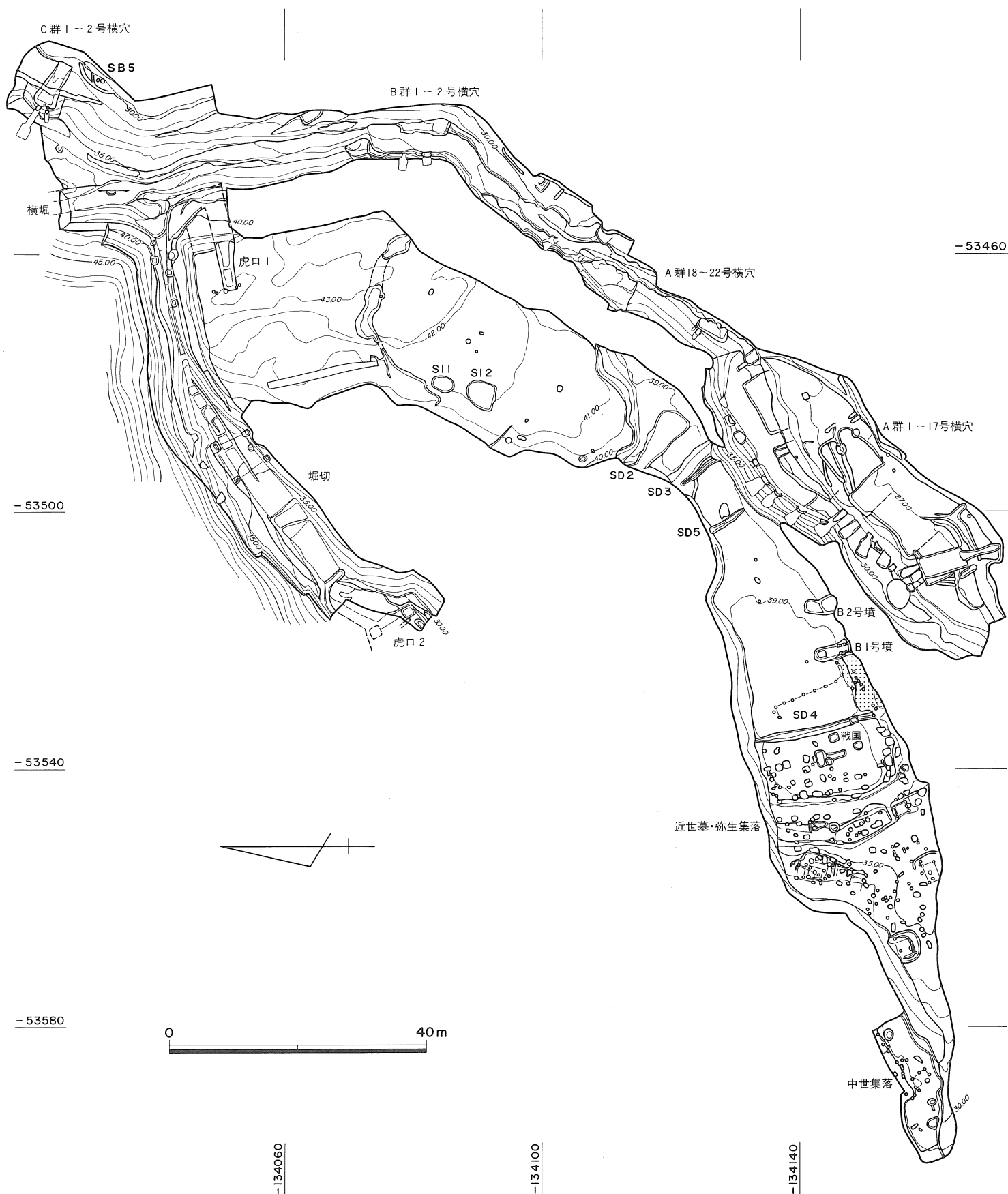
SE 2



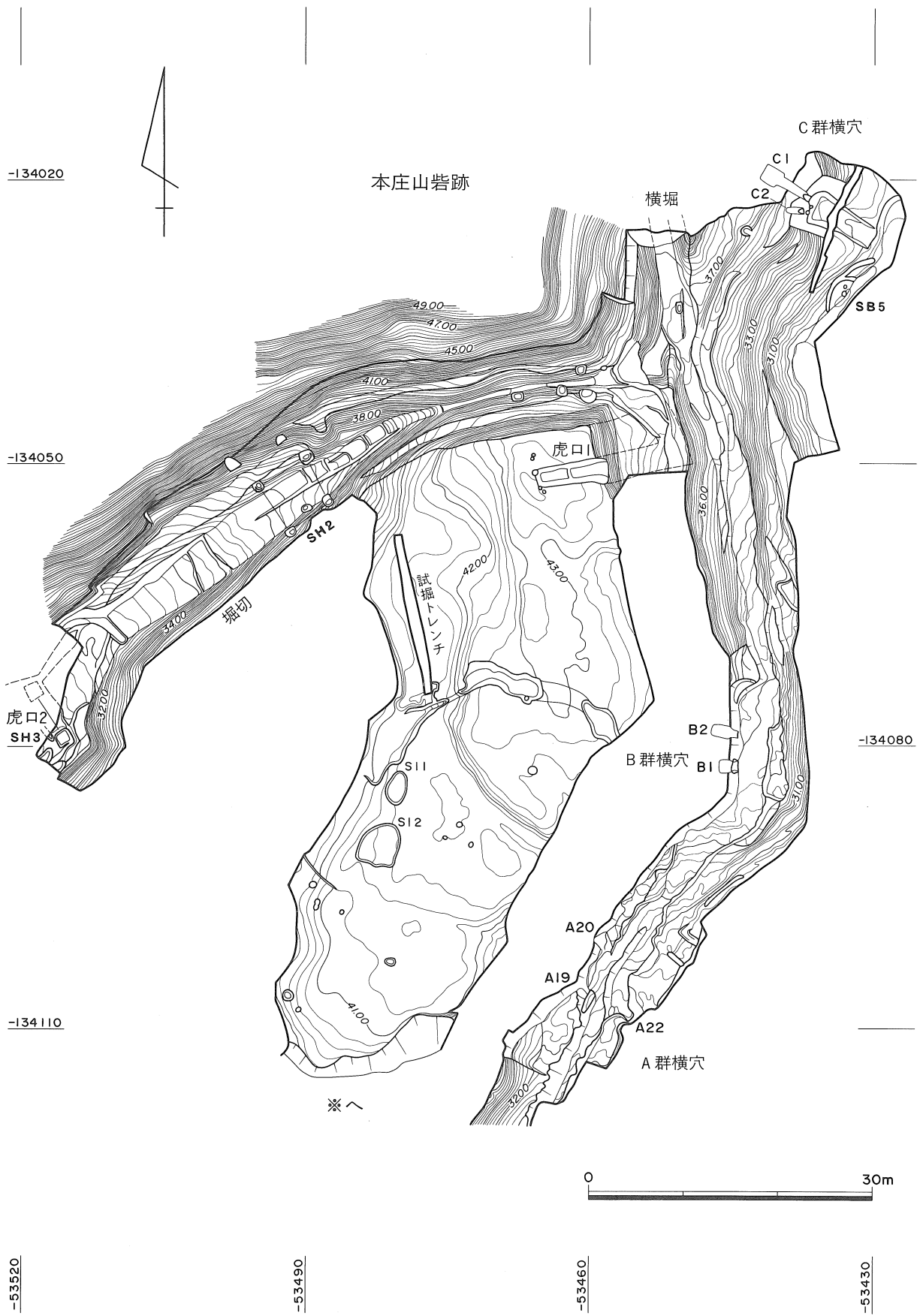
第34図 D地区 S E 2遺構実測図



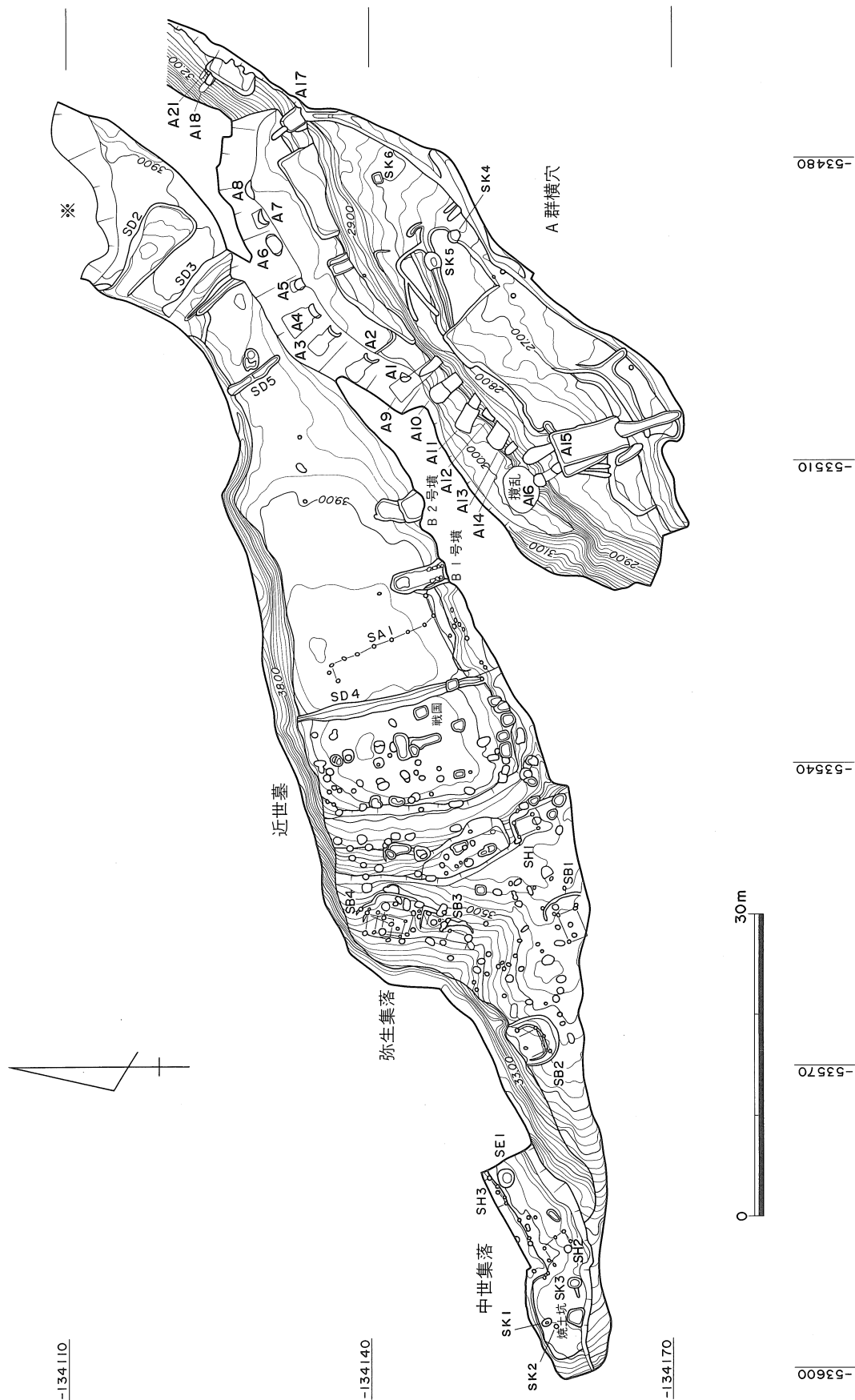
第36図 D地区SH3~6・SAI遺構実測図



第37図 E地区全体図



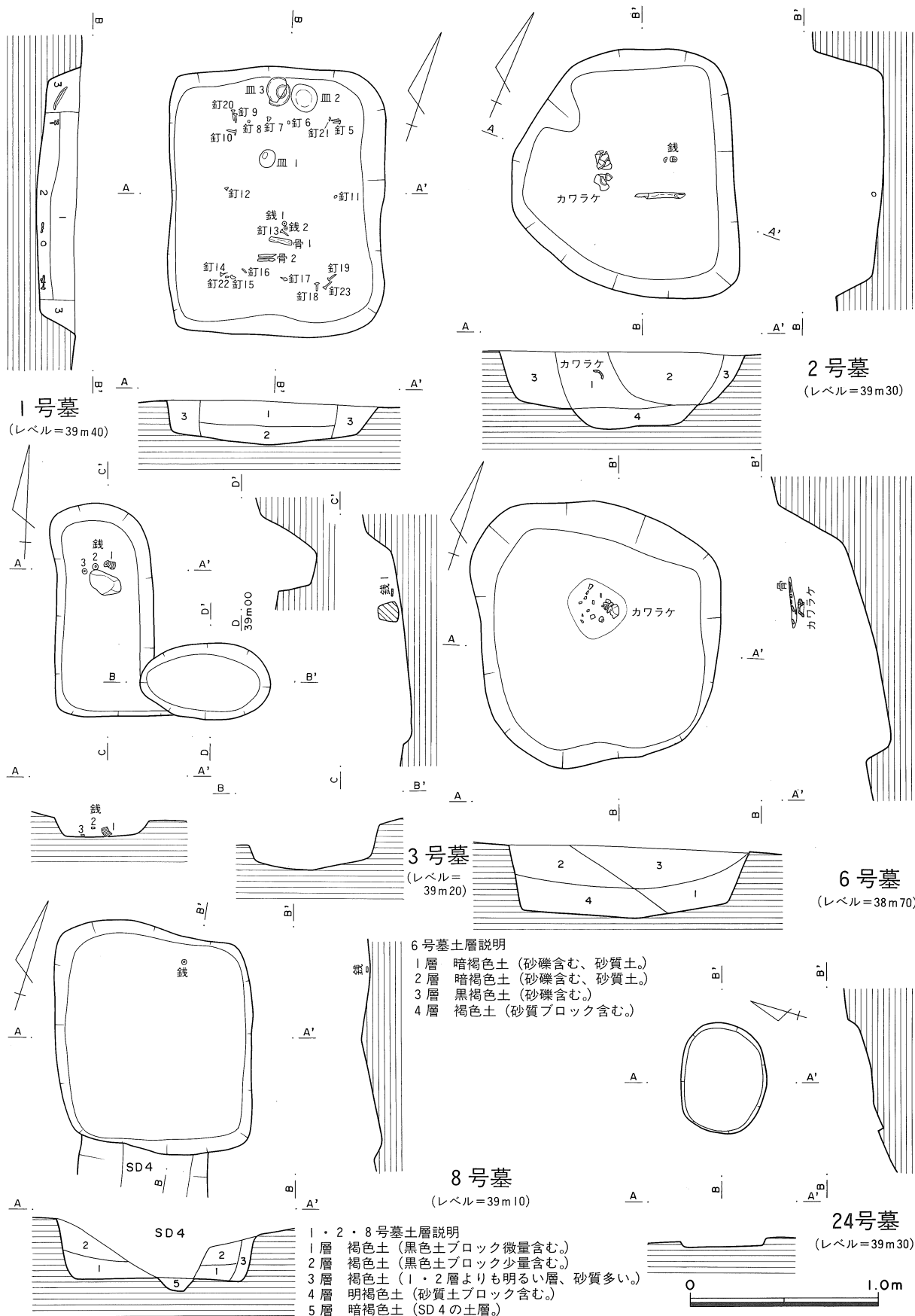
第38図 E地区北部全体図



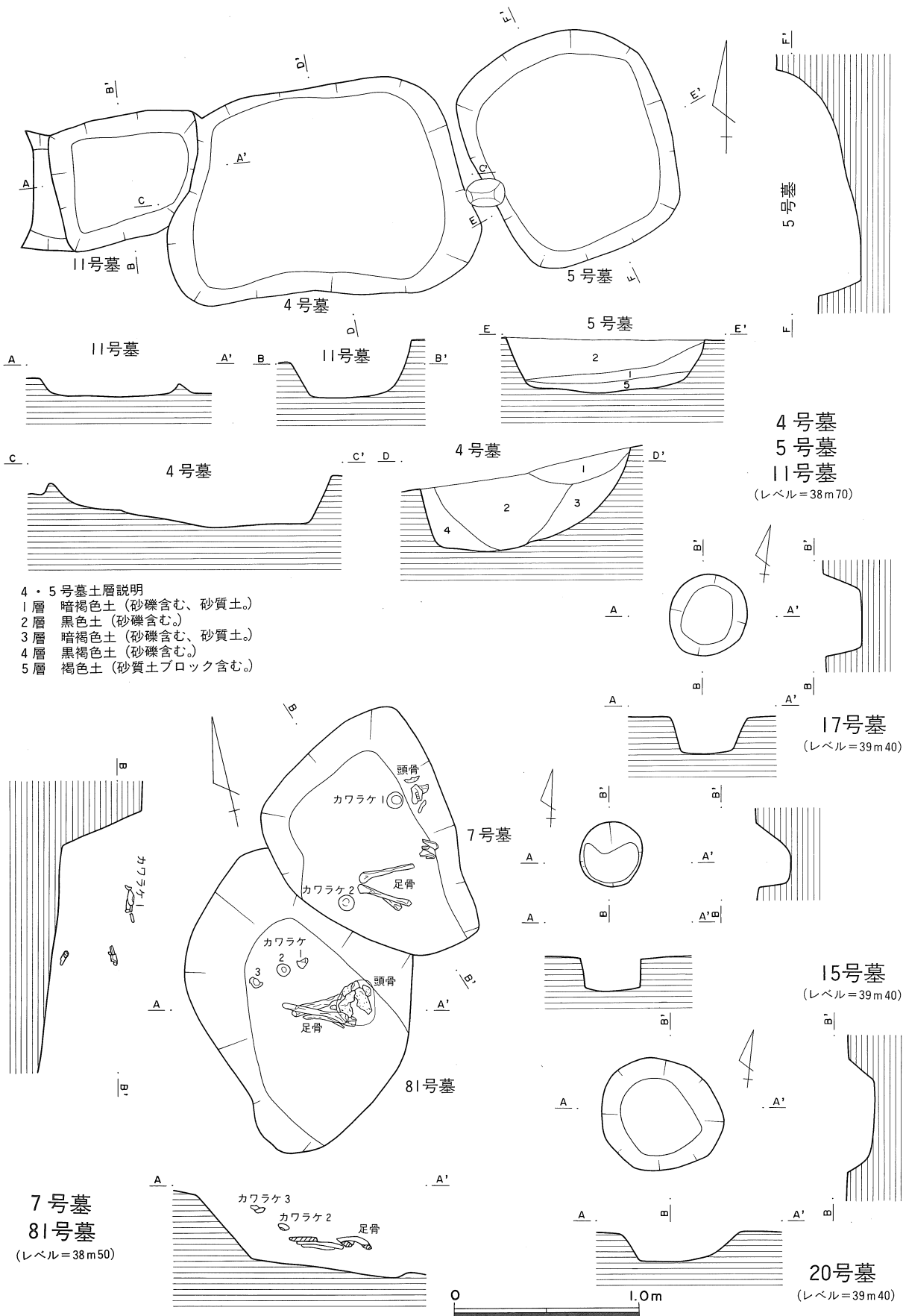
第39图 E地区南部全体图



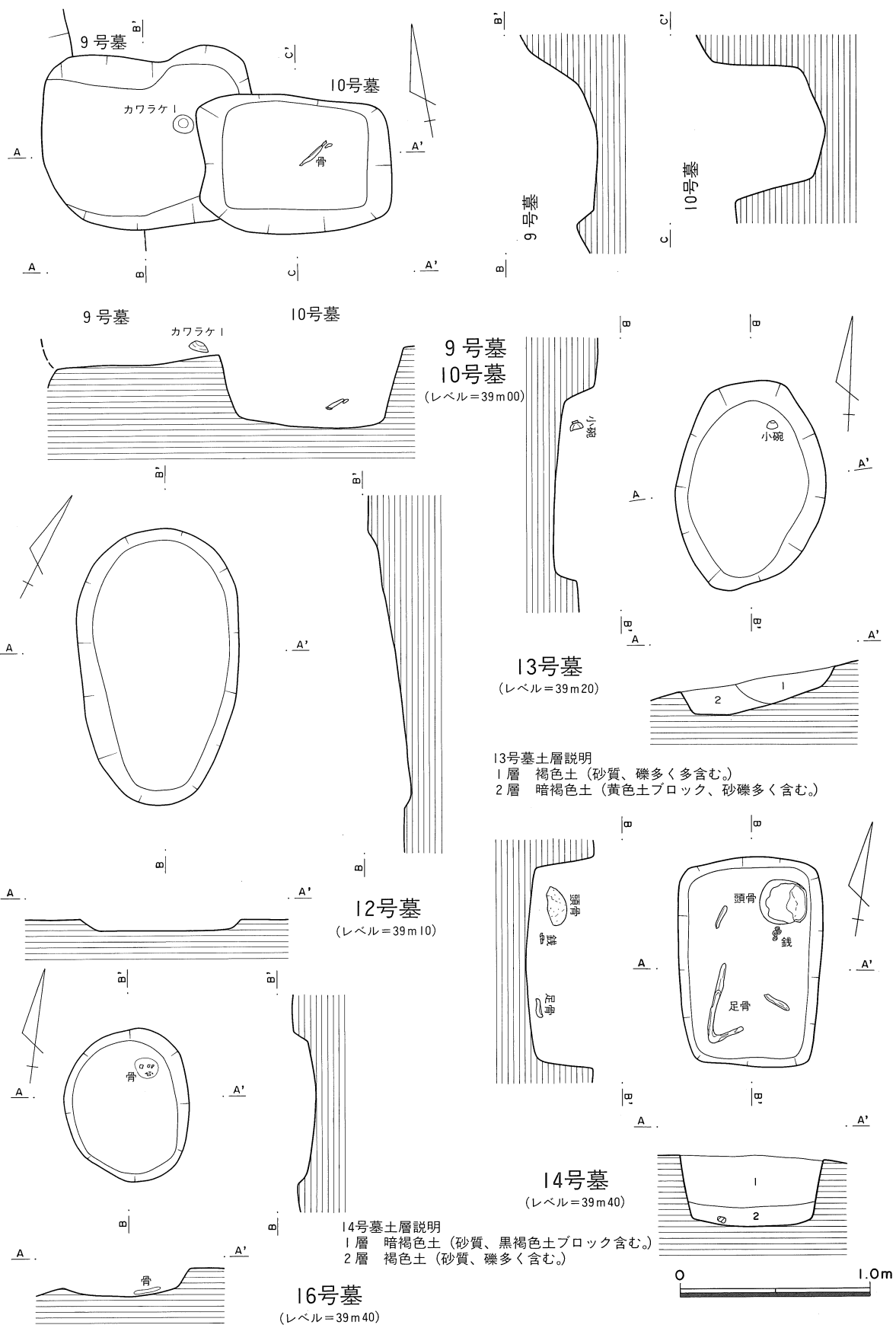
第40図 E地区近世墓位置図



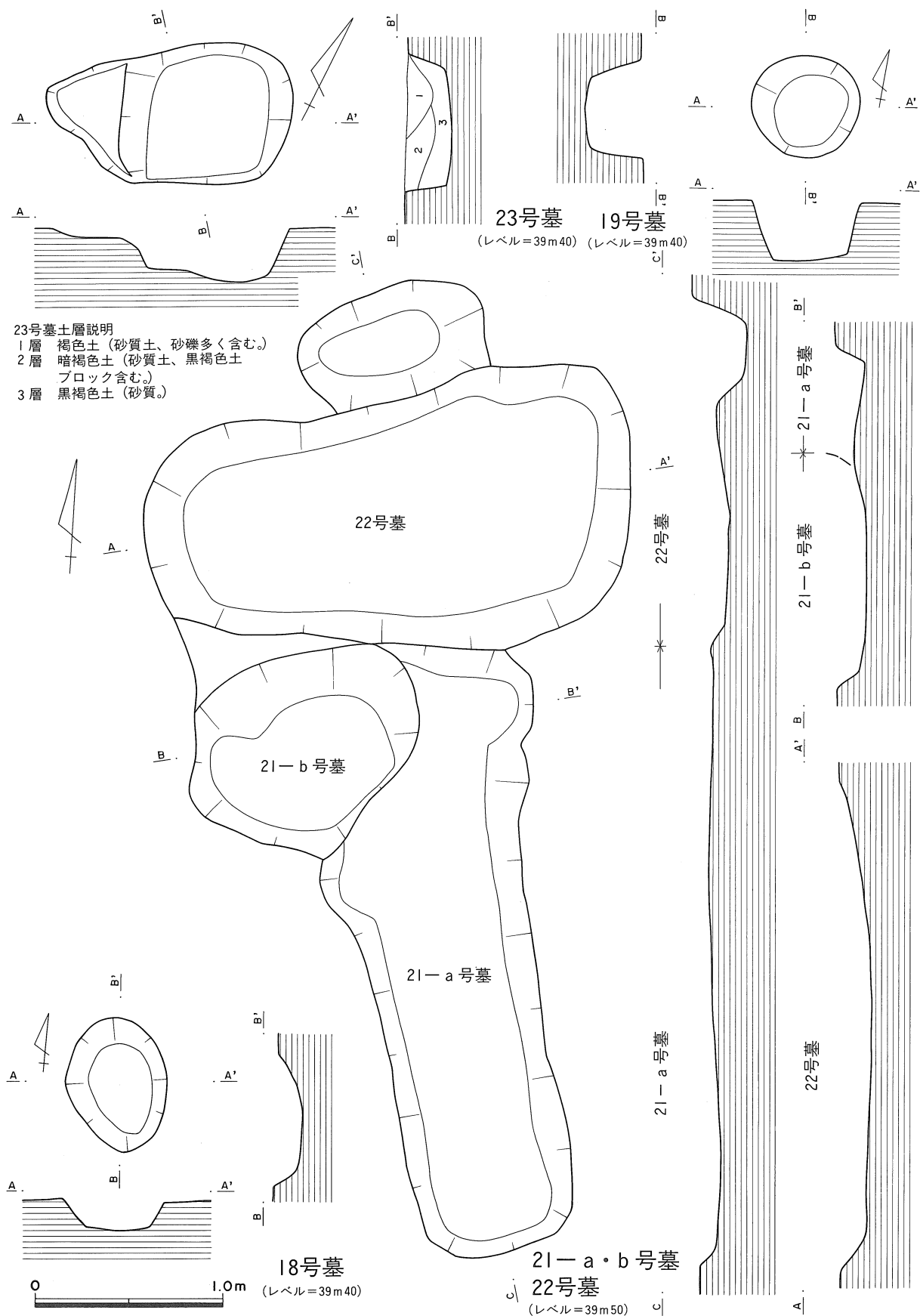
第41図 E地区1~3・6・8・24号墓実測図



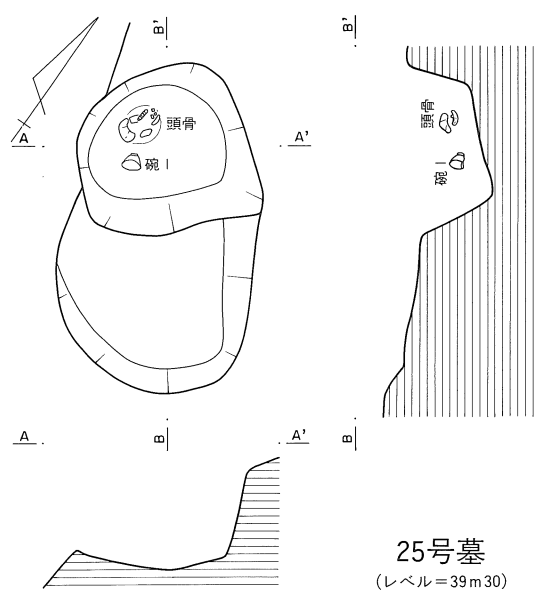
第42図 E地区4・5・7・11・15・17・20・81号墓実測図



第43図 E地区9・10・12～14・16号墓実測図

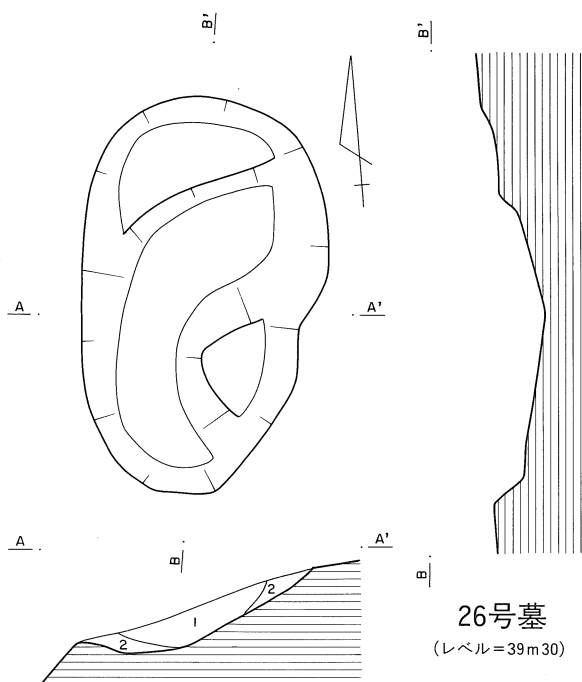


第44図 E地区18・19・21-a, b・22・23号墓実測図



25号墓

(レベル=39m30)

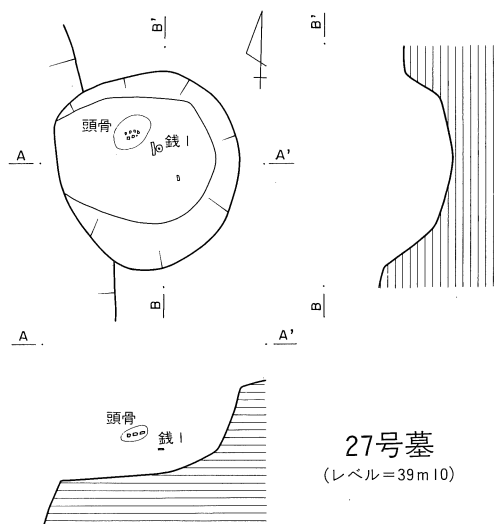


26号墓

(レベル=39m30)

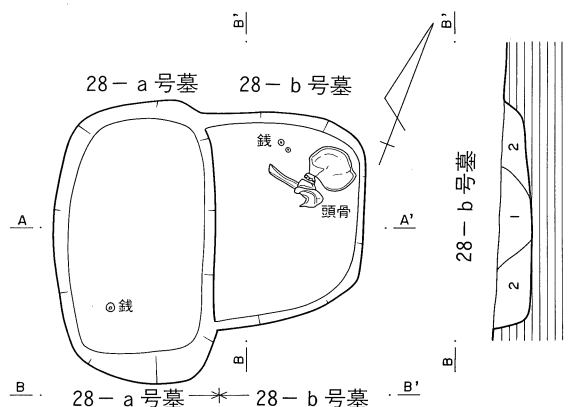
26号墓土層説明

- 1層 暗褐色土 (砂質土、砂礫、黒褐色ブロック含む。)
- 2層 明褐色土 (黄色土ブロック、砂礫含む。)



27号墓

(レベル=39m10)



28-a号墓

28-b号墓

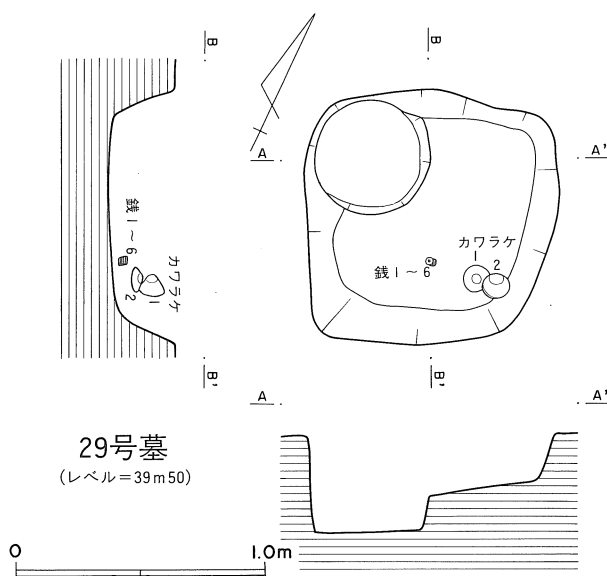
28-b号墓

28号墓

(レベル=39m50)

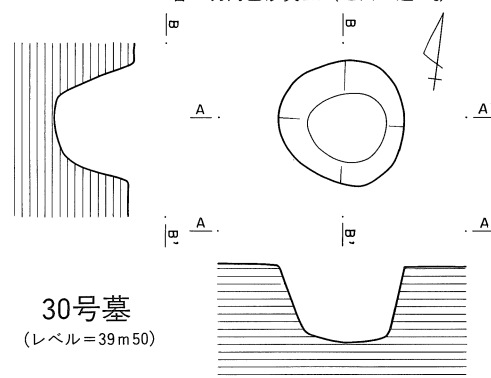
28号墓土層説明

- 1層 暗褐色土 (砂質土、砂礫含む。)
- 2層 褐色土 (砂質土、砂礫多く含む。)
- 3層 明褐色砂質土 (地山に近い。)



29号墓

(レベル=39m50)

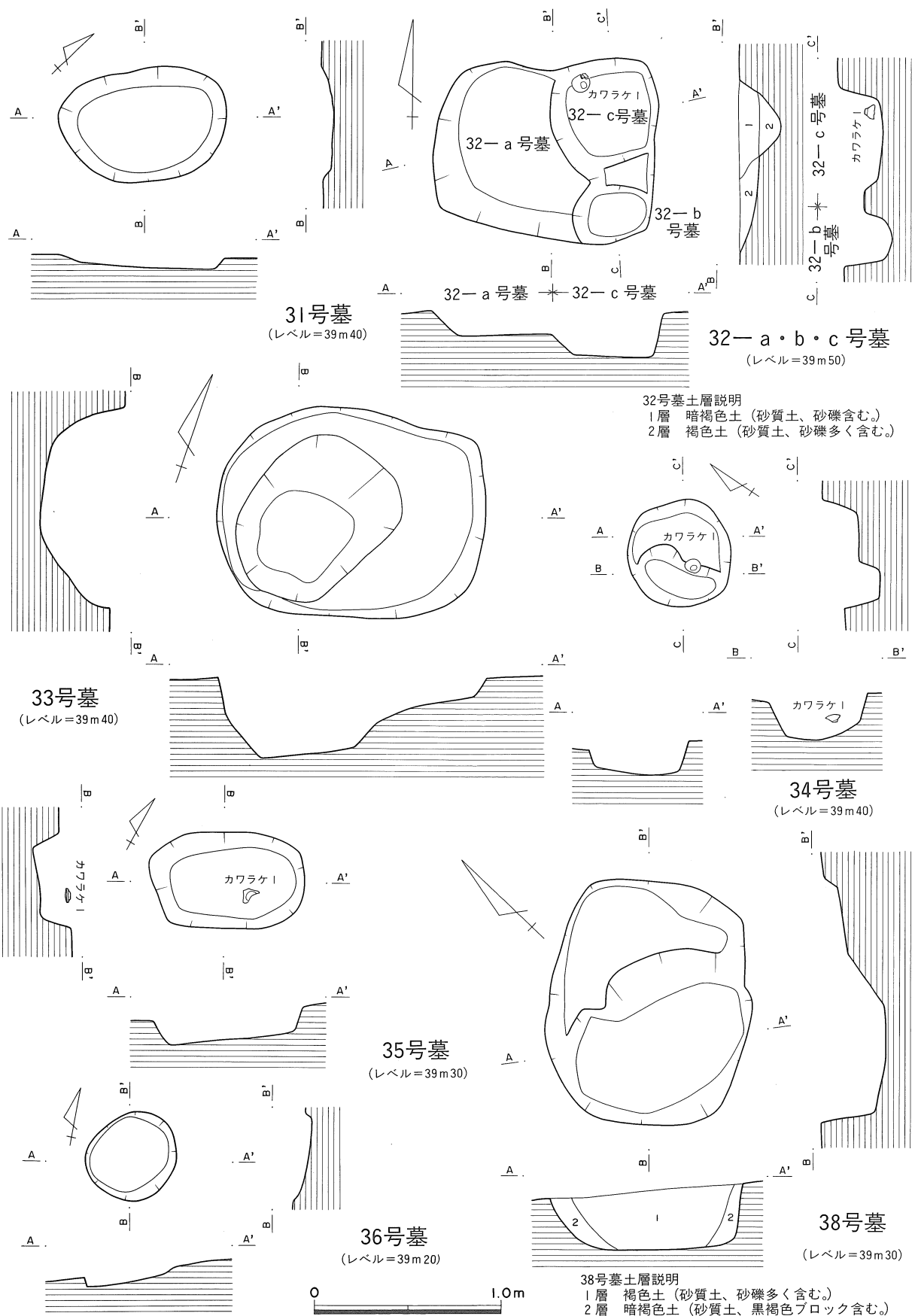


30号墓

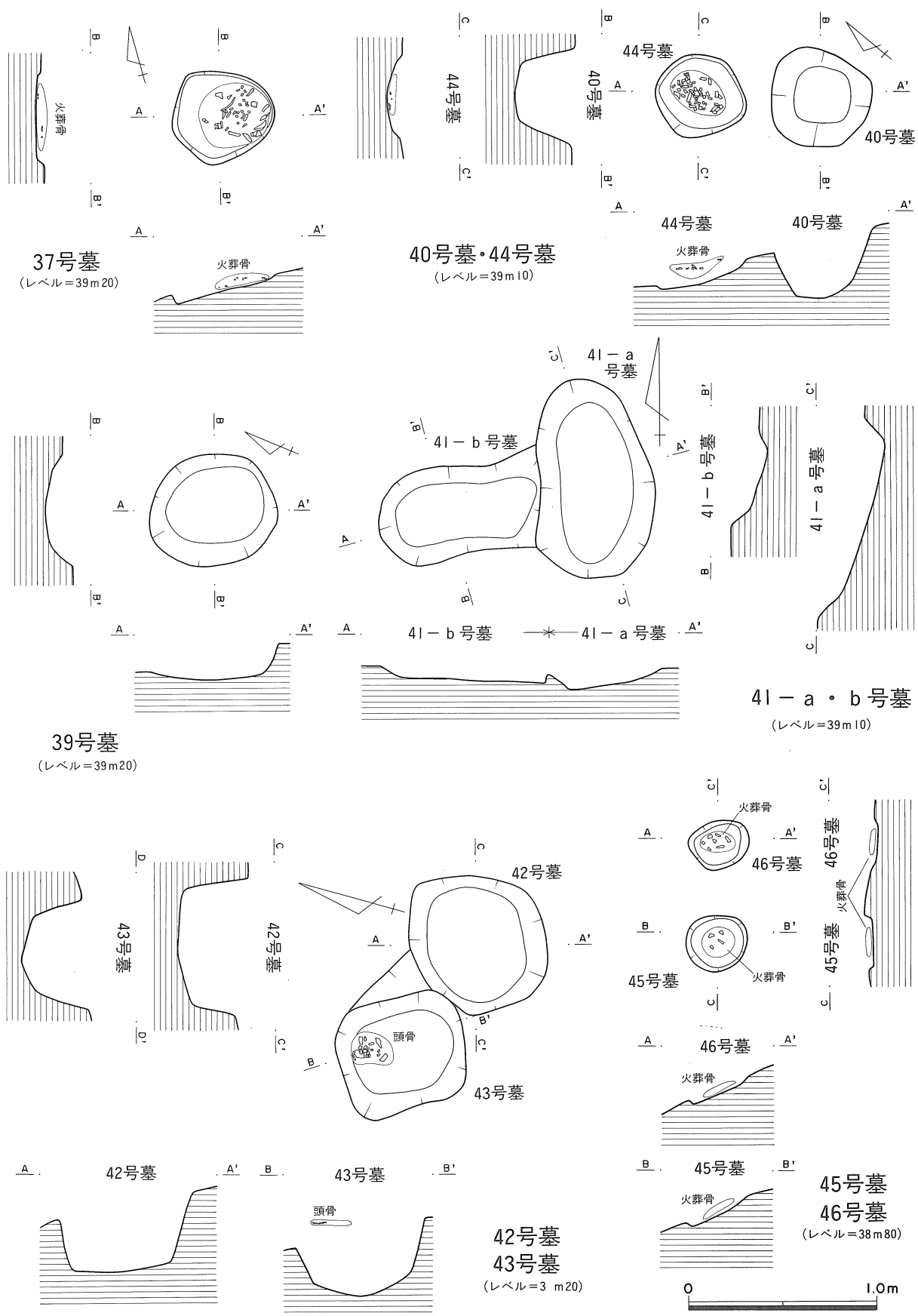
(レベル=39m50)



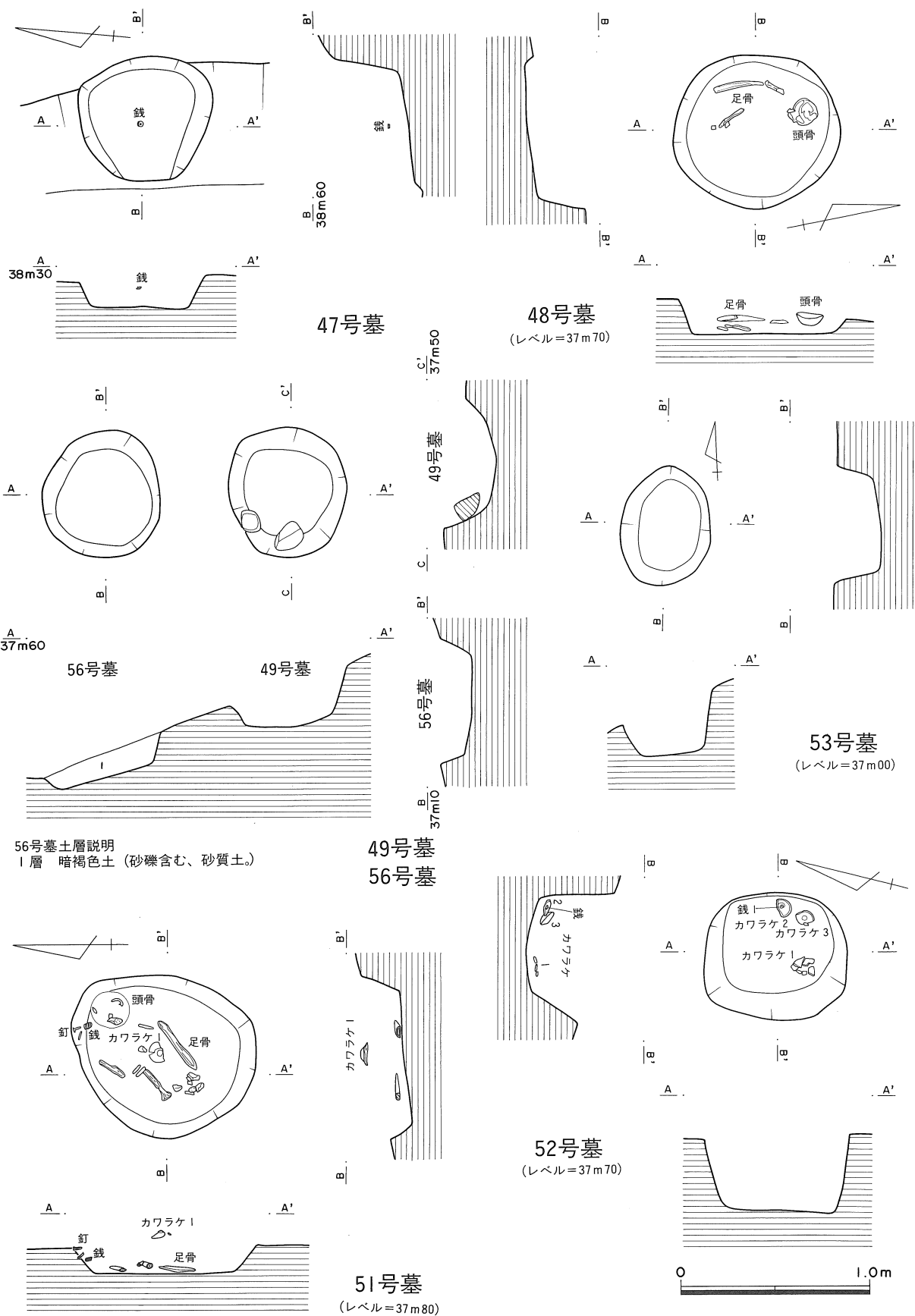
第45図 E地区25~27・28-a, b・29・30号墓実測図



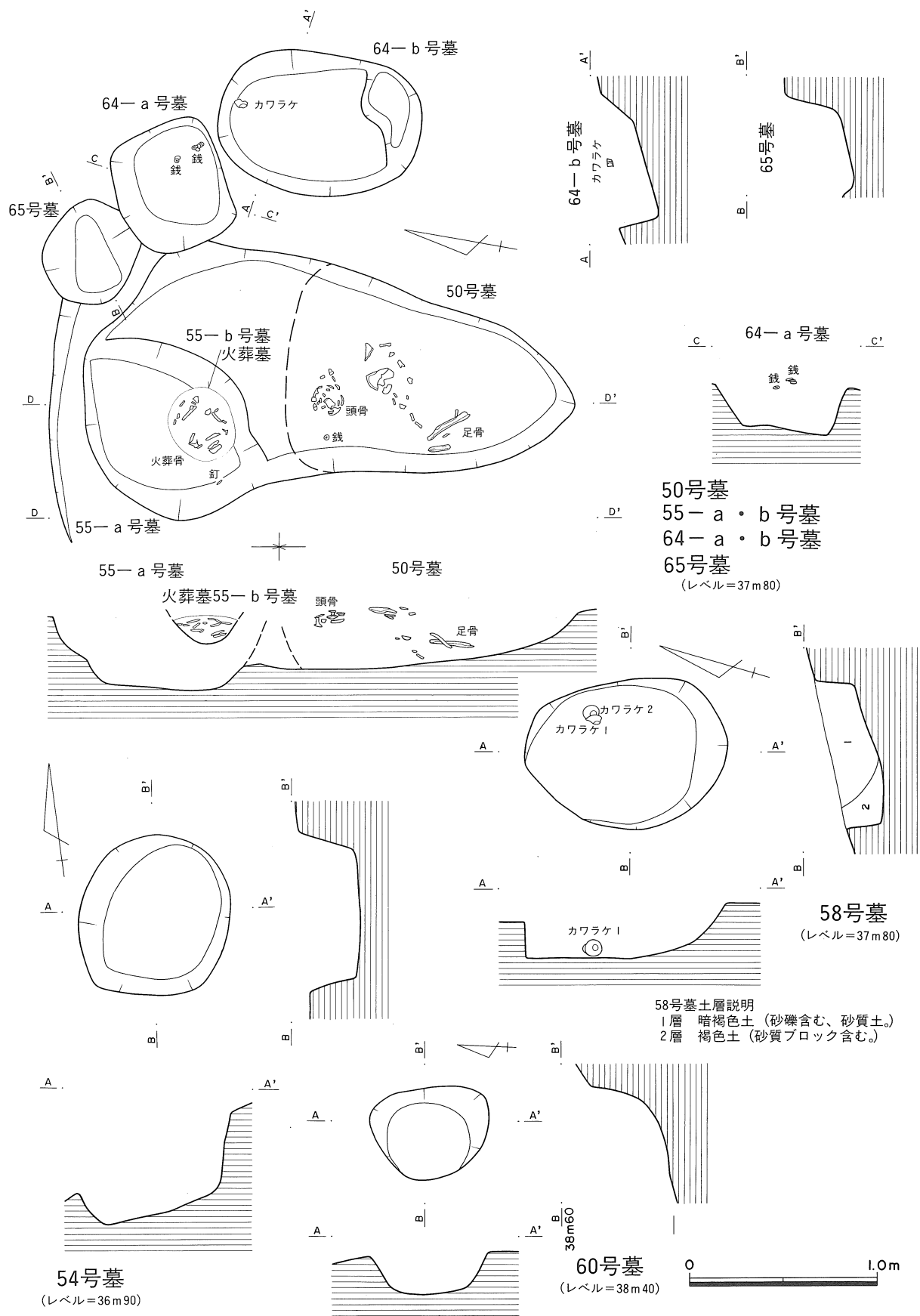
第46図 E地区31・32-a, b, c・33~36・38号墓実測図



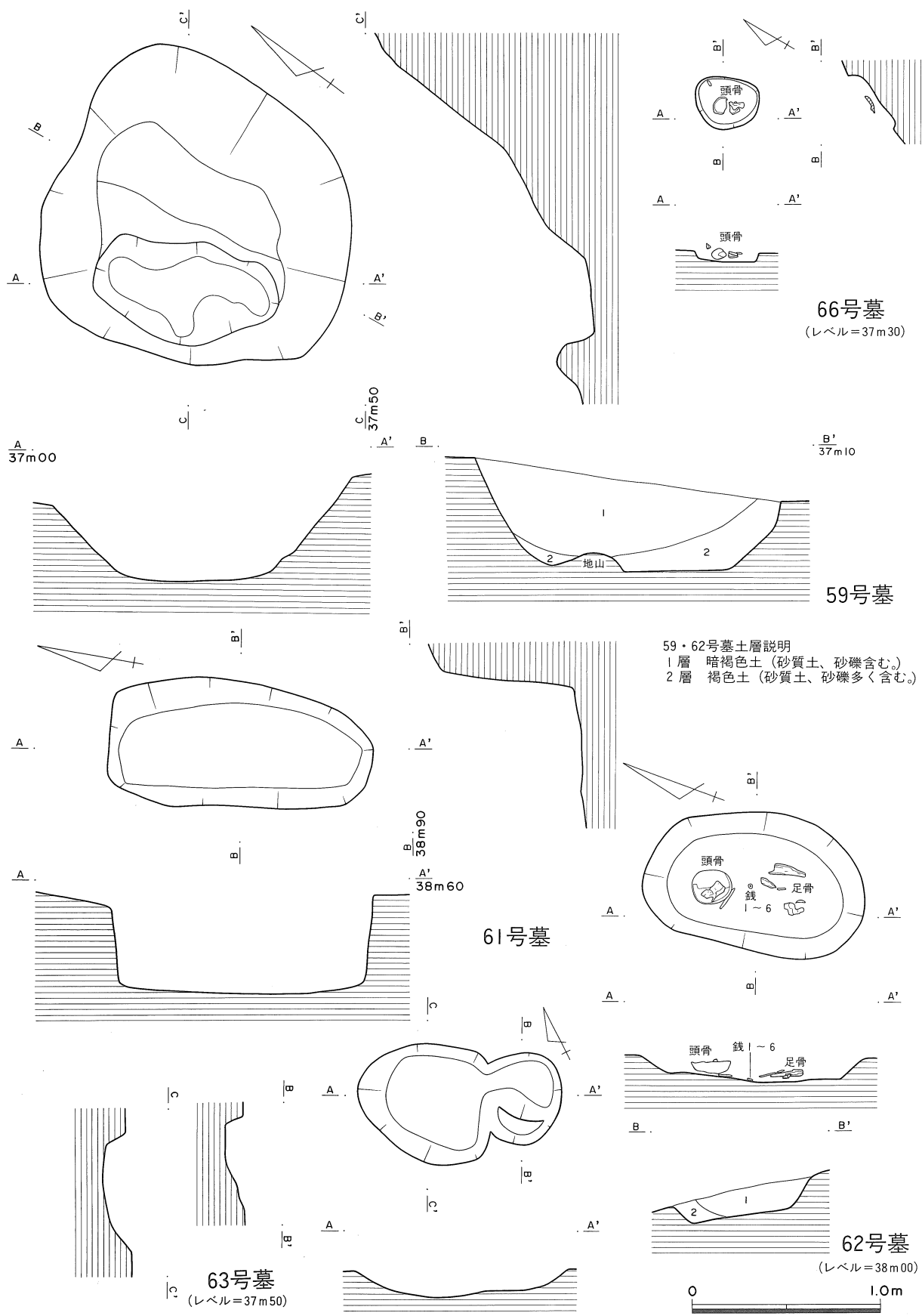
第47図 E地区37・39・40・41-a, b・42~46号墓実測図



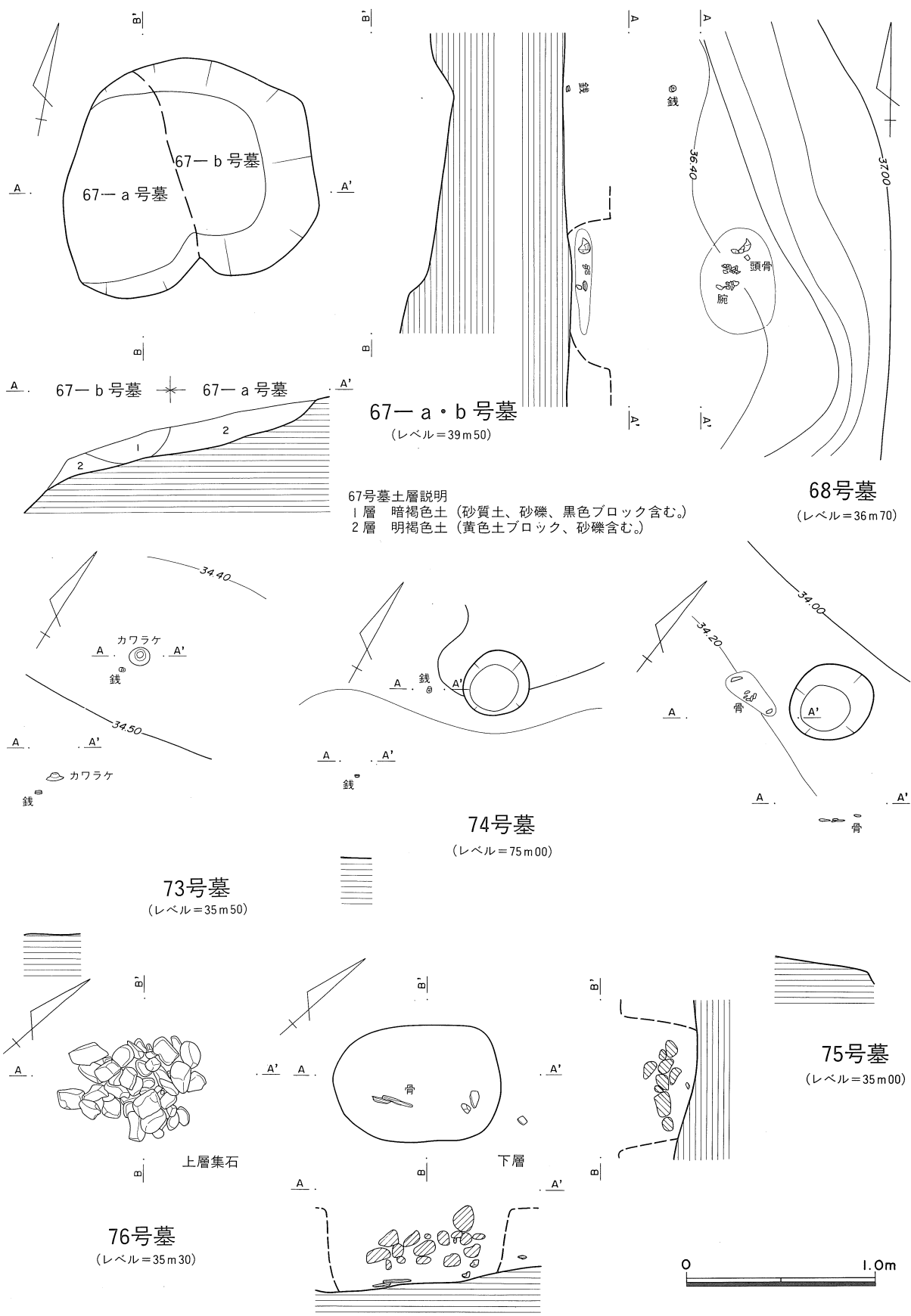
第48図 E地区47~49・51~53・56号墓実測図



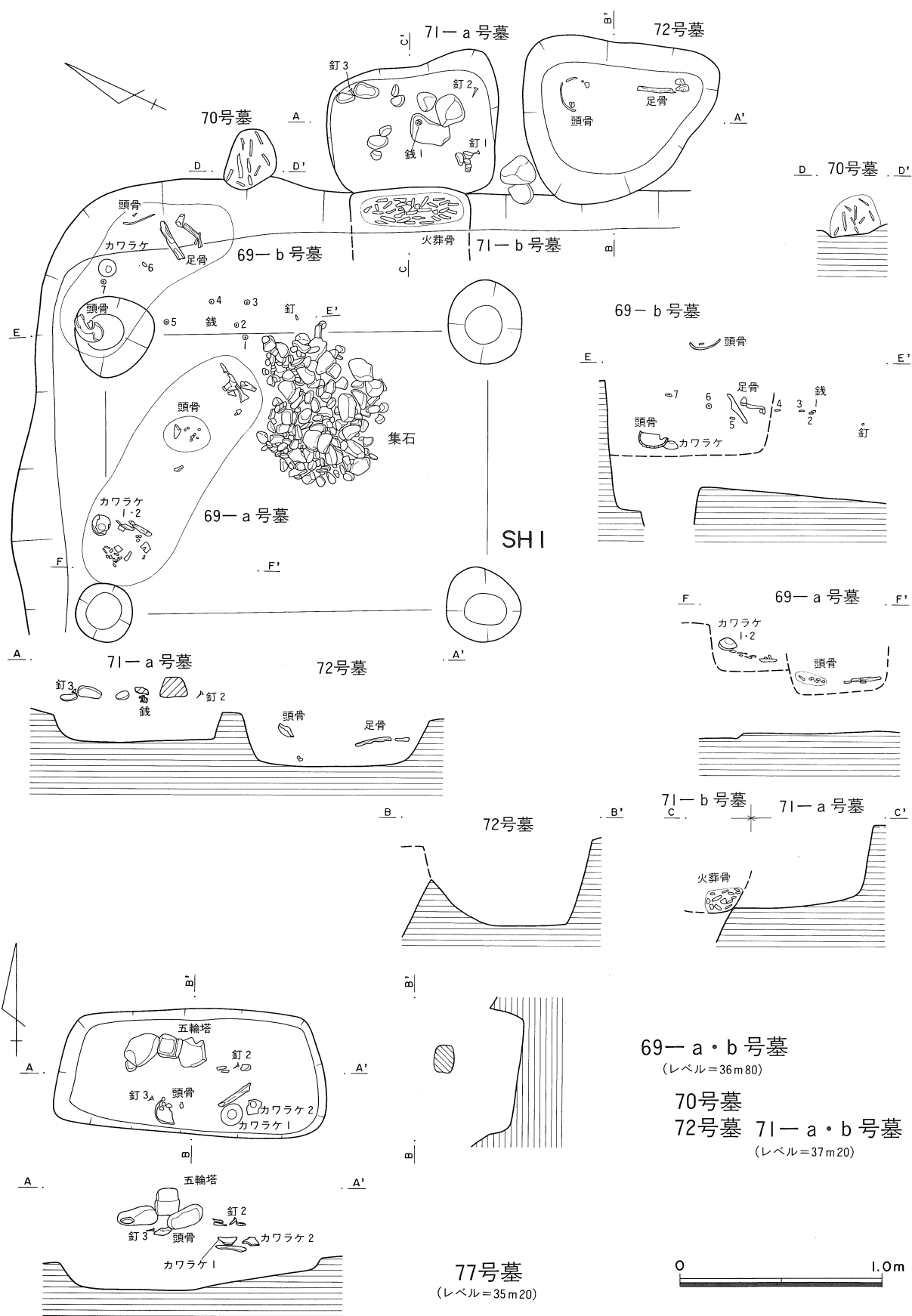
第49図 E地区50・54・55-a, b・58・60・64-a, b・65号墓実測図



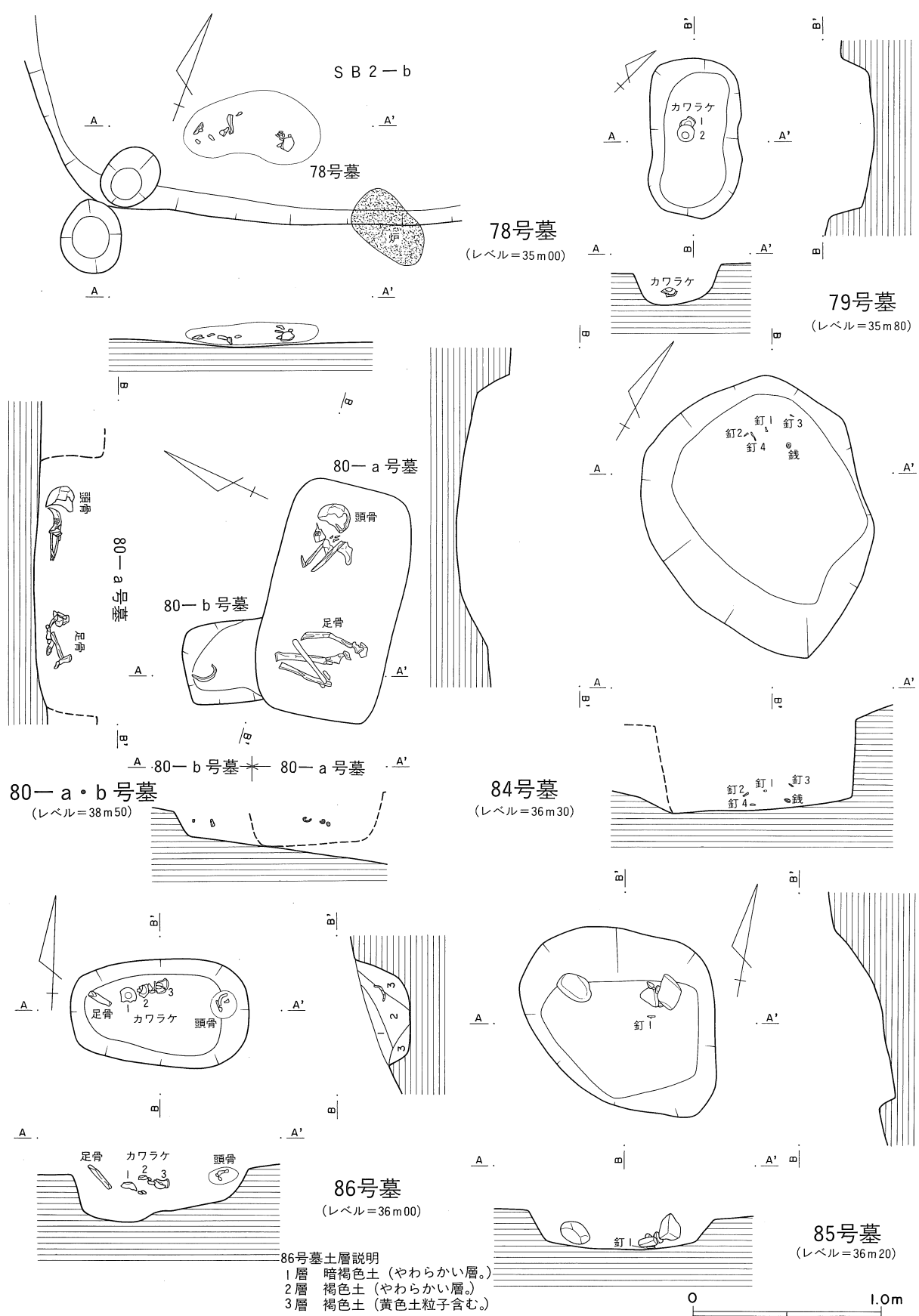
第50図 E地区59・61～63・66号墓実測図



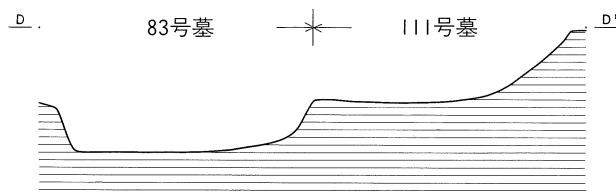
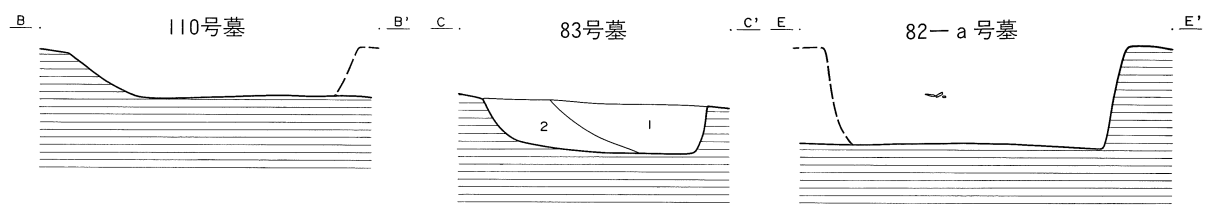
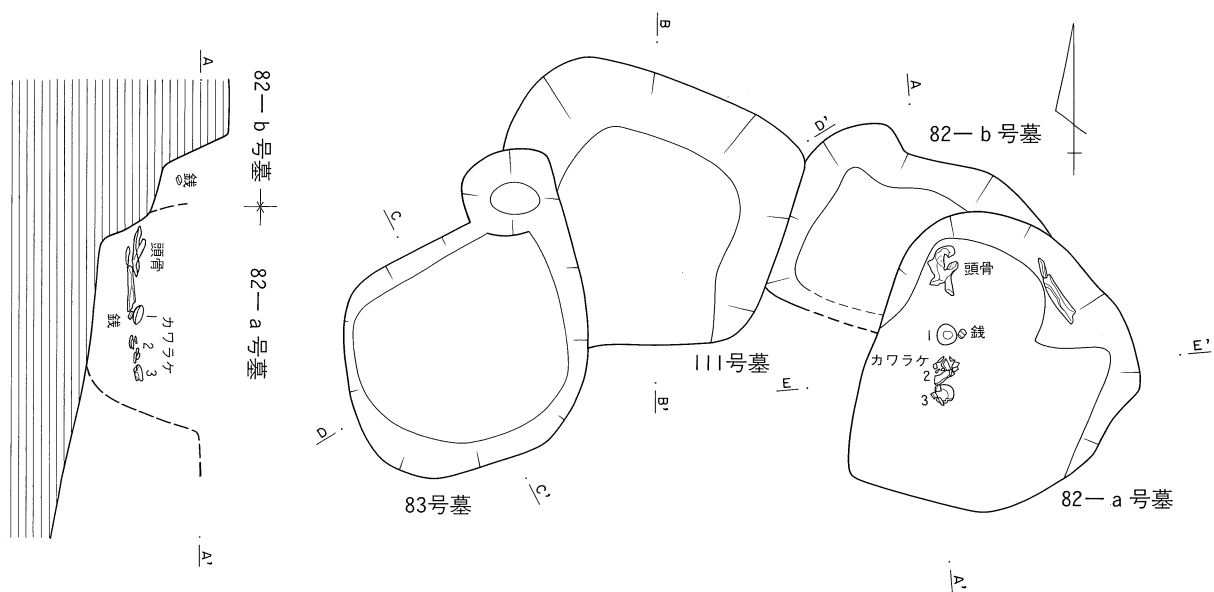
第51図 E地区67-a, b・68・73~76号墓実測図



第52図 E地区69-a, b・70・71-a, b・72・77号墓実測図

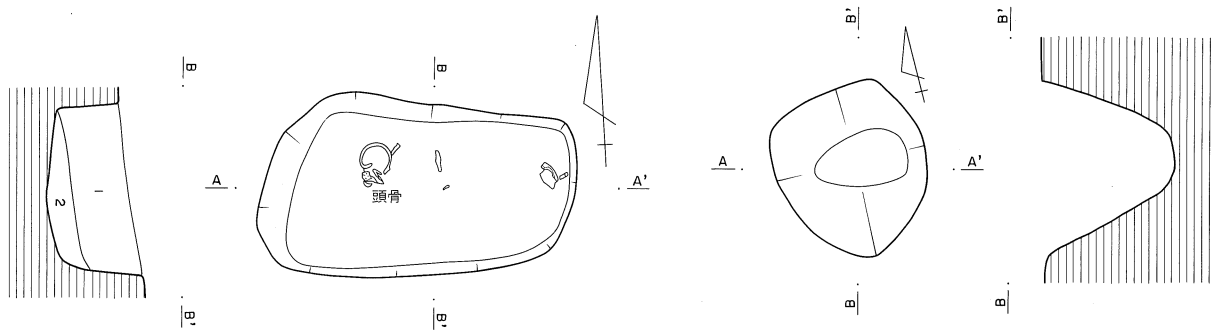


第53図 E地区78・79・80-a, b・84~86号墓実測図



82-a・b号墓・83号墓・111号墓
(レベル=37m80)

83号墓土層説明
1層 暗褐色土 (やわらかい層。)
2層 褐色土 (黄色土粒子多く含む。)



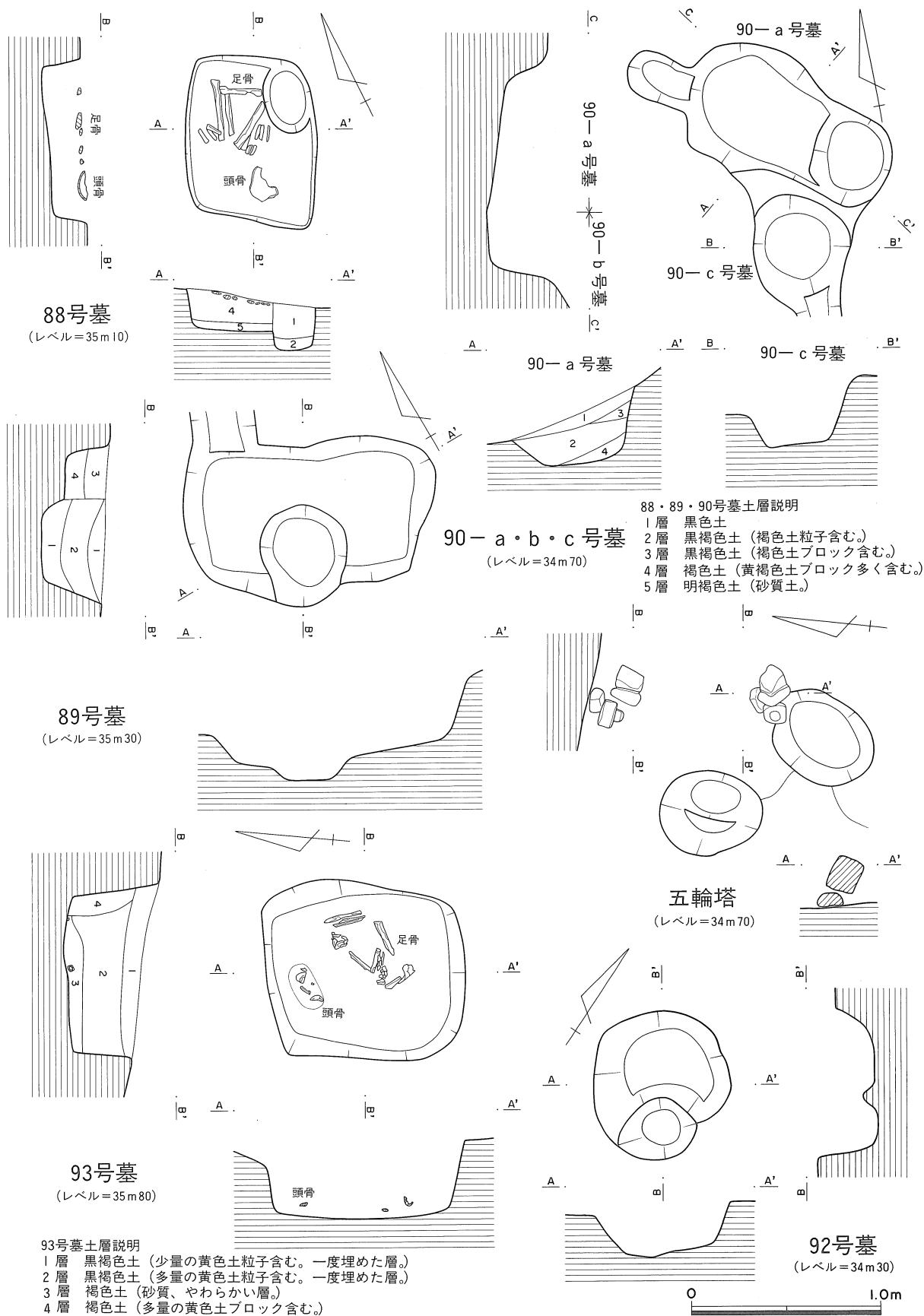
87号墓
(レベル=35m10)

87号墓土層説明
1層 黒褐色土 (褐色土粒子含む。)
2層 明褐色土 (砂質土。)

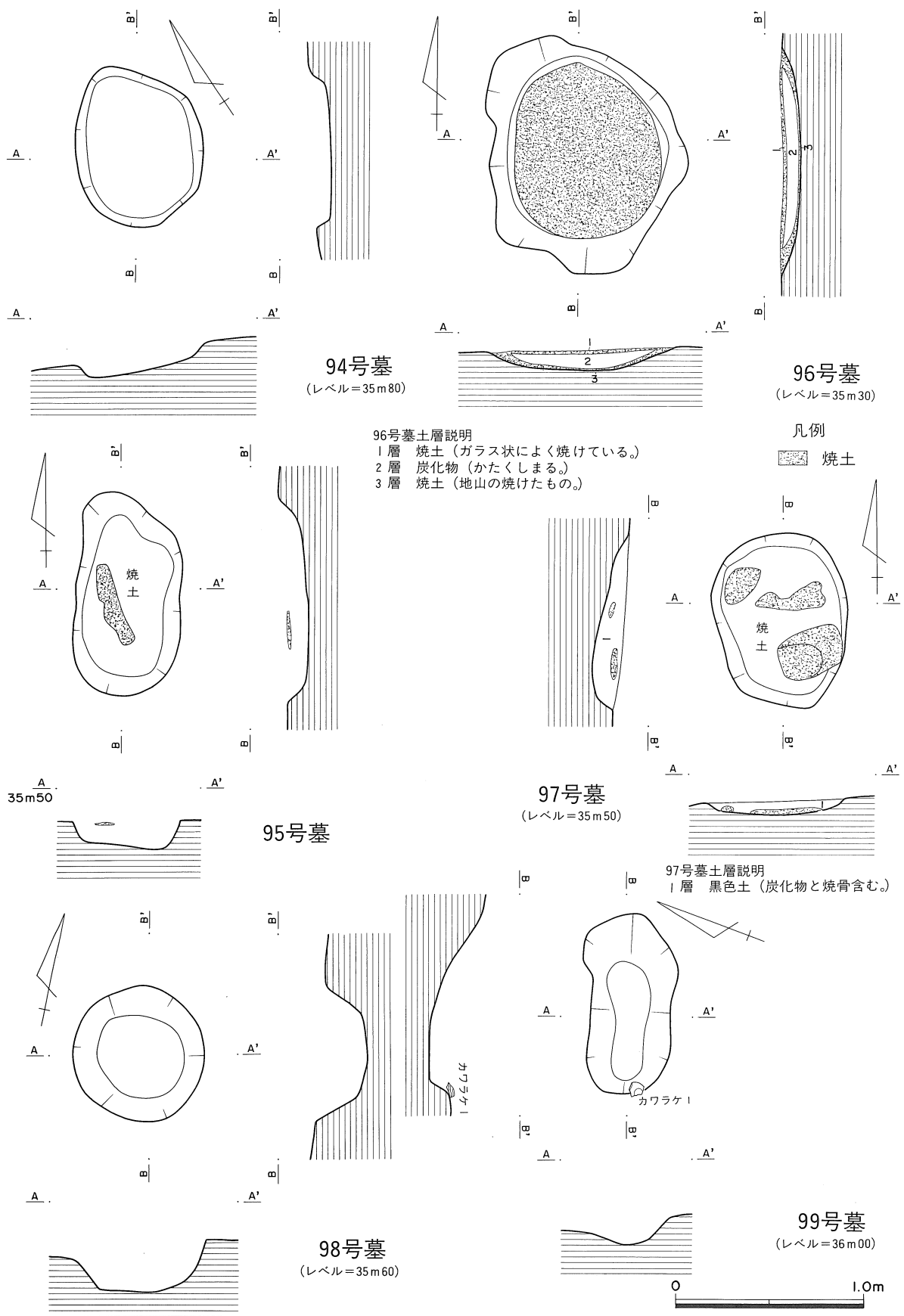
91号墓
(レベル=34m80)

0 1.0m

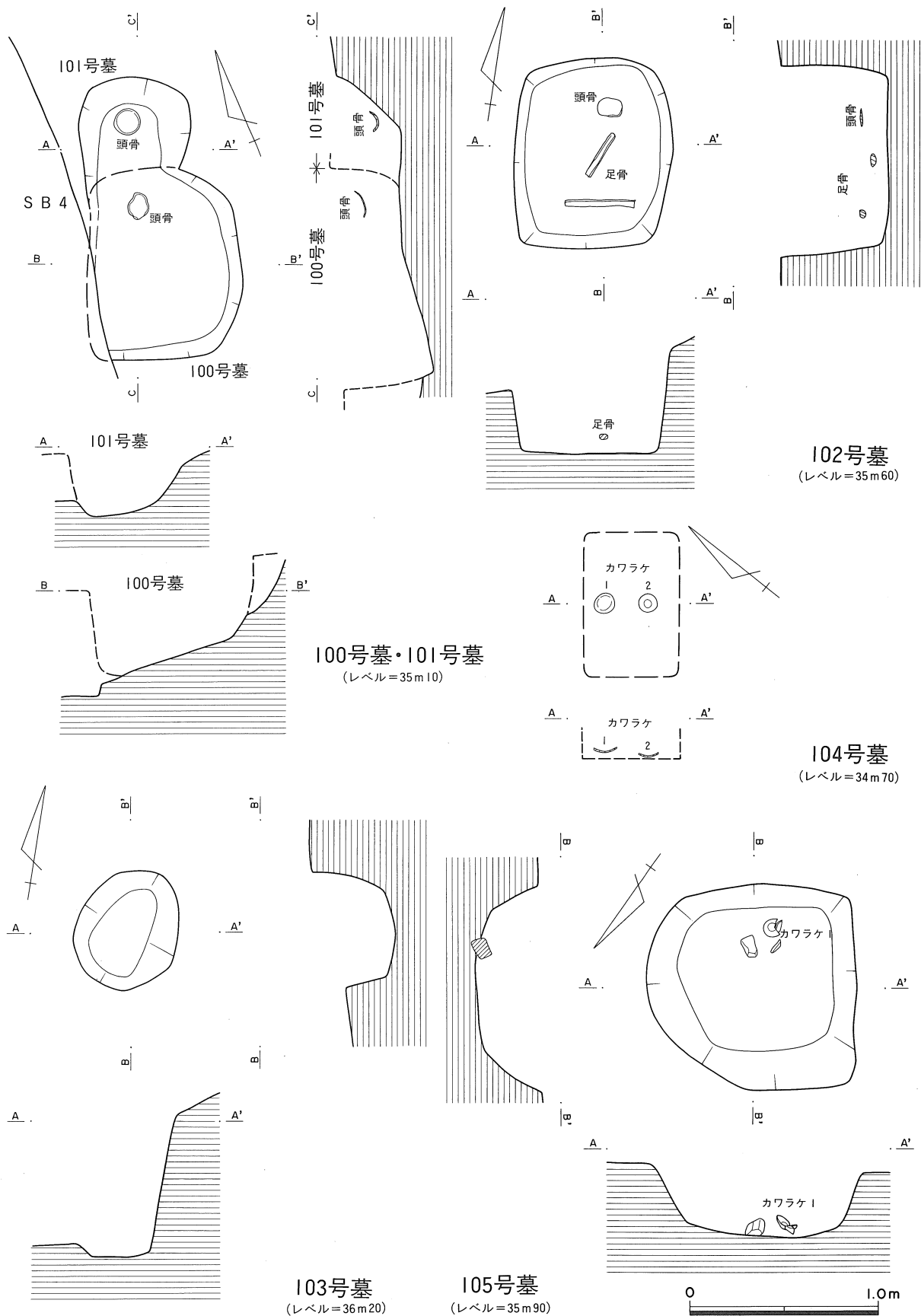
第54図 E地区82-a, b・83・87・91・111号墓実測図



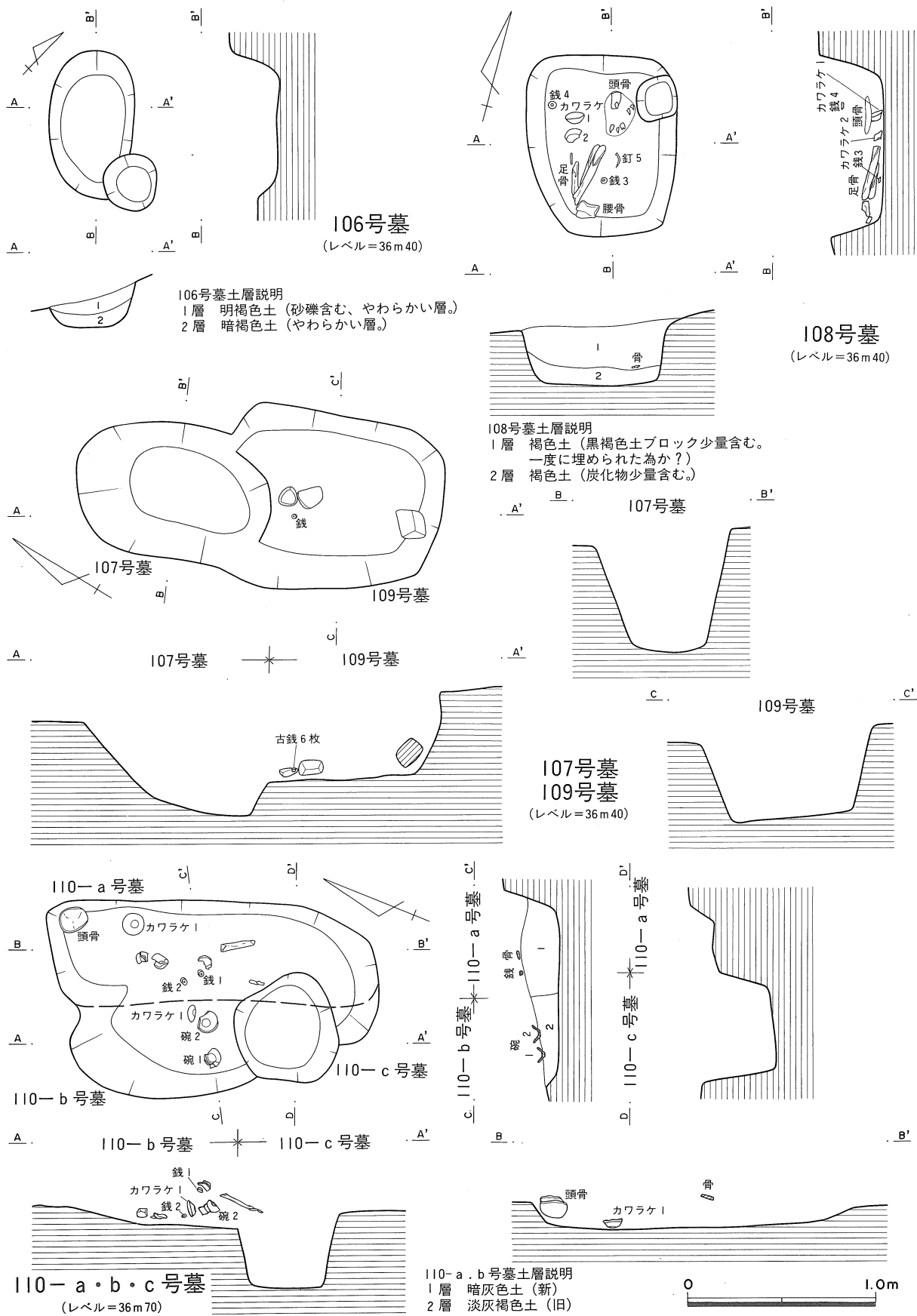
第55図 E地区88・89・90-a, b, c・92・93号墓・五輪塔実測図



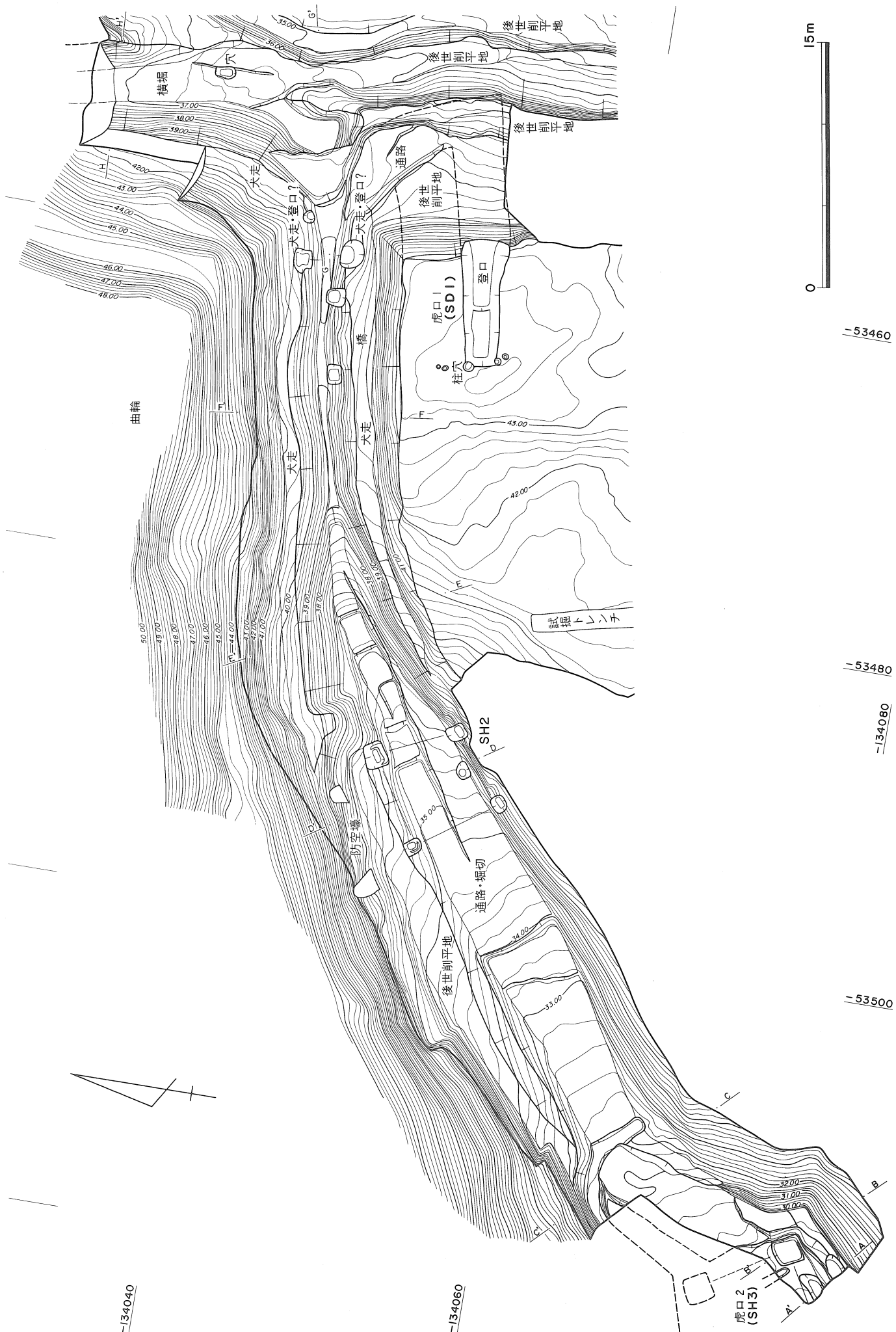
第56図 E地区94～99号墓実測図



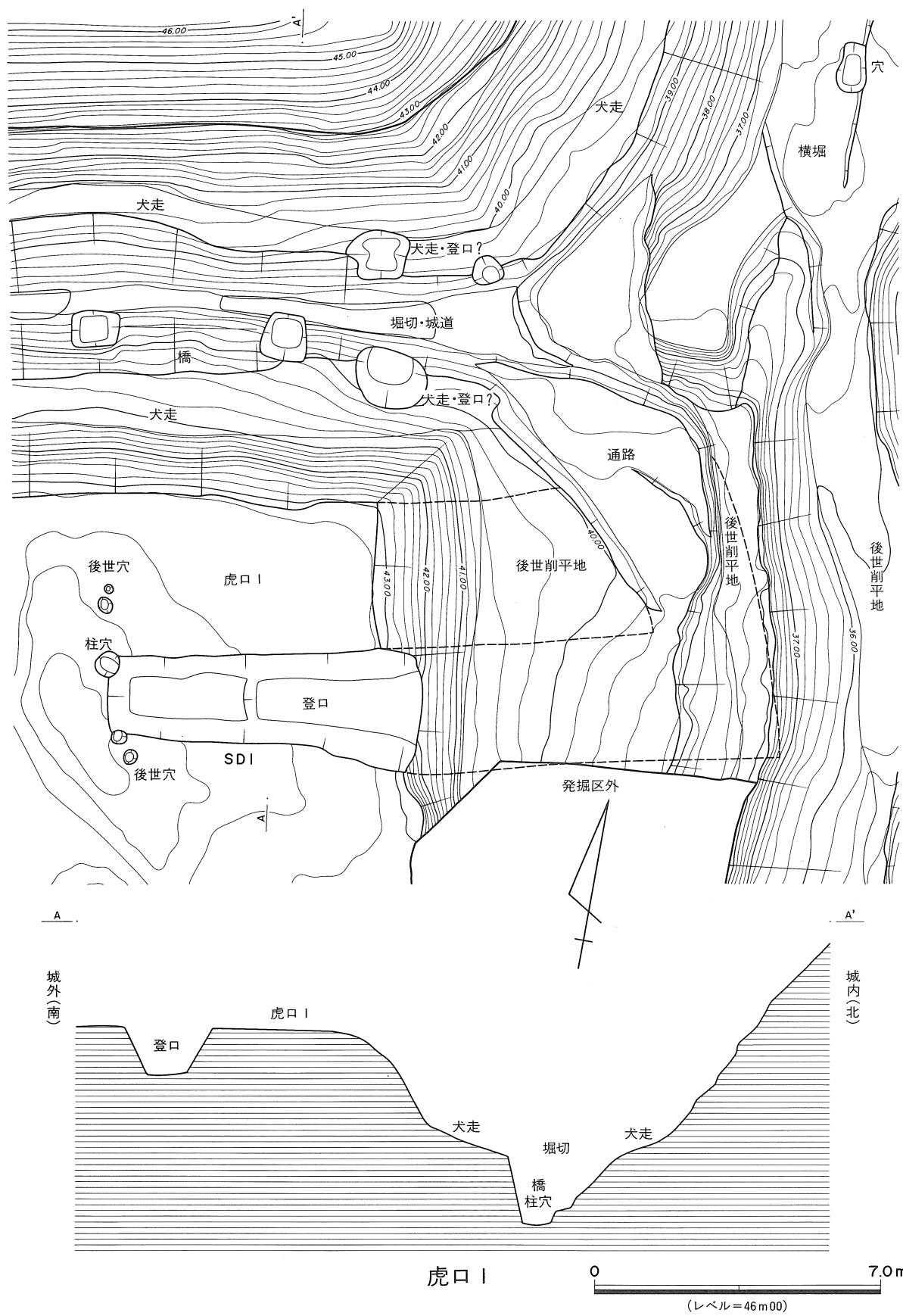
第57図 E地区100～105号墓実測図



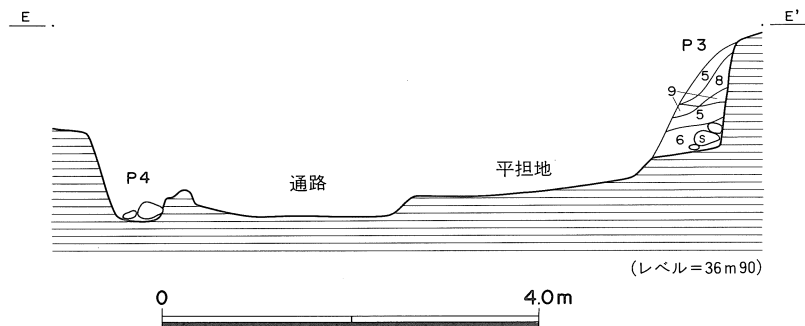
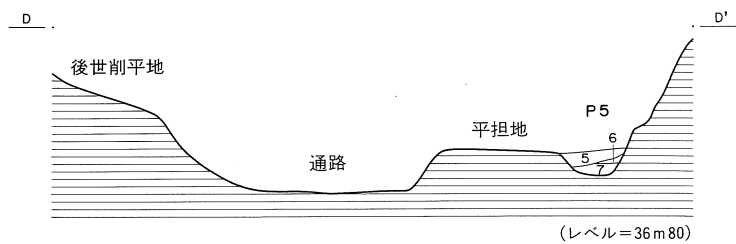
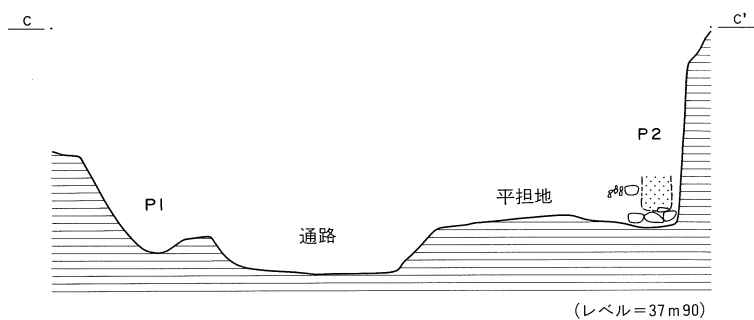
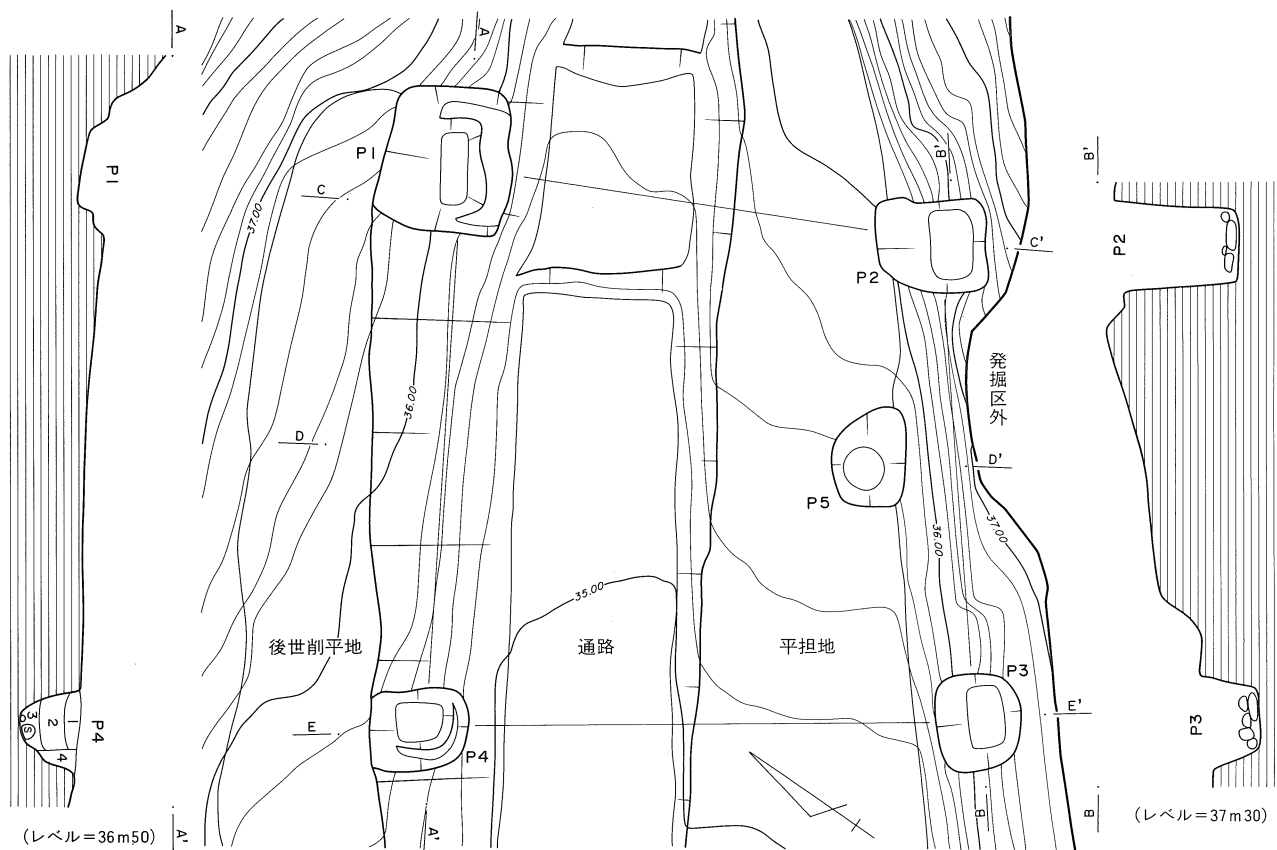
第58図 E地区106~110-a, b, c号墓実測図



第59図 E地区堀切遺構実測図

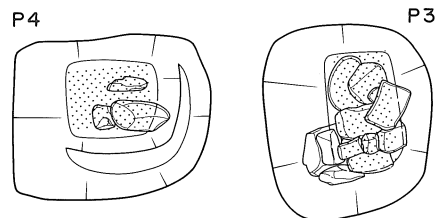
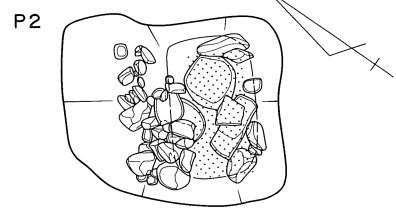


第60図 E地区虎口1遺構実測図



土層説明

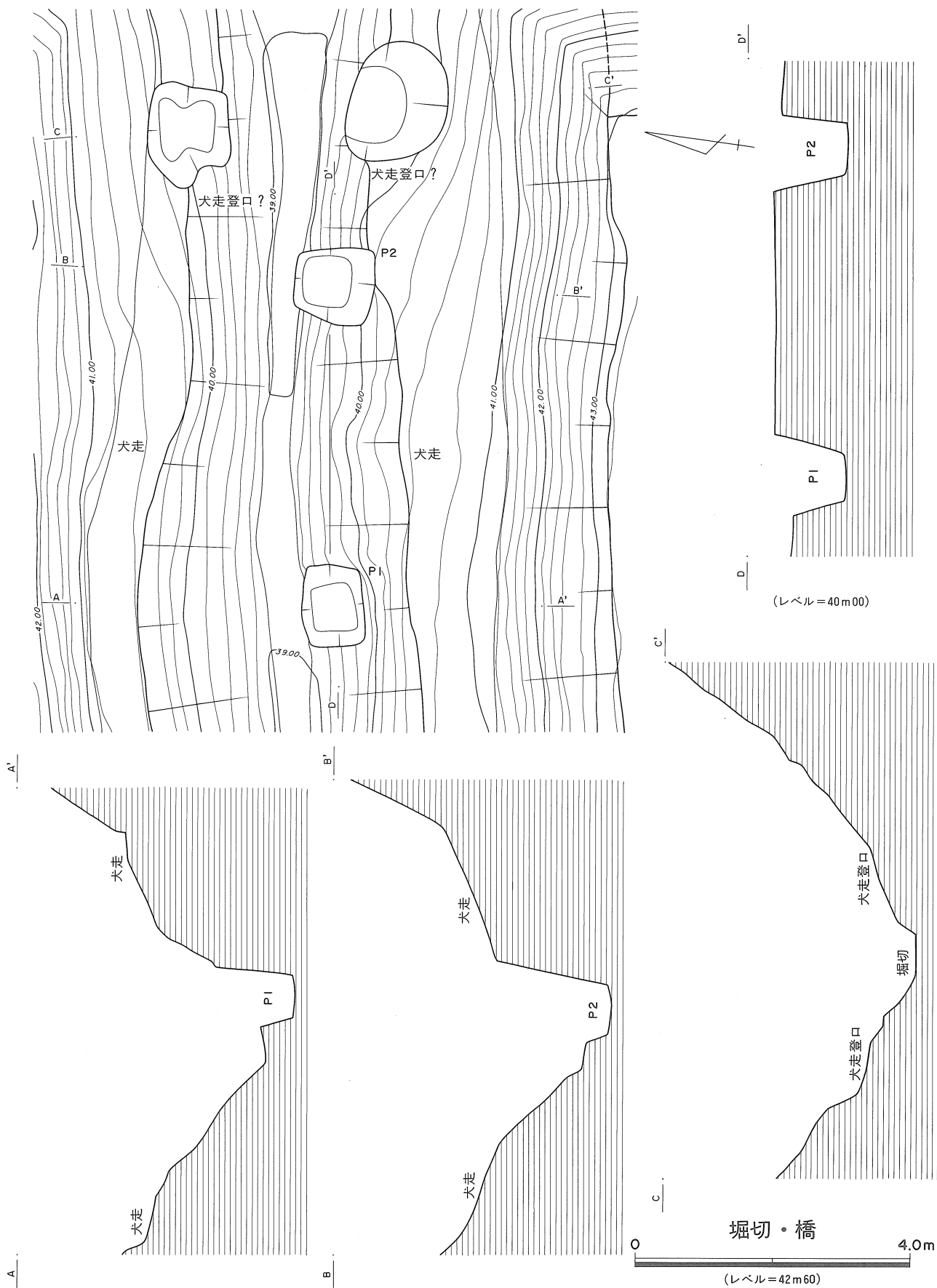
- | | | | |
|----|------------------------------|----|----------------------------|
| 1層 | 白色砂質土
(褐色土ブロック
多く混じる。) | 5層 | 黒色土 |
| 2層 | 白色砂質土
(褐色土ブロック
少し混じる。) | 6層 | 白色砂質土
(黒色土ブロック
を含む。) |
| 3層 | 暗灰白色砂質土 | 7層 | 暗灰色粘土 |
| 4層 | 白色砂質土
(褐色土ブロック
を含む。) | 8層 | 黒褐色土 |
| | | 9層 | 茶褐色土 |



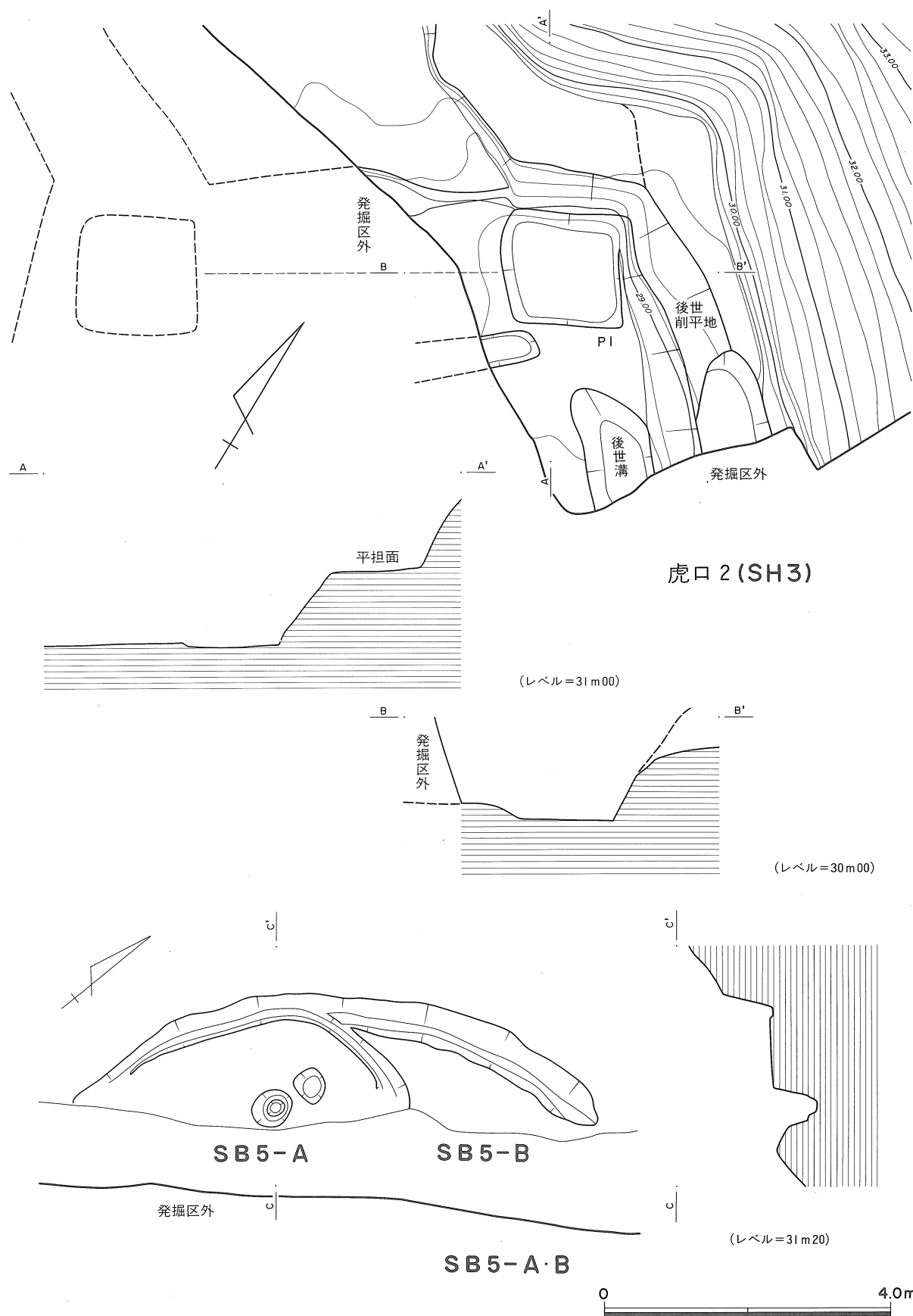
0 2.0m

SH2

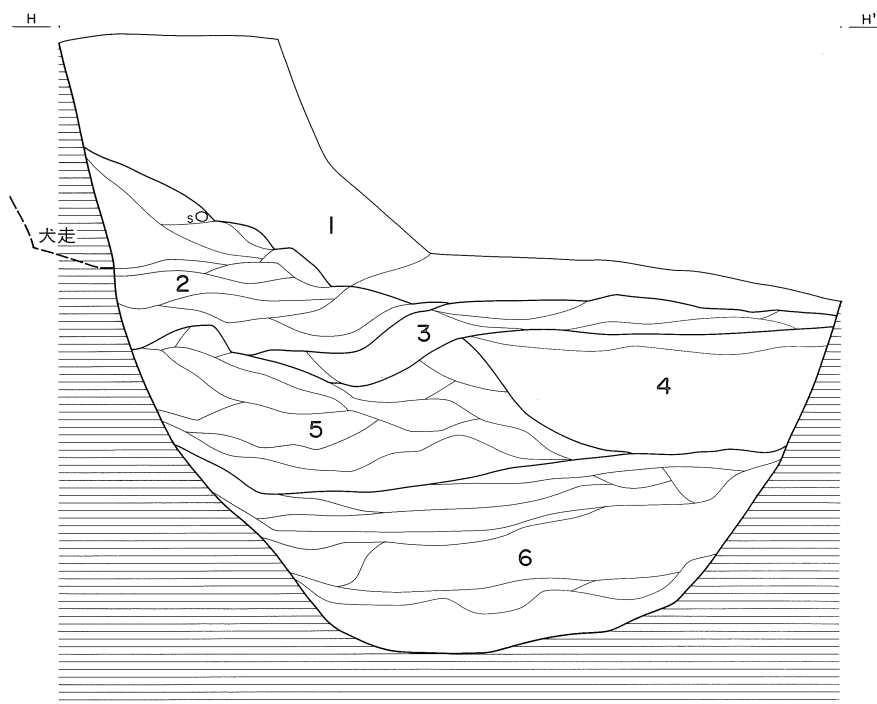
第61図 E地区SH2遺構実測図



第62図 E地区橋遺構実測図

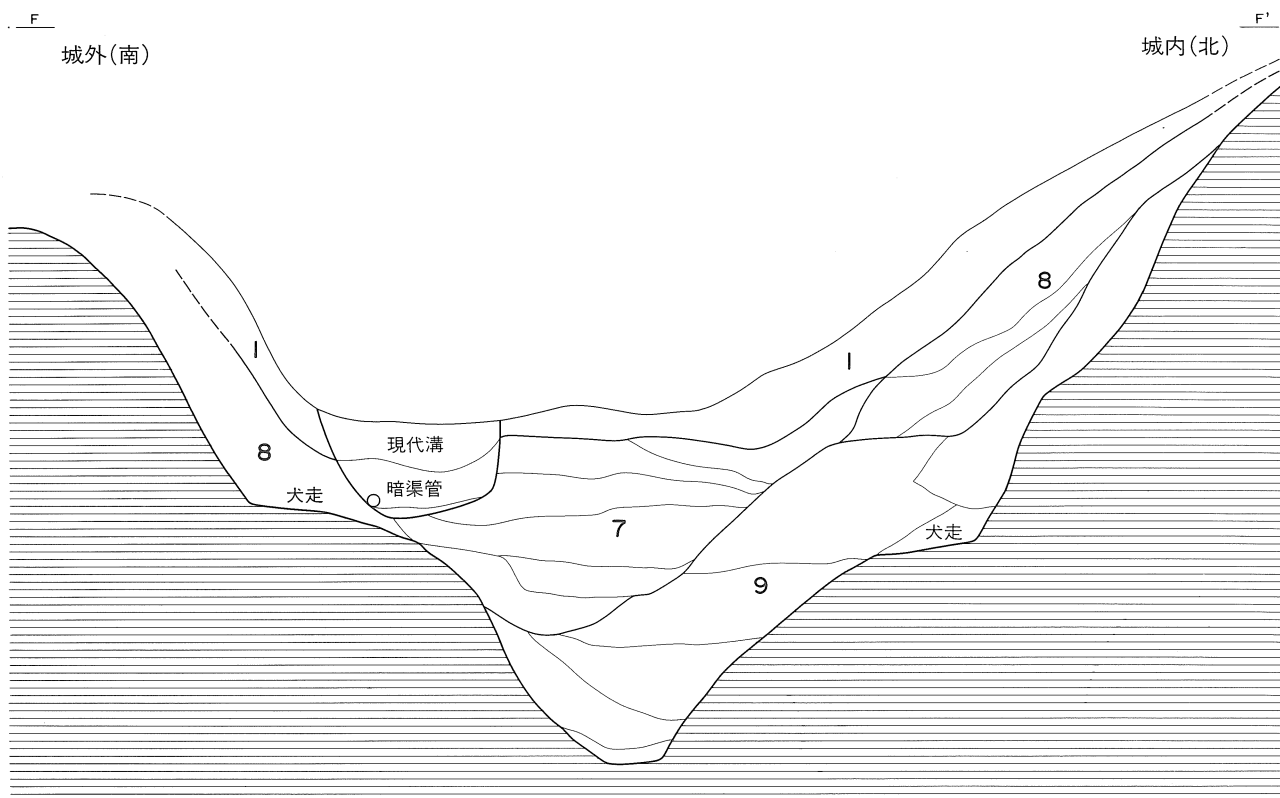


第63図 E地区SH3・SB5-A, B遺構実測図



横堀断面

(レベル=42m00)



(レベル=44m80)

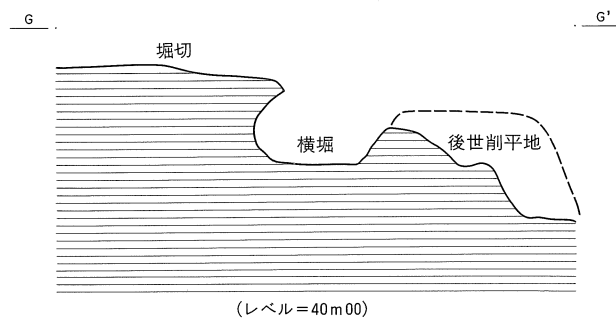
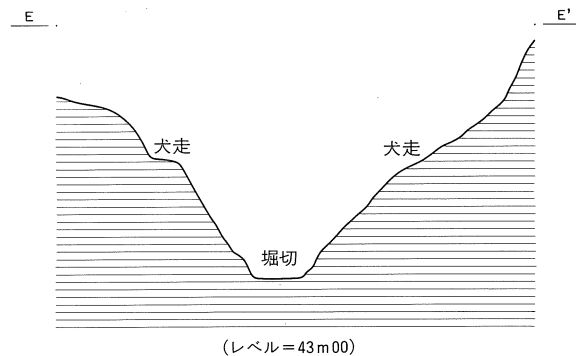
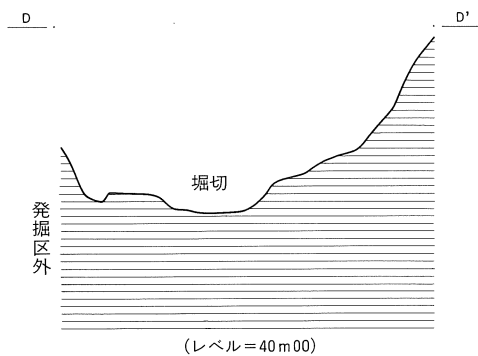
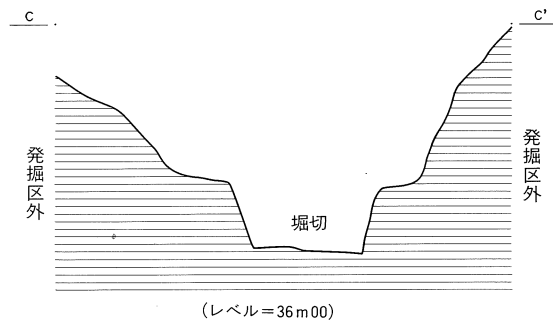
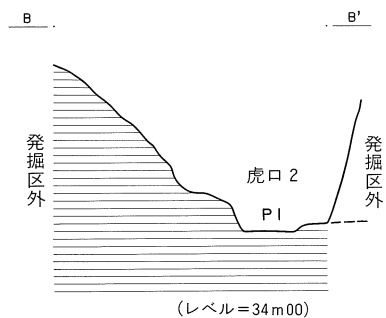
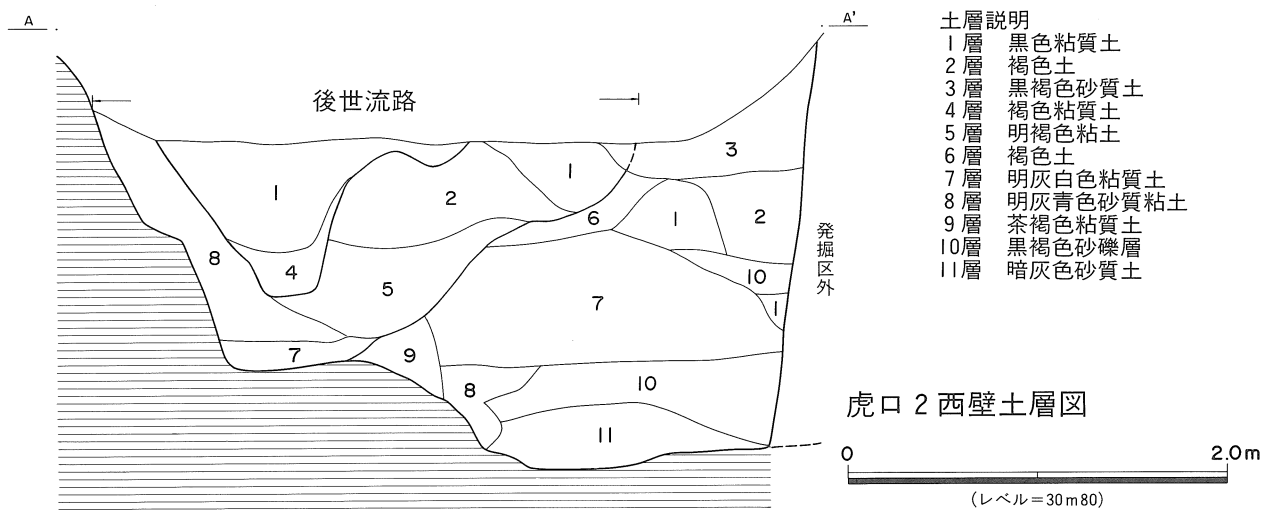
土層説明

- | | | | |
|----|--------|----|-------------------------|
| 1層 | 表土 | 7層 | 褐色系土層 (砂質。4層に対応。) |
| 2層 | 褐灰色系土層 | 8層 | 褐色系土層 (砂質性を帯びるが、しまり悪い。) |
| 3層 | 明褐色系土層 | | (5層に対応。) |
| 4層 | 黄褐色系土層 | 9層 | 暗褐色系土層 (6層に対応。) |
| 5層 | 灰白色系土層 | | |
| 6層 | 淡黄色系土層 | | |

堀切断面

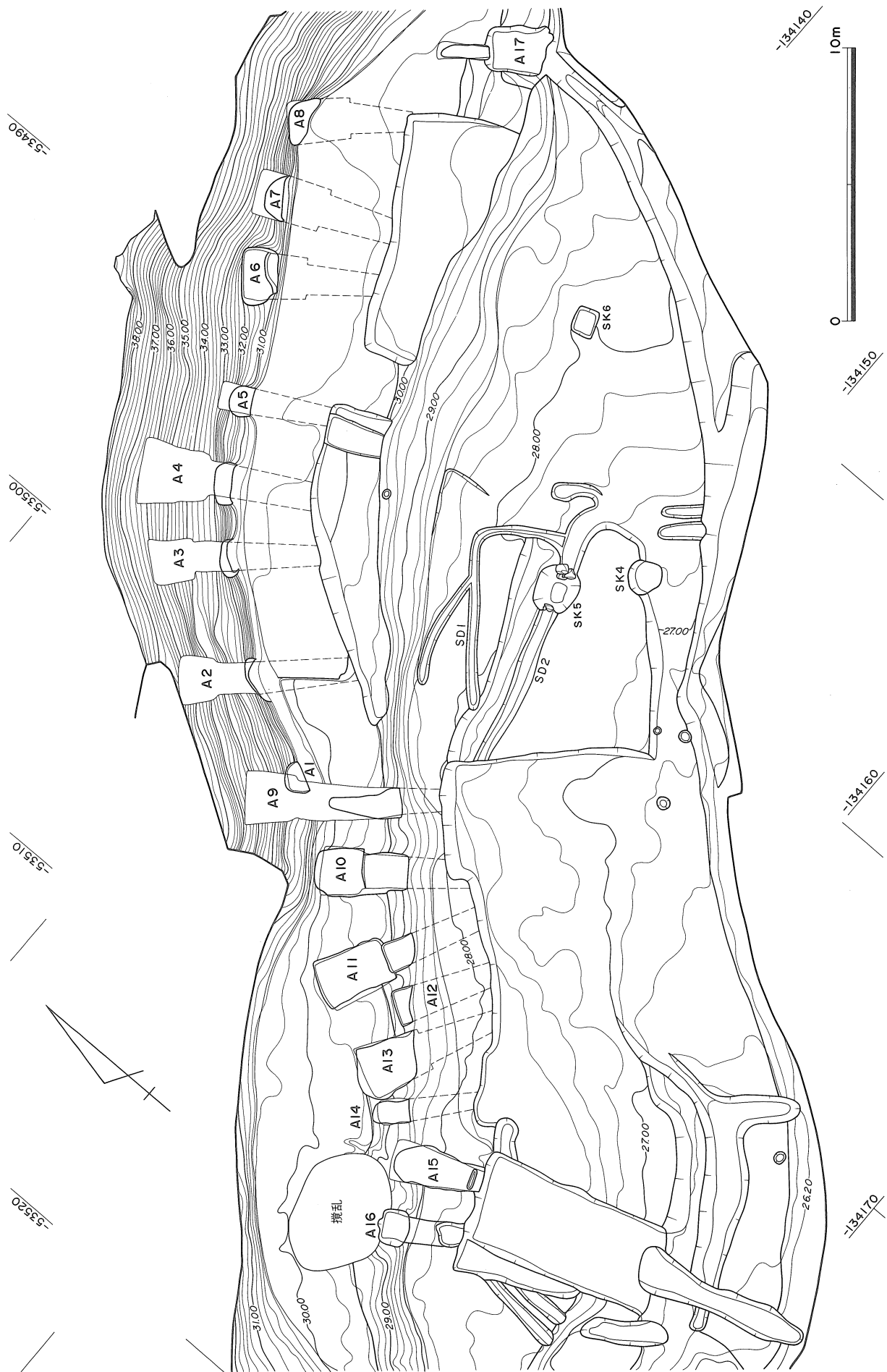
0 30m

第65図 E地区堀切・横堀遺構実測図1

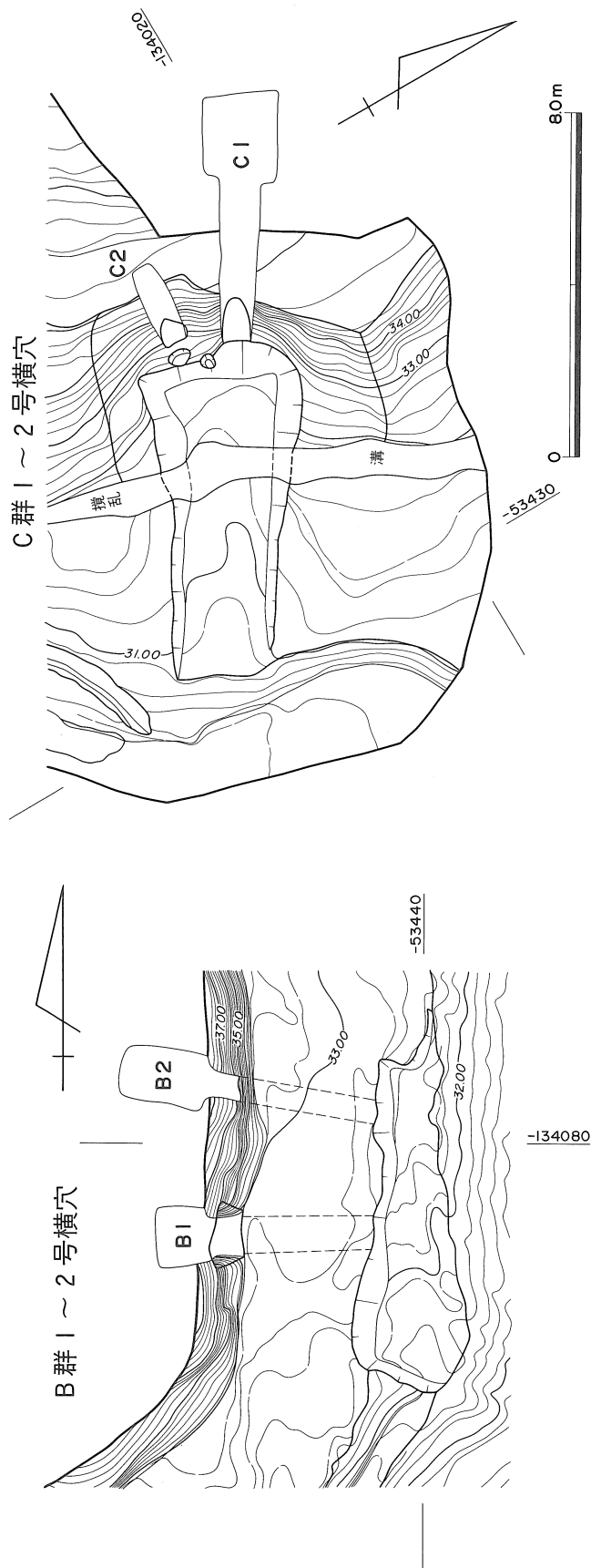
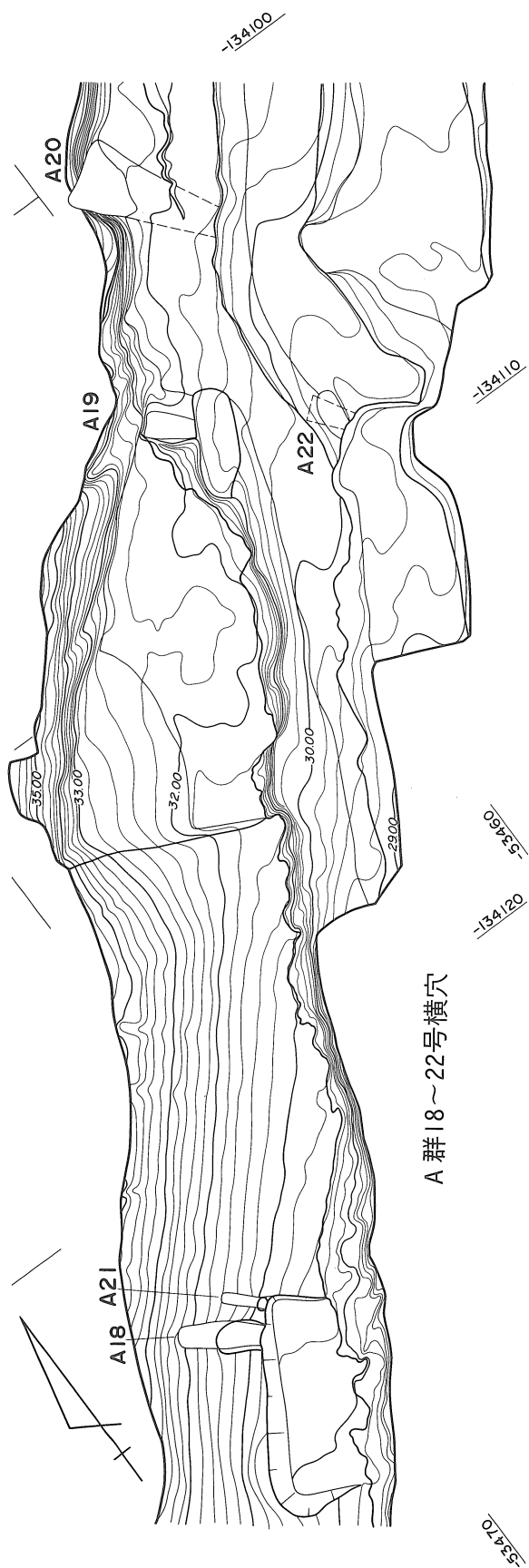


堀切断面

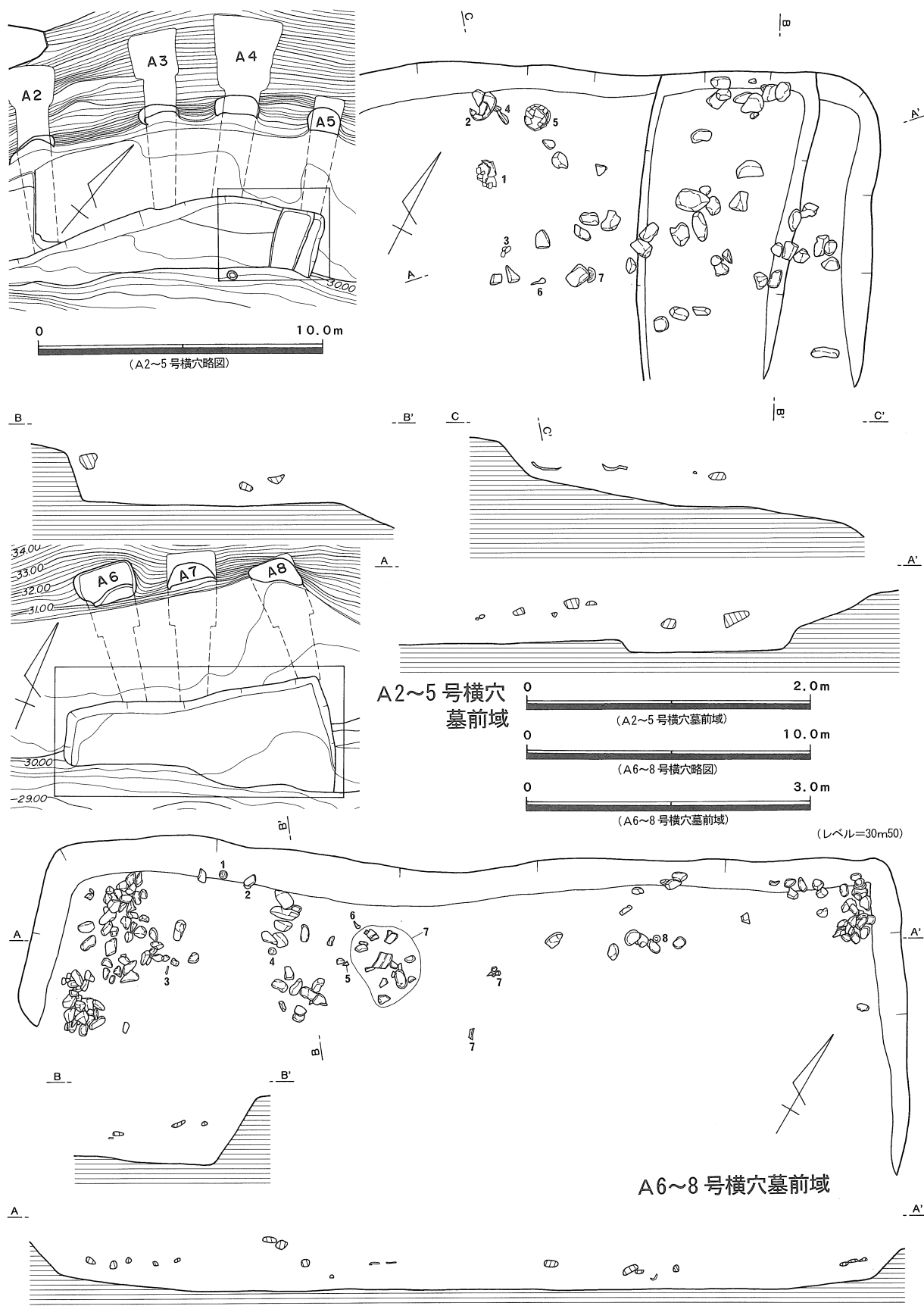
0 10m



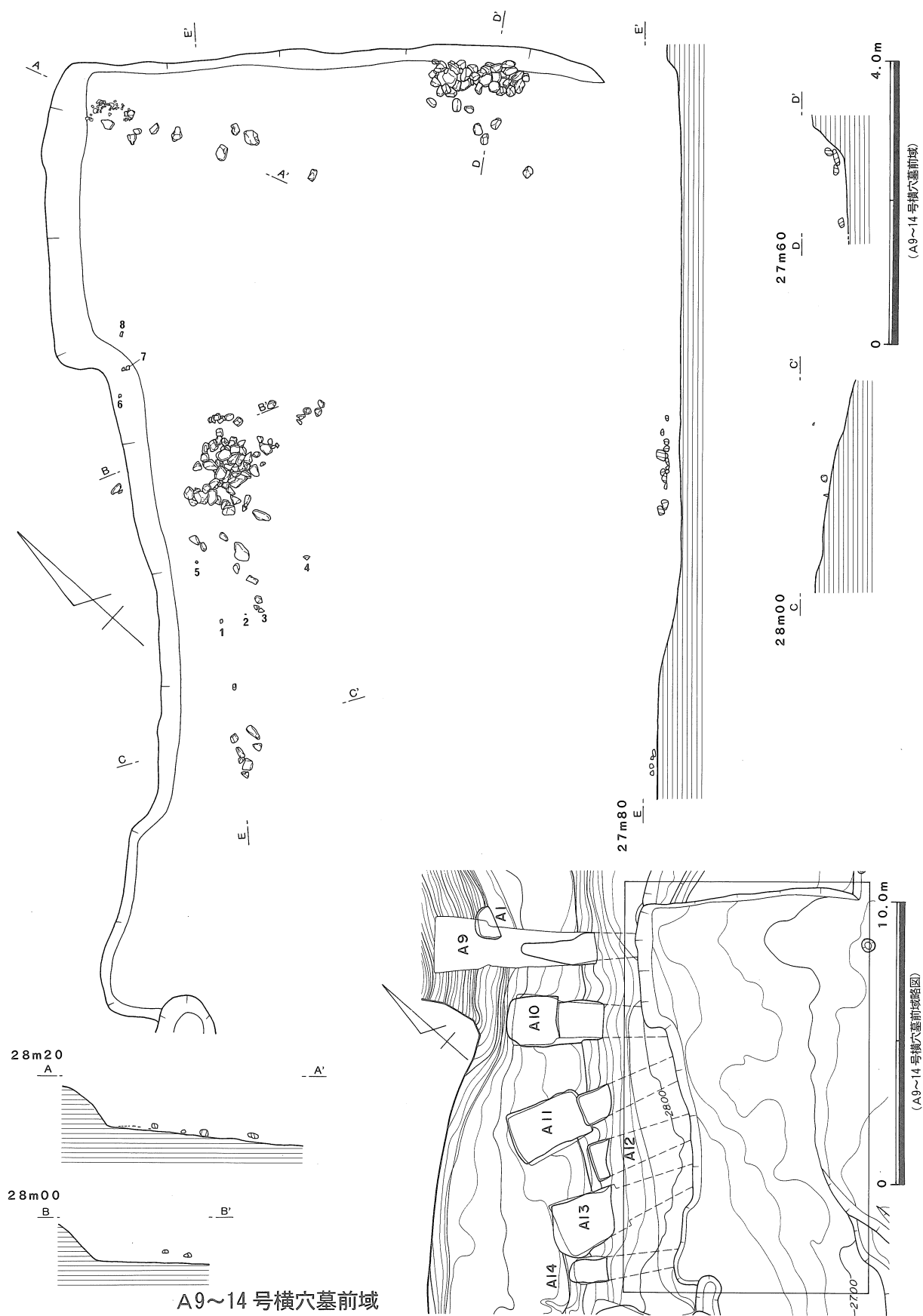
第67图 E地区A群横穴位置图



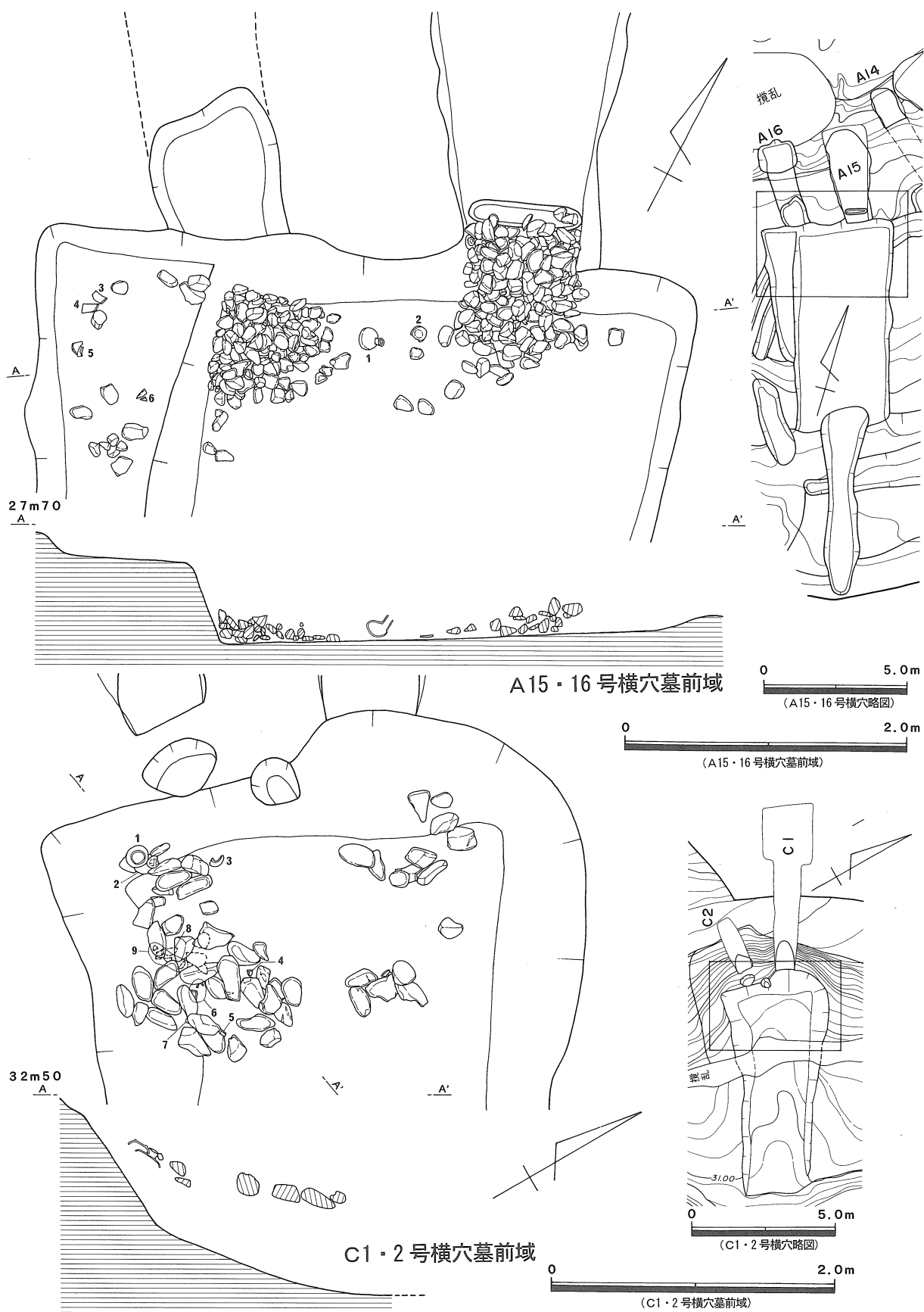
第68图 E地区A・B・C群横穴位置图



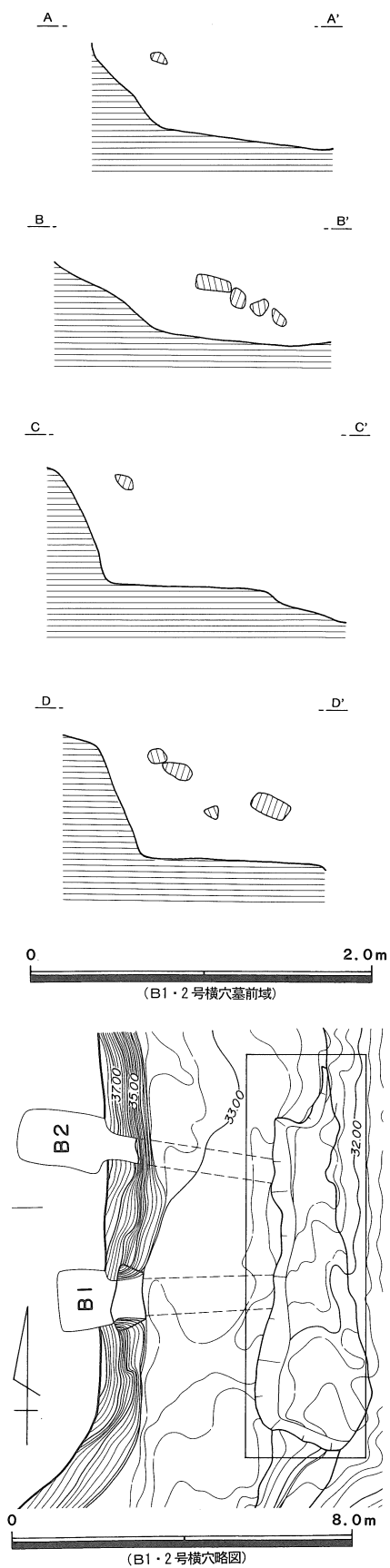
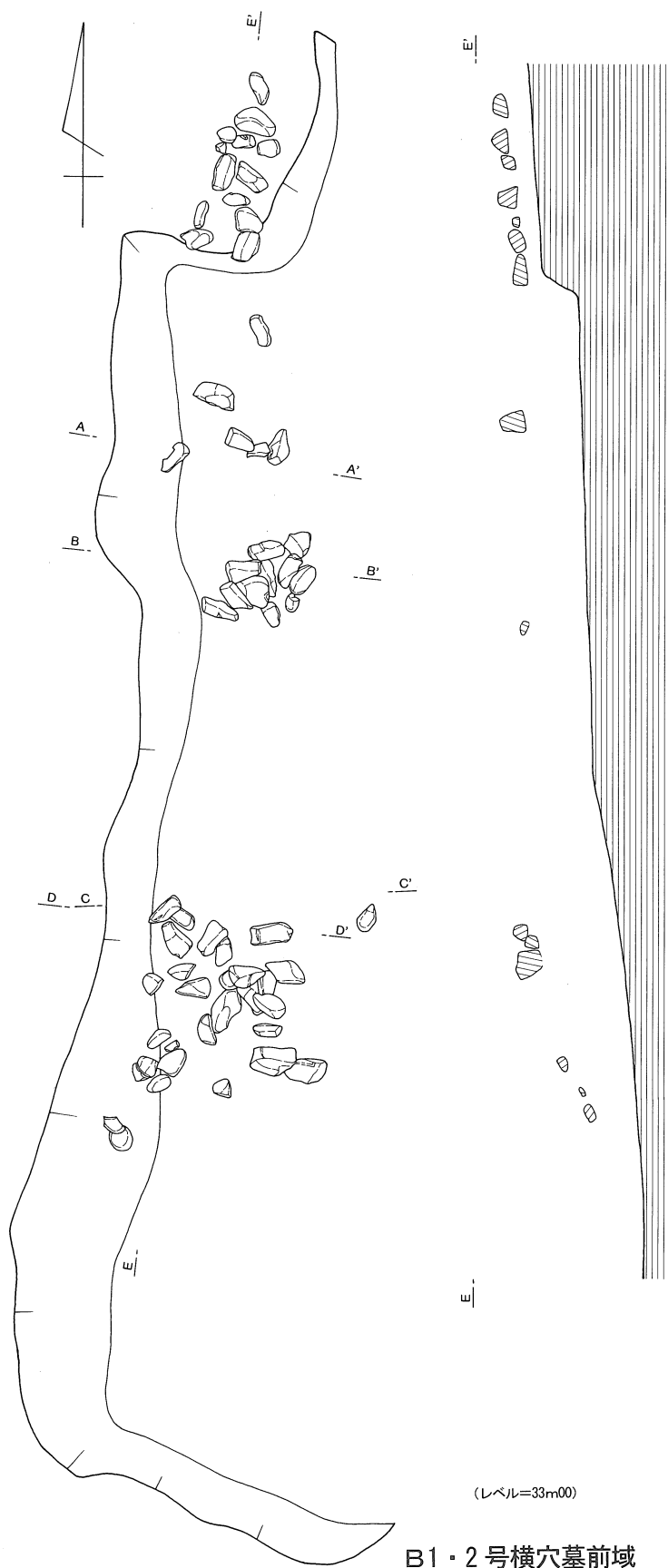
第69図 E地区A2~5・A6~8号横穴墓前域遺構・遺物出土状況実測図



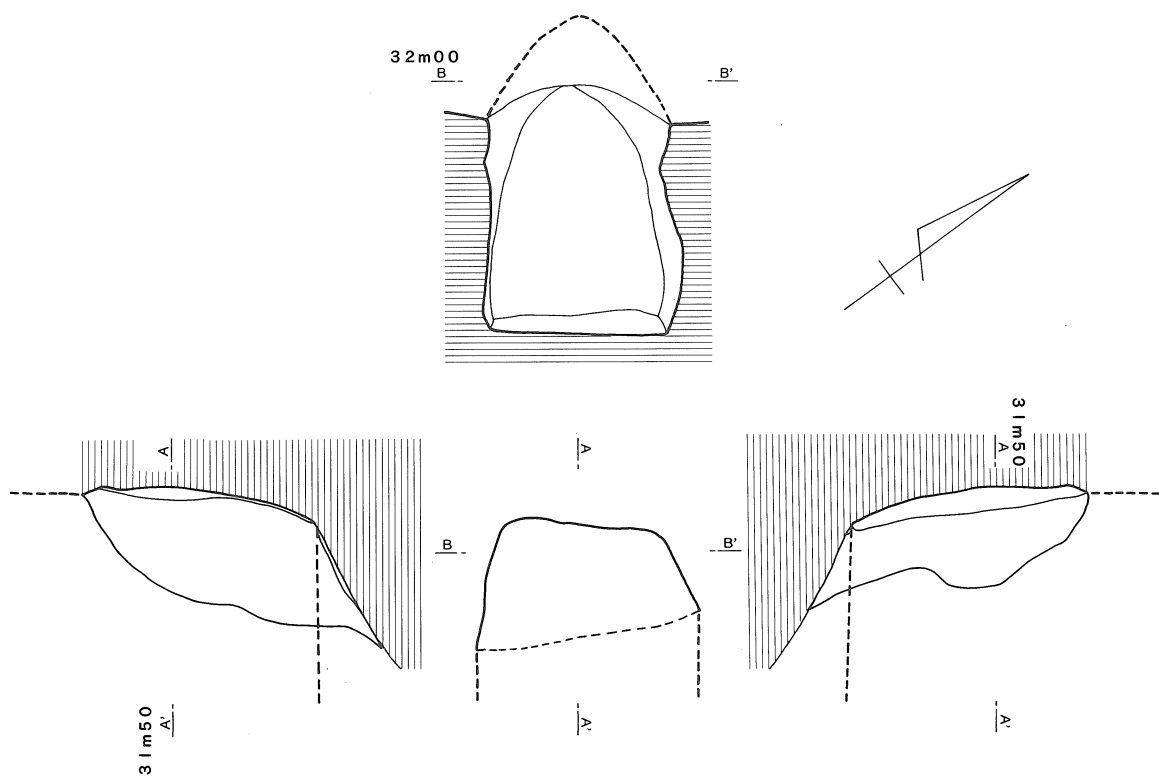
第70図 E地区A9~14号横穴墓前域遺構・遺物出土状況実測図



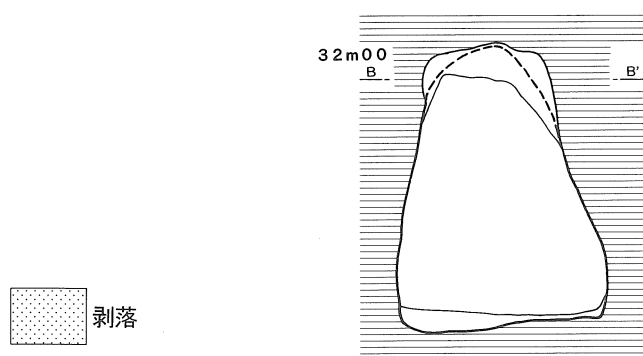
第72図 E地区A15・16号・C1・2号横穴墓前域遺構・遺物出土状況実測図



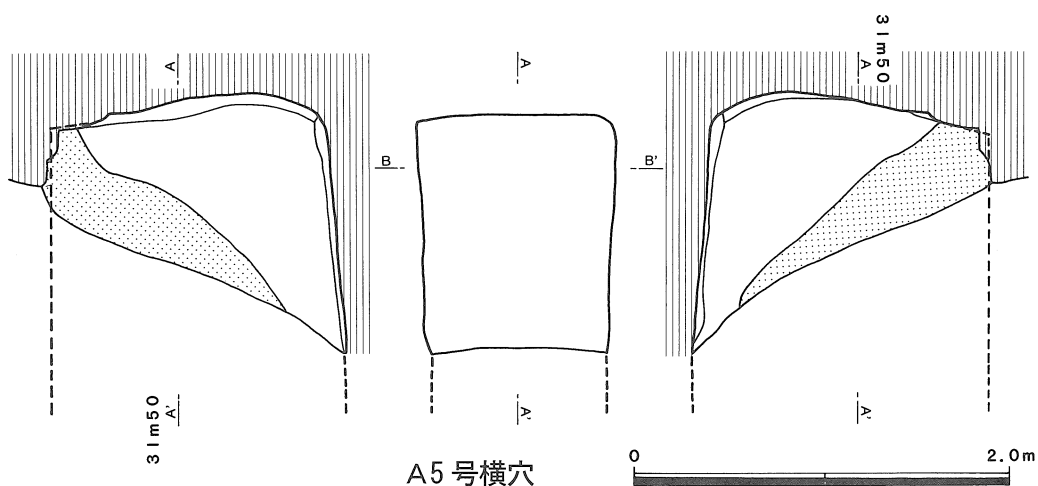
第73図 E地区B1・2号横穴墓前域遺構・遺物出土状況実測図



A1号横穴

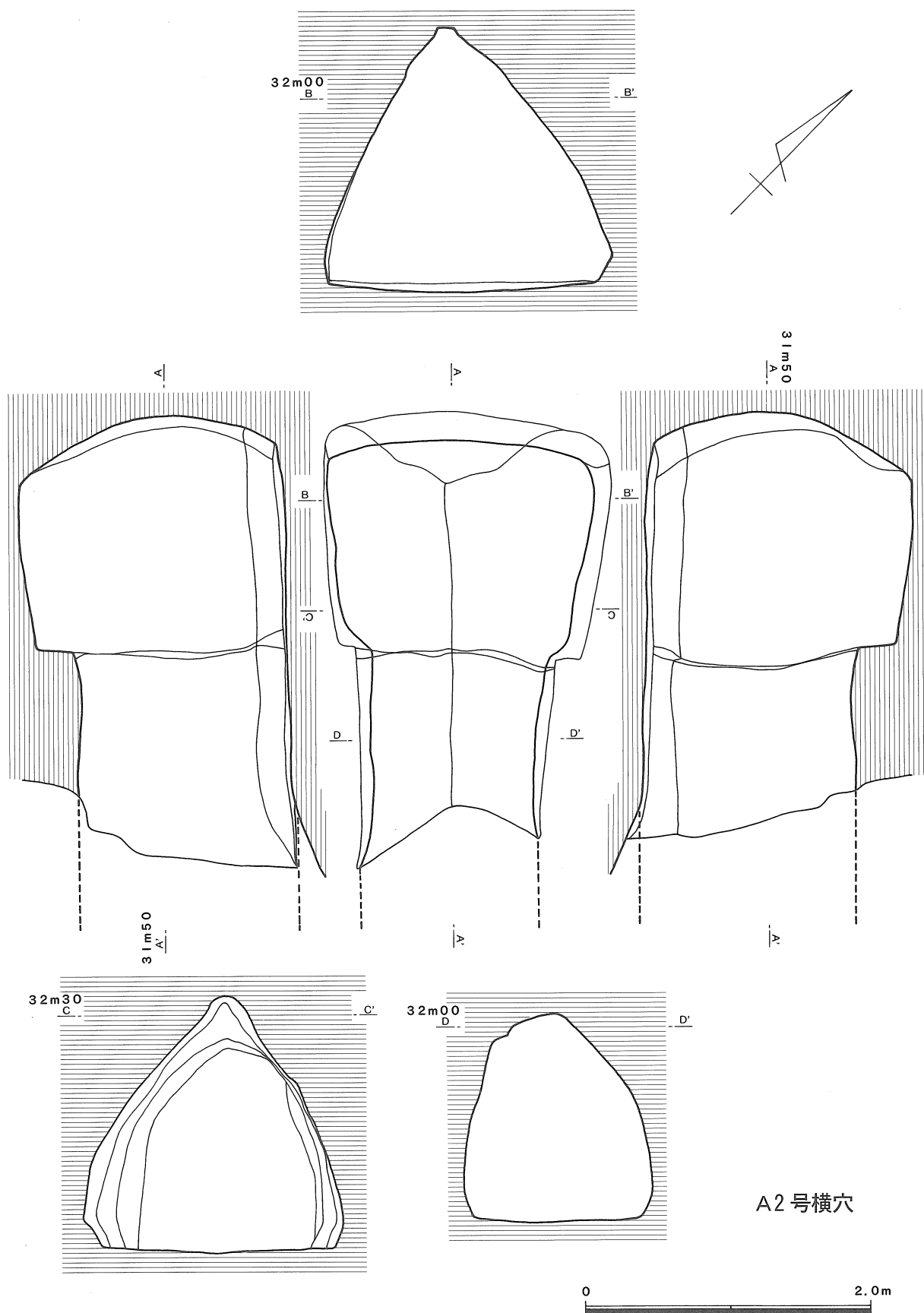


剥落

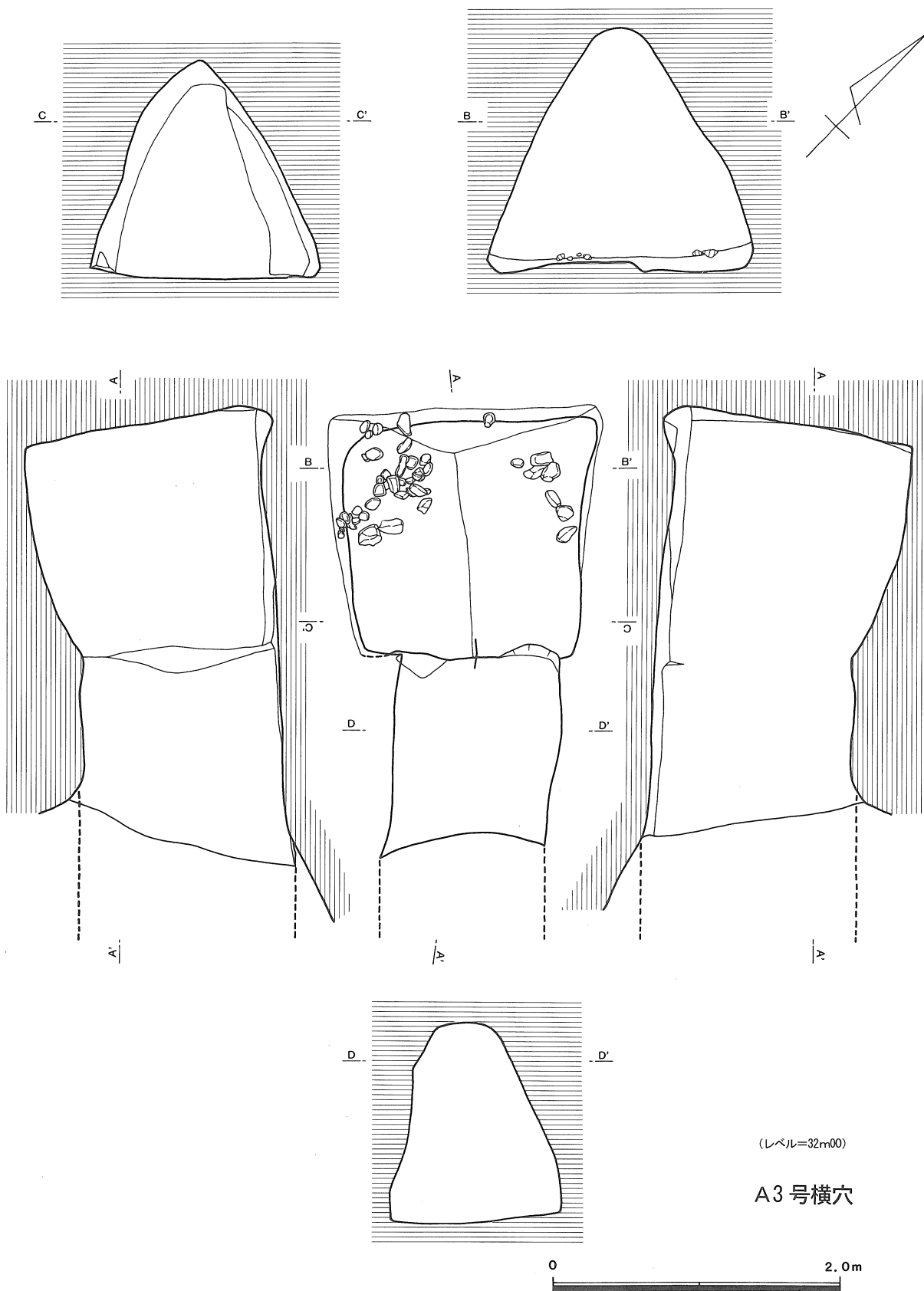


A5号横穴

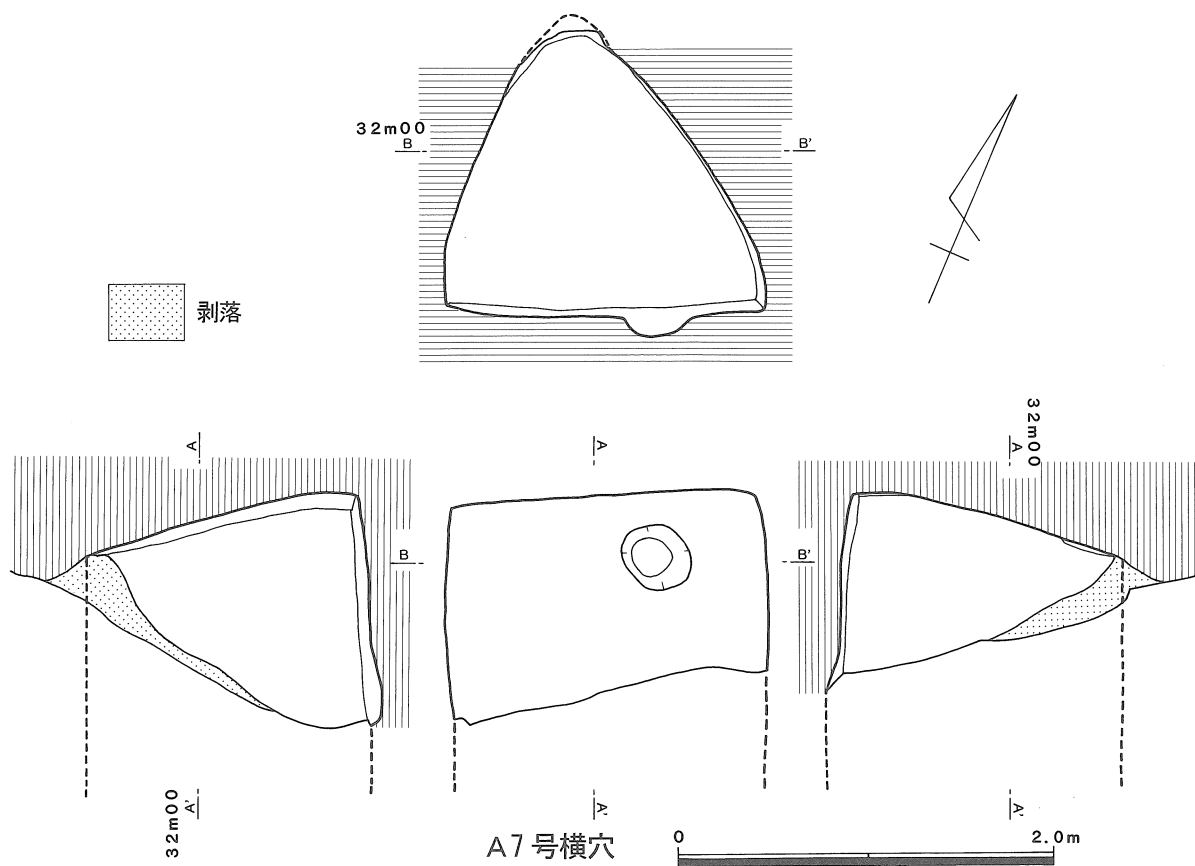
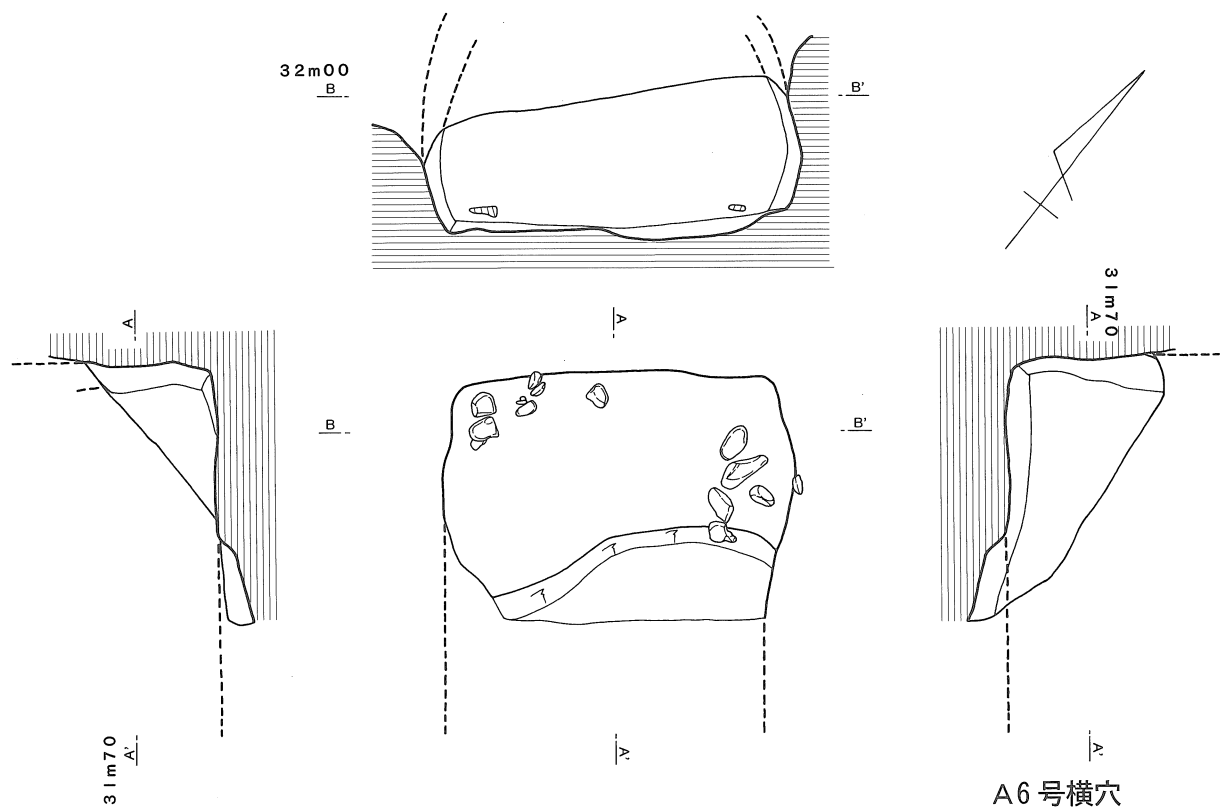
0 2.0m



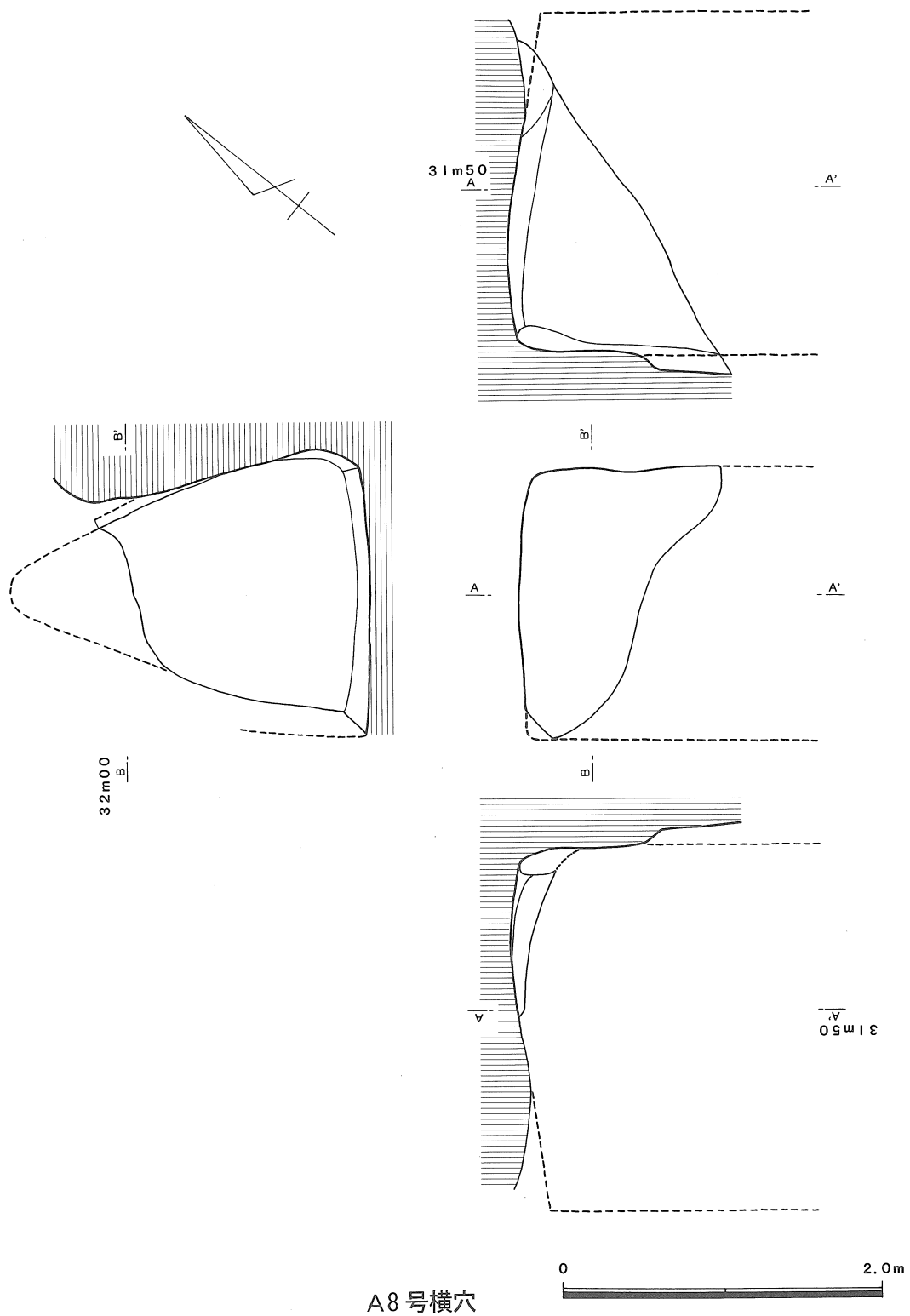
第75図 E地区A2号横穴実測図



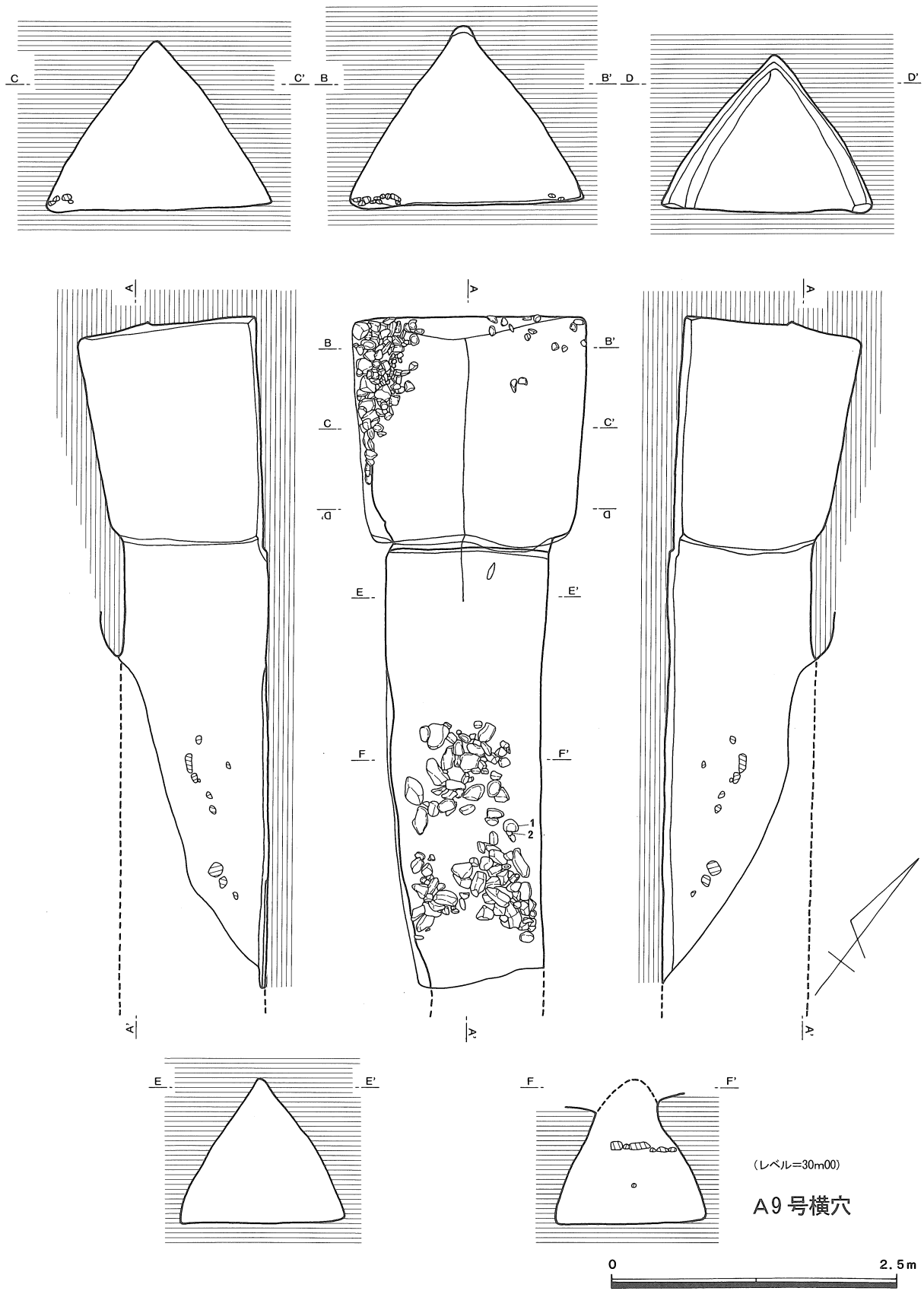
第76図 E地区A3号横穴実測図



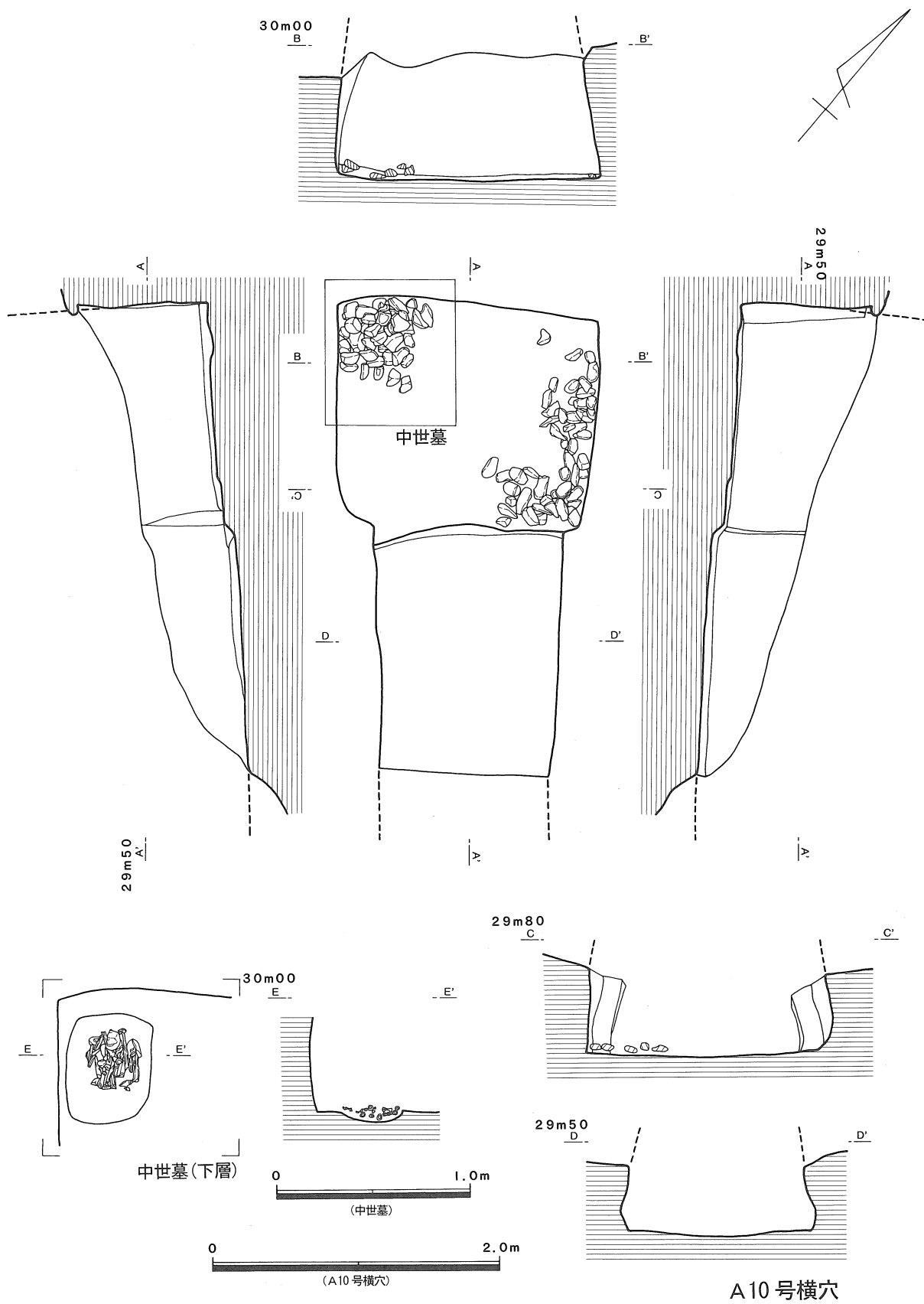
第78图 E地区A6・7号横穴实测图



第79图 E地区A8号横穴实测图



第80図 E地区A9号横穴実測図

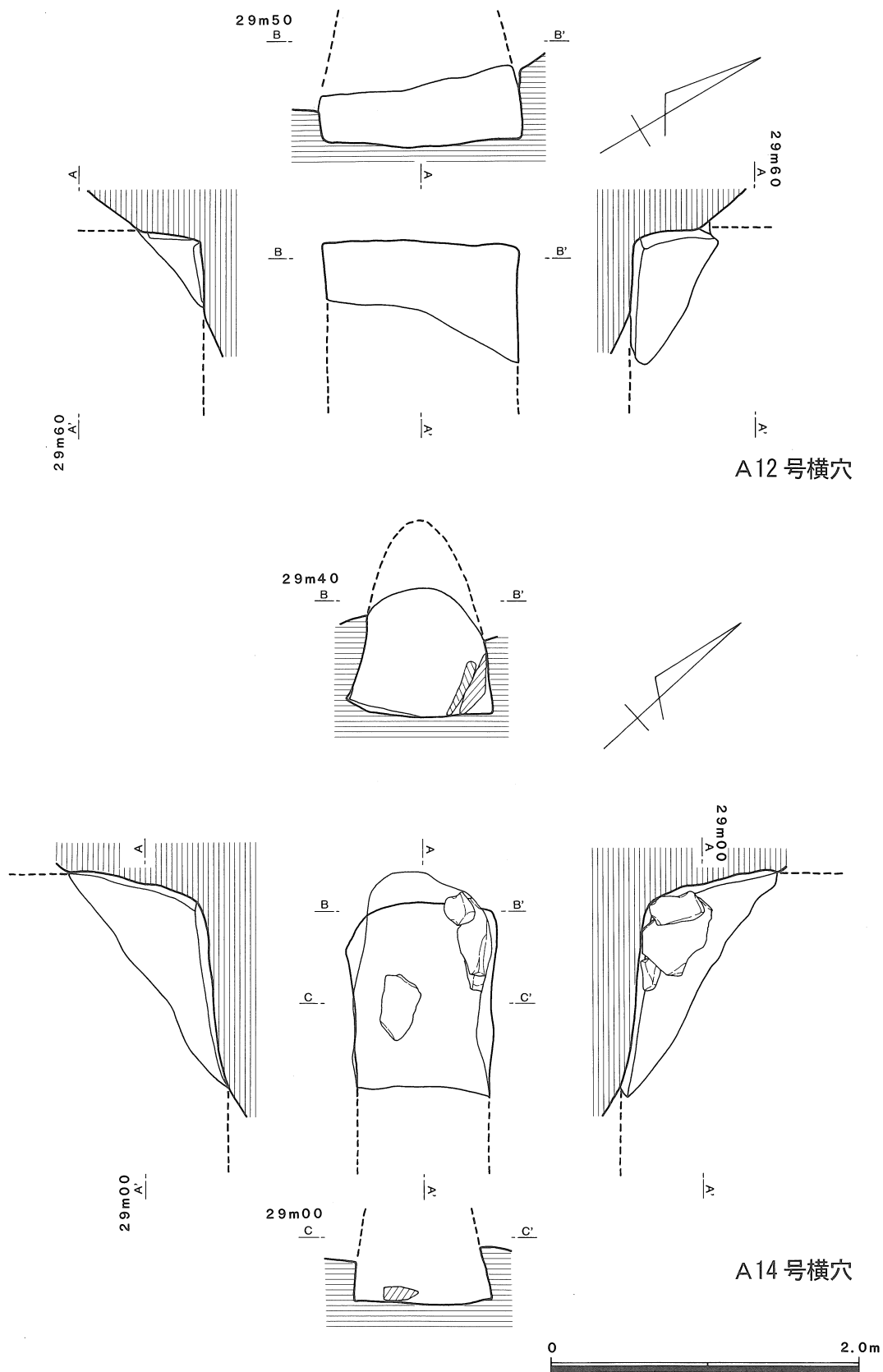


第81図 E地区A10号横穴実測図

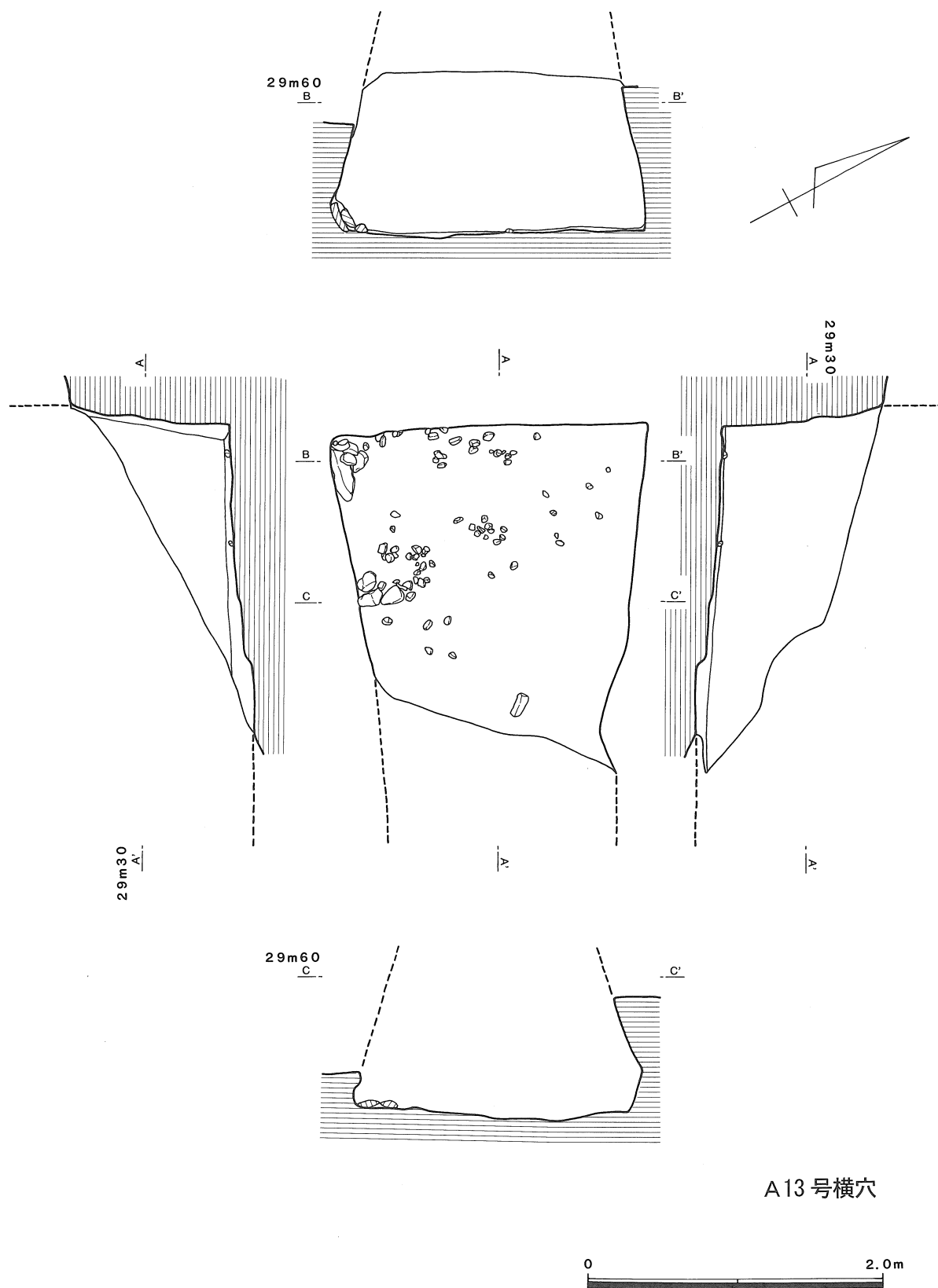


A11 号横穴

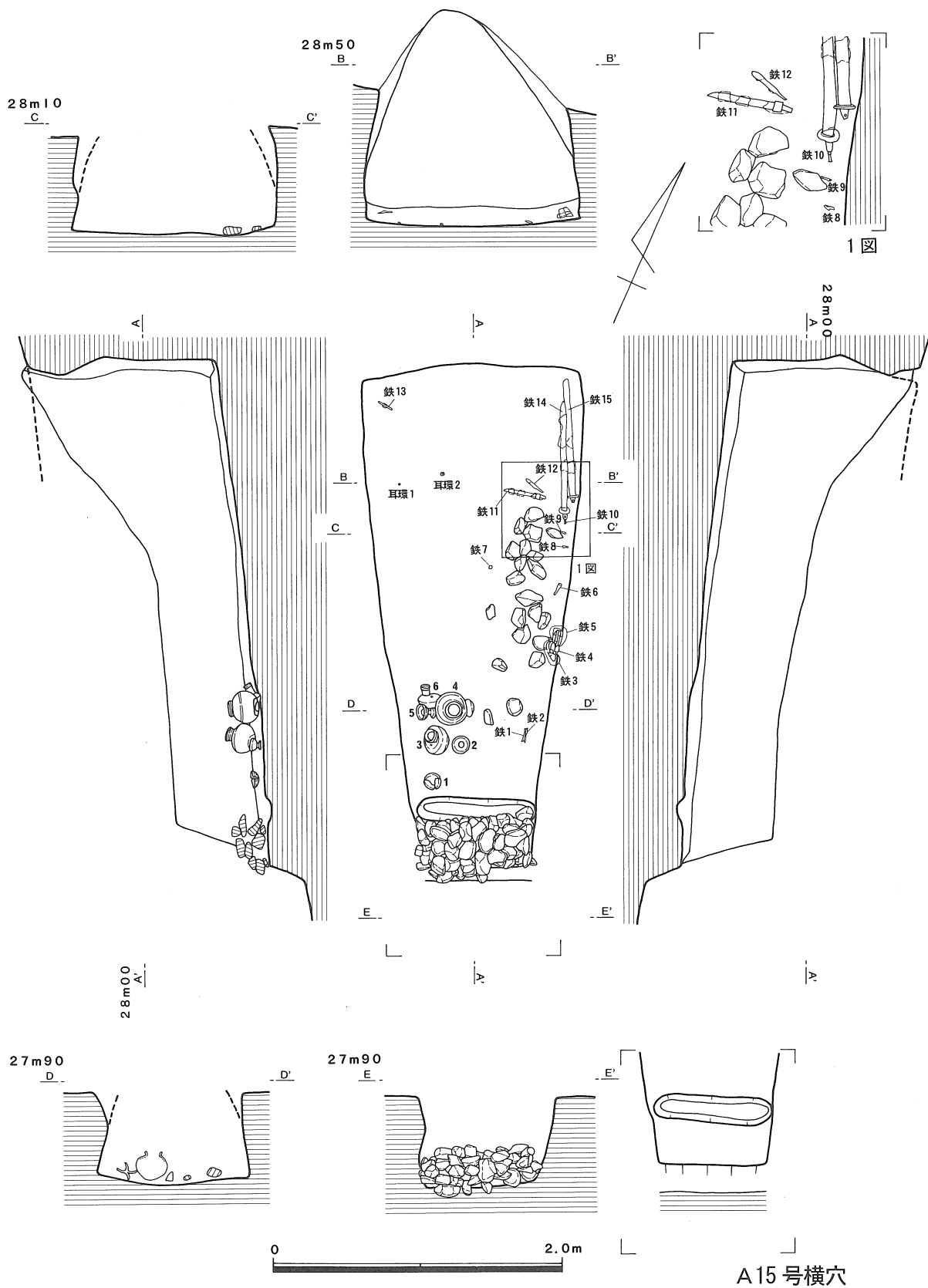
第82図 E 地区A11号横穴実測図



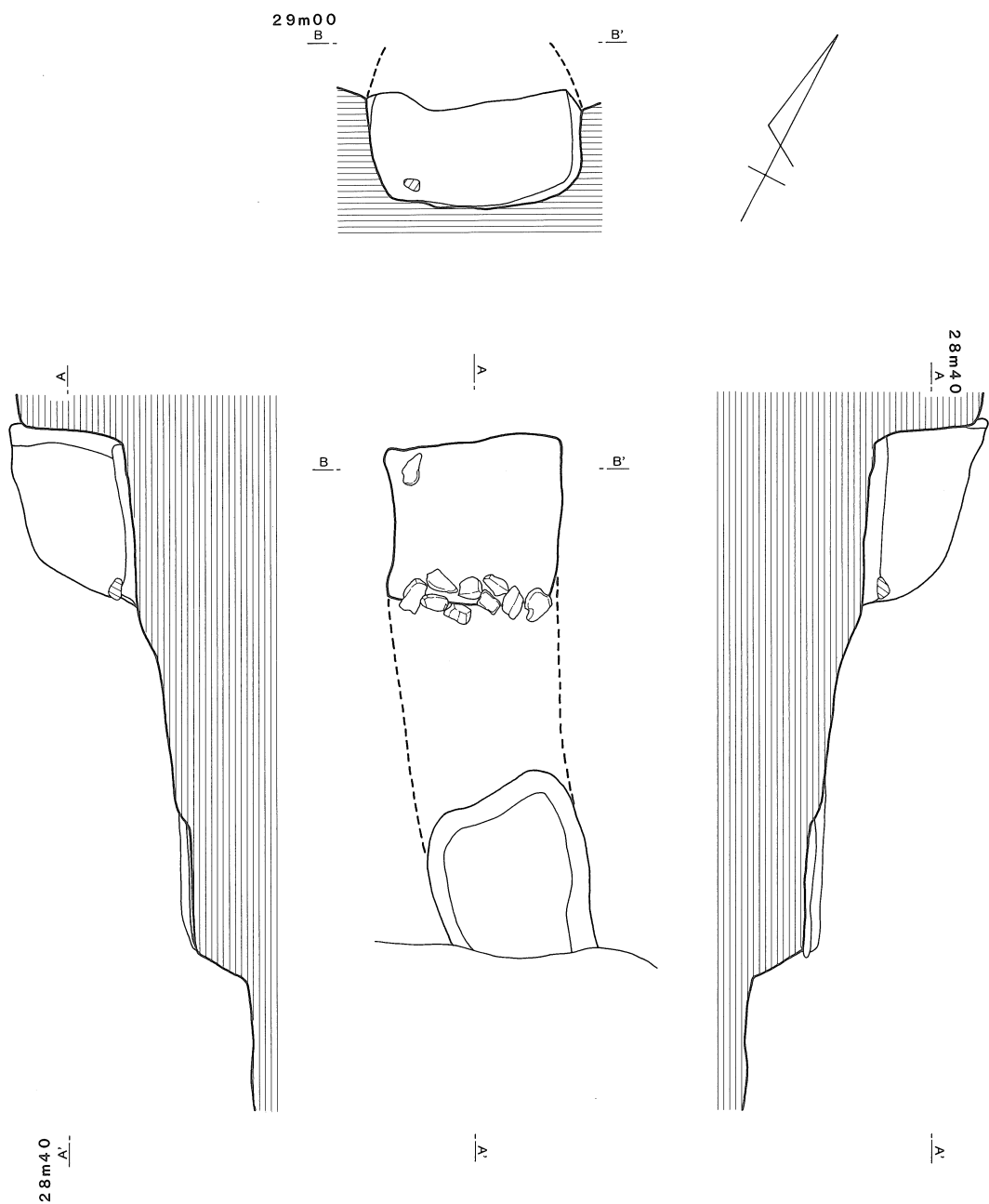
第83図 E地区A12・14号横穴実測図



第84図 E地区A13号横穴実測図



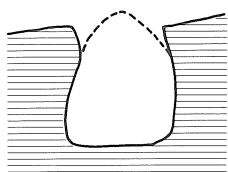
第85図 E地区A15号横穴実測図



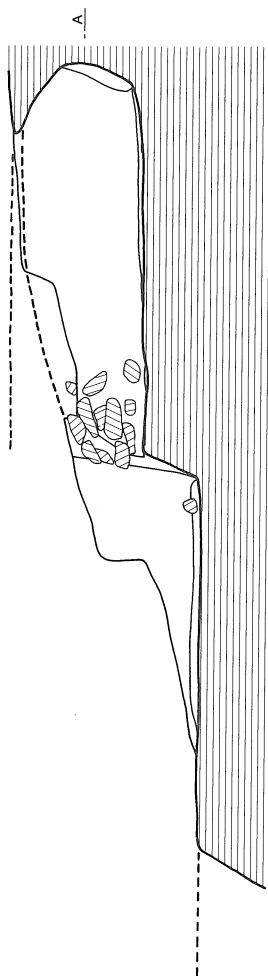
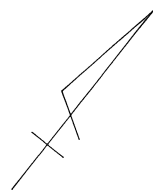
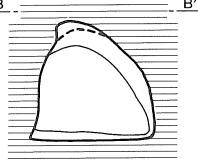
A16 号横穴

第86図 E 地区A16号横穴実測図

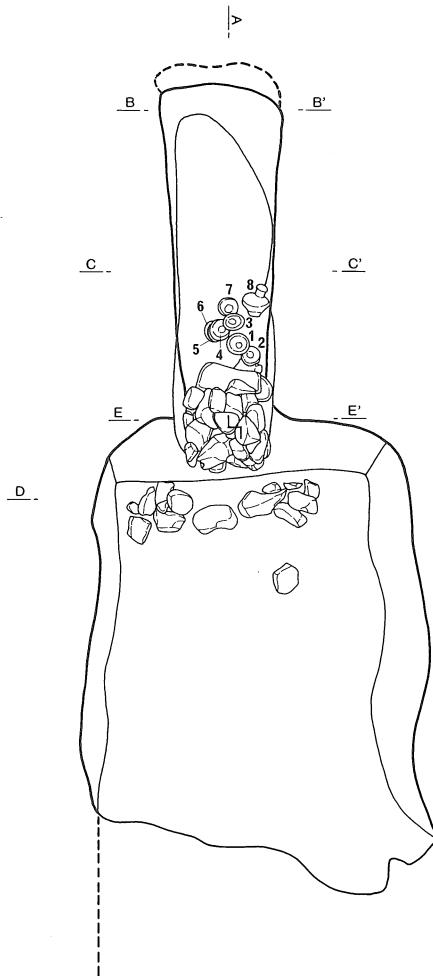
30m30
C



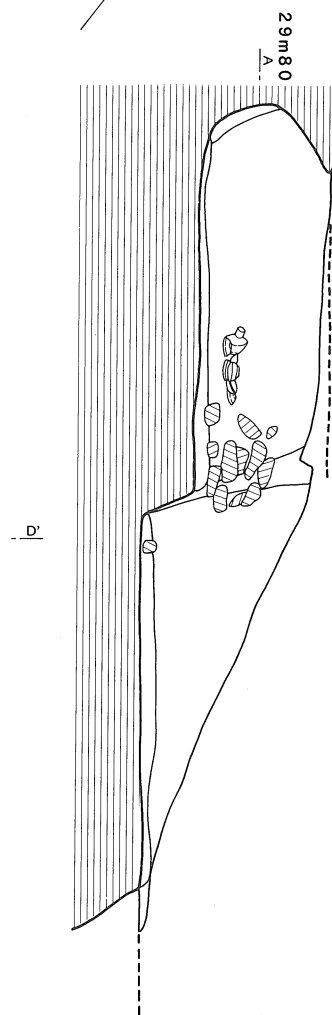
30m20
B



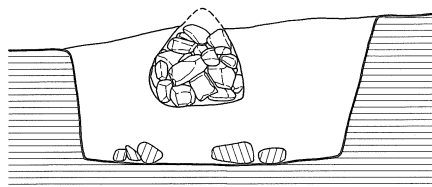
29m80
A



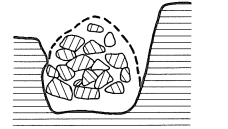
30m10
D



29m80
A



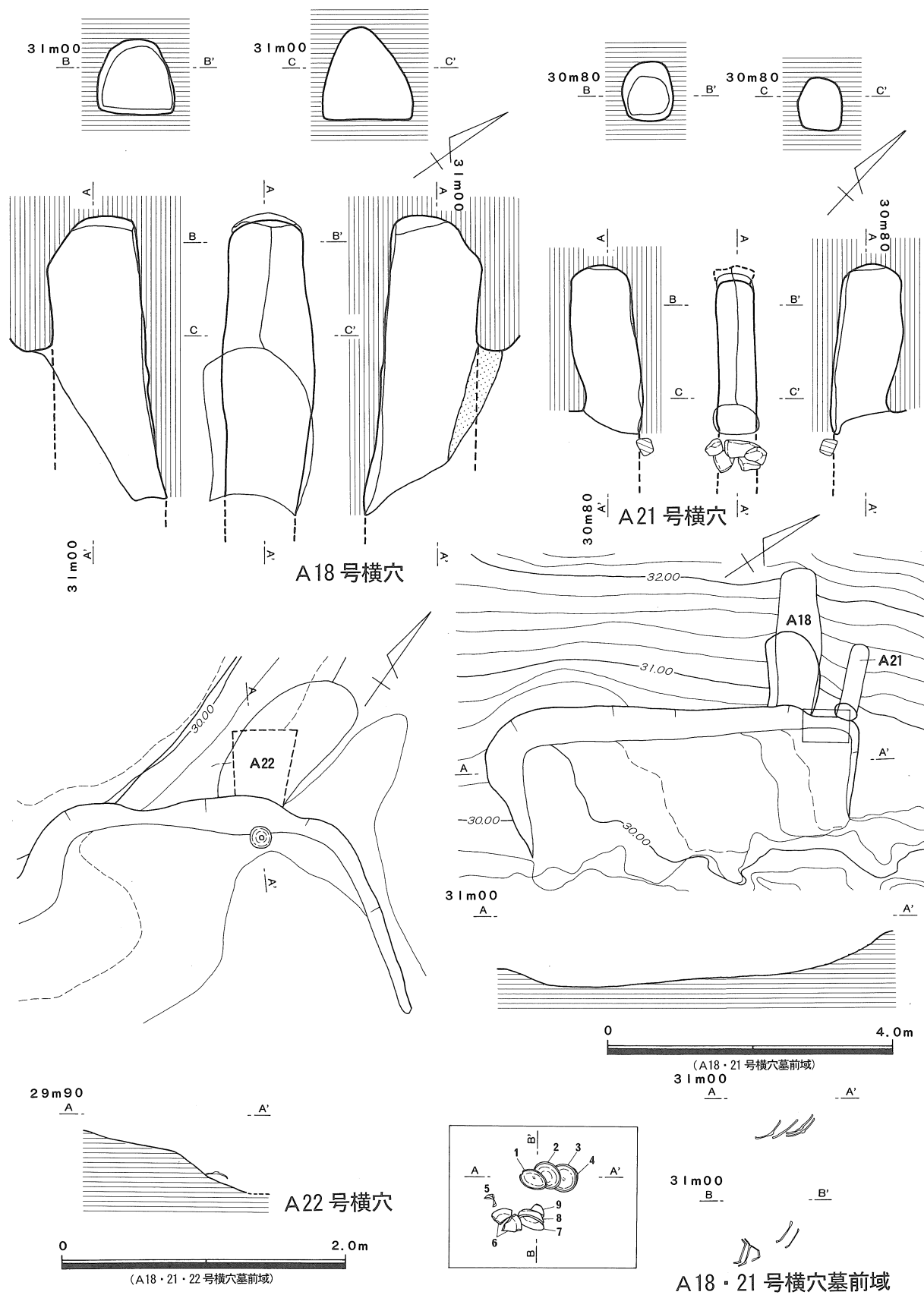
30m10
E



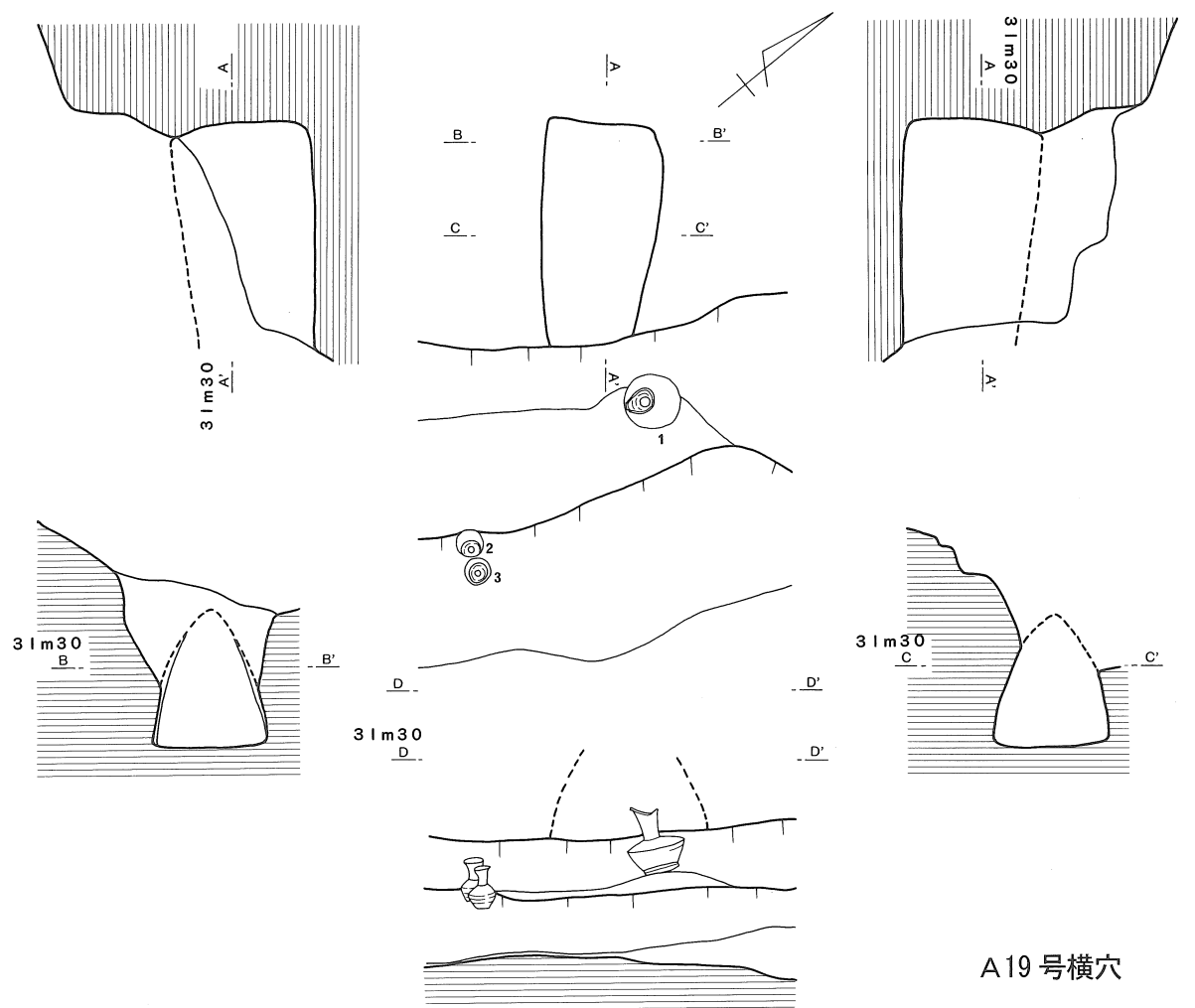
A17号横穴



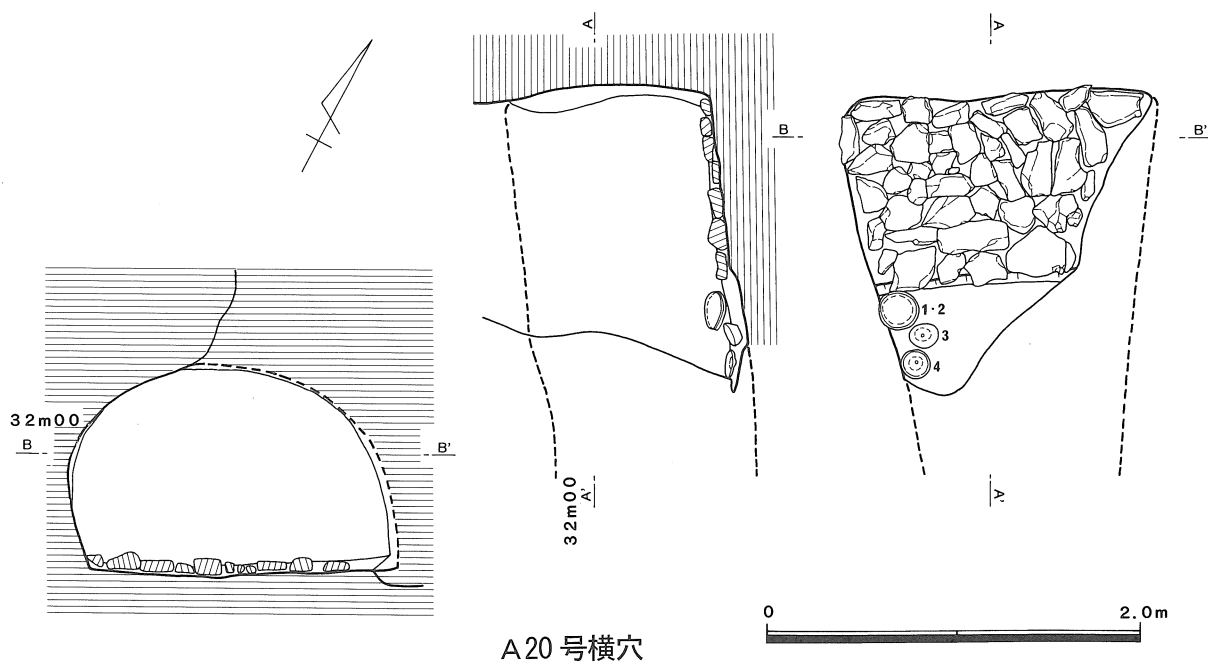
第87図 E地区A17号横穴実測図



第88图 E地区A18·21·22号横穴实测图

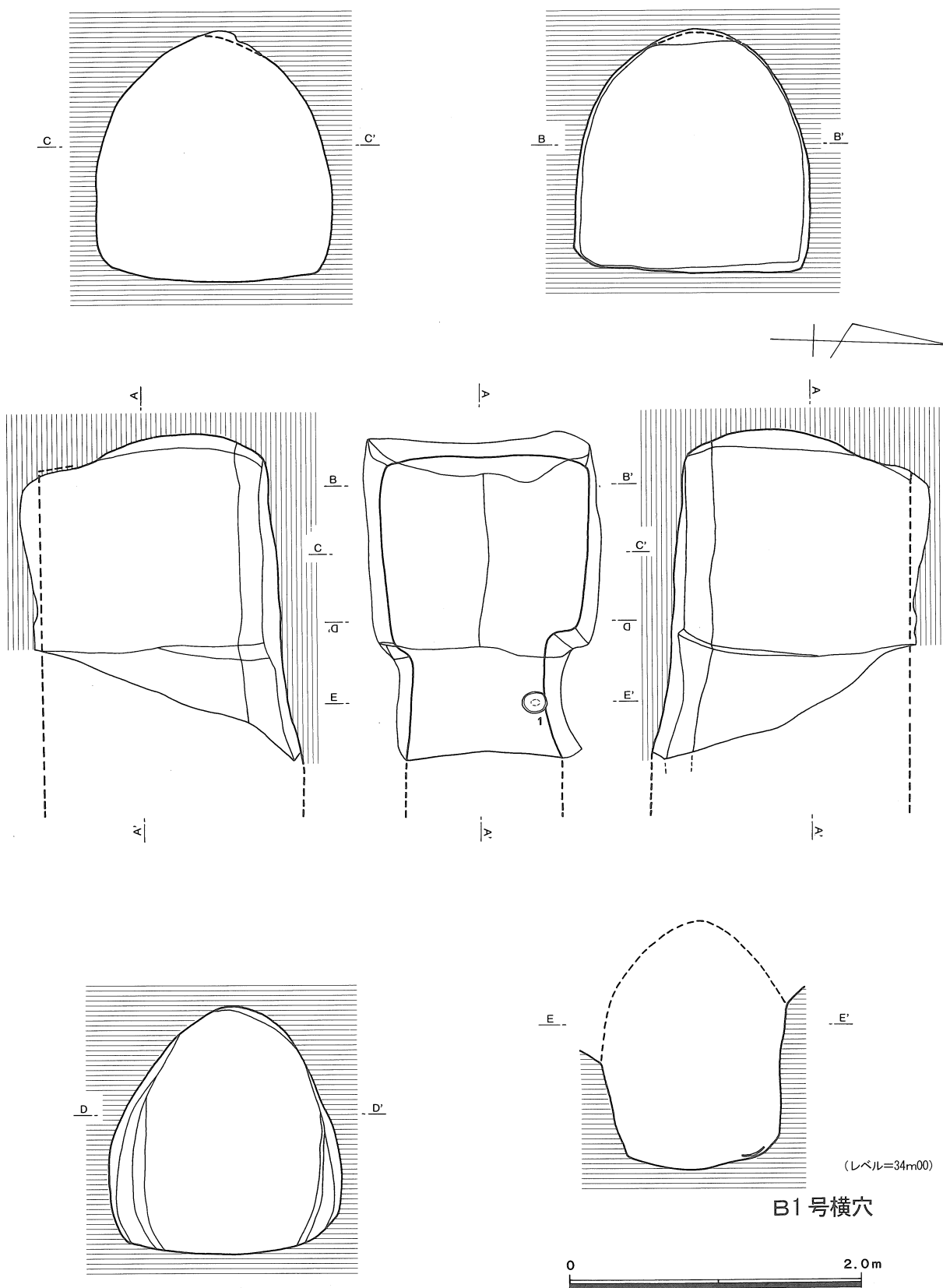


A19号横穴

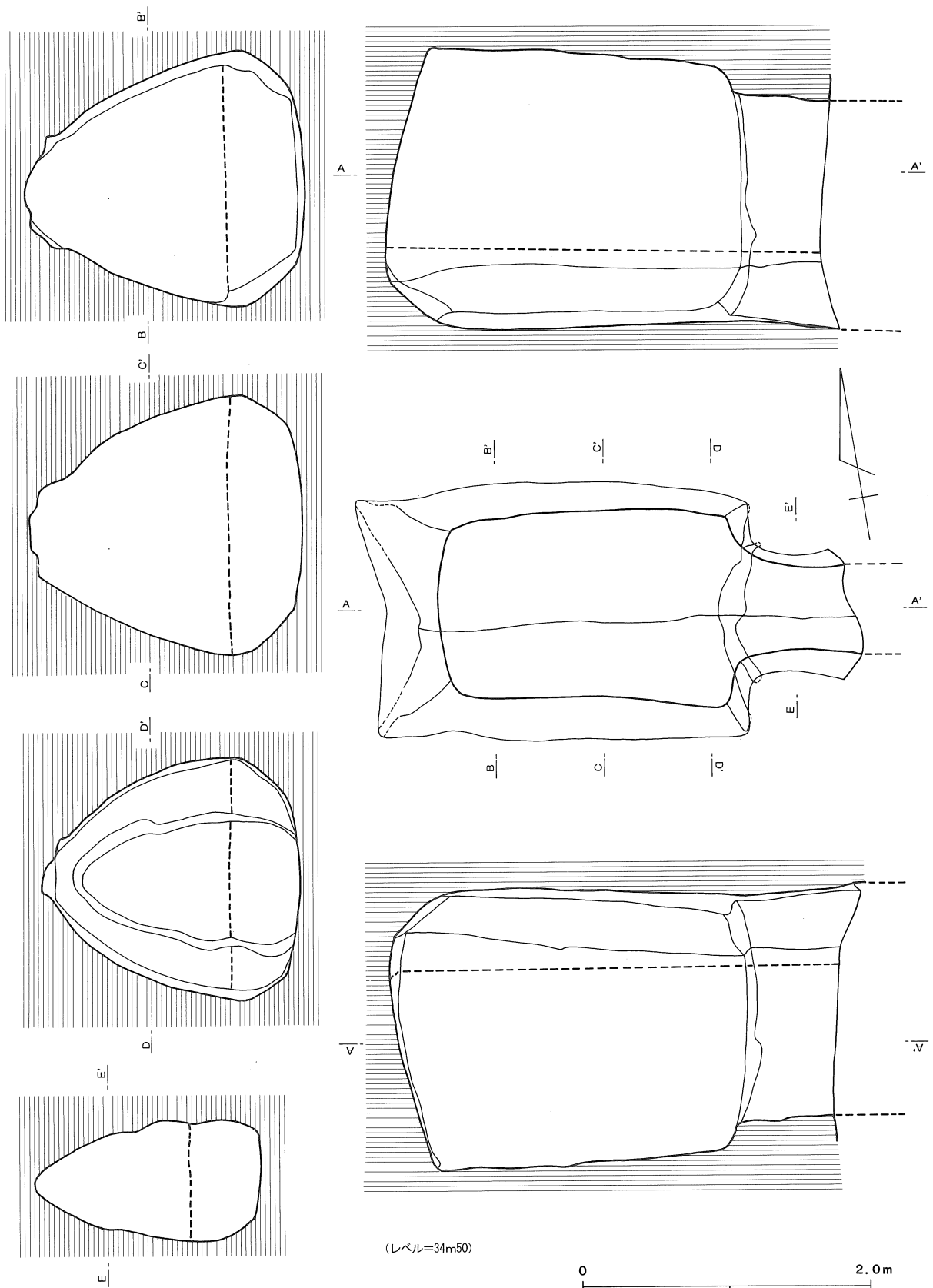


A20号横穴



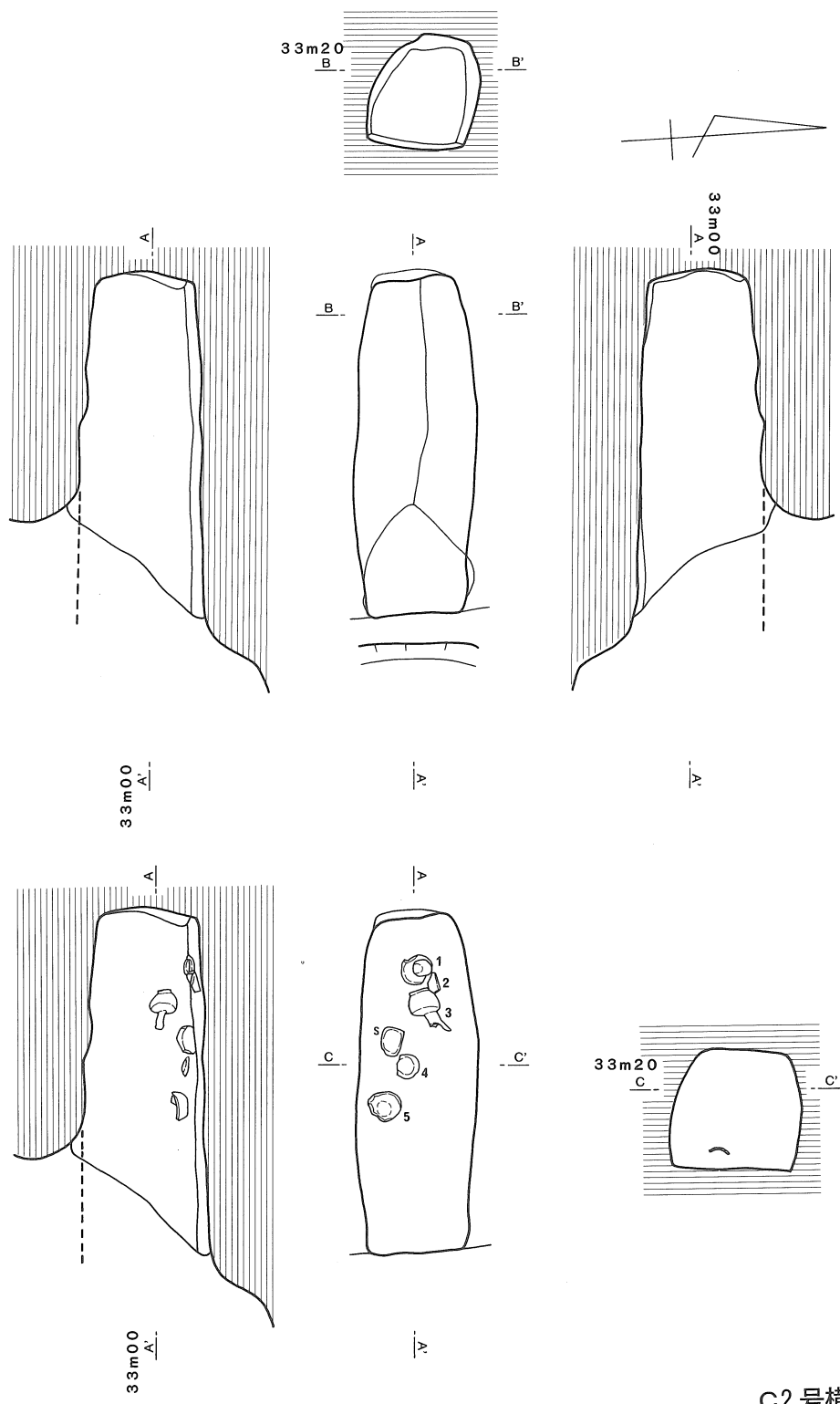


第90図 E地区B1号横穴実測図



B2 号横穴

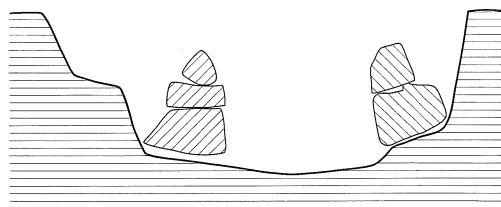
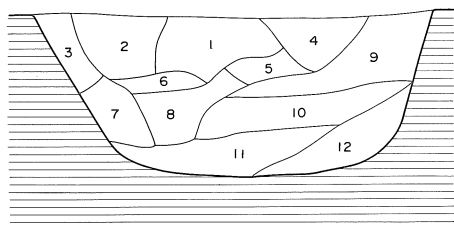
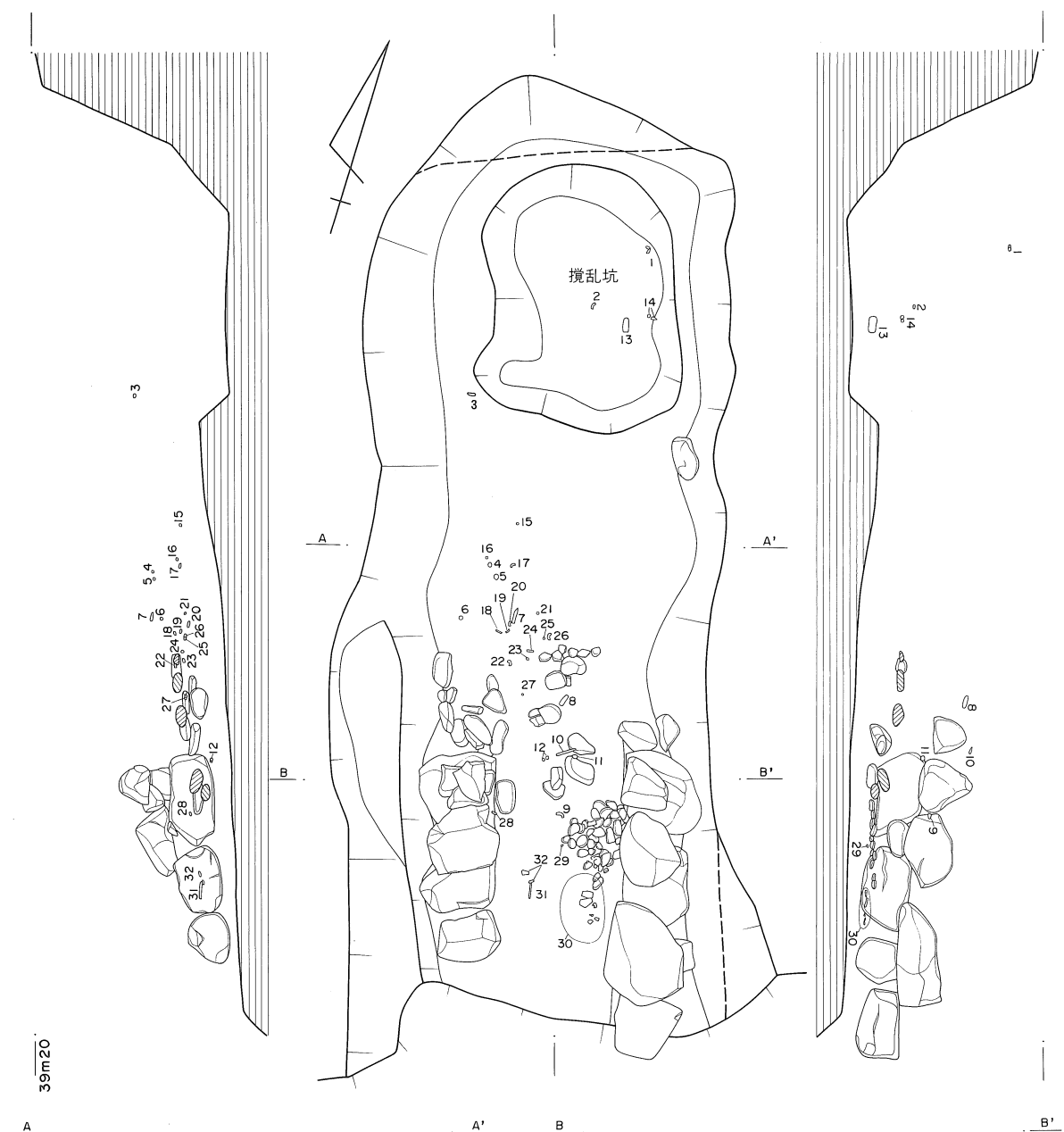
第91図 E 地区 B2号横穴実測図



C2 号横穴



第93図 E 地区 C2号横穴実測図

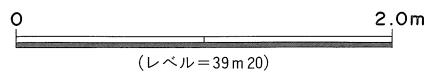


土層説明

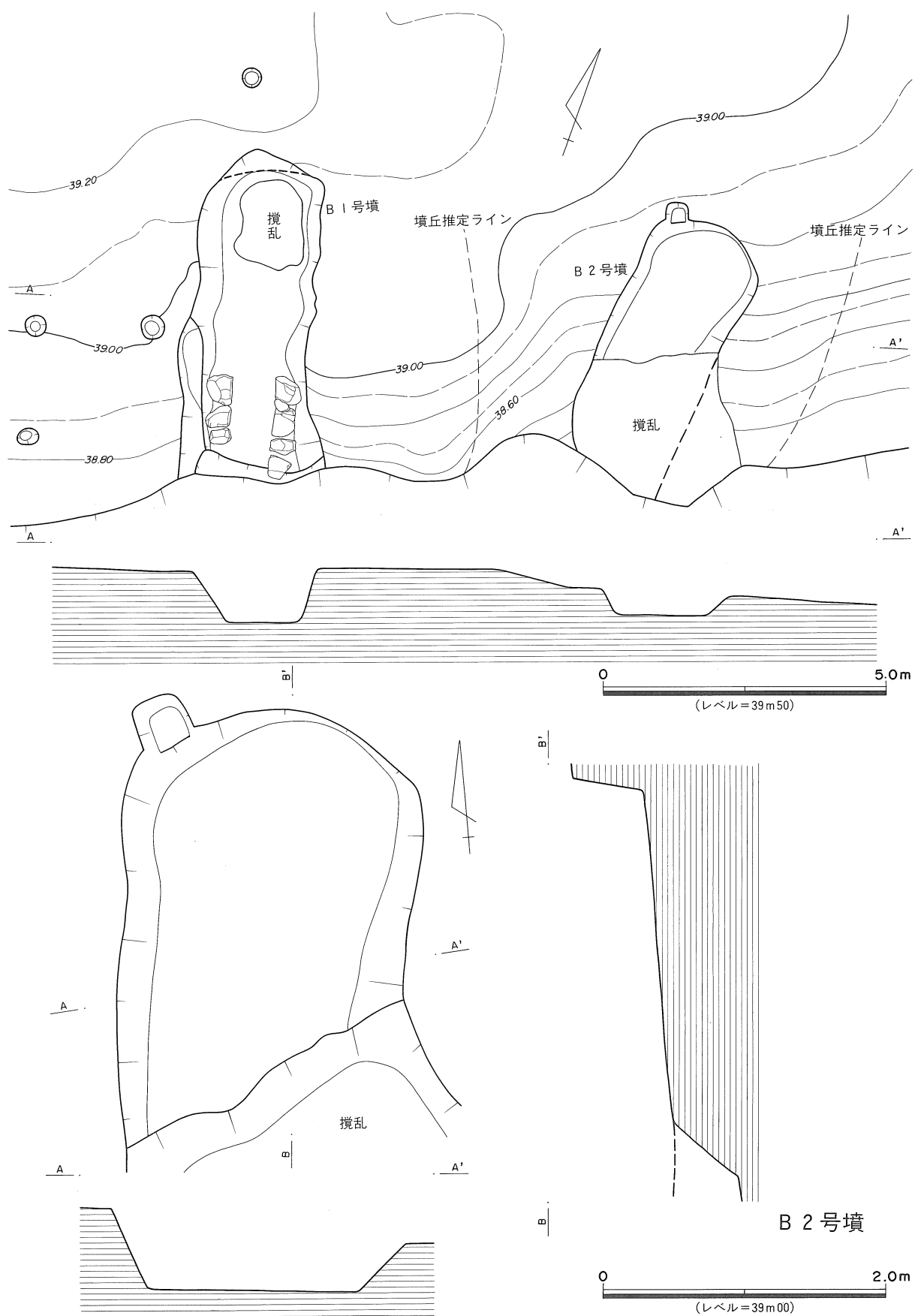
- | | |
|------------------|-------------|
| 1層 灰色土（炭化物を多く含む） | 7層 暗灰色土 |
| 2層 （茶の根） | 8層 暗灰褐色土 |
| 3層 淡黄灰色土 | 9層 黒灰色土 |
| 4層 （茶の根） | 10層 黄茶褐色土 |
| 5層 灰褐色土 | 11層 淡黄褐色砂質土 |
| 6層 淡灰褐色土 | 12層 暗黄灰色土 |

※ 1～12層は、ほとんど攪乱土と推定される。
玉類は11層内より多く出土した。

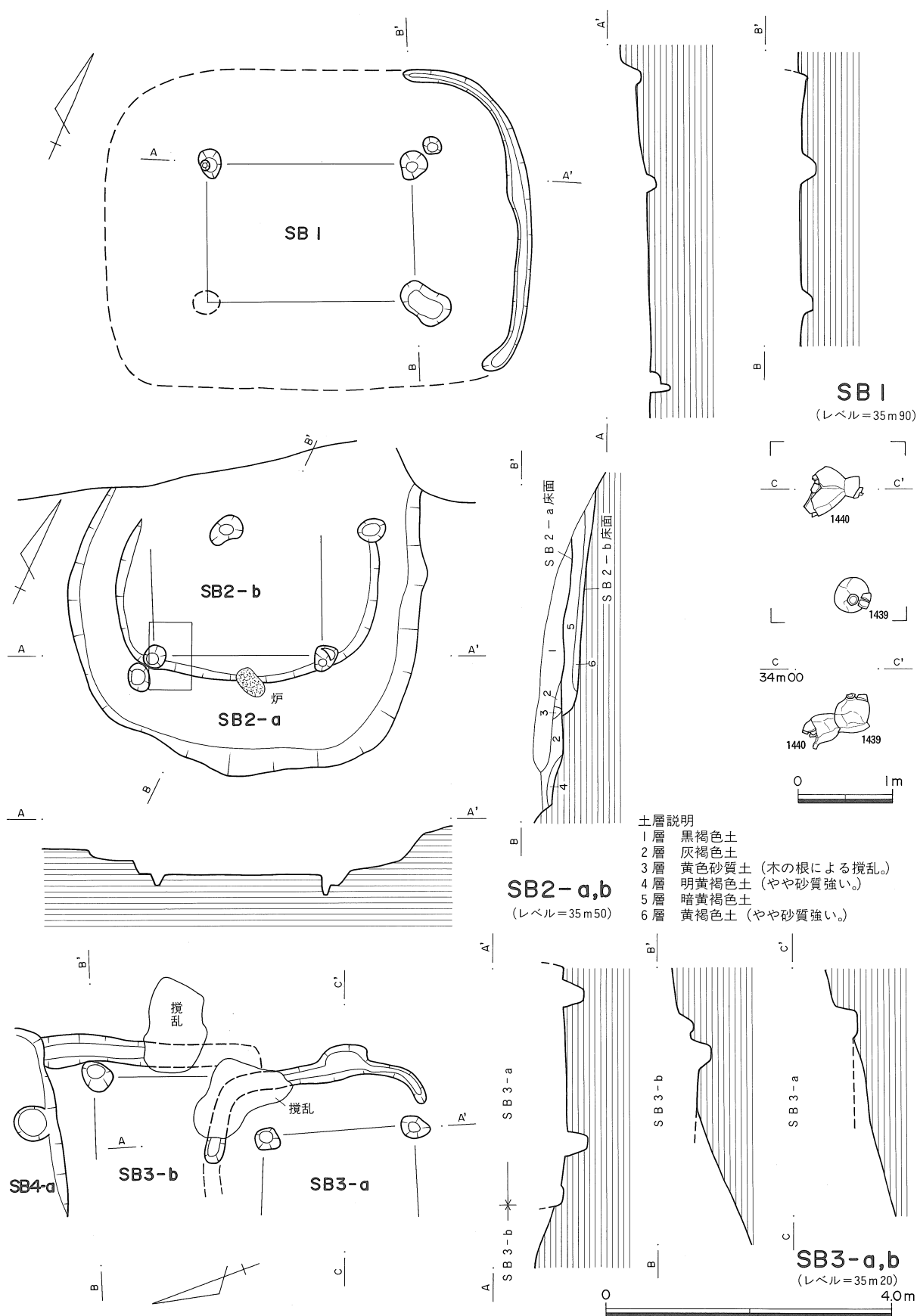
B1号墳



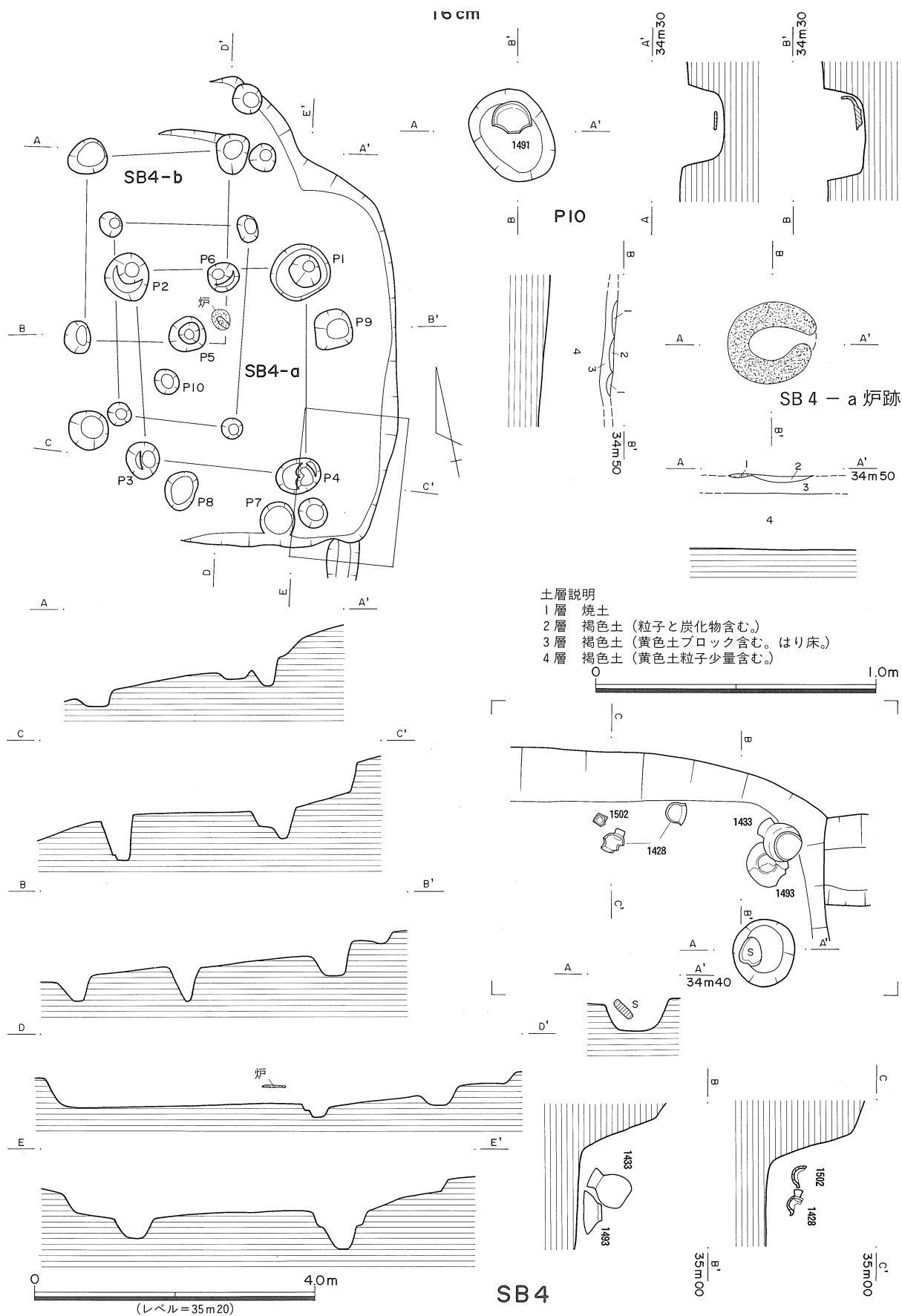
第94図 E地区B1号墳主体部実測図



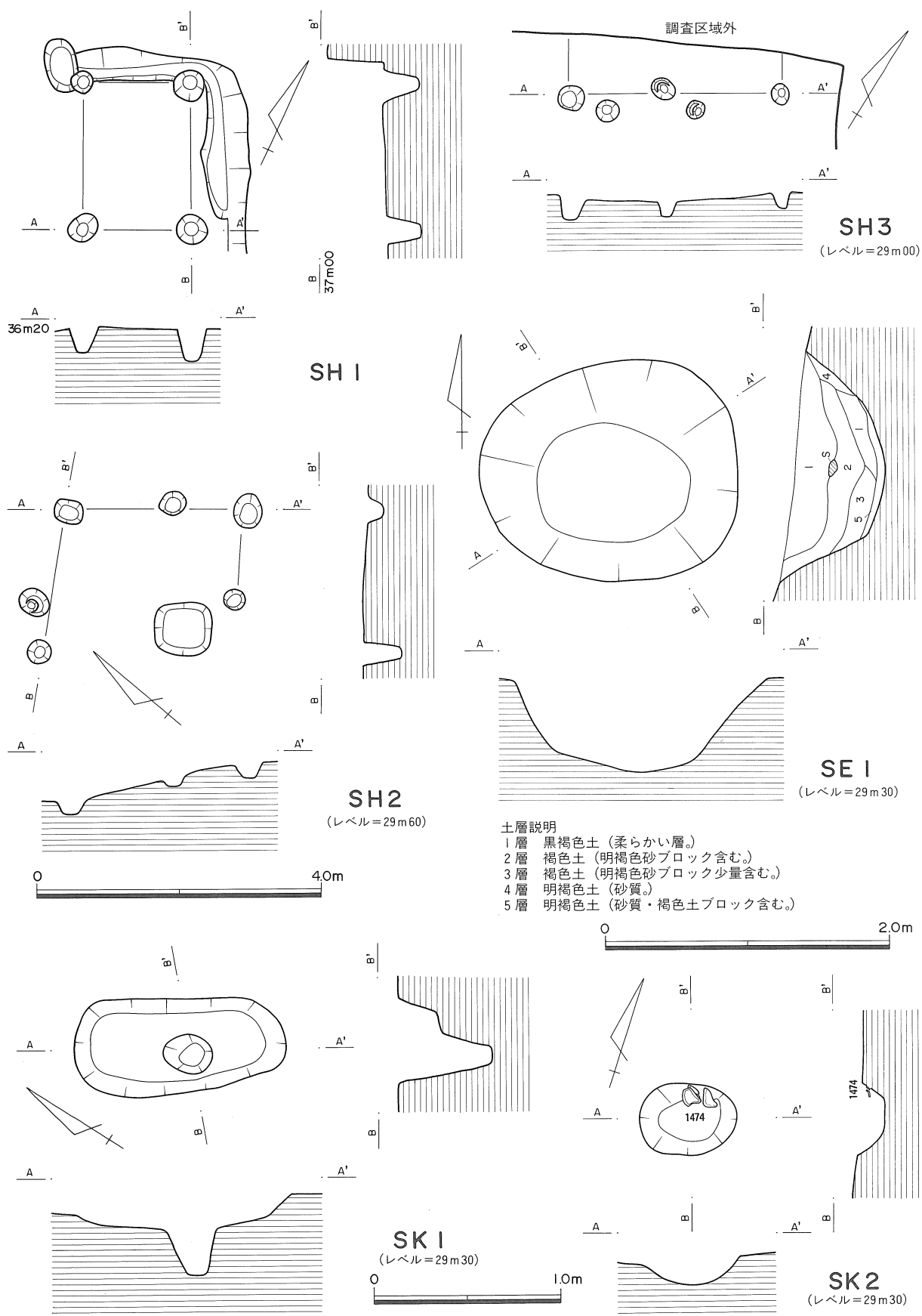
第95図 E地区B1・2号墳墳丘図・B2号墳主体部実測図



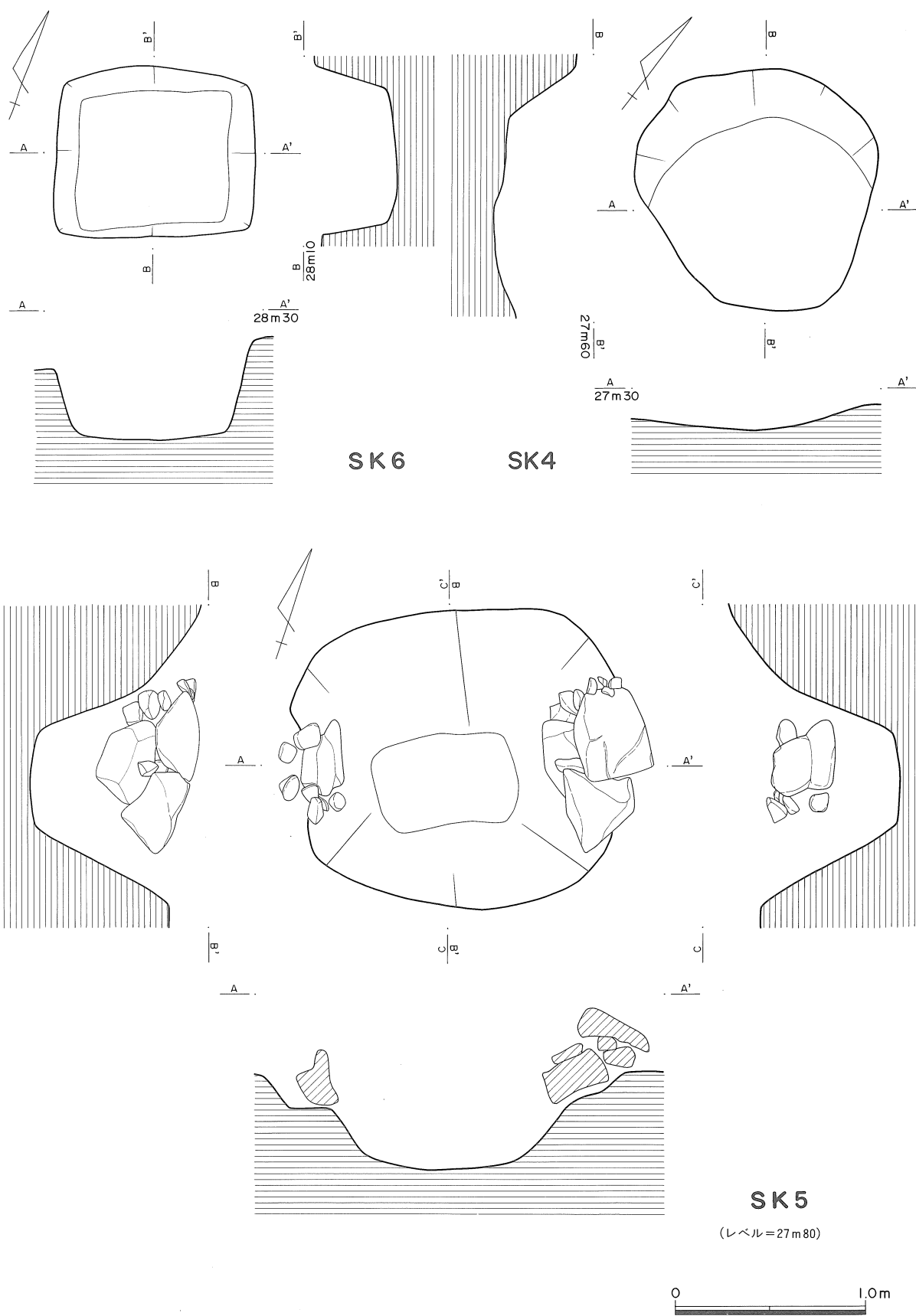
第96図 E地区SB1・2-a, b・3-a, b遺構実測図



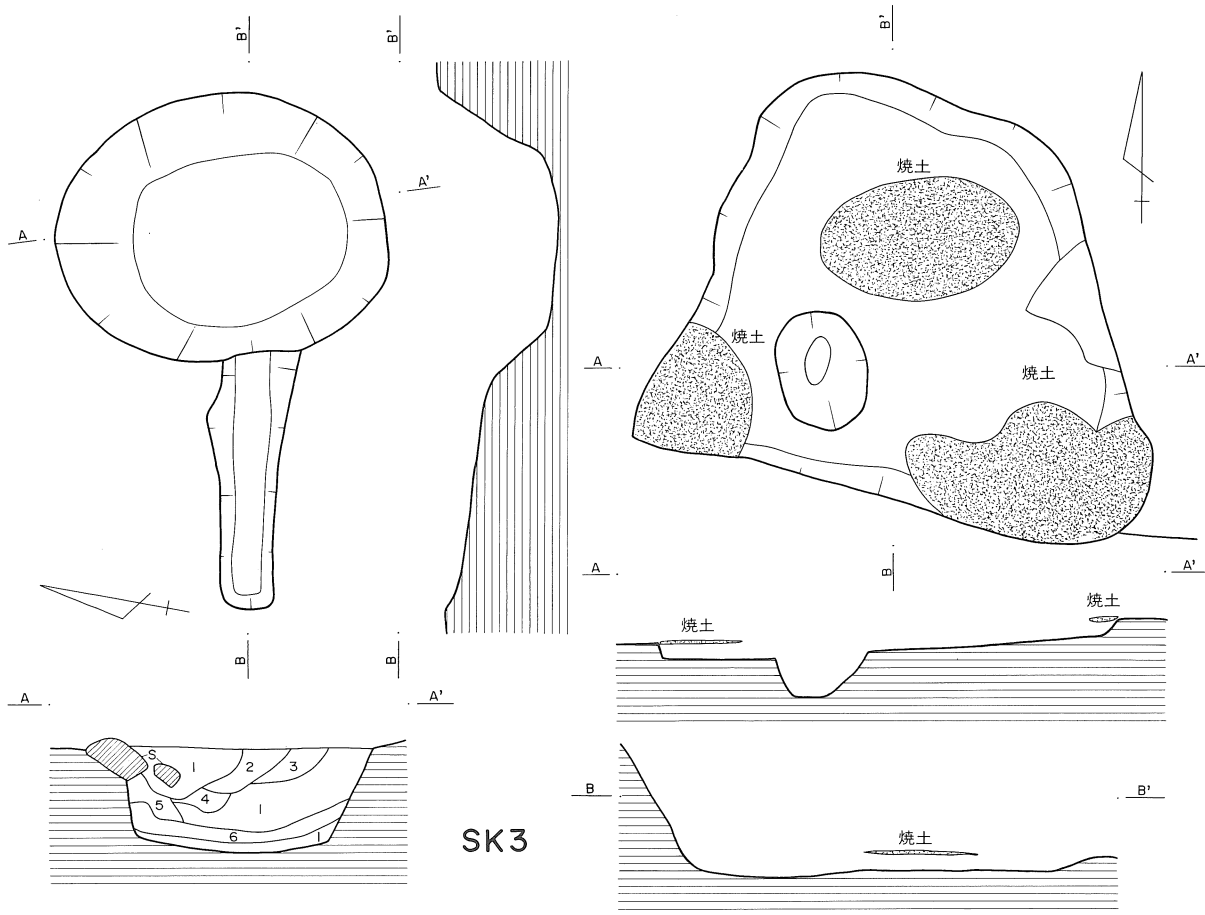
第97図 E地区SB4-a, b遺構実測図



第98図 E地区SH1~3・SE1・SK1・2遺構実測図



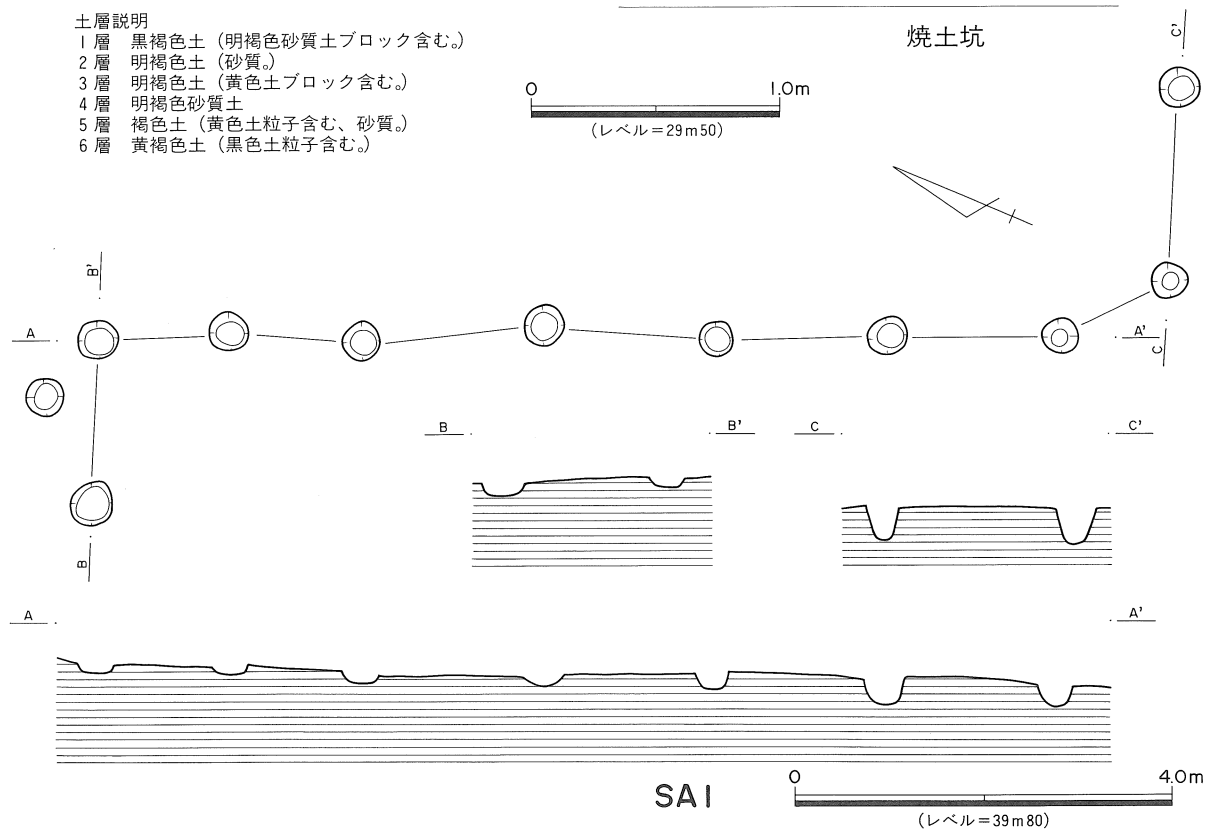
第99図 E地区A群横穴付近SK4・5・6遺構実測図



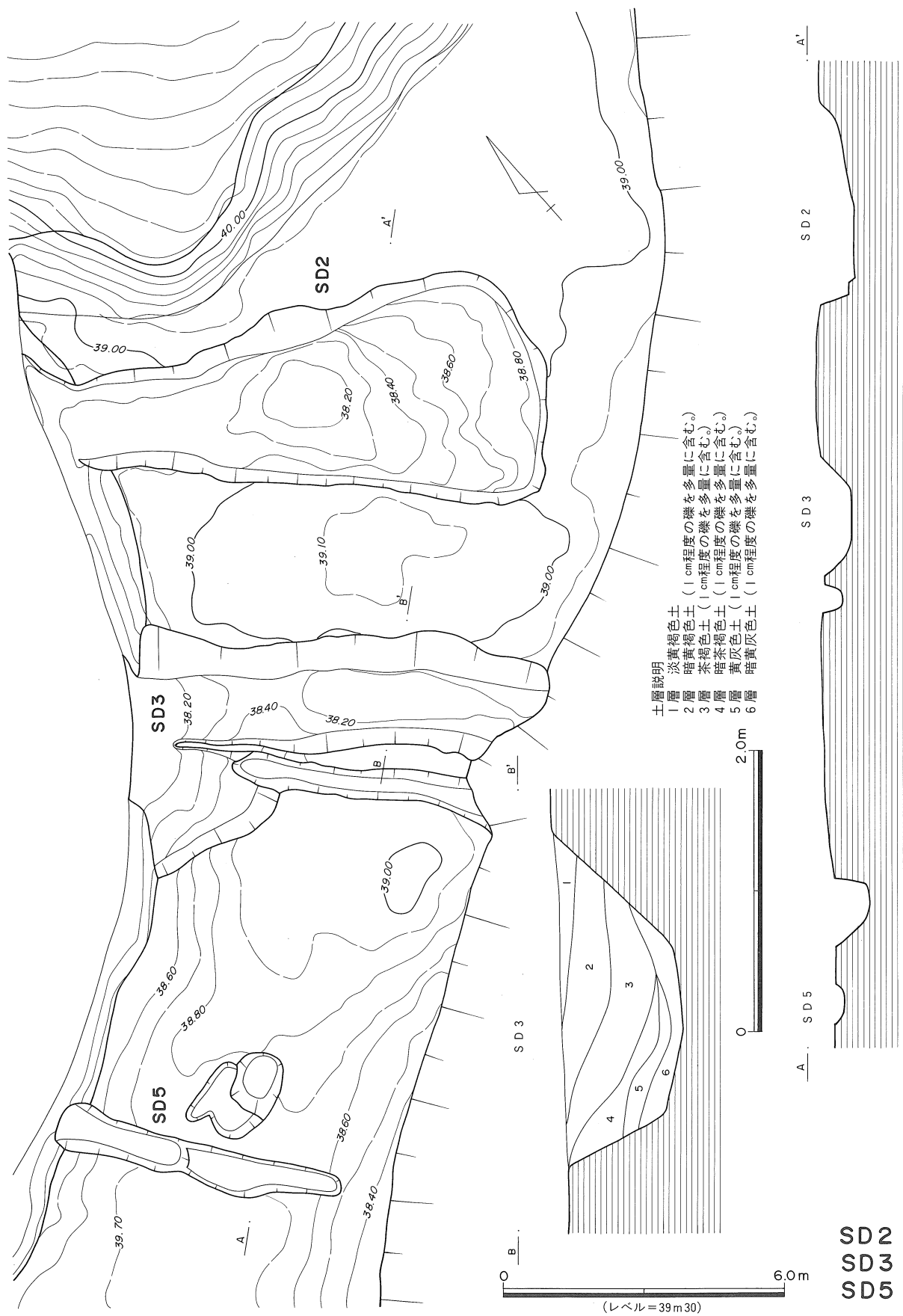
- 土層説明
- 1層 黒褐色土（明褐色砂質土ブロック含む。）
 - 2層 明褐色土（砂質。）
 - 3層 明褐色土（黄色土ブロック含む。）
 - 4層 明褐色砂質土
 - 5層 褐色土（黄色土粒子含む、砂質。）
 - 6層 黄褐色土（黒色土粒子含む。）

0 1.0m
(レベル=29m50)

焼土坑

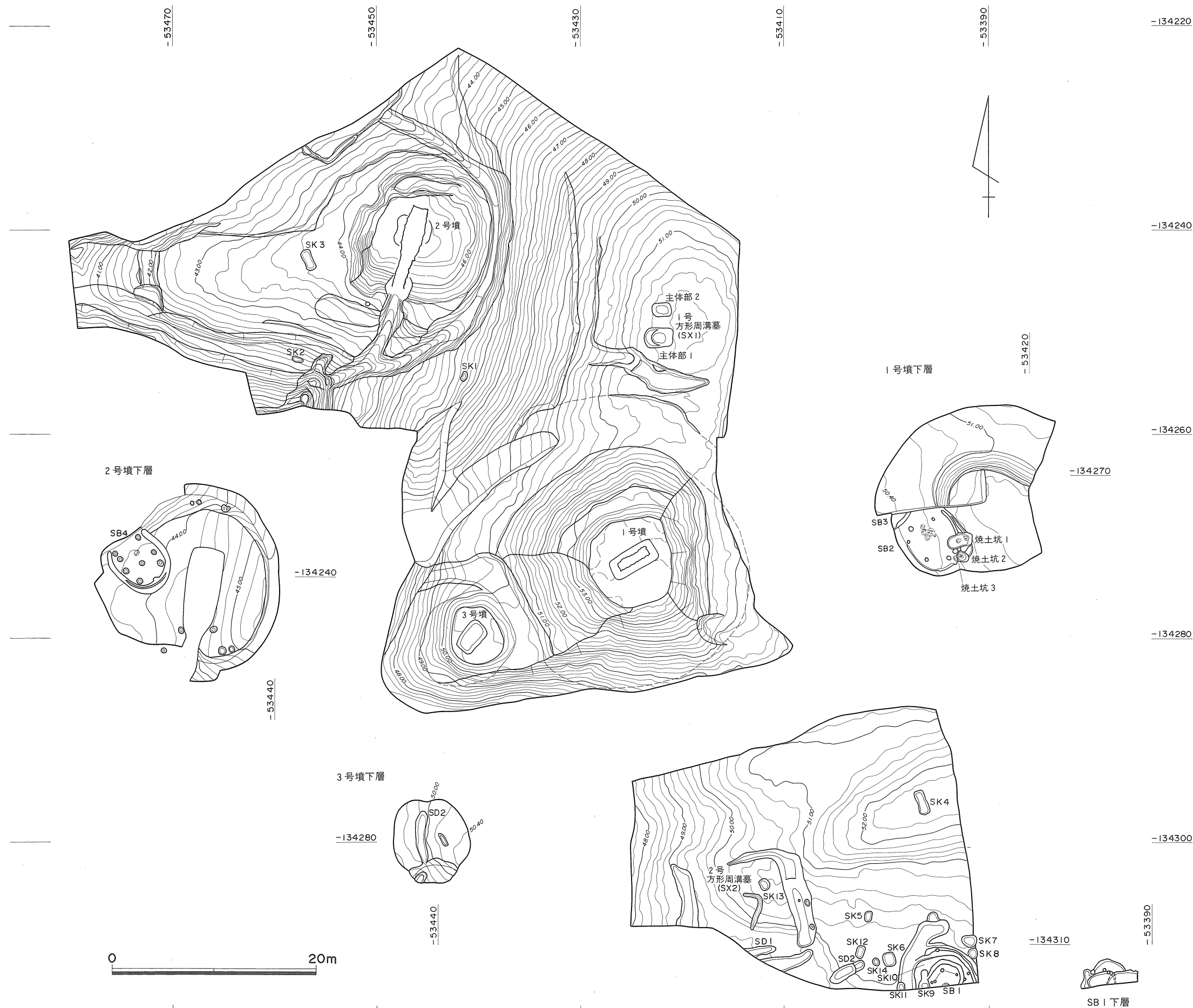


第100図 E地区SK3・焼土坑・SA1遺構実測図

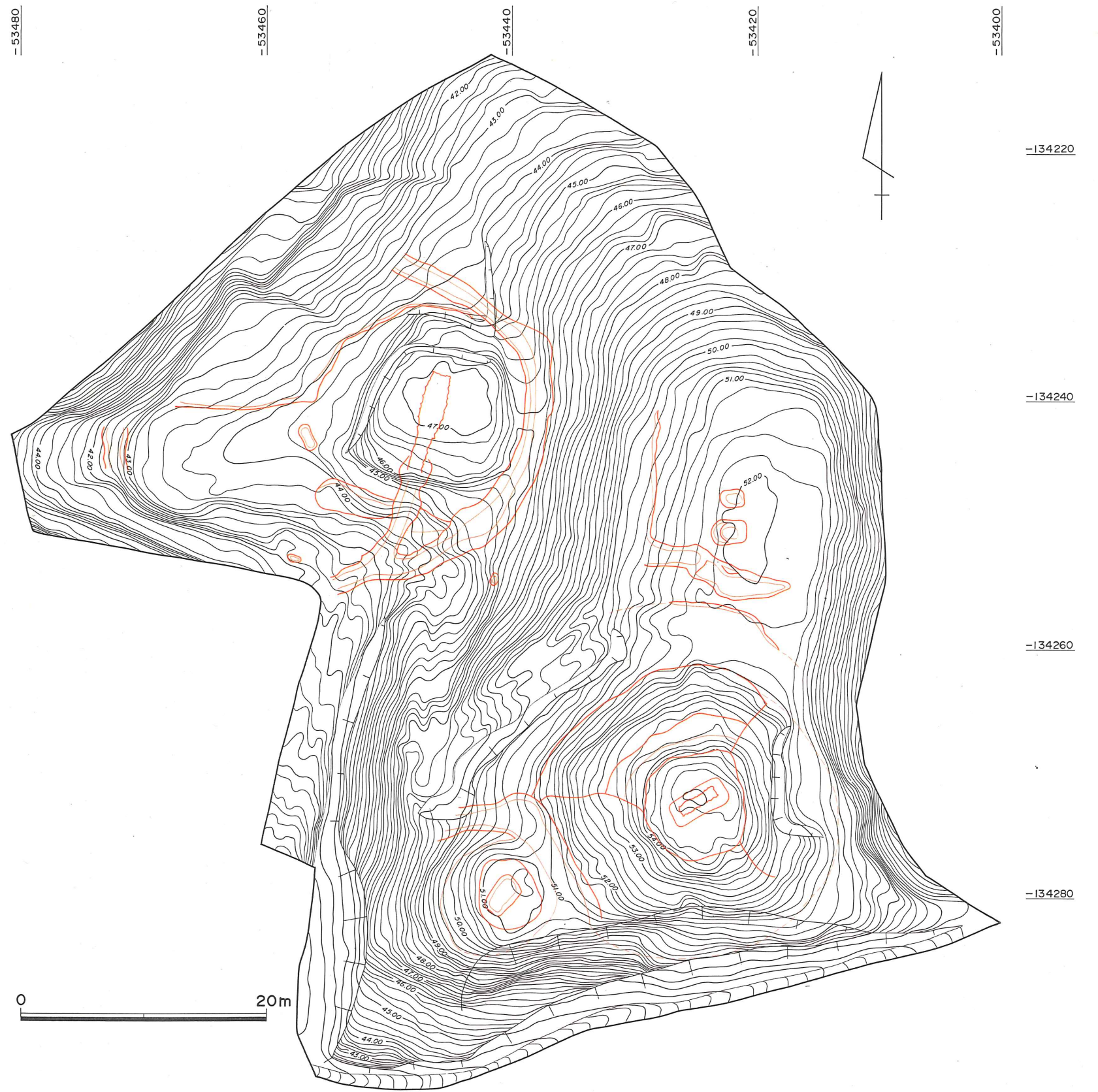


第101図 E地区SD2・3・5遺構実測図

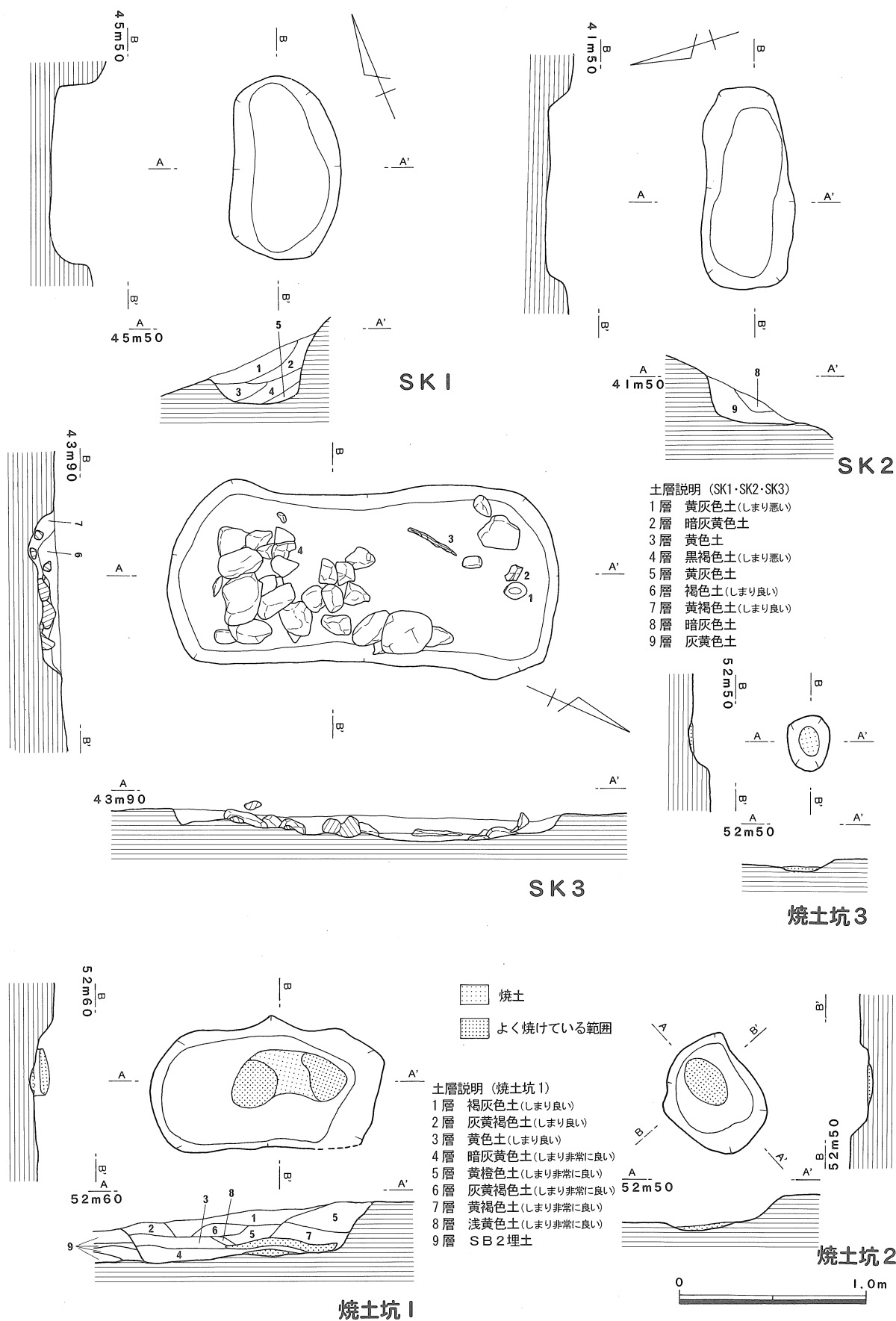




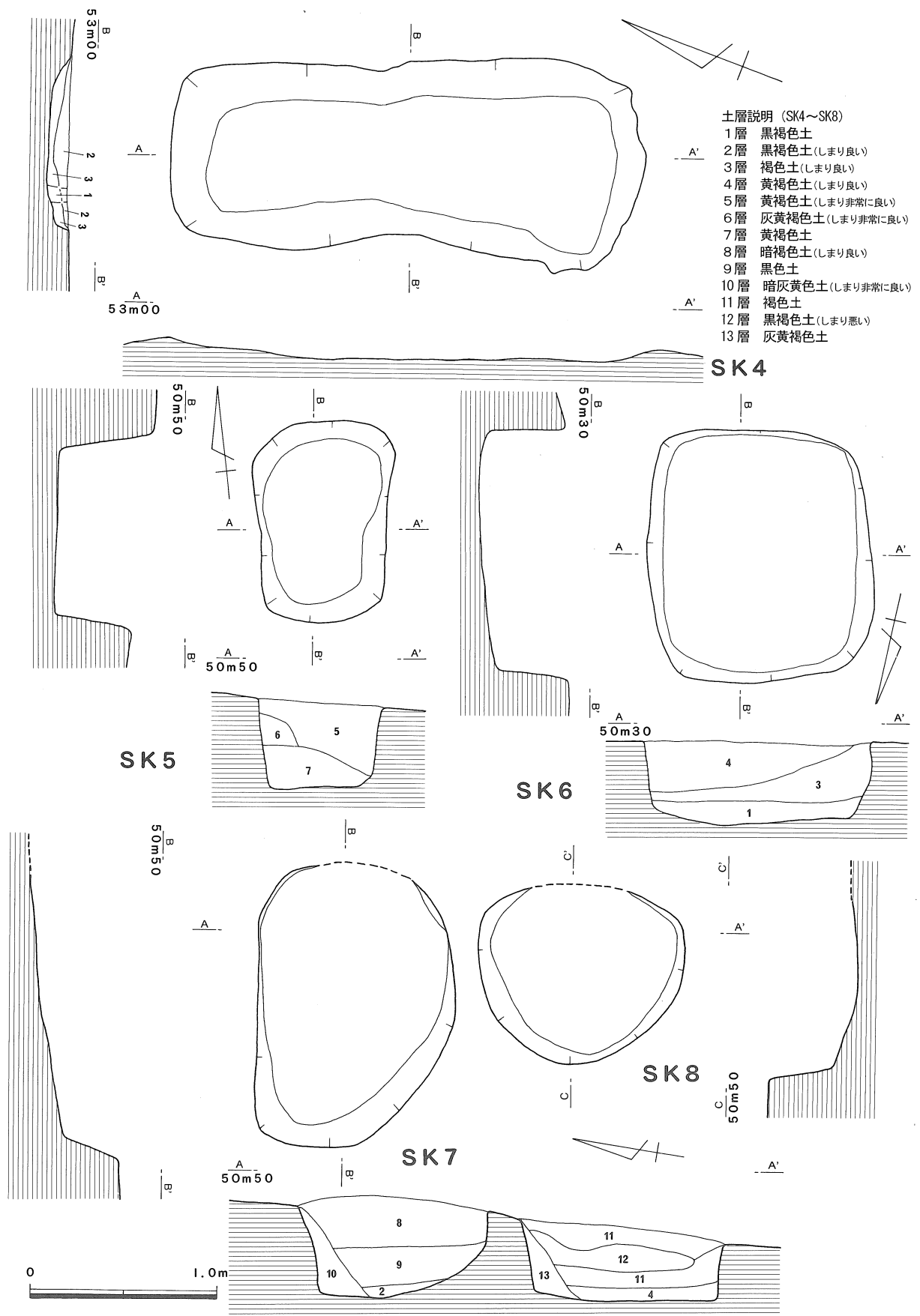
第102図 F地区全体図



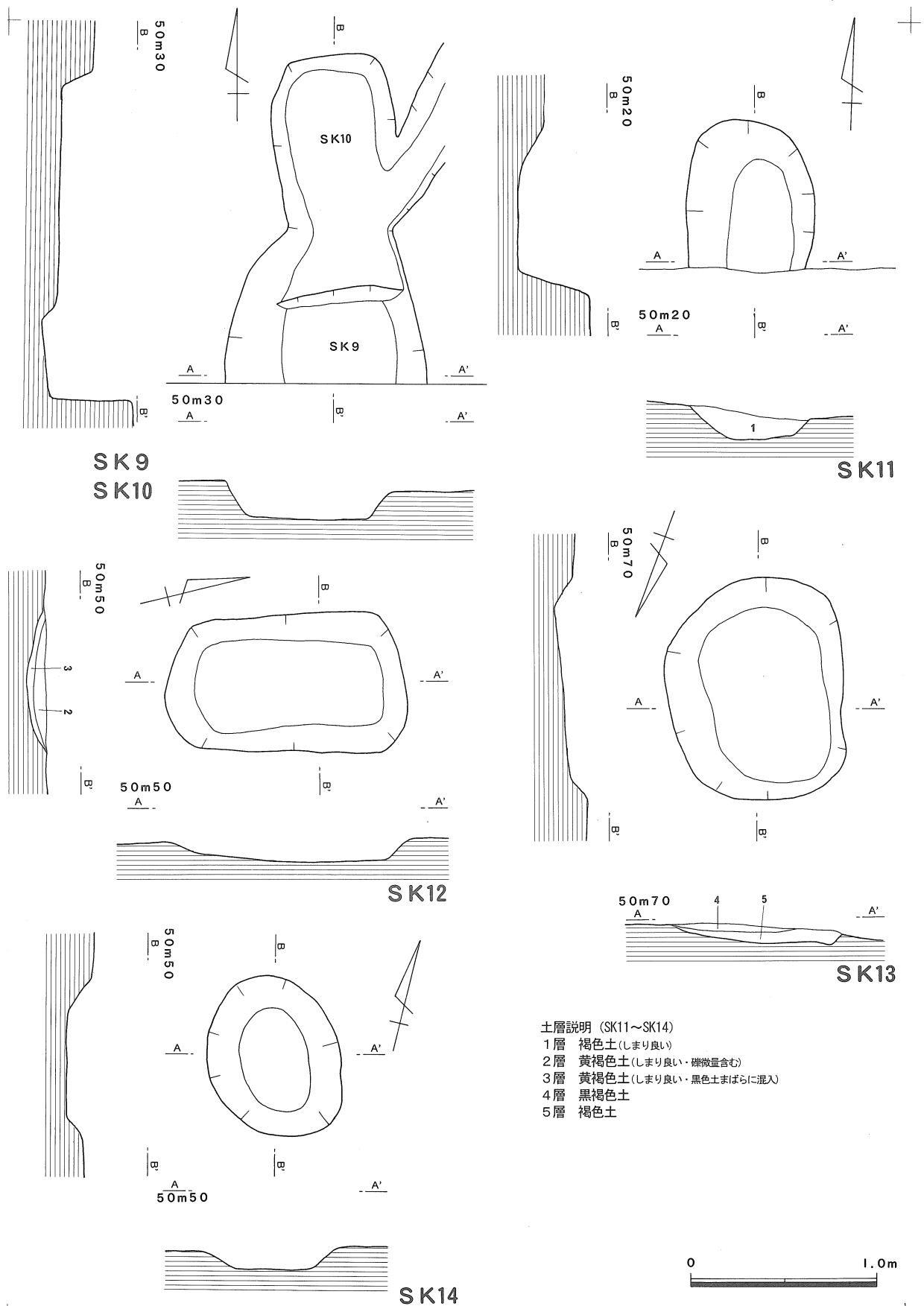
第103图 F地区地形图1



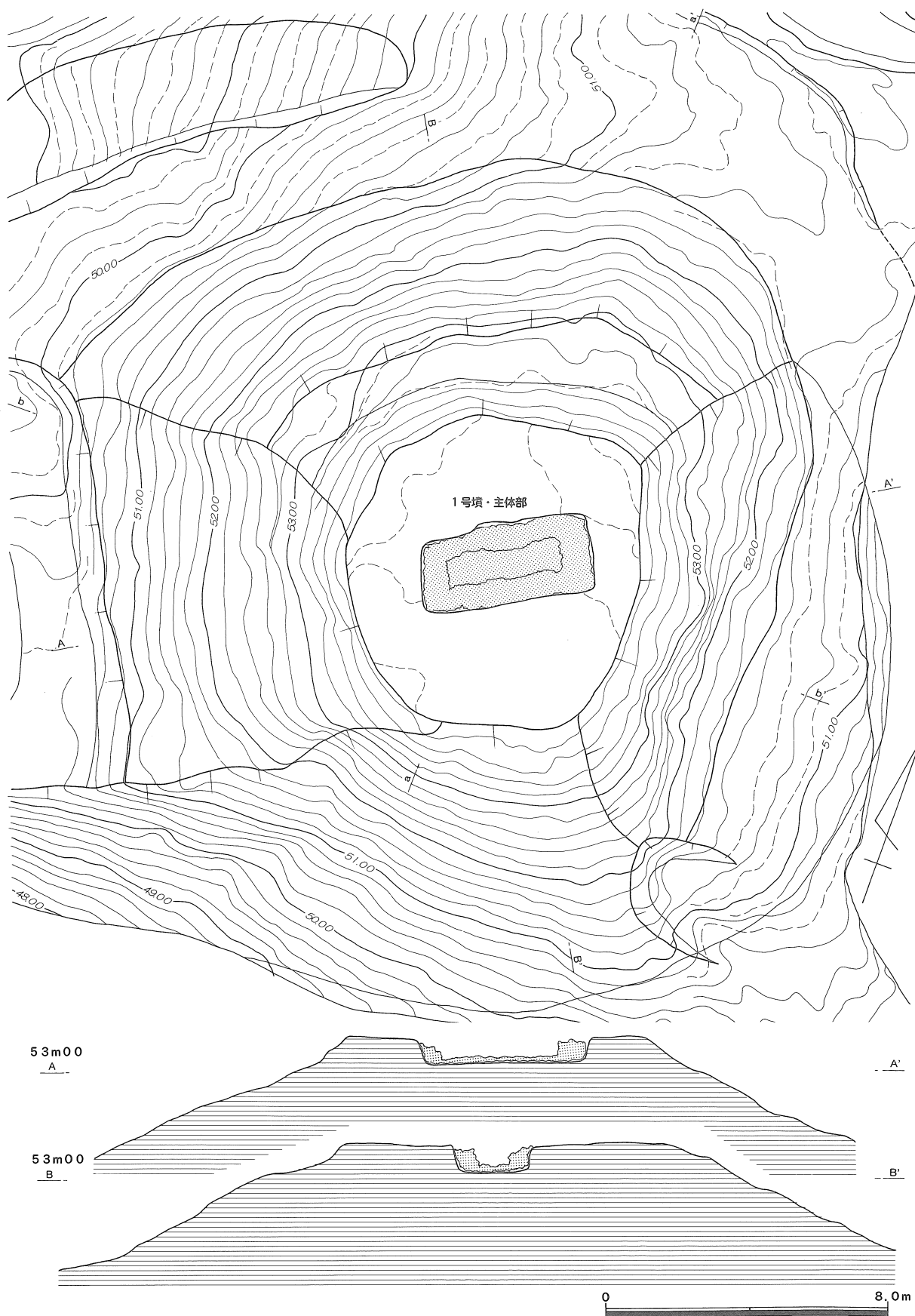
第104図 F地区SK1~3・焼土坑1~3遺構実測図



第105図 F地区SK4~8遺構実測図



第106図 F地区SK9~14遺構実測図



第107図 F地区1号墳墳丘遺構実測図

【a-a' 土層説明】

1 10YR7/4にぶい黄橙色土	57 10YR7/3にぶい黄橙色土(土器片含む)	114 10YR7/6明黄褐色土
2 10YR6/4にぶい黄橙色土	58 10YR5/2灰黄褐色土	115 10YR7/6明黄褐色土
3 10YR7/2にぶい黄橙色土	59 2.5Y6/2灰黄色土	116 10YR7/4にぶい黄橙色土
4 10YR6/3にぶい黄橙色土	60 10YR7/8黄橙色土	117 10YR6/6明黄褐色土
5 10YR7/6明黄褐色土	61 10YR7/4にぶい黄橙色土	118 10YR6/6明黄褐色土
6 10YR7/3にぶい黄橙色土	62 2.5Y7/4浅黄色土	119 10YR7/4にぶい黄橙色土
7 10YR7/2にぶい黄橙色土	63 2.5Y8/4淡黄色土	120 10YR7/4にぶい黄橙色土
8 10YR7/3にぶい黄橙色土	64 10YR6/6明黄褐色土	121 2.5Y6/3にぶい黄色土
9 7.5YR7/8黄橙色土	65 10YR7/6明黄褐色土	122 2.5Y3/1黒褐色土
10 10YR7/4にぶい黄橙色土	66 10YR7/8明黄褐色土	123 5Y3/1オリーブ黒色土
11 10YR7/2にぶい黄橙色土	67 2.5Y7/1灰白色土	124 10YR7/4にぶい黄橙色土
12 10YR6/3にぶい黄橙色土(土器片含む)	68 2.5Y6/1黄灰色土	125 2.5Y6/1黄灰色土
13 10YR7/6明黄褐色土	69 10YR6/6明黄褐色土	126 2.5Y5/1黄灰色土
14 10YR7/2にぶい黄橙色土	70 2.5Y7/4浅黄色土	127 7.5Y7/6橙色土
15 10YR6/2灰黄褐色土	71 10YR6/6明黄褐色土	128 2.5Y6/2灰黄色土
16 10YR6/4にぶい黄橙色土	72 10YR7/8黄橙色土	129 2.5Y6/2灰黄色土
17 10YR7/8黄橙色土	73 10YR6/4にぶい黄橙色土	130 2.5Y7/2灰黄色土
18 2.5YR6/1黄灰色土	74 10YR7/6明黄褐色土	131 2.5Y6/3にぶい黄色土
19 10YR7/8黄橙色土	75 10YR6/6明黄褐色土	132 10YR6/4にぶい黄橙色土
20 7.5YR7/6橙色土	76 10YR5/4にぶい黄褐色土	133 10YR7/4にぶい黄橙色土
21 7.5YR7/8黄橙色土	77 2.5Y6/4黄色土	134 10YR6/4にぶい黄橙色土
22 7.5YR5/1褐灰色土	78 10YR7/1灰白色土	135 10YR7/4にぶい黄橙色土
23 10YR7/4にぶい黄橙色土	79 N7/10灰白色土	136 2.5Y6/4にぶい黄色土
24 7.5YR7/6橙色土	80 2.5Y7/3浅黄色土	137 2.5Y6/4にぶい黄色土
25 10YR7/4にぶい黄橙色土	81 2.5Y7/2灰黄色土	138 10YR6/4にぶい黄橙色土
26 10YR8/6黄橙色土	82 10YR5/6黄褐色土	139 10YR1/6明黄褐色土
27 10YR6/2灰黄褐色土	83 10YR7/6明黄褐色土	140 2.5Y 4/3オリーブ褐色土
28 10YR6/4にぶい黄橙色土	84 10YR6/4にぶい黄橙色土	141 10YR7/6明黄褐色土
29 10YR7/4にぶい黄橙色土	85 5Y7/1灰白色土	142 10YR7/4にぶい黄橙色土
30 10YR6/4にぶい黄橙色土	86 10YR6/4にぶい黄橙色土	143 10YR7/4にぶい黄橙色土
31 10YR6/3にぶい黄橙色土	87 10YR6/3にぶい黄橙色土	144 10YR7/6明黄褐色土
32 7.5YR6/4にぶい橙色土	88 10YR6/2灰黄褐色土	145 2.5Y6/4にぶい黄色土
33 10YR5/4にぶい黄褐色土	89 10YR5/3にぶい黄褐色土	146 10YR6/6明黄褐色土
34 10YR5/3にぶい黄褐色土	90 10YR6/4にぶい黄橙色土	147 10YR7/6明黄褐色土
35 2.5YR7/3浅黄色土	91 2.5Y6/4にぶい黄色土	148 10YR7/6明黄褐色土
36 7.5YR4/1褐灰色土(旧表土整地面)	92 10YR3/2黒褐色土	149 10YR7/4にぶい黄橙色土
37 10YR6/4にぶい黄橙色土	93 N3/0灰白色土	150 10YR6/4にぶい黄橙色土
38 10YR7/8黄橙色土	94 N7/10灰白色土	151 10YR7/6明黄褐色土
39 10YR6/2灰黄褐色土	95 N5/0灰色土	152 2.5Y7/4浅黄色土
40 10YR6/3にぶい黄橙色土	96 2.5Y6/4にぶい黄色土	153 10YR7/6明黄褐色土
41 2.5YR6/3にぶい黄色土	97 2.5Y7/4浅黄色土	154 10YR7/6明黄褐色土
42 10YR6/4にぶい黄橙色土	98 2.5Y7/3浅黄色土	155 10YR7/4にぶい黄橙色土
43 2.5YR7/4浅黄色土	99 10YR5/6黄褐色土	156 10YR7/6明黄褐色土
44 10YR5/1褐灰色土	100 2.5Y7/4浅黄色土	157 2.5Y7/4浅黄色土
45 10YR6/2灰黄褐色土	101 表土	158 10YR7/4にぶい黄橙色土
46 10YR7/8黄橙色土	102 2.5Y7/4浅黄色土	159 10YR7/4にぶい黄橙色土
47 7.5YR6/1褐灰色土	103 10YR7/4にぶい黄橙色土	160 10YR7/6明黄褐色土
48 2.5YR6/3にぶい黄色土	104 10YR7/6明黄褐色土	161 5Y6/1灰色土
49 2.5YR7/2灰黄色土	105 10YR4/3にぶい黄褐色土	162 2.5Y6/2灰黄色土
50 10YR7/3にぶい黄橙色土	106 2.5Y4/3オリーブ褐色土	163 10YR5/1褐灰色土
51 10YR7/2にぶい黄橙色土	107 2.5Y4/4オリーブ褐色土	164 10YR7/4にぶい黄橙色土
52 10YR6/4にぶい黄橙色土	108 10YR7/4にぶい黄橙色土	165 10YR6/4にぶい黄橙色土
53 10YR7/8黄橙色土	109 2.5Y6/4にぶい黄色土	166 発掘直前における流出土
54 2.5Y6/2灰黄色土	110 2.5Y5/2暗灰黄色土	167 腐植土
55 2.5Y6/1黄灰色土	111 10YR6/3にぶい黄橙色土	168 2.5Y6/4にぶい黄色土
56 10YR8/4浅黄橙色土	112 2.5Y4/4オリーブ褐色土	169 2.5Y5/2暗灰黄色土
	113 10YR7/4にぶい黄橙色土	170 10YR5/3にぶい黄褐色土

【a-a' 土層説明】（前頁つづき）

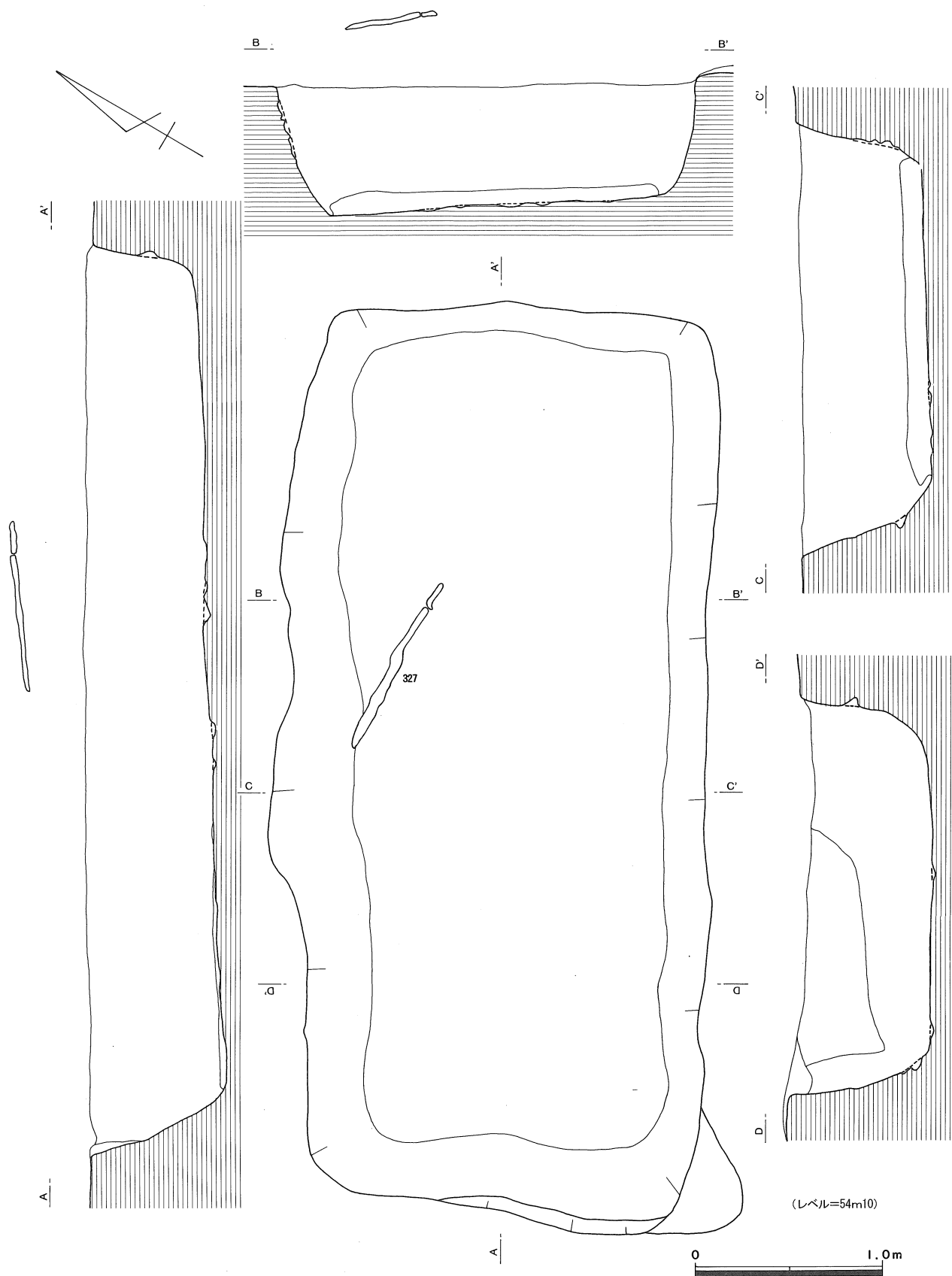
171 10YR7/4にぶい黄橙色土
172 10YR7/8黄褐色土
173 10YR7/6明黄褐色土
174 10YR5/3にぶい黄褐色土
175 10YR5/2灰黄褐色土
176 7.5Y5/3にぶい褐色土
177 10YR7/4にぶい黄橙色土
178 10YR6/4にぶい黄橙色土
179 2.5Y6/4にぶい黄色土
180 10YR5/2灰黄褐色土

【b-b' 土層説明】

1 10YR7/6にぶい黄橙色土
2 10YR6/6明黄褐色土
3 10YR7/3にぶい黄橙色土
4 10YR7/4にぶい黄橙色土
5 2.5Y6/4にぶい黄色土
6 2.5Y6/2灰黄色土
7 10YR6/4にぶい黄橙色土
8 7.5Y5/1黄灰色土
9 10YR7/4にぶい黄橙色土
10 2.5Y8/3淡黄色土
11 2.5Y8/2灰白色土
12 5Y7/1灰白色土
13 2.5Y8/2灰白色土
14 2.5Y8/2灰白色土
15 2.5Y8/3淡黄色土
16 2.5Y8/3淡黄色土
17 2.5Y7/4浅黄色土
18 10YR6/6明黄褐色土
19 10YR7/4にぶい黄橙色土
20 10YR6/4にぶい黄橙色土
21 2.5Y8/3浅黄色土
22 10YR7/4にぶい黄橙色土
23 10YR6/6明黄褐色土
24 10YR6/4にぶい黄橙色土
25 2.5Y8/2灰白色土
26 10YR8/3浅黄橙色土
27 10YR6/4にぶい黄橙色土
28 10YR7/4にぶい黄橙色土
29 10YR5/4にぶい黄褐色土
30 10YR6/8明黄褐色土
31 10YR7/4にぶい黄橙色土
32 10YR6/4にぶい黄橙色土
33 10YR7/4にぶい黄橙色土
34 2.5Y7/1灰白色土
35 2.5Y8/5淡黄色土
36 2.5Y7/3浅黄色土
37 10YR6/6明黄褐色土
38 10YR6/4にぶい黄橙色土
39 2.5Y6/4にぶい黄色土
40 10YR6/6明黄褐色土
41 10YR7/4にぶい黄橙色土
42 10YR7/6明黄褐色土
43 10YR6/4にぶい黄橙色土
44 10YR6/6明黄褐色土

45 10YR6/3にぶい黄橙色土
46 2.5Y7/4浅黄色土
47 2.5Y6/6明黄褐色土
48 10YR4/1褐灰色土
49 10YR7/6明黄褐色土
50 7.5Y4/1褐灰色土（旧表土整地面）
51 10YR5/4にぶい黄褐色土
52 2.5Y7/4浅黄色土
53 2.5Y7/6明黄褐色土
54 2.5Y5/2暗灰黄色土
55 10YR5/2灰黄褐色土
56 10YR7/6明黄褐色土
57 10YR6/4にぶい黄橙色土
58 2.5Y7/5浅黄色土
59 2.5Y7/4浅黄色土（貼床）
60 2.5Y7/4浅黄色土
61 2.5Y6/4にぶい黄色土
62 10YR6/4にぶい黄橙色土
63 10YR8/2灰白色土
64 10YR8/2灰白色土
65 10YR8/3浅黄橙色土
66 7.5YRにぶい赤褐色土
67 10YR7/3にぶい黄橙色土
68 10YR7/4にぶい黄橙色土
69 10YR7/3にぶい黄橙色土
70 2.5Y7/4浅黄色土
71 70とほぼ同質
72 10YR6/4にぶい黄橙色土
73 2.5Y5/1黄灰色土
75 2.5Y7/6明黄褐色土
76 2.5Y7/6明黄褐色土
77 10YR7/6明黄褐色土
78 10YR6/4にぶい黄橙色土
79 10YR7/4にぶい黄橙色土
80 10YR7/6明黄褐色土
81 2.5Y7/4浅黄色土
82 10YR7/4にぶい黄橙色土
83 10YR5/6黄褐色土
84 10YR5/8黄褐色土
85 7.5YR3/1黒褐色土
86 2.5Y6/3にぶい黄色土
87 2.5Y5/1黄灰色土
88 2.5Y6/3にぶい黄色土
89 10YR7/6明黄褐色土
90 10YR6/4にぶい黄橙色土
91 10YR7/4にぶい黄橙色土
92 10YR6/4にぶい黄橙色土
93 2.5Y6/4にぶい黄色土
94 10YR6/4にぶい黄橙色土
95 10YR6/6明黄褐色土
96 2.5Y7/4浅黄色土
97 10YR7/4にぶい黄橙色土
98 10YR7/4にぶい黄橙色土
99 10YR6/3にぶい黄橙色土
100 10YR5/4にぶい黄橙色土
101 2.5Y6/4にぶい黄色土
102 2.5Y5/3黄褐色土

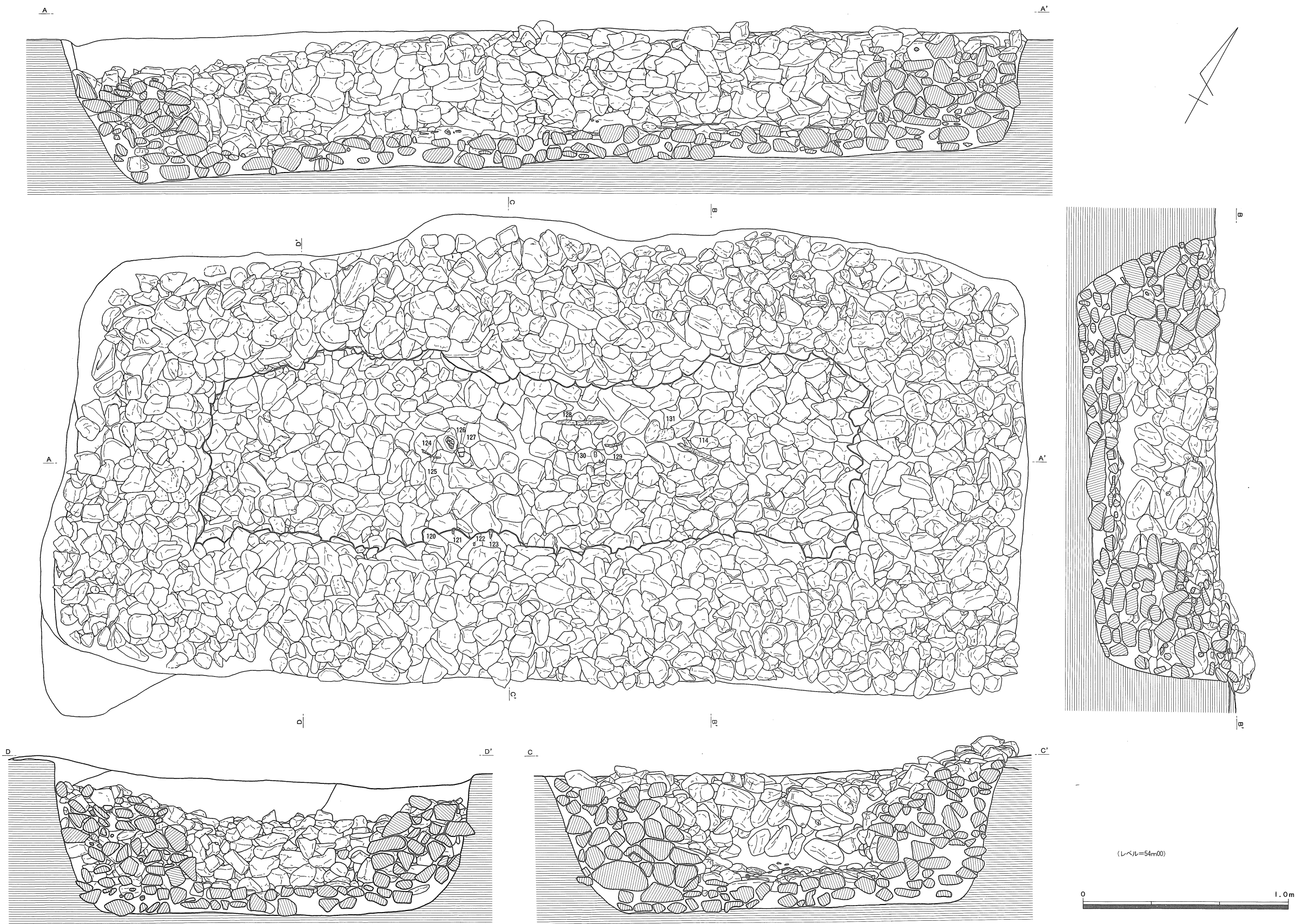
103 10YR6/4にぶい黄橙色土
104 10YR6/4にぶい黄橙色土
105 10YR7/6明黄褐色土
106 10YR6/2灰黄褐色土
107 10YR6/6明黄褐色土
108 2.5Y6/4にぶい黄色土
109 10YR6/4にぶい黄橙色土
110 2.5Y7/4浅黄色土
111 10YR7/4にぶい黄褐色土
112 10YR6/4にぶい黄橙色土
113 10YR7/4にぶい黄褐色土
114 10YR6/4にぶい黄橙色土
115 10YR5/4にぶい黄褐色土
116 10YR7/6にぶい黄橙色土
117 116とほぼ同質
119 2.5Y6/4にぶい黄色土
120 10YR6/3にぶい黄橙色土
121 10YR7/6明黄褐色土
122 10YR6/4にぶい黄橙色土
123 10YR7/6明黄褐色土
124 2.5Y7/6明黄褐色土
125 2.5Y7/4浅黄色土
126 10YR4/3にぶい黄褐色土
127 10YR6/4にぶい黄橙色土
128 10YR6/6明黄褐色土
129 10YR7/3にぶい黄橙色土
130 129とほぼ同質
131 5Y6/1灰色土
132 7.5YR7/6橙色土
133 10YR7/8黄橙色土
134 10YR7/1灰白色土
135 7.5YR7/6橙色土
136 10YR7/8黄橙色土
137 10YR7/8黄橙色土
138 153とほぼ同質
139 10YR7/4にぶい黄橙色土
140 10YR7/4にぶい黄橙色土
141 10YR7/4にぶい黄橙色土
142 10YR6/4にぶい黄橙色土
143 10YR6/4にぶい黄橙色土
144 10YR6/3にぶい黄橙色土
145 10YR6/4にぶい黄橙色土（土器片含む）
146 2.5Y6/4にぶい黄色土
147 2.5Y7/4浅黄色土
148 10YR7/3黄橙色土
149 10YR7/6明黄褐色土
150 10YR6/6明黄褐色土
151 83と同質
152 10YR7/4にぶい黄橙色土
153 10YR6/3にぶい黄橙色土
154 10YR5/3にぶい黄褐色土
155 10YR7/8黄橙色土
156 10YR7/6明黄褐色土
157 10YR5/3にぶい黄褐色土
158 10YR6/3にぶい黄橙色土
159 10YR7/4にぶい黄橙色土



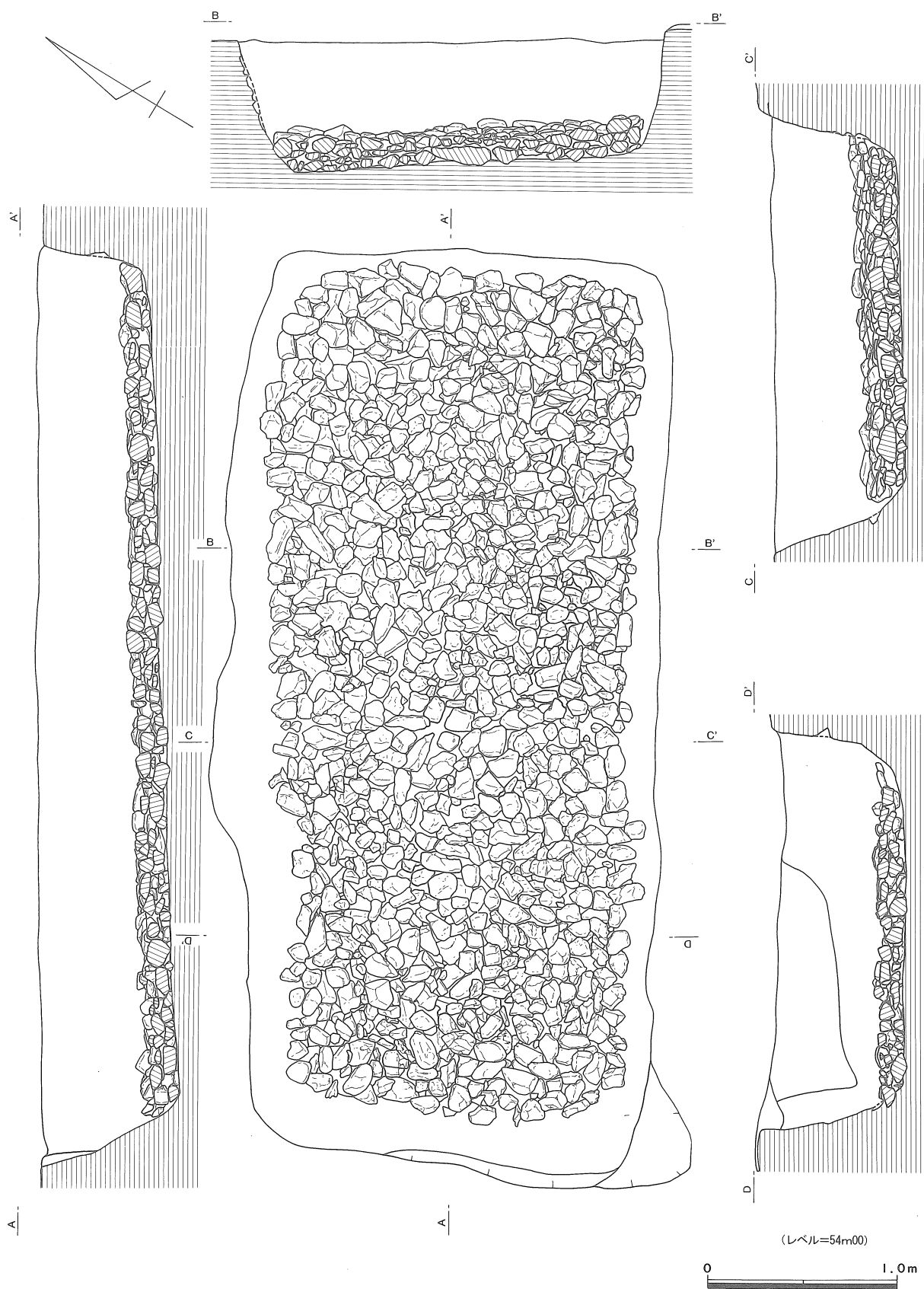
第109図 F地区1号墳主体部上層遺物出土状況・墓壙実測図



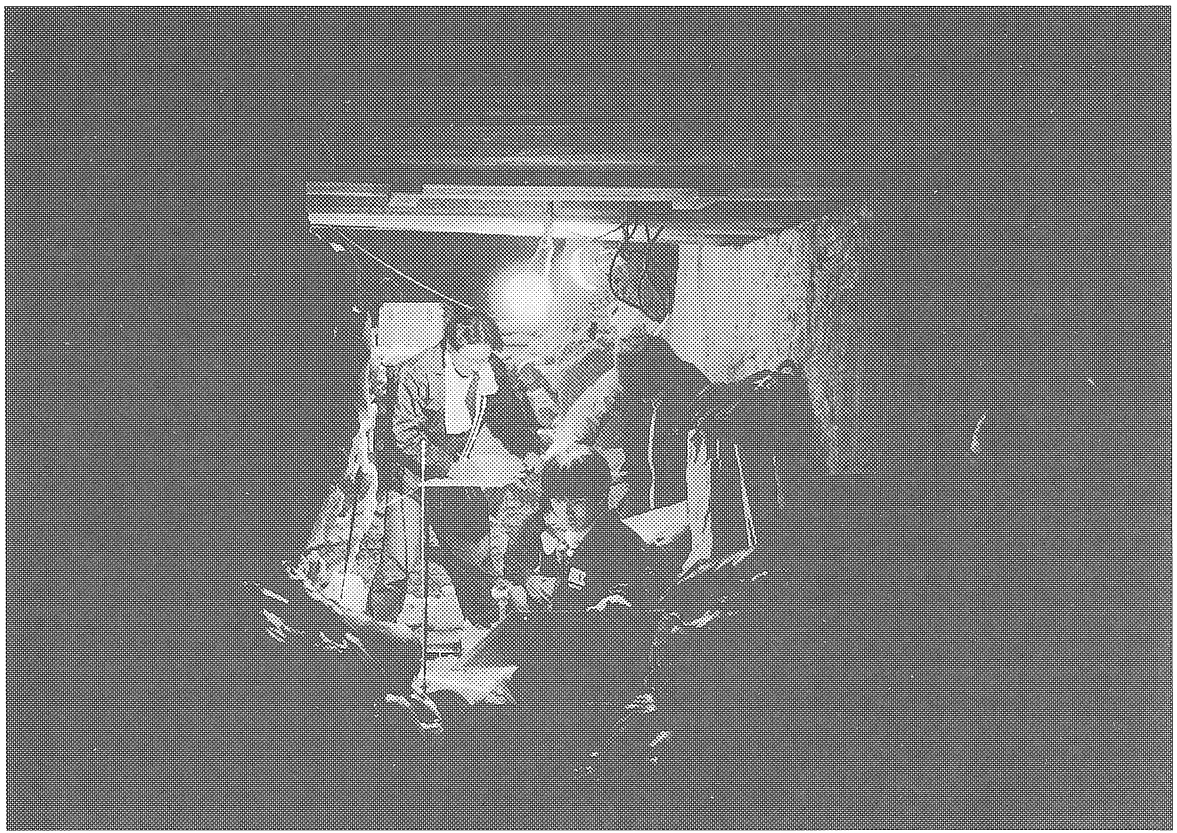
第110図 F地区1号墳主体部(検出時)遺構実測図



第111図 F地区1号墳主体部遺構実測図



第112図 F地区1号墳主体部床石遺構実測図





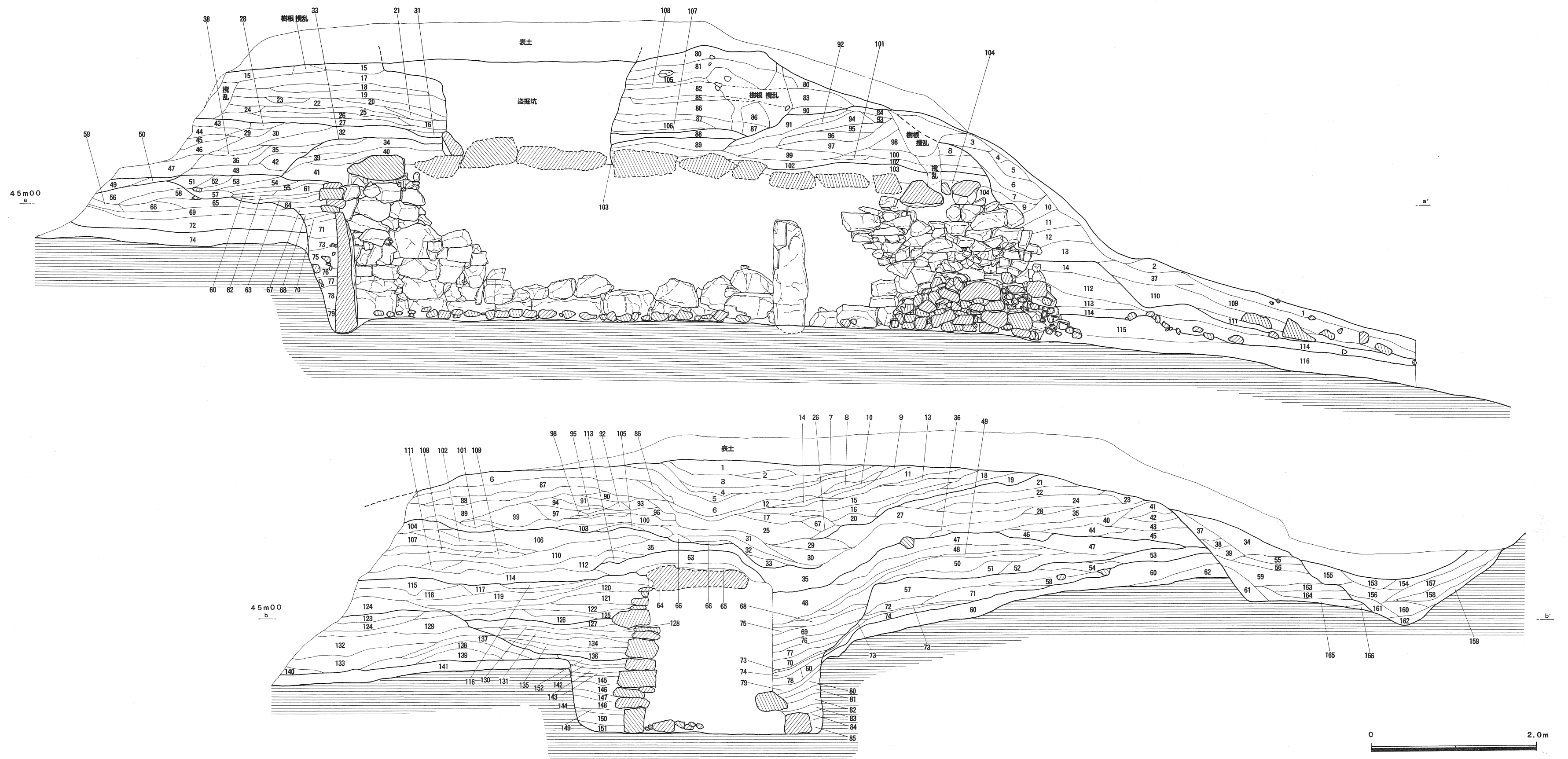
第113図 F地区2号墳墳丘実測図

【a-a' 土層説明】

1 10YR3/1黒褐色土	56 7.5YR4/1褐色土	112 2.5Y 5/1黄灰色土
2 10YR6/2灰黄褐色土	57 10YR5/1褐灰色土	113 10YR6/2灰黄褐色土
3 10YR7/4にぶい黄橙色土	58 7.5YR7/6橙色土	114 10YR5/1褐灰色土
4 10YR6/3にぶい黄橙色土	59 10YR6/4にぶい黄橙色土	115 10YR6/2灰黄褐色土
5 10YR6/3にぶい黄橙色土	60 5YR6/6橙色土	116 10YR5/1褐灰色土
6 10YR6/4にぶい黄橙色土	61 7.5YR7/4にぶい橙色土	
7 10YR7/3にぶい黄橙色土	62 2.5YR7/4浅黄色土	
8 10YR6/3にぶい黄橙色土	63 7.5YR7/4にぶい橙色土	
9 10YR6/3にぶい黄橙色土	64 10YR7/4にぶい橙色土	
10 10YR7/4にぶい黄橙色土	65 7.5YR6/4にぶい橙色土	
11 10YR5/2灰黄褐色土	66 7.5YR6/3にぶい褐色土	
12 10YR6/4にぶい黄褐色土	67 7.5YR7/6橙色土	
13 10YR6/4にぶい黄褐色土	68 10YR6/4にぶい黄橙色土	
14 10YR6/4にぶい黄橙色土	69 10YR4/1褐灰色土	
15 10YR6/4にぶい黄橙色土	70 7.5YR6/6橙色土	
16 10YR4/1褐灰色土	71 7.5YR6/3にぶい褐色土	
17 10YR7/4にぶい黄橙色土	72 10YR6/3にぶい黄橙色土	
18 10YR7/4にぶい黄橙色土	73 10YR6/2灰黄褐色土	
19 10YR7/6明黄褐色土	74 7.5YR7/4にぶい橙色土 (旧表土整地面)	
20 2.5YR4/1黄灰色土	75 7.5YR7/4にぶい橙色土	
21 10YR5/2灰黄褐色土	76 10YR6/3にぶい黄橙色土	
22 10YR5/4にぶい黄褐色土	77 10YR5/3にぶい黄褐色土	
23 10YR6/2灰黄褐色土	78 10YR5/2灰黄褐色土	
24 10YR5/3黄褐色土	79 10YR6/3にぶい黄橙色土	
25 10YR4/3にぶい黄褐色土	80 2.5YR7/4浅黄色土	
26 10YR6/4にぶい黄橙色土	81 10YR8/6黄橙色土	
27 10YR7/6明黄褐色土	82 2.5Y7/4浅黄色土	
28 10YR6/4にぶい黄橙色土	83 82とほぼ同質	
29 7.5YR6/3にぶい褐色土	84 10YR6/3にぶい黄橙色土	
30 10YR7/4にぶい黄橙色土	85 2.5YR6/2灰黄色土	
31 2.5YR4/1黄灰色土	86 10YR7/6明黄褐色土	
32 10YR6/3にぶい黄橙色土	87 2.5Y 4/1黄灰色土	
33 7.5YR6/4にぶい橙色土	88 10YR7/6明黄褐色土	
34 10YR5/3にぶい黄橙色土	89 10YR7/6明黄褐色土	
35 10YR6/4にぶい黄橙色土	90 7.5YR7/6橙色土	
36 10YR4/1褐灰色土	91 5Y 5/1灰色土	
37 10YR6/4にぶい黄橙色土	92 10YR7/8黄橙色土	
38 10YR3/2黒褐色土	93 2.5Y 3/1黒褐色土	
39 N3 6/4暗灰色土	94 10YR4/1褐灰色土	
40 10YR6/3にぶい黄橙色土	95 10YR7/6明黄褐色土	
41 10YR4/3にぶい黄褐色土	96 10YR6/6明黄褐色土	
42 10YR5/3にぶい黄褐色土	97 10YR7/4にぶい黄橙色土	
43 10YR6/4にぶい黄橙色土	98 10YR6/6明黄褐色土	
44 10YR6/2灰黄褐色土	99 10YR7/6明黄褐色土	
45 10YR5/2灰黄褐色土	100 10Y 7/8黄橙色土	
46 10YR6/3にぶい黄橙色土	101 N3 暗灰色土	
47 10YR6/2灰黄褐色土	102 2.5Y 5/1黄灰色土	
48 10YR6/2灰黄褐色土	103 10YR6/4にぶい黄橙色土	
49 10YR5/2灰黄褐色土	104 10YR5/3にぶい黄褐色土	
50 7.5YR8/6浅黄橙色土	105 10Y 7/4にぶい黄褐色土	
51 10YR6/3にぶい黄橙色土	106 10YR5/1褐灰色土	
52 5YR6/4にぶい橙色土	107 10YR3/3暗褐色土	
53 2.5YR4/2暗灰黄色土	108 10YR3/2黒褐色土	
54 10YR5/2灰黄褐色土	109 10YR5/2灰黄褐色土	
55 5YR7/6橙色土	110 10YR5/2灰黄褐色土	
	111 10YR7/4にぶい黄橙色土	

【b-b' 土層説明】

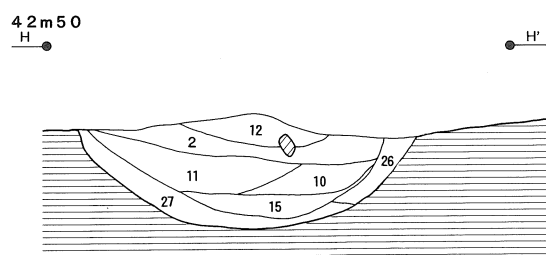
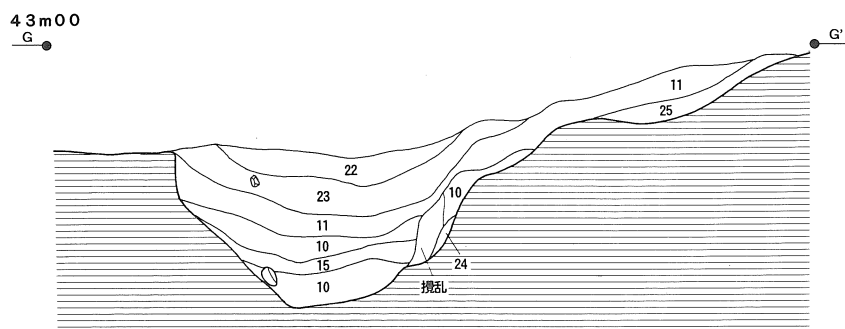
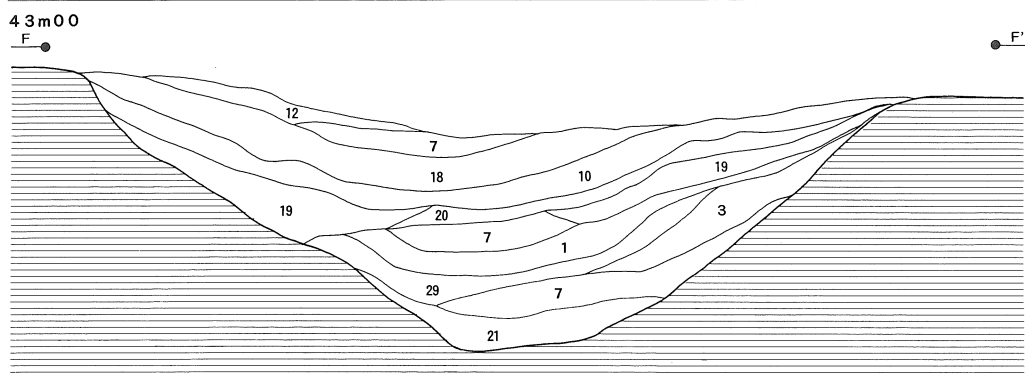
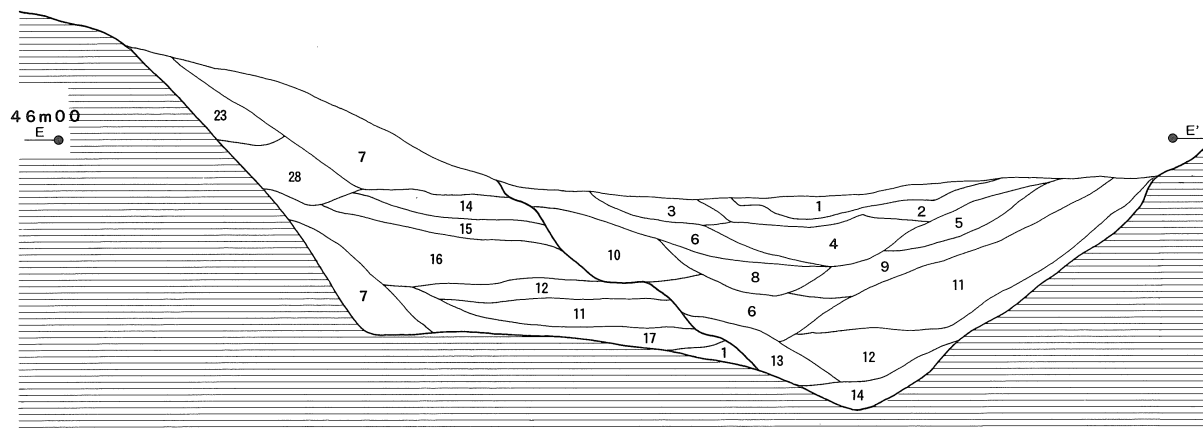
1 7.5YR7/4浅黄色土	56 5Y 4/1灰色土	112 10YR6/4褐色土
2 木の根の攪乱	57 7.5YR7/6橙色土	113 10YR3/2黒褐色土
3 10YR8/6黄橙色土	58 7.5YR6/4にぶい橙色土	114 10YR4/6褐色土
4 10YR7/4にぶい黄褐色土	59 10YR6/6明黄褐色土	115 7.5YR6/2灰褐色土
5 10YR3/2黒褐色土	60 10YR4/1褐灰色土 (旧表土整地面)	116 10YR6/3にぶい黄橙色土
6 2.5Y7/4浅黄色土	61 10YR6/4にぶい黄橙色土	117 10YR7/4にぶい黄橙色土
7 5YR5/4にぶい赤褐色土	62 2.5Y4/1黄灰色土	118 10YR3/1黒褐色土
8 7.5YR5/3にぶい褐色土	63 10YR7/6明黄褐色土	119 7.5YR6/4にぶい褐色土
9 7.5YR8/4浅黄橙色土	64 2.5Y5/1黄灰色土	120 7.5YR6/4にぶい褐色土
10 7.5YR6/4にぶい橙色土	65 10YR6/4にぶい黄橙色土	121 7.5YR7/4にぶい橙色土
11 7.5YR7/8黄橙色土	66 10YR3/3暗褐色土	122 7.5YR6/3にぶい褐色土
12 2.5Y6/2灰黄色土	67 7.5YR6/4にぶい橙色土	123 10YR6/3にぶい黄橙色土
13 2.5Y5/1黄灰色土	68 10YR5/4にぶい黄褐色土	124 7.5YR6/3にぶい褐色土
14 7.5Y6/4にぶい橙色土	69 7.5YR5/4にぶい褐色土	125 10YR4/1褐灰色土
15 7.5Y7/4にぶい橙色土	70 10YR6/6明黄褐色土	126 7.5YR5/1褐灰色土
16 7.5YR7/8黄橙色土	71 10YR6/8明黄褐色土	127 7.5YR6/6橙色土
17 7.5YR7/6橙色土	72 10YR6/6明黄褐色土	128 10YR6/4にぶい黄橙色土
18 10YR4/2灰黄褐色土	73 10YR2/1黒色土	129 7.5YR6/4にぶい橙色土
19 N4/ 灰色土	74 10YR7/4にぶい黄橙色土	130 7.5YR6/4にぶい橙色土
20 2.5Y4/1黄灰色土	75 68とほぼ同質	131 7.5YR6/6橙色土
21 7.5YR6/6橙色土	76 10YR6/4にぶい黄橙色土	132 7.5YR6/6橙色土
22 7.5YR7/6橙色土	77 10YR5/6黄褐色土	133 7.5YR6/4にぶい橙色土
23 10YR6/3にぶい黄橙色土	78 10YR6/4にぶい黄橙色土	134 10YR6/3にぶい黄橙色土
24 10YR7/4にぶい黄橙色土	79 7.5YR6/4にぶい橙色土	135 10YR6/3にぶい黄橙色土
25 10YR7/6明黄褐色土	80 10YR7/4にぶい黄橙色土	136 10YR7/6明黄褐色土
26 2.5Y6/1黄灰色土	81 7.5YR6/3にぶい褐色土	137 7.5YR6/4にぶい橙色土
27 7.5YR7/6橙色土	82 10YR6/3にぶい黄橙色土	138 10YR5/3にぶい黄褐色土
28 10YR7/6灰黄褐色土	83 10YR5/3にぶい黄褐色土	139 10YR6/4にぶい黄橙色土
29 7.5YR6/4にぶい橙色土	84 2.5Y4/2暗灰黄色土	140 10YR5/3にぶい黄褐色土
30 7.5YR5/3にぶい褐色土	85 2.5Y5/2暗灰黄色土	141 10YR6/3にぶい黄橙色土 (旧表土整地面)
31 2.5Y4/1黄灰色土	86 10YR4/2灰黄褐色土	142 10YR5/4にぶい黄褐色土
32 10YR5/1褐灰色土	87 10YR6/4褐色土	143 7.5YR6/3にぶい褐色土
33 7.5YR6/4にぶい橙色土	88 7.5YR4/3暗褐色土	144 10YR7/4にぶい黄色土
34 10YR7/4にぶい黄橙色土	89 10YR6/4褐色土	145 10YR6/6明黄褐色土
35 10YR7/6明黄褐色土	90 10YR4/6褐色土	146 10YR5/2灰黄褐色土
36 5PB4/1暗青灰色土	91 10YR3/3暗褐色土	147 10YR6/3にぶい黄橙色土
37 10YR5/3にぶい黄褐色土	92 10YR3/4暗褐色土	148 10YR7/4にぶい黄橙色土
38 10YR7/6明黄褐色土	93 10YR3/3暗褐色土	149 10YR5/2灰黄褐色土
39 10YR7/6明黄褐色土	94 10YR6/4褐色土	150 10YR7/2にぶい黄橙色土
40 10YR7/6明黄褐色土	95 10YR4/6褐色土	151 10YR7/3にぶい黄橙色土
41 2.5Y5/2暗灰黄色土	96 10YR3/3暗褐色土	152 10YR5/3にぶい黄褐色土
42 2.5Y6/2灰黄色土	97 7.5YR3/3暗褐色土	153 10YR5/4灰黄褐色土
43 10YR6/4にぶい黄橙色土	98 7.5YR4/6褐色土	154 2.5Y5/2暗灰黄色土
44 10YR7/4にぶい黄橙色土	99 7.5YR3/3暗褐色土	155 10YR5/2灰黄褐色土
45 7.5YR4/1褐灰色土	100 10YR3/2黒褐色土	156 10YR5/1褐灰色土
46 7.5YR7/8黄橙色土	101 10YR2/2黒褐色土	157 10YR5/2灰黄褐色土
47 7.5YR7/6橙色土	102 5YR4/1褐灰色土	158 157とほぼ同質
48 7.5YR7/4にぶい黄橙色土	103 7.5YR5/8明褐色土	159 10YR6/4にぶい黄橙色土
49 N3/ 暗灰色土	104 10YR4/6褐色土	160 10YR7/4にぶい黄橙色土
50 7.5YR7/8黄橙色土	105 10YR3/3暗褐色土	161 7.5YR6/1褐灰色土
51 10YR4/1褐灰色土	106 10YR4/4褐色土	162 10YR6/3にぶい黄橙色土
52 10YR6/4にぶい黄橙色土	107 7.5YR4/6褐色土	163 10YR6/4にぶい黄橙色土
53 7.5YR8/8黄橙色土	108 10YR3/2黒褐色土	164 10YR5/2灰黄褐色土
54 10YR7/4にぶい黄橙色土	109 10YR2/2黒褐色土	165 10YR7/6明黄褐色土
55 2.5Y7/3浅黄色土	110 10YR5/6黄褐色土	166 10YR6/6明黄褐色土
	111 5YR4/1褐灰色土	



第114图 F地区2号墳墳丘土層断面图

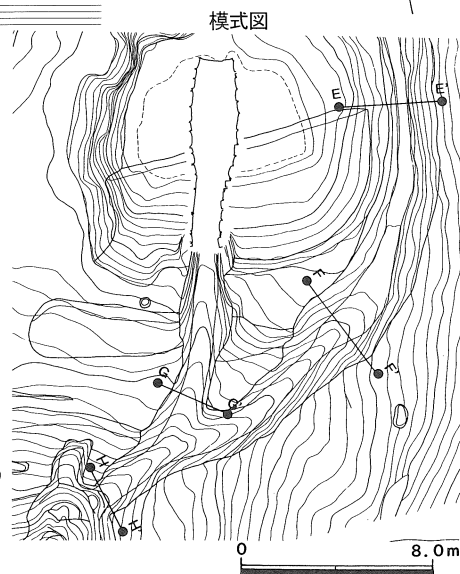


第115図 F地区2号墳墳丘土層断面概念図

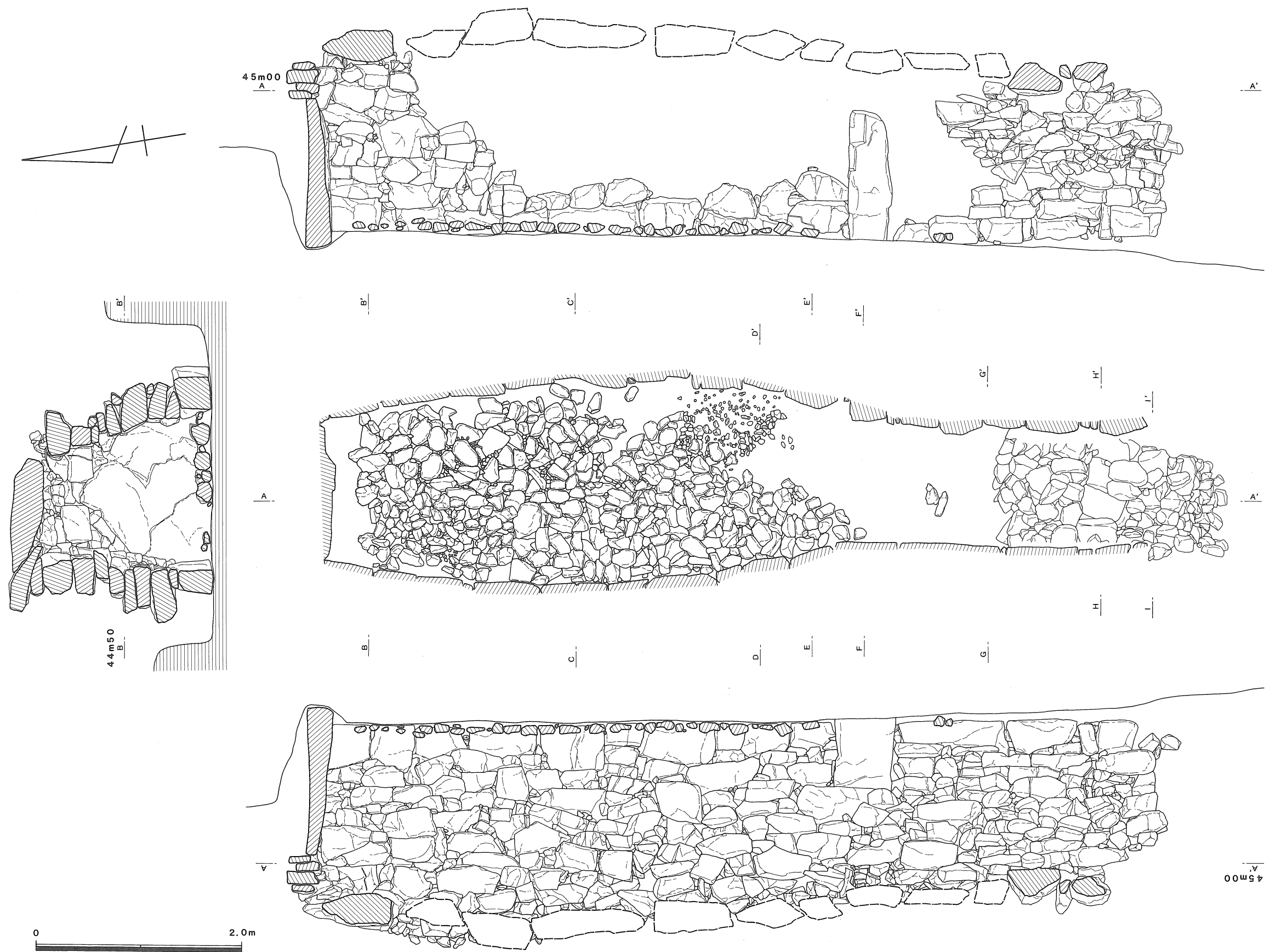


土層説明

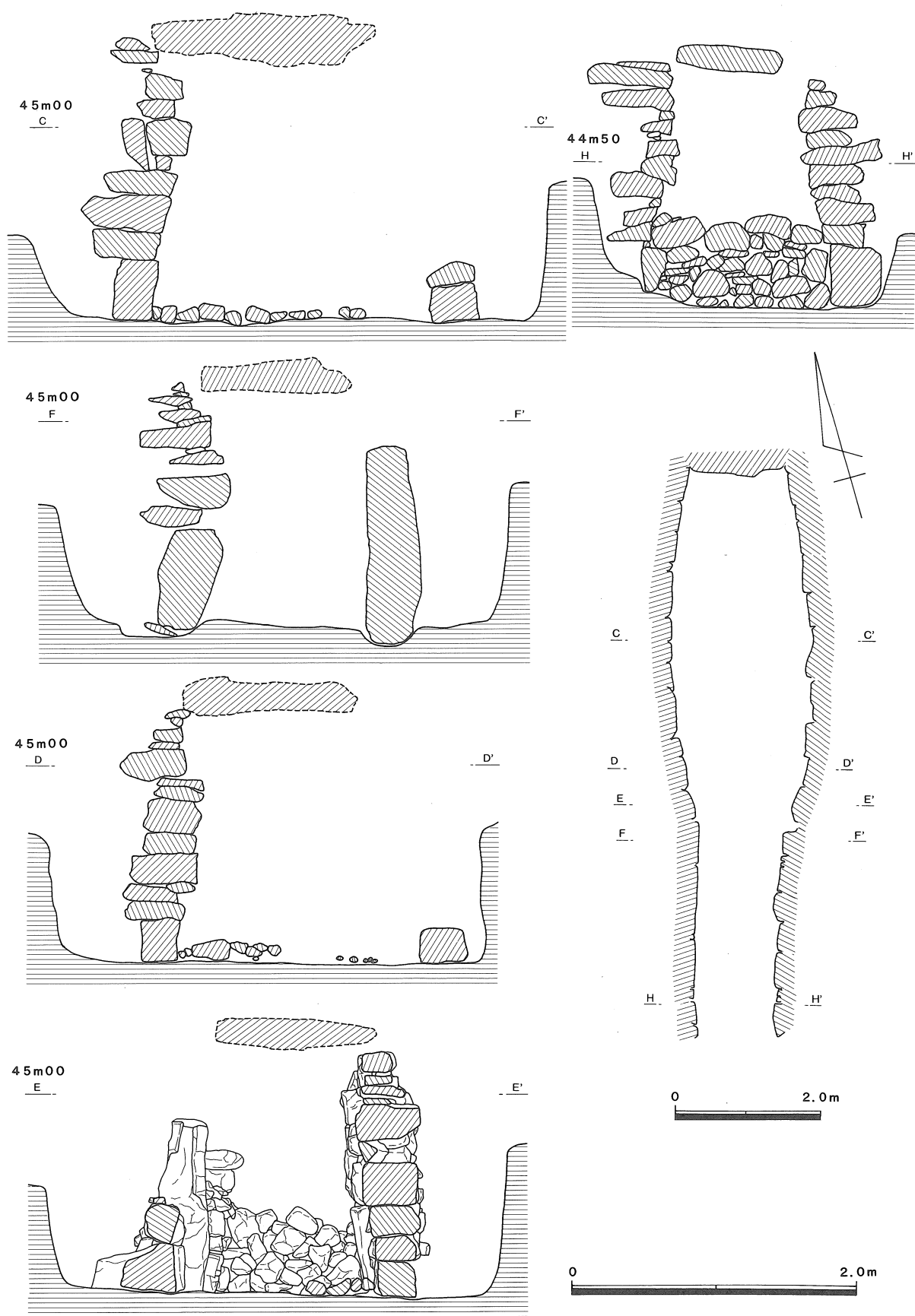
- | | | |
|--------------------|--------------------|---------------------|
| 1層 明黄褐色土(しまり非常に良い) | 11層 灰黄褐色土(しまり良い) | 21層 灰白色土(しまり非常に良い) |
| 2層 黄橙色土(しまり悪い) | 12層 黄橙色土 | 22層 黄色土(しまり非常に良い) |
| 3層 黄橙色土(しまり良い) | 13層 褐灰色土(しまり悪い) | 23層 黄褐色土(しまり良い) |
| 4層 灰色土 | 14層 黄橙色土(しまり良い) | 24層 褐灰色土(しまり非常に良い) |
| 5層 黄灰色土(しまり悪い) | 15層 暗灰黄色土(しまり良い) | 25層 灰黄褐色土(しまり非常に良い) |
| 6層 褐灰色土(しまり良い) | 16層 黄褐色土(しまり非常に良い) | 26層 黄色土 |
| 7層 黄橙色土(しまり非常に良い) | 17層 明黄褐色土 | 27層 黄灰色土 |
| 8層 灰黄褐色土 | 18層 浅黄色土(しまり非常に良い) | 28層 明黄褐色土(しまり良い) |
| 9層 暗灰黄色土 | 19層 黄色土(しまり良い) | 29層 黄褐色土(砂質) |
| 10層 灰黄褐色土 | 20層 黄色土(しまり非常に良い) | |



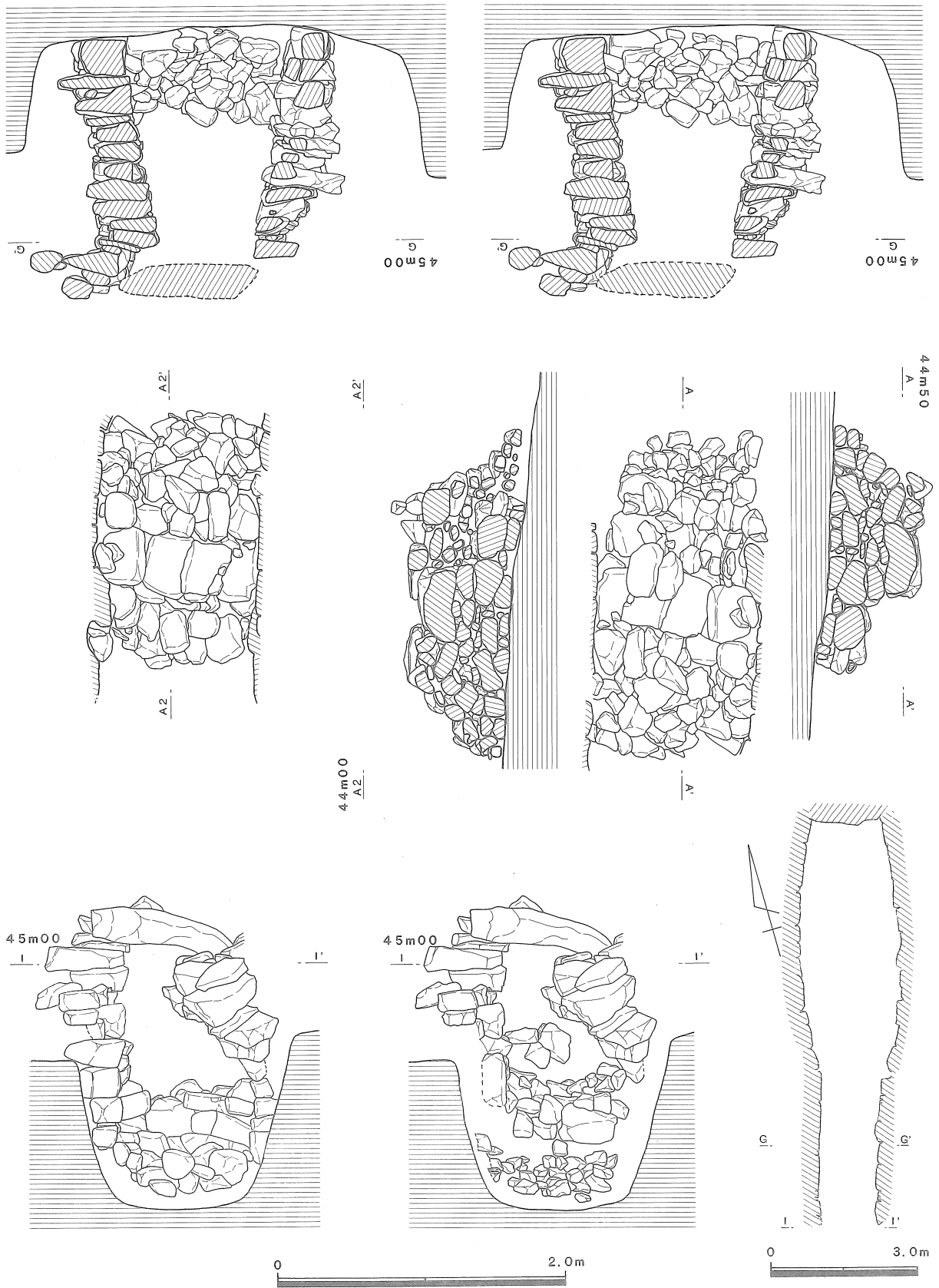
第116図 F地区2号墳周溝土層断面図



第117図 F地区2号墳主体部遺構実測図1



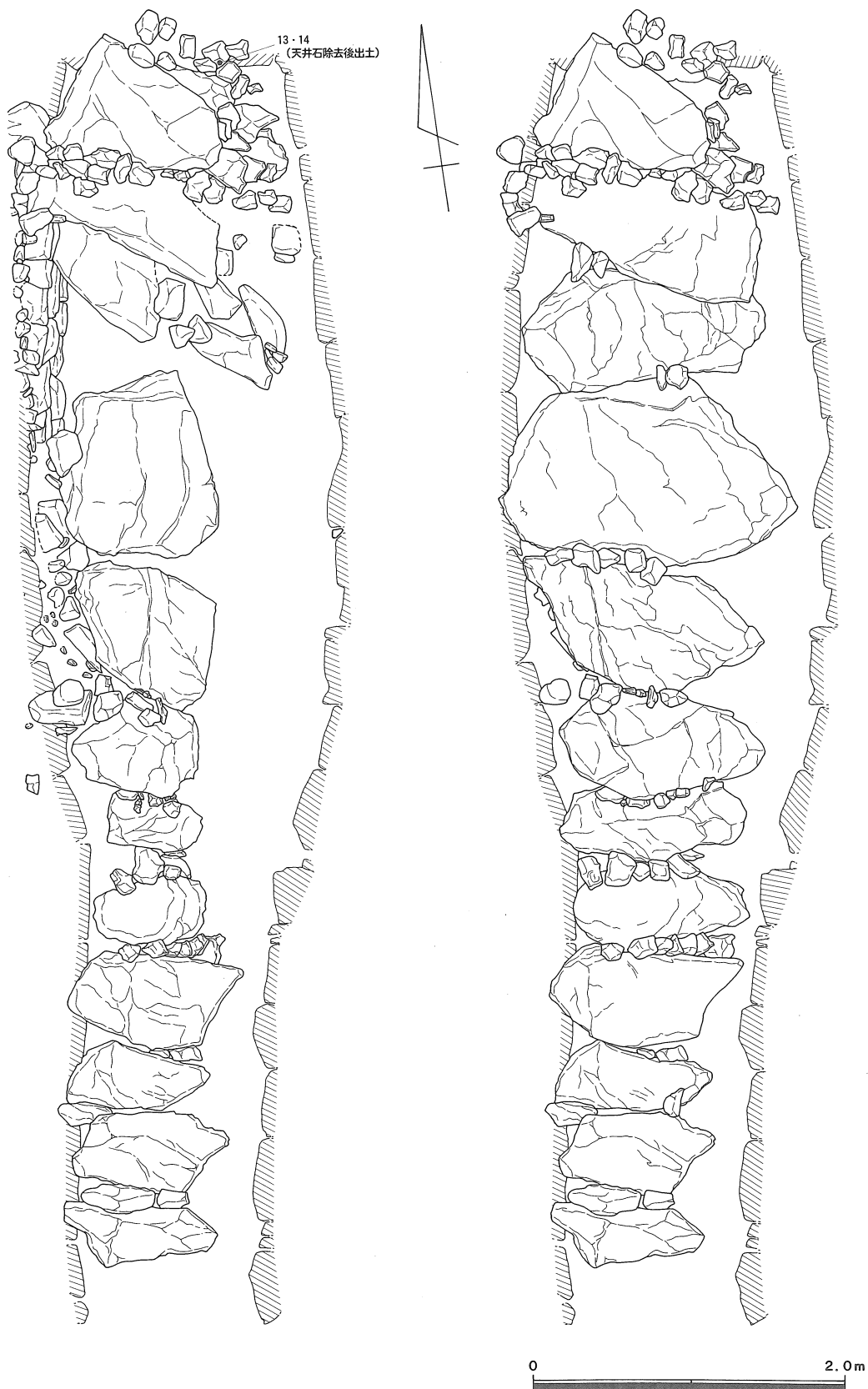
第118図 F地区2号墳主体部遺構実測図2



第119図 F地区2号墳主体部遺構実測図3



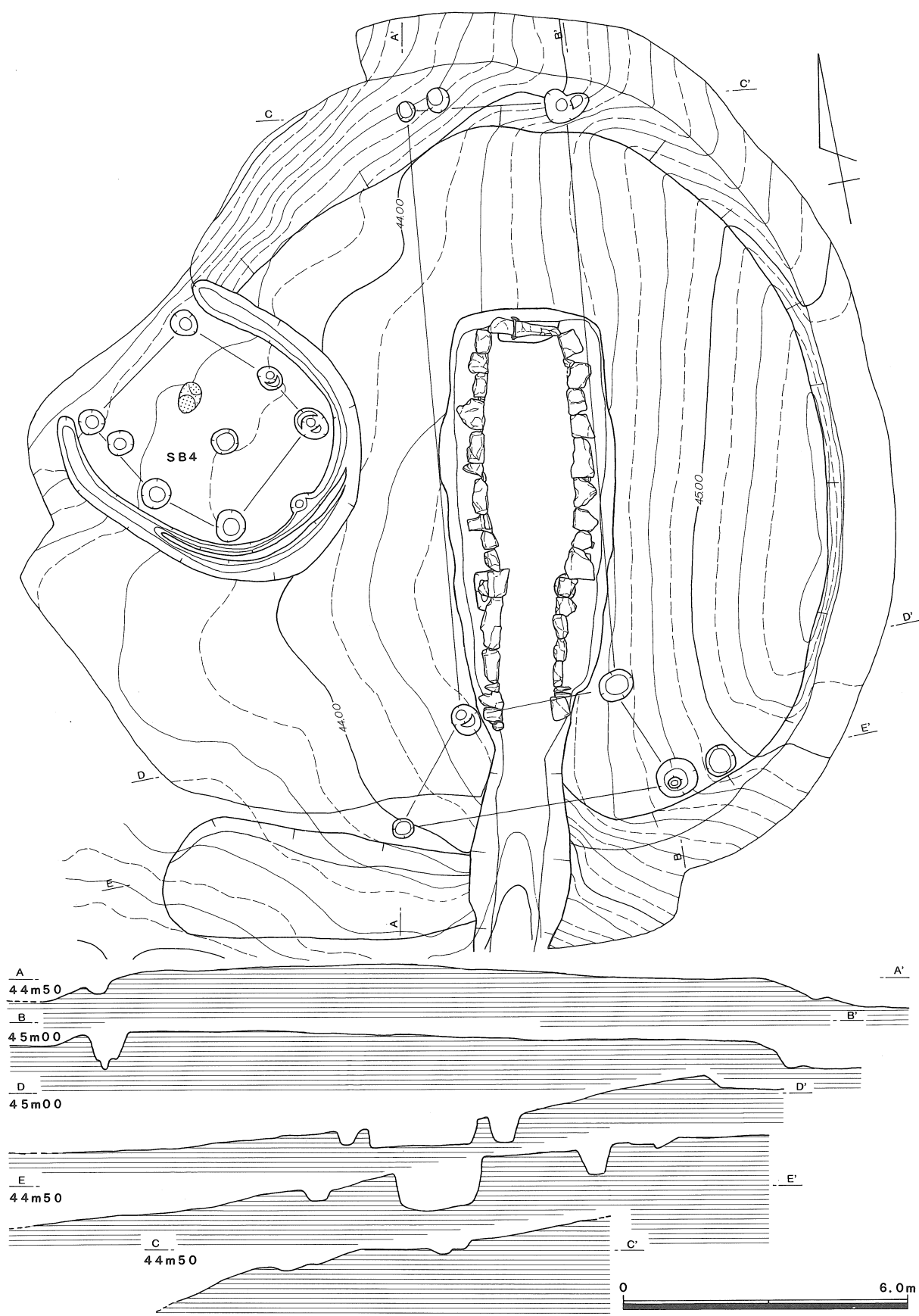
第120図 F地区2号墳閉塞石・墓道内石材出土状況実測図



第121図 F地区2号墳天井石（検出時・復元）実測図



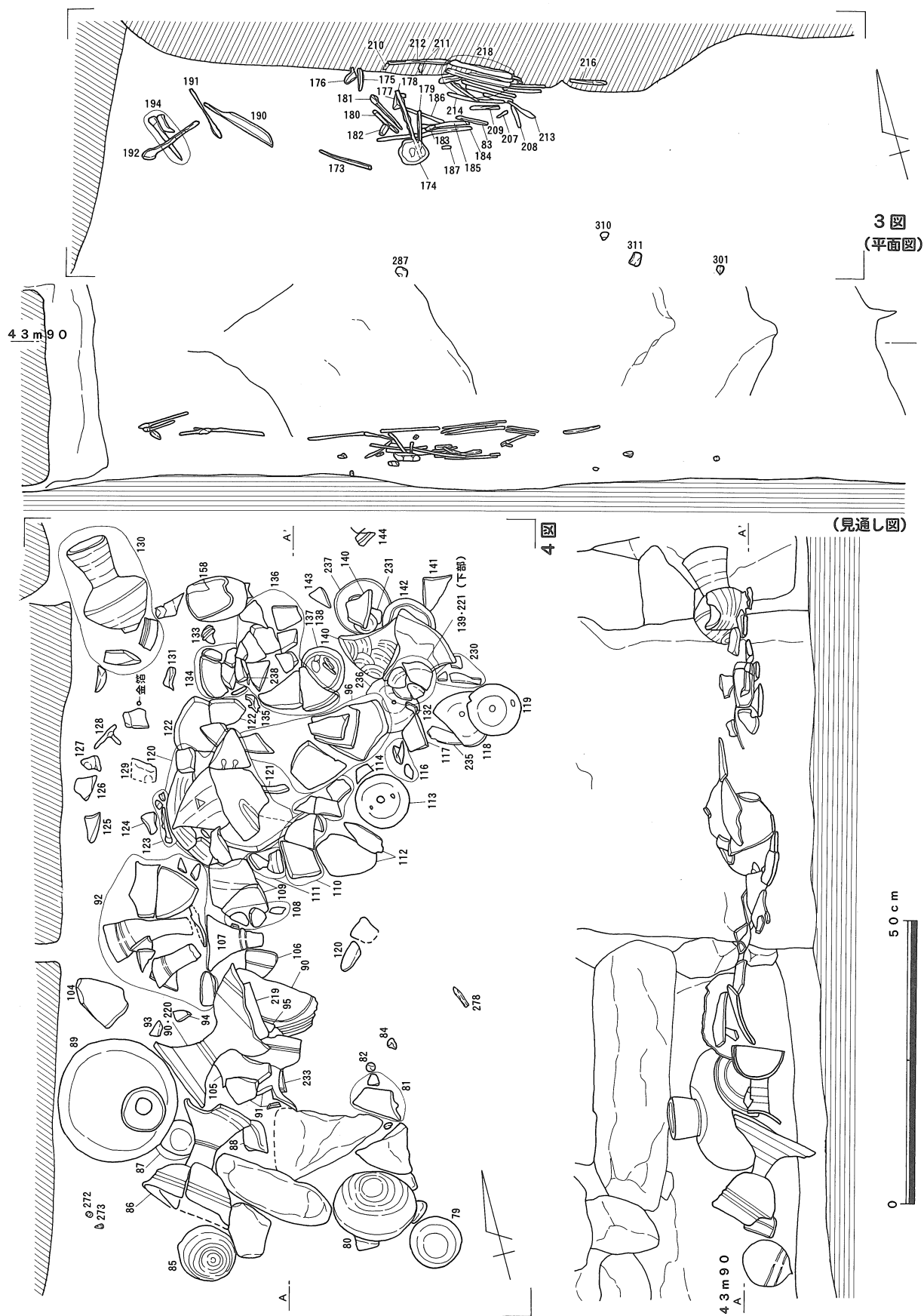
第122図 F地区2号墳主体部根石・掘り方実測図



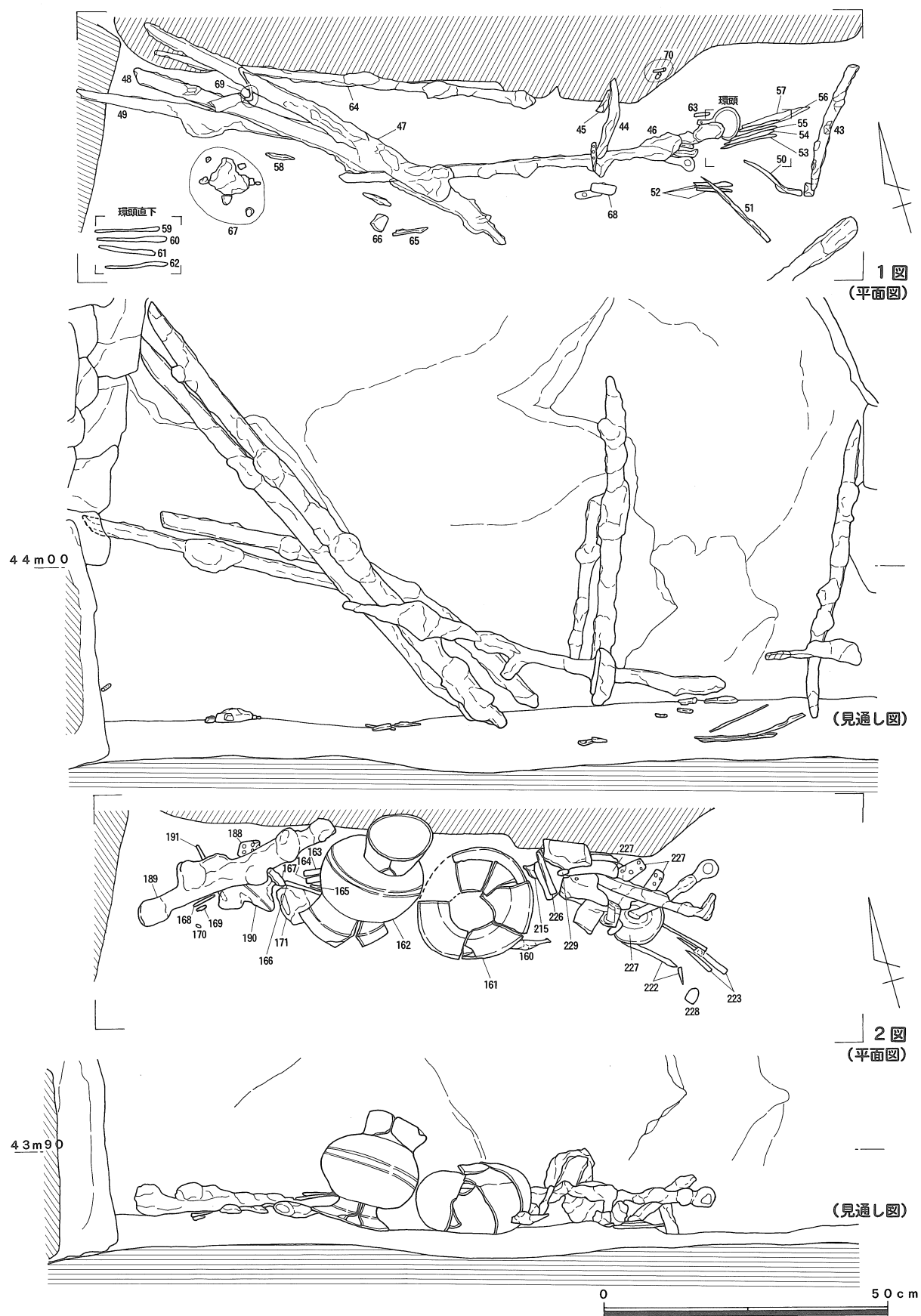
第123図 F地区2号墳下層遺構全体図



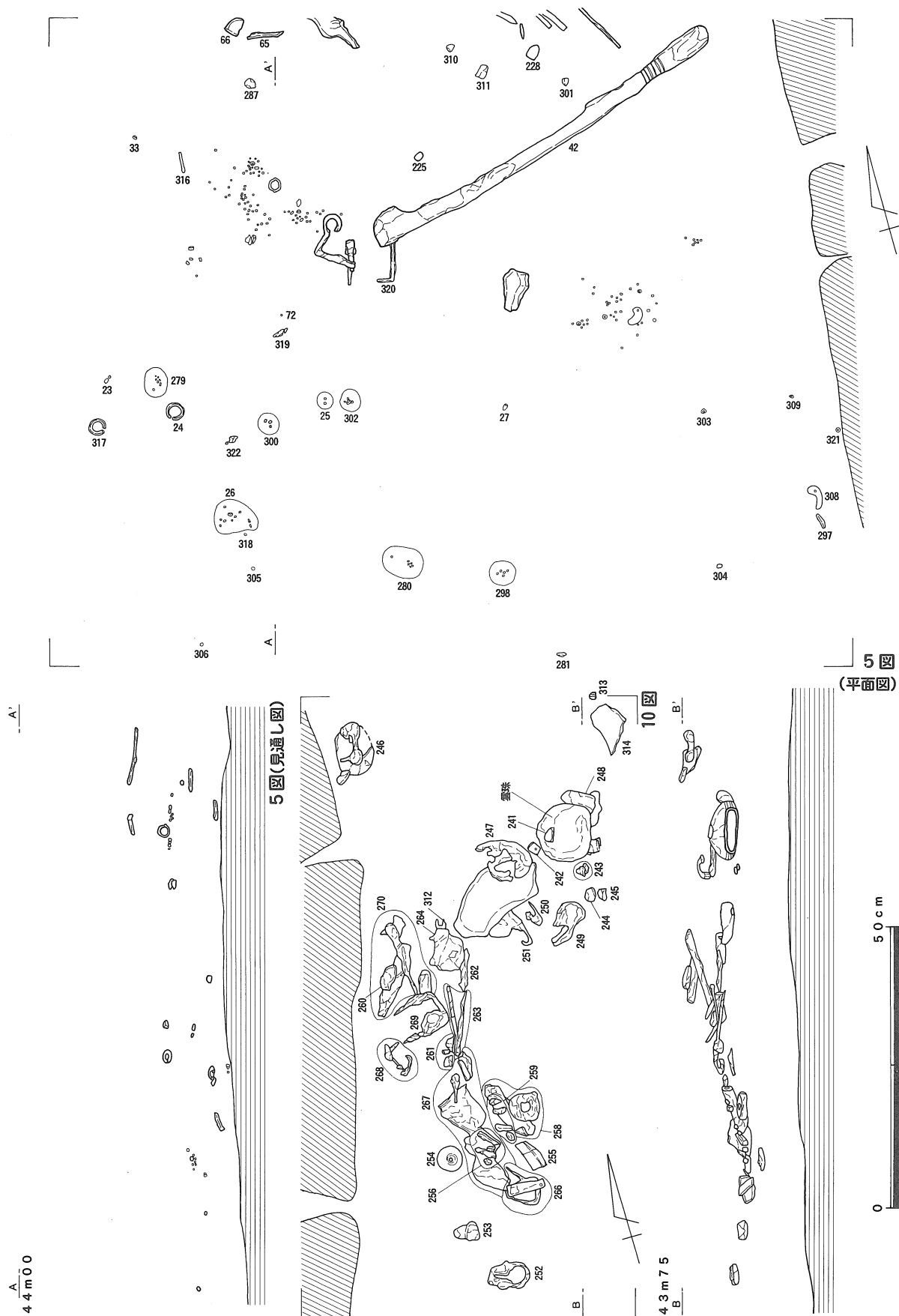
第124図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図1



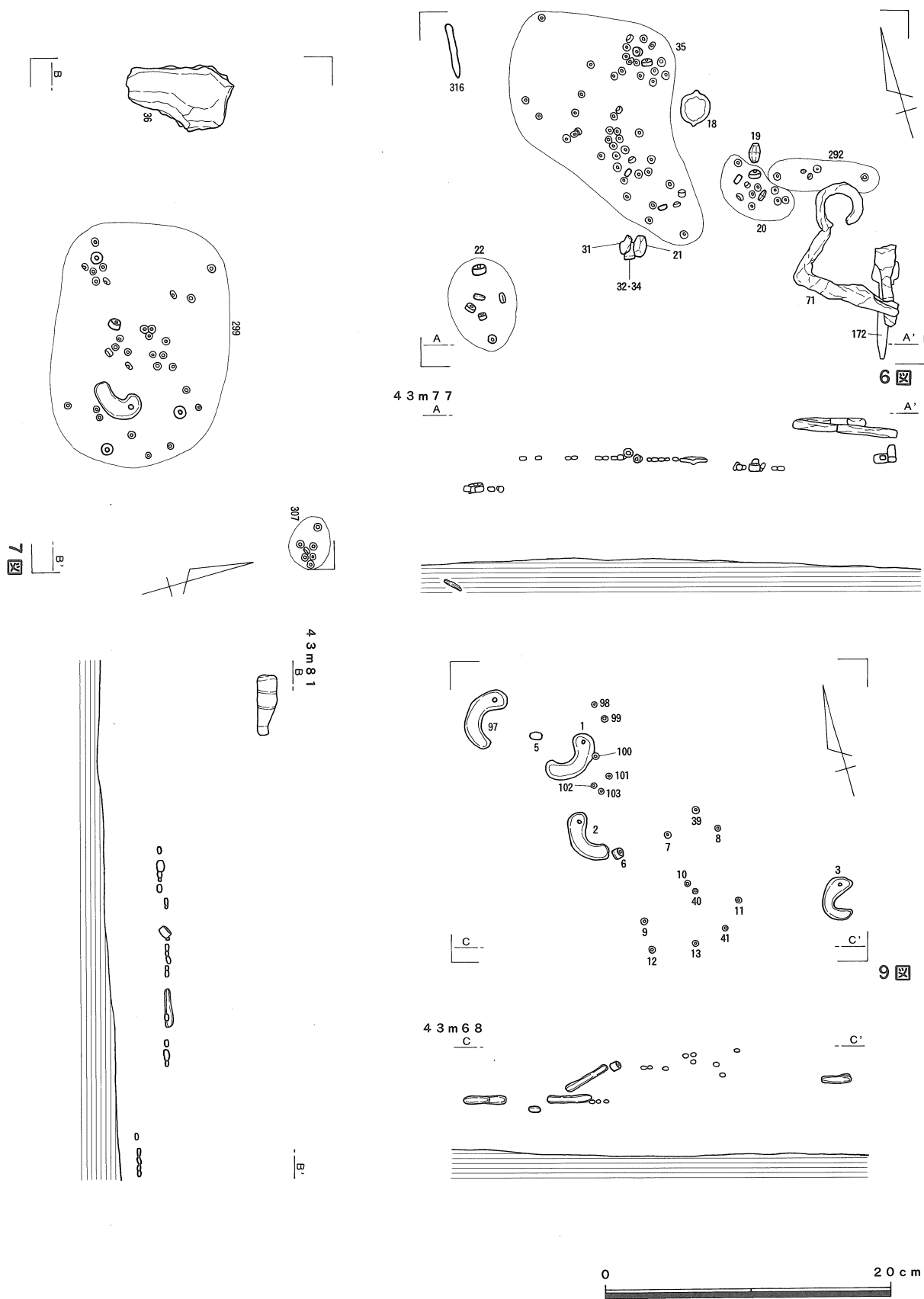
第125図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図2



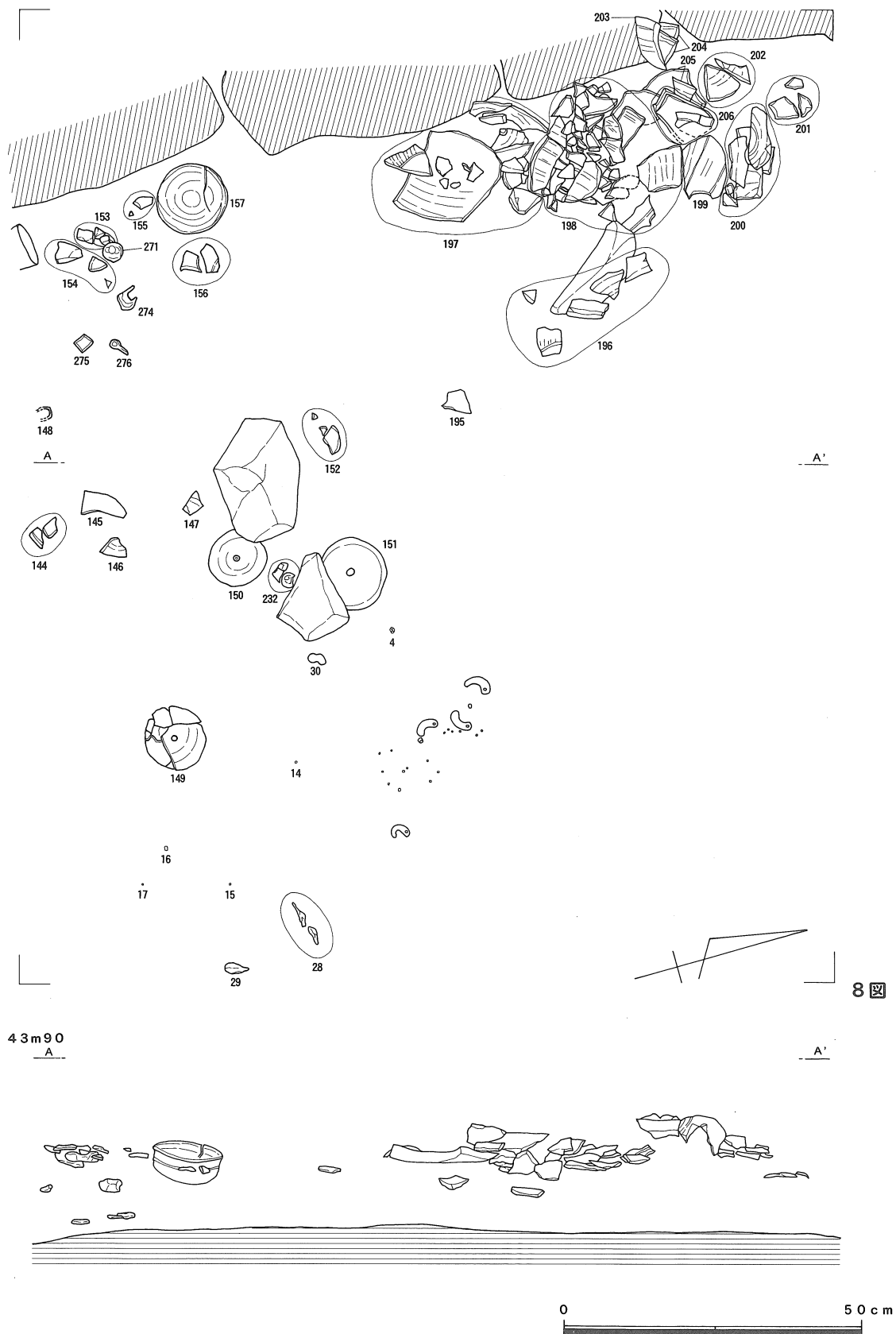
第126図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図3



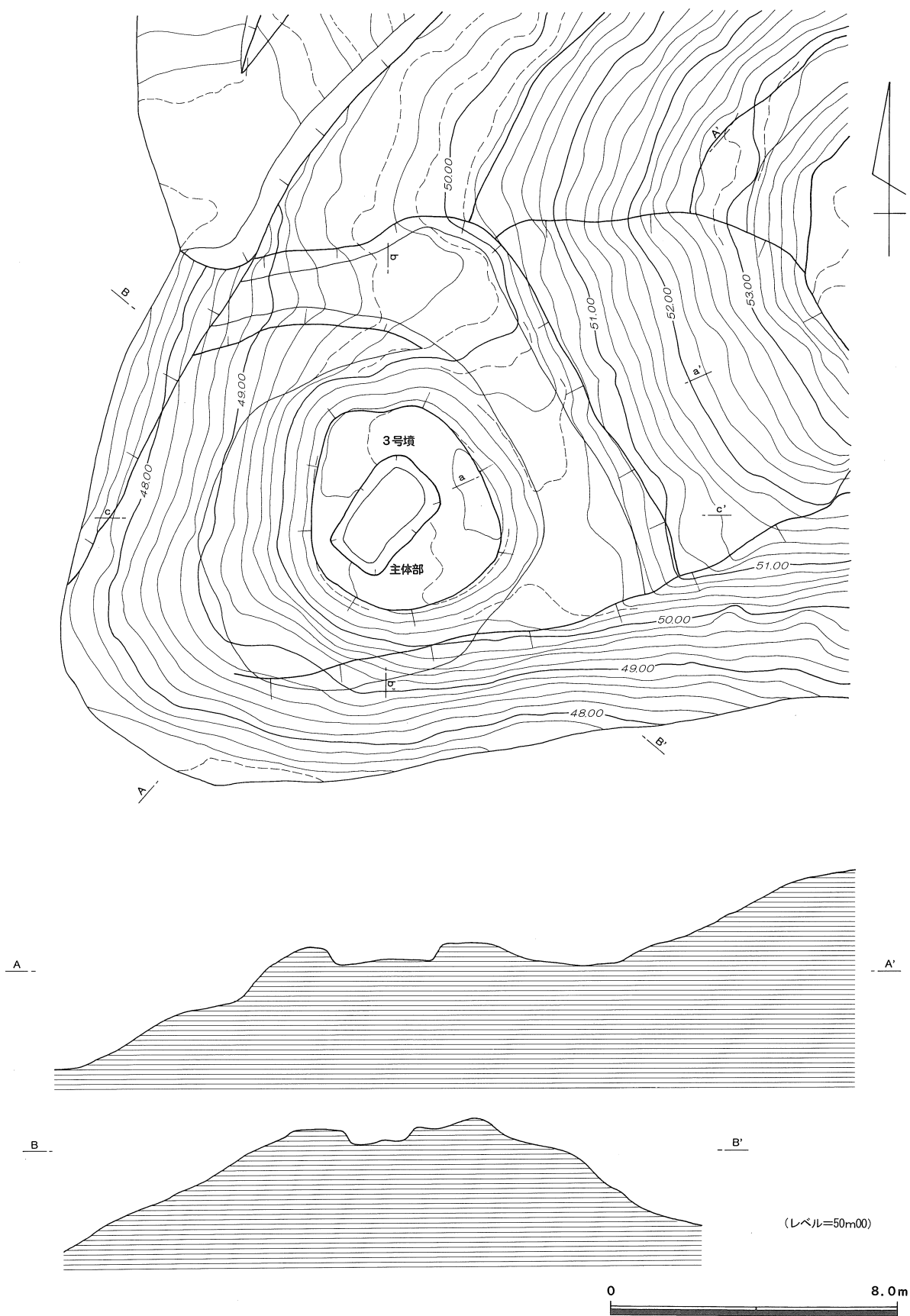
第127図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図4



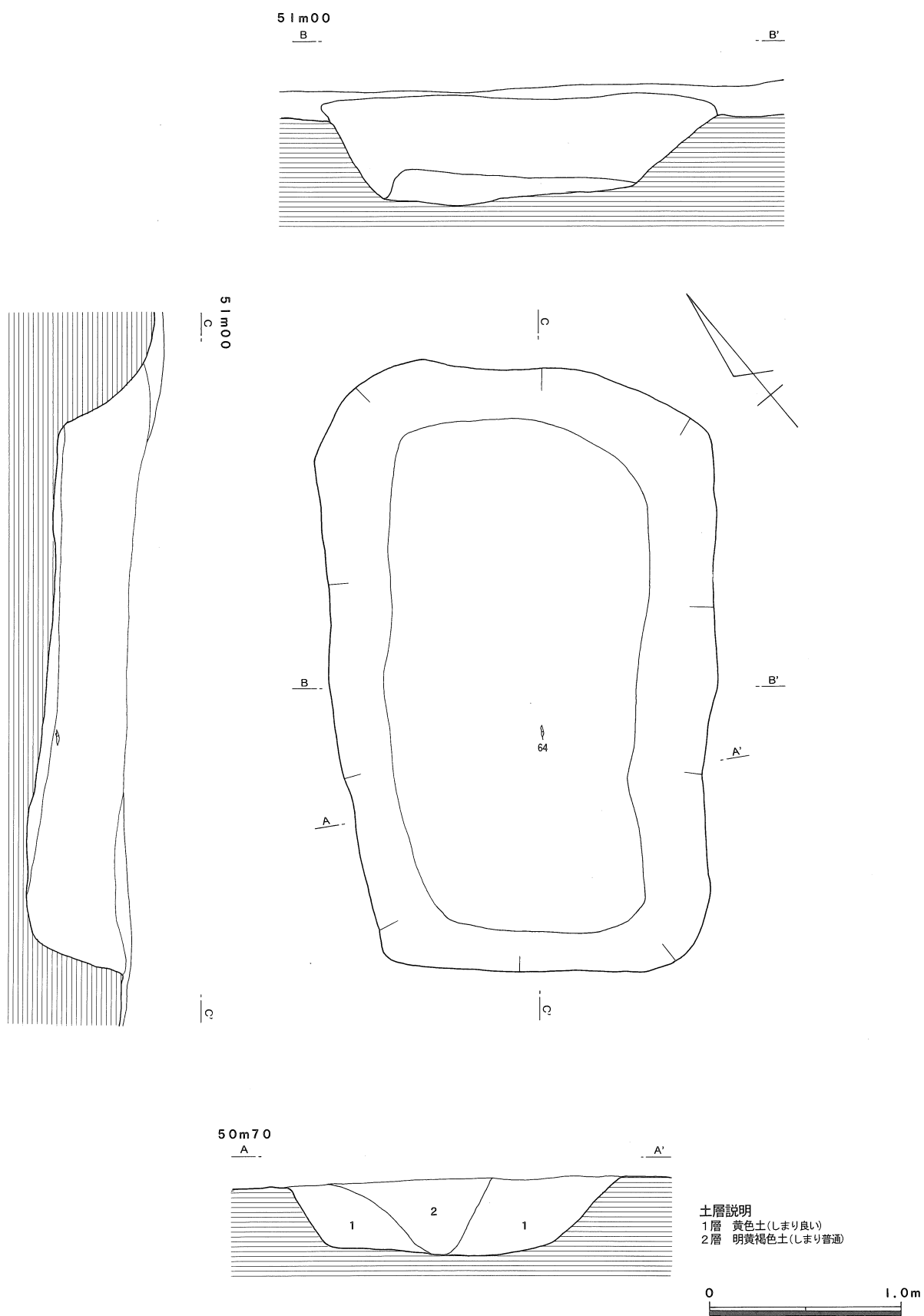
第128図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図5



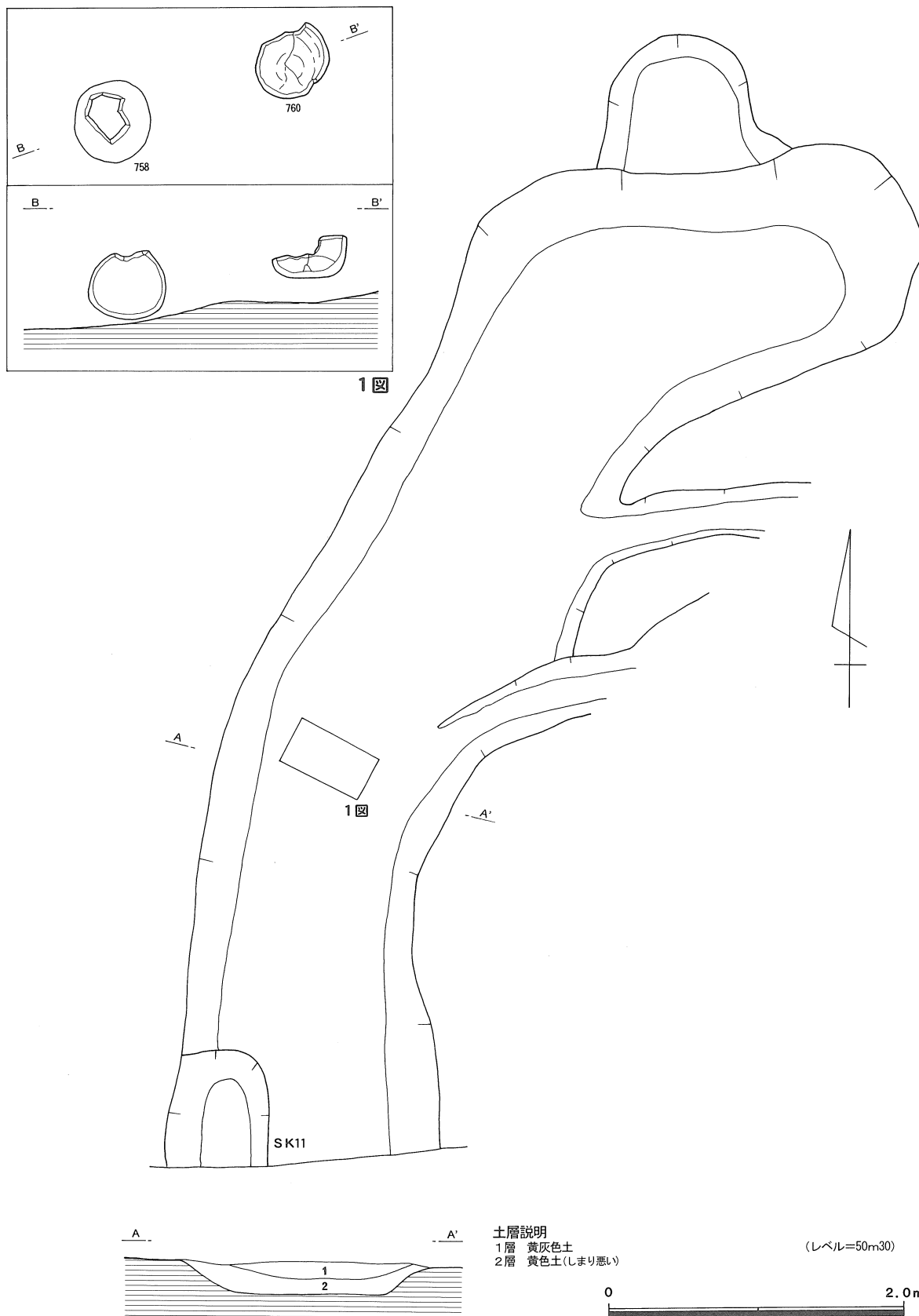
第129図 F地区2号墳主体部遺物出土状況実測図6



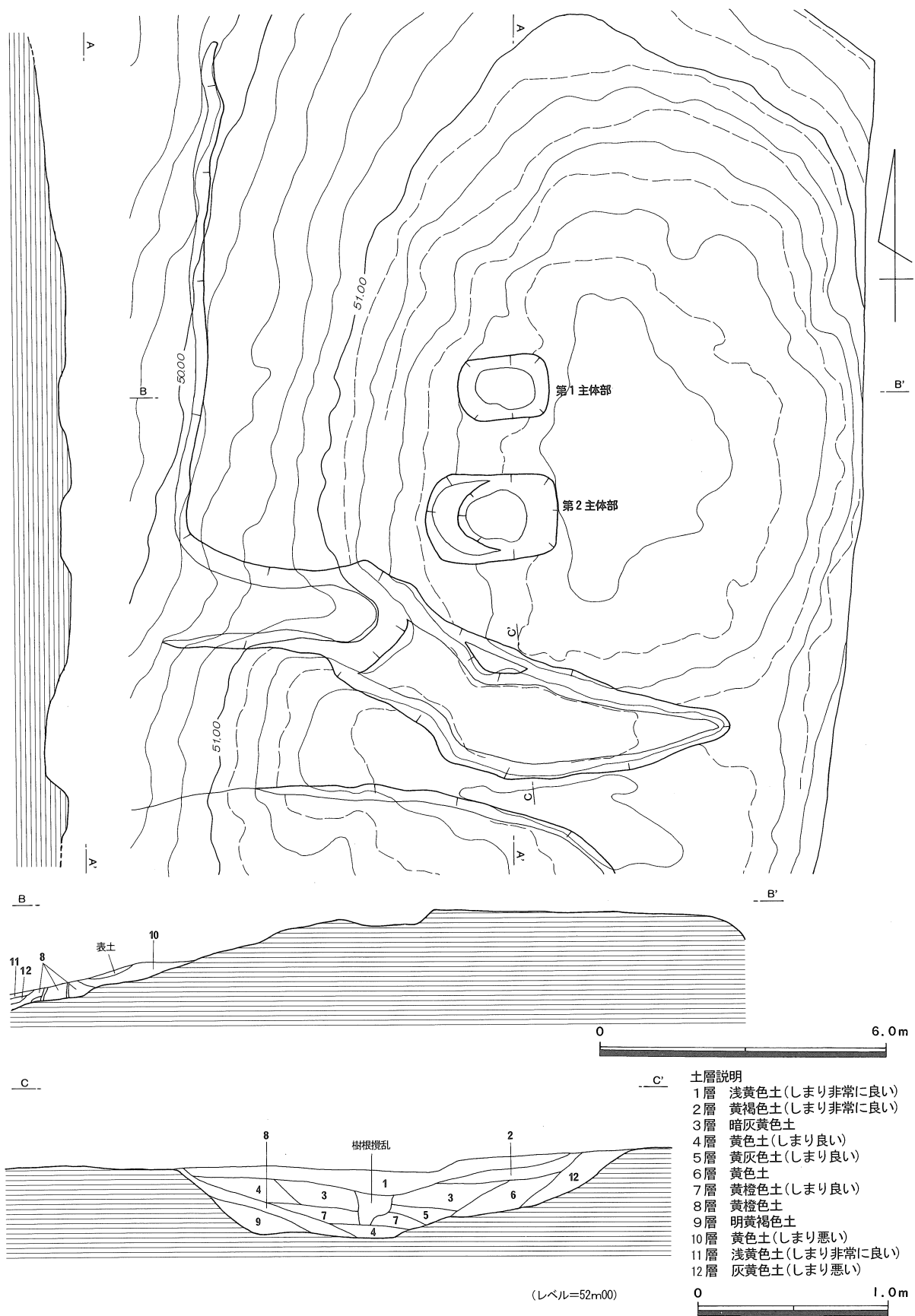
第130図 F地区3号墳墳丘実測図



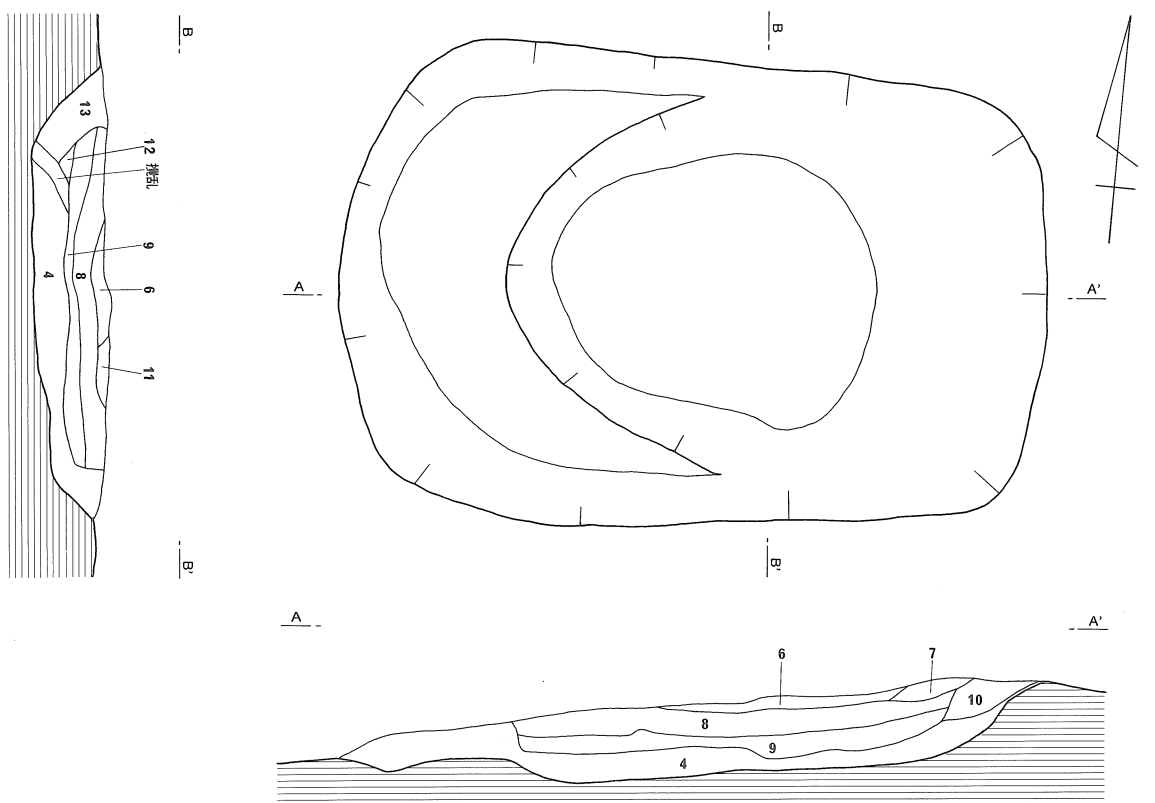
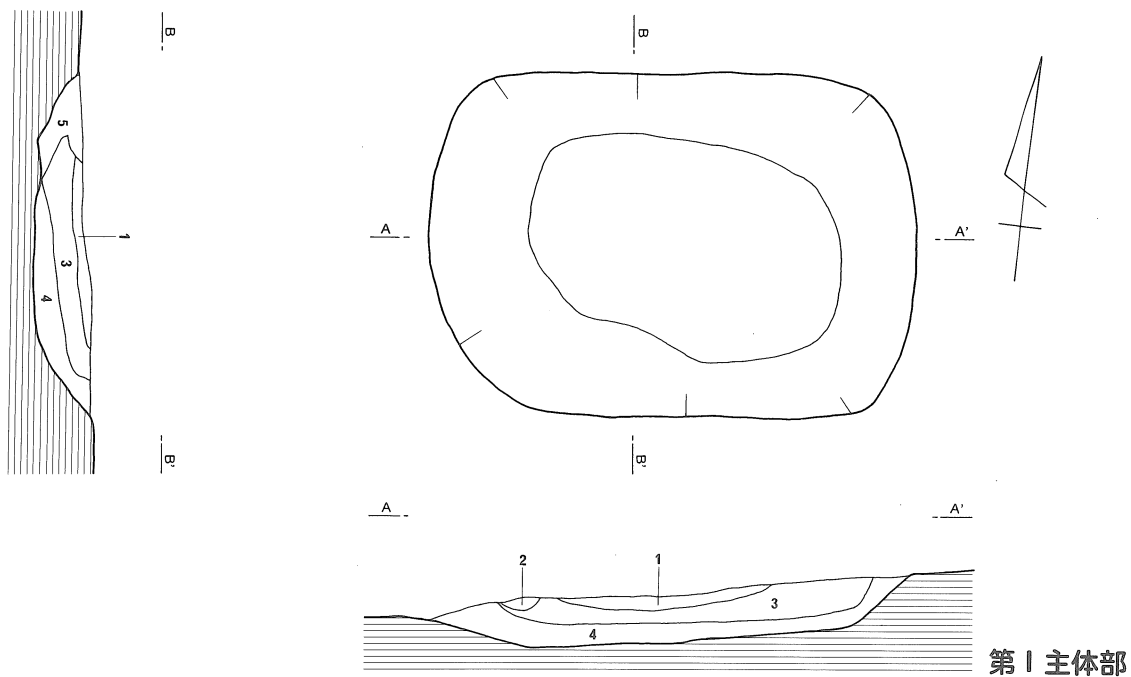
第132図 F地区3号墳主体部遺構実測図



第133図 F 地区4号墳周溝実測図



第134図 F地区1号方形周溝墓遺構実測図



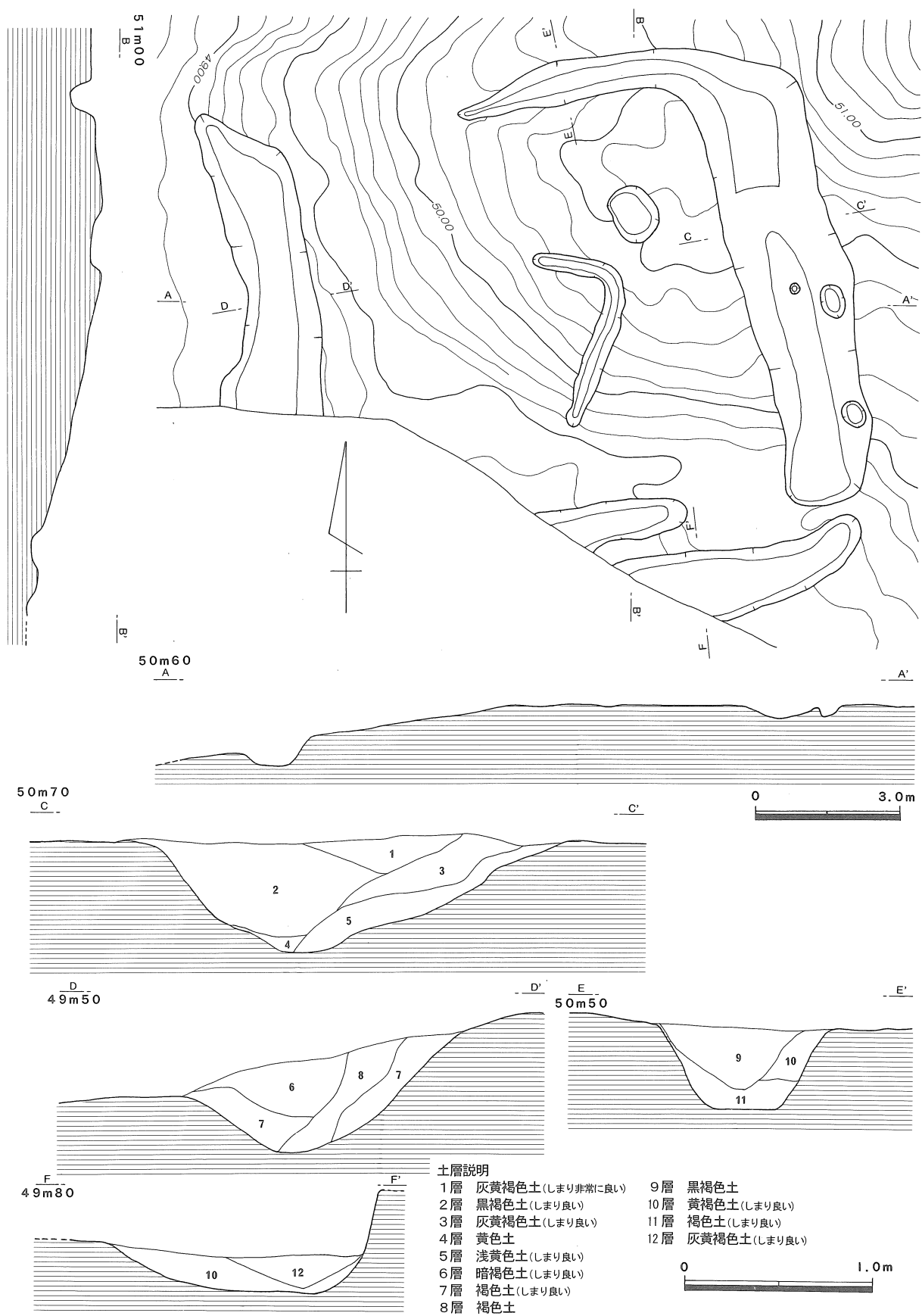
土層説明

- | | |
|--------------------|------------------|
| 1層 灰黄褐色土(しまり非常に良い) | 8層 黒色土(しまり非常に良い) |
| 2層 黄灰色土(しまり非常に良い) | 9層 暗灰黄色土(しまり良い) |
| 3層 褐灰色土(しまり良い) | 10層 黄橙色土(しまり良い) |
| 4層 黄色土(しまり良い) | 11層 灰黄褐色土(しまり良い) |
| 5層 黄橙色土(しまり非常に良い) | 12層 灰黄色土(しまり良い) |
| 6層 黄褐色土(しまり非常に良い) | 13層 黄橙色土 |
| 7層 褐灰色土(しまり非常に良い) | |

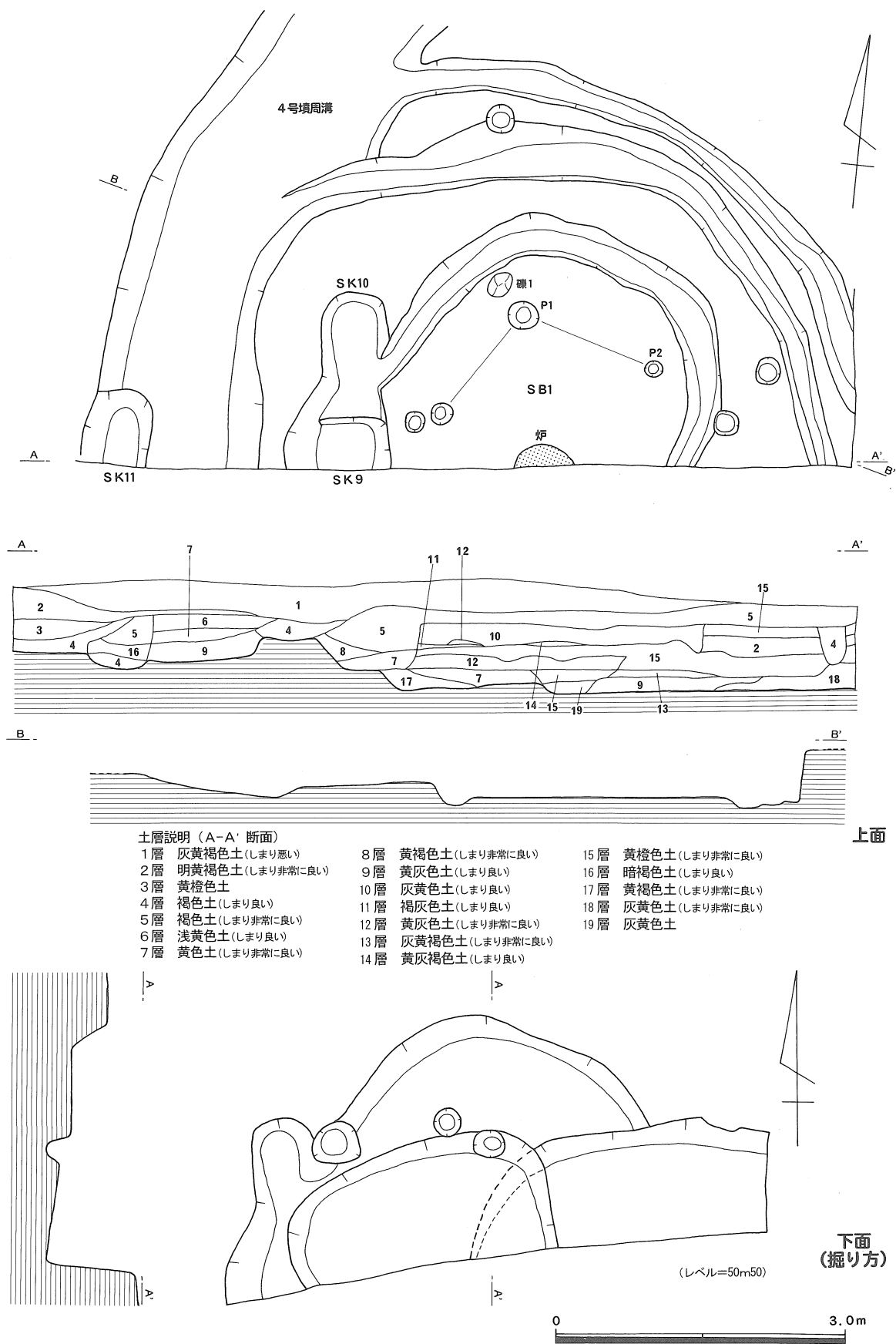
(レベル=52m00)

0 1.0m

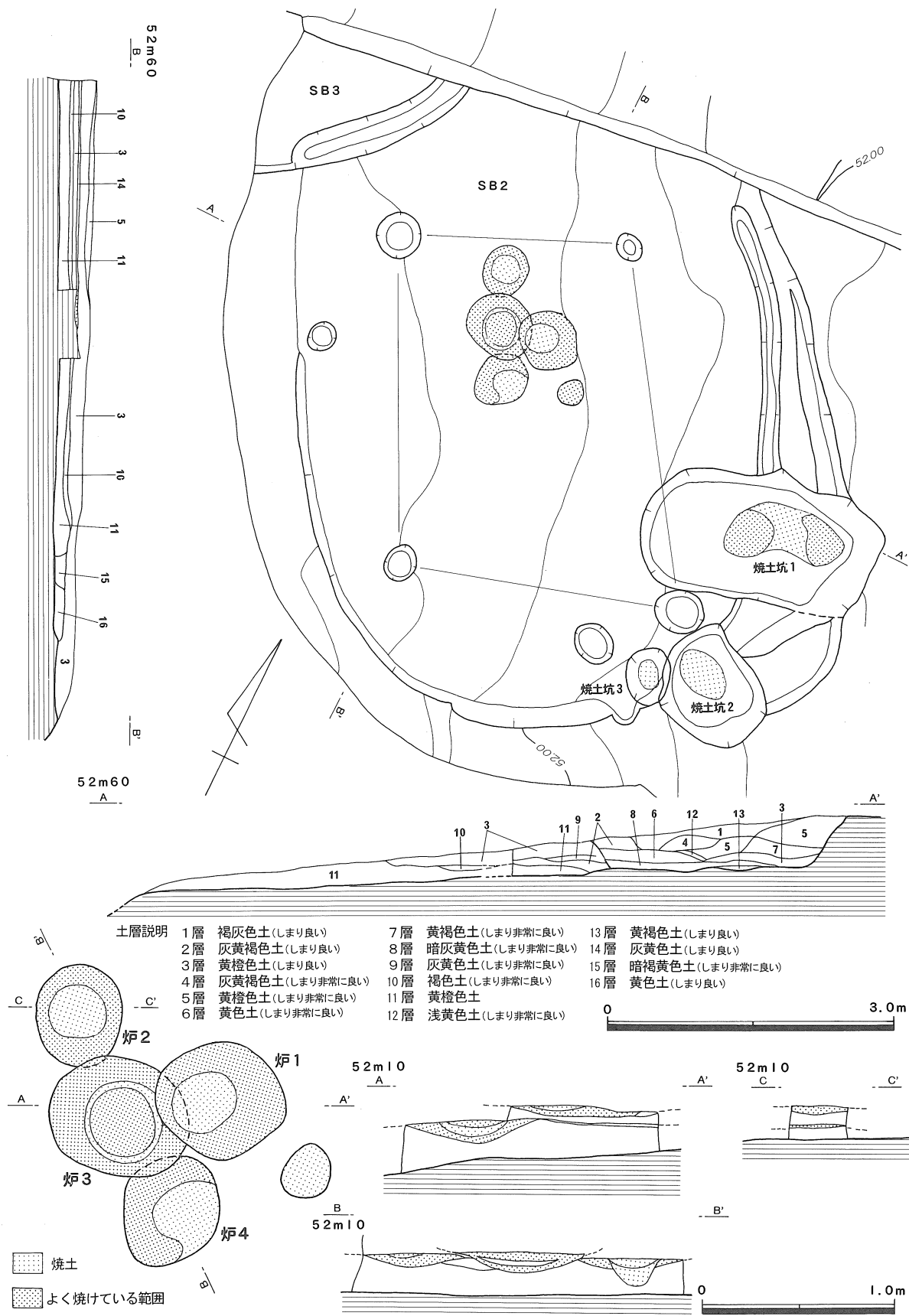
第135図 F地区1号方形周溝墓主体部遺構実測図



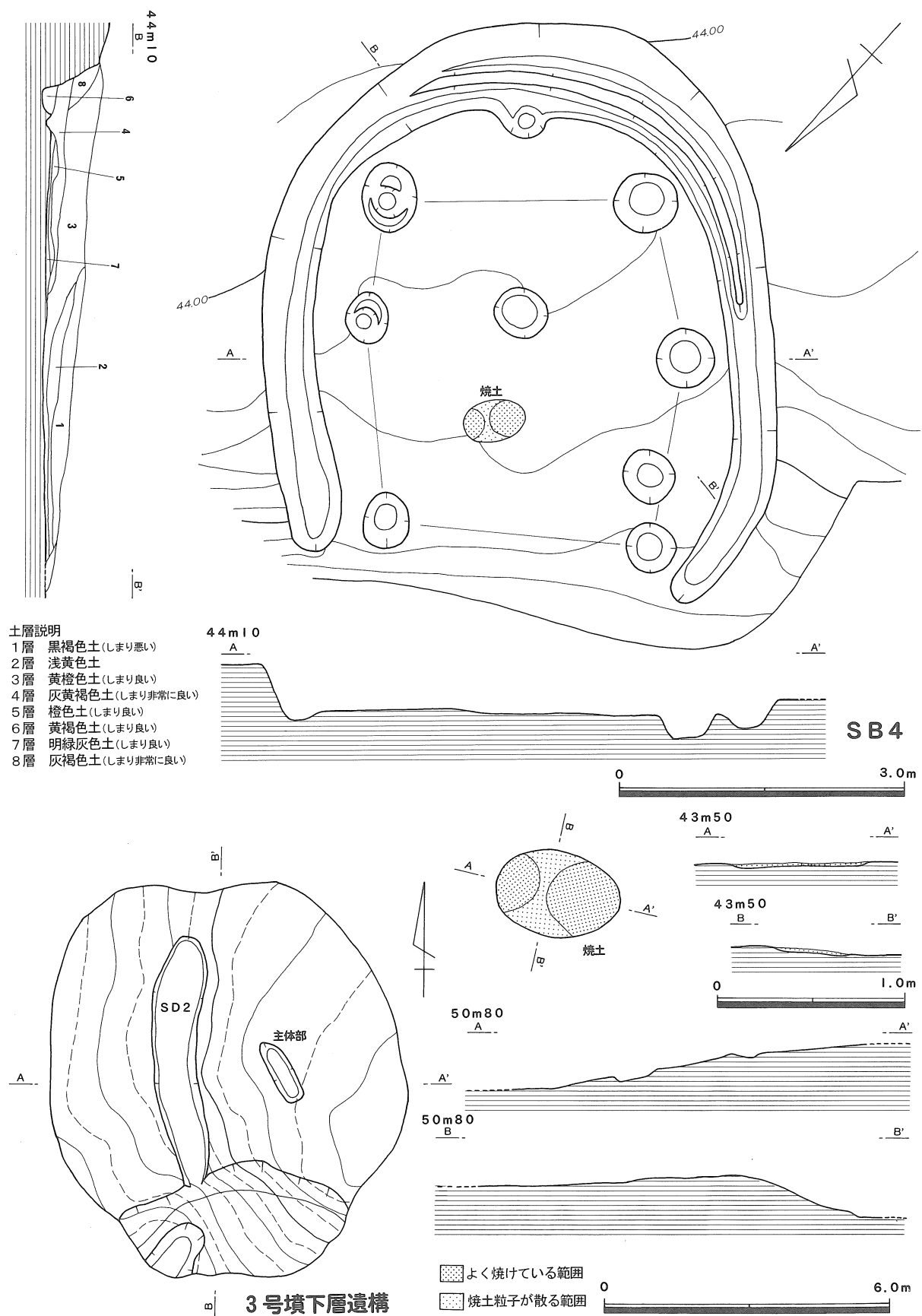
第136図 F地区2号方形周溝墓遺構実測図



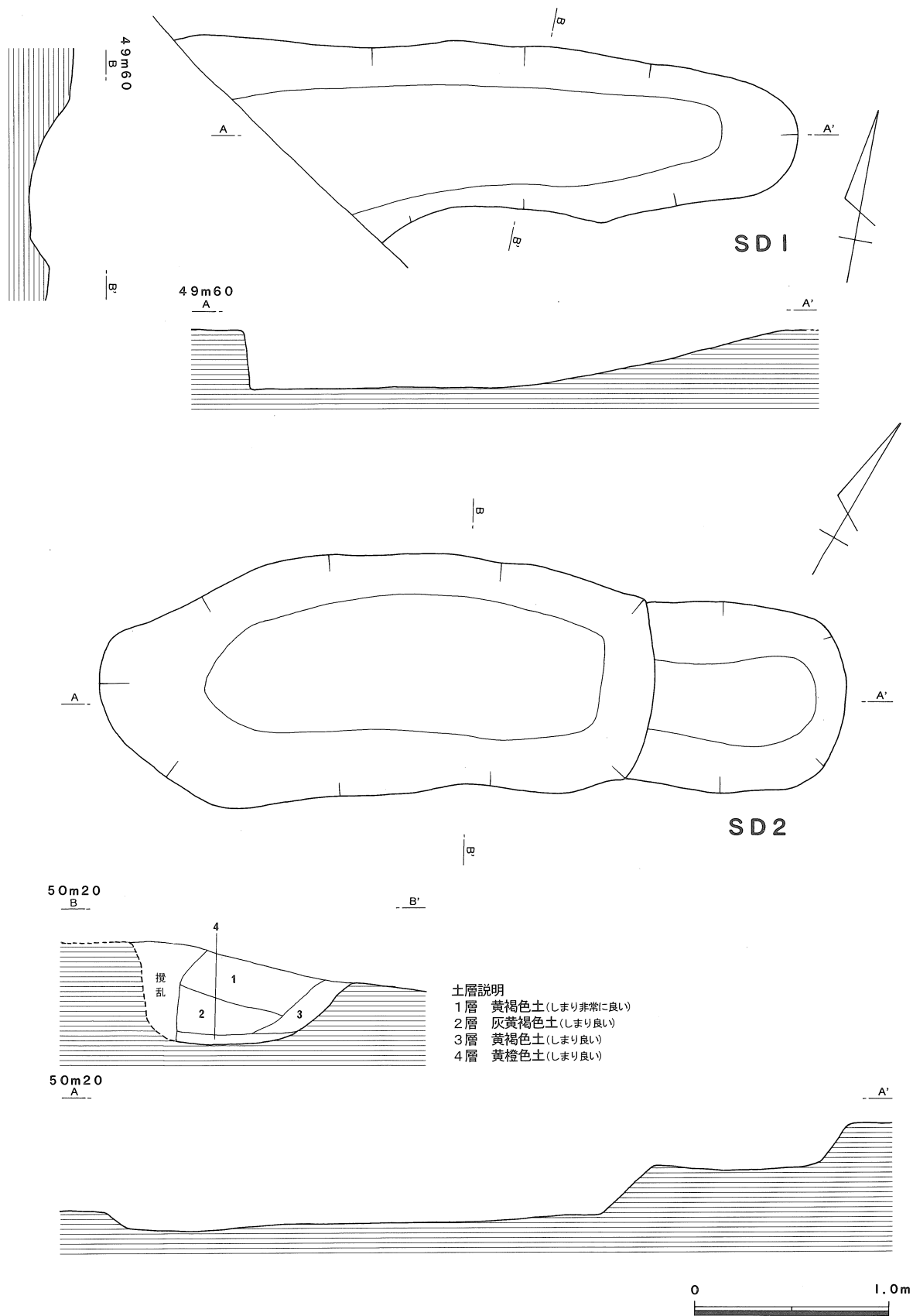
第137図 F地区SB1遺構実測図



第138図 F地区SB2・3遺構実測図

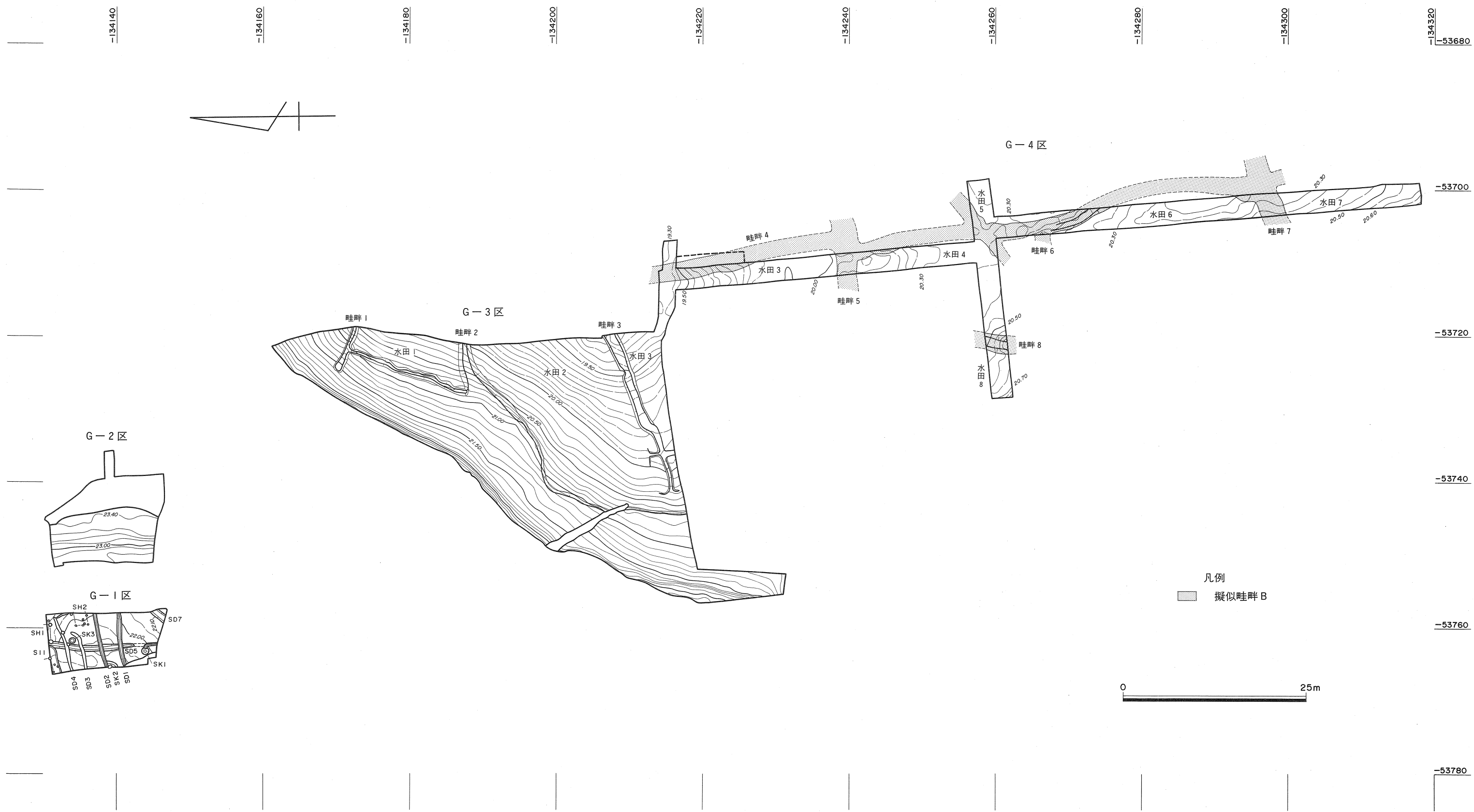


第139図 F地区SB4・3号墳下層遺構実測図

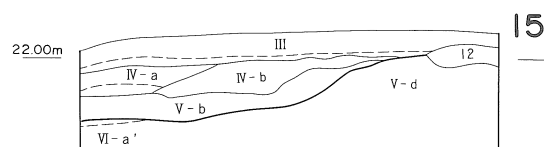
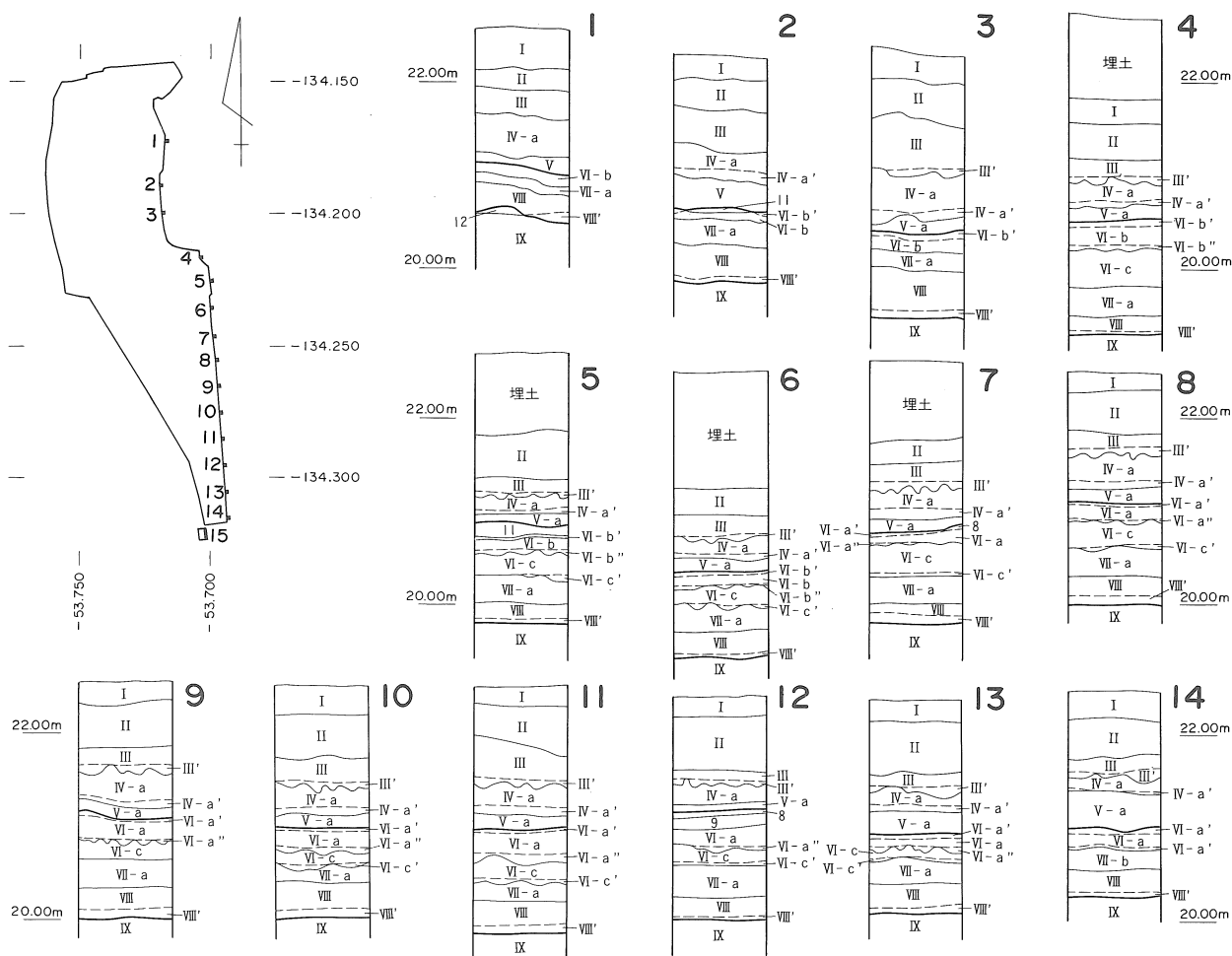


第140図 F地区SD1・2遺構実測図





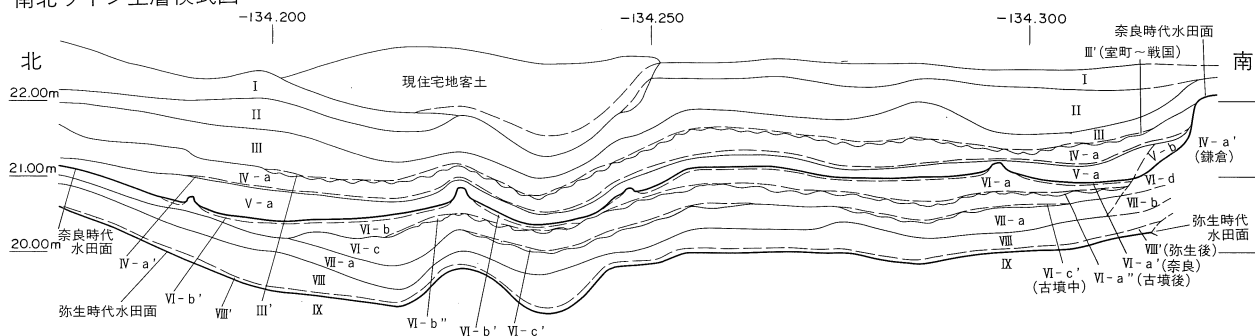
第142図 G地区（彌生）全体図



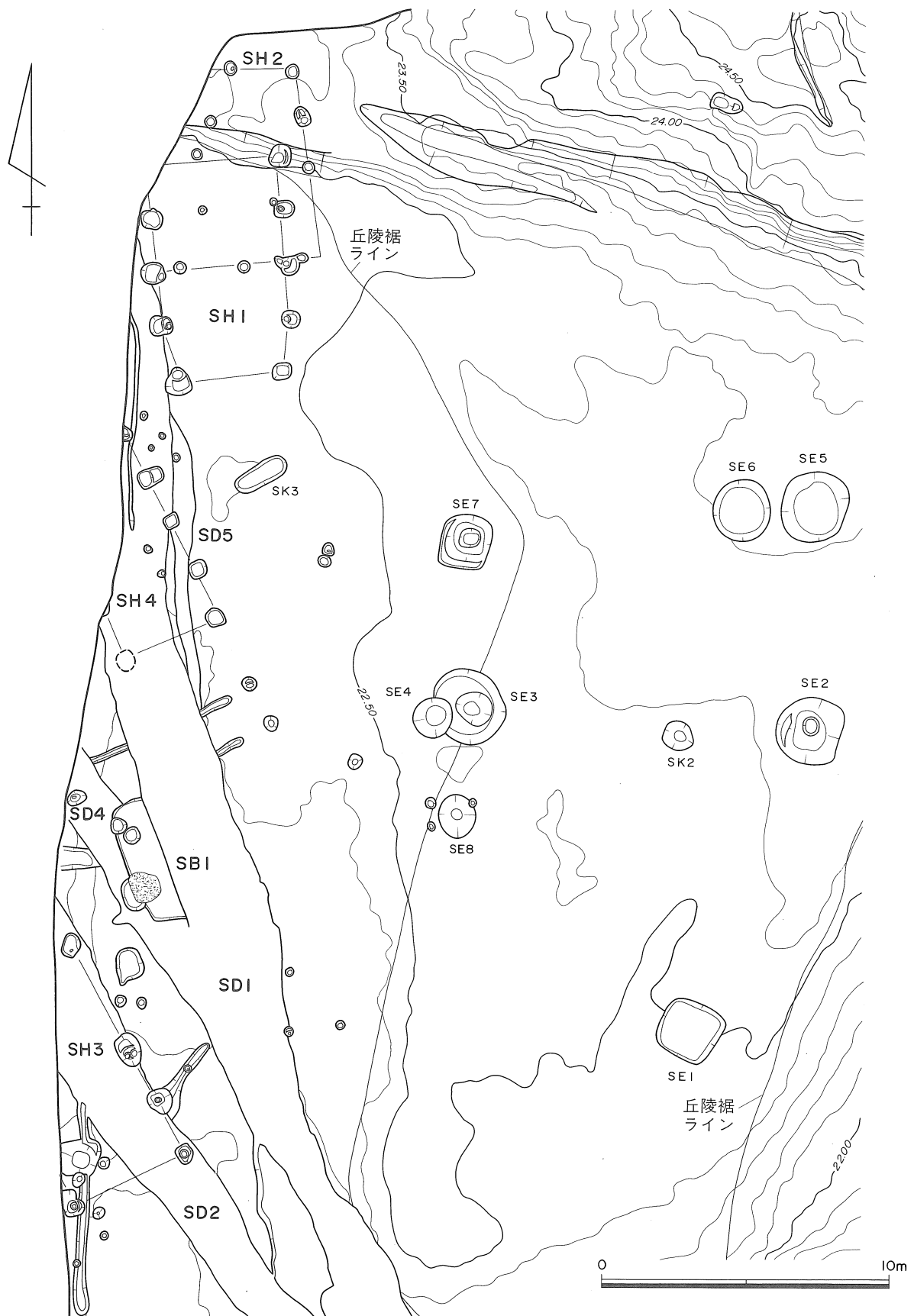
基本土層説明
 I層 褐色土（粘土質、現水田耕作土。）
 II層 暗褐色砂質粘土（砂礫・鉄分粒子を多く含む。室町～戦国期の水田耕作土か？）
 III層 暗褐色粘土（室町～戦国期の遺物含む。）
 III'層 暗褐色粘土（IV層の暗灰色粘土ブロックを多く含む。室町～戦国期の水田耕作土か？）
 IV-a層 暗灰色粘土（白色粘土ブロックを少量含む場合がある（1～5地点）。鎌倉時代の遺物含む。）
 IV-a'層 暗灰色粘土（V層の黒褐色有機質土ブロックを多く含む。1～5地点では白色粘土ブロックを多く含む。鎌倉時代の水田耕作土か？）
 IV-b層 暗灰色粘土（黒色土粒子を含む。）
 V-a層 黒褐色有機質土（植物遺体を多く含む。上層は黒色が強く平安時代、下層は明るい層で奈良時代の遺物含む。）
 V-b層 黒褐色有機質土（VI-d層の暗灰色粘土ブロック多量に含む。）

VI-a層 明灰色粘土（やや砂質だが粘性はある、VI-c層の明灰色粘土をブロック状に含む。古墳時代後期の遺物含む。）
 VI-a' . b' . d'層 明・暗灰色粘土（茶褐色粘土ブロック含む。奈良時代の水田耕作土。）
 VI-a'' . b' . d'層 明・暗灰色粘土（下層のブロック土を含む。古墳時代後期の水田耕作土か？）
 VI-b層 明灰色粘土（黒褐色粘土ブロックを多く含む層で1～6地点まで存在する。古墳時代後期の遺物含む。）
 VI-c層 暗灰色粘土（植物遺体を多く含む。古墳時代中期の遺物含む。）
 VI-c'層 暗灰色粘土（VII-a層の黒色有機質土ブロックを含む。古墳時代中期の耕作土か？）
 VI-d層 暗灰色粘土（粘性強く、植物遺体を含む。）
 VII-a層 黒色有機質土（植物遺体を多く含む。上層は灰白色粘土の薄い層が2～3枚見られ古墳時代前期、下層は黒色が強く粘土質で弥生時代後期の遺物を含む。）
 VII-b層 黒色有機質土（上層の薄い灰色粘土がなくなり、下部の黒色が強い粘土質になる。）
 VIII層 黒色粘土（IX層の明灰色粘土ブロックを含む。弥生中期末～後期初頭の遺物含む。）
 VIII'層 黒色粘土（IX層の明灰色粘土ブロックを多量に含む。弥生中期末～後期初頭の遺物含む。）
 IX層 明灰色粘土（粘性の強い層、植物遺体を少量含む。）
 ※数字（8, 9, 11, 12）は畦畔土層説明と同じ。

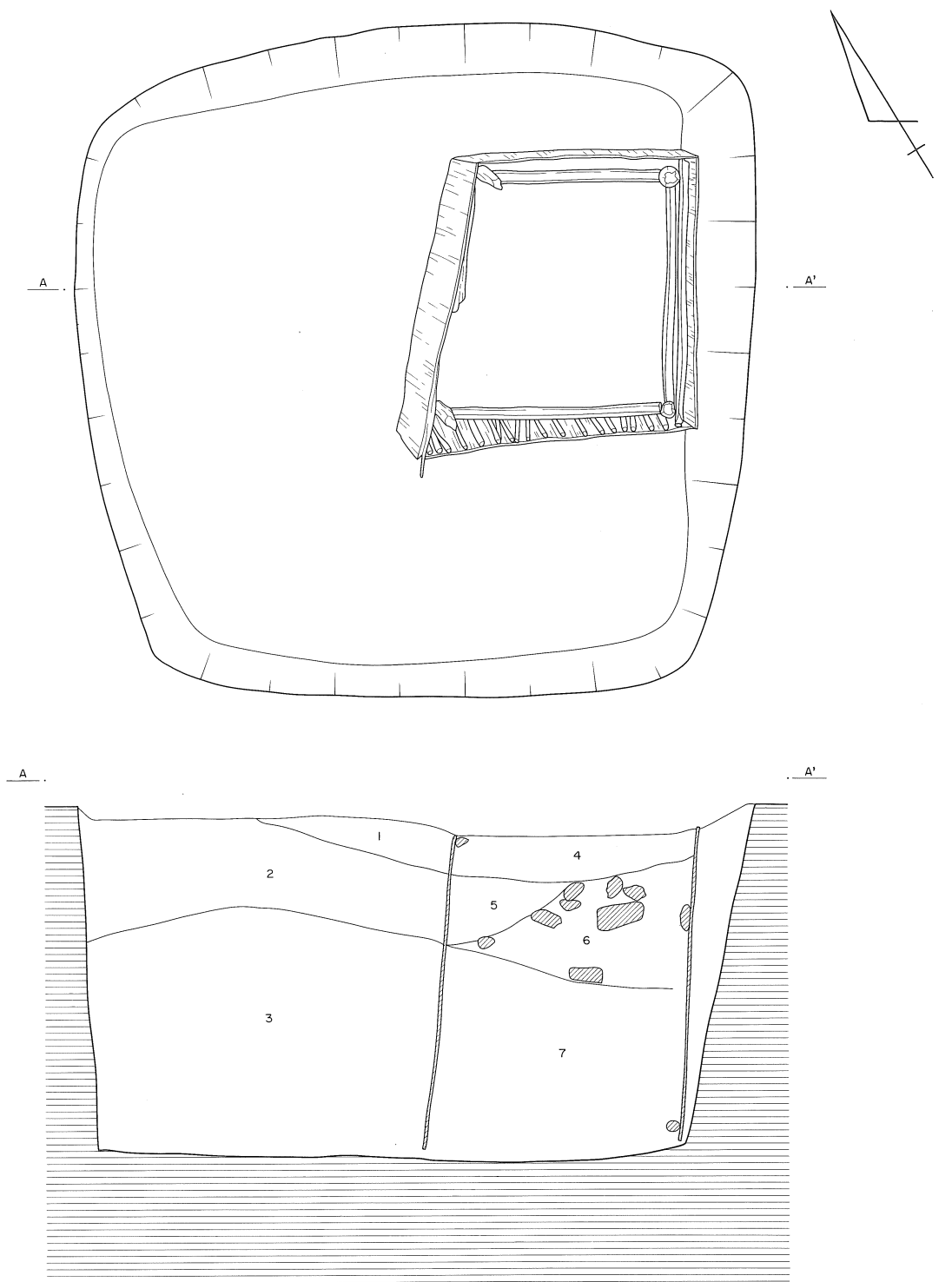
南北ライン土層模式図



第143図 G-3・4区基本土層断面図



第144図 G地区SH1~4・SB1・SE1~8位置図



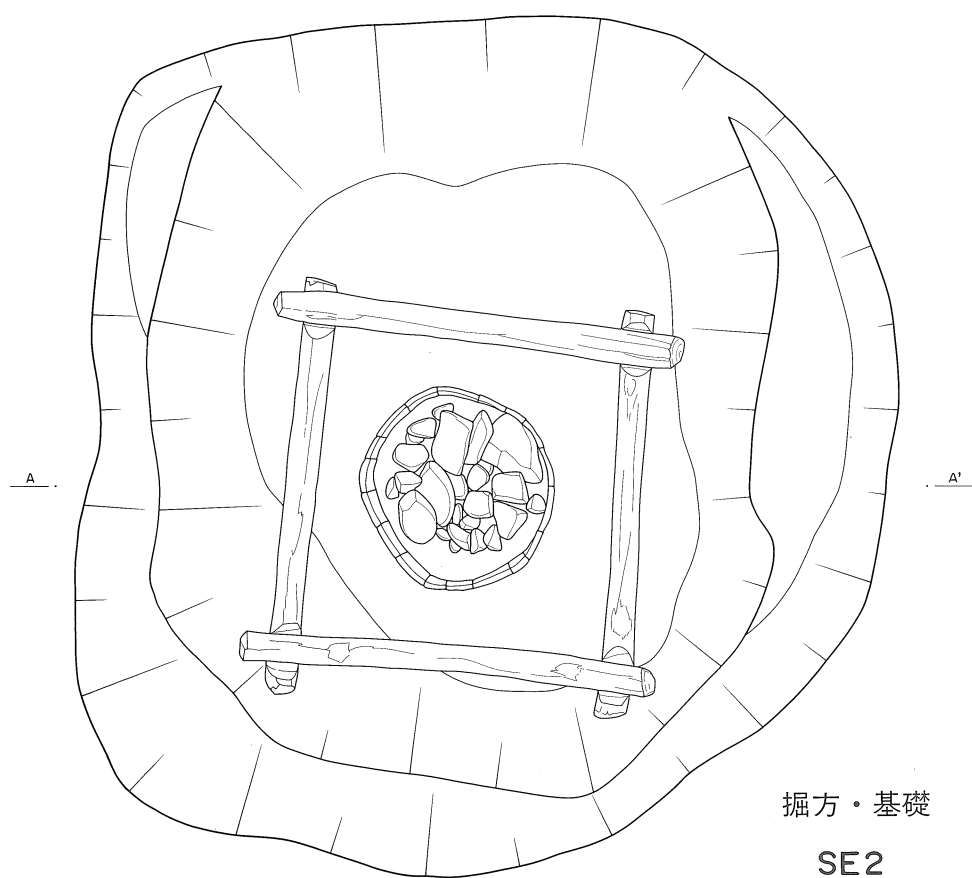
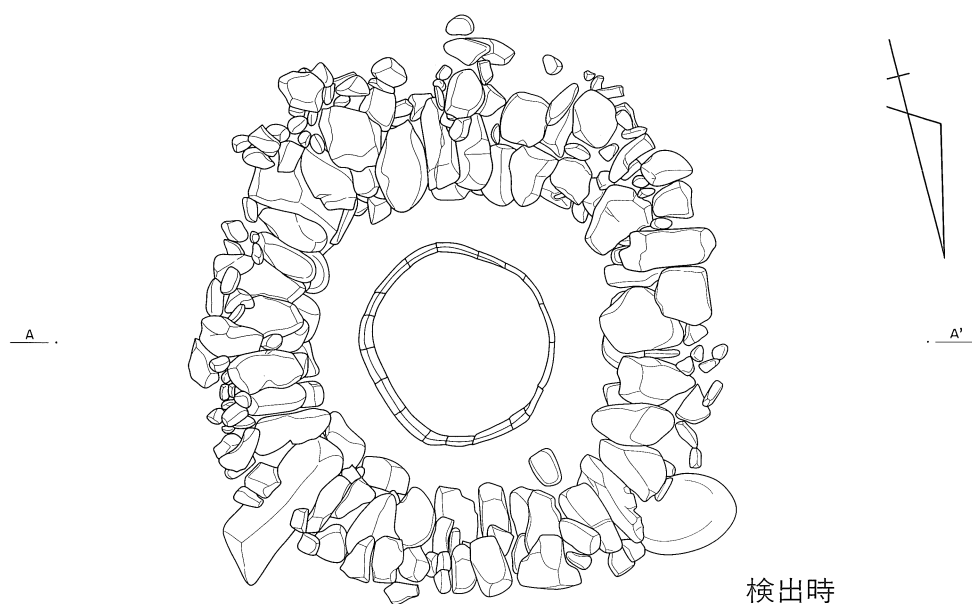
土層説明

- 1層 黄灰色粘質土 (1 cm程度の礫を多く含む。)
- 2層 淡黄灰色砂質土
- 3層 青緑灰色砂質土
- 4層 灰色粘質土
- 5層 淡灰色粘質土
- 6層 灰色粘質土 (10cm程度の礫を多く含む。)
- 7層 暗灰色砂質土

SE 1

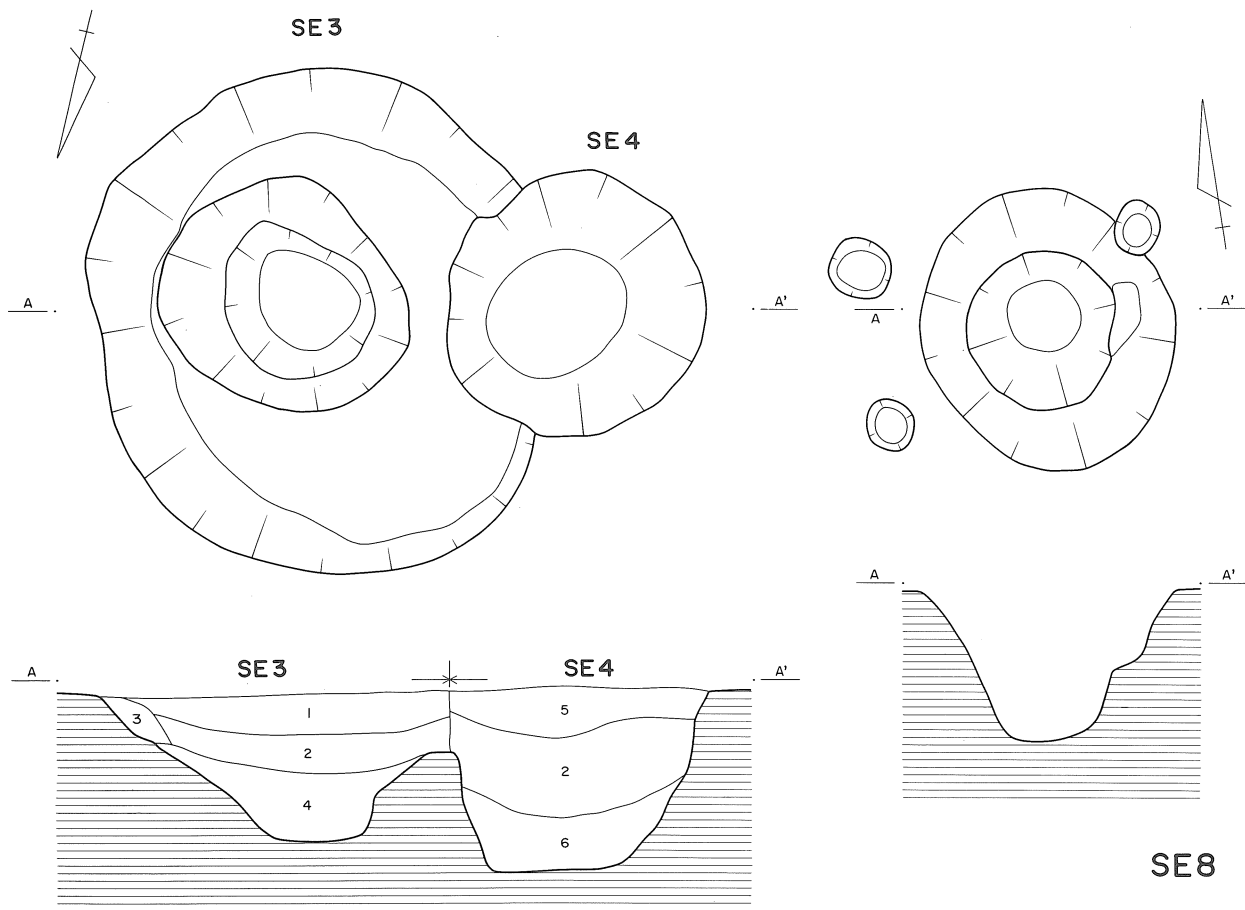
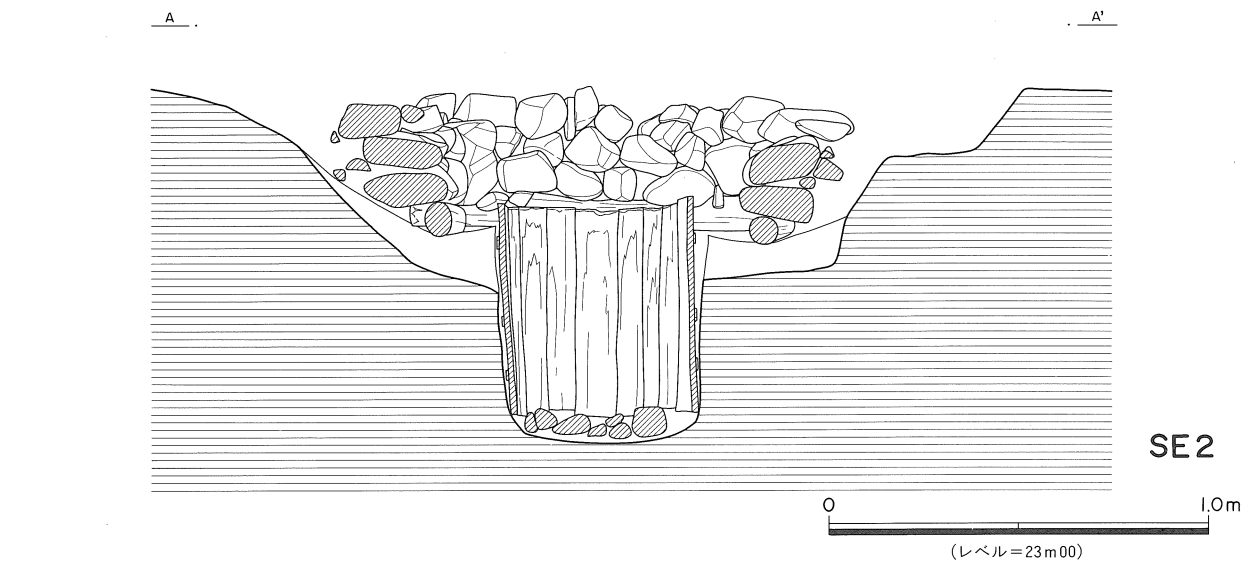
0 1.0m
(レベル = 22 m 60)

第145図 G地区SE1遺構実測図



0 1.0m

第146図 G地区S E2遺構実測図

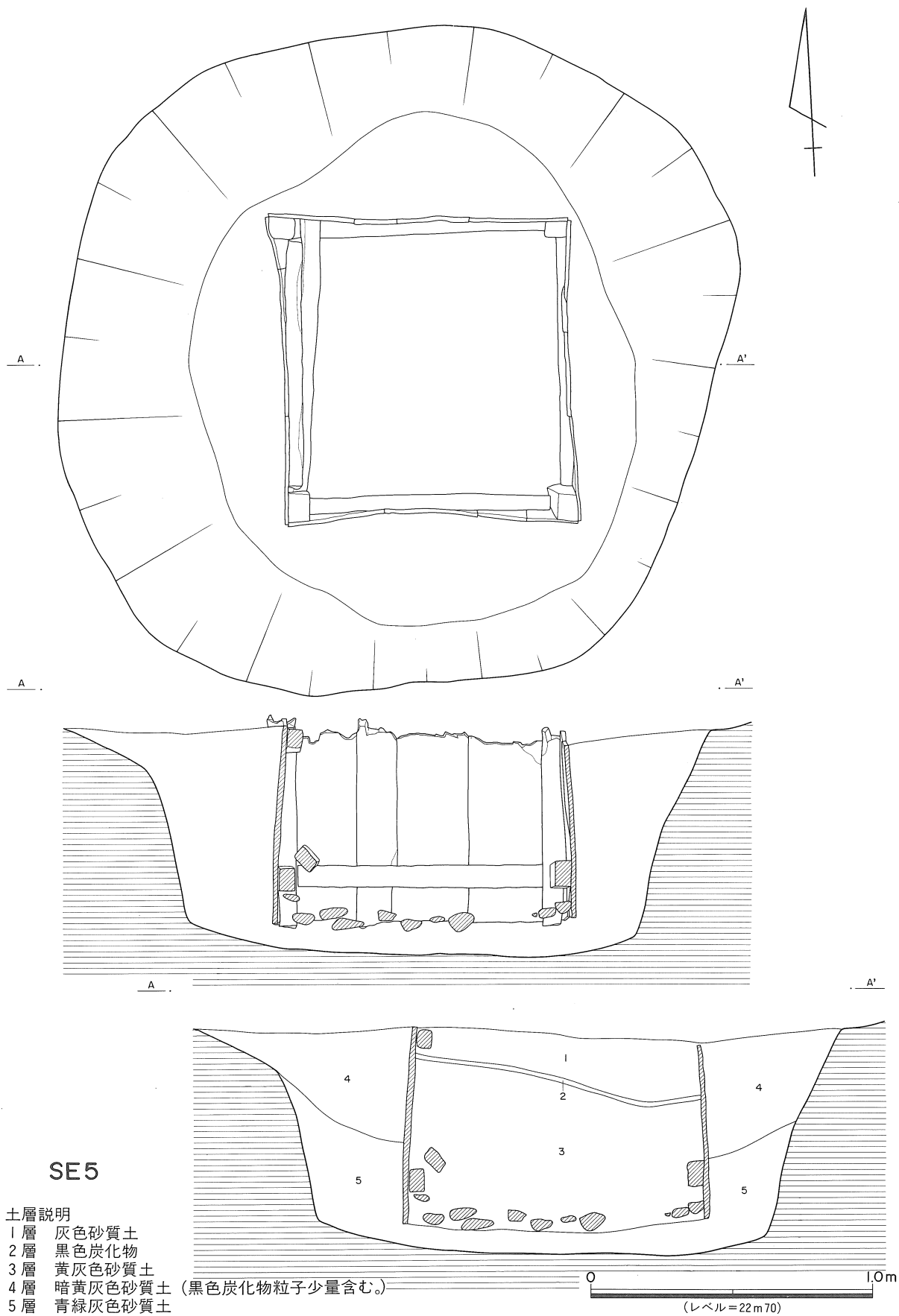


土層説明

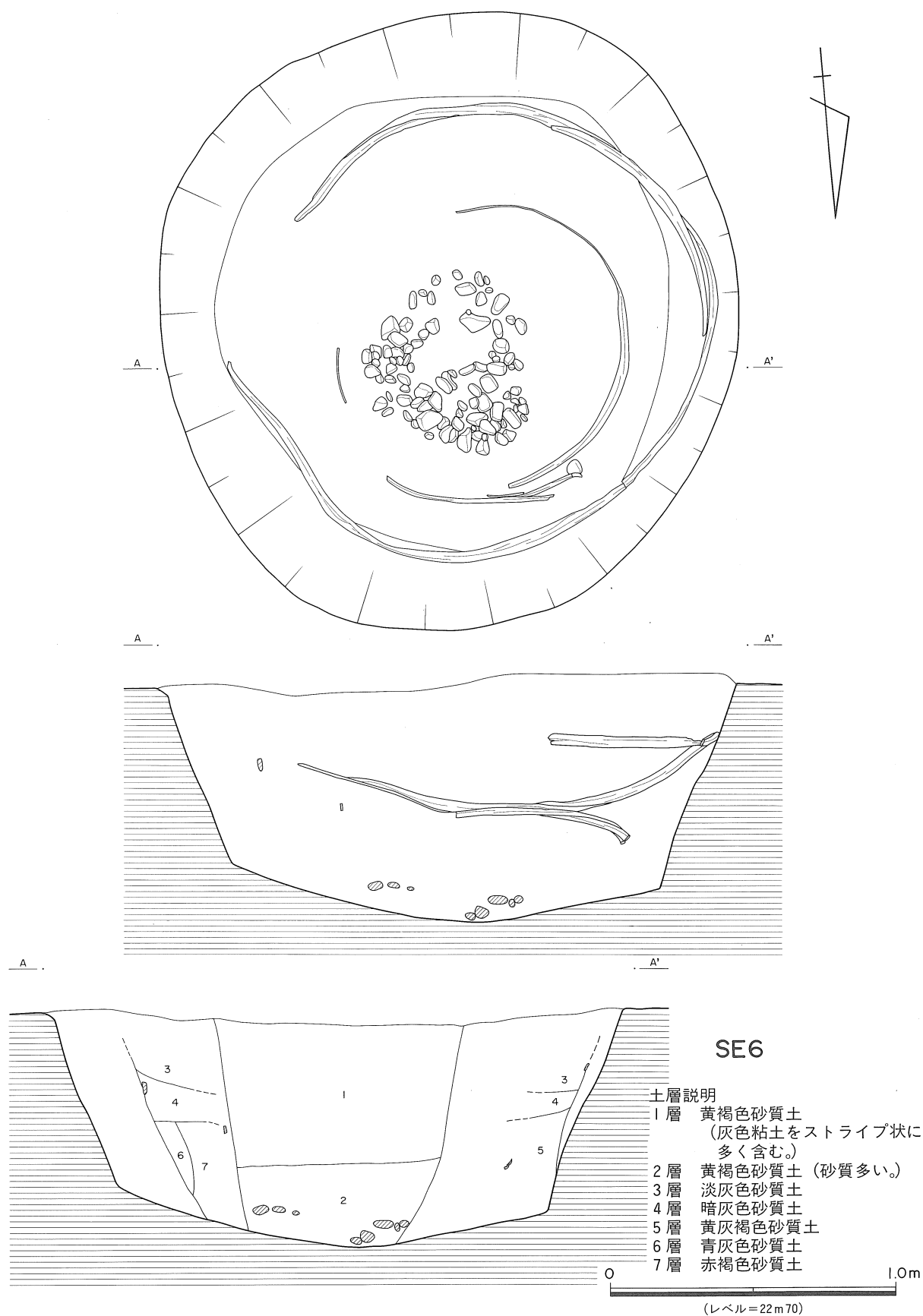
- 1層 暗灰色粘土 (砂礫多く含む。)
- 2層 暗灰色粘土 (砂質ブロック含む。)
- 3層 暗灰色粘土 (砂多く含む。)
- 4層 暗灰色粘土 (粘性強い、木片多く含む。)
- 5層 灰色粘土 (砂礫多く含む。)
- 6層 暗灰色粘土 (礫、砂質ブロック多く含む。)

SE3.4

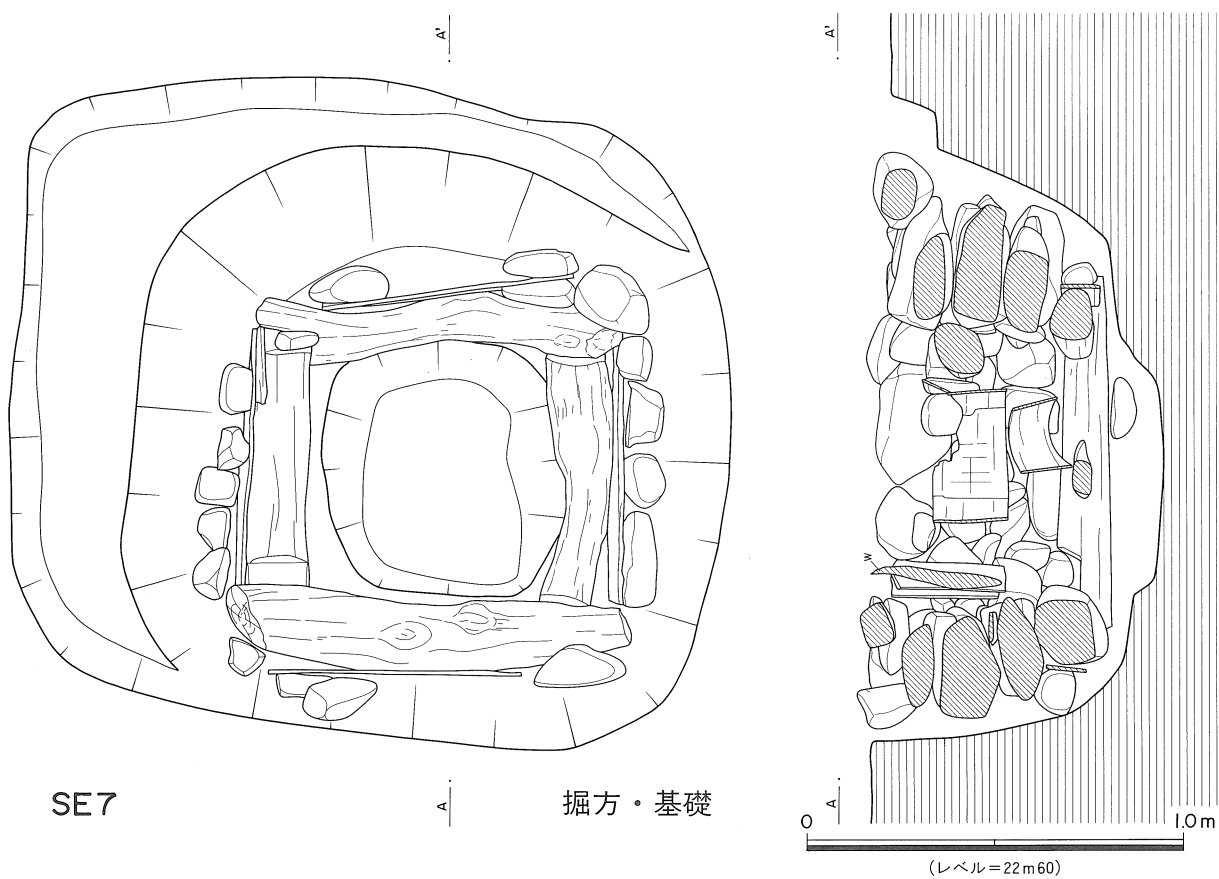
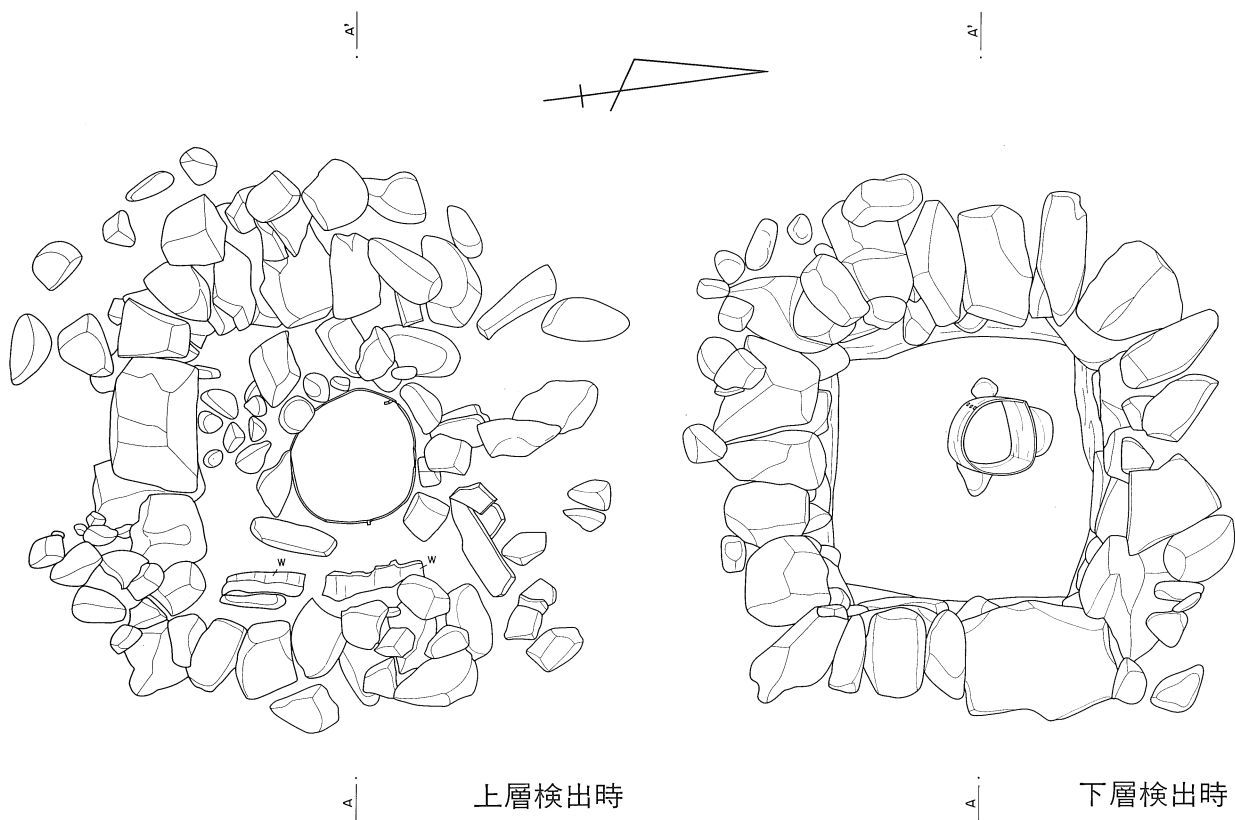
第147図 G地区SE2～4・8遺構実測図



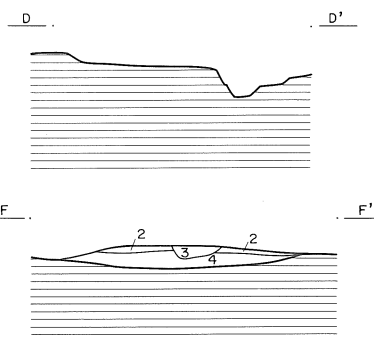
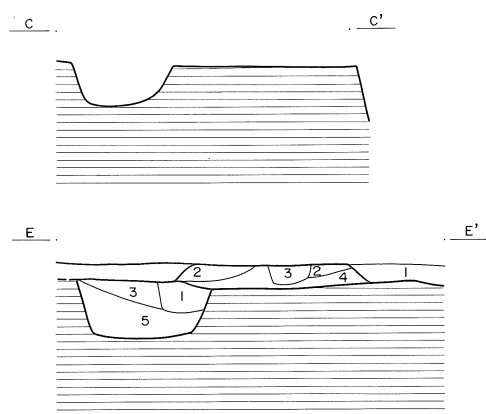
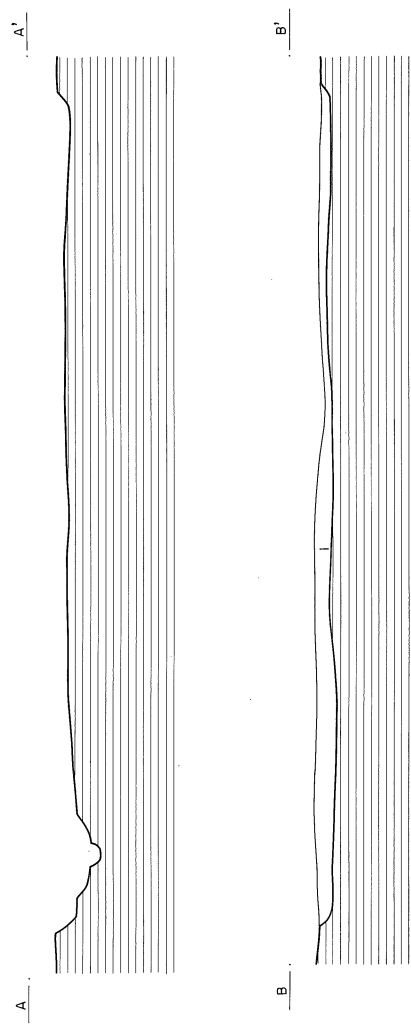
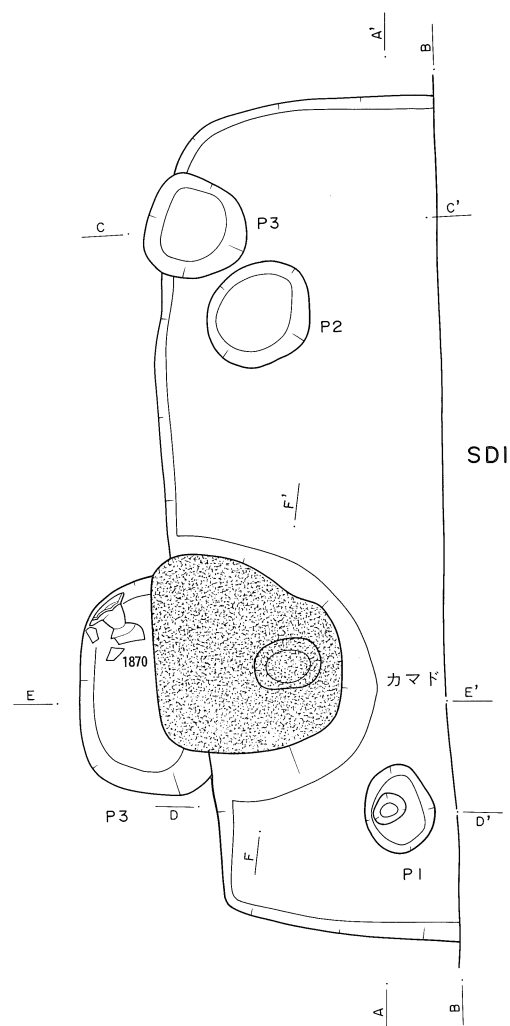
第148図 G地区S E5遺構実測図



第149図 G地区S E6遺構実測図



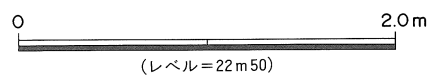
第150図 G地区S E7遺構実測図



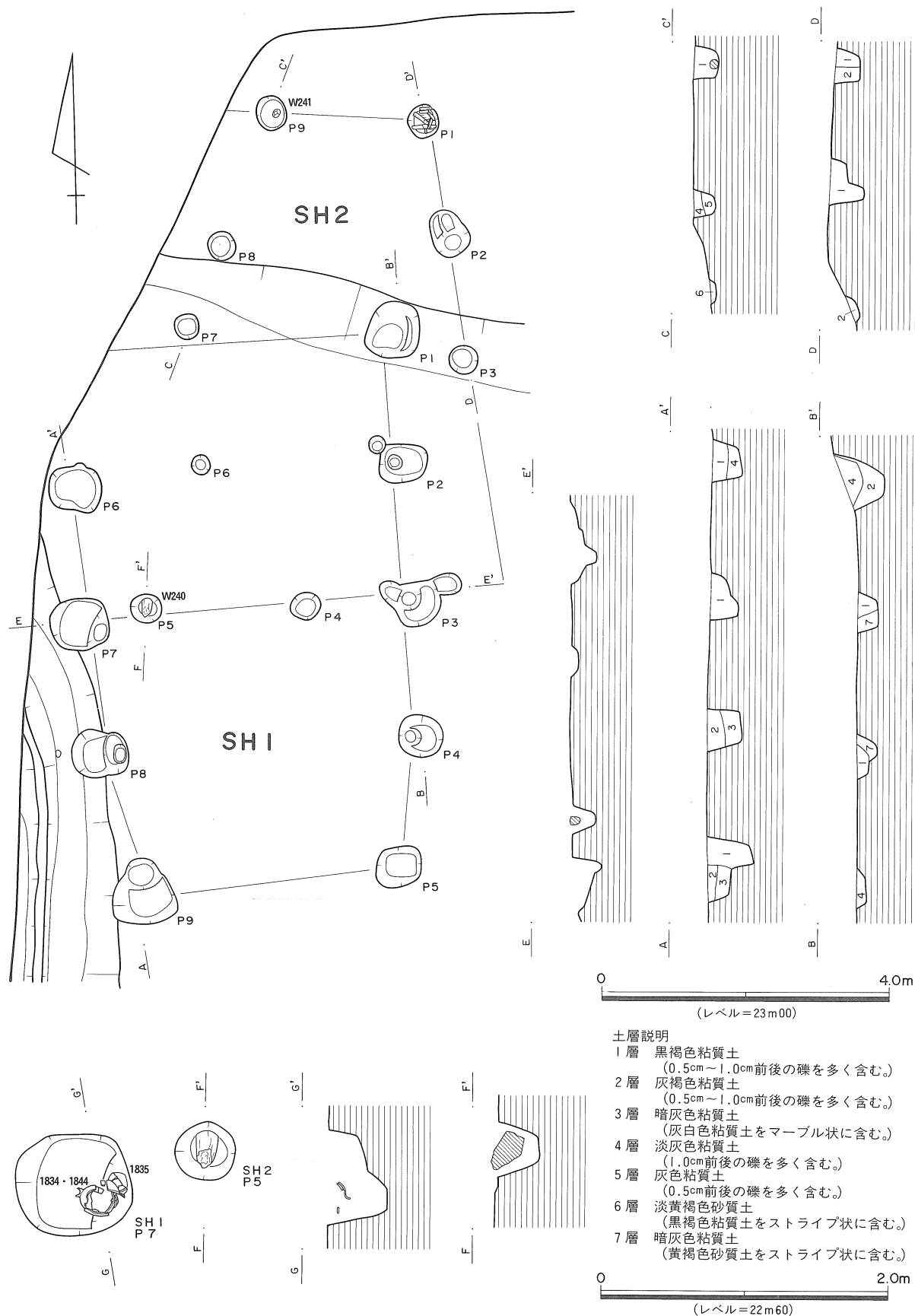
土層説明

- 1層 暗灰色土（炭化物多く含む）
- 2層 明灰色土（灰色粘土ブロック、焼土粒子少量含む。カマドの土。）
- 3層 明灰色土（焼土粒子、炭化物多く含む）
- 4層 明灰色土（粘土質、カマドの芯の土。）
- 5層 灰色土（炭化物少量含む。）

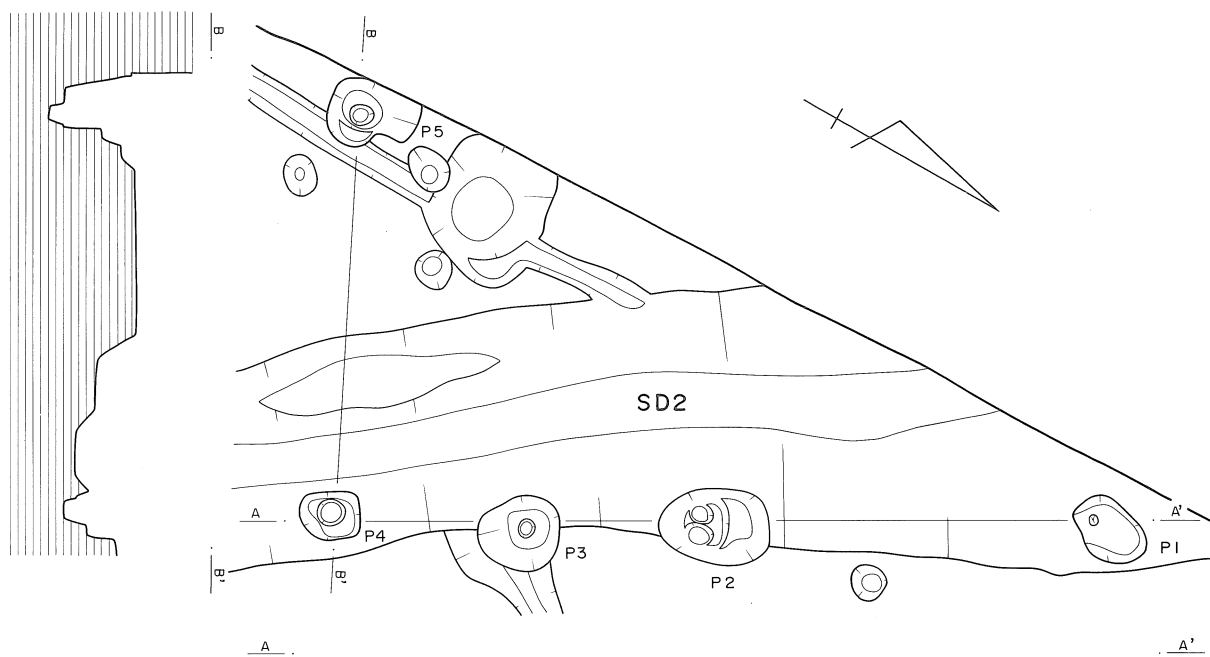
SB I



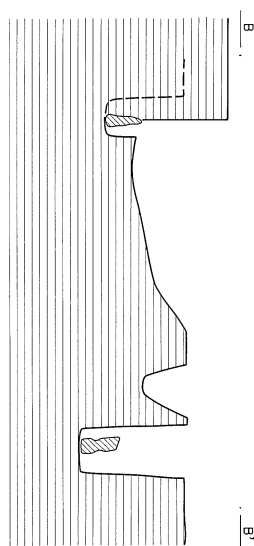
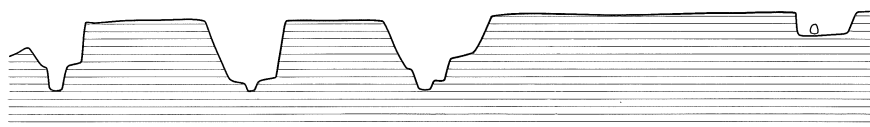
第151図 G地区SB I遺構実測図



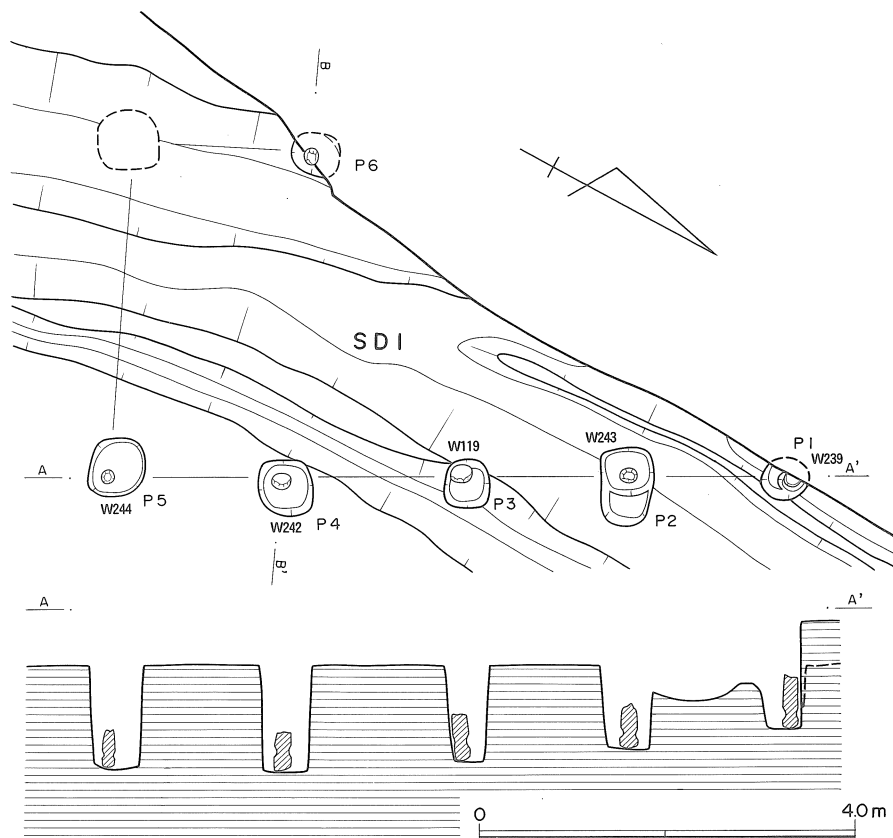
第152図 G地区SH1・2遺構実測図



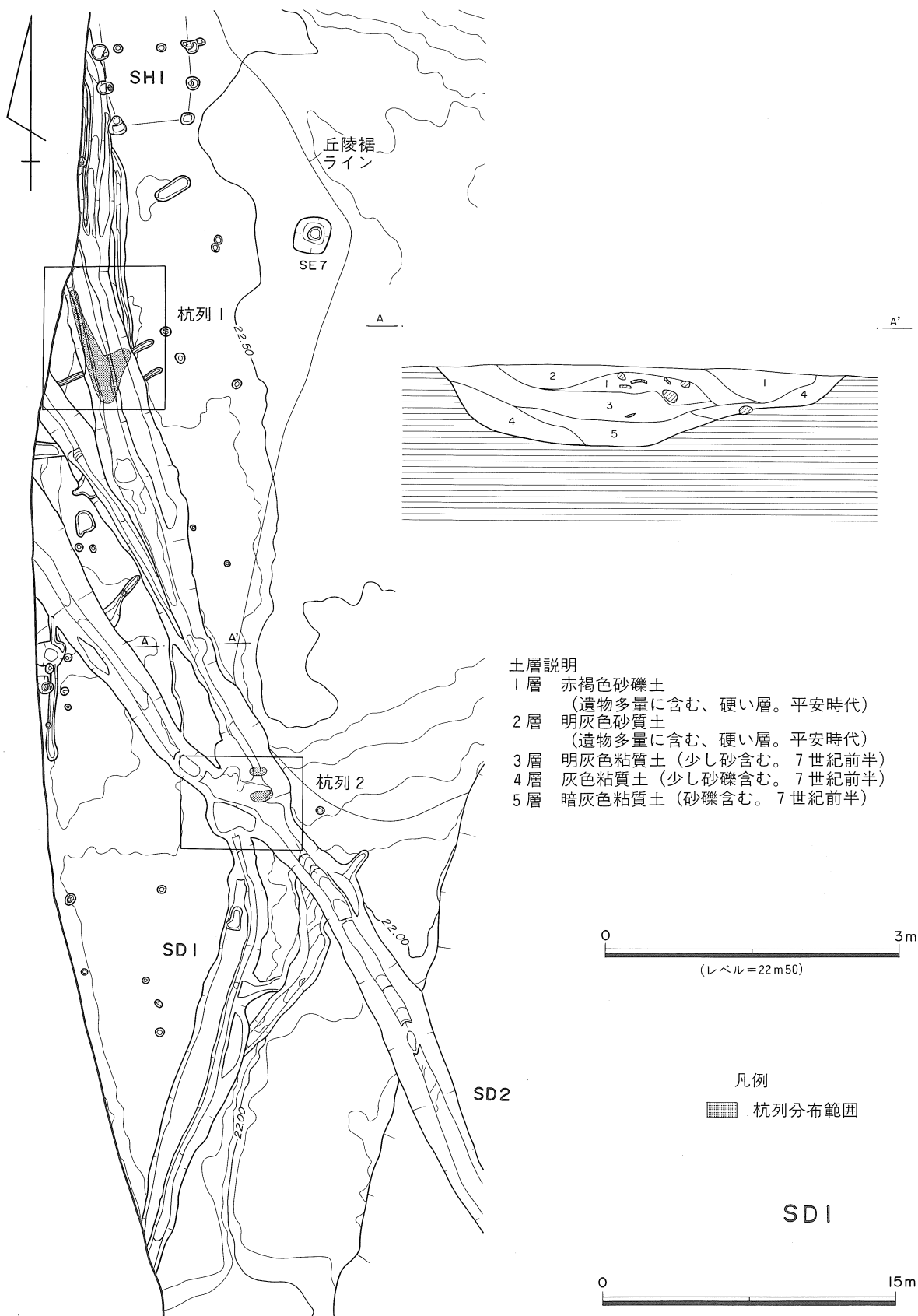
SH3
(レベル=23m00)



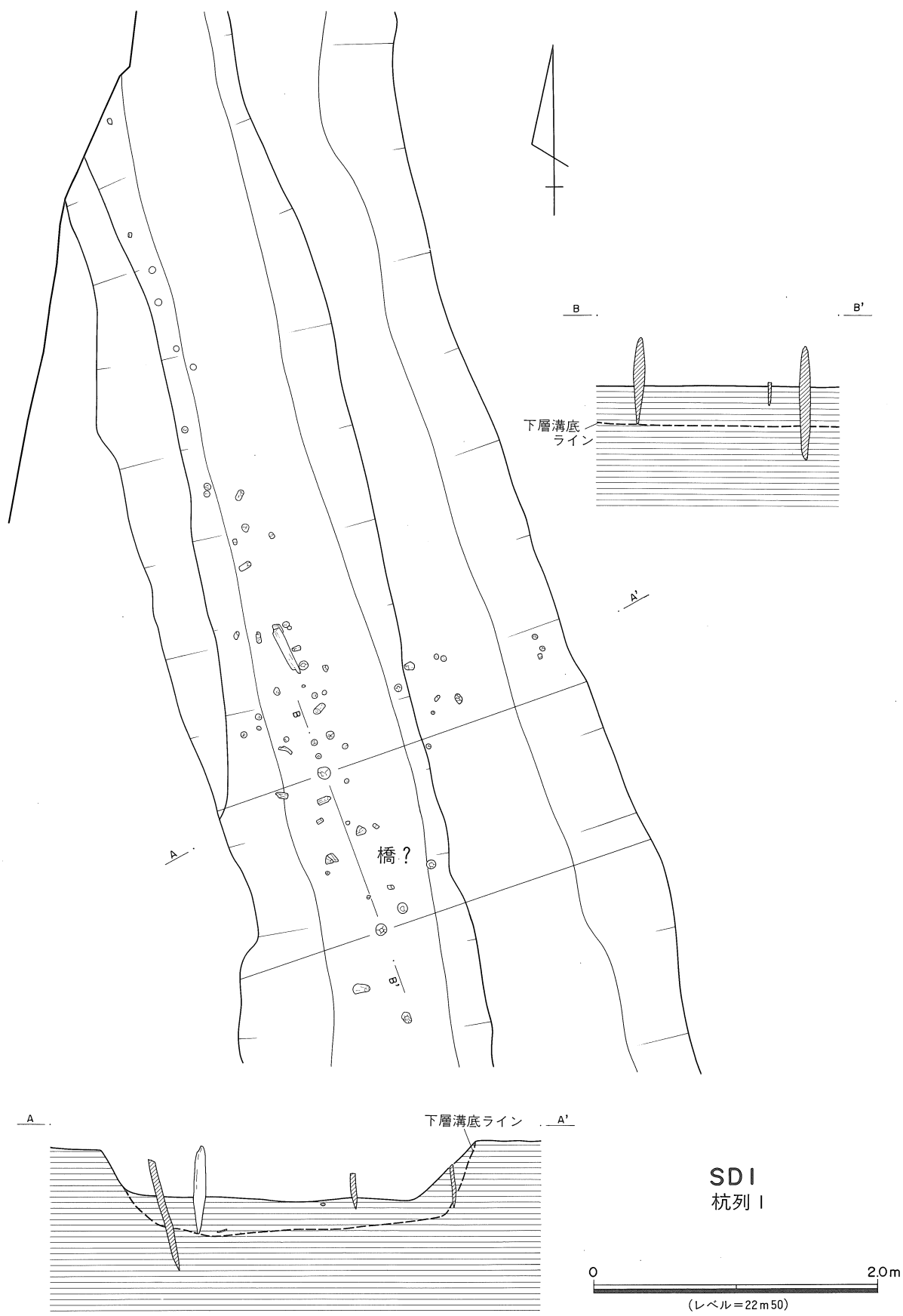
SH4
(レベル=23m00)



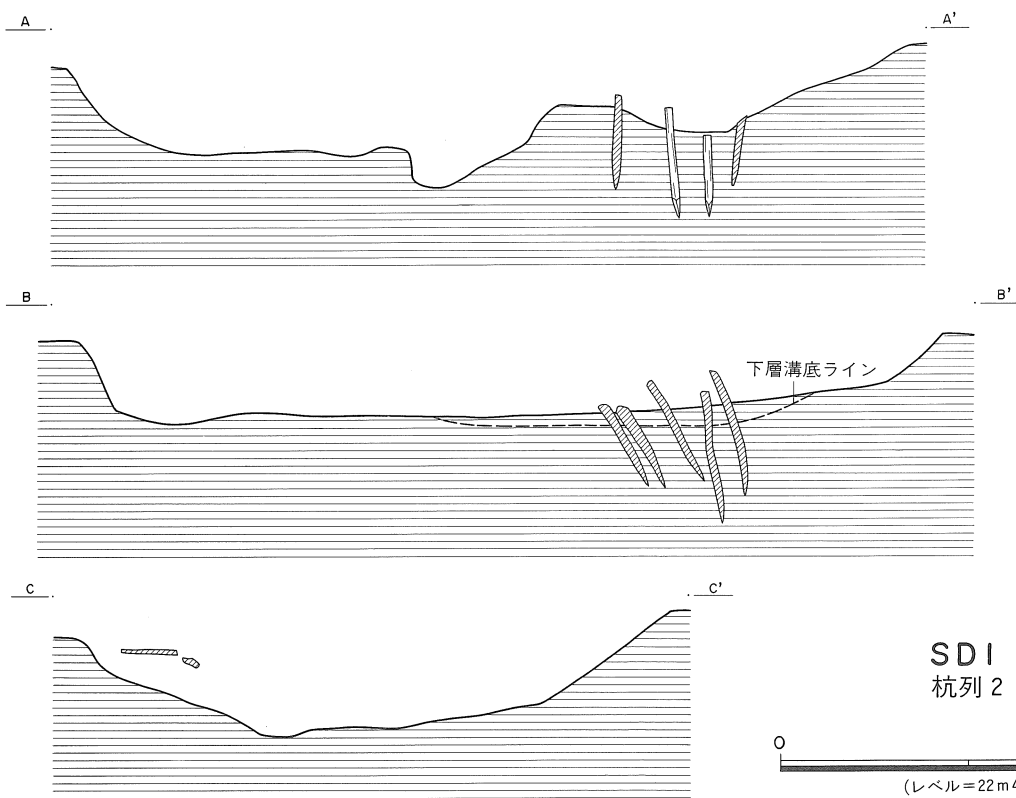
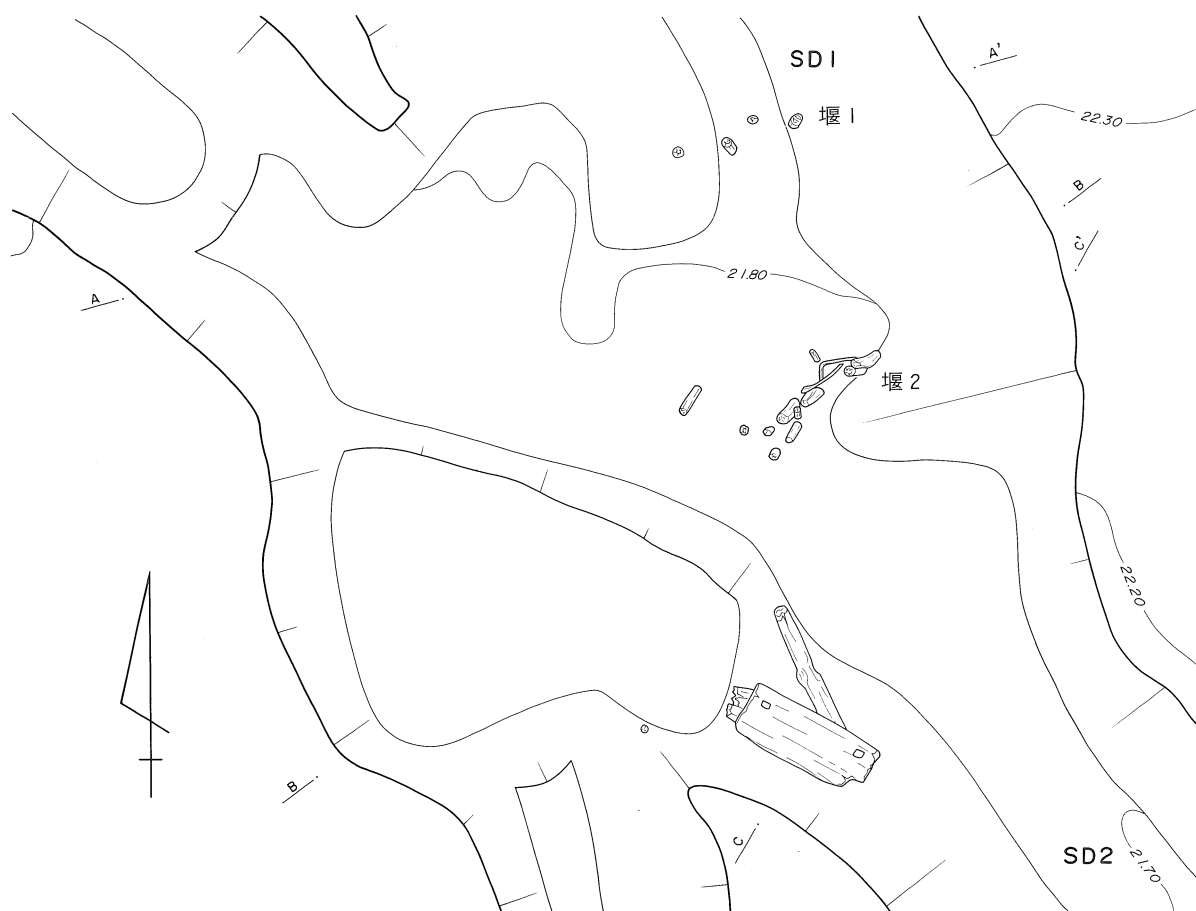
第153図 G地区SH3・4遺構実測図



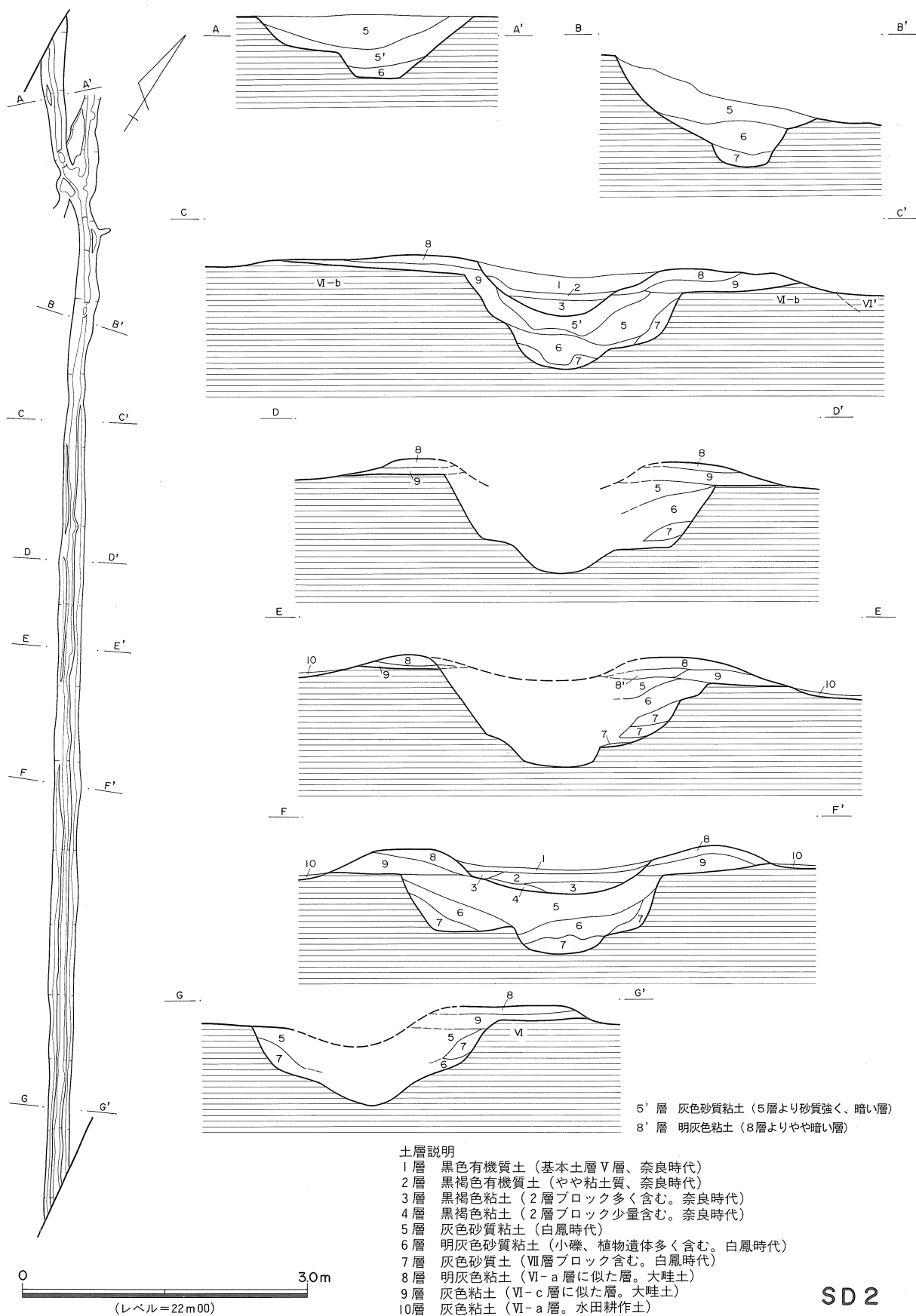
第154図 G地区SD1遺構実測図



第155図 G地区SD1杭列Ⅰ出土状況実測図

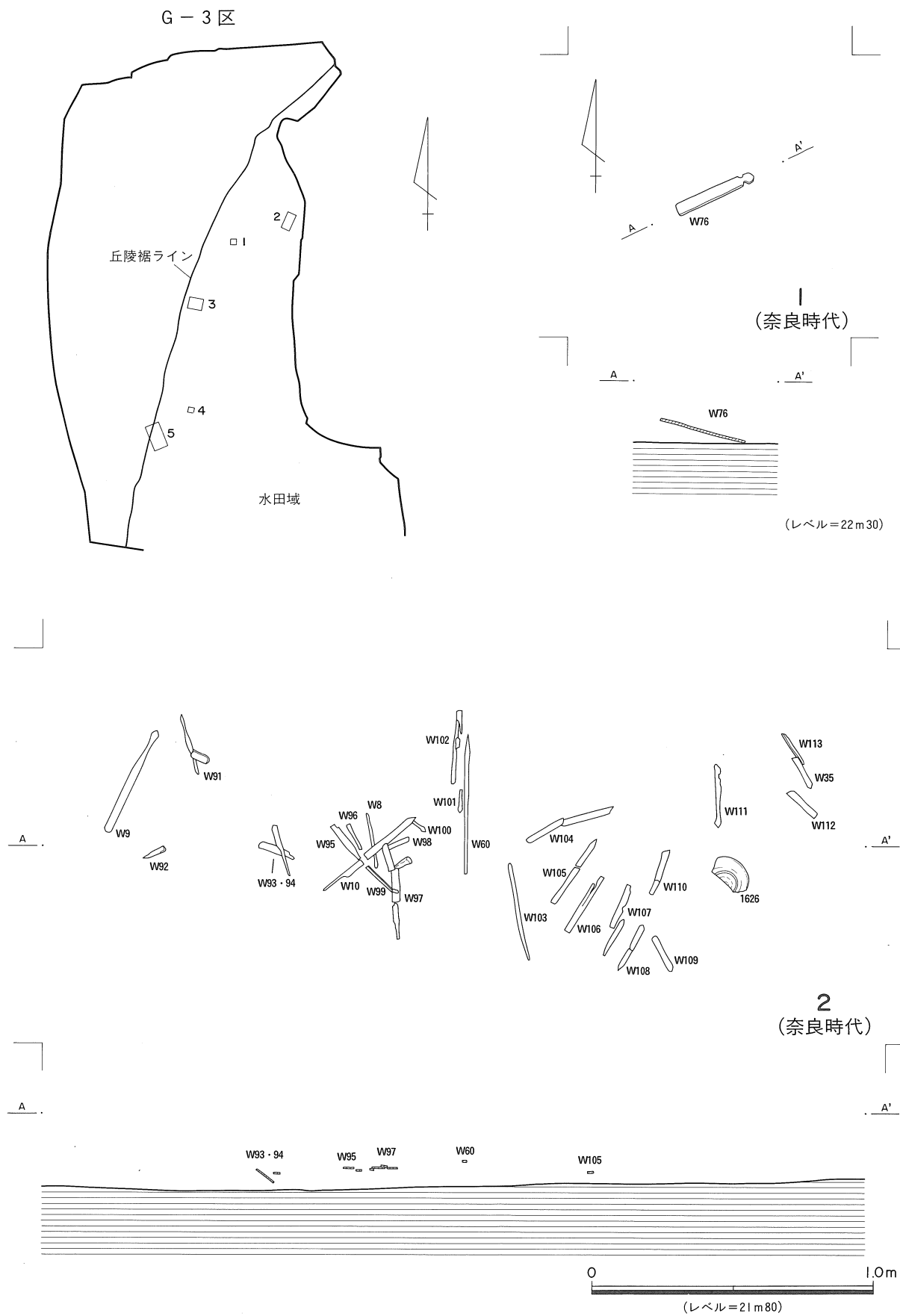


第156図 G地区SD1杭列2出土状況実測図

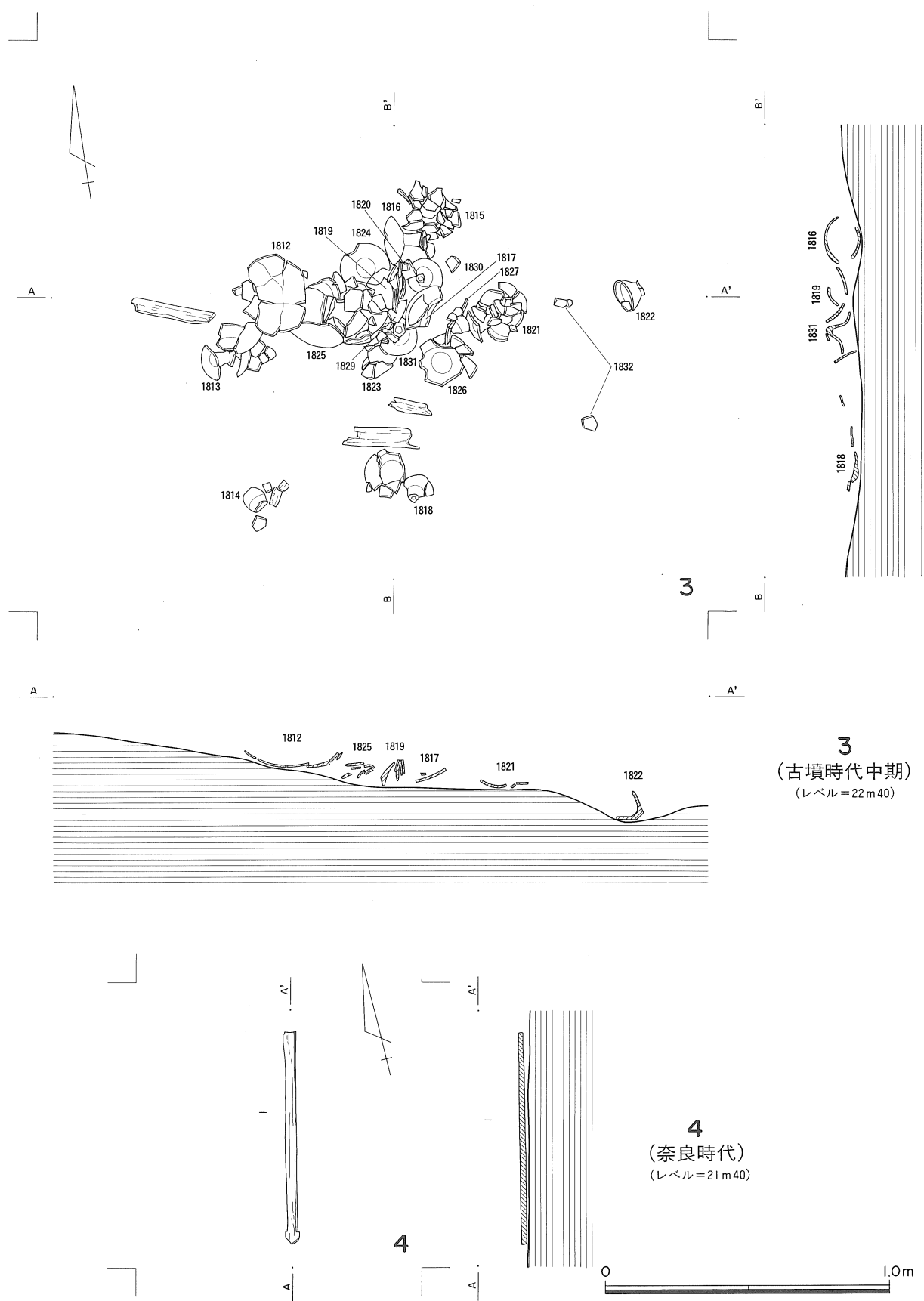


第157図 G地区S D2遺構実測図

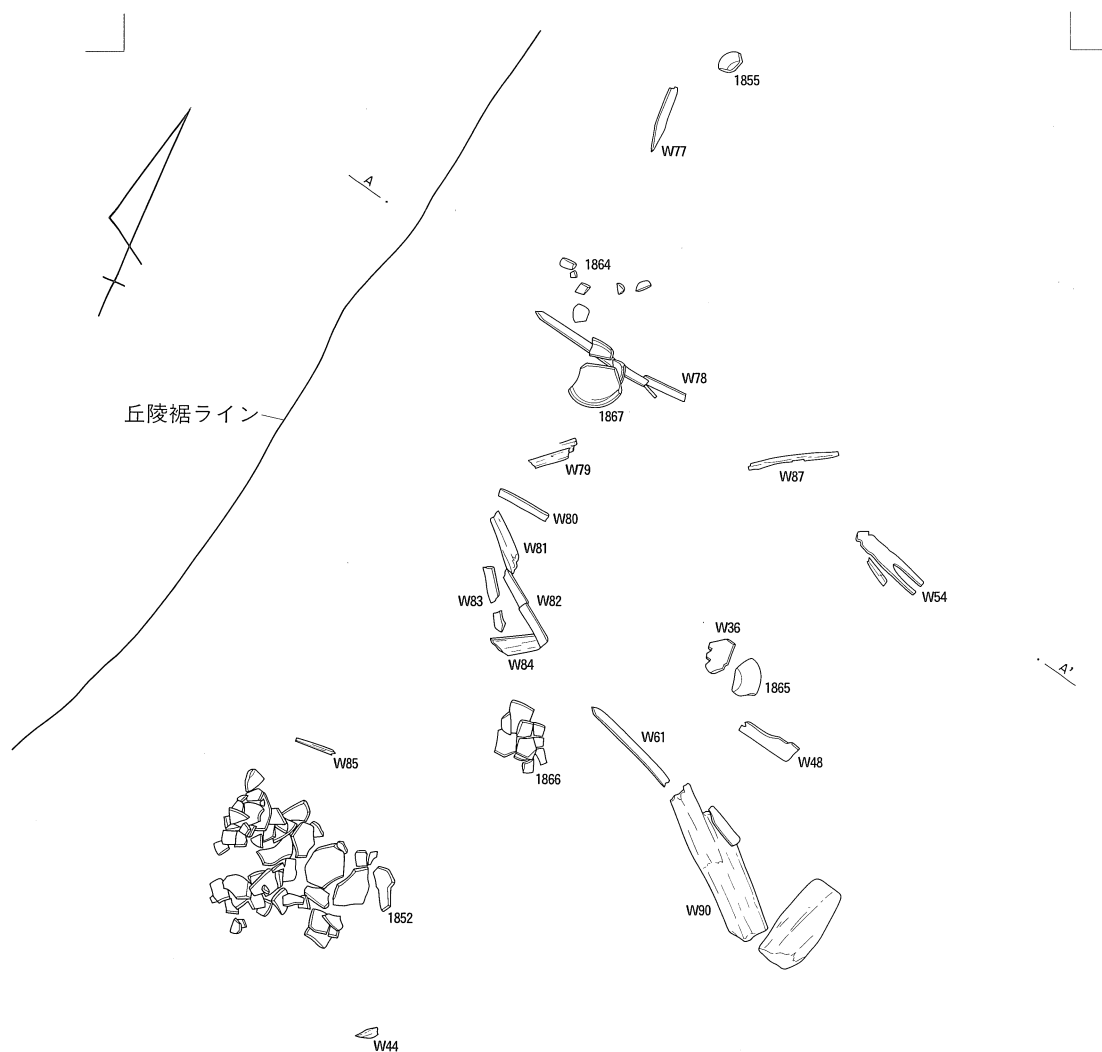
SD2



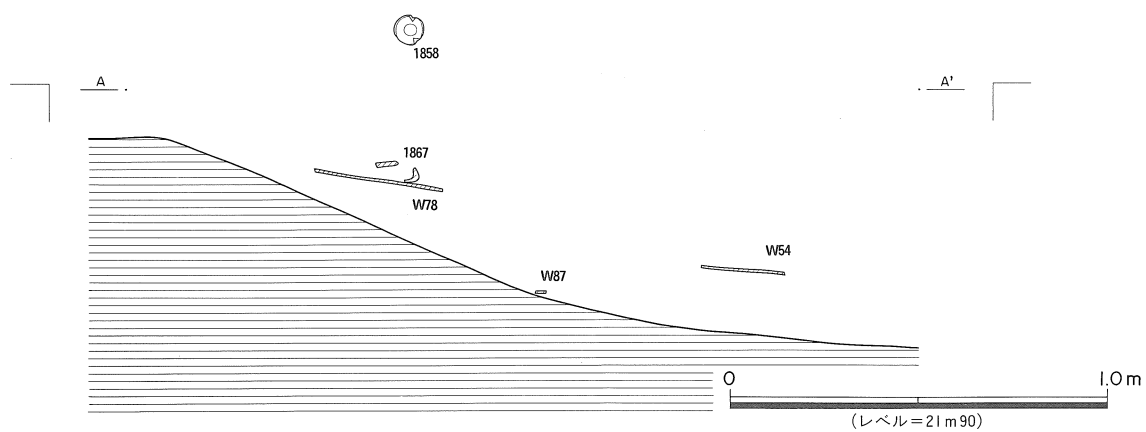
第158図 G地区（奈良～古墳）低地遺物出土状況実測図1



第159図 G地区（奈良～古墳）低地遺物出土状況実測図2



5
(奈良時代)



第160図 G地区(奈良～古墳)低地遺物出土状況実測図3

-53,700

-53,740



-134,200

-134,200

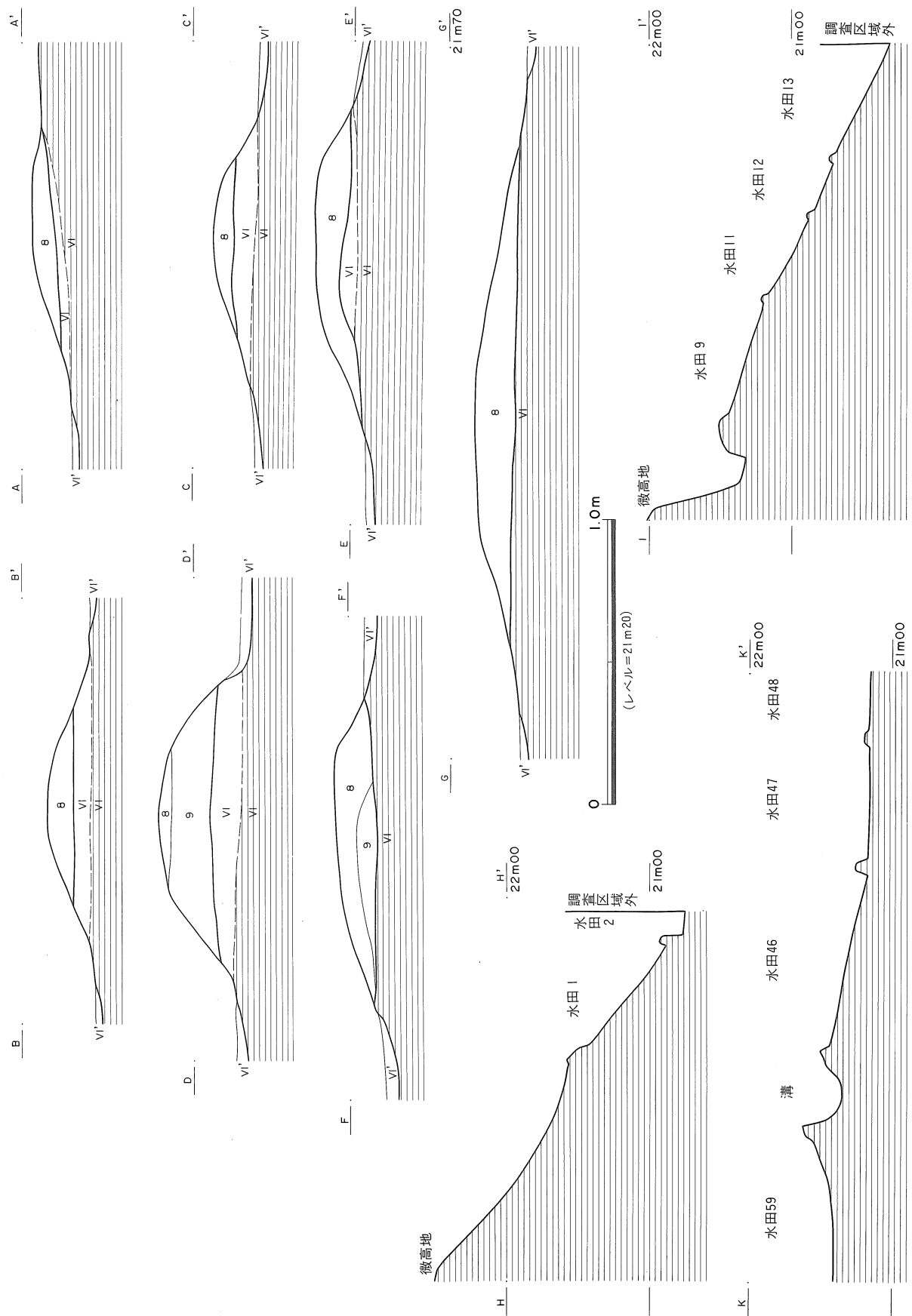
-134,250

-134,250

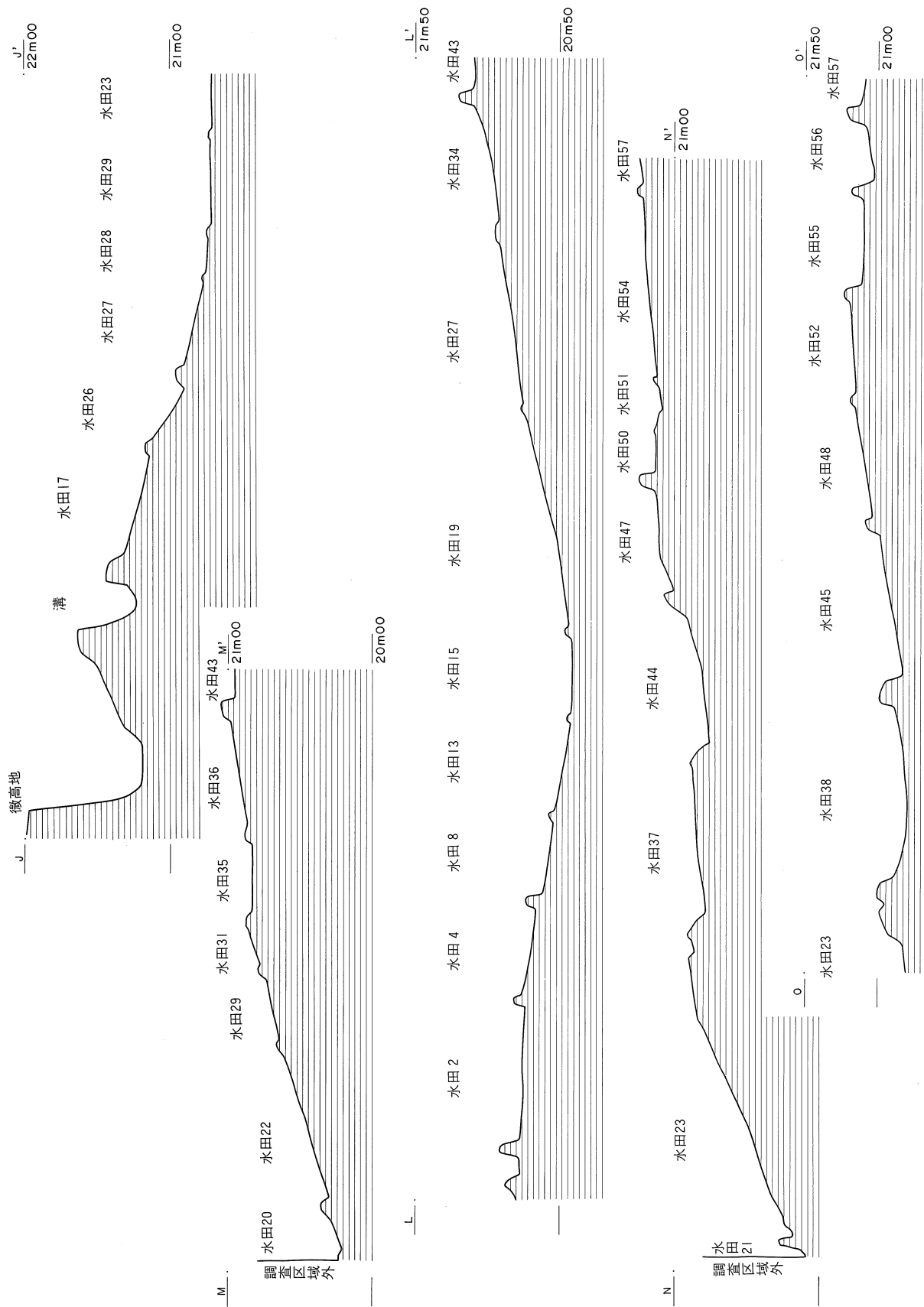
-53,700

-53,740

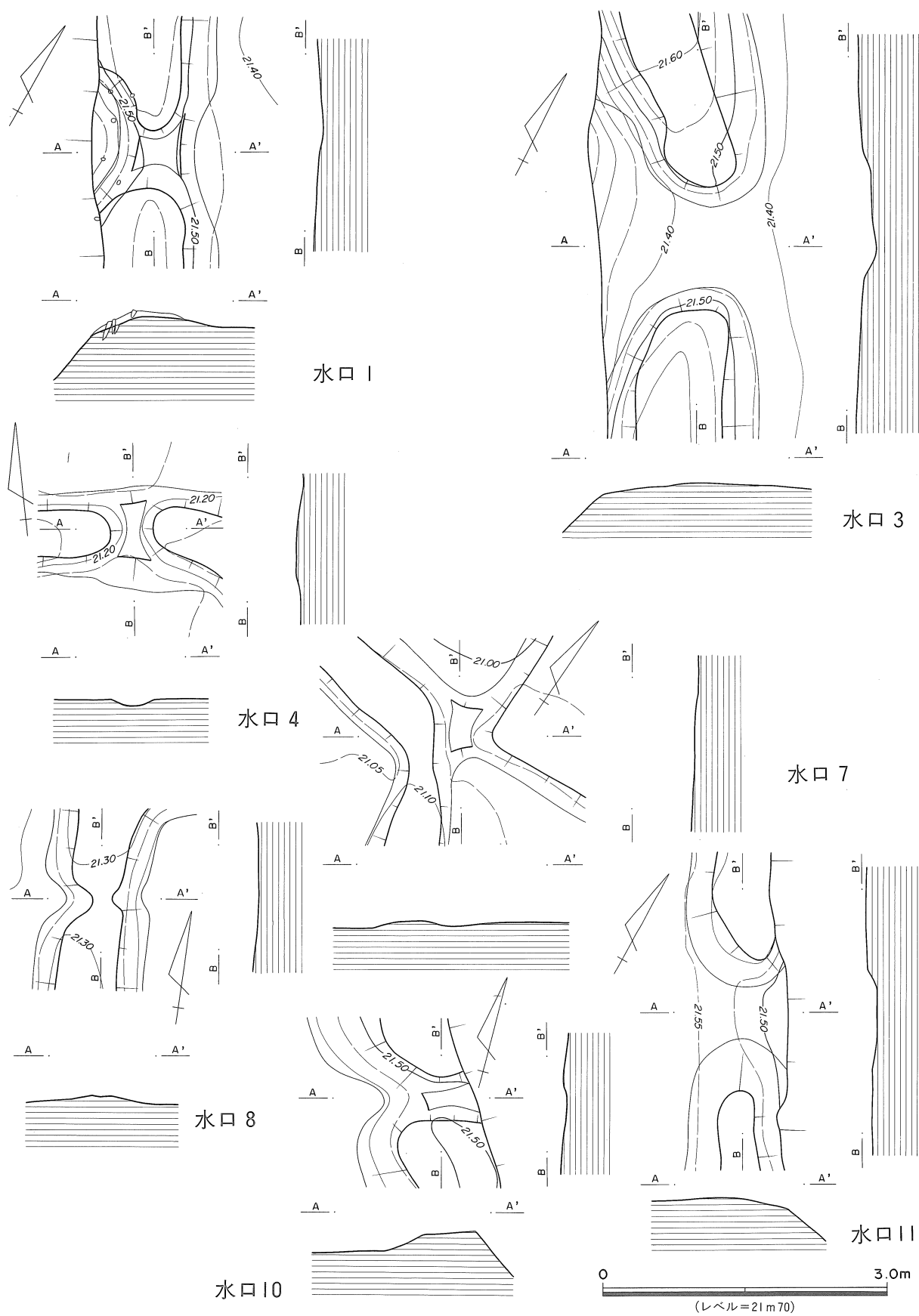
第161図 G地区（奈良）水田遺構実測図



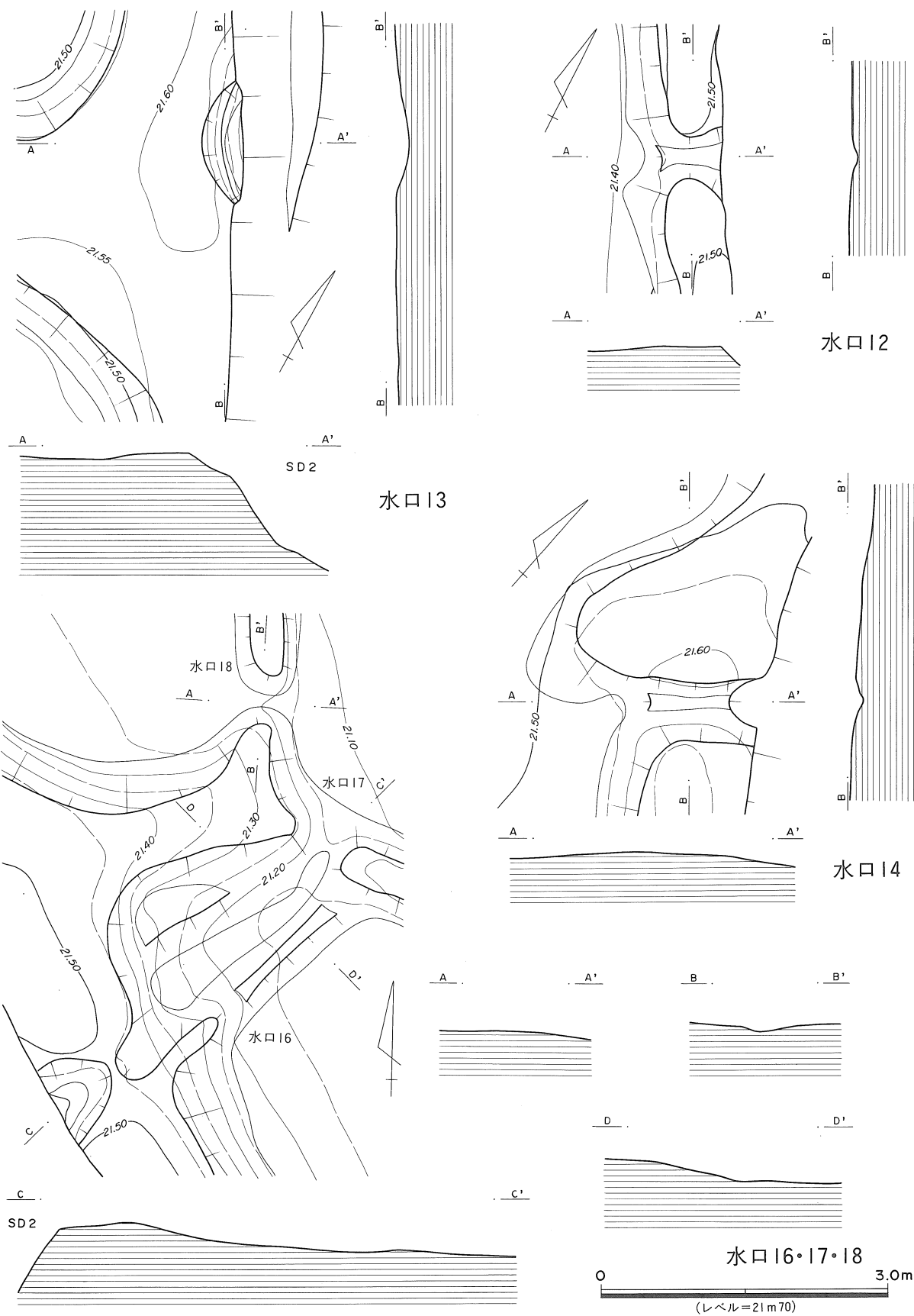
第162図 G地区水田遺構断面実測図1



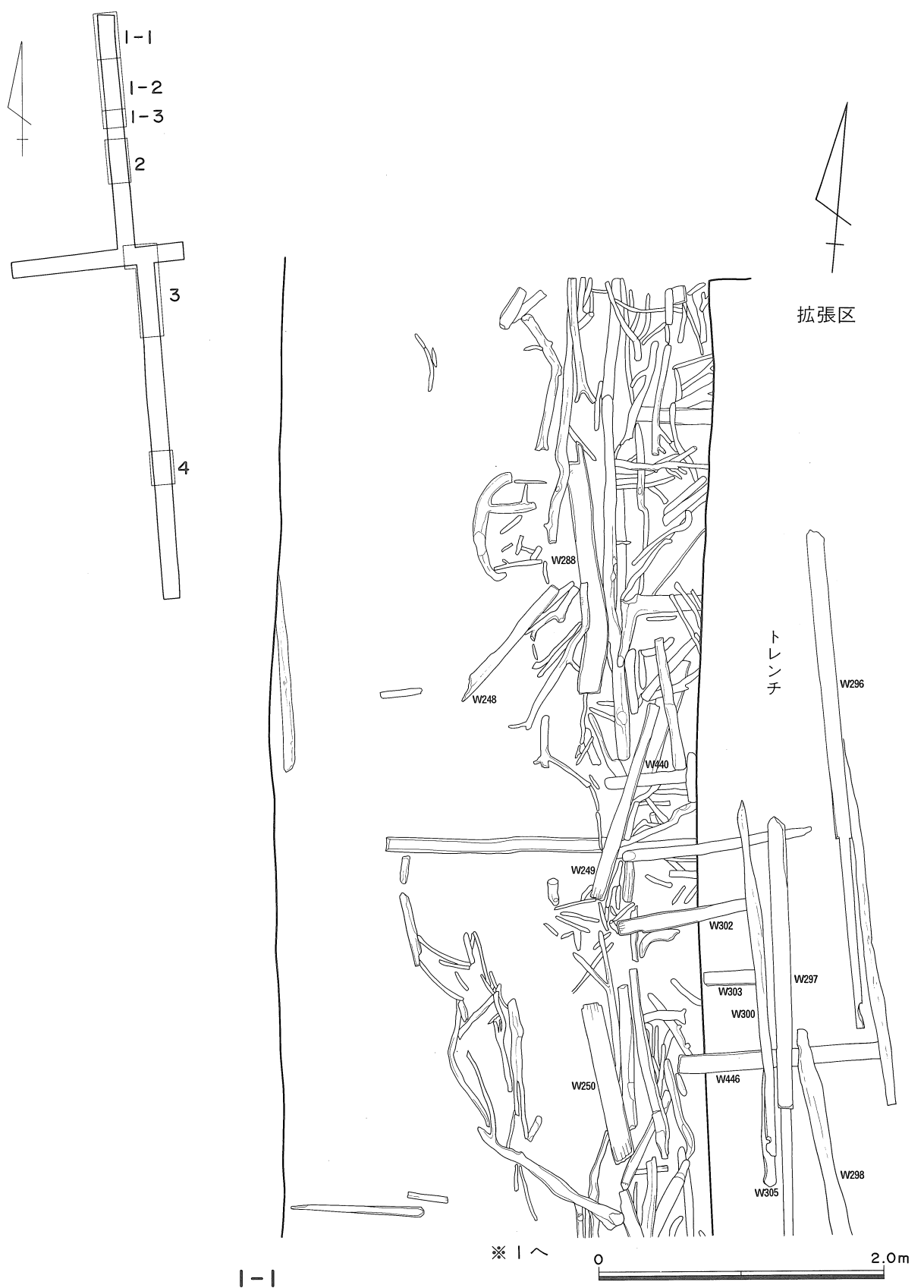
第163図 G地区水田遺構断面実測図2



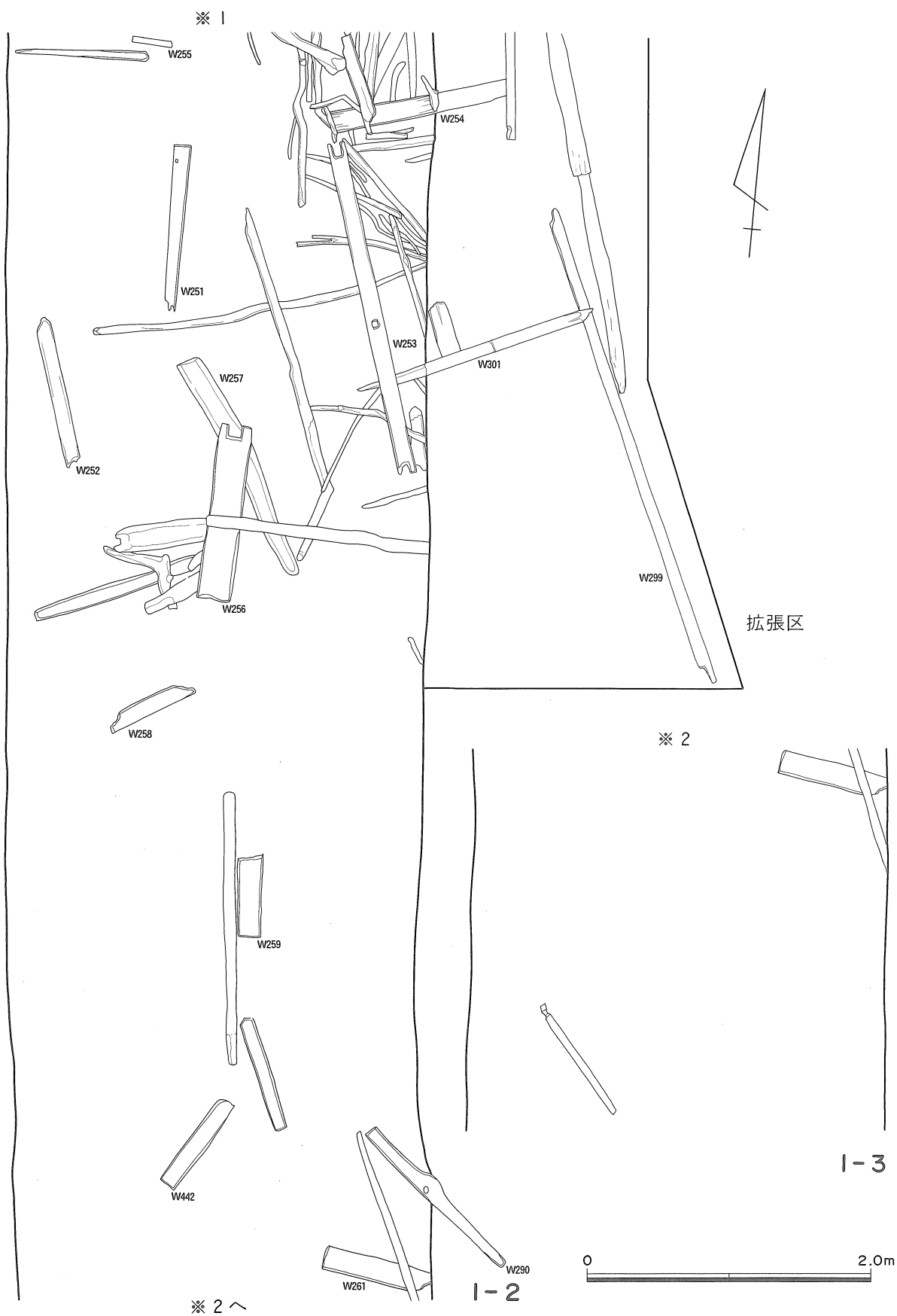
第164図 G地区水口遺構実測図1



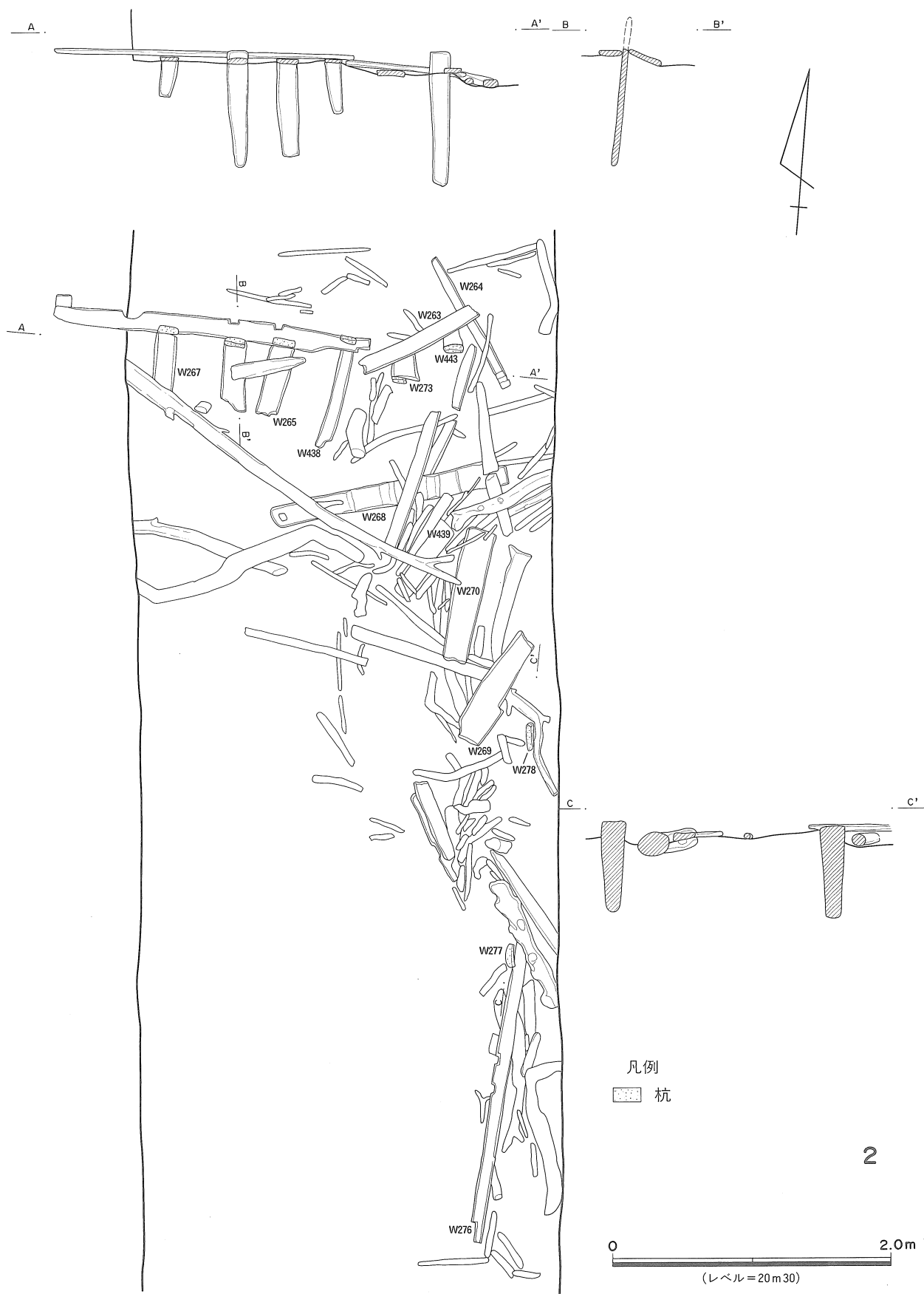
第165図 G地区水口遺構実測図2



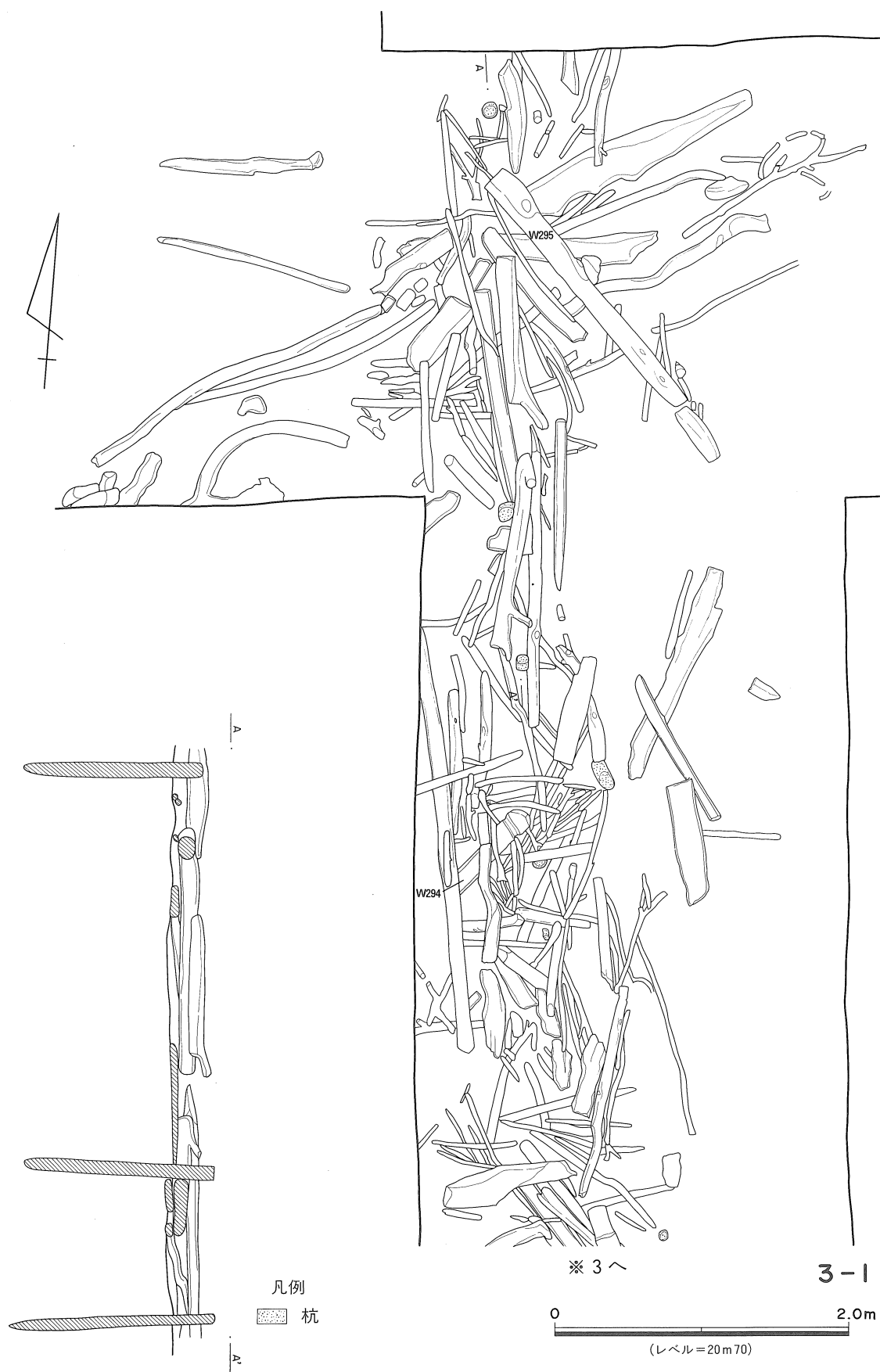
第166図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図1



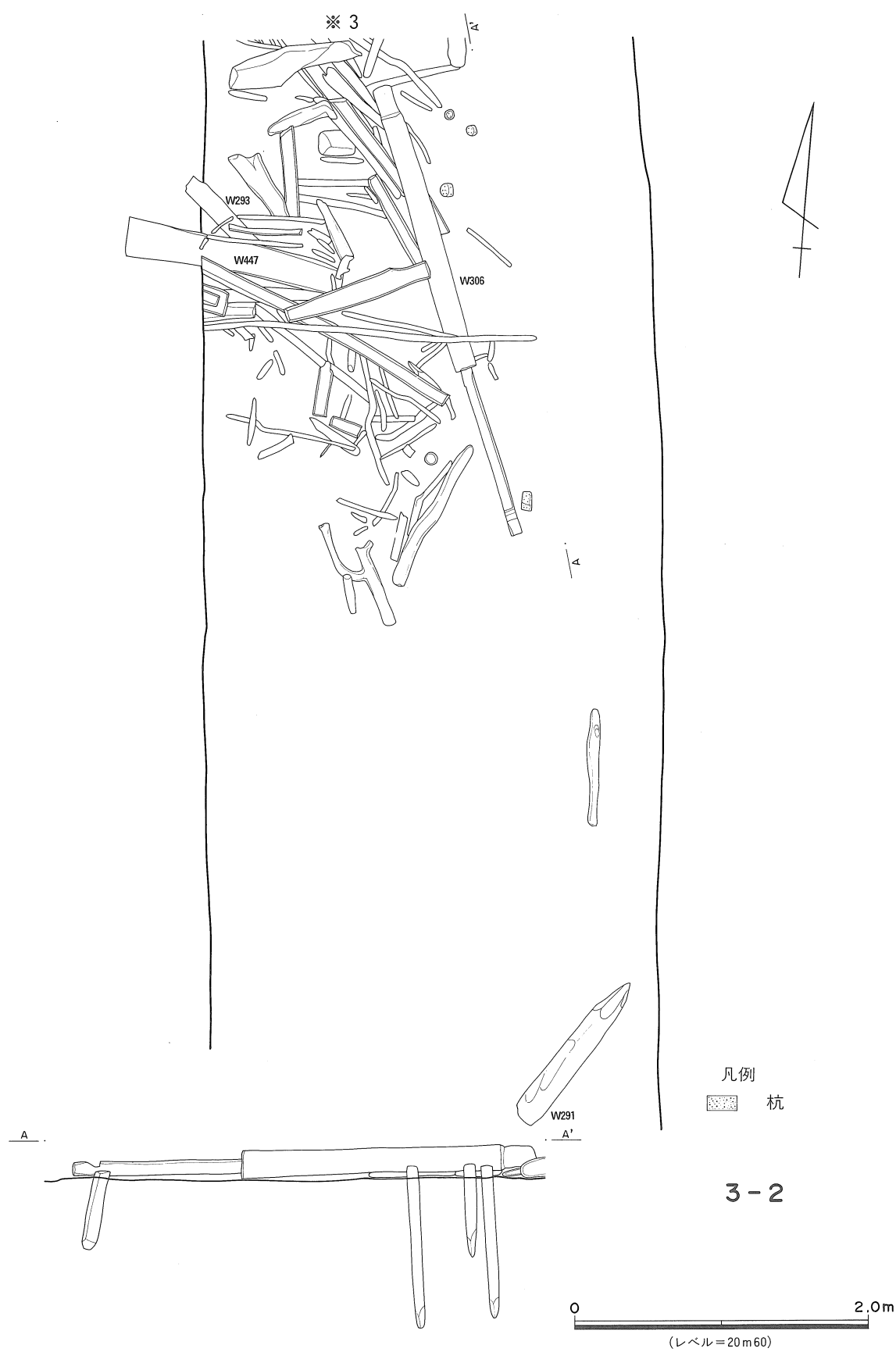
第167図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図2



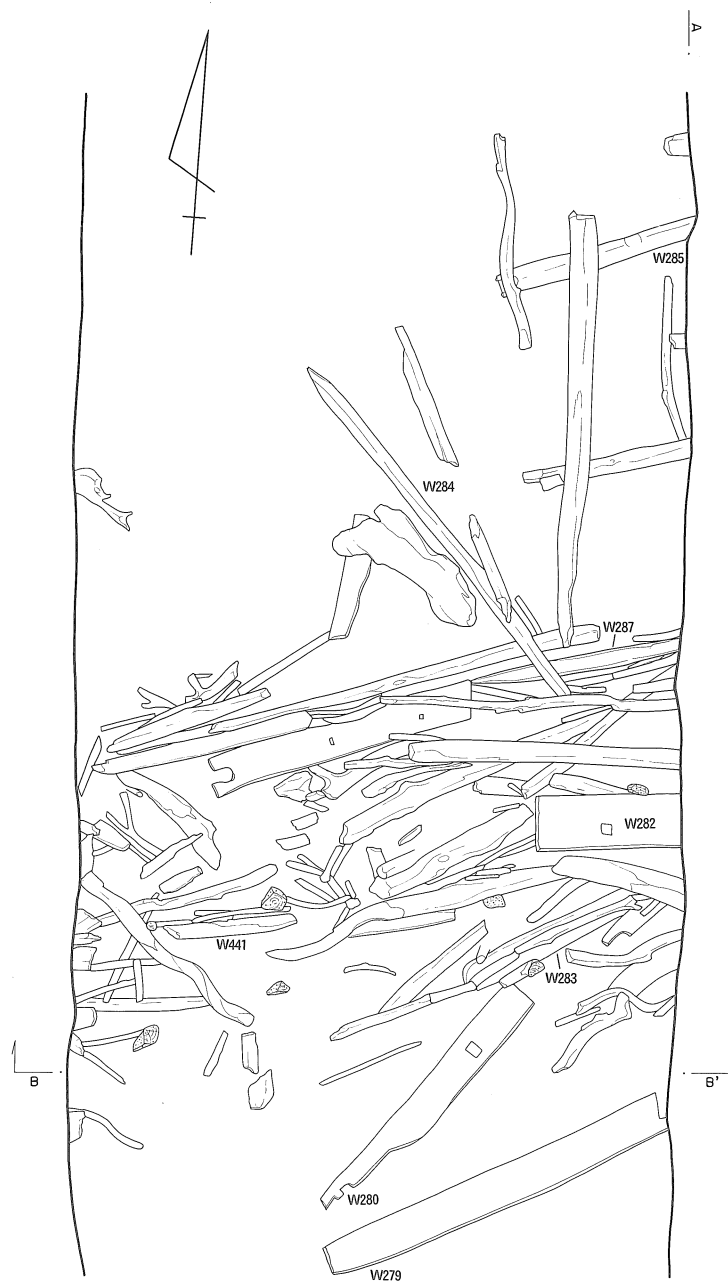
第168図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図3



第169図 G地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図4

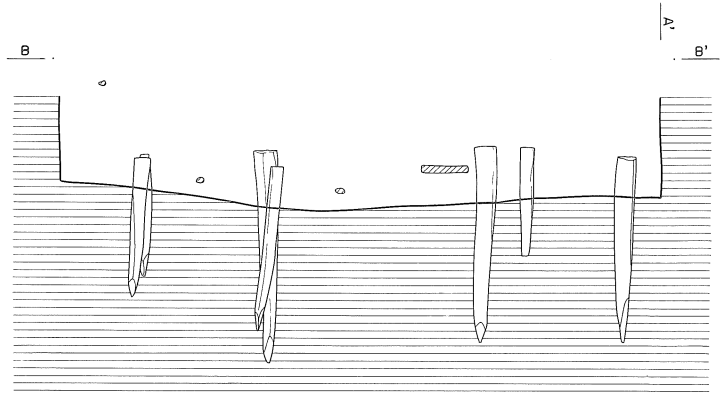


第170図 G 地区（弥生）水田畦畔内木製品出土状況実測図5

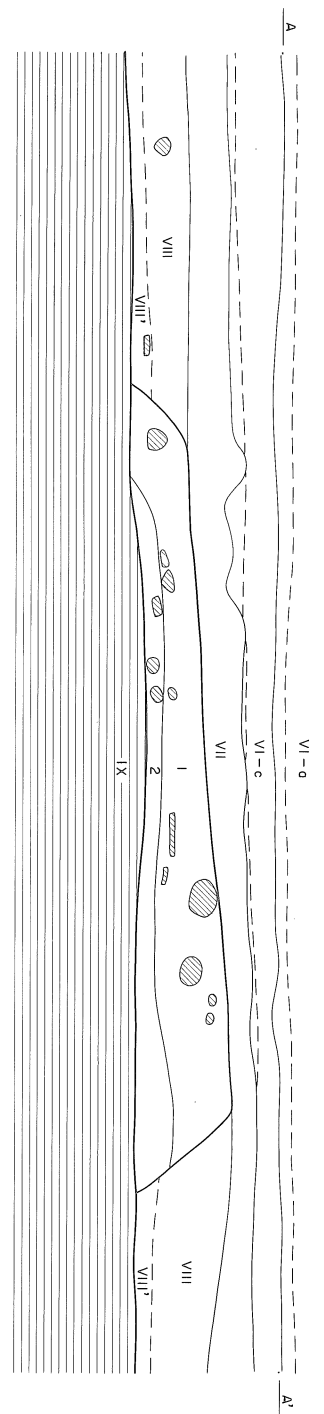


凡例

杭



4



土層説明

VI-a 層 明灰色粘土

VI-c 層 暗灰色粘土

VIII層 黒色有機質土

VIII層 黒色粘土

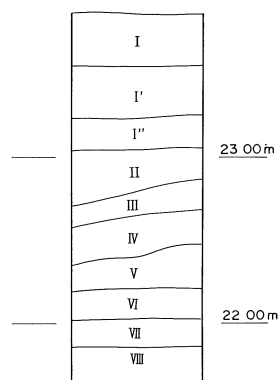
IX層 明灰色粘土

I 層 黒色粘土 (明灰色粘土ブロック含まない、粘性の強い色。弥生水田畦畔土)

2 層 黒色粘土 (明灰色粘土ブロック少量含む。弥生水田畦畔土)

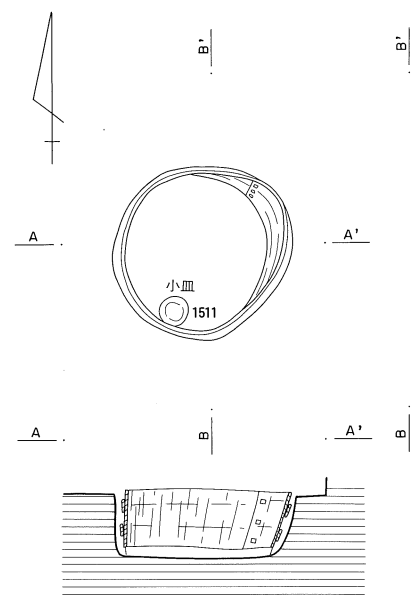
0 2.0m
(レベル=21 m 00)

第171図 G地区(弥生)水田畦畔内木製品出土状況実測図6

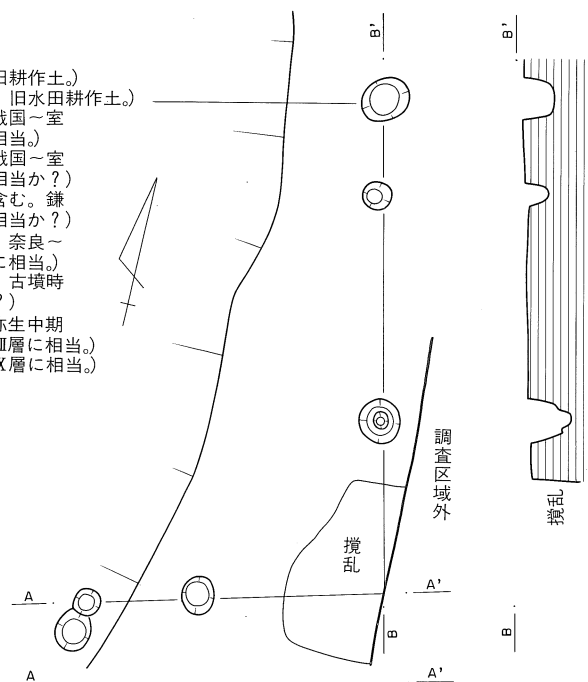


基本土層説明

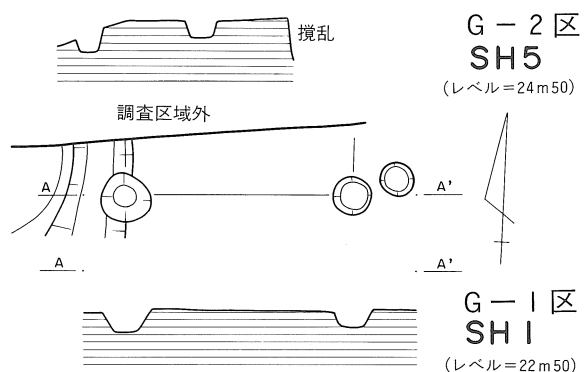
- I層 褐色土（現水田耕作土。）
- I'層 暗灰色土（砂礫少量含む。旧水田耕作土。）
- I''層 暗灰色土（黒褐色ブロック含む。旧水田耕作土。）
- II層 明褐色土（砂礫を含む砂質土。戦国～室町時代の遺物含む。低地II層に相当。）
- III層 褐色砂質土（砂礫を多く含む。戦国～室町時代の遺物含む。低地III層に相当か？）
- IV層 明褐色土（砂質でマンガン粒子含む。鎌倉時代の遺物含む。低地IV層に相当か？）
- V層 明灰色粘土（マンガン粒子含む。奈良～平安時代の遺物含む。低地V層に相当。）
- VI層 暗灰色粘土（マンガン粒子含む。古墳時代の層？低地VI～VII層に相当か？）
- VII層 暗灰色粘土（炭化物粒子含む。弥生中期末～後期初頭の遺物含む。低地VIII層に相当。）
- VIII層 灰色粘土（粘性の強い層。低地IX層に相当。）



G-1区
SE9
(レベル=22m10)

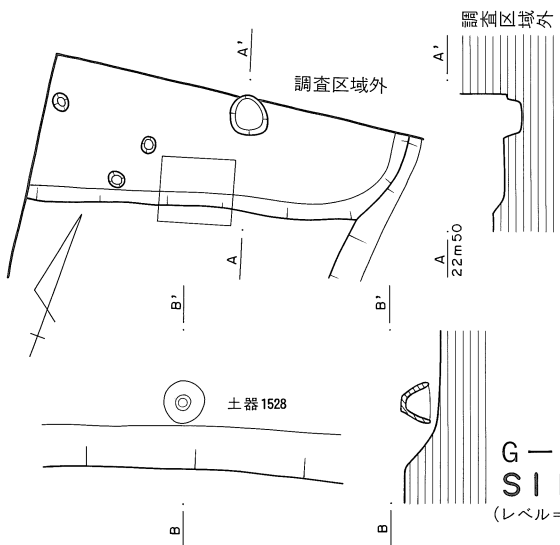


G-2区
SH5
(レベル=24m50)

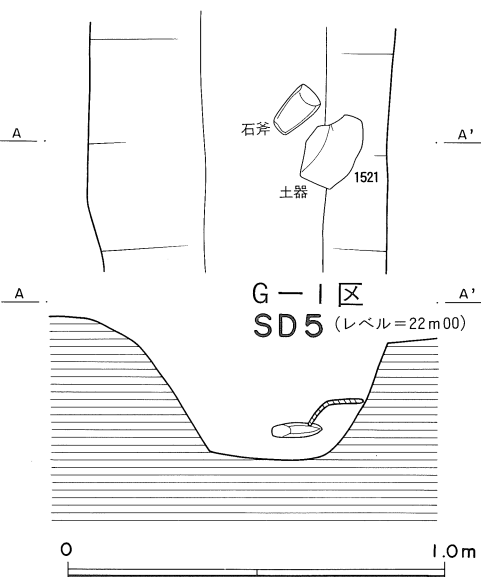


G-1区
SH1
(レベル=22m50)

0 4.0m

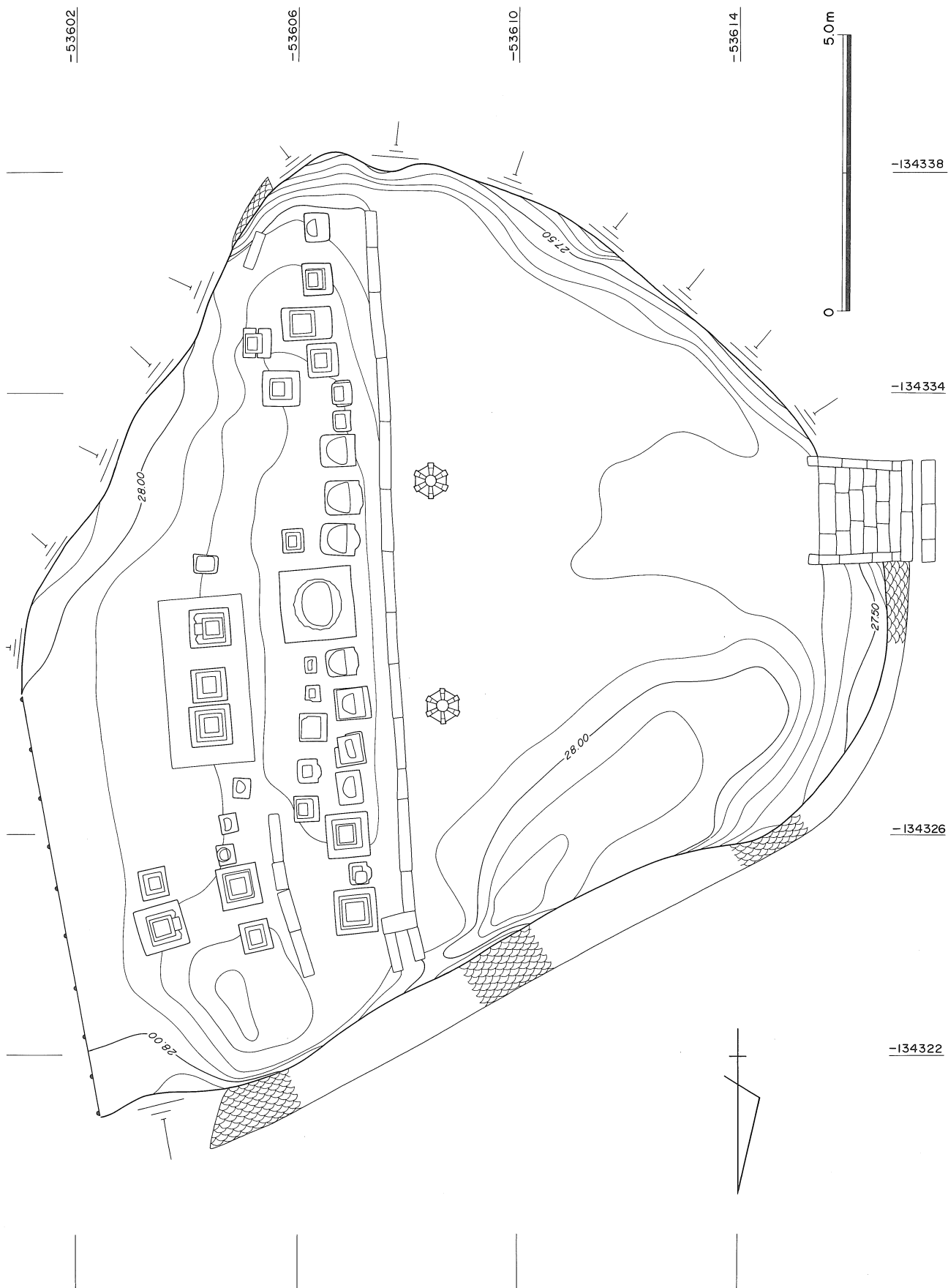


G-1区
SD5
(レベル=22m00)

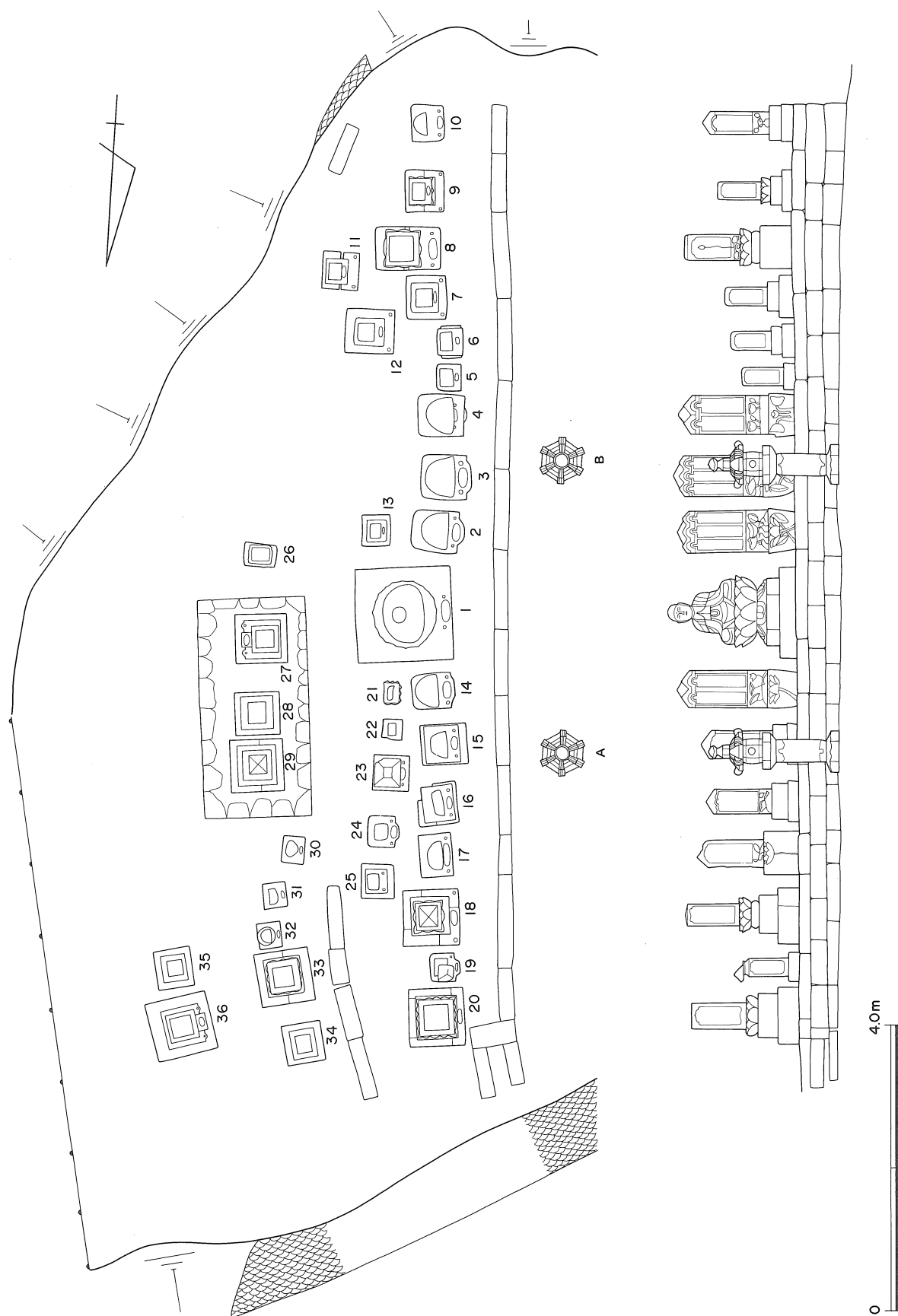


G-1区
SD5
(レベル=22m00)

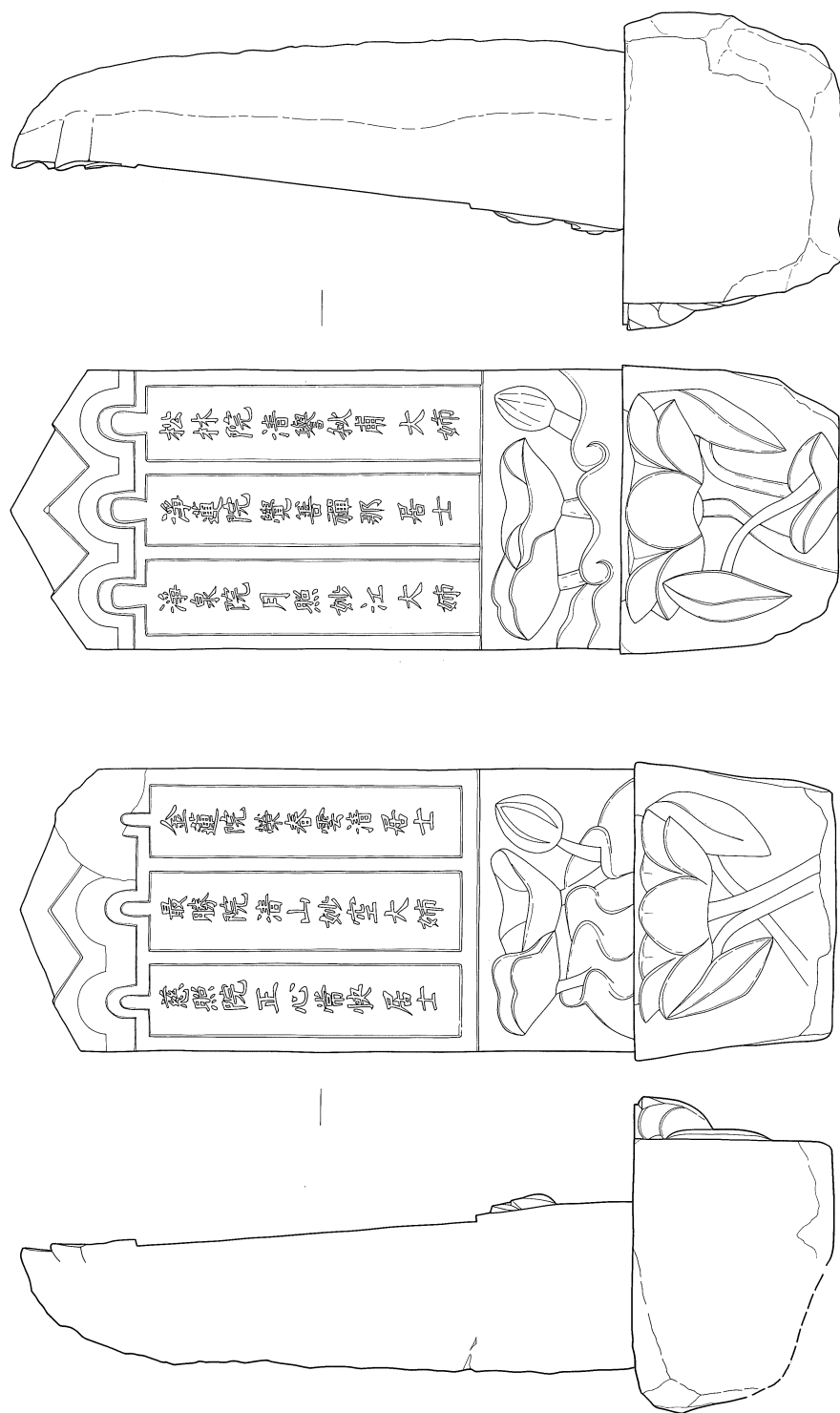
0 1.0m



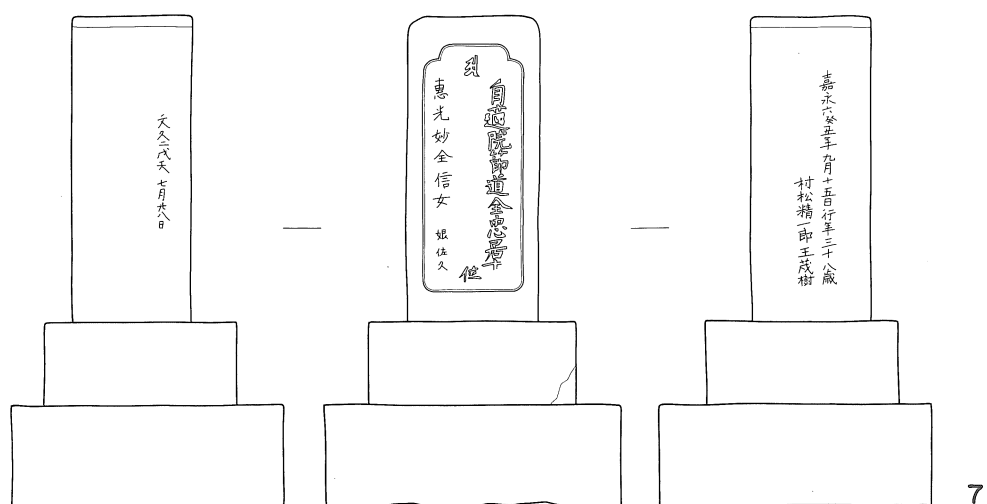
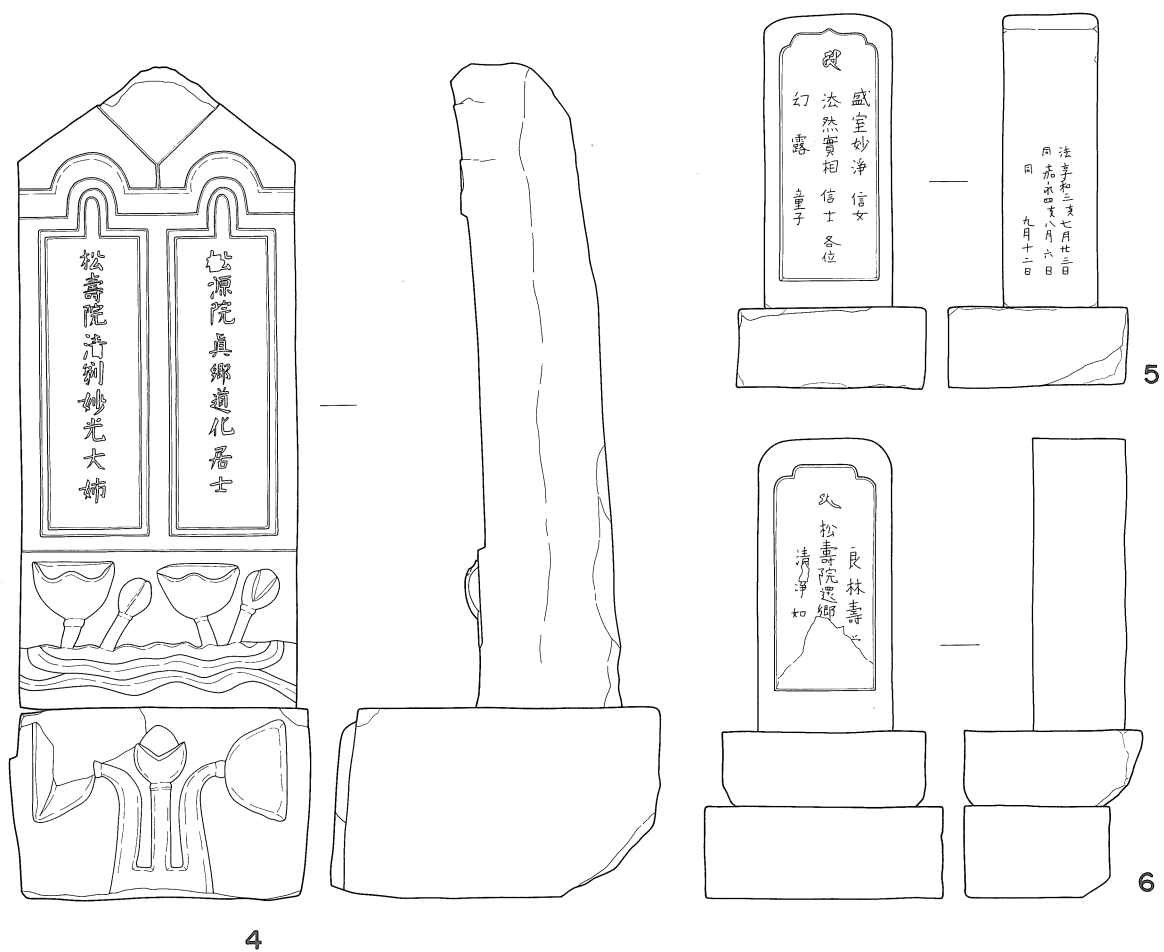
第173図 村松家墓塔群・墓塔全体図1



第174図 村松家墓塔群・墓塔全体図2

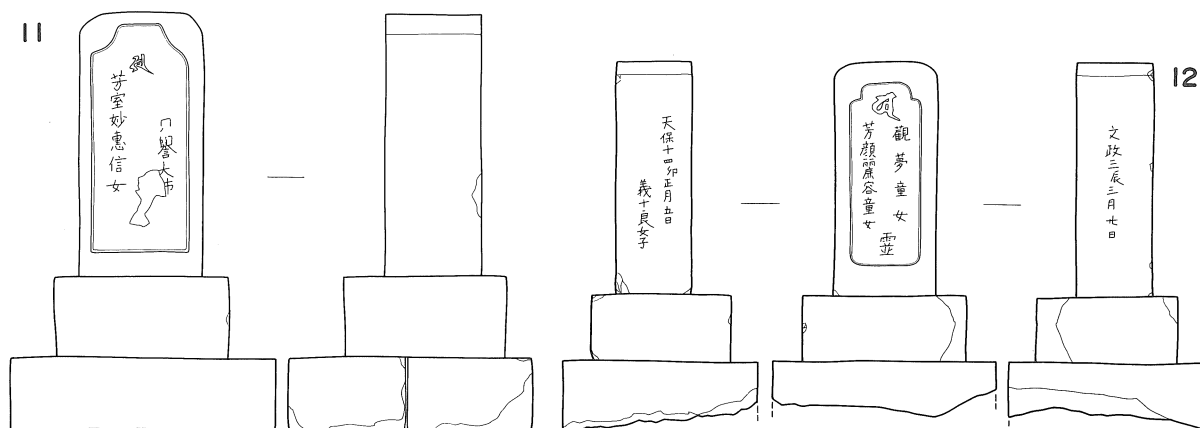
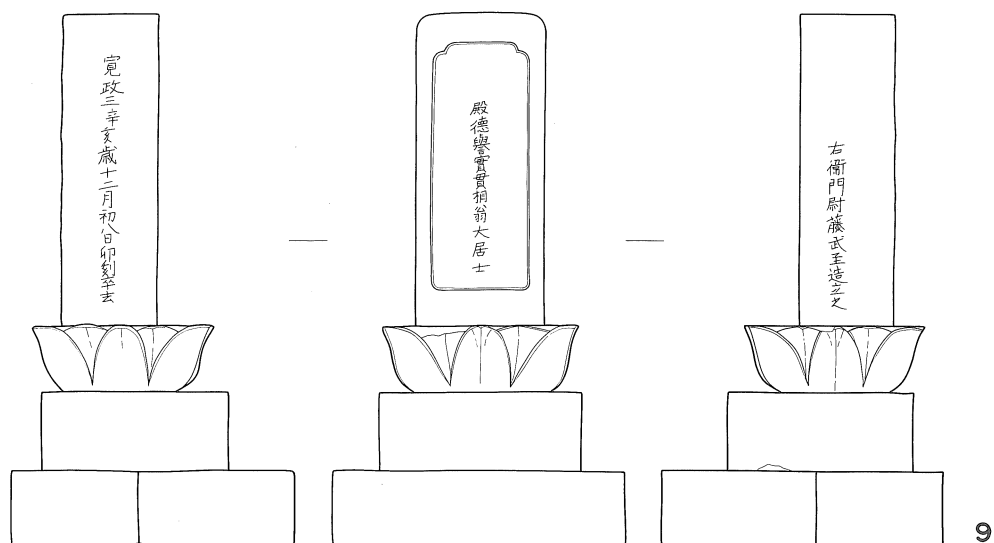
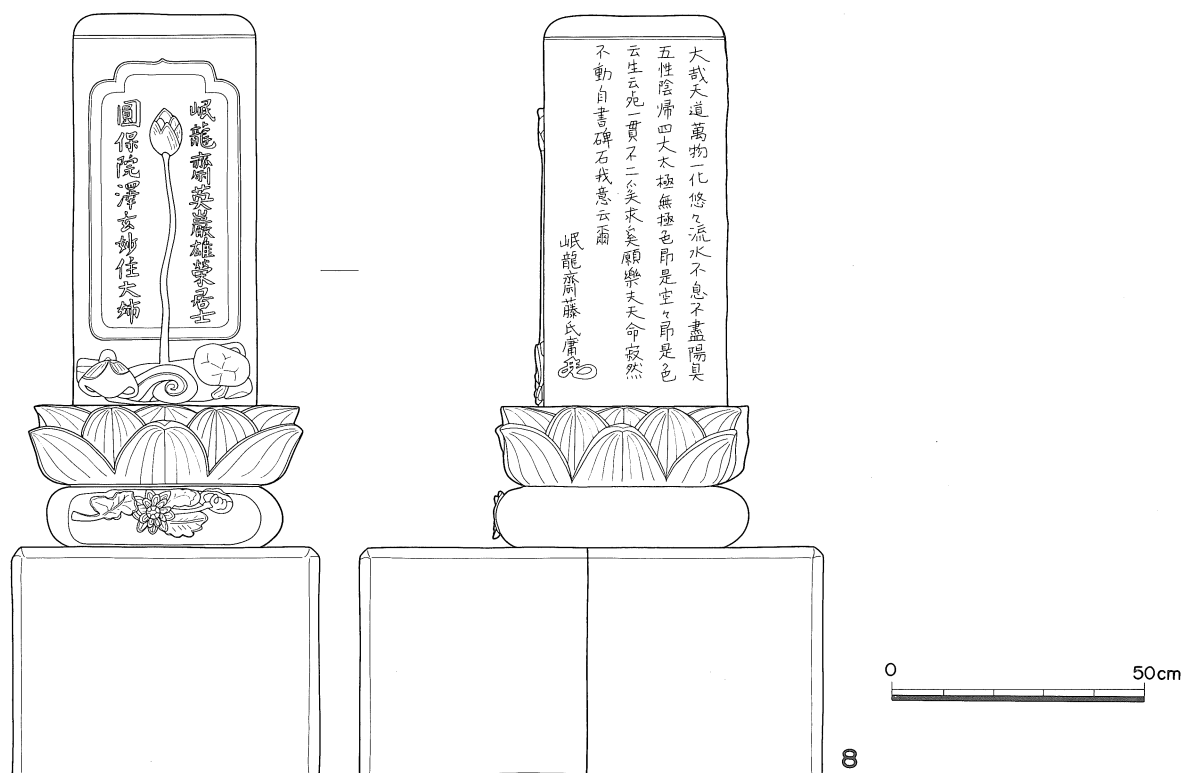


第177図 村松家墓塔群・墓石実測図1

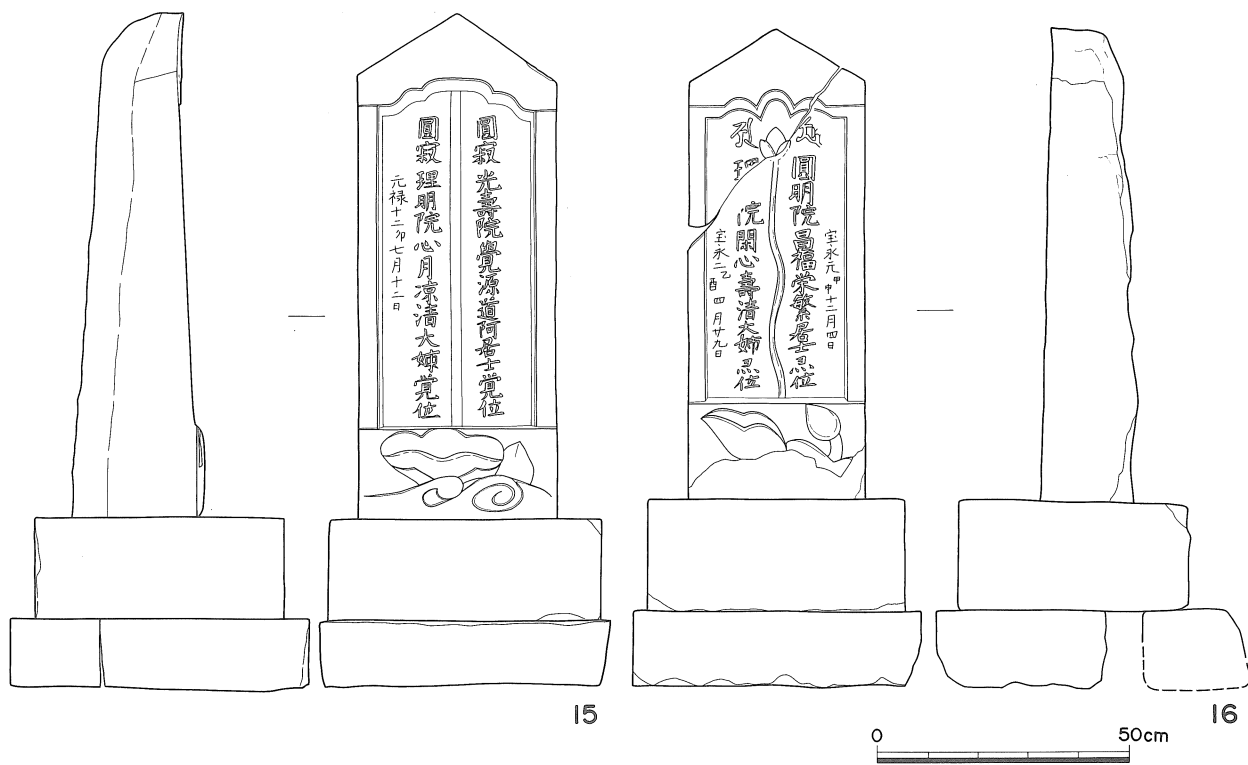
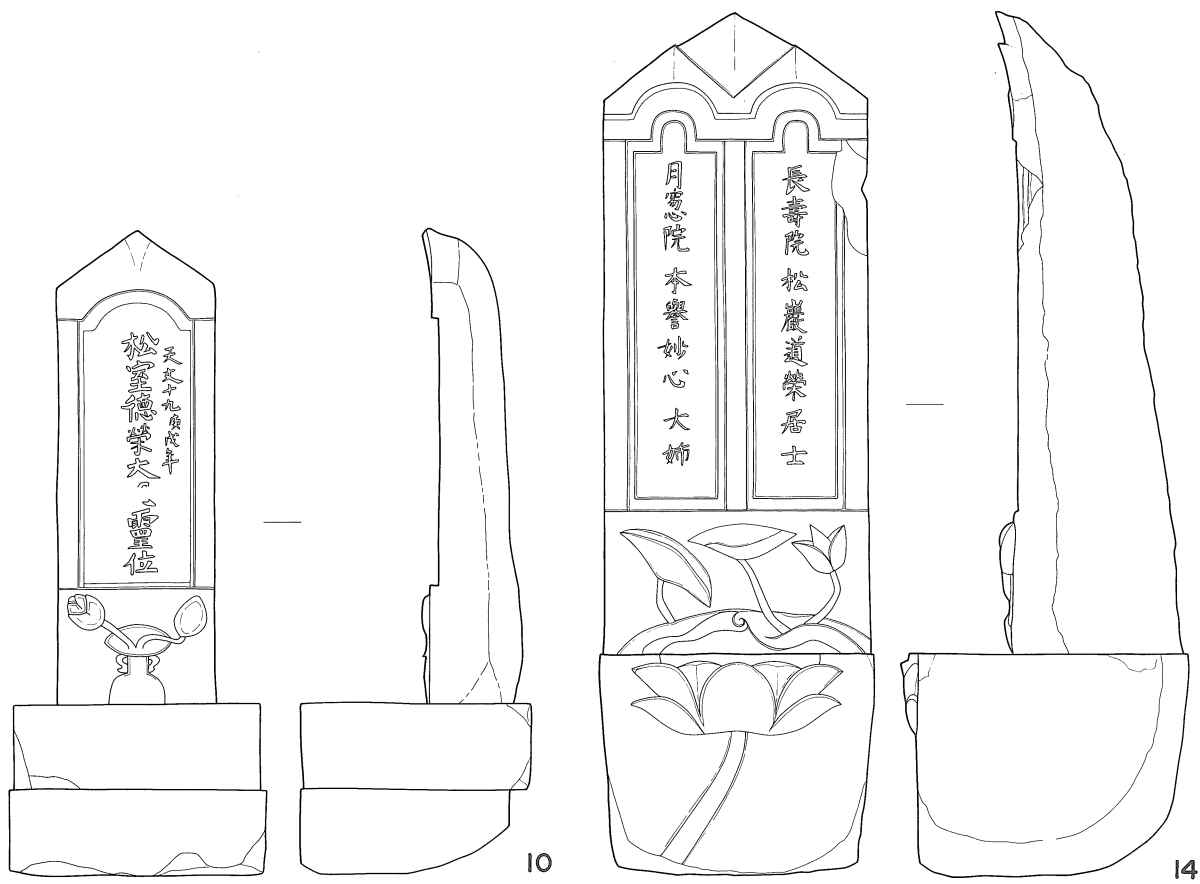


0 50cm

第178図 村松家墓塔群・墓石実測図2

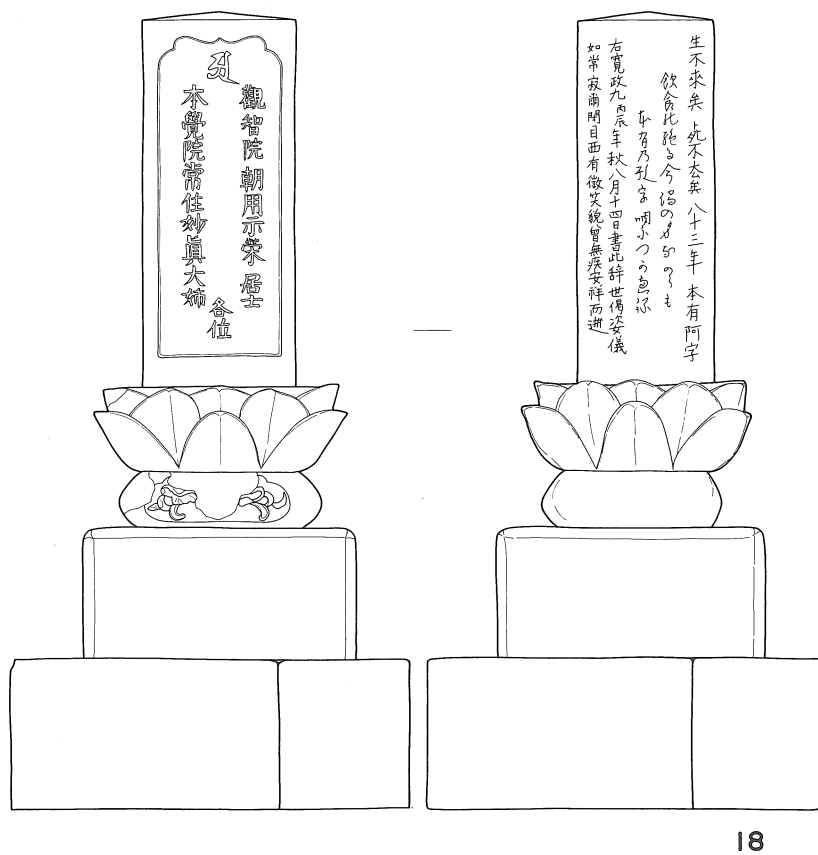
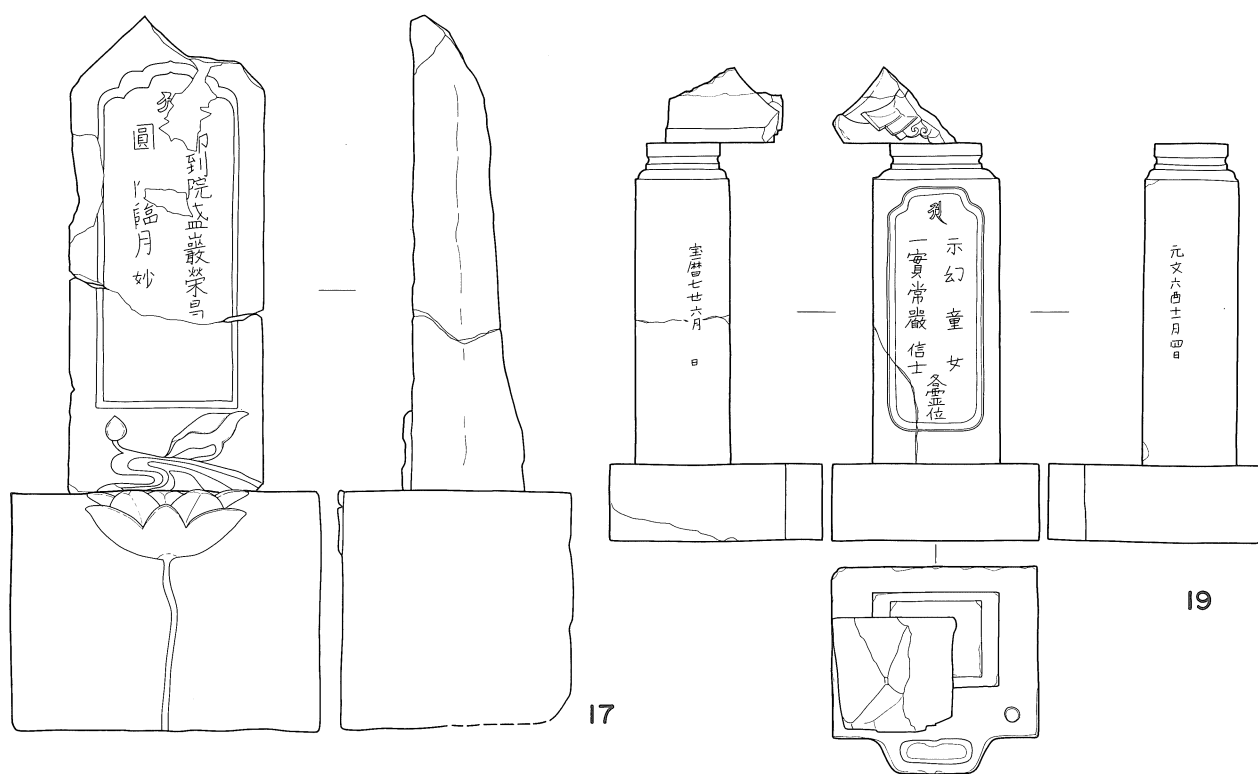


第179図 村松家墓塔群・墓石実測図3

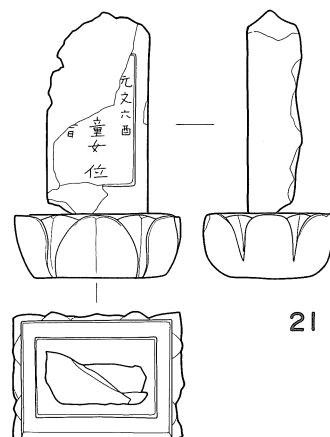


0 50cm

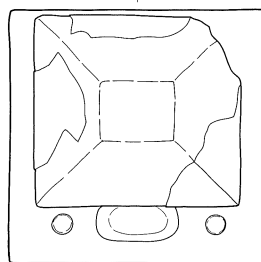
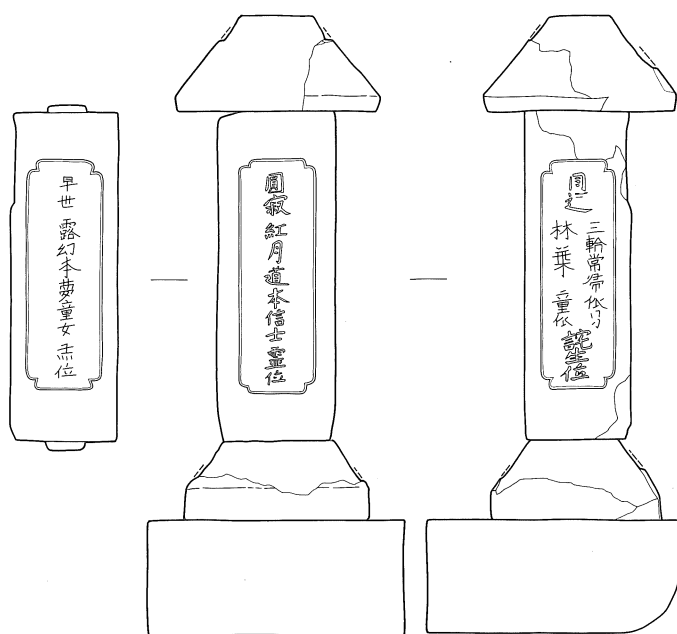
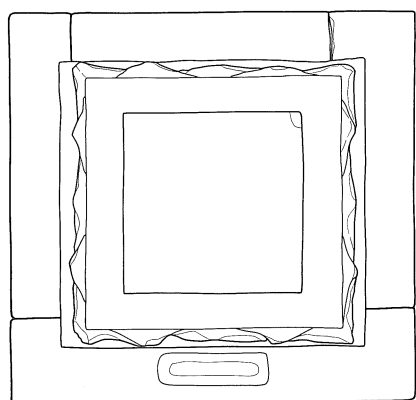
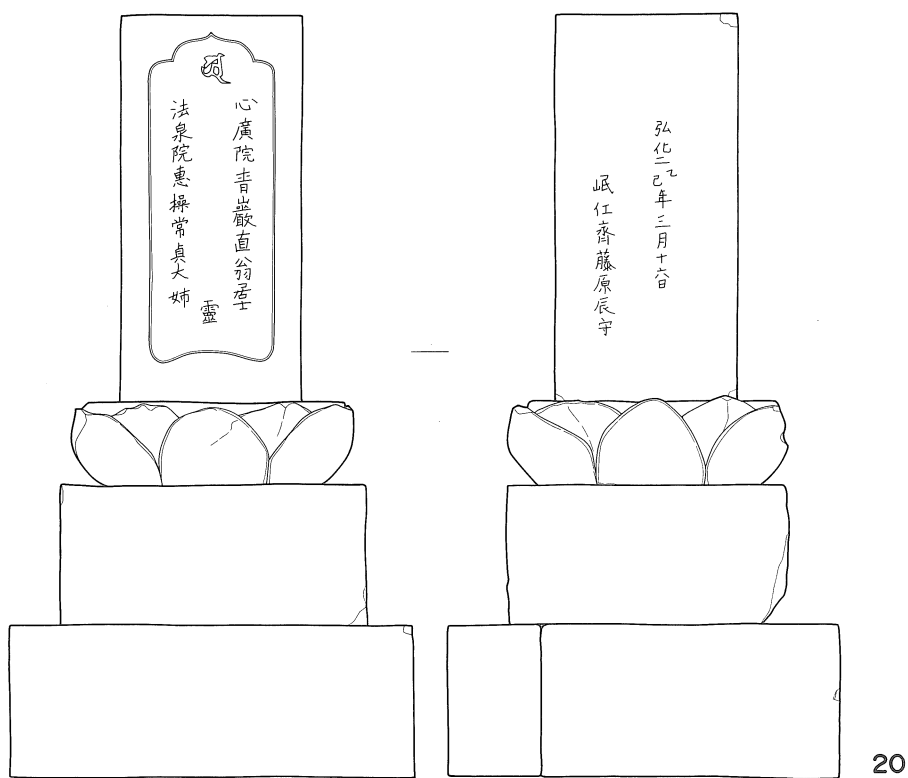
第180図 村松家墓塔群・墓石実測図4



0 50cm

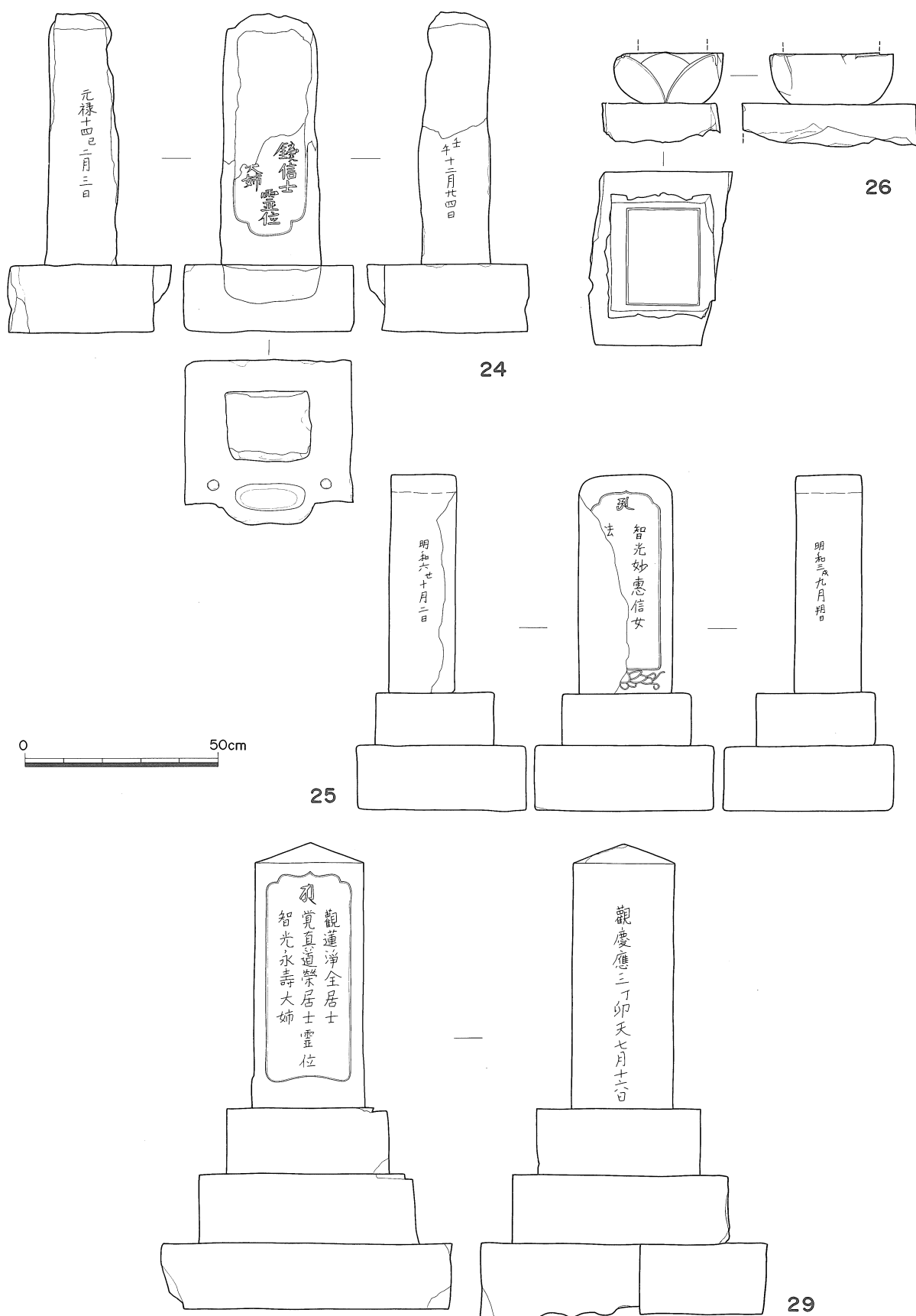


第181図 村松家墓塔群・墓石実測図5

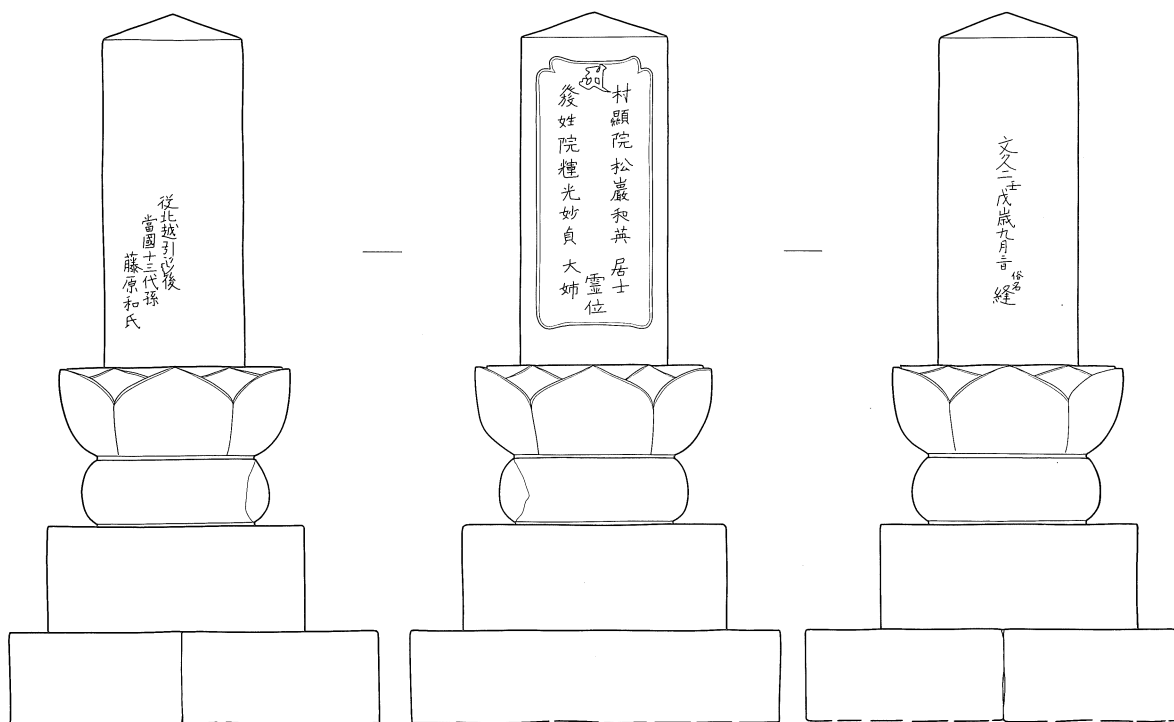


0 50cm

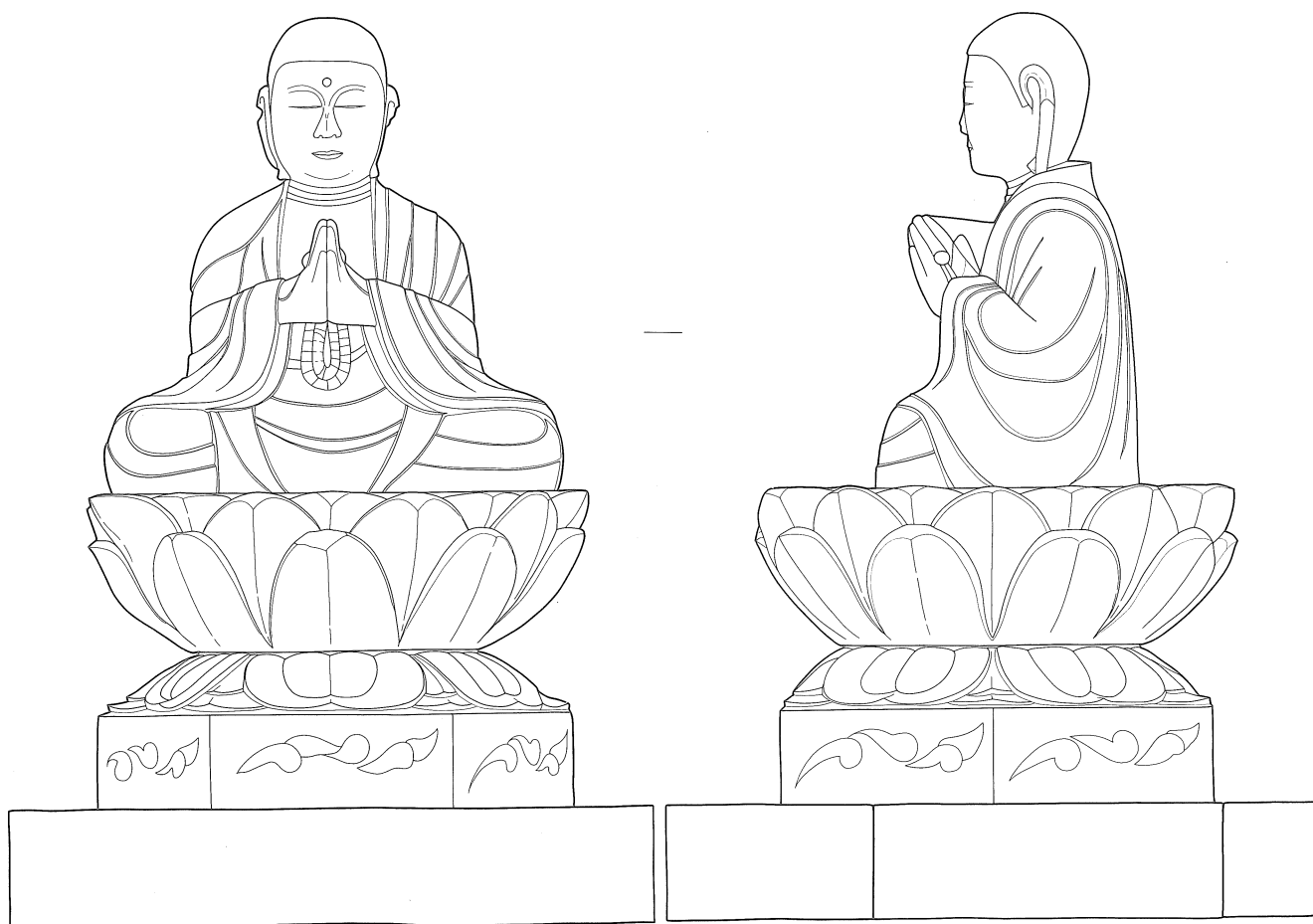
第182図 村松家墓塔群・墓石実測図6



第183図 村松家墓塔群・墓石実測図7



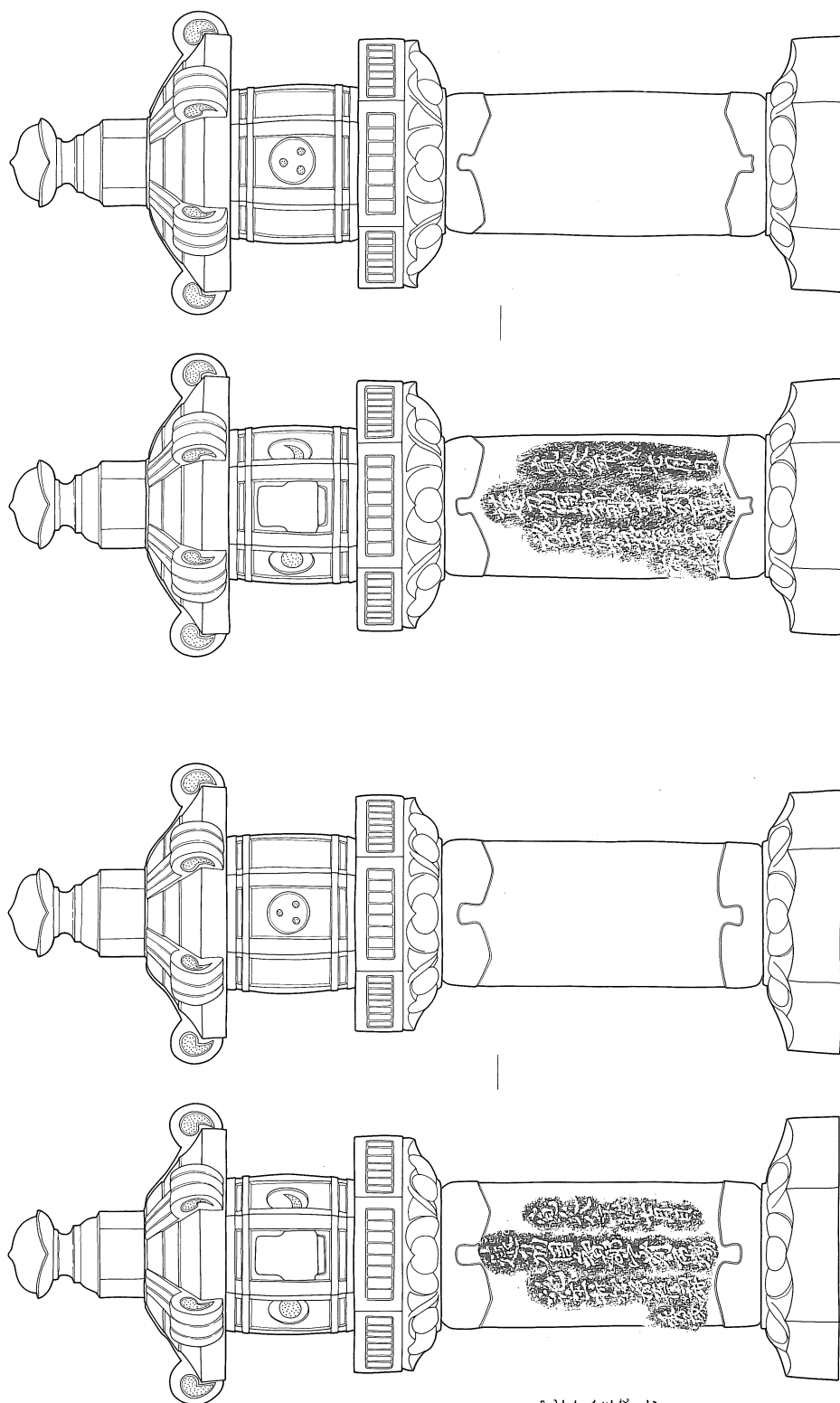
33



I

0 50cm

第184図 村松家墓塔群・墓石実測図8



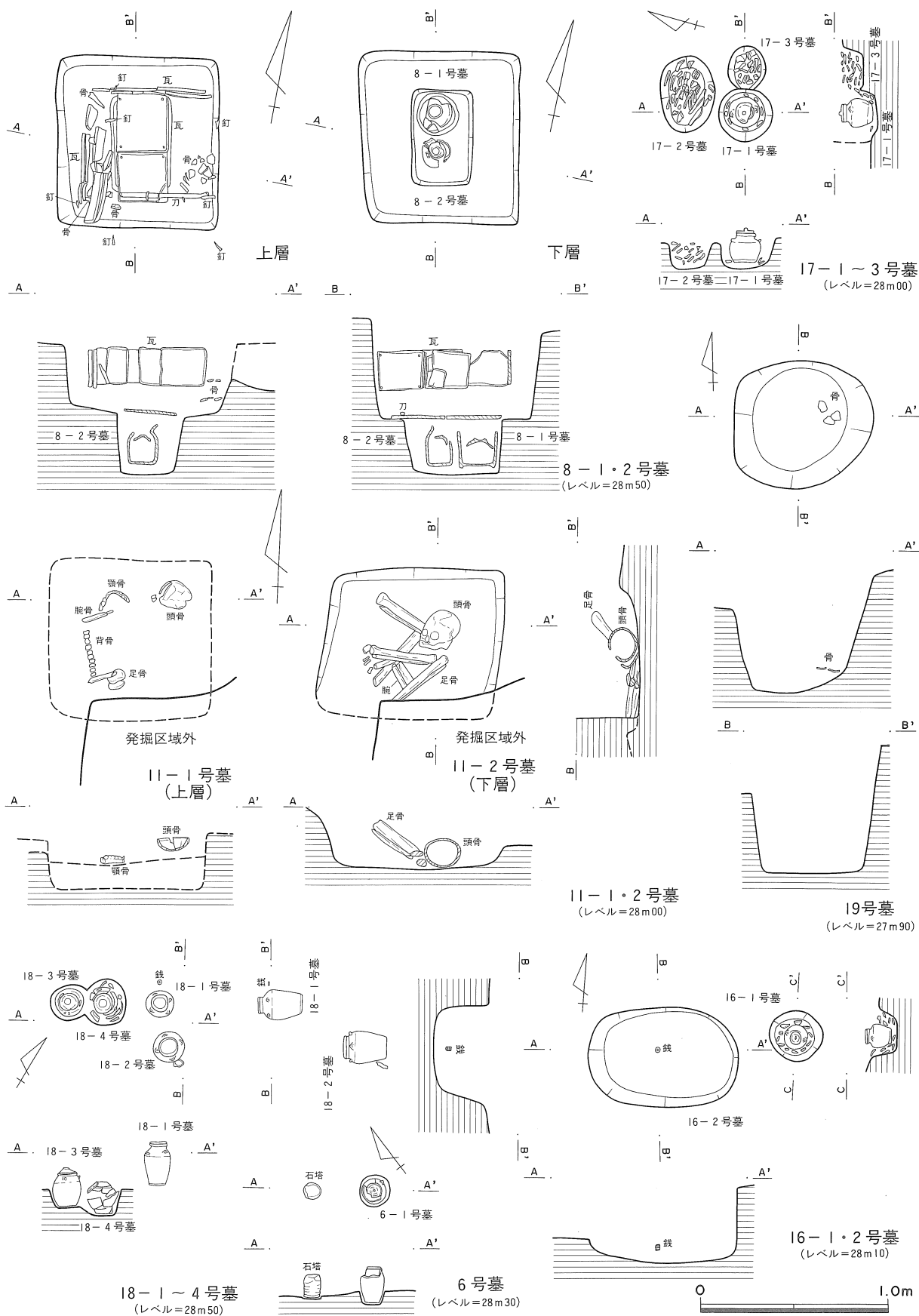
B

A

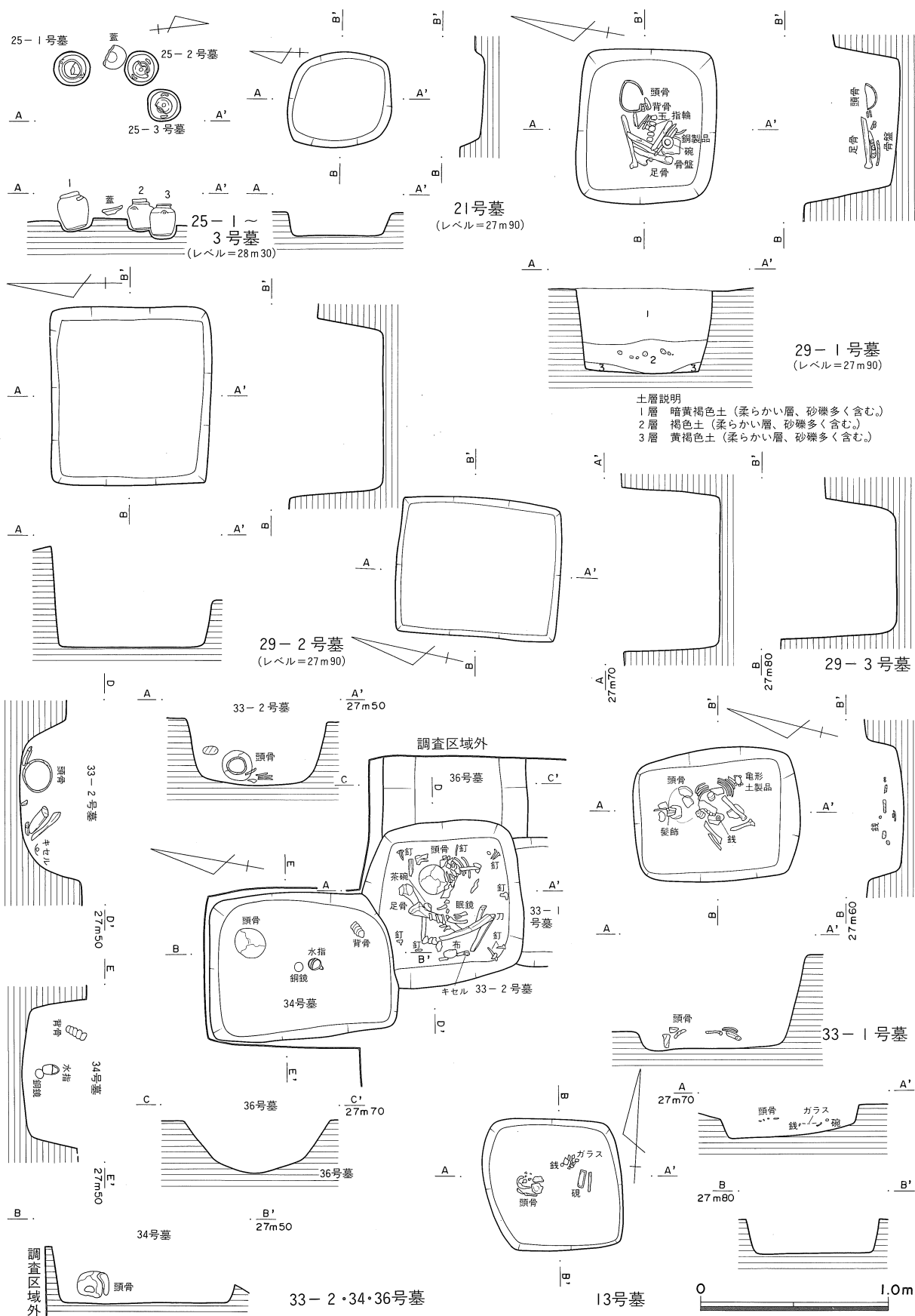


寛文八年七月日
遠州周智郡宇市市場
施主村松源右衛門尉
秀茂

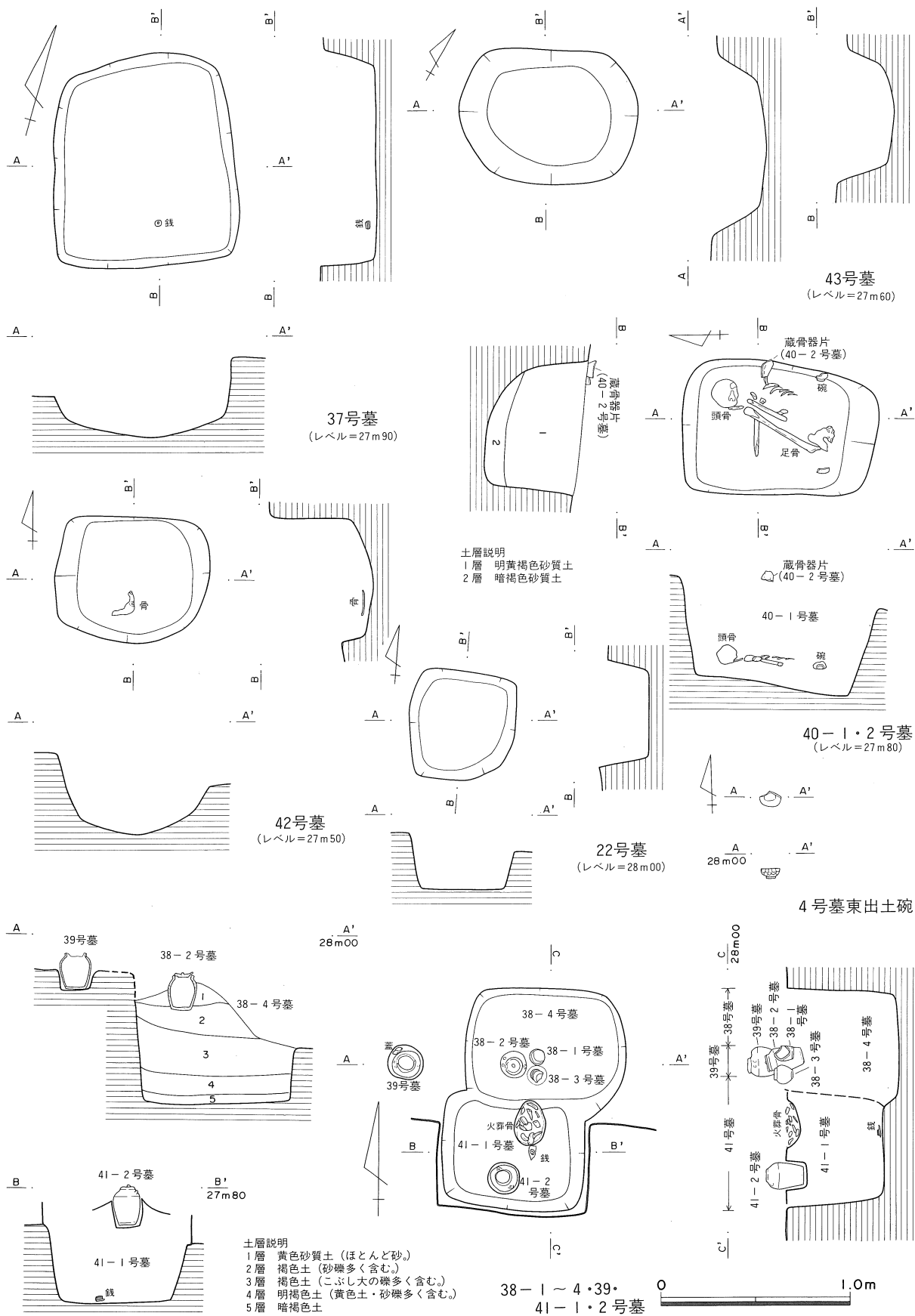
第185図 村松家墓塔群・墓石実測図9



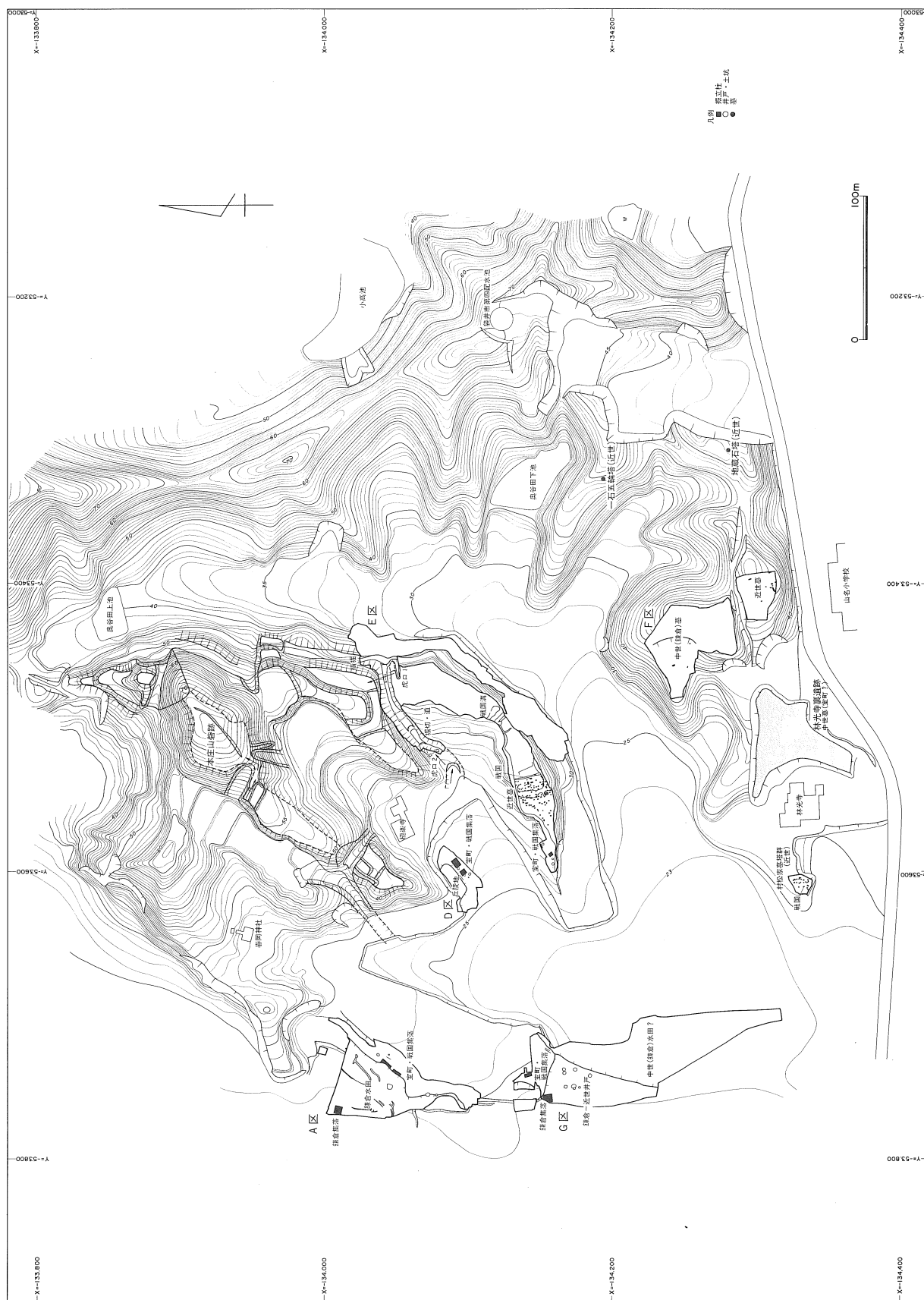
第187図 村松家墓塔群6・8・11・16～19号墓遺構実測図



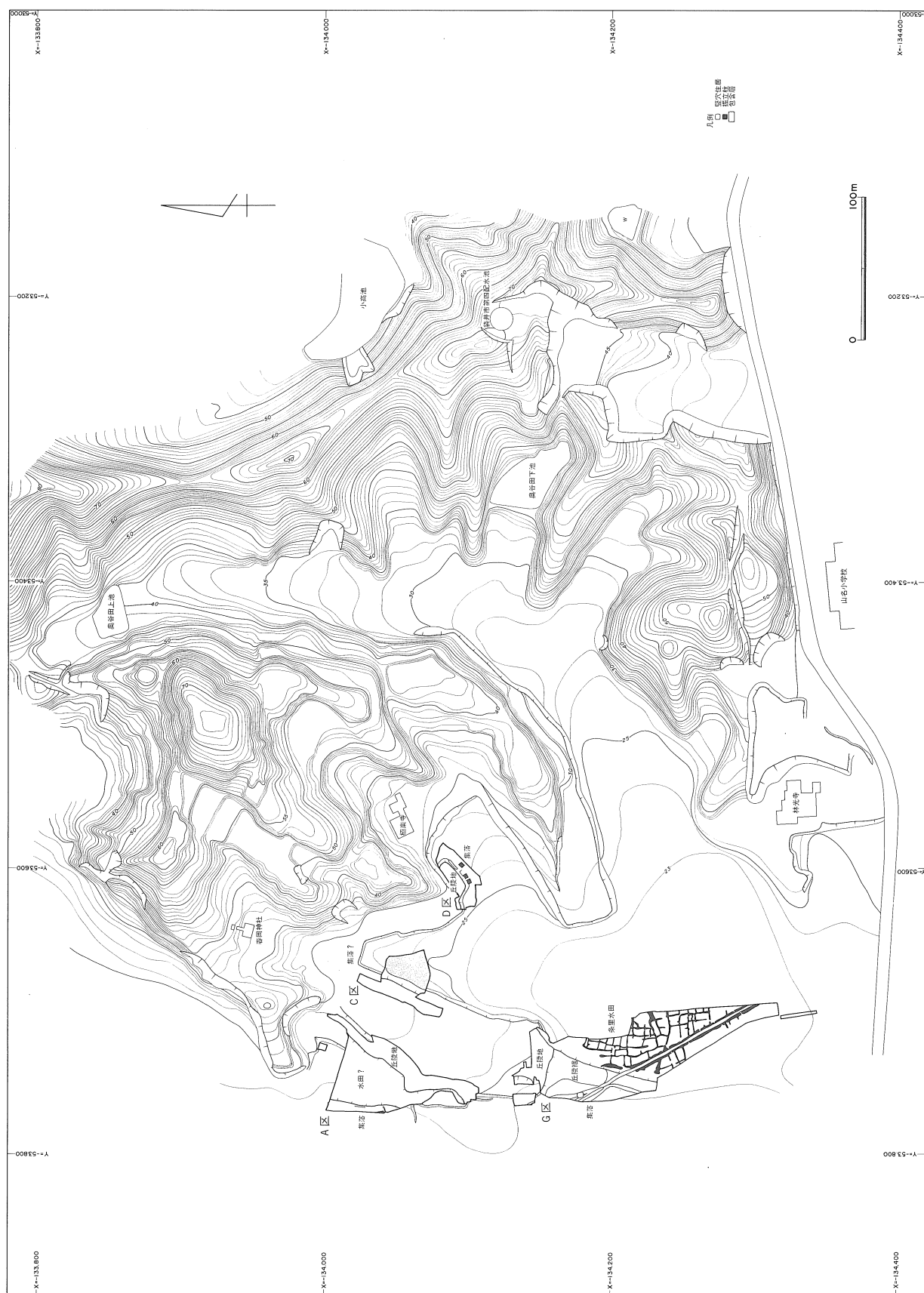
第188図 村松家墓塔群13・21・25・29・33・34・36号墓遺構実測図



第189図 村松家墓塔群22・37~43号墓遺構実測図



第190図 時代別（中世）遺構分布図1



第191図 時代別（奈良）遺構分布図2

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はるおかいせきぐん いこうへん					
書 名	春岡遺跡群 一遺構編一					
編 著 者 名	白澤 崇					
編 集 機 関	ふくろいし 袋井市教育委員会					
所 在 地	〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1 Tel.0538-44-3141(直通)					
発 行 月 日	2003年3月25日					
所 収 遺 跡 名	はるおかいせきぐん ほんじょうざんとりで はるおかおうけつくん はるおかいちいせき 春岡遺跡群 (本庄山砦・春岡横穴群・春岡Ⅰ遺跡)					
遺 跡 所 在 地	おくやだ 静岡県袋井市春岡字奥谷田22番地 ほか387筆					
コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号				春岡土地区画整理事業に伴う発掘調査。	
	41	34°47'32.90441"	137°54'42.05670"	19960513		
22216	42	「世界測地系(測地成果2000)」を使用		↓		
	48			20000331		
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記記事	
本庄山砦	城跡	戦国時代	堀切・横堀	陶器・かわらけ	弥生時代から中世までの水田を検出(環濠を伴う水田・条里型水田など)。 横穴・横穴式石室・礫槨などの異なる形態の埋葬施設を検出。 江戸時代の墓を多数検出。	
春岡横穴群	墓	古墳時代	横穴	須恵器・土師器 鉄刀・耳環		
春岡Ⅰ遺跡	住居 水田 墓	縄文時代 } 江戸時代	水田・住居 井戸・墓	木製品・建築部材 木簡・斎串 墨書土器・須恵器 土師器・玉類 鈐帯金具・馬具 環頭大刀・耳環		

袋井市春岡土地地区画整理事業
に伴う発掘調査報告書

春岡遺跡群

—遺構編—

2003年3月25日

編集 袋井市教育委員会

静岡県袋井市新屋一丁目1番地の1

印刷所 株式会社 開明堂

静岡県浜松市中沢町1番1号